士官候補生異世界奮闘記

新米士官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
士官候補生異世界奮闘記

【Ｎコード】
Ｎ８７１３Ｈ

【作者名】
新米士官

【あらすじ】
『異世界日本近代史～第七独立機動艦隊奮戦記～』から６０年後の世界。神戸海軍士官学校卒業間近の山城正人（やましろまさと）士官候補生（１８）は雷の直撃により異世界に転移してしまった！帰る手段を探しつつ、そこで出会ったシルヴィア達や、遅れてやって来て仲間達と共に活躍する！

※注意※

実在の人物・団体等が出てきますが本作はフィクションです。
また、実在人物は作者の設定（世界・歴史が変わっている等々）により変わっているところがあります。
ご了承下さい。

『異世界日本近代史～第七独立機動艦隊奮戦記～』終了の為、更新回数が増えます。

0　プロローグ（前書き）

第４の連載です！ちなみな艦魂は出ませんが…。とにかく一生懸命頑張ります！更新は週一の予定。

0　プロローグ

２００５年２月１日　瀬戸内海

練習戦艦陸奥甲板

「う～ん……お、こりゃやばい」

水兵

「どうしました？山城士官候補生殿？」

神戸に向かう陸奥の甲板で、山城正人（まさと）士官候補生（１８）が空を見上げながら言うと、近くに居た同年代の水兵が反応する。

山城

「ん、いや…これは海が荒れるなー…と思ってな」

水兵

「え？予報では何も言ってませんでしたよ」

山城

「予報なんて、一時間やそれぐらいで変わるよ」

水兵

「はあ…」

山城

「まあ、後少しで神戸に到着するし、影響は無いと思うけど」

水兵
「そうですね。候補生殿は準備万端の様ですし」

見ると、彼の足元には大きめのバックが1つ。
もちろん、これは山城の荷物である。

山城
「よせやい」

水兵
「あはは、それでは、自分は作業がありますので失礼します」

そう言うと、水兵は作業に戻っていった。

山城
「さて、明日から卒業試験勉強で大忙しだな…はぁ～」

まあ、士官としての登竜門なのだから仕方ないのだが…。

ゴロゴロ……

いつの間にやら、黒い雲が空に広がり、雷まで鳴り始める。

山城
「雷か、ヤバいな……中に入っとこ」

そして、バックを持って艦内に入ろうとした時……

チカッ

ピシャャャン！

山城
「！！」

水兵
「山城士官候補生殿……あれ？居ない」

海が荒れそうなので予定より早く着くと知らせに来た水兵は先程まで居た山城を探す。

水兵
「…艦内に戻ったのかな？」

そう言った時、ポツリ、ポツリ、と雨が降ってきた。

水兵
「うわ、濡れるな…艦内に戻ろ」

水兵は艦内に戻って行った。
しかし、彼が山城を見た最後の1人になってしまった。
その後、山城士官候補生を見た人間はいない。

次号へ

0　プロローグ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

1　転移（前書き）

登場人物　山城正人（やましろまさと）　年齢　１８歳　大日本帝国海軍神戸士官学校卒業間近の士官候補生。熱血漢で、人を纏めるのが上手い。数少ない軍刀持ちであり、その他にも様々な事ができる。異世界に飛ばされても冷静さを失わず、落ち着いて対応している。彼の介入が、この世界の歴史を変えてゆく事になる……。

1　転移

山城
「う～ん……どこだ、ここ？」

見回すとどこかの海岸だとは解るが、日本の海岸ではない。

山城
「あれ、俺は確か陸奥の甲板に居て……そうだ、雷に当たったんだ……で、なんで、生きてるんだ？」

普通に考えて、雷に当たって無事なわけがない。
しかし、どこも痛くもない。
服も破れていない。

山城
「あ、荷物と…軍刀は！？」

軍刀は……腰にある。
荷物は……

山城
「ふう、あそこか…良かった」

着替えや何やらが入っているバックである。

山城
「しかし…本当にここはどこだ?」

周りを見回すも、砂浜と森、あとは道ぐらいしか見えない。

山城
「う〜ん……ん、あれは……」

直ぐに首に掛けていた双眼鏡で見る。

山城
「うん…街だ…街がある」

とにかく、今は行動あるのみ。
まずは情報収集から、と思いバックを持って歩き始めた。

その頃……ある貴族の屋敷では……

「待ちなさい!シルヴィア!」

名前を呼ばれた少女は頭を抱えて立ち止まる。

「父上、先程も申した通り、私はまだ結婚したくはありません」

「そう言わずに…ほら、この人なんてどうだ？」

そう言うと、脇に抱えたお見合いリストの一つを見せる。

「父上、一週間振りにあった娘に言うことはそれしか無いのですか！？」

そう叫ぶと庭に繋いでいた馬に乗る。

「シルヴィア！どこに行く？」

「ちょっとそこら辺まで！やぁ！」

そして、そのまま行ってしまった。

「シルヴィア…」

「無駄じゃよ」

「父さん」

「あの子はわしの血が濃いからのう……小さな器に収まりたく無いんじゃろう…まあ、あの子の言い分は解るが…」

「だって、今は婚活ブームなのですよ！今のうちにいい人見付けとかないと！」

「はぁ…あの子も大変じゃのう」

山城
「ふう、案外距離あるんだな」

荷物のバックを持って歩いて小一時間……まだ着きません。

山城
「人も来ないし……訊こうにも訊けないし…歩くしかないか」

そして、また歩き始める。

「もう…父上は馬鹿なのか？」

先程、お父さんと言い合いしていた少女……シルヴィアは海岸沿いに馬と一緒に歩いていた。

シルヴィア
「私は当分結婚はしたくない……するなら私より強い者でなければ…」

ある種のこだわりがある様だ。

シルヴィア
「あ～～、嫌な事を思い出してしまった！」

そして、馬に跨がるとまた走り出した。

山城
「ん？……馬か、おーい」

声を掛けると、乗り手も気付いたのか、止まってくれた。

「ん、お主…見ない顔だな？」

いや、あたりまえだ。
ここに来てから二時間程しか経っていない。

「しかも……見たことも無い服装だな…軍服か？」

やっぱり、解る人には解るんだ。

「…貴様、スパイだな」

山城

「……はい？」

……さっきの訂正。

「さあ、言え！何が目的か！」

いやいや、待て待て！
いくら地味な第二種軍装とは言え、こんな格好でスパイは無いだろう！

「ほう…答えぬか…ならば実力行使！」

馬から降りたと思ったら、サーベル抜いてるし！
つーか、あの短さで待ったの？

「はぁぁ！」

斬りかかってきたので、ひょいと避けたが……

山城
「（しまった！砂に足とられた…）」

ゴン！

石に頭をぶつけてしまった。

「ん、おーい…だ、大丈夫か？」

二時間後……

山城
「う～～、本日何度目の悪い目覚めだ…」

周りを見ると、どうやら家の中……内装が豪華だから貴族の館だと思われる部屋のベッドにいた。

「ほうほう、目が覚めたかね？」

山城
「はい、お陰さまで……ところで、あなたは？」

「おお、申し遅れた。わしはこの港街ラバナスタ一帯を治めておるボニファス。国王より伯爵の位を授かっておる」

山城
「自分は大日本帝国海軍士官候補生の山城正人であります」

ボニファス
「ふむ、大日本帝国…やはりお主は別世界の人間じゃなあ」

山城

「え…なぜその事を？」

ボニファス
「うむ、君には悪いとは思ったが、カバンの中を見たのだ……入っていたのは服以外は到底この時代には無いものばかりじゃった」

山城
「なるほど…あ、そういえば、自分に斬りかかって来た女の子は？」

ボニファス
「ああ、あれはわしの孫娘じゃ」

山城
「はぁ…お孫さんで…」

コンコン

「お爺様、入ってよろしいですか？」

ボニファス
「シルヴィアか、入ってよいぞ」

シルヴィア
「失礼します。おや、起きたのか」

山城
「あぁ、起きたよ」

原因は君なのだが…。

ボニファス
「おお、そういえば君は泊まる所があるのかね？」

山城
「あ、いいえ。ありません」

ボニファス
「ならば、暫く我が屋敷に泊まってはどうかな？元の世界に戻るにしても、ここにいるにしても、考える時間がいるじゃろう」

シルヴィア
「お爺様！こ奴を屋敷に泊めるのですか！」

ボニファス
「元はといえば、お前があらぬ疑いをかけたからじゃろう？」

シルヴィア
「う……」

山城
「あー、えーと……それならお言葉に甘えて」

次号へ

1　転移（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

2　対戦（前書き）

登場人物　シルヴィア　年齢　１８歳　男勝りの貴族の娘。剣技では士官学校１だが、山城に負けてからまた一段と強くなってしまった。山城と出会って弱ツンデレを発揮しているが、本人はおろか周りも気付いていない。

2　対戦

翌朝

ピピピ、ピピピ…

ピ

腕時計のアラームで目覚めた山城。
もちろん、昨日寝る前にセットしたものだ。
ちなみにアラームは6時にセット。

山城
「よし。洗面して、ひとっ走りして…と」

予備の第二種軍装を着て、軍帽を被り、軍刀を帯び、タオルを首に掛けると部屋から出て行った。

山城
「しかし…デカくて広いよなー」

ひとっ走りした後、屋敷の敷地内を歩いてみると、その広さが実感できる。
多分、敷地面積は士官学校位はあるのではないだろうか？

シルヴィア
「なんだ、お主、起きていたのか」

この領主の孫娘のシルヴィア。
男勝りで、俺と一緒の１８歳。
あろう事か、現在海軍士官を目指し勉強中だそうだ。

山城
「あぁ、起きてたよ…そっちも早いな」

シルヴィア
「あぁ。毎日６時半に起きて、日課の朝の鍛練だ」

真面目である。
まあ、ぐーたら貴族よりはマシだが。

シルヴィア
「ところで、お主の刀は業物だと見たが…どうだ？」

山城
「ん、あぁ、神風の事だな」

シルヴィア
「カミカゼ？その刀の名前か？」

山城
「あぁ、父親の話だと、俺のひい祖父さんが日露戦争に出征する前に近くの刀匠に頼んで打ってもらったんだと」

シルヴィア
「ほお…抜いてみていいか？」

山城
「どうぞ」

軍刀を受け取ると、直ぐに抜く。

シルヴィア
「…細くて長い…これで斬れるのか？」

山城
「斬れるよ。日本が誇る鉄技術の賜物だからな。まあ、サーベルとやり合った事がないからどっちがいいかは解んないけど」

シルヴィア
「ほう…ならば今から一戦やるか？」

山城
「……はあ？」

シルヴィア
「ふふ、昨日はあのような結果になったが、お主とは決着はついておらぬ！」

つまり……何か？
昨日、自分のせいであなった続きをしよう…と？

山城
「よーし、わかった。だが、その前に……」

シルヴィア

「なんだ？墓の準備が必要か？」

山城
「……先に朝食食おうぜ」

シルヴィア
「な、貴様逃げる…」

グ～～ウ……

山城
「……お腹は正直だね」

シルヴィア
「う、うるさい！あ、あとで酷い目に合わせるからね！！」

一時間後……

シルヴィア
「はぁ！」

山城
「っう！」

キィィン！

斬撃をかわし、軍刀で受け止める……これの繰り返し。

シルヴィア
「お主、先程から避けてばかりではないか……朝食前までの威勢はどうした？」

山城
「……」

シルヴィア
「まあ、よい。次で最後だ！」

そう言いつつ会心の一撃を叩き込む。
だが……

シルヴィア
「！！」

つい先程まであった筈の軍刀が消えていた……いや、ただたんに下に下ろしただけである。
この為、一撃は空振りに終わった…しかし大きな空振りであり、そのままバランスを崩して転倒してしまった。

シルヴィア
「痛……は！」

気付いた時には時遅し、肩に軍刀の峰を下にしてのっていた。

山城
「卑怯だけど…勝ったよね？」

シルヴィア

「う……」

ボニファス
「ほっほっほ、いくらやっても無駄じゃよ。シルヴィア」

山城
「伯爵様」

シルヴィア
「お爺様！それはいったいどうゆう事です！？」

ボニファス
「それは山城君に訊いてはどうかね？」

シルヴィア
「くぅ～」

そう言うと屋敷の方に戻って行く。

山城
「……大丈夫でしょうか？」

ボニファス
「なーに、大丈夫じゃよ。１・２時間したら君の所に現れるじゃろうて」

山城
「はあ…あ、すみませんが図書室から本をお借りしてよろしいでしょうか？」

ボニファス
「ん、構わんよ」

二時間後……
山城の部屋

山城
「ふむふむ……なるほど」

山城は図書室から引っ張り出した歴史書を読んでいた。
やっぱり根本的な事を知るには歴史書である。

コンコン

山城
「どうぞー」

入って来たのは…もちろん、シルヴィアだ。

シルヴィア
「…なぜ、私だと？」

山城
「伯爵から、二時間位後で現れるって聞いたから」

シルヴィア
「そうか…何を読んでおるのだ？」

山城
「この国の歴史書。なんか、長期滞在になりそうだから」

シルヴィア
「ふーん」

山城
「…ところでさあ、何で負けたか訊きに来たんじゃないの？」

シルヴィア
「むぅ……そうだ」

山城
「なら、一言で言わせてもらえば…考えが足りてない」

シルヴィア
「考えが…足りてない？」

山城
「そう、技量も筋も良いけど、猪突猛進…攻撃ばかりで後先を考えてない」

シルヴィア
「しかし、攻撃は最大の防御と言うぞ」

山城
「確かに、それも言えてる。けど、何も考えずに攻撃ばかりではダメだ。時にはわざと隙を作り、相手を誘うのも手だし、相手を挑発してやるのも手だ」

シルヴィア
「むぅ…戦略・戦術の講義を聴いているみたいね」

山城
「喧嘩も、決闘も、戦争も結局一緒なんだよ…力の規模が違うだけ……そういえば士官学校じゃあ、どんな講義してるの？」

シルヴィア
「ん、いや、主に航海術の講義が多い。戦略・戦術はその次だ」

山城
「……質問。海軍出来たのいつ？」

シルヴィア
「１０年前だ。士官学校が出来たのは３年前だが」

まあ……新興海軍だから仕方ない無いかも知れないけどさ……なんか間違ってませんか？

山城
「……よし、決めた」

シルヴィア
「何をだ？」

山城
「君を付きっきりで鍛え直す」

シルヴィア
「な、なにを言う貴様！」

山城
「負け続けたいならどうぞ」

シルヴィア
「……いつか亡き者にしてやる」

山城
「楽しみに待っとくよ」

次号へ

2　対戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

3　訪問者（前書き）

ボニファス　年齢　６１歳　ラバナスター一帯を治めている老貴族で、シルヴィアの祖父。昔は戦場で数々の武勲をあげたていたが、今は人柄の良い統治者。最近は領地の学力向上の為、学習塾の設立などに力を入れている。

3　訪問者

5月5日（この世界の日付）　ボニファス伯爵の屋敷

シルヴィア
「はあ！」

キン！

山城
「…惜しい」

シルヴィア
「……さっきから惜しいしか言っておらぬではないか！」

山城
「いや、そう言われても……」

シルヴィア
「……やはり、お主を殺す！」

山城
「…落ち着こうね」

2人がこんな会話をしている頃、2人が見えるボニファス伯爵の執務室では……

「あれがお主の言っていた転移者か？ボニファス」

ボニファス
「うむ。彼なら例の物の正体も解るのではないかね？」

「うーむ……それほど彼の世界は技術が進んでおるのか？」

ボニファス
「あぁ。昨夜、彼の携帯電話を見させてもらったが、到底今の技術では実現は不可能じゃろう」

「…彼と一度話してみたいのう…出来るか？」

ボニファス
「そう言うじゃろうと思おて、段取りは考えておる」

２０分後……
シルヴィアの部屋

シルヴィア
「……話を聴いていつも思うのだが…」

山城
「なに？」

シルヴィア
「…お主の海軍とは全然レベルが違うな」

山城
「仕方ないよ。時代が違うよ、時代が」

シルヴィア
「わずか３０年で世界最強の軍艦二隻を沈めているぞ」

山城
「江戸時代から数えたらもっとかかってるよ。しかも試行錯誤の連続…最初はどこも一緒だよ」

シルヴィア
「そう言うものか？」

山城
「そう言うもんだよ」

こんな会話をしていると……

ボニファス
「シルヴィア。入って良いかのう？」

シルヴィア
「お爺様？良いですよ」

ボニファス

「すまんのう。勉強中に」

山城
「それでは自分は席を外します」

ボニファス
「いや、山城君、君に用があるのじゃ」

山城
「は、自分にですか？」

ボニファス
「うむ。入ってくれ」

ボニファスが言うと、１人の老貴族が入って来た。

シルヴィア
「ガルトナー校長！？」

山城
「……誰？」

シルヴィア
「お爺様の親友で、私が通っている士官学校の校長だ」

山城
「あぁ、なるほど」

ガルトナー
「シルヴィア候補生、紹介はありがたいが、少し突っ込み過ぎだな」

シルヴィア
「失礼しました」

ガルトナー
「まあ、いいか。さて、君が山城君だね？」

山城
「はい。そうであります」
ガルトナー
「うーむ……確かに我らと服装が違うのう」

ボニファス
「そう言ったであろう」

ガルトナー
「確認の為じゃ、良いではないか。して、君の世界はどう様なものかね？」

山城
「そうくると思いました……では簡単に説明します」

ガルトナー
「うーむ……僅か６０年程でそれほど変わるとは……」

山城
「シルヴィアの話を聴きますと、この世界の技術レベルは僕達の日露戦争時位…だと思います」

ガルトナー
「……シルヴィア候補生。明日、彼と共に士官学校に来てくれ」

シルヴィア
「しかし、学校は開いていませんが？」

ガルトナー
「わしが開けておく…おっと、こんな時間じゃあ、それでは山城君、明日士官学校で」

山城
「はぁ……はい」

次号へ

3　訪問者（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

4　転移兵器（前書き）

ガルトナー校長　年齢　６１歳　シリルティア王国グローリアス海軍士官学校の校長。ボニファス伯爵とは親友で、共に戦場を駆けた仲。貴族ではあるがボニファス伯爵同様博識ある人物。後にボニファス伯爵と共に山城達の後ろ楯になる。

4　転移兵器

5月6日（異世界に来て5日目）　ラバナスター郊外

シルヴィア
「……時として、お主には驚かされる」

山城
「馬に乗れる事が？」

シルヴィア
「そうだ。お主の時代では馬には乗らんだろ？」

山城
「乗る人はいるよ。数が少ないだけさ。ちなみに僕は乗馬クラブに一年間習ったからだよ」

シルヴィア
「まあ…いい…行くぞ」

山城
「了解」

10分後……

シルヴィア
「着いたぞ」

山城
「割りと近いんだね」

シルヴィア
「あぁ。ここが私の通うシリルティア王国海軍グローリアス海軍士官学校だ」

流石に貴族っ子が通う学校だけあって、門構えから贅沢である。

山城
「……無駄に贅沢って思うのは自分だけ？」

シルヴィア
「……私も最初はそう思ったぞ」

そう言いながら、２人は中に入る。

シルヴィア
「普段は兼軍港として使っているのだが、建国祭で所属艦は出払っている」

山城
「だから空っぽなのか」

シルヴィア
「お主のところはどうなのだ？」

山城
「各士官学校に練習艦が一隻つづはあるよ」

シルヴィア
「……負けた」

山城
「いや、仕方ないから」

ガルトナー
「おぉ、２人共、早かったのお」

シルヴィア・山城
「「おはようございます」」

２人が話ていると、２人を見付けたガルトナー校長が駆け寄ってきた、もう１人を連れて。

ガルトナー
「シルヴィア候補生は知っておると思うが、ここで教官をしておるオーガスだ」

「オーガスです。よろしく」

山城
「どうぞ、よろしくお願いします」

ガルトナー
「さて、山城君を呼んだのは他でもない。君に見てもらいたい物がある」

山城
「はあ…見てもらいたい物？」

ガルトナー
「うむ。こっちだ」

山城
「これは…！？」

まさに記念艦の三笠と長門を横に並べてみた……残念ながら三笠役はいないが…とゆう様な巨艦が堂々と置かれていた。
興奮しつつも、艦尾の艦名を見ると……

山城
「ア…マ…ギ……天城！？」

そこにあったのは、天城型巡洋戦艦一番艦の天城である。
しかし、天城はワシントン軍縮と関東大震災で廃艦になったはず…
…。

ガルトナー
「如何ですかな？」

山城
「あの！なぜこの艦がここに？」

オーガス
「この艦は3年前にこの付近を漂流しているのを回収したんです。つまりあなたと一緒なんですよ」

ガルトナー
「ところで…この艦の名前はなんと読むのかね？」

山城
「この艦は天城と言いまして、自分の世界では未完成に終わった艦です」

シルヴィア
「へ？じゃあ、どこから来たのよ。この天城は？」

山城
「さっきも言っただろう。『自分の世界では』って。つまり、似た様な世界が幾つもあってそのうちの1つから転移して来たんだよ」

ガルトナー
「ふむ、その事については追々解るだろう。次はこっちだ。」

山城
「ここは？」

シルヴィア

「あ、開かずの倉庫」

山城
「開かずの倉庫？」

シルヴィア
「無駄にデカいのに、生徒の誰も何が入っているか解らない、開いてるところを見た人もいない倉庫だ」

オーガス
「まあ、理由が理由ですから……開けますよ」

暗い屋内から出て来たのは……

山城
「流星に……９９式襲撃機！これもですか！？」

ガルトナー
「うむ。我々は空と飛ぶ物だとみているが…どうかな？」

確かに、史実のライト兄弟の初飛行が１９０３年。
日露戦争時（１９０４～１９０５）の技術レベルなら飛行機の構想も出てきておかしくない。

山城
「はい。そうです」

シルヴィア
「…こんな鉄の塊が飛ぶとは思えんのだが」

山城
「残念ながら、これらは飛行機が発明されてから３０年から４０年後に開発された物だから、ちゃんと飛ぶ」

オーガス
「これで４０年！なら、その６０年後とゆう事は…」

山城
「あ～、そのお話はまた今度に…」

これを話し始めたら日が暮れてしまいそうだ。

ガルトナー
「ふむ……山城君、ボニファスから行く所がないと聞いたが？」

山城
「極端な言い方ですが、そうです。今はボニファス伯爵の所で居候中で…」

ガルトナー
「では、ここに来ないかね？ここなら三食付いておるし、なんといっても君の知識が役に立つ」

山城
「はあ…」

シルヴィア
「受けてみたら。私が大分助かる」

山城

「おいおい……そうですね…これらを見せられては断れそうに無いですね」

オーガス
「おぉ、ありがたい！」

ガルトナー
「うむ。では明後日。待っているよ」

シルヴィア
「そうと決まれば、早速服を買いに行こう！」

山城
「はぁ？」

シルヴィア
「お主、まさかその第二種軍装とかで、毎日いる気ではあるまいな？」

山城
「いや、違うよ」

シルヴィア
「なら、服がいるだろう！ほら、行くぞ！」

山城
「うわ！ちょ、ちょっと！ガルトナー校長！オーガス教官！また明後日に！」

次号へ

4　転移兵器（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

5　初飛行（前書き）

オーガス　年齢　４８歳　グローリアス士官学校の教官の１人。山城と出会ってからは彼の持つ最新の知識に興味を示している。ちなみに、山城は彼の助教官となっている。

5　初飛行

5月8日（異世界に来て7日目）

グローリアス海軍士官学校校内

現在校内は静かだ。
ちなみに、生徒はまだ登校していない。
午後からの登校だ。
昨日の建国祭の余韻に浸らせているのだろう。
そんな中の一室で……

山城
「う～ん…抜かった」

シルヴィア
「なにがだ？」

山城
「まさか、大砲が薬莢式で、小銃が先込め式だったとは……抜かった」

オーガス
「山城君の世界はどうだったのです？」

山城
「江戸末期…明治初期には元込め式小銃の薬莢式でした。日露戦争では日本陸軍は機関銃を大量投入しています……その観点から見た

ら大きく遅れています」

シルヴィア
「仕方ないであろう。丸型砲弾より、薬莢式が発射速度が上がるのだぞ」

山城
「……説明になって無いよ。だいたい、そうなったら次は銃弾に採用！ってなるでしょう」

オーガス
「残念ながら、砲弾は大きいから出来るが、銃弾は小さいから無理だ、とゆう結論になったらしいです」

山城
「…無理解な上層部って持ちたくないですね」

オーガス
「うんうん、持ちたくない」

シルヴィア
「……なぜ2人は理解出来るのだ？」

山城
「ふう…さて、流星達を見に行きますか」

格納庫内

山城
「えーと…ここはオッケー。計器も大丈夫…」

シルヴィア
「飛行機の整備なんて出来るの？」

山城
「海軍士官たるもの、スマートであり、車かバイク、飛行機の操縦・点検は出来るものだ…ってね」

オーガス
「ほお～！やはり未来は違いますな！」

山城
「いえいえ、神戸海軍士官学校では『何も出来ぬ士官に、人の上に立つ資格無し！』と訓辞されていますから」

オーガス
「ほう。割りと厳しい訓辞ですね」

山城
「いえ、そんな事はありませんよ。神戸士官学校の第一期生で自分の大先輩で元帥になった人は『士官は、兵が疲れれば、兵を休ませ、自分が代わる。その為にある程度は出来なくてはならない』と言ってます。まあ、結局は同じなのですがね」

シルヴィア
「…今の私達には無理な話ね」

山城

「大丈夫。最初はどこも同じ。今から変わればいいことさ」

オーガス
「ふ～む、未来から来ただけに出来そうな言葉ですな」

山城
「さて、流星は無理ですけど、９９式襲撃機はガソリンがありますから…一回飛ばしてみましょう」

オーガス
「おぉ、飛ばしますか！」

山城
「……シルヴィア、乗ってみる？」

シルヴィア
「私が…か？」

山城
「あぁ、今までの事もあるしね」

シルヴィア
「余計な事を……しかし、空を飛ぶのも悪くはない」

山城
「じゃあ、これ着てね」

そう言って渡したのは飛行服。

シルヴィア

「…これをか？」

山城
「あ、着るって、今着てる服の上に着るんだよ」

シルヴィア
「そ、そんな事解っておる！」

山城
「い、いや、解ってたらいいんだけど…」

シルヴィア
「ふん…じゃあ、ちょっと着替えて来る」

山城
「あぁ。あ、オーガスさん、すみませんがエシャナー回してくれませんか？」

オーガス
「はい、いいですよ」

シルヴィア
「こ…これで良いのか？」

山城
「うん、それでよし。じゃあ乗って」

既に機上の人となっていた山城が手招きする。

シルヴィア
「う、うむ……よいしょ……狭いな」

山城
「馬に乗ってる解放感に比べれば、防風があって狭く感じるけど、我慢してね」

シルヴィア
「あぁ」

オーガス
「山城君、これぐらいでいいかね？」

山城
「あ、はい。オーガスさん、これからエンジンをかけますので離れて下さい」

オーガス
「あぁ、わかったよ」

そう言うと襲撃機から離れて行く。

山城
「よーし、それじゃあ、コンターク！」

そう言いながら、始動ボタンを押す。

カタン、カタン、カタン、カタン……

バルルルルル！

シルヴィア
「おぉ！かかったぞ！」

山城
「じゃあ、行くよ！」

ふんわりと飛び立つ９９式襲撃機。
元々が陸上部隊支援機だけあって、滑走距離は短い。
山城
「上昇するよ！」

シルヴィア
「う、うむ。い、いいぞ！」

ちょっとひきつった声で返事をするシルヴィア。
それを気にしつつ、操縦桿を引く。

山城
「あ、Ｇがくるから気よつけてね」

シルヴィア
「おおおお主、ゆゆゆ言うのがおおお遅い～」

山城
「あ、ごめん」

山城
「あ～、シルヴィア…大丈夫か？」

シルヴィア
「き…貴様…地上に降りたら…憶えておれ」

山城
「えーと…シルヴィア。外を見てごらん」

シルヴィア
「うーん……おぉ！」

山城
「現在高度１００メートル。速度は１４０キロをキープしております」

シルヴィア
「わあ…凄い…こんな高い所から見たのは始めてだ」

山城
「まあ、こんな時代に１００メートルの建物なんて無いからね」

シルヴィア
「人や馬車が小さく見えるぞ！」

……興奮して聞いていない。

山城

「…ま、いいか」

山城
「さて、もうそろそろ降りますか」

シルヴィア
「む、まだ１０分程しか経っていないぞ」

山城
「残念ながら、ガソリンの補給が出来るか解らないからね」

シルヴィア
「そうか…なら、仕方ない」

シルヴィアの了解をとると、緩降下で高度を下げる。

シルヴィア
「ん……なあ、お主」

山城
「なに？」

出来れば名前か苗字で呼んで欲しいだが…。

シルヴィア
「下に馬車が走っているな」

山城

「あぁ」

シルヴィア
「あの馬車の上を出来るだけ低く飛んでほしい」

山城
「……なんで？」

シルヴィア
「あの馬車には、いつも良家だと威張っているバカ娘が乗っているのだ」

山城
「……喧嘩うってない？」

シルヴィア
「うっておらぬ」

山城
「…なら、いいけど」

そして、言われた通りに低空飛行。
僅か一瞬で通過……したあと、振り返ってみると、案の定、馬が驚いて暴れていた。
そして、窓から身を乗り出して怒っている少女が見えた。
あれが例の子だろう。

山城
「あ～あ……知～らね」

その後、何事も無かったかの様に着陸した2人にガルトナー校長が興奮しながら駆け付けて来たのは別の話。

次号へ

5　初飛行（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

6　さっそく……

5月11日（異世界に来て10日目）

グローリアス士官学校内の生徒寮

コンコン

山城
「どうぞ、シルヴィア」

シルヴィア
「……なぜ、わかった？」

ノックだけで誰か解ったのだから、不思議である。

山城
「いや、だって生徒で君しか知らないじゃん」

シルヴィア
「なるほど……ところで、何をしておる？」

山城
「拳銃の分解掃除中」

シルヴィア
「お主、そんな物も持っていたのか？」

山城
「バックの中に入れていたからね……それに普段、海軍は拳銃携帯している人間は少ないから」

シルヴィア
「ほー…じゃあ、これの扱いも解るか？」

そう言って懐から出てきたのは……

山城
「ワルサーＰ３８か…なぜこれを？」

シルヴィア
「お爺様から渡された。お主と一緒なら、いつか使う時がくるだろう、と」

山城
「ふーん……使用方法は？」

シルヴィア
「お主に教えてもらえ、と言っていた」

山城
「…伯爵も人が悪いや」

シルヴィア
「ん？何がだ？」

山城
「いや、何でも無い。弾は？」

シルヴィア
「装填してあるのと、予備の弾倉が2つだ」

山城
「そうか…まあ、ここじゃなんだし、格納庫に行こっか」

シルヴィア
「あぁ、そうだな」

「あらあら、誰かと思えば血の気の多いシルヴィアさんと平民教官ではありませんか」

シルヴィアと2人で格納庫に向かう途中で、1人の人物わざとらしく声をかけてきた。

シルヴィア
「…ヴィクトリア…」

忌々しそうにシルヴィアが名を言う彼女が、前号で馬車の上を低空飛行で通過した時、身を乗り出して叫んでいた少女である。

ヴィクトリア
「まあ、あなたなら平民とつるんでいるのがお似合いですわね」

シルヴィア
「な、なに！」

山城
「シルヴィア、どうどう」

このままだと殺傷ざたになりかねない。

ヴィクトリア
「まあ…平民から教官を採らなければならないのでは、海軍も終わりですわね」

まったく、胸と態度だけはデカい。
しかも、父親が財務卿…つまり財務大臣…だからなのかは知らないが、金持ち貴族だとか。
しかし、平民とは言え異世界ながらも未来から来た人間だ。
それに、このまま言われ続けられるのも癪に障る。

山城
「ヴィクトリアさん……軍隊じゃあ威張るだけしか能のない人は…早く死にますよ」

ヴィクトリア
「あら…脅しですの？」

山城
「いいえ…あと、平民を馬鹿にしていられるのも今の内ですよ。必ず平民が追い抜かしますよ…あなたみたいな人は特にね」

そう言うと山城はシルヴィアと共にヴィクトリアの前からスタスタと去って行った。

シルヴィア
「…あの様な事を言って良かったのか？」

山城
「そう遠く無い未来で解るか事だ。今言っても問題無いよ」

シルヴィア
「…我が家は大丈夫だろうか？」

山城
「うーん…大丈夫だと思うよ。案外しぶとそうだし」

シルヴィア
「…それは誉めているのか？貶しているのか？」

格納庫

シルヴィア
「なあ」

山城
「なに？」

シルヴィア
「また、いつ飛ばせるのだ？」

山城

「うーん……生徒の目もあるしな～…当分は無理だと思う」

シルヴィア
「むう…そうか」

山城
「…その前にだね」

そう言うと、扉の方に向かう。

山城
「……立ち聞きは感心できないよ」

ドシャ

扉を開けると倒れながら入ってきた2人の人間。

シルヴィア
「クレマン、デュリオ……お主らか…」

「「や、やあ、シルヴィア」」

クレマンとデュリオ…シルヴィアと同級生である。

山城
「はあ…で、何してんだ?」

クレマン
「いや～、教官とシルヴィアが入って行ったもんですから、いい事

してんの……」

カチャン

いつの間にやら、拳銃を構えている山城。

山城
「クレマン…一言多く言おとしたよね？」

クレマン
「す、す、すみません！」

デュリオ
「へえー…中にこんなのがあったんですか！」

デュリオは勝手に見ている。

山城
「はあ…バレたな」

シルヴィア
「どうするのだ？」

山城
「あとでガルトナー校長と相談してみるよ」

次号へ

6　さっそく……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

7　初任務（前書き）

ヴィクトリア　年齢　１８歳　グローリアス士官学校の生徒。父親が財務卿、金持ち貴族の生まれのせいか、態度と胸がデカい。（ちなみに胸はＦカップ…らしい）この為、シルヴィアとは犬猿の仲である。

7　初任務

5月13日（異世界に来て12日目）

格納庫

クレマン
「き、教官！」

山城
「なんだ？」

デュリオ
「…さあ？」

シルヴィア
「あいつが勝手に騒いでいるだけであろう」

山城
「君らに訊いて無いんだけど…どうした？」

クレマン
「が、ガルトナー校長がお呼びです。シルヴィアも」

山城
「ん、なんだろう？」

シルヴィア

「何でもいい。行くぞ」

山城
「はいはい。あ、２人共、変に触るなよ」

クレマン・デュリオ
「「り、了解」」

山城
「ガルトナー校長。山城です」

ガルトナー
「おお、入ってくれ」

山城
「失礼します……ご用件は何でしょうか？」

ガルトナー
「気が早いな…あの流星と言ったかね？あの機の航続距離はどれくらいかね？」

山城
「そうですね……往復なら最低１７００キロ、最高３０００キロです…しかし、なぜですか？」

ガルトナー
「うむ…実は厄介な事なってな」

シルヴィア
「厄介な…事？」

ガルトナー
「うむ。ネイラーン王国でクーデターが発生した…1週間前にな」

シルヴィア
「な、なに！！」

山城
「あ、あのー……」

ガルトナー
「すまんすまん。この地図を見てくれ」

そう言って出してきたのはシリルティア王国周辺の地図である。

ガルトナー
「この半島が我がシリルティア王国の一部。そしてこの北海道みたいな島がネイラーン王国だ」

ガルトナー校長が指を指しながら説明する。

山城
「なるほど…それで？」

ガルトナー
「うむ、今やクーデター軍は王城を包囲している。いつ落ちても不思議ではない…そこで君達の出番だ」

シルヴィア
「それで？」

ガルトナー
「君達には王城にある、ある物を取って来てほしい。行ってくれるか？」

山城
「そうですね……依頼人本人からその物について聞きたいですね」

シルヴィア
「！？」

ガルトナー
「……バレていたか…陛下この者が例の人物です」

そう言われカーテンの陰から出て来たのは1人の少女。

シルヴィア
「陛下！？」

「初めまして、私はアーネリア。このシリルティア王国の姫です」

山城
「どうも。自分は大日本帝国海軍士官候補生、山城正人です…と言っても今は居候ですが…」

山城
「ネックレス？」

アーネリア
「はい…そのネックレスは我が王家に伝わる大事な物なのです」

山城
「なるほど」

シルヴィア
「しかし、解らぬ。何故そのような大事な物をネイラーン王国に…」

山城
「シルヴィア。それは僕達が知らなくていい事だよ」

ガルトナー
「…行ってくれるな？」

山城
「はい…ですが、問題の燃料が…」

オーガス
「それなら、大丈夫ですよ」

山城
「オーガスさん！え、何でです？」

オーガス
「君の話を思い出してねえ。天城を調べてみたら…あったよ」

山城
「…あ、水上機用ガソリンか！」

オーガス
「ええ、たっぷりとありました。当分はガソリンに困りませんよ」

山城
「では、陛下。ネックレスの事はシルヴィアにお伝え下さい」

シルヴィア
「おい！お主はどこに行く？」

山城
「善は急げ！流星に燃料を入れてくるよ！」

オーガス
「…これ位でいいかな？」

山城
「はい。いいですよ」

クレマン
「ぜえ…ぜえ…」

デュリオ
「はあ…はあ…」

山城

「…機体を押す位で大げさだな…オーガスさん。いない間、2人が変な事しないようお願いします」

オーガス
「あぁ、わかったよ」

シルヴィア
「すまない！支度に手間取った」

そう言いながら、飛行服を着たシルヴィアが走って来た。

山城
「そんなに時間はかかって無いよ。忘れ物は無い？」

シルヴィア
「大丈夫だ」

山城
「ワルサーとお姫様の証明書は？」

シルヴィア
「持っている」

山城
「よし。じゃあ、行こう！」

直ぐ様流星に乗り込む山城とぎこちないながらも、乗り込むシルヴィア。

山城

「よーし、コンターク！」

カタン…カタン…カタン…カタン…

ババババババ！

山城
「それではガルトナー校長！行って来ます！」

ガルトナー
「うむ…2人に神の慈悲があらんことを」

山城
「じゃあ、シルヴィア、行くよ！」

シルヴィア
「あ、あぁ！」

空荷の流星は通常よりも短い滑走距離で飛び立って行った。
生徒寮から1人の少女が見ていた事も知らず。

次号へ

7　初任務（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

8　王城へ（前書き）

クレマン　年齢　１８歳　グローリアス士官学校の生徒で、シルヴィアの同級生。なぜか校内に色々な情報網を持っており、周りからは『情報屋』と呼ばれている。

デュリオ　年齢１８歳　グローリアス士官学校の生徒で、シルヴィアと同級生。クレマンとは仲が良く、いつもつるんでいる。海軍には父親の反対を押しきって入ったのだが、その反対理由は誰も知らない。

8　王城へ

シリルティア王国～ネイラーン王国間海上上空

シルヴィア
「……つまらん」

山城
「仕方ないよ…海の上なんだし」

グローリアス士官学校を飛び立ってから約一時間、最初ははしゃぎ気味だったシルヴィアも飽きた様だ。

山城
「そう言えば訊くの忘れてたけど、君のワルサーＰ３８、お祖父さんから貰ったって聞いたけど、お祖父さんはどうやって手に入れたの？」

シルヴィア
「うむ…顔見知りの商人から買った、と私は聞いている」

山城
「ふーん」

シルヴィア
「私も訊きたい事がある。お主の拳銃はなんとゆう名だ？」

山城

「僕の持っているのは皇紀２６００年採用の０式拳銃…陸軍名１００式拳銃。口径９ミリ、弾倉８発……以上が拳銃のデータ」

シルヴィア
「ほう、細かいな」

山城
「自分が使うからね。自然に覚えちゃうんだよ」

シルヴィア
「…ところで、まだ着かぬのか？」

山城
「うーん……もうそろそろ、見えてきてもいいんだけどな～」

そう言いながら、膝の上に置いた海図で位置を確認する。
その時、遠くの方でチカッ！と光る。

山城
「よーし…あそこだな」

山城
「まったく…贅沢なクーデターしやがって」

何せ、眼下の海には戦艦二隻、巡洋艦二隻、駆逐艦八隻の艦隊が艦砲射撃を行っている。
しかし、艦砲射撃と言っても、大和・播磨型や長門型の艦砲射撃を知っている山城から見れば貧弱である。

シルヴィア
「確かに。奴らめ、短期間で海軍を掌握したのか？」

山城
「それは…解らない。とにかく、王城に行こう」

シルヴィア
「あぁ、そうだな」

山城
「よーし、あそこの平地に着陸しよう」

ちょうど良い具合に開けた場所があったので、そこに着陸する。

山城
「ふう。着陸成功」

シルヴィア
「お主、本当に操縦は上手いな」

山城
「ありがとう。けど、これから大変だよ」

左側を見ると、王城から兵士達が駆け付けて来る。

山城
「シルヴィア、お先にどうぞ」

シルヴィア
「……降りるの手伝って」

山城
「了解」

手伝っている内に、兵士達が直ぐそこまで来ていた。

兵士1
「貴様ら、何者だ!?」

兵士2
「奇怪な物に乗って降りて来たぞ…スパイか?」

シルヴィア
「待て待て!これを見よ!」

そう言いながら、アーネリア姫が書いてくれた証明書を見せる。
すると隊長格と思われる（しかも同年代）兵士に証明書がわたるとその兵士が警戒を解いてくれた。

「申し訳ない。この状態ですので、皆ピリピリとしておりまして…
…申し遅れました、自分は親衛隊隊長のクロイツです。どうぞ、こちらに」

クロイツに案内されたのは応接室だった。

クロイツ
「すみません。王子は軍港に行っておりまして…」

山城
「あ、お構い無く」

シルヴィア
「違うであろう」

クロイツは王子を探しに出て行った。

シルヴィア
「……どう思う？」

山城
「いきなりのクーデター……王城を包囲されてもここまでもっているんだから凄い方だよ……それよりも…」

シルヴィア
「それよりも？」

山城
「…これはクーデターか？僕から見れば、ただの反乱だよ。向こうが優勢だけど」

シルヴィア
「お主もそう思うか。私もだ」

山城

「なら、無粋ながらも状況を訊くとしますか」

と、その時……

「待たせて済まない。まさか海上封鎖を突破するとは思っていなかったので…」

そう言いながら入って来たのが……

「私がネイラーン王国王子、アルスラーンです。しかし、変わった物で来られましたね」

山城
「えぇ…まあ」

アルスラーン
「さて、ネックレスですが私の部屋にあるますので、どちらか来ていただけませんか？」

山城
「シルヴィア、お願い」

シルヴィア
「わかっておる」

そう言うと、王子と共にネックレスを取りに行った。

山城
「…クロイツさん？」

クロイツ
「クロイツで結構です。自分はまだ１８なので」

山城
「あ、そうなんですか…ところで、このクーデターはなぜ？」

クロイツ
「まあ、クーデターと言うよりも反乱ですね…向こうに勢いがありますがね」

山城
「やはり…ところであの艦艇は？」

クロイツ
「この城の近くに別の軍港があります。その軍港にあった物を奪取されまして…」

山城
「なるほど、それで１週間も…」

クロイツ
「いえ、１０日です」

山城
「え、１０日！１週間と聞いていましたが…」

クロイツ
「多分、情報が伝わるのに多少のタイムラグがあったのでかと…」

山城
「そうですか…では艦艇の搭載弾薬は？」

クロイツ
「規定量の約半分です」

山城
「…話は変わりますが、今回の反乱の原因は？」

クロイツ
「まあ、簡単ですよ。改革を行おうとしたら、保守派の中堅達が起こした…ただそれだけです」

山城
「では、平民…民衆は不満の結果では…」

クロイツ
「ありません。それよりも民衆は今回の改革を支持しています。生活改善、環境改善の改革ですから」

山城
「どういった内容で？」

クロイツ
「主に、民衆関係ですね。裁判の公平化とか、税制改革とか、教育の公平化とか……挙げたらきりがありませんけど」

山城
「なるほど……王子はこれからどうする気でしょうか？」

クロイツ
「あなたも軍人なら解るでしょう？この王城はちょっと大きな島ではありますが、対岸に繋がる橋は全て落としてあります。それに王子は既に覚悟を決めています。私も最後まで、彼に付いて行きますよ」

山城
「……」

クロイツの話を聞きながら、山城の頭の中では色々と考えていた。成り行きとはいえ、ここに居る自分は何をすべきか？ここまで聞いておいて、用事を済ませてさっさと帰る気にはならない。となると、自分に出来る事は……

その時、ネックレスを取りに行っていたシルヴィアとアルスラーン王子が戻って来た。

アルスラーン
「それでは、アーネリア姫に…」

山城
「アルスラーン王子！脱出して下さい！」

部屋に入って来たと同時に山城は言い放った。
突然の事にシルヴィアもクロイツも驚いく。

山城
「クロイツから状況は聞きました。国主として最後まで戦う…その覚悟は解ります。しかし…」

ここで一度言葉をきったが、直ぐに真剣な表情で言い始める。

山城
「…それで良いのでしょうか？これが陛下の失政により人心の離れた結果ならそうするべきでしょう。しかし、今回は一部の不満を持った輩がやった事です。今は反乱軍に勢いがありますが一時の事、必ずあなたを慕う民衆が行動を起こします。その時にあなたが居なければ、意味がありません！あなたがやろうとした改革を志し半ばで終わらせるつもりですか！」

ここまで言い終えた時、やっと気付いたのはシルヴィア。

シルヴィア
「おおお主！なななにを言っておる！！」

山城
「ごめんごめん。ちょっと熱くなっちゃた」

シルヴィア
「そう言う事では無い！ああ相手を解っておるのか！？！」

山城
「解ってるよ」

シルヴィア

「解ってない！」

アルスラーン
「…ぷっ、あはははははは！」

クロイツ
「ア、アルスラーン？」

アルスラーン
「い、いや、済まない。変わった同年代だとは思っていたけど、まさかここまで言う人だとは…」

山城
「自分は士官学校で帝王学や王道は習いませんでしたが、決して諦めない事と自分の意志を貫く事は習いましたよ。あと、その為には一時の恥など我慢する事とね」

アルスラーン
「…脱出も一時の恥と？」

山城
「はい。人間死んでは何もできませんから。実現可能な事も実行しなければ、只の理想…露と消えますよ」

アルスラーン
「なるほど……あなたに興味が沸きました。もっと話がしたいですね」

山城
「それが脱出の理由ですか？」

アルスラーン
「いけませんか？」
山城
「いえ、結構」

アルスラーン
「クロイツ。君はどうする？」

クロイツ
「まったく…付いて行くと言ってるだろう。だが、どう脱出する？」

山城
「大丈夫です。自分に考えがあります」

次号へ

8　王城へ（後書き）

まさか３０００字を越えるとは……思っていなかった。ご意見ご感想をお待ちしております。

9　脱出（前書き）

アルスラーン　年齢　１８歳　ネイラーン王国の王子。父であった国王が亡くなった為、戴冠式そっちのけで国政にあたっている。民衆の為の改革に反対する貴族の一部による反乱により、シリルティア王国に亡命する。

クロイツ　年齢　１８歳　アルスラーンとは親友兼幼馴染み。現在はアルスラーンの親衛隊隊長。アルスラーンと共にシリルティア王国に亡命。忠義に厚く、良識的である。

9　脱出

夕方　ネイラーン王国王城の塔の１つ

山城
「クロイツさん。動きがあったんですか？」

クロイツ
「えぇ。あなたの予測通りでした」

そう言うと、山城に場所を譲る。
山城は直ぐに設置されていた砲隊鏡を覗く。

山城
「……反転していますね。これで向こうは気付いても手は出せませんよ」

クロイツ
「既に、兵には準備をさせています。しかし、時間がかかる様で…」

山城
「それは仕方ありませんよ。まあ、王子の事は任せて下さい」

王城内の一室

山城
「ただいま」

シルヴィア
「クロイツの用はなんだった？」

山城
「包囲していた艦隊が動いたってさ」

シルヴィア
「…お主の予測通り、弾薬を補給しにか？」

山城
「あぁ。まあ、定数の半分で、毎日砲撃してたら直ぐに無くなるよ」

シルヴィア
「…そう言えば、この世界の艦船はお主には、何もかも解るのであったな」

山城
「ある程度だよ……じゃあ、少し寝るよ。おやすみ」

そう言って、ベッドに潜り込む。

シルヴィア
「……お主、剛胆なのか、お気楽なのか…どっちなのだ？」

城内大広間

山城
「さすが王子。城中の食糧８割出せとは言ったけど…やっぱり、凄い」

シルヴィア
「最後の晩餐とゆう事で出させたそうだ。ところであとの２割はどうする？」

山城
「逃げる時の食糧」

シルヴィア
「……納得した」

そう言うと、グラスのワインを一口。

山城
「……僕の世界じゃあ２０歳以下の飲酒は禁止だよ」

シルヴィア
「お主の世界では無いのだ。よいであろう」

山城
「ま、別に良いんだけどね」

そう言って山城はどこかに行ってしまった。

シルヴィア
「ん？」

ふっとした事だった。
何かおかしい…そう思い、周りを見回すと……

シルヴィア
「！！」

なんと、上から王子を狙撃しようとマスケット銃が狙っていた！
シルヴィアは慌て山城を探したが、こうゆう時程簡単に見付からない。
その時……

ダン！

王子が撃たれた、と思って振り向くと、撃たれたのでは無く、山城が撃ったのだ。

シルヴィア
「お主！！」

山城
「…やばい！伏せろ！」

そう言うなり、近くにあったテーブルの陰に隠れる。

ダン！ダン！ダン！

この銃声にシルヴィアも慌てテーブルの陰に隠れる。

シルヴィア
「お主！これはどうゆう事だ！？」

山城
「この晩餐の目的は３つ！１つは城内の食糧を消費する事、２つ目は偽情報を流す事、３つ目がこれ！裏切り者を炙り出す事！」

シルヴィア
「１と３は解るが、２はどうゆう事だ！？」

山城
「偽情報を流して、敵を油断させる…情報戦だよ！」

シルヴィア
「なら、なぜ撃たれておる？」

山城
「まさか４人だとは思わなかったものでね！」

シルヴィア
「まったく…王子は無事であろうな！？」

山城
「隣に居るよ」

シルヴィア
「よし、で、どうする？」

山城
「ワルサーで援護してくれ。あとは何とかする」

シルヴィア
「わかった」

パン！パン！

言うやいなや、直ぐ様発砲。

ダン！

援護を受けた山城も直ぐ様発砲。

シルヴィア
「どうだ？」

山城
「当てたよ……問題はあとの２人。上手く物陰に隠れた」

シルヴィア
「…長くかかるか？」

山城
「向こうの出方による…手榴弾か機関銃でもあれば……」

シルヴィア
「機関銃……ちょっと待っておれ！」

山城
「あ、ちょ、ちょっと…頭に気を付けろ！」

シルヴィア
「持って来たぞ！」

山城
「それ…流星の１３ｍｍ旋回銃！」

まさか…それを持って来るとは…。

シルヴィア
「何をしておる！扱い方を教えろ！」

山城
「…了解…」

とにかく急ぐ為、早口に説明。

シルヴィア
「よーし、喰らえ！」

山城
「…アルスラーン王子、すみません」

ドドドドドドド！

１３ｍｍ機関銃が吼える。

シルヴィア
「ふう…こんなものでいいか?」

山城
「……いや、訊かないで」

アルスラーン
「……まあ、いいのですが…」

つい10分前までシミ1つない綺麗だった壁は、弾痕やらなんやらでボロボロになっていた。

アルスラーン
「暗殺者は?」

山城
「4人共死亡しました。それと、晩餐の前後に、貴族の何人かが逃げた様です」

アルスラーン
「予測通りですか?」

山城
「暗殺者が4人だったとゆう以外はね」

アルスラーン
「そうですか」

シルヴィア
「ところでこの機関銃はどうする?」

山城
「元あった所に戻して来て」

シルヴィア
「わかった」

そう言うと、機関銃を元に戻しに行った。

アルスラーン
「元気な人ですね」

山城
「同い年ですよ」

アルスラーン
「へぇ…さて、明日に備えて早く休みましょう」

山城
「そうですね」

翌5月14日

アルスラーン
「じゃあ、クロイツ。先に行って待っているよ」

クロイツ

「はい。それでは陛下の事、よろしくお願いします」

山城
「はい。あなた方もお気よつけて」

シルヴィア
「それでは、グローリアスで待っておるぞ！」

数分後、アルスラーン王子を乗せた流星はグローリアス士官学校に向かって行った。
そして、その日の夜、巡洋艦2隻、駆逐艦2隻のネイラーン王国艦艇が闇に乗じて脱出した。

次号へ

9　脱出（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしておるます。

１０　再会（前書き）

アーネリア　年齢　１８歳　シリルティア王国のお姫様兼国主。アルスラーン王子とは恋仲で、結婚を約束している。ネックレスはその為の物。（ここら辺の事は別の機会に）アルスラーン王子の民政改革を支持している。

１０　再会

５月１７日　グローリアス士官学校

アーネリア
「我が家宝を危険を顧みず…ありがとうございます」

山城
「いえいえ、頼まれたから行った…それまでの事ですよ」

シルヴィア
「ところで…王城は？」

アーネリア
「つい先程…落城しました…全員壮絶な戦死だったそうです……」

山城
「……」

シルヴィア
「……」

アーネリア
「…それでは皆さん…また…」

アルスラーン
「聞いたか、クロイツ？死んでも無いのに、僕達が死んだ事ななっているぞ」

クロイツ
「そうだな、アルスラーン。まあ、城の中が空っぽだったから都合が良かったんだろう」

扉の外から聞こえる声に驚く、アーネリア。
ニコニコしながら開けた扉の前には、アルスラーンとクロイツがいた。

アーネリア
「ア、アルスラーン！？」

アルスラーン
「やあ、アーネリア。久しぶりだね…1年ぶりかな？」

アーネリア
「う、嘘！だ、だってあなたは死んだって…それに手紙には……」

アルスラーン
「そう、包囲直前に持たせた手紙には『最後まで戦う』と書いたよ。けどね、彼に説得されたんだ、『あなたがそれで良くても、あとの人間が困りますよ』とね」

と、山城を見ながらアルスラーンが語る。

山城
「さて、我々は出て行くとしますか」

クロイツ
「そうですね」

シルヴィア
「？何を言って…むう～～！」

山城・クロイツ
「「それでは、失礼しま～す」」

シルヴィア
「ハアハア…お主！何故いきなり口を塞いだ！？」

山城
「シルヴィア…君は鈍すぎだよ」

シルヴィア
「な、何だと！なにがだー！？」

山城
「はぁ…クロイツ、お願い」

クロイツ
「シルヴィアさん、実はアルスラーンとアーネリア陛下とは付き合っているんですよ」

シルヴィア
「……な、なに～！陛下と王子が！？男女の仲だと～！！」

クロイツ
「はい。しかし、山城。君はよく解りましたね？」

山城
「伊達に元居た世界で恋愛ドラマや小説を読んでいませんから」

シルヴィア
「お主！お主も知っていたのか～！？」

山城
「う～～げ～～！や～め～て～、首が…締…ま…る……」

クロイツ
「……仲が良いですね」

格納庫

クロイツ
「しかし、これからが大変ですね」

山城
「えぇ、奴らの事ですから草の根分けてでも捜しますよ」

シルヴィア
「何故だ？王子もクロイツ殿も死んだと発表したんだぞ？」

山城
「だからだよ。もし王子が生きていると国民や抵抗勢力に知れたら？その時点で反乱勢力は終わりだよ」

シルヴィア
「…そうゆうものなのか？」

山城
「どこでもそうゆうものだよ…そうなると、一番疑われやすいのは…」

クロイツ
「ここ…シリルティア王国ですね」

山城
「えぇ。ですから、今すぐにでも戦争準備をしておいた方がよいのですが…」

クロイツ
「君から見れば、お粗末だと？」

山城
「はい…３８式歩兵銃があれば、随分違うのですが…」

マスケット銃よりも、３８式歩兵銃の方が速射性が有るし、何より命中精度が良い。
その上、９６式軽機関銃があれば最高なのだが…。

山城
「まあ、高望みしたところで物が無いので仕方ないのですが…」

アルスラーン
「近代兵器ですか…今のところでは無理でしょう」

山城
「おや、王子。早かったですね」

アルスラーン
「えぇ、今はゆっくりとしている暇は無いので……アーネリアにはボニファス伯爵の所でお世話になっていると言っておきました」

山城
「そうですか…すみません」

アルスラーン
「いえいえ…今は非常時。私よりも公ですよ」

山城
「そうですね……自分も、何処までやれるか解りませんが、お手伝い致します」

シルヴィア
「むう、お主ばかり良い格好をするなー！」

山城
「うげ～、首締めんな～」

クロイツ
「……本当に仲が良いですね～」

次号へ

１０　再会（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

11　転移2

5月18日（異世界に来て17日目）

シルヴィア
「お主と出会って2週間……早いものだな～」

山城
「そうだね」

そう言いつつのんびり馬を歩かせる2人。

シルヴィア
「ところでお主、帰る方法は見付かったのか？」

山城
「全然……探してはいるけど、手掛かりもなーんも無し」

実際、ボニファス伯爵の館や士官学校の図書室で手掛かりを探しているが……これがどこぞの魔法健在の世界ならいざ知らず、そんな関係の書物なんてひとっつも無い。

シルヴィア
「…お主もたいへんだな」

山城
「まあ…見付かったとしてもこの状況じゃあ帰れ無いけどね」

「うおお～～！そこの2人！退いてくれ～！」

この絶叫に2人が振り向くと、自転車に乗った人間が必死に叫んでいた。

シルヴィア
「な、なんだ！？」

山城
「と、とにかく退こう」

直ぐに両脇に退くと、猛スピードで通過する。

シルヴィア
「あ、あれは…いったい何だ？」

山城
「あれは自転車だよ……それは置いといて…乗ってたのは、知人だよ」

シルヴィア
「ち、知人！？」

ドガシャ～～ン！！

山城
「…その話は後だ。助けに行こう」

シルヴィア
「…よりによって、お爺様の館の垣根に突っ込むか？」

山城
「まあまあ、おーい、鷲井。生きてるか？」

「おう…山城じゃあないか…ここは天国か？地獄か？」

山城
「…相変わらずだな。地獄なら俺は居ない。天国なら俺が迎いに来る訳無いだろう。つーか、お前元気じゃん」

「…お前も相変わらすだな…よっこいしょ」

山城
「はぁ…紹介しておくよ。こいつは鷲井（わしい）　剣（けん）。士官学校の友達で、技術士官…ちょっと変わってるがな」

シルヴィア
「変わってる？」

山城
「あぁ。頻繁にこんな運の無さそうな事がおこるんだが、何故か本人は無傷、周りの人間は巻き込んで無いってゆう、運があるのか無いのか解らん奴なんだよ」

シルヴィア
「……なるほど」

鷲井
「あ、そう言えば山城。お前死んだんじゃなかったの？つーか、ここ何処？」

山城
「そうくると思ったよ…驚かずに聞けよ。実は……」

鷲井
「な、な、何だと～！つ、つまり自分は異世界に来ちまったのか！？」

山城
「そうだ。言っておくが冗談でも、夢でも無いぞ」

鷲井
「…まあ、自転車１つで自分達と同じ位の女の子が物珍しそうに見てるからな」

ちなみにシルヴィア、自転車を物珍しそうに触っていた。

山城
「話は変わるが、僕の事はどうなってる？」

鷲井

「お前の想像通りだと思うがな……陸奥が神戸に着いた後、お前が居ないから、艦内中を捜しまくった。それでも居ないから、お前を最後に見た水兵からの話を聞いて、海に落ちたんじゃないかって話になってな…後は恒例の大捜索さ」

山城
「まさに想像通りだよ…その後は？」

鷲井
「それでも見付からなかったから、とにかく行方不明者になってる…それが1ヶ月前の話だ」

山城
「1ヶ月…こっちはやっと2週間とちょっとだぞ…時間の流れも違うのか……お前はどうやって転移したんだ？」

鷲井
「解らん。休日だったから、梅田に行こうと朝靄の中を駅まで自転車走らせてたら、転移したんだ」

山城
「……朝靄じゃなくて、霧だったんじゃないの？」

鷲井
「…今やどうでもいい事だ…それより、お前が教官とは…」

山城
「仕方ないだろ。形だけなら明治の日本海軍だが、中身が追い付いて無い。優秀な人間は教官より艦艇に配属されてるんだからな」

鷲井
「ふ～ん……しかし、お前の話を聞いた以上、ほってはおけんな。しかも、その顔だと、何もかも不足してるな」

山城
「不足じゃなくて、無いんだよ。小銃はマスケット銃。機関銃は無い。ガソリンだって補給出来るか解らん。何より人材がいない！」

鷲井
「…だから手伝うって言ってんだよ。技術関係なら何かしら手伝えるからな」

山城
「…いいのか？」

鷲井
「どうせ、帰るには時間がかかりそうだし……それにこっちの世界の方が面白そうだしな」

山城
「まったく……よろしく頼むわ」

鷲井
「おう！」

次号へ

11　転移2（後書き）

要塞好きさんの要望とはちょっとキャラが……次第に直していく所存です。ご意見ご感想をお待ちしております。

１２　ドタバタの始まり（前書き）

登場人物　鷲井（わしい）　剣（けん）　年齢　１８歳

山城の友達兼同期生の技術士官候補生。
真面目な時は凄く真面目で、真面目で無くていいときは直ぐボケをかますし、山城に突っ込まれている。
見たり聞いたりした事はほおってはおけない為、今回の事も積極的に参加している。
実は、運が無いようであったりする。

12　ドタバタの始まり

5月21日　グローリアス士官学校内　格納庫

鷲井
「…考えてみたんだが…」

山城
「何を？」

鷲井
「流星や、99式襲撃機、天城が転移してるんだろう。なら、他にも何か転移してるんじゃないか？」

山城
「まあ、そうだろうな…で？」

鷲井
「ある一定度の人間は必要だが…そうゆうのを集めれば戦力化出来るんじゃないか？」

山城
「なるほど…だが、小銃ならまだましも、戦車とか軍艦ならどうする？第一、燃料補給は？」

鷲井
「重油機関化が始まったのも今ぐらいだし、天城の機関を見せりゃ

あいい話だ…燃料だってこっちからサンプルを渡せばいい」

山城
「…さすが技術屋…しかし、できるか？」

鷲井
「出来るさ、同じ技術屋が集まればな！ただ…」

山城
「ただ？」

鷲井
「いると思うが、保守派や頭の硬い奴の妨害がなければ…の話だけど」

山城
「それはこっちの仕事だ。まあ、出来るだけやってみるが……ノートパソコンがあればもうちょっと説得しやすいんだがな～」

鷲井
「あ～、確かに…バッテリーの問題があるけどな」

シルヴィア
「……お主達、さっきから何を言っておる」

山城
「やあ、シルヴィア…講義は？」

シルヴィア
「さっき、終わった…そして、お主達を校長が呼んでおったぞ」

ガルトナー校長
「いや～、君達を呼んだのはだな…」

鷲井
「ミサイルが飛んできた！」

山城
「ど阿呆！」

ゴン！

シルヴィア
「…漫才をしておるのか」

山城
「すみません。馬鹿が馬鹿やりました。続けて下さい」

ガルトナー校長
「実は、私の甥っ子から連絡があってな、君達の助けがいる」

山城
「…なぜ？」

ガルトナー校長
「それは解らん。ただ、見慣れ無い物を預かったからなんだとか…」

鷲井

「こりゃあ、行った方が良いんじゃないか？物凄く気になるし」

山城
「場所は？」

ガルトナー校長
「ここから１０００ｋｍ先のホーバスの町付近だそうだ」

鷲井
「１０００ｋｍ！遠すぎだろう！」

山城
「…流星の３００００ｋｍよりマシだ。だが…キツいな。馬で何日？」

シルヴィア
「まあ、急いで１０日…２週間はみといた方がいいわ」

鷲井
「うわ…それでも遠い…」

車があったらまだマシも…流石にキツい。

山城
「流星ならひとっ飛びなんだけど…２人乗りだし…」

（ちなみに、アルスラーン王子を亡命した時は、山城の前に座ってもらった）

鷲井
「…今回は馬で行くか」

山城
「…そうだな」

ガルトナー校長
「なら、シルヴィア、君も付いて行きなさい」

シルヴィア
「…私もですか？」

ガルトナー校長
「君が行かねば、誰が2人の案内をするのかね？」

シルヴィア
「う……クレマンとデュリオを連れて行ってよろしいでしょうか？」

ガルトナー校長
「あぁ。構わんよ」

次号へ

12　ドタバタの始まり（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

13　任地到着

6月2日　ホーバスの街

クレマン
「やっと着いた～」

デュリオ
「まさか、本当に2週間かかっちゃったよ」

シルヴィア
「……元はと言えば、お主達のせいでろう」

クレマン
「そうだ！デュリオが食い物見付けて来るって行方不明になったからだろう！」

デュリオ
「クレマンこそ、猪だって言って逃げて行方不明になっただろう！しかも、正体は兎だったしな！」

クレマン
「なに～！」

デュリオ
「なにを～！」

山城・鷲井
「「止めろ2人供!!」」

ゴン!ゴン!

シルヴィア
「……よく漫才が出来るな～」

山城
「…いや、なんか違うでしょう」

鷲井
「何でもいい。とにかくその甥っ子さんの所に行こうぜ」

兵士
「中尉殿。お客様です」

「構わん。入れてくれ」

兵士
「は、どうぞ」

山城
「失礼します」

「いやー、あなた方が噂の異世界から来た方ですか」

山城達が入ると、それほど変わらない…2・3歳しか離れていない…青年が居た。

「初めまして、ガルトナー校長の甥で中尉のローエンです」

山城
「どうも、山城です。よろしく」

鷲井
「鷲井です。よろしく」

シルヴィア
「案内兼身分保証人のシルヴィアです」

……その他省略……

ローエン
「ところで、御二人はなぜ派遣されたか、知っていますか？」

鷲井
「いえ、なにも」

ローエン
「そうですか。この街が河川交通で栄えています。ご存知ですか？」

山城
「いいえ。ですが、大きな河川ですし、川船が停泊しておりました

から、なんとなくは」

ローエン
「いやー、目のいくところが違いますね…実は最近、この街を頻繁に盗賊が襲うんで、河川関連業務が営業出来ずにいます」

山城
「なるほど…それは大変ですね」

ローエン
「えぇ。盗賊のお蔭でホーバスの街は以前の活気を失っております。海産物と内陸産物による中間河川貿易がこの街の主な税収ですから」

鷲井
「１０００ｋｍが中間地点か？」

山城
「細かい事は気にするな」

ローエン
「ですから、このまま盗賊による襲撃が続くと、この地方の河川交通・流通が麻痺してしまいます」

鷲井
「えーと…ご用件は？」

ローエン
「あぁ、すみません。ついつい長話になってしまいました。この為、我々が派遣されたのですが、装備の中に手の負えない物がありまして…」

山城
「だから、自分達が派遣されたのですね」

ローエン
「はい。では、今からその例の物の所に案内いたします」

兵士
「中尉殿！」

ローエン
「いや、構わん。開けてくれ」

兵士
「はい」

倉庫の扉を開けると……

鷲井
「お！」

山城
「これは…97式軽装甲車『テケ』じゃあないか。こんな物まで転移していたのか」

ローエン
「あ、あの～、扱えそうですか？」

山城
「え、えぇ。所属は違いますが、扱えますよ」

ローエン
「良かった。あなた方でも扱えなかったらどうしようかと…」

当たり前だ。
元はと言えば、日本軍の持ち物だ。
（世界は違うが）

鷲井
「えーと…すみませんが、点検したいので…」

ローエン
「あ、すみません。ではごゆっくり」

山城
「…どう思う？」

鷲井
「これと言った異常は無いし、燃料も充分あるぞ」

山城
「…そうじゃ無くて」

鷲井
「わかってるよう。外見は『テケ』だが、所々にオリジナルが入っているな。主砲はＭ３軽戦車の５３，３口径３７ｍｍ砲、砲塔上に

はアメリカ製7，６２ｍｍ機銃…車体は日本製だが、エンジンまではわからないぞ」

山城
「いったいどっから来たのか…」

クレマン
「あ、あの～…」

デュリオ
「全然話についてこれないんですけど…」

シルヴィア
「お主ら…何を話しておる？」

山城
「あ～…僕達の世界の物と違うな～と思って」

鷲井
「どうする？動かしてみるか？」

山城
「そうだな…明日にするか」

シルヴィア
「…私の事は気にするな」

鷲井
「それなら気にしないんだが…後ろの２人がな」

クレマン・デュリオ
「「自分達の事ですか？」」

山城
「お前らは気付いて無いけど、顔に『早く宿の寝床で寝転びたい』って書いてあるぞ」

クレマン
「あはははは……」

デュリオ
「えへへへ……」

シルヴィア
「まったく…お主らも男だろう」

鷲井
「さてと、宿に行って飯にしよう」

次号へ

13　任地到着（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４　襲撃（前書き）

前号のタイトルで話数が間違っておりました。正しくは『１３　任地到着』です。

14　襲撃

その日の夜……

ワー！ワー！ワー！
パン！パン！パン！

山城
「なんだよ…五月蝿いな…」

外が五月蝿く、目が覚めてしまった山城は何気無しに窓から外を見ようとしたら……

ピューン！

山城
「！！」

窓から銃弾が入ってきた。すぐに、窓の側に伏せる。そして、ゆっくりと外を見る。
すると、馬に乗り、マスケット銃を乱射する一団が見えた。

山城
「おいおい、着いて早々これかよ……鷲井の不運に巻き込まれたか？」

そう言いつつ、零式拳銃の装弾しているか確かめる。

山城
「よし…シルヴィア達は起きてるか？」

直ぐに、向かいのシルヴィアの部屋の扉をノックする。

山城
「おい、シルヴィア！起きてるか？！」

ガチャ

シルヴィア
「ふぁ～あ、なんだ？外で祭りでもやっておるのか？騒がしくて眠れん」

山城
「祭りじゃなくて、盗賊の襲撃だよ」

盗賊と聞いて目が覚めたのか、眠そうな顔から何時もの真面目な顔になった。

シルヴィア
「わかった。少し待ってくれ」

そう言って扉を閉めたが……２０秒もしない内に出てきた。

シルヴィア
「すまない…クレマンとデュリオは？」

山城
「……部屋に人の気配がしない」

シルヴィア
「…なるほど。鷲井は？」

鷲井
「自分はここだ」

山城
「シルヴィアが扉を閉めたら出て来た」

鷲井
「五月蝿すぎて起きたんだ」

山城
「文句は盗賊に言ってくれ。行くぞ」

山城
「こりゃ……想定してたよりも大規模だな」

宿屋を出た3人は『テケ』が置いてある倉庫に向かっていた。

鷲井
「…なあ、マスケット銃はおいとくとして、馬って高いよな？」

シルヴィア
「当たり前だ。まず、平民には経済的に無理だ」

鷲井
「…なら、なんで盗賊が馬をいっぱい持ってんだよ？」

シルヴィア
「……あ！」

山城
「その話は後だ。それよりも…」

チン

山城が愛刀『神風』を抜いた。

山城
「こいつら叩くのが先じゃないか？」

見ると、１０人程の盗賊が３人の行く先を塞いでいた。

盗賊１
「やい！命が欲しければ身ぐるみ置いてけ！」

山城
「…何だって？」

鷲井
「お前なあ……つまり、死にたくなかったら金目の物置いてけってさ」

山城

「ふーん…まあ、置いてくつもり無いし」

盗賊２
「なら、死んじまえ！」

１人が斬りかかるが……

山城
「チェストー！」

バキッ！

盗賊２
「グエ？！」

バリバリ！ボガーン！

腹に峰打ちを喰らった盗賊は吹っ飛んで近くの店の壁を破って中に消えた。

鷲井
「……何時もながらお前やり過ぎだろう」

シルヴィア
「おい、鷲井！あやつは何をした？！」

鷲井
「え、我流を炸裂させただけだぞ？」

シルヴィア

「やり過ぎたぞ！」

盗賊１
「女だ！女から先にやれ！」

盗賊３・４
「「おう！」」

シルヴィアに…（略）

シルヴィア
「はあ！」

バキッ！

盗賊３
「グエ！」

シルヴィア
「ふん！」

ゲシ！

盗賊４
「グ※@&ベ％￥～！」

鷲井
「…見事な股間蹴りで」

盗賊１

「な、なんだ、こいつら?!」

山城
「…やるか」

シルヴィア
「…あぁ！」

鷲井
「…勝手にやってくれ」

盗賊1
「や、やっちまえ！」

盗賊達
「「「「「おお！」」」」」

シルヴィア
「…雑魚だな」

山城
「赤子の手を捻る位だ」

鷲井
「残り7人を2人で1分ジャスト」

シルヴィア
「なんだ、計っていたのか?」

山城
「…僕のせいでついた癖だよ」

鷲井
「その話は後。、先に『テケ』を取りに行くぞ」

その頃……

ある酒屋

デュリオ
「はい、お水」

クレマン
「お～、サンキュ～」

デュリオ
「まったく、情報収集とはいえ、酒飲む事はないだろう」

クレマン
「仕方ないだろう。まあ、教官に良い土産話もあるし」

デュリオ
「はあ～」

その時、先程帰ったばかりの商人が血相変えて飛び込んで来た。

デュリオ
「なんだ？」

商人
「た、大変だー！盗賊だ！盗賊が来やがった！」

クレマン
「嘘だろ、おい…」

それを証明するかの様に、いきなり４人の男達が入って来た。

盗賊１
「おい！金目の…」

そう言った時、盗賊の顔に酒瓶が命中。
盗賊は勢い余って持っていたマスケット銃を空中にほおってしまう。
それをクレマンがキャッチすると同時にデュリオが盗賊に襲い掛かる。

デュリオ
「せい！」

バキッ！

盗賊２
「グワ！」

デュリオ
「やあ！」

ドス！

盗賊３
「グエ！」

盗賊４
「な、なんだお前らは？！」

クレマン
「軍隊格闘技の成績じゃあ中の下だが、下町喧嘩なら常勝無敗だぜ！」

バキッ！

盗賊４
「グオ！」

デュリオ
「さてと、教官達に合流するか」

クレマン
「教官達の事だ、昼間の倉庫に居る筈だ」

デュリオ
「よし、行こう」

次号へ

１４　襲撃（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

15　反撃

『テケ』の置いてある倉庫

山城
「鷲井！動きそうか？」

鷲井
「ちょっと待てよ…ラッキー♪セルモーター付きだ！今エンジン掛けるからな！」

シルヴィア
「早くしろ！盗賊の何人かがここに来るぞ！」

鷲井
「…よーし…掛かった！」

山城
「鷲井、運転しろ！シルヴィア、君は乗れ！」

シルヴィア
「待て！お主はどうする？」

山城
「後ろのどっかに立ち乗りするよ」

シルヴィア
「…わかった」

鷲井
「おい、出すぞ！」

山城
「行けぇぇぇ！」

キュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラ！

盗賊1
「な、なんだ！？」

盗賊2
「馬を使わないで、自力で走ってるぞ！」

盗賊3
「撃て！撃ちまくれ！」

パーン！パーン！パーン！パーン！パーン！パーン！

カーン！キーン！カーン！キーン！カン！カン！

鷲井
「け、テケにマスケット銃なんか効くかよ！」

山城
「応戦！」

ダン！ダン！ダン！

ダタタタタタ！
ダタタタタタ！

山城は拳銃で、シルヴィアは砲塔の７，６２ｍｍ機銃で応戦する。

盗賊１
「グエ！」

盗賊２
「ギャア！」

シルヴィア
「やはり、マスケット銃は遅いな」

山城
「あんまり滅茶苦茶に撃たないでくれよ。何時補給できるか解らないんだから」

シルヴィア
「わかっておる」

山城
「ん、ストップ！」

キキー！

シルヴィア
「どうした？」

デュリオ
「あ、教官！」

山城
「よう…いつの間にマスケット銃と弾薬なんて手に入れた？」

クレマン
「えーとですね、酒屋に入って来た盗賊を張り倒して奪いました」

シルヴィア
「…お主ら～、何をやっておるかー！」

ガチャ

クレマン
「うげー！」

デュリオ
「機銃を向けるな！」

山城
「…止めとこね、シルヴィア。その話は後だ。クレマン、デュリオ、ひとっ走りしてローエン中尉を見つけてくれ」

クレマン
「ローエン中尉を？」

デュリオ
「了解！」

山城
「よし、こっちも行くぞ」

鷲井
「おう！」

ローエン
「撃て！」

ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！

ローエン
「く、こんなのは聞いてないが…これではやられるぞ！」

必死に防戦の指揮を執るローエンは気付いていたが、盗賊にしては装備や統率が良すぎる。
しかも、この後ろにある物を何か知っている様だ。

デュリオ
「ローエン中尉！」

ローエン
「やあ、君達か…ここがよくわかったね」

クレマン
「まあ、ドンパチドンパチやっていましたからね」

デュリオ
「ところで中尉、後ろの倉庫に何が？」

ローエン
「あの中には、この付近で採掘された金塊が入っている。まだ鋳造もしていない物がだ！」

クレマン
「なるほど、そりゃ誰だって狙うわ」

デュリオ
「中尉、照明弾か信号弾ありますか？」

山城
「ん、信号弾か！」

シルヴィア
「なら、２人はローエン殿と会えた様だな」

山城
「だが…信号弾を使うって事は余程ヤバい事になってるな」

シルヴィア
「もちろん、行くな？」

山城
「当たり前だ。鷲井、行ってくれ」

鷲井
「おう、誘導頼む」

クレマン
「おい、教官達はまだか?!」

デュリオ
「後もう少し待て!教官達だって急いで駆け付けてるから!」

ローエン
「早く来てもらわないと、突破されるよ!」

必死に応戦する3人に対し、盗賊は僅かづつだが増えている。

クレマン
「あぁ〜!教官はまだかよ!」

その時……

ズドン!

ズガーン!

今まで盛んに撃っていた盗賊達の真っ只中で砲弾が炸裂した。

ローエン
「やっと来てくれましたか!」

山城
「突撃！蹂躙だ！」

キュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラ！
ダタタタタタ！
ダタタタタタ！

機銃を乱射しつつ、猛スピードで突っ込みテケに対し、盗賊は手当たり次第に撃ちまくるが、全て前面装甲に弾かれる。

山城
「シルヴィア、１２時方向に一発！」

シルヴィア
「わかっておる！」

ドーン！

ゴワーン！

３７ｍｍ砲から放たれた榴弾が盗賊達を吹き飛ばす。

ローエン
「反撃！撃ち返せ！」

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

テケの登場で統制を失った盗賊にローエン中尉率いる歩兵隊が反撃

する。

盗賊
「ち、これ以上は無理か…引き上げろ！」

山城
「やっと引き上げたか…」

引き上げ…いや、退却する盗賊達を見ていた。

鷲井
「盗賊は置いといて…もう一回寝たい」

山城
「あはは…確かにな」

次号へ

15　反撃（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

16　一夜明けまして……

6月3日　お昼頃

宿屋

山城
「…つまり、その行商の話だと、ここからそんなに遠くない所に古い砦があって、最近人が住み着いた……って事だな」

クレマン
「はい」

シルヴィア
「…その為に酒まで飲んだのか？（怒）」

クレマン
「ひ～～！（汗）」

山城
「はぁ…この事は学校に帰ってからオーガスさんと相談しよう」

鷲井
「砦か……根拠地にするならうってつけだな」

山城
「あぁ…それに多少の損壊なら手を加えればいいだけだしな」

シルヴィア
「手を加えるって…柵を建てた程度であろう？」

山城
「その『柵を建てた程度』の城跡で2ヶ月以上鎮圧軍を困らせた農民反乱があるよ」

デュリオ
「うわ、本当ですか？」

鷲井
「本当だよ」

山城
「後で、ローエン中尉に訊いてみるか」

ローエン
「この付近に砦…ですか？」

山城
「えぇ、比較的最近に出来て、放置されているものですが？」

ローエン
「うーん…砦ねえ…」

そう言いながら、机に散らばっている書物…多分、郷土資料関係…をあさり始める。

ローエン
「う～ん……砦、砦、砦……あ、あった！」

山城
「え、どれですか？」

ローエン
「これですよ、これ」

そう言って見せてきたのは、この付近の簡易地図だった。
確かに、ローエンが指差す所に小さく『砦』と書いてある。
しかも、街道沿いにあり、行商が見た砦に間違いない。

ローエン
「数年前にいざと言うときに備えて、防衛拠点にする為に砦の基礎工事を各地で行ったんですよ。その内の一つがここです」

山城
「なるほど……攻略するには大砲が要りますね…有りますか？」

ローエン
「…そんな贅沢品は有りませんよ…要請しても、何時届くか…」

山城
「……だってさ」

鷲井
「…本当かよ」

宿屋に戻り、ローエン中尉の話を４人にしていた。

鷲井
「歩兵隊に山砲一つも無いのかよ？」

山城
「そんな便利な物は無い。だいたい山砲云々が開発されたのは明治ぐらいだ」

シルヴィア
「お主達の時代の歩兵隊には大砲があるのか？」

鷲井
「今はロタ砲や無反動砲になったけどな」

シルヴィア
「？ロタ砲？無反動砲？？」

山城
「その話は後だ。先にあの砦をどう攻略するか考えよう」

クレマン
「はい、質問！」

山城
「なんだ？」

クレマン
「…これ、テストに出ます？」

山城
「…ご希望とあらば、特別講義をやった上でテストに出すようオーガス教官に打診していいぞ」

クレマン
「う…遠慮します」

デュリオ
「バカ…で、どうしますか？」

山城
「丘や高地、山などのでの攻城戦は防御側に有利だ。なんせ、敵を自由に撃てる」

鷲井
「ならば、どうするか？大量の火砲で攻めるか、空から爆弾を大量に落とすか、奇襲か夜襲で一気に落とすか……まあ、策は限られるな」

シルヴィア
「しかし、火砲や空襲は準備に時間が掛かるであろう？」

山城
「まあな……結局、現在手っ取り早くて、効果があるのは力押しだ」

デュリオ
「…つまり、正面から攻めるかしかないと？」

山城

「そー言う事」

鷲井
「本来なら他の手も無いことは無いが…現状じゃあ無理だ」

クレマン
「じゃあ、またあれを使うんですか？」

鷲井
「仕方ないだろう。テケしかこっちに有利な要素が無いんだからな」

山城
「じゃあ、もう一回ローエン中尉の所に行って来るよ」

鷲井
「あぁ、気よ付けて行ってこい」

次号へ

１６　一夜明けまして……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

17　砦を落とせ！（前書き）

登場人物

ローエン　年齢　２１歳

ホーバスで発生した盗賊による襲撃に対抗する為に派遣された歩兵隊の隊長。
ガルトナー校長の甥でもある。

17　砦を落とせ！

6月4日　砦の近く

山城
「うーん……」

シルヴィア
「どうだ？」

山城
「…静かだ。寝てるか、警戒しているか……どっちかだな」

そう言いながら、テケの砲塔の上で双眼鏡を使い偵察する山城。

山城
「まあ、寝てるか起きてるかは知らないけど…やるしか無いよ。鷲井、エンジン始動！」

鷲井
「おう！」

ブロン！

エンジンが掛かると、山城は直ぐ様砲塔の中に入り、テケは前進を開始した。

ターン！ターン！

カン！キーン！

山城
「撃ってきたな。シルヴィア、無事か？」

ハッチを少しだけ開けて砦を見る。

シルヴィア
「あ、あぁ」

車体の陰に隠れていたシルヴィアが答える。

シルヴィア
「…撃たぬのか？」

山城
「まだまだ。こんなので撃ってたら弾の無駄さ…君もちゃんと隠れてなよ」

シルヴィア
「う、うむ」

その後もジリジリ進む。
その間、弾は前面装甲に当たり弾く。

鷲井
「いくら貫通しないと解っていても…嫌なもんだな」

山城
「…僕だって嫌だよ。けど砲弾一発が貴重だからな」

そう言いながら、密かに前面装甲に当たる弾の数を数えていた。
そして、それが１０を越えた瞬間、手近にあった榴弾を装填する。
そして、ハッチで開き……

山城
「シルヴィア、撃つぞ！しっかり掴まってろ」

シルヴィア
「あ、あぁ！」

直ぐに標準器を覗き、狙いをつける。

山城
「てぃ！」

ドパーウ！

ゴワーン！

壁に撃ち込まれた榴弾は、射撃をしていた盗賊達を吹き飛ばし、凪ぎ払う！

山城
「もう一丁！」

直ぐ様、砲弾を装填し……

山城
「てぃ！」

ドパーウ！

ゴワーン！

今度は壁に撃ち込み、穴を開ける！

山城
「鷲井！突っ込め！！」

鷲井
「おう！！」

バキバキバキバキ！

榴弾射撃で弱くなっていた壁に激突し、壁を潰して行く。

クレマン
「また…派手に…」

デュリオ
「…どうせ潰すんだし、良いんじゃない」

ローエン
「今だ！突破口が開いたぞ！突撃！」

兵士達
「「「「「「おぉ！！」」」」」」

今まで、丘の陰に隠れていたローエン中尉率いる歩兵隊が一挙に突撃する！
もちろん、砦からも散発的に反撃してくるが、ローエン中尉の巧みな指揮により排除して行く。

クレマン
「けど…まさかいきなり実戦かよ！！」

デュリオ
「五月蝿い！さっさと走れ！」

シルヴィア
「おい。ローエン中尉達が来たぞ！」

山城
「よし、計画通り！あとは…」

ダン！

壁づたいの足場から狙撃しようとした盗賊が頭を撃ち抜かれる。

山城
「…こいつらを叩きのめすだけだ！」

盗賊達もやっとこさ、テケに襲いかかるが……

ダタタタタ！
ダタタタタ！

シルヴィア
「やはり、機銃が一番だ！」

山城
「おい、鷲井！キャニスター弾はあるか？！」

鷲井
「あーと……あ、それだ！」

鷲井の指差した砲弾を直ぐ様装填すると、適当に狙いをつける。

山城
「まさか、これを使うとはな…てぃ！」

ドガガガガガガガガガガガガン！

放たれたキャニスター弾……鉄球の炸裂弾…つまりショットガンの砲弾バージョン……が真ん前にいた盗賊達を襲う。
これを見た盗賊達は一斉に怖じ気ついた。
訳が解らん物の上に、物凄い威力のある大砲。
そんな時、ローエン中尉率いる歩兵隊が戦闘に加わったもんだから、一気に崩れた。
どうやら、大勢は決した様だ。

山城
「ローエン中尉！」

ローエン
「あ、これは山城君。盗賊は一掃できました。ありがとうございます」

山城
「いえいえ、任務ですから」

ローエン
「この事は、女王陛下にお伝え致します……この盗賊騒ぎがどこかの謀略である可能性も」

山城
「えぇ、お願いします……ところで、あの装甲車は？」

ローエン
「あ、あれですか？あれは現地徴集ですし、実際、我々も現地の人間に押し付けられたみたいなもんですから…」

鷲井
「あ、なら自分達が貰っていいですか？」

山城
「わ、鷲井？！」

ローエン
「え、えぇ、いいですよ」

山城
「お、おい、鷲井！テケを持って帰るって…どうすんだよ？！」

鷲井
「ん、大丈夫だ。河川用貨物船に載せて帰ればいいんだよ」

山城
「…載せられるのか？」

鷲井
「あぁ、大丈夫。載せられるぜ」

次号へ

17　砦を落とせ！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

18　戻ってさっそく

6月14日　グローリアス士官学校

山城
「それでは、今日はここまで！宿題の質問は何時でも受け付けているが、夜遅くとか、朝早くとか、授業前は止してくれよ」

そう言うと、出席票を持って出て行く。

生徒1
「うーん…終わった終わった」

生徒2
「しかし、山城教官の授業は面白いよな～」

生徒3
「なんせ、俺らと同い年だからな」

生徒4
「しかし、他の教官達が知らない事まで知ってるよな、なんでだろう？」

クレマン
「……」

デュリオ
「……」

山城の正体を知る（男で）2人は沈黙しながら、級友の話を聞いていた。

クレマン
「（なぁ、デュリオ。いっそのことバラすか？）」

デュリオ
「（止めといた方がいいぞ。あのカミカゼって言うやつで首が飛ぶから）」

クレマン
「（……そうだね）」

さて、女で唯一知っているシルヴィアはと言うと……

シルヴィア
「うぅ…これはこうして……これはこうだから…」

……宿題やってました。

教官室

鷲井
「…と、言う訳で、この国で開発をやってる部局はありませんか？」

オーガス

「う～ん、校長なら詳しいと思うがな…あいにく、出掛けておられるし…」

鷲井
「ですよね…」

技術の遅れを何とかすべく、鷲井も鷲井で動いていた。

オーガス
「それに、予算が採れるかも怪しいですね」

鷲井
「予算かあ…」

そう、予算だ。
いくら未来からの後知恵があるとは言え、予算なければ、無し得ない。
まあ、1から作るのは試行錯誤が多く、予算が掛かり過ぎるが、後知恵はそれ程予算は掛からない。

オーガス
「ところで、何を開発する気ですか?」

鷲井
「まずは新型の元込め式小銃ですね、次に機関銃。あと、迫撃砲とか…できれば飛行船も…」

オーガス
「飛行船?飛行船なら陸軍の気球研究課が研究してるって聞きましたが…」

鷲井
「本当ですか！」

これを聞いた鷲井は身を乗り出して訊いた。
日本でもそうだが、軍用航空機研究の根本は、明治４２（１９０９）年に陸海軍共同で設立した『臨時軍用気球研究会』がその祖である。つまり、この国の『臨時軍用気球研究会』は、その陸軍の気球研究課であろう。

鷲井
「オーガスさん！その陸軍の気球研究課にコンタクトとれませんか？！」

オーガス
「とれますよ。一番手っ取り早いのは、校長を通すのが早いのですがね」

鷲井
「うぅ…なんでタイミング良く居ないんだ……ところでガルトナー校長はどちらに？」

オーガス
「今朝、急用で首都に行かれましたよ。何でも、緊急招集だとか」

鷲井
「急用……緊急ねぇ…」

格納庫

一つの人影が、格納庫の周りをコソコソしていた。
その人物は慎重に……全然なってないが……格納庫の横扉を開けると、サッと中に入る。
中に入ると、直ぐ扉を閉め、安心したのか特徴的なデカイ胸に手をあてて、ため息を吐く。

「ふぅ～、バレてませんわね」

そう言いつつ、視線を上げると、目的の物…流星…を見る。
あれからずーと気になっていた。
本来なら、あの平民風情がこの学校で教官をしている訳が無い。
しかも、科目によっては他の教官より詳しい。
なおかつ、校長自らが指名して三年生の教育を当たらせている。

「怪しいですわ……あの教官は……」

スパイなら詳しい理由が解るが、校長が勘づく筈…あるいは、泳がせているのか？

「……どちらにしても、私の夢をぶち壊した輩……容赦はしませんわよ」

その時、どこからともなく、話声が聞こえてきた。
これ以上は見付かる恐れがあると考えて、直ぐ様扉から出て行った。

次号へ

18　戻ってさっそく（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１９　大量転移?!

６月１６日　朝　グローリアス士官学校

鷲井
「凄い朝靄だな～」

山城
「バカ、霧だ、霧……しかし、異常に思う程に濃い霧だな」

クレマン
「こう言う時こそ、お化けだ、何だが出そうですね」

鷲井
「昔のロンドンじゃないか?霧の街は?」

山城
「あぁ、確かに言われてたな。大分昔だけどな」

デュリオ
「…どこですか?それ?」

山城
「こっちの世界にある都市の名前だ」

デュリオ
「納得しました」

クレマン
「ところで…この霧、何時晴れるんですか？」

山城
「１０時ぐらいには完全に晴れるって…当てになるかは解んないけど」

鷲井
「天気予報は当てにあらないからな～」

しかし、心配する事も無く（元々して無い）、９時頃に晴れてしまった。

シルヴィア
「晴れたな」

山城
「ん、そうだな。さて、授業、授業」

バルンバルンバルン……

山城
「ん、エンジン音？」

授業を終え、教室を出ようとした瞬間、ふとエンジン音が聞こえてきた。
最初は空耳か……と思っていたが、生徒達もエンジン音が聞こえて

いるのか、音源を探している。

山城
「…まさか…さっきの霧で……嘘だろ！」

そう言うと、わき目も振らず、教室から出て行く。

クレマン
「教官！？」

デュリオ
「ち、行くぞ！」

シルヴィア
「お主、待て！」

山城がグラウンドに出ると、格納庫の前で双眼鏡で上空を見ている鷲井が居た。

山城
「鷲井！」

鷲井
「おう、山城。早かったな」

山城
「どこだ？」

鷲井
「１２時の方向、上空２００m程のところだ」
双眼鏡を受け取り、言われた所を見ると、確かに見える、３つの影。
山城
「やっぱり、聞き覚えのあるエンジン音だと思った。烈風だな…それに４０式輸送ヘリじゃないか……どうなってんだ？」
鷲井
「俺は科学者じゃない。技術士官だ。解る訳ないだろう」
そう言いつつ、三機を見る。
ふと、ある疑問が浮かんだ。
鷲井
「なあ、山城。この付近でちゃんと整地してある所…何ヵ所知ってる？」
……同じ疑問だった。
なぜなら…二機の烈風は着陸態勢に入っている。
ヘリはいいだろ……しかし、飛行機はそれなりに滑走しなければならない。
つまり……
鷲井
「あ、脚出した」
この一言で勘づいた。
そう、二機の烈風はここに着陸するつもりだ！

クレマン
「教か～ん！」

デュリオ
「どうしたんですか～？」

シルヴィア
「訳を話せ～！」

暢気に3人が走って来る。そう、暢気に……ん！

山城
「なあ…着陸するなら、あの3人邪魔じゃ無いのか？」

鷲井
「邪魔だろうな～」

そうなると……

山城・鷲井
「「……お前ら！校舎に引き返せ！！」」

慌ててダッシュする、山城と鷲井。

3人
「「「？？？」」」

山城
「右を見ろ！右を！」

3人
「「「……！！！」」」

今や烈風の勢いは止まらない。
もう、脚が地面に着く寸前だ！

ガッ！

鷲井は、クレマンとデュリオの首根っこを、山城はシルヴィアの腕を掴むと校舎に飛び込んだ。

ズザザザザ！

ついさっきまで、3人が立っていた場所を烈風が通貨した。

山城
「はぁ～…なんで朝から疲れなきゃならないんだよ…」

「あの～……大丈夫ですか？」

山城
「！岡田2士生！」

「あ、山城先輩！」

山城
「あ～…と言う事は…」

「おい、岡田。どうした？」

岡田
「あ、大澤先輩！」

鷲井
「…マジかよ……」

「ん、その声は鷲井か？なら、もう1人は……」

山城
「あぁ、そうだ。俺だ、山城だ」

「おお！鷲井は置いといて、山城、お前死んだんじゃなかったの？」

山城
「…ちゃんと生きてるよ！」

「あぁ、そうか。で、ここどこだ？」

山城
「ヘリのパイロットが来たら、事情を説明してやるよ」

「私の事？」

山城
「泉！君まで来ちゃったのか…」

お先真っ暗になったかの様に、頭に手をあてて困り果てる。

オーガス
「鷲井君！どうしたのかね？」

鷲井
「あ、オーガスさん。すみませんが、こっちで片付けますので、授業を続けて下さい」

オーガス
「あ、あぁ。わかった」

格納庫

山城
「…と、言う訳だ」

大澤
「……マジ？」

鷲井
「マジ」

岡田
「…本当なんですか?!テレビの撮影とかじゃないんですか?」

山城
「そうだったら、どれだけ楽か…」

泉
「ふ～ん…で、2人して、教官やりながら帰る方法探してるの?」

山城
「そう言う事」

鷲井
「ところで、お前らはどうやって転移したんだよ?」

岡田
「実は……僕のせいでして……」

山城
「?どう言う事?」

大澤
「実は、一緒に飛んでたこいつの烈風が故障してな、で飽いてた泉のヘリに整備兵乗っけて来てもらったんだ」

泉
「で、帰る途中で霧に入って……あとは知っての通り」

山城

「あ～あ…そりゃ大変だな」

大澤
「…で、どうやって帰るんだ？」

山城
「……」

鷲井
「……」

泉
「……」

岡田
「……」

大澤
「…なに？」

山城
「お前は～～、人の話を聞いていたのか～～！！」

大澤
「うわ～！なんでそうなる～！！」

泉
「ところで、本当に私達どうなるの？」

鷲井

「えーと、多分、ガルトナー校長が何とかしてくれるかと…」

次号へ

１９　大量転移?!（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２０　準備着々（前書き）

登場人物

大澤（おおさわ）　竜（りょう）　年齢　１８歳

神戸士官学校航空科士官候補生。
山城・鷲井とは顔見知り。無類の女好きで、女の子の話になると目の色が変わる程。
しかし、操縦テクニックは天下一品。

岡田翔太（おかだしょうた）　年齢　１７歳

大澤同様、航空科士官候補生で、山城・鷲井の後輩。普通の男子より、多少背が低いショタ系の男子。
案外、女の子達に可愛いがられており、大澤は羨ましがっている。
しかし、操縦桿を握ると唯一大澤に付いて行ける程、操縦が上手い。

泉　涼子（いずみりょうこ）　年齢　１８歳

大澤・岡田同様航空科だが、ヘリコプターパイロットの士官候補生。
男勝りながらも、案外山城や鷲井達とは腐れ縁。
空手と護身術が得意で、大澤がバカをやった時は、何時も張り倒している。

２０　準備着々

６月１７日　格納庫

山城
「一気に機体が増えたな」

鷲井
「まあな。だけど、今回は整備員が付いてるだけマシだぜ」

大澤
「まあ、お前１人じゃあ６機も整備は出来ないわな～」

鷲井
「…それどころか、過労死してしまうわ！」

そんな会話をしつつ、機体整備を見守る３人。

シルヴィア
「一気に転移所帯が増えたな」

山城
「あ、シルヴィア。おはよう」

大澤
「やあ！シルヴィアちゃん、おは…」

バキッ！

シルヴィア
「…死ね」

泉
「あら、こいつの扱い知ってるのね？」

鷲井
「昨日散々な目にあったからな」

アッパーを喰らい、大の字で延びている大澤を、誰もが自業自得だと思って見ていた。

クロイツ
「おはようございま～す」

デュリオ
「教官、おはようございます」

山城
「あぁ、おはよう。あ、足下で寝てる奴は気にしなくていいから」

クロイツ
「え？あ、本当だ。寝てる…」

鷲井
「あ～…ところで…」

デュリオ
「はい？」

鷲井
「……なんで、ヴィクトリアが居んの？」

クロイツ
「え、うわ！」

なぜか、クロイツとデュリオの背中にぴったりと引っ付いて来たかの様に、ヴィクトリアが立っていた。

ヴィクトリア
「そ、そんなに驚くか無くても…」

デュリオ
「だって、君はいつも、『貧乏人同士で仲良し』とか言って、寄って来ないでしょう？」

鷲井
「あ～、明日は大嵐だな」

ヴィクトリア
「な、何を言ってますの！」

山城
「あ、ヴィクトリア。授業の質問は、また後でな」

ヴィクトリア
「違いますわ！」

シルヴィア

「ならば、何の用だ？」

ヴィクトリア
「ただの見物ですわ」

山城
「ふーん…」

大澤
「へえ～、ヴィクトリアちゃんってゆうんだ～」

鷲井
「うわっ！」

泉
「いつの間に復活したの！？」

山城
「ヴィクトリア！そいつから離れろ！」

ヴィクトリア
「？？」

それはそうだろう。
いきなり、そいつから離れろ、と言われても事情を知らないのだから、当たり前だ。

モミモミ…

大澤

「う～ん…E？…いや、Fカップか」

…いつの間にか、胸を揉んでいた。

ヴィクトリア
「い、い、イヤーー！！」

ゲシッ！

大澤
「ウギャ！」

泉・シルヴィア
「「見事な股間蹴り！」」

山城
「おいおい…」

悶絶して倒れたところに……

ヴィクトリア
「よくも私の胸を揉みましたわね！死になさい！死になさい！」

そう言いながら、大澤をゲシゲシ踏み始めた。

岡田
「大澤先輩……それはダメですよ…」

鷲井
「…自業自得だ」

山城
「バカ野郎…」

誰も、大澤を助けようとする者はいなかった。

鷲井
「しかし、良かったぜ。ヘリに発電機があってさ」

何週間ぶりにノートパソコンの電源を入れ、入っているデータを立ち上げる。

泉
「ところでさ、その王子様を連れて来ちゃたんでしょう?」

山城
「あぁ」

泉
「ならさ…下手したら戦争よ」

鷲井
「いや、もうなりかけ」

岡田
「…うそ…じゃないですよね」

山城

「うそじゃない。どうやら、ガルトナー校長が緊急招集で首都に行ったらしい」

岡田
「じゃあ…そうなったらどうするんですか？」

山城
「まさか逃げる訳にもいかんだろう。その時は戦うさ…お世話になった人の為にな」

そう言いつつ、流星を見る。

山城
「だが…その前に銃弾がいるな～」

鷲井
「あぁ、その事なら、何とかなるかもしれない」

泉
「なんで？」

鷲井
「ガルトナー校長が帰って来たら、技術関係部署にコンタクトとってもらうだよ」

山城
「なるほど、技術支援か」

鷲井
「あぁ、航空爆弾は元々砲弾改造だし、銃弾ならこっちに製造方法

はあるしな」

そう言いながら、ノートパソコンを指差す。

山城
「そう言えば、お前のパソコンにはそういった類いのデータが入ってたな」

泉
「昔から好きだったからね～」

鷲井
「まさか、こんな時に役に立つとはな」

山城
「あははは…本当だな」

鷲井
「さてと、今日中にこのデータを引っ張り出して、何時でも使える様にしないとな」

次号へ

20　準備着々（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

21　迫る雷雲

6月18日　グローリアス士官学校

オーガス
「お帰りなさいませ。校長」

ガルトナー
「やあ、オーガスくん。出迎えご苦労」

オーガス
「いえいえ…ところで、相当きな臭くなっていますが…どうですか？」

ガルトナー
「うむ…向こうが王子の事について聞いてきたよ。まあ、ほとんどの人間が知らないから、知らないと言っておいたが……最後の言葉が気になる」

オーガス
「最後の？」

ガルトナー
「『もし、この国にアルスラーンが居られましたら…その時はご覚悟下さい』とな」

オーガス
「…武力行使する気満々ですね」

ガルトナー
「そこで、山城君達に意見を聞きたい。居るかね？」

オーガス
「居ますが…ちょっと…」

ガルトナー
「どうかしたのかね？」

オーガス
「実は校長が出掛けられた日に、山城君達の友達が転移して来まして…しかも十数人で…」

ガルトナー
「ほう…とにかく、山城君は元気だね？」

オーガス
「はい」

ガルトナー
「よし、では、校長室に行こう。あそこなら話せる」

校長室

山城
「重ね重ねありがとうございます」

ガルトナー
「なに、どうせ部屋は余っているしな」
大澤達の部屋の確保を頼んだところ、快く承諾してくれた。
山城
「ところで、自分に何の用ですか？」
ガルトナー
「うむ…私が首都に行っていた事は？」
山城
「鷲井から聞いています。察するに、向こうから圧力がきましたか？」
ガルトナー
「間接的にな。王子が居ないか、と聞いてきた。知らんと答えると、武力行使をほのめかす言葉を残して帰って行ったよ」
山城
「なるほど……向こうも本気ですね。軍事行動の用意は？」
ガルトナー
「今のところ、一部を除いて誰も考えていない。私や陛下は考えているが、他の貴族は大事だと認識していないだろう」
山城
「となると、軍を動かすのは難しいですね。時間は余りありませんし……あ、ところで、校長に相談があるのですが…」

ガルトナー
「なにかね？」

山城
「この国の技術開発部門とコンタクトをとって欲しいんです。詳しい事は鷲井が話しますが、何とか技術支援が出来る目処がたちまして」

ガルトナー
「おぉ、そうか。だが、既にコンタクトはとっている。首都に行ったついでに、技術開発部門の知人に君達の事を話したら、目の色を変えていた。明日にでも何人か連れて見に来るそうだ」

山城
「そうですか。鷲井が聞いたら何と言うか…」

ガルトナー
「それと、あの戦艦…天城を首都に回航して良いかね？３年も放置していたからね、整備が必要だろう」

山城
「そうですね。天城が使えればこちらに有利ですし……そんなに大きいドックがありましたっけ？」

ガルトナー
「天城を回収した時から、あんな大型艦を建造するのが目標だったからね、その前にドックが必要だろう？」

山城
「えぇ、そうですね…しかし、人員は？天城は約２０００名ほど必

要ですが？」

ガルトナー
「動かすだけならそれほど乗員はいらない筈だ。１００名ほど居れば足りるだろう。既に回航要員は手配してある」

山城
「手が早いですね～！」

ガルトナー
「早めに手を打っておいた方が良いだろう？」

山城
「確かに…別に自分はいいですよ」

ガルトナー
「そうか…実は回航の時に、君達に乗り組んでもらいたい。君達の方が使い慣れているからねえ」

山城
「えぇ…ですが、どこまで手伝えるか、解りませんよ？」

ガルトナー
「かまわん。そうだ、シルヴィア達も乗り組ませよう。いい経験になるだろう」

こそこそ……こそこそ……

ヴィクトリア
「うふふ…あの子に頼んで……」

大澤
「何やってるんだ?」

ヴィクトリア
「きゃあ!!」

いきなり声をかけられて、驚くヴィクトリア。

大澤
「そんなに驚くなよ…」

ヴィクトリア
「あ、あなたは昨日踏み殺した筈!」

大澤
「…あんなんで死ぬかよ。それより、何してんの?」

ヴィクトリア
「あ、あなたには関係無い事ですわ」

大澤
「ふーん……あぁ、なるほど、ヴィクトリアちゃんは空を飛びたいんだな♪」

ヴィクトリア
「!!なんで解りましたの!?」

大澤
「そりゃ、君の目を見れば解るよ。俺も航空機見てそんな顔してたし、岡田も最初はそんな顔してたし…」

ヴィクトリア
「あ……」

大澤
「何も言えない？図星？」

ヴィクトリア
「……今度本気で殺してやりますわ」

クルッと回れ右をして、どこかに行こうとするヴィクトリアに……

大澤
「明日の朝、５時にボート小屋の前でまってな」

ヴィクトリア
「……誰が待つものですか」

大澤
「待ってるよ～」

ヴィクトリア
「……バカですわ」

次号へ

21　迫る雷雲（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

22　騒がしい1日の始まり

6月19日　早朝

まだ日も昇っていないのに、ボート小屋の前で待っているヴィクトリア。

大澤
「な～んだ、待って無いとか言って待ってるじゃん」

ヴィクトリア
「べ、別に…今日は授業が無くなりましたから…」

大澤
「あ、そうなんだ…」

ヴィクトリア
「ところで、私をこんな朝早く呼び出したのはなんでですの!?」

大澤
「それを言う前に、これ着て」

毎度お馴染み（？）の飛行服。

ヴィクトリア
「……」

大澤

「あ、着るって言っても、今着てる服の上から着るだけだよ」

ヴィクトリア
「わ、わかっていますわ！」

大澤
「それならいいけど…」

飛行服を渡すと、ボート小屋に入って着替える。

１０分後……

ヴィクトリア
「…これでよろしいですか？」

大澤
「うん、オッケー。じゃあ、こっち」

そう言うとボート桟橋の先にある機体に向かう。

ヴィクトリア
「…なんですの、これ？」

大澤
「天城に搭載していた、零式水上観測機。昨日、整備班に頼んで整備してもらった」

ヴィクトリア

「？？」

大澤
「まあ…、とにかく乗って。手貸すから」

手を貸してヴィクトリアを零水観に乗せると、エシャナーを回して発進準備を整える。

大澤
「よし…コンターク！」

カタンカタンカタン……

ババババババ……

エンジン出力が上がり、ゆっくりと零水観が水上を走る。

大澤
「それじゃ、行きますか！」

操縦桿を一気に引いた。

大澤
「高度１０００ｍ、速度２１０ｋｍ…まずまずだね。もう目開けていいよ」

ヴィクトリア
「な、何を言ってますの？わ、私は目など…」

大澤
「上昇する時にチラ見したけど、完全に目瞑ってたよ」

ヴィクトリア
「……むぅ～」

大澤
「あはは…では右の方をご覧ください」

ヴィクトリア
「……何も無いわよ」

大澤
「そのまま、そのまま…では、１０、９、８、７、６……」

ヴィクトリア
「？？」

大澤
「３、２、１、０！」

その時、機体右側面がオレンジ色に染まり始めた。

ヴィクトリア
「あ…！」

大澤
「どうだ？日の出遊覧飛行は？」

そう言いながら、ニヤリと笑う。

ヴィクトリア
「……ただの変態と思っていましたわ」

大澤
「あははは、確かに変態だよ……操縦できるな」

ヴィクトリア
「ところで、あなた方は何者？飛行機なんて高価な物に乗って動かせる…そんな簡単な事では無いのに…」

大澤
「ん、俺達？んー…ま、いっか…俺達は別世界の未来から来たんだよ」

ヴィクトリア
「え……じゃあ、山城教官も！」

大澤
「そう言う事」

ヴィクトリア
「……なぜか、教官に嫉妬していたのが、馬鹿らしくなりましたわ」

大澤
「嫉妬？なんで？」

ヴィクトリア
「……私の小さい頃からの夢は、空を飛ぶ事でしたわ……なのに、あの教官は突然現れて、空を飛んだんですもの…」

大澤
「あぁ、山城がネイラーン王国を飛んだ時だな」

ヴィクトリア
「……まさか、別世界で未来の人間なんて…敵う訳ありませんわ」

大澤
「あっはっはっは！だが、いいじゃねえか。まだこの世界の人間が、操縦して空は飛んでないぞ」

ヴィクトリア
「…あ、そうなんですの！」

大澤
「あぁ、そうだぜ」

ヴィクトリア
「うふふ、なら、まだ希望が持てますわね！」

ブロップブロップ……

大澤
「はい、到着！」

日の出を最後まで見てから、零水観をボート桟橋につける。

ヴィクトリア
「…降りるの手伝いなさい」

大澤
「おぉ、悪い悪い」

謝りつつ、降りるのを手伝う。

山城
「よう、大澤。朝から観測機の調整か？」

大澤
「ん、山城か。おはようさん」

山城
「おはよう…なんだ？ヴィクトリアも一緒か？」

ヴィクトリア
「あ、お、おはようございます！」

大澤
「いや～、俺がさそったの！」

もみもみ…もみもみ……

ヴィクトリアの胸を揉みながら……

ヴィクトリア

「！き、きゃあー！！」

バキッ！ボキッ！ボカッ！

大澤
「痛え～～！」

山城
「はあ～……」

騒がしい1日の騒がしい始まりだった。

次号へ

22　騒がしい1日の始まり（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

23　デモンストレーション　前編

１０時頃に来た、技術者・研究者集団の案内を、鷲井と山城、シルヴィアが担当する事になった。
技術士官の鷲井が案内なのは当たり前だ。
山城は携帯火器の緒操作担当。
シルヴィアは言い回しの関係上がある為…つまりフォロー役＋補佐役。
残りの大澤、岡田、泉の３人はデモンストレーションと体験飛行を担当する事になった。

山城
「…で、早速僕の出番なのね？」

鷲井
「仕方ないだろ、携帯火器を上手く扱えるのはお前しかいないんだよ」

そう言いながら、零式拳銃の点検を行う。

山城
「けどさ、ここは先に烈風でデモンストレーションやって、その後に携帯火器による実弾射撃じゃないの？」

鷲井
「いやいや、下手にそっちからやると、コピー不可能なんて思われたく無いんだよ」

山城
「ふ～ん…そんなものか？」

鷲井
「そんなものだ」

山城
「…そうか」

まあ、餅は餅屋と言う諺もある。
ここは我が友の技術士官の指示に従う事にする。
しかし…２０～３０人の前で拳銃射撃とは……正直恥ずかしい…。
しかし、的を前にするとそんなもんも頭から消えてしまう。
こう言う場合、下手に意識すると当たるものも当たらない。
意識的に……学校でやってた射撃訓練の様に…引き金を3回引いた。
装弾は3発、銃弾補給の出来ない現状においては仕方ない数だ。

シルヴィア
「お主…いつまで構えているつもりだ？」
シルヴィアにそう言われ、やっと自分の役が終わっている事に気付いた。

山城
「あ、ごめんごめん。ついつい無心になってた」

シルヴィア
「まったく…しっかりしてほしいものだ」

山城

「あはははは…」

苦笑しながら、的をみると3つ共、ほぼ真ん中に穴が空いていた。

鷲井
「では次に、機関銃の実演銃弾を見てもらいましょう」

そう言って出て来たのはクレマンとデュリオの2人。使用銃器はテケに載っていた7，92mm機関銃と流星の13mm機関銃。

山城
「……あの2人で大丈夫なのか？」

鷲井
「……多分、大丈夫…の筈だ…」

山城
「……微妙に心配だ」

そんな会話を交わしつつ、まずはデュリオが7，92mm機関銃を一連射…それだけでも的はボロボロだ。
見物人達から驚きとどよめきが聞こえる。

鷲井
「では、もう1ランク上の機関銃の威力をどうぞ」

今度は2人で射撃態勢を整えると、的に狙いを定める。
ちなみに、13mm機関銃の的は人の形を型どり、その上に甲冑を着せた物だ。
そして……

ダダダダダダ！

こちらも弾薬の都合上一連射……だが、的はボロボロだ。

鷲井
「では、近付いて見て見ましょうか」

そう言うと的に近付き、甲冑を皆に見せる。
甲冑は……予想通り、１３ｍｍ銃弾が貫通し穴ぼこになっていた。

その後、テケのデモンストレーションを終え、お昼となり昼食へ……

山城
「…んでさ」

鷲井
「ん？」

山城
「この後、烈風と４０式のデモンストレーションだろう…で、その後、どうするんだよ」

鷲井
「自分のパソコンに入ってたデータを編集した映像を見せる」

山城
「ふ～ん…で、情報提供するのか？」

鷲井
「あぁ」

山城
「そっか…じゃあ頼むぜ。何せ生活が掛かってるだからな！」

鷲井
「おう、任せとけって！」

次号へ

23　デモンストレーション　前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

24　デモンストレーション　後編

昼食後……

クレマン
「教か～ん！」

山城
「ん、クレマンか」

クレマン
「教官、あの烈風を飛ばすんですよね？」

山城
「そうだ」

クレマン
「なら、あの見物人達から見物料徴収してもいいですよね？」

そう言いながら、指差す方を見ると、いきなりの授業が無くなった生徒達が窓際に集まって見物している。

山城
「……駄目だよ」

クレマン
「あはは…駄目ですか…」

苦笑いを浮かべつつ、残念そうな顔をする。

山城
「まったく…悪い奴じゃ無いんだけどな」

そう言いながら見ていると整備兵の１人が赤旗を上げた。
二機の烈風の発進準備を終えた様だ。

鷲井
「では、本日のメインデモンストレーションをどうぞ！」

カタンカタンカタン……
ババババババババ……

エンジン始動し、出力がある程度出ると、ゆっくりと二機の烈風が滑走して行く。
そして、４００m程滑走すると一気に上空に飛び上がった。
そのまま、上空１０００mまで駆け上がる。
そして、息のあった編隊曲芸飛行、模擬空戦をやる。乗っている人間を知ってる人から見たら驚き（何せ、変態に近い青年とショタ系青年の２人だから）かもしれないが、始めて見る飛行ショーに生徒達からは歓声と拍手に満ちた。

山城
「……今さらだけど、やっぱり見物料とればよかったかな…」

シルヴィア
「…クレマンのペースにのせられてどうする」

こんな突っ込みを入れられつつ、１０分間の飛行ショーを終えた二

機の烈風が降りて来た。
燃料の都合上による短時間航空ショーだが、大澤と岡田が降りた時には、生徒達から拍手喝采で迎えられた。

山城
「…なあ…これ、ある意味で正体バラしてるよな？」

シルヴィア
「…バラしているな」

デュリオ
「…明日から教官は大変ですね」

山城
「あははは……本当だな…」

その後、数回に分け技術者・研究者達を４０式輸送ヘリに乗せてから、鷲井が編集した映像を見せる為、校舎の中に入って行った。

山城
「お疲れ様」

大澤
「おう」

岡田
「お疲れ様です」

泉
「お疲れ～～」

クレマン
「あ、鷲井教官は？」

山城
「今から技術者・研究者達にパソコン編集した映像を見せるんだってさ」

岡田
「どんなの見せるんでしょうかね？」

山城
「ちょっと見たが…まあ、普通に富士の陸軍演習場の演習映像とか、ハワイ沖海戦のＣＧで再現した映像とかあったぞ」

泉
「ふ～ん…それ見せた後どうするの？」

山城
「まあ、こっちからも情報提供して、この世界でも何とか出来る様にするんだってさ」

大澤
「…と、何か？当分はこの国に未来技術を教えて、その間に帰る方法を探すのか？」

山城
「それしか方法ないの。いざとなって、燃料無いと困るだろう？」

大澤
「…確かにな」

山城
「ま、今回の事でどこまでいくかは解らないけどな」

次号へ

24　デモンストレーション　後編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

25　天城の回航

6月26日

回航される戦艦天城を海流にのせる為、二隻のタグボートと二隻の戦艦が天城を押し引きしていた。

山城
「見ろみろ、鷲井。この世界の戦艦と天城のデカさの違いをさ」

鷲井
「そうだな。三笠と長門を見てるみたいだ。まあ、全長は1，5倍はあるんだけどな」

こんな会話を交わしている2人は、随伴する練習艦に乗艦している。

大澤
「おうおう、技術屋と将校が何を企んでいるんだ?」

山城
「何も企んじゃいないよ」

鷲井
「そうだ。ただ、三笠と長門を見ているみたいだと2人で話していただけだ」

大澤
「あぁ、なるほど。確かにデカいよな」

事前予定では山城と鷲井だけの筈だったのだが……何故か大澤も付いて来た。
この為、居残り組は泉と岡田と整備兵達になった。

大澤
「けどね…船の名前はネタか？」

山城
「う～ん……どうだろう？」

鷲井
「……ネタ元を辿ればいい話だ」

さて、話題に上がっている事だが……今回、天城回航の為派遣されたシリルティア王国艦艇の艦名だ。
なにせ……

大澤
「この練習艦の名前が『マイヅル』。向こうで天城を引っ張ってるのが、戦艦『マツシマ』・『イツクシマ』……」

鷲井
「…もし、三番艦があったら『ハシダテ』か？」

山城
「『松島』『厳島』『橋立』……三景艦か？」

3人
「「「……うわはっはっは!!ネタじゃねえか、こんちゅくしょう!!」」」

シルヴィア
「……お主ら、3人一緒にに狂ったか?」

遠巻きに見ていたシルヴィアが、大丈夫か?とゆう顔をしながら訊いてきた。

山城
「あぁ～、ごめんごめん。色々思い出しちゃって」

鷲井
「あれ?生徒は訓練航海の説明会じゃなかったの?」

クレマン
「説明会なら、ついさっき終わりましたよ」

デュリオ
「ま、教官達から聞いていた僕達は暇でしたがね」

いつの間にか、いつものメンバーが集まっていた。

ヴィクトリア
「あら、皆さんお揃いですこと」

シルヴィア
「む、ヴィクトリア」

わざとらしい挨拶に、喧嘩腰満々のシルヴィア。
しかし、挑発的だったヴィクトリアも、大澤の姿を見た瞬間……

ヴィクトリア
「な、なぜ、変態のあなたがここに居るんですの！？！」

大澤
「いいじゃないかよ。何かが減るもんじゃないんだし」

ヴィクトリア
「いいえ！私の神経が磨り減りますわ！」

大澤
「なんで俺が居ると神経が磨り減るんだよ！」

ヴィクトリア
「あなたが変態だからですわ！」

大澤
「俺は女性が好きなんだ！」

ヴィクトリア
「人の胸を揉んでおいて、何を言いますの！」

大澤
「あれはスキンシップだ！」

ヴィクトリア
「どの口がそんな事を言うのですか！」

……いつの間にやら痴話喧嘩になってるし…。

シルヴィア
「馬鹿か？あの２人は？」

山城
「いやいや…ただ、仲良しなだけだよ…多分」

デュリオ
「仲良し？」

鷲井
「ほら、喧嘩するほど仲が良い…てよく言うじゃん」

クレマン
「…なるほど」

午前中は主に、航海実習となった。
今や使い慣れた機材を使い、自分達の位置を確めていた。
しかし、午後からの武器実習はてんやんわの大騒ぎだった。
まず始めに、山城の案内の下、マイヅルに搭載してある兵装を紹介した。
その後、搭載されている１５ｃｍ副砲で射撃訓練（空砲）をしたら……ある程度は予想出来ていたが……扱いを知らなすぎた。
栓尾はどう開けるだとか、引き金はどこだとか…等で一発装填するだけで平均２０秒以上は掛かった。
結局ちゃんと扱えたのは、シルヴィア・クレマン・デュリオのグループのみ。

山城
「こりゃ…1週間の間に慣れさす必要があるな～」

次号へ

25　天城の回航（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

26　首都で　1

7月4日　首都付近の軍港

練習艦『マイヅル』から降りた山城、鷲井、大澤の3人。

鷲井
「うう～ん、昨日の嵐は揺れたな～」

山城
「ま、陸奥より小さいから余計かも知れなかったがな」

大澤
「いや、俺達はいいけどさ…後ろの生徒達は大丈夫か？」

見ると、ほとんどの生徒達はげっそりとしている。

山城
「おいおい、水分抜かれた野菜じゃ無いんだから…」

生徒
「教官……なんとも無いんですか？」

山城
「…あんな嵐位で弱音吐いてたら、大洋になんか出られないぞ」

こちとら荒海の日本海、太平洋で訓練しているから、あんなのには慣れっこだ。

鷲井
「しかし…意外に元気だな…あの４人は…」

現在、満足に立っているのはシルヴィア、クレマン、デュリオ、そして……

大澤
「…なんで、ヴィクトリアが平気なんだよ?!」

ヴィクトリア
「仕方無いでしょ！体質なんですから！」

大澤
「け、胸も態度もデカけりゃ、耐性もあったのかよ！」

ヴィクトリア
「な、なんですって!!」

山城
「…痴話喧嘩なら外でやってくれ」

その後、生徒達の宿（使っていない将校宿舎を使用）を案内してから、生徒達は首都見物と洒落込んでいる。
そして、３人もやる事はあるのだが、別の日でもいいので首都見物中。

山城

「しかし…さすが首都ユニオン。賑わいは凄いな」

鷲井
「あぁ、ラバナスターと同じ位賑わってるな」

シリルティア王国の首都ユニオンの表通りを散策しつつ、男3人ぶらりと歩く。

大澤
「港湾都市故だろうな。北と南の山は要塞化されている」

山城
「あの様子じゃあ、砲も2門や3門じゃすまないだろう。多分１０門…複数の射線を構成しているな」

大澤
「……ごめん、鷲井、解説してくれ」

鷲井
「つまり、一隻の戦艦相手に多数の砲台が撃ち合える様に射線を重ねてあるんだよ」

大澤
「あぁ、なるほど」

山城
「多分、備砲は３０ｃｍ、２８ｃｍ、２４ｃｍ、２０ｃｍ、１５ｃｍ砲…クラスの砲は配置されているな」

もちろん、備砲は見え無い。

ただ、日露戦争の時に日本軍には２８ｃｍ榴弾砲が東京沿岸の砲台等に配備されている事を考えれば、それ位のクラスが据えられているはずだ。

鷲井
「しかし、典型かな？庶民が都市内に住んで、貴族は郊外に住むってのは」

山城
「…知らないよ」

そんな話をしつつ、ぶらりと散策を続ける。

大澤
「ところでさ」

山城
「ん？」

大澤
「天城はどこ行ったんだ？」

鷲井
「ドックに入れた」

大澤
「……いつの間に？」

山城
「夜が明ける前にドックに入れたのさ。昼間に入れたら目立ってしまうからな」

大澤
「ふーん…」

そう言いながら、大澤はカレーを掻き込む。

鷲井
「…街の風情が２０世紀初期のヨーロッパみたいだな」

山城
「あぁ…そうだな」

地面は石を敷き詰めて整理されている。
先程通った市場も、ヨーロッパ風の市場だ。
まさに、ヨーロッパである。

大澤
「んでさ、お前らの用事って何だよ？」

山城
「僕は、お姫様から呼ばれてる…明日の１０時頃に」

鷲井
「自分はその後、技術部との会合。１５時頃に」

大澤
「そうか…じゃあ、俺は…」

山城
「…頼むから、単独行動は止めてくれ」

大澤
「え？」

鷲井
「お前一人だと、何をするか解らん」

大澤
「あはは……了解」

次号へ

26　首都で　1（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

27　首都で　2

7月5日　王城の一室

山城
「お久しぶりです。陛下」

シルヴィア
「陛下、ご機嫌麗しく」

アーネリア
「お久しぶりです。あと、陛下は無しで…そちらの方は？」

鷲井
「初めてお目にかけます。山城の友で、鷲井　剣と申します」

アーネリア
「あら、また面白そうなお方ですね。どうぞよろしく」

鷲井
「ははあ！よろしくお願いします」

一通り挨拶を終えると、アーネリアとシルヴィアは同い年同士のお喋りを始める。

鷲井
「……なあ、大澤連れて来なくて良かったな」

山城
「あぁ、そうだな」

あいつの事だ、スキンシップだとかなんとか言って（あるいは何も言わずに）胸を揉むだろ。
この時点で、不敬罪に問われてもおかしくない。
それで死刑になっても、自業自得だと言って助けるつもりはない。
……それ以外なら助けてやるが…。

シルヴィア
「陛下、開かずの倉庫黙認の件、ありがとうございます」

アーネリア
「いいのよ。王子を助けてくれたお礼よ」

山城
「ところで、その王子の事で小耳に挟みましたが、圧力が掛かっているとか？」

アーネリア
「はい…ネイラーン王国…今はネイラーン共和国ですが…から、使者が参りまして、王子とその配下の所在を訊いてきました」

鷲井
「反乱貴族が統治しといて、『共和国』？」

山城
「名前だけだろう。まあ、帝国と名乗らないだけマシさ。それで？」

アーネリア

「私以外この王城で知る人間はおりません。ですから、知らないと答えておきました。逆に配下はともかく、王子は戦死成されたのでは、と訊いたところ、王子の配下の間違いだったと訂正しました」

山城
「なるほど……向こうも、相当焦ってる様だな」

シルヴィア
「？どう言う事だ？」

山城
「つまりだ、王子は戦死したと発表したが、肝心の民衆が信じてくれない。だから、必死に探して秘密りに殺害し、死体を見せないと、アルスラーン王子を信用している民衆も貴族も黙ら無い……統治機能に支障をきたし始めたんだよ」

鷲井
「それは国家にはキツいダメージだぞ。機械ならネジ全部が緩み始めたってとこだな」

山城
「あぁ、それ故、向こうが何をしてくるか……あの実力行使を匂わせる言葉も気になる」

シルヴィア
「じゃあ、戦争を仕掛けてくるのか？」

山城
「……最終的にはね」

シルヴィア
「最終的？どう言う事だ？」

山城
「鷲井、相手がなかなか頑強で、ギリギリラインの脅しといえば？」

鷲井
「あれか、人質に拳銃突き付けて脅すってやつ？」

山城
「…映画の設定だとね」

シルヴィア
「…だが向こうに人質は居らぬぞ？」

山城
「あえて言えば、この国自体が人質だよ」

シルヴィア
「…はあ？！」

アーネリア
「あの、それはどう言う事ですか？！」

鷲井
「ネイラーンからこの国は近い訳ですよね？なら、航行中の船舶や沿岸の街や村を襲う……こいつが言いたいのはその事です」

山城
「代わりに解説ありがとう。先ほど鷲井が言ったような事が起こる

可能性があります」

シルヴィア
「な……」

アーネリア
「そんな……」

山城
「……言葉を失うのは解りますが、実際起こりえるかも知れない事態です。今の内に対策を立てる事をお薦めします」

アーネリア姫と話し終え、王城から出た時…

鷲井
「さてと…自分は技術開発部に行って来る」

山城
「あれ、確か3時からじゃあ…」

鷲井
「あんな話聞いたら、じっとできる訳ないだろう。じゃあ！」

そう言うと、あっという間に見えなくなっていくほどの速さで走って行った。

山城
「昼食……どうするんだよ？」

シルヴィア
「……ああいった人間は大丈夫ではないのか」

山城
「…昼食に行こうか」

シルヴィア
「あ、あぁ」

シルヴィア
「なあ？」

山城
「なに？」

たまたま見付けた飲食店で、パスタに舌鼓を打ちつつ食べていると、向かいに座るシルヴィアが話し掛けてきた。

シルヴィア
「さっきの沿岸襲撃の話……防ぐ手立てはあるのか？」

山城
「どうして？」

シルヴィア
「我々は軍人だぞ！国民を守るのが、仕事であろう！」

山城
「冗談だよ……手立てはある」

シルヴィア
「なんだ？」

山城
「一番手っ取り早いのは、海岸線に沿って哨戒艦艇を配置しておく事……だけど、物理的に不可能だ」

シルヴィア
「むう…確かに…」

山城
「ならば、手は1つ。航空機による哨戒飛行しか無い」

シルヴィア
「…可能なのか？」

山城
「どうだろう…人と機材、燃料の問題があるから……難しい」

シルヴィア
「そうか…」

山城
「まあ…大丈夫さ。うちには有能な技術士官がいるしね」

次号へ

27　首都で　2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

28　首都で　3

7月6日　郊外の演習場

鷲井
「おはよう！」

山城
「…元気だな」

大澤
「変な物でも飲んだのか？」

昨日、宿舎に戻って来た鷲井は何故かしら興奮していた。
もちろん、酒だなんだを飲んでいる訳でも無い。
とにかく訳を聞くと、『明日解る！』と言って要領を得なかった。

シルヴィア
「…なぜ我らも呼ばれたのだ？」

いつものメンバー……シルヴィア、クレマン、デュリオ、そして、ヴィクトリア……の４人。

鷲井
「君達も知っている方がいいからね…あ、お願いします！」

近くにいた研究員らしき人物に合図を出す。
すると、格納庫から出て来たのは……

大澤
「…トラック？」

山城
「…あれ？見たこと有るようなシャシー…」

鷲井
「そりゃそうだ。いすゞ製９７式トラックだ」

大澤
「なるほど…」

山城
「これも転移してきたのか？」

鷲井
「あぁ、１０日前に回収して、馬で引いてきたんだとさ。それと…」

トラックの後ろに回り、出て来たと思った瞬間、何かを投げてきた。
いきなりながらも、山城は投げられた物をキャッチする。

山城
「これは…９９式歩兵銃か！」

鷲井
「あぁ！新品の箱詰め品だ。一個小隊分４０挺に９９式軽機関銃２挺＋弾薬がトラックに載っていた」

山城

「ふーん…」

素っ気なく答えているが、真剣な表情で９９式歩兵銃を構えている。

鷲井
「昨日行ったら、早速分解して調べてたよ。あの真剣さは凄かった」

大澤
「……まさか、これだけの為に呼んだのか？」

鷲井
「まさか。次が行こう、次！」

山城
「ローエン中尉！」

ローエン
「おや、皆さん。お久し振りです」

大澤・ヴィクトリア
「「だれ？！」」

デュリオ
「え～と…大澤教官には話しましたが、盗賊を掃討した時の歩兵部隊隊長です」

ローエン
「あの時はありがとうございました。普段は首都の守備に就いてい

ます」

山城
「なら、今日はなぜ？」

ローエン
「まあ…技術試験に付き合わされた…と言ったところですね」

山城
「技術試験？」

ローエン
「えぇ、丁度今…」

ポン！

ヒューーウ……

ボワーン！

ローエン
「…新兵器の取扱中で」

山城
「おい、鷲井、あれ迫撃砲じゃないか？」

鷲井
「あぁ。迫撃砲なんて、臼砲の小型版だからな。簡単に構造を教えたら、あっという間に完成させたんだよ」

山城
「…あのノートパソコンか」

鷲井
「そう言う事」

クレマン
「他に何を開発してるんですか？」

鷲井
「えーと…飛行船、飛行機、手榴弾、山砲、歩兵砲、自動車…」

シルヴィア
「兵器ばっかりだな」

鷲井
「民生品も幾つか考えているが……民生品の技術も、元は軍事技術だからな」

山城
「民生品で思い出したが、天城の酒保に載ってた酒やらなんやらを売るんだって？」

鷲井
「あぁ。出来るだけ、上流階級に流すつもりだが…宛が無い」

山城
「ふーむ……さいはてどうしたものか…」

大澤

「じゃあ、俺がその辺の貴族の女の子をナンパして…」

山城・鷲井
「「大却下！！」」

シルヴィア
「…アホらしい」

ヴィクトリア
「……」

次号へ

28　首都で　3（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

29　首都で　4

7月7日　将校宿舎

山城
「……は？」

鷲井
「……へ？」

大澤
「熱でもあるんじゃないか、ヴィクトリア？」

そう言うと、右手をヴィクトリアのおでこに宛て、左手を自分のおでこに宛てる。

ヴィクトリア
「ね、熱もくしゃみも風邪も細菌もありませんわ！」

鷲井
「…細菌ときたか」

山城
「まあ、それは置いといて…日本酒のアテがあるってどうゆうこと？」

ヴィクトリア
「よくぞ訊いてくれましたわ。実は今晩我が家でパーティーがあり

ますの。それに試供品と言う事で出してあげてもよろしくてよ」

鷲井
「…なーんか、上から目線ぽい言い方だな」

大澤
「…お前が飲むのかと思った」

ヴィクトリア
「ち、違いますわ！」

山城
「しかし、いくら家でやるパーティーだからって、勝手に酒増やしちゃあ駄目だろう」

ヴィクトリア
「えぇ、その前にお母様に会ってもらいますわ」

山城
「……言っておくけど、評価は上げないから」

ヴィクトリア
「…はい？なんでその話に…」

山城
「だって、前の小テストの答えに……」

ヴィクトリア
「そ、それ以上は言わないで下さい！！」

大澤
「……山城、あとで教えてくれ」

山城
「馬鹿、守秘義務だ」

大澤
「…ケチ」

山城
「ケチじゃない」

鷲井
「あ～、とにかく…ヴィクトリアの家に行ってみないか？」

山城
「あぁ、そうだな」

ヴィクトリアの自宅

鷲井
「……なぁ、なんで貴族の家は無駄にデカいんだ？」

山城
「…知らん」

何時見ても貴族の住宅は大きい。
シルヴィアのお祖父さんであるボニファス伯爵の家はヴィクトリア

の家に比べれば小さい方だ。

山城
「…今度、税理士でも呼んできて固定資産税云々を調べてもらおうかな？」

…案外ぼろぼろ出そうだ。（笑）

大澤
「なんだ、ニヤニヤして」

山城
「いや、ちょっとね」

大澤
「あ、わかった！可愛い女の…」

バキッ！

山城
「一緒にすんな、馬鹿！」

ヴィクトリア
「……家の前で茶番劇は止めて下さい」

迷惑そうに言うと、自分でさっさと門を開けて入ってしまう。
仕方なく、3人もヴィクトリアの後ろに付いて行く。

鷲井
「なんか…けったいな話だな」

大澤

「…大の男が3人、同い年の女の子の後ろを歩くってな」

山城
「やめろ……なんか嫌になるから」

その前を歩いている本人は、文句を言われている事など知らず突き進む。

「あら、ヴィクトリア！お帰りなさい」

ヴィクトリア
「ただいま、ママ」

3人
「「「ま、ママ！！」」」

普段は高飛車な態度から、『お母様』とかと言うのかと思っていた3人にとっては意外だった。

「あら、ヴィクトリア。お友達？」

ヴィクトリア
「違います。教官とそのお友達の技術者と変態です」

大澤
「へ、変態って…」

山城・鷲井

「「自覚あったんだ」」

「こら、ヴィクトリア。そんな紹介の仕方がありますか」

ギュウー

ヴィクトリア
「ひ、ひだうでふ～」

山城
「……マンガか、こりゃ？」

「あら、お客様の前なのに…さあさあ、中に入って～♪」

「あ、紹介が遅れたわね。ヴィクトリアの母のベローナです。よろしく」

山城
「はあ…よろしく」

ベローナ
「ヴィクトリア、あなたも自慢のお母さんを紹介しなさいよ」

ヴィクトリア
「ス～、ス～、ス～…」

ベローナ
「あらあら、この子いつの間にか寝ちゃって」
そりゃそうだ。
さっきから試供品として持ってきた日本酒を娘にも飲ませて、自分はけろりとしているのだから。

大澤
「（なあ、ベローナさんって貴族の奥さんって言うより、酒場の奥さんってのが似合うのは気のせい？）」

鷲井
「（偶然だね。自分もそう思ったとこ）」

山城
「あの～、ベローナさん。確か旦那様は財務卿でいらっしゃいますよね？」

ベローナ
「えぇ。ヴィクトリアは容姿は私似だけど、性格は夫似なのよね」

鷲井
「あはは……そうですね～」

…会った事無いけど。

ベローナ
「あ、お酒の件は任せて。このお酒に合う料理を準備するわ」

宿舎

シルヴィア
「なに！ヴィクトリアの母上に会って来ただと？！」

山城
「……そんなに驚く事か？」

シルヴィア
「当たり前だ！ヴィクトリアの母上は『ライト』の称号を持つ唯一無二のお人だぞ！」

山城
「…はあ？ライト？」

シルヴィア
「…あぁ、すまぬ。ライトとはこの国の料理に関するものでは最高の称号で、普段は王城での総料理長を勤める者にしか贈られないものだ」

山城
「……マジデスカ？ア、アノ奥サンガ？！」

次号へ

29　首都で　4（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

３０　首都で　５（前書き）

ベローナ

年齢　４０歳

ヴィクトリアのお母さん。普段は自宅でお菓子や料理の思索に励んでいる。
とても貴族の奥様に見えないが、王城では行事の時は厨房で指揮を執りつつ、自らも腕を振るう。
唯一『ライト』の称号を持つ。

30　首都で　5

7月8日

もし…この現状を知ってる奴に説明してくれと言われたら、俺はこう答える。

「俺もわかんない」

…と。

確かに現状においては当事者の1人だが、そもそも住んでいる世界とは全く違う世界にいるから解らない。そして…俺、宮里武志（みやざとたけし）神戸海軍士官学校所属士官候補生（18）は今すごーく、ヤバい事になってます。

何故かって？

いま、身勝手貴族の若僧どもに囲まれてます。

しかも、その配下も入れた10人に。

対しこっちは2人……1人は巫女さん…男勝りだけど。

「…大丈夫ですか？」

宮里

「…頑張ってみます。風華さん」

助けてもらってからずっと頼りにしている巫女の風華さん。

あの優しそうなどこに男1人をはっ倒せる力があるのか…？

だが……1人で5人はキツいよ。

せめて、あと1人2人…

山城
「あれ?宮里?なんでお前もここに居んの?」

宮里
「山城!?お前こそなんでここに!?!」

山城
「あ〜、話たいのは山々だが……なんでこうなった?」

宮里
「いやな…こっちに来てお世話になった行商人達がさ出店出そうとしたら、こいつらが現れて…」

山城
「なるほど…事情はわかった。助太刀するよ」

シルヴィア
「お前達か!最近市場を荒らす貴族の馬鹿若僧達は!」

宮里
「…誰か知らないが、一言余計な気が…」

若僧
「け!誰だか知らねえが纏めとやっちまえ!」

配下

「「「「「「「「「「おおう！」」」」」」」」」」

シルヴィア
「…久々にやるか」

山城
「まったく…馬鹿な奴等だ」

バキッ！

配下
「グゲ！」

ドス！

配下
「ブゲラ！」

シルヴィア
「……こんなものか？」

山城
「こんなもんさ」

宮里
「山城…教官が見たら倒れるぞ」

毎度の光景……山城の周りには倒された配下が倒れている。

若僧
「う、うわ～！」

風華
「あ、逃げた」

山城
「往生際が悪いな」

そう言うと、近くにあった少し大きめの石を拾うと、逃げる若僧に向かって投げた。

ヒューー……

ゴン！

若僧
「グエ！」

シルヴィア
「お見事！」

山城
「さてと、無駄かも知れないけど、役人にさっさと引き渡そう」

役人に引き渡した後……
あるカフェで…

シルヴィア
「ところで、彼は誰だ？」

山城
「彼は宮里武志。僕と同期生で砲術科士官候補生。宮里、この世界でお世話になってるシルヴィア」

宮里
「よろしく。宮里です」

シルヴィア
「シルヴィアだ。お隣の女性は？」

風華
「風華です。旅巫女をやっております」

宮里
「ところで山城。なんでお前が居んの？つーか、ここどこ？」

山城
「……やっぱりか。いいか、よーく聞けよ」

……事情説明中……

宮里

「うそ…異世界?!」

山城
「残念ながら本当だ。そんな事より、お前こそなんでここに居んの?」

宮里
「いや…実はさあ…配属先が決まったから、久し振りに山に登ったら…足滑らせて…」

山城
「…登山はお前の趣味だからな~。それで転移したんだな」

宮里
「あぁ…んで気付いたら風華さんとさっきの行商人達のお世話になってたんだよ」

山城
「ふ~ん…風華さんは?」

風華
「私も…その…転移って言うのか…この世界の生まれでは無いので…」

宮里
「あ、そうだったんですか?」

シルヴィア
「…一緒にいながら、知らなかったのか」

宮里
「で、お前は何してんの？」

山城
「シルヴィアの通ってる海軍士官学校の教官」

宮里
「……はあ？！き、教官？！」

山城
「……周りに迷惑」

宮里
「あぁ、すまん。だが…本当か？」

シルヴィア
「本当だ。多少頼り無いがしっかり教えてもらっているぞ」

山城
「他にも居るぞ。鷲井とか、大澤とか、岡田とか、泉とか」

宮里
「大澤も来てるのか？じゃあ、毎日大変だろう？」

山城
「あはは…当たらずとも遠からず…だな」

次号へ

30　首都で　5（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

31　餅は餅屋（前書き）

宮里武志（みやざとたけし）年齢　１８歳

山城達同様、神戸士官学校砲術科所属の士官候補生。趣味の山登りの途中で足を滑らせ落下、その時転移してしまった。
真面目で剣道が上手いが、大澤が絡むとやや喧嘩腰になる。

風華（ふうか）
年齢　１８歳

宮里を助けた旅の巫女さん。
その優しい態度とは裏腹に、イザとなれば、男一人二人を簡単に倒してしまう。実は彼女も転移者だが、山城達より長く、山城達とは別世界から転移して来たようだが……？

31　餅は餅屋

7月10日
練習艦マイヅル

『餅は餅屋』

…と言う言葉がある。
物事にはそれぞれの専門家がある…と言う意味だ。
今程それが似合う状況は無い。

宮里
「こら、そこ！動作が遅い！暢気に装填するな！」

さすが砲術科……容赦が無い。

鷲井
「厳しいな」

山城
「いやいや、今更ながらこんなに違いがあるのかと再認識させられるよ」

マイヅルの艦上で主砲の２０ｃｍ砲を使い、艦砲使用訓練を行っている。
相手が貴族であるにも関わらず……日本海軍では知った事では無い……きびきびと指導していく。

宮里
「いいか。一発一発暢気に撃つのは誰でも出来る。だが、海戦となるとこんな暢気にはいかないぞ」

そう言うと、生徒達に砲の細かい指導を行う。

宮里
「ふうー」

山城
「お疲れさん。どうだった？」

宮里
「う～ん、お前の言う様に扱いが下手だな～。やっと扱えるのはお前とつるんでた3人ぐらいかな」

山城
「あ、やっぱり」

クレマン、デュリオ、シルヴィアの3人ぐらいしか扱えそうにない。やっぱり、修羅場潜り抜けたからかね？

宮里
「なあ、武器使用訓練とか無いのか？」

鷲井
「残念ながら、グローリアス士官学校は今まで主に航海術を重視し

ていたから、武器使用訓練は無いし、戦闘・戦術・戦略講義もやっとやり始めたところだからな…」

宮里
「…その様子じゃあ、科目分けも行われて無いのか？」

山城
「あぁ、残念ながらね」

鷲井
「仕方ないさ。出来てから3年、まだ一期生すら卒業して無いし、海軍も出来立てほやほやだからな」

宮里
「なるほどな……砲術科の人間として言わせてもらうが、現状だと武器使用訓練はいるな」

山城
「うーん…ならマスケット銃が人数分いるな」

鷲井
「ついでに大砲もいるぞ」

宮里
「…確保出来るのか？」

山城
「それはガルトナー校長と相談する必要があるな」

大澤

「よう、鉄砲と技術屋と将校が顔付き合わせて何の相談だ？」

宮里
「お前を海に叩き落とす相談だ」

大澤
「おやおや、宮里よ。何で俺が海に叩き落とされなきゃならないんだ？」

宮里
「お前こそ、あの変態＋セクハラ癖は何時治るんだ？」

大澤
「あれは挨拶であり、スキンシップだ！」

宮里
「あれをスキンシップと言えるのはバカしか言えないぞ」

大澤
「…怒るぞ」

山城
「頼むから喧嘩するなら艦から降りて、人目につかない所で喧嘩してくれ」

呆れ果てながら、山城が2人を止める。

鷲井
「そうそう。ここ士官学校じゃあないからな、2人共」

宮里・大澤
「「う……」」

さすがに言われると止めざる終えない2人だった。

クレマン
「う～ん…疲れた～」

デュリオ
「まだ午後もあるぞ」

シルヴィア
「…しかし、なんだ?この死屍累々とした感じは?」腕を伸ばせるクレマンはいい方で、扱い慣れない物を厳しく指導された他の生徒達はほとんどが机に突っ伏している。

ヴィクトリア
「な、なぜ私がこんな疲れる事を…」

シルヴィア
「お主の体力が無さすぎなだけであろう」

ヴィクトリア
「むう…言い返せませぬわ」

シルヴィア達の机で同じ様に突っ伏すヴィクトリア。疲れ過ぎて言い返す元気も無いようだ。

クレマン
「あ、そう言えば午後の予定は？」

デュリオ
「…ちゃんと聞いとけよ。午後からは測量機材の使い方指導」

クレマン
「測量機材？砲術の？」

デュリオ
「あぁ。何でも、普通砲撃戦になったら１００００ｍから３５０００ｍで撃ち合うとかで…」

クレマン
「３５０００ｍ！……ねぇ、それ桁間違えて無いよね？」

デュリオ
「残念ながら間違えて無い。まあ、３０ｃｍ砲が主力じゃあよくいって１００００～２００００で撃ち合うのがせいぜいだって…」

クレマン
「それでも遠いわ！１００００ｍって１０ｋｍだぞ、１０ｋｍ！そんな距離で揺れる海の上で撃ち合えるか！」

デュリオ
「…だから測量機材が要るんじゃないの？」

シルヴィア
「……あぁ、そうか。それはいるな」

ヴィクトリア
「……私にとってはさっぱりですわ」

対称的な2人の対称的な答え。

クレマン
「じゃあ…あの…天城だっけ？あの戦艦なんかまともに戦ったら勝てないんじゃないの？」

デュリオ
「それはそうだよ。一回で四発しか撃てないこっちと、一回に倍以上の１０発撃てる天城だよ……もし戦ったらまず勝てないさ」

クレマン
「……次の講義はちゃんと聞いとこ」

次号へ

31　餅は餅屋（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

32　着々と…

7月18日　ボニファス伯爵の屋敷

首都から帰って来た山城とシルヴィアの2人は久々に伯爵の屋敷に来ていた。

山城
「…とまあ、向こうも徐々にですが、この国に圧力を掛けていますね」

ボニファス
「……由々しき事態じゃのう」

クロイツ
「確かに…我々を探すために実力行使をちらつかせるとは…」

アルスラーン
「だけど…一番有効な手段でもある」

山城
「はい。今のところは、知らぬ存ぜぬで押し通しておりますが、何時向こうに知られるかも解りませんし…」

シルヴィア
「お主の手でどうにか出来ぬのか？その…こう…ドカーン！…と」

山城

「…出来ればやりたいけどね…現状じゃあ無理」

ボニファス
「確かにのう。じゃが、何も出来ん訳でもなかろう？」

山城
「えぇ…ですが、やるには国のトップ…軍財民外の協力が必要です」

ボニファス
「うむ。わしも出来るだけ協力しよう」

アルスラーン
「私も協力しましょう。情報収集ぐらいなら出来ますので」

山城
「ありがとうございます」

シルヴィア
「待て！私を忘れておろう！」

クロイツ
「私の事も忘れ無いで下さいよ」

その頃……

グローリアス士官学校

宮里

「……ガルトナー校長ってどんな人脈を持ってんだ？」

鷲井
「…知らないよ」

昨日首都から帰って来て、武器使用訓練の話をしたばかり……の筈なのに、その翌日にはその武器を積んだ輸送船が士官学校に着いているって……

宮里
「……世の中物凄く解らないよな～」

鷲井
「しかし、短時間でよくここまで集まったな」

箱詰めされたマスケット銃、８ｃｍ砲や、どこで入手したのか１５ｃｍ砲が５００ｔ級貨物船からクレーンや人手で降ろされる。

クレマン
「新品ですね」

デュリオ
「いったい、どこで校長は入手したんでしょうかね？」

手伝ってる（と言うより手伝わされてる）クレマンとデュリオも新品のマスケット銃を取り出して触っている。

宮里
「アームストロング砲でもくると思っていたが…８ｃｍ砲や１５ｃｍ砲がくるとはな」

鷲井
「だが、砲撃訓練は出来るだろう？」

宮里
「あぁ…支給は破格だからな。磨り潰すつもりで使わせてもらうよ」

大澤
「で、あっちの小さいドラム缶は？」

鷲井
「ん、あ、あっちはガソリン」

岡田
「ガソリン！？いつの間に出来たんですか？」

鷲井
「うーん、実をゆうと試供品でな…最近精製したのを持ってきたんだと」

輸送品リストと付属されたメモを見ながら言う。

泉
「石油なんてあったの？この国に？」

鷲井
「みたいだね。数年前から試行錯誤しながら精製してたみたいだね。ただ、実験しようにも…」

岡田

「…肝心のエンジンがなかったんですね」

鷲井
「そう言うこと」

泉
「ありゃありゃ…」

大澤
「…いきなり止まらないよな？」

鷲井
「……保証できません」

岡田
「…まずは地上で動かしましょう」

泉
「…そうね。エンジン停止で墜落死なんて私も嫌だ」

大澤
「あぁ、俺だってこの世界の全ての女の子を…」

鷲井・宮里・泉
「「「黙れ！ナンパ男！」」」

大澤
「うごお！」

3人の黙れ一斉射ひっくり返る大澤。

岡田
「…先輩…もうちょっと他の事言いましょうよ」

ヴィクトリア
「……ほとほと、馬鹿に思えてきますわ」

宮里
「あ、聞こうとして忘れてたけど、天城は何時使える様になる？」

鷲井
「う～ん、点検とか色々あるから…最低４週間、最高１ヶ月以上かな…」

宮里
「まだそんなにかかるか……惜しいな…」

岡田
「やっぱり、天城を使いたいですか？」

宮里
「機材が違うからな。砲塔標準でぼかすか撃つより、一括標準の一斉射撃が効率がいいからね」

大澤
「なんだ、あの巫女さん……」

ドス！

宮里
「おめーと違うよ！」

脇腹に一発食らわせ黙らせる。

大澤
「て、てめえ……」

ドサ

鷲井
「はぁ…自業自得だぞ。クレマン、デュリオ。どっか適当に寝かしといて」

クレマン
「は～い」

デュリオ
「了解」

泉
「ねぇ、巫女さんってどうゆう事？」

岡田
「さあ、何の事でしょうかね？」

宮里
「……あんまり気にしないで」

鷲井
「別の意味で大変だな」

次号へ

32　着々と…（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

33　月月火水木金金

8月17日

1ヶ月が経過した。
本来なら、グローリアス士官学校も夏休み……の筈だが、今年は違った。
理由は簡単。
7月20日からネイラーン共和国の艦艇が沿岸を彷徨き始めたからだ。
もちろん抗議したが……受け入れる筈が無い。
それどころか、アルスラーン王子と臣下は『反逆者』であり、引き渡せと言い返してきた。
今回も知らぬ存ぜぬと突っぱねたが、これ以上隠すと武力行使を行うと通告してきた。
こうなるとシリルティア王国も我慢も限界だった。
直ぐ様、海軍を総動員して対決姿勢を採った。
この為、グローリアス士官学校も緊急事態に備えて2日間程実家に帰らせただけで夏休み終了。
あとは軍事訓練に当てられていた。

戦艦天城

宮里

「距離及び敵速報告！」

生徒
「距離一万、速度１８！」

宮里
「馬鹿！それは前の生徒が言ってた数値だ！今マイヅルは距離１万２０００の速度２０だ！」

数日前に回航された天城できびきびと指導する宮里。日本海軍伝統の『月月火水木金金』の猛訓練と鬼のような指導で生徒達に教えている。

宮里
「ふう…まったく」

山城
「お疲れさま」

宮里
「おう。そっちはどうだ？」

山城
「今のところ普通だ。ところで、生徒達はものになるかな？」

宮里
「本来なら半年一年は必要だが、『月月火水木金金』でやるしかないな。まあ、少しづつだが生徒達も機材に慣れてきた」

山城
「そうだな。じゃあ、砲術は任せた」

宮里
「あぁ。そっちも戦術講義頼むぜ」

山城
「おう」

生徒
「ひ、ひえ～～～～～○×□※…」

大澤
「これ位でわめくな！本来ならもっと高度の高い……聞いてないか」

零式水観を操りつつ、後ろを振り向いた大澤は、後部座席の生徒が気絶している事を確認する。

大澤
「まったく…何人目だよ」

おそらく、ガルトナー校長が認めた事もあるのだろう、最近航空機に乗りたがる生徒が増えた。
だが、大澤の操縦もあるのだろう、ほとんどの生徒が途中で気絶する。

大澤
「はあ…ヴィクトリアは随分マシだな」

ゆっくりと降下しながら呟く大澤。
そのままボート桟橋まで水観を進める。

整備兵
「お疲れ様です」

大澤
「おう。後ろで気絶してる生徒、頼むな」

整備兵
「はい。あ、流星の整備出来てますよ」

大澤
「お、ありがとさん」

急いで格納庫に向かった。

格納庫

岡田
「……使えるんですか、このロケット弾？」

鷲井
「この世界の品だから心配なのは解るが、大丈夫だ。自分が最終チェックしたからな」

泉
「…それでも不安よ」

烈風のロケット弾レールに装着されたロケット弾を見ながら3人が話す。

岡田
「…僕ら実験部隊ですか？」

鷲井
「仕方ないでしょう。装備が装備なんだし」

泉
「この世界でお世話になってるんだから、協力位しないと」

岡田
「あ、流星にも装着するんですね」

鷲井
「あぁ。大澤使用の後でな」

泉
「あいつの？」

鷲井
「…正しくは私用の後かな？」

ヴィクトリア
「……あの～」

泉
「あ、ヴィクトリアさん。いらっしゃい。何の用？」

大澤
「よっしゃあ！間に合った！」

鷲井
「早いお帰りで」

大澤
「おう！ヴィクトリア、早く乗った乗った！」

そう言うなり、さっさとヴィクトリアを流星に乗せると、エシャナーを回し、エンジンを掛ける。

泉
「…なるほどね。確かに『私用』だわ」

鷲井
「さてと、退散退散」

これから飛び立とうとする飛行機の近くにいるのも危ないが、あの変態の近くにいるのも馬鹿らしい。

岡田
「大澤先輩、ヴィクトリアさんに変な事しませんよね？」

鷲井
「いや、さすがに空の上で操縦中にそんな事は出来ないだろう」

岡田
「…ですよね」

泉
「いくら何でも無理でしょう」

次号へ

33　月月火水木金金（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

34　ついに……

8月19日

大澤
「じゃあ、ちょっくら飛んで来るわ」

鷲井
「あぁ。無線連絡は絶やすなよ」

大澤
「おう！」

流星に乗り込んだ大澤とヴィクトリア……ヴィクトリアは不機嫌そうだが……が調子見＋哨戒飛行を行う事になった。

山城
「しかし、ダメ元で出してきた小型無線機が使えるとはな」

泉
「ヘリに偶々載ってた無線機だけど役に立って良かったわ」

テントの下に机と椅子を置いただけのお粗末物で、アンテナも有り合わせ物で作った物だが、贅沢は言っていられない。

シルヴィア
「その…無線と言ったか?使えるのか?」

山城
「あぁ。下手なモールス電信機よりは良いぞ」

泉
「モールスはいちいち打たなきゃならないから面倒なのよね」

岡田
「そうですよね」

海上上空

ヴィクトリア
「ふう～～…」

大澤
「またそうやって堅苦しく周り振る舞ってるのか？素直になれよ」

ヴィクトリア
「ダメですわ。私は貴族の娘ですから」

大澤
「止めとけ止めとけ。貴族の立ち振舞いなんぞ堅苦しいだけで何の得も無いぞ」

ヴィクトリア
「…あなたは平民で羨ましいですわ」

大澤

「そうか？なら、シルヴィアみたいになったらどうだ？気軽に喋って、気軽に歩いて、気軽に街に出る。そっちが楽しいぞ」

ヴィクトリア
「……無理ですわ。貴族ですから…」

大澤
「結局それか。まあ、だから空を飛びたいなんて憧れを持つんだろうけど」

ヅー

山城
『こちら山城。そっちの状況は？』

大澤
「おう、無線は感度良好。そっちは？」

山城
『こっちの感度も良好だ。ところで、２人は何してるんだ？』

大澤
「別に。ただの世間話に花咲かせてるだけ」

山城
『ふ～ん、そうか。なんかあったら連絡しろよ』

大澤
「わかってるよ。じゃあ」

そう言うと無線を切る。

大澤
「まったく…タイミングの悪い奴」

ヴィクトリア
「何のタイミングですの？」

大澤
「君を落とす為の…」

スパコーン！

ヴィクトリア
「ちゃんと操縦しなさい！」

大澤
「…なしてハリセンを持ってるの？」

ヴィクトリア
「あ、あれ、なに？」

大澤
「ん、何が？」

後部座席で双眼鏡片手に周りを見ていたヴィクトリアが大澤に聞いてきた。

ヴィクトリア
「あれ！あの雲の下の２つの筋ですわ！」

大澤
「ちょ、ちょっと待て！今見るから！」

片手で双眼鏡を掴み、ヴィクトリアが指差す方向にピイントを合わせる。
すると……

大澤
「な、なに！？」

２つの筋…船の航跡だ。
前にいるのは非武装船…貨物船か商船で、後ろにいるのは軍艦…巡洋艦クラスだろう。
別にここまでなら何の問題は無い。
問題は……

ドン！ドン！

ヒュュュュウ……

ザバーン！ザバーン！

後ろにいる……追い掛けている巡洋艦が攻撃している！

大澤
「こちら大澤！応答せよ！おい！」

無線をひっ掴み、怒鳴る。

デュリオ
『こちらデュリオ。大澤教官？どうしました？』

大澤
「山城はどうした？」

デュリオ
『先程トイレに…あ、戻って来ました。かわります』

山城
『どうした、大澤？そんな大声張り上げて…』

大澤
「山城か！良いかよく聞けよ！今、学校から３５０ｋｍ南東海上を飛んでるが、非武装船が巡洋艦の攻撃を受けてる！旗から見てネイラーンの巡洋艦だ！攻撃許可を求む！」

山城
『ち、待て！手を出すな！待機していろ！』

大澤
「なに！？いつものお前なら…」

山城
『わかってる！！僕だって攻撃許可を出したいが、世界と状況が違う！すまんが待機してくれ！５分以内に指示を出す！』

大澤

「…わかった。早く出せよ！いいな！」

山城
『あぁ！』

トントントントントン……

こう言う時の5分と言うのは50分の様に長い。
まだかまだかと焦りが積もる。
しかし、先に我慢しきれなくなったのは同乗者だった。

ヴィクトリア
「何時になったら攻撃するですの！？」

大澤
「指示待ちだって！」

ヴィクトリア
「私の胸を身勝手に揉むいつものあなたはどこにいったのですか！」
大澤
「それとこれとは訳が違う！それと身勝手は余計だ！」

ヴィクトリア
「何の訳が違うのよ？！」

大澤
「これが下手して罠だったらどうすんだよ？！そこを考えろよ！」

ヴィクトリア
「……」

大澤
「…にしてもまだか？」

腕時計を確認すると、５分経過したところだった。
下を見ると、最初は離れていた二隻も、今や巡洋艦がかなり距離を詰めていた。

大澤
「ち、仕方ない！命令違反だが…」

操縦桿を倒そうとした時……

ヅー

山城
『大澤！まさかキレて攻撃して無いだろうな！？』

大澤
「今しようとしたところだ！遅いぞ！今から止めても…」

山城
『構わん！そのまま殺っちまえ！！』

大澤
「ああん？！どうゆう事だ？！」

山城

『実はガルトナー校長探してたらその本人から連絡があった！つい先程、ネイラーン共和国が「これ以上、アルスラーン王子とその臣下を匿い、捜索に協力しないのならば、シリルティア王国に向かう民間船は見つけ次第拿捕・撃沈する」と通告してきた！未だに民間船からのそう言った報告は入って…あ、待て！』

無線の向こうから聞き取り難い声がしたが、直ぐに山城がまた出た。

山城
『今、鷲井から報告があった。『ＳＯＳ！こちら貨物商船『ツルマ』。ネイラーン共和国艦艇より攻撃を受ける！救援を要請する！』と打電があった！打電場所は君達の近く。見つけたのはツルマだ！他に報告は無い。奴らも最初の獲物だ！』

大澤
「…なるほど。最初だからこそキツい一発を入れるんだな！」

山城
『あぁ！最初で躓けば向こうも警戒してやってこない！今ツルマを助けれて、キツい一発を入れのは流星だけだ！』

大澤
「了解した！当たって砕けろだ！ヴィクトリア！しっかり捕まってろよ！」

一気に操縦桿を倒し急降下する。
物凄いＧがくるが、今や慣れた大澤にとっては苦にならない。

大澤
「ヴィクトリア！大丈夫か？！」

ヴィクトリア
「だ、だ、だ、大丈夫ですわ！」

大澤
「よし！いいか、この後水平飛行に移るから、巡洋艦の上を通ったらその旋回銃を下にブッ放せ！」

ヴィクトリア
「わ、解りましたわ！」

大澤
「じゃあ、いくぞ！」

ギューーン……

水平飛行に移ると、射爆標準器を覗く。
流星にはロケット弾が6発搭載している。
こんな物で（旧式とは言え）巡洋艦が沈むと思え無いが何処かしらに損傷ぐらいは与えられる。

大澤
「よーそろ…よーそろ…そのまま…」

標準器を見ながら慎重に操縦桿を動かす。
対空砲火は……無い。
まあ、飛行機が実用化されていないなら、対空砲や対空機銃も開発されていない。
まあ、機銃ぐらいなら有るかも知れないが、それほど脅威に成らないだろう。

大澤
「よーそろ…よーし、そのまま…」

やっと乗組員も気付いたのか慌て出したが、今更慌ても遅い！

大澤
「よーい…てぇー！！」

シュバババババ！

ズガーン！ゴワーン！グオーン！ズガーン！ゴワーン！グオーン！

大澤
「もう一丁！」

ドドドドドドド！

翼内の２０ｍｍ機銃も続けて火を吹く！

ギューーン！

大澤
「今だ！撃て！」

ヴィクトリア
「は、はい！」

ババババババババ！

巡洋艦の真上を通過した瞬間、１３ｍｍ機銃をヴィクトリアが乱射した。

ギューーン！

大澤
「どうだ？」

ヴィクトリア
「わ、わかりますか…あ、反転しましたわ」

大澤も振り向くと確かに反転・逃げて行く。

大澤
「あ～、こちら大澤。敵巡洋艦は反転逃走した。これより帰還する」

次号へ

３４　ついに……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

35　嵐遂に来る

8月26日

ネイラーン共和国巡洋艦の通商破壊（山城達の視点）を阻止してから1週間。
現在のシリルティア王国とネイラーン共和国の状態は……マッチを擦れば直ぐに火がつく程であった。
この様な状況であるから、もはや戦争状態も一緒である。
そんな中……

大澤
「なぁ…」

岡田
「何ですか？」

大澤
「俺達…元の世界に戻れるかな？」

岡田
「…どうでしょうね。まあ、戻れなかったとしても、生きていく事は出来ますよ？」

大澤
「馬鹿。いくら生きていけるからって、ずっとこの世界にいる訳にはいかないんだよ！」

岡田
「何でですか？」

大澤
「俺を待っている世界中の女の子達が寂しがるじゃないか！」

岡田
「…そんな事心配するよりも、家族の心配をした方がいいですよ。今頃、死亡通知が家族についてるかもしれませんよ」

大澤
「…色んな意味で嫌な事を言ったな。まあ、確かに家族は心配だけどな…」

泉
「あんた達、そうな幸先心配な事言って無いで手伝ったら？」

大澤
「お前もよく平気でいられるよな、泉。心配にならないか？」

泉
「まあ、確かに心配よ。けど、今考えたところで、そう簡単に帰れる方法なんて無いんだから」

大澤
「さすが、放任娘。ちょっとやそっとでぶれないな」

泉
「……放任娘で悪かったわね。あんたみたいな変態はもう一回ブッ飛ばした方がいいみたいね」

岡田
「あ、あの…2人共、落ち着いて…」

徐々に危なくなっていく2人を鎮めようとする岡田。

宮里
「はあ……お前ら、公衆面前でやめろよ」

大澤
「よう、宮里。どうした？」

宮里
「向こうが動いた。山城がみんな集まれってさ」

士官学校の一室

宮里
「山城。連れて来たぞ」

山城
「お、サンキュー」

宮里達が部屋に入ると部屋には山城の他に、ボニファス伯爵、ガルトナー校長、オーガス教官、アルスラーン王子、クロイツ、ローエン中尉、鷲井、シルヴィアの面々。

山城
「それでは、王子。どうぞ」アルスラーン王子
「昨日、私の配下から連絡ありました。書面によりますと、戦艦二隻、巡洋艦四隻、駆逐艦八隻、輸送艦四隻がシリルティア王国に向けて出港したそうです」

ボニファス伯爵
「…いよいよ、本腰を入れてきたのう」

クロイツ
「はい。輸送艦には大量の兵員と武器弾薬を搭載している事からも間違いありません」

鷲井
「兵員の数が問題だな。一隻２００人でも８００人……こっちは？」

ボニファス伯爵
「わしの配下は４００人程じゃな」

ローエン中尉
「陛下の命令で来たのは僅か４０名…一個小隊です」

クロイツ
「我々の戦闘要員も２００人程です」

シリルティア
「…合計して約６４０人……兵数なら劣るぞ？」

オーガス
「先程の人数は一隻２００人の計算。一隻３００人、４００人とな

ると……まず敵いませんね」

宮里
「……なら海上戦力は？軍艦の数が揃っているなら阻止は可能だぞ」

ガルトナー校長
「うむ……実は首都防衛の為、艦艇の派遣は無理だと言ってきた」

シルヴィア
「な、なに！上層部は何をやっておるのだ！？」

ボニファス伯爵
「この派遣拒否の裏には首都に住む貴族達が陛下に意見したそうじゃ……ちなみに、その意見した貴族の中の何人かが行方を眩ましておる」

鷲井
「裏切り者か……世の中、出る時は出るもんだな」

シルヴィア
「むう…そいつら見付けたら我が剣の錆にしてやわ！」

山城
「それは陛下達の仕事だよ。僕達は今からやる事をやるだけだ」

宮里
「それはいいけどさ……使える艦艇は？」

ガルトナー校長
「まず、練習艦マイヅル…あの艦は装甲巡洋艦だから戦える」

クロイツ
「あとは…王子配下の巡洋艦二隻に駆逐艦二隻…」

泉
「……完全に不利確定ね」

岡田
「…不利以上にまともにぶつかったら即終了ですよ」

鷲井
「唯一有利なのは、航空機が使える事ぐらいか?」

山城
「…だろうな…いや!宮里、天城使えるか?」

宮里
「使え無い事は無いが……!まさか、出すつもりか?!」

山城
「仕方ないだろう。今、出せる物は出すしか無い」

宮里
「う〜む……だが、扱いに慣れてるのは生徒しかいないぞ」

山城
「…それは問題だな…」

ガルトナー校長
「…私が何とかしてみよう」

鷲井
「ガルトナー校長!?」

ガルトナー校長
「祖国の危機だ。生徒達もわかってくれるだろう」

山城
「…そうなると、余計に頼りになるのは航空機だな」

泉
「今回もヘリの出番無し?」

鷲井
「…パイロットはいるけどね」

山城
「この頃の軍艦は真上から砲弾が降ってくる事を想定していないから大丈夫だと思うが……航空機は使用方法によっては戦艦も葬れるからな」

大澤
「その意見には賛成だな。じゃあ、不足分の戦力は航空機が補うと言う事で…」

山城
「あぁ、頼むよ」

次号へ

35　嵐遂に来る（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

36　嵐を前に…

8月29日　海上上空

泉
「こちら、泉。海岸より200km海上に敵艦隊発見。情報通り、戦艦二隻、巡洋艦四隻、駆逐艦八隻、輸送艦四隻」

山城
『了解。もうそろそろ日が暮れるから早めに帰還してくれ』

泉
「了解」

流星を出して索敵にあたっていた泉が敵艦隊を発見して無線で報告。
夕暮れに近付いていた為、流星は引き上げた。

無線所

鷲井
「…来たか？」

山城
「…あぁ」

鷲井

「案外時間がかかり過ぎじゃないのか？」

山城
「輸送艦に速度を合わせてたからじゃないの」

ローエン中尉
「良いニュースがありますが、聞きますか？」

鷲井
「…水雷艇の一隻でも来るなら大歓迎ですよ」

ローエン中尉
「陛下の新設親衛隊１００名程が首都からこちらに向かっているそうです」

山城
「新設の親衛隊…不謹慎かも知れませんが、大丈夫でしょうか？」

ローエン中尉
「大丈夫ですよ。新式装備の民衆からの女性志願者で編成して部隊ですから」

山城
「……怒らせたら殺されそうだな」

鷲井
「女性の怒りと食い物の恨み程怖いものは無いならな」

山城
「それで、艦艇の方はやはり…」

ローエン中尉
「…無理の様です」

山城
「やっぱり手持ちでやるしか無いか……天城の方見てくる」

鷲井
「おう」

戦艦天城

宮里
「えーと、副砲の方は大丈夫だろう…機材の異常も無い…あとは…
…」

山城
「よう、宮里。そっちはどうだ?」

宮里
「砲術関係の機材に異常は無い……あ、実は艦長の事だが、こっち
で決めたぞ」

山城
「…どう決めたかは知らないけど、で、誰?」

宮里
「お前」

山城
「……俺!?」

宮里
「あぁ、天城を扱えるのは長門型の陸奥で操艦術を磨いたお前ぐらいしかいないんだよ」

山城
「おいおい…」

宮里
「あと、人数の関係で使えるのは前方の主砲二基と副砲四基だからな」

山城
「そうか……なら、艦を前方に向けて一斉砲撃しか無いな」

宮里
「あぁ。あとは砲員の腕次第だ」

山城
「う~ん、副砲火力は劣るが主砲火力は優るか…天城の主砲二基で引っくり返せる…かな」

宮里
「闇の中、何処からともなく飛んでくる銃弾…スナイパー程怖いものは無い」

山城

「え？」

宮里
「昔、教官から聞いたんだよ。姿を隠して撃ってくるスナイパーの存在は心理的影響を及ぼす」

山城
「だが、天城は姿を見せるぞ？」

宮里
「それは仕方ないさ。ただ、ちゃんと距離さえ守っていれば大丈夫」

山城
「…鉄砲屋の事を信じるしか無いな」

宮里
「おう…だから、お前もちゃんとしろよ。艦長」

山城
「あぁ…頑張るさ」

宮里
「あ、そうそう。生徒達は天城の士官室とかに寝泊まりさせてあるから」

山城
「うん？そうなのか？まあ、いいけど…」

宮里
「つーことで、お前は艦長室だからな」山城

「…そこまで決まってたのか」

宮里
「おう！」

山城
「…まさか変な事して無いよな？」

宮里
「大澤じゃあ無いんだから…」

山城
「そうか…明日に備えて早めに休むか…」

天城艦長室

山城
「……広いな～」

初めて入った艦長室の広さに感心しつつ、ベッドに転がる山城。
今までガンルーム（士官室）には頻繁に寝泊まりしていたが、艦長室に入るのも初めてだ。

山城
「…なんかな～」

……逆に落ち着かない。
まあ、気にしても仕方ないので、寝転びながら本（持参物）を読む。

そうこうしている内に、ふと時間が気になり腕時計を見る。

山城
「ん…２２：００（フタフタマルマル）か…もうそろそろ寝ないと…」

コンコン

山城
「ん？どうぞ～」

シルヴィア
「し、失礼するぞ」

入って来たのは両脇に枕と毛布を抱えたシルヴィア。

山城
「…シルヴィア？な、何しに来たの？」

シルヴィア
「す、済まぬ…ど、どうも、寝れぬのだ…目を瞑っても直ぐにまた開いてしまうのだ……」

山城
「…つまり、ここで寝たいの？」

シルヴィア
「……うむ…そうだ」

顔を真っ赤にしながら答えるシルヴィア。

山城
「ふふふ…いいよ、別に」

シルヴィア
「そ、そうか！ありがたい」

そう言うと持ってきた毛布と枕を床に……

山城
「お、おい！ま、まさか、床で寝るつもりか！？」

シルヴィア
「そ、そうだが？」

山城
「馬鹿！明日の事わかってるのか！？それに、女の子が床で寝るなんてなあ…」

シルヴィア
「い、いや…さすがにベッドはお主が使っておるし…」

山城
「いいよ。俺が隅っこに寄るから、ベッドに寝なよ」

シルヴィア
「な、な、な、なにを言うておる！お主と一緒になど…」

山城
「床は冷たいよ？下手したら風邪ひくかもよ？」

シルヴィア
「む、むう～～…」

山城
「…言っとくけど変な事はしないよ。それとも風邪ひく？」

シルヴィア
「変な事したら殺すからな」

山城
「はいはい」

次号へ

36　嵐を前に…（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

37　戦闘用意！！

8月30日

天城艦長室

コンコン

宮里
「おい、山城。起きろ～」

6時になり、起こしに来た宮里が艦長室のドアをノックするが……
返事無し。
仕方無くもう一度ノックしようとすると、鍵が開いた。

山城
「おはよう」

宮里
「おう、おはよう。で、寝れたか？」

今日は初陣。
山城や生徒達の事を思えば、緊張だ何だで眠れたか気になる。

山城
「ん、ベッドに入って1時間30分程寝付けなかったけど6時間は寝れた」

宮里
「そうか…さて、さっさと飯食って艦橋に行くぞ！」

山城
「先行っててくれ。上着着るから」

宮里
「わかった。直ぐ来いよ」

山城
「ふう～…」

宮里が行くのを見てため息を吐く山城。
ベッドには気持ち良さそうに眠っているシルヴィア。お互い顔を見ない様に寝た筈なのにお互い寝返りをうった様で、山城が起きた瞬間、気持ち良さそうな寝顔のシルヴィアとご対面となった。
まさか、1時間30分も眠れなかった原因の1つがシルヴィアとも知らず…。

山城
「シルヴィア、朝だよ～。起きろ～」

シルヴィア
「むう～……朝？朝なのか？」

山城
「あぁ、朝だよ」

シルヴィア

「…あ、そうか！今日は！」

山城
「そうゆう事。さあ、朝食食べに行こう」

朝食を食べてから艦橋に上がり宮里から状況を聞く。

山城
「どうだ？」

宮里
「何時でも出撃可能だ。機関の火は落としてないし、準備オッケーだ」

山城
「敵情は？」

宮里
「まだだ。今零式水観を飛ばして確認させている」

山城
「そうか…念のためだ。出撃用意！」

宮里
「了解！」

岡田

『こちら零式水観。山城先輩、聞こえますか？』

山城
「あぁ、よく聞こえる。敵情は？」

出撃用意をしている最中に、哨戒に出ていた岡田から連絡があった。

岡田
『はい。敵艦隊接近中、ラバナスターより１５０キロの海上を北上中。今から出れば待ち伏せ出来ます！』

山城
「わかった。岡田、君も直ぐ戻って烈風で出てくれ！」

岡田
『もとより承知です！では、あとで会いましょう』

山城
「あぁ、あとでな…宮里、聞いたな？」

宮里
「おう！バッチリ聞いた！早くマイヅルや王子様にも知らせようぜ」

山城
「頼む」

１０分後……

大澤
「おい、岡田！急げ！」
岡田
「は、はい！」
士官学校の格納庫前で待機していた大澤が、哨戒から帰って来た岡田を急かす。
ヴィクトリア
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」
烈風に乗り込んだ大澤に飛行服を着たヴィクトリアが駆け寄る。
大澤
「ヴィクトリア、何してる？危ないぞ！」
ヴィクトリア
「う、うるさいですわ！こんな時に私１人にする貴方が悪いんです！」
大澤
「何でそうゆう話になるんだよ？！これから戦いにいくんだぞ！それにこの戦闘機は１人乗りだ！」
ヴィクトリア
「そ、それは……貴方が私のパートナーだからですわ！」
全員
「「「「「「「「「……はあ？！」」」」」」」」」

整備兵を含めたその場にいた人間全員が驚いた。
それだけ驚く事であった。

大澤
「……そう言った事は後だ！泉！」

泉
「なに？」

大澤
「ヴィクトリアを９９式襲撃機に乗せてやれ！あれじゃあ止めても無駄だ」

泉
「わかった。ヴィクトリア、乗って！」

ヴィクトリア
「あ、はい！」

整備兵も慌て９９式襲撃機を格納庫から出す。
ちなみに、烈風にはロケット弾、９９式襲撃機には砲弾を素に改造して製作した６０ｋｇ爆弾が４発。

大澤
「おし、全機準備はいいな？」

岡田
『準備万端です！』

泉
『発進用意よし！』

大澤
「じゃあ、行くぞ！発進！」

ラバナスター付近の海岸

鷲井
「遂に来ましたね…」

ローエン
「来ましたか」

クロイツ
「いよいよですね」

デュリオ
「装甲車は準備万端ですよ」

クレマン
「兵の方もです…ですが、ここに上陸しますかね？」

クロイツ
「ここなら上陸しやすい場所ですよ」

鷲井
「ローエン中尉、例の親衛隊は？」

ローエン

「……未だの様ですね。まあ、参加できるかは微妙でしたからね」

デュリオ
「さて、迫撃砲や軽機関銃、新式小銃と装甲車でどれくらい防げますかね？」

鷲井
「……やってみないとな…」

戦艦天城

山城
「ガルトナー校長。天城は準備完了です」

宮里
「マイヅル、アルスラーン王子の巡洋艦グリフォン、ペガサス、駆逐艦ペーター、ジュピター…全艦出撃可能です」

ガルトナー校長
「そうか…海戦を指揮するのは初めてだが、出来る限りやってみよう」

山城
「はい。お願いします」

ガルトナー校長
「うむ。全艦出撃せよ！」

山城・宮里

「「はい！！」」

次号へ

37　戦闘用意！！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

38　空襲（前書き）

先週はすみませんでした！親戚の家に行っていたため、更新出来ませんでした！第七艦隊の方は特別編作成中です。
読者の皆様、本当にすみませんでした！

38　空襲

ラバナスターより１００キロの海上

大澤
「う～む…ここら辺の筈なんだが…こんな時に雲が掛かりやがって」

雲の出現に舌打ちを打ちつつ、どこかに隙間が無いか探す大澤。
適当に降下して、海や敵艦に激突は真っ平ごめんである。

大澤
「これより降下する。気よつけろ」

泉
『了解』

岡田
『はい』

そのまま3機は雲に飛び込み、下に抜ける。

泉
『見付けた。２時の方向、艦影１０以上』

大澤
「それだ！行くぞ！」

戦艦天城

シルヴィア
「山城。あの変態から連絡だ」

山城
「あはは…ありがとう」

一言多いな～…と思いつつ無線を受け取る。

山城
「こちら、山城。大澤か？」

大澤
『おう！敵艦隊を発見！これより攻撃する！以上』

山城
「了解！武運を祈る！」

直ぐに無線を戻すと、ガルトナー校長に報告する。

山城
「ガルトナー校長！大澤達が敵艦隊を発見！攻撃を開始しました！」

ガルトナー校長
「そうか…やはり先陣は航空機か」

山城
「仕方有りません。航空機の方が機動力があります。それにマイヅ

ルやアルスラーン王子の艦艇と歩調を合わせなければなりませんので」

ガルトナー校長
「彼らに任すしかないな。我々も出来る限り急いでくれ」

山城
「はい」

ネイラーン共和国艦隊

「お、おい！なんだ、あれは?!」

1人の水兵が気付き叫んだ。
それは今まで見たことが無い物だった。
簡単に言うなら鉄の鳥…と言ったところだろう。
そんな物が自分達に向かって来る。
そして……

シュバババババン！

ドガガガガガガガガン！

その鉄の鳥から放たれた物体…いきなりの爆発…水兵達が振り向くと、艦橋が潰されている。

「なにをしている！敵だ！早く撃て！」

士官の叫びに呆然としていた水兵達が主砲に飛び付く。
だが、鉄の鳥はもういない。
しかし、反対側を見ると僚艦も攻撃を受けている。
近くの左舷の主砲が鉄の鳥を狙うが、速くて狙えない。
誰かが小銃を持ち出してブッ放すが効果も無い。
そうこうしている内に鉄の鳥は何処かに消えてしまった。
しかし、自然と水兵達は不安になっていった。

戦艦天城

シルヴィア
「『我攻撃に成功せり。巡洋艦二隻、戦艦一隻が小破』」

山城
「う～ん、まずまずか…」

２５０ｋｇ爆弾や航空魚雷があれば撃沈出来るかもしれないが、ロケット弾や６０ｋｇ爆弾なら限定される。

宮里
「主砲やら何やらを壊してくれてたら助かるんだがな…」

山城
「まあ、反復攻撃する予定だから、期待はして良いけど……」

宮里

「そうか…会敵予定は？」

山城
「あと1時間ちょい」

グローリアス士官学校

岡田
「ロケット弾の補充を急いでください！」

泉
「99式の爆弾も急いで！」

整備兵が慌ててロケット弾や爆弾を装着する。

大澤
「……飲むか？」

ヴィクトリア
「……ええ」

待ち時間で休憩をとっていたヴィクトリアに大澤が飲み物を勧める。

大澤
「……出撃前のパートナーがどうとかってのはなんだ？」

ヴィクトリア
「つ！！」

……どうやら、痛いところを突かれたらしい。

ヴィクトリア
「そ、それは……」

大澤
「それは？」

ヴィクトリア
「それは……」

大澤
「それは…なんだ？」

ヴィクトリア
「それは……」

……意地悪している訳ではないが、中々言おうとしないヴィクトリア。

大澤
「…だあ～！終いには怒るぞ！」

ヴィクトリア
「あ、あれは……その……ひ、密かに付き合って欲しいって事で……」

大澤

「…はぁ?!いつも俺の事、胸揉み男とか変態とか言ってるのは誰だ?!」

ヴィクトリア
「……私ですわ」

大澤
「はぁ〜〜……」

頭を抱え込む大澤。
なしてこうなる?

岡田
「先輩!準備終わりましたよ!」

大澤
「あぁ、わかった!少し待て!」

そう言うとヴィクトリアに向き直る。

大澤
「その事は後でゆっくり話そう。今はやる事をやるだけだ」

ヴィクトリア
「……え?」

大澤
「お前が乗らないと行けないんだよ!」

そのままそそくさと烈風に向かう。

その後を追うかの様にヴィクトリアも９９式に向かう。

次号へ

38　空襲（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

39　撃ち方始め！

戦艦天城艦橋

水兵
「敵艦隊はっけーん！」

艦橋に備え付けてある高倍率の双眼鏡を見ていた水兵が叫ぶ。

山城
「予想通りですね」

ガルトナー校長
「うむ。では、こちらも始めよう」

山城
「は、砲戦用意！」

シルヴィア
「了解！砲戦用意！」

ガルトナー校長
「しかし、大丈夫なのかね？前部の４門しか主砲は使えないと聞いたが？」

山城
「大丈夫です。元居た世界で同じクラスの戦艦で前部４門射撃をやっていましたので、手順さえちゃんと踏んでいれば上手くいきます」

ガルトナー校長
「そうか……君達が頼りだ。しっかり頼むよ」

山城
「はい」

宮里
「そういえば…実戦想定で測距儀を覗くの久し振りだな…」

測距儀を覗きながら宮里が呟く。
士官学校のシミュレーション・システムはゲーム感覚でありながらも案外リアルであった。
しかし、教官曰く『実物を触り、現場を経験しろ』との事。
まあ、第七艦隊の元長官で、『第一期生の四元帥』の1人である福本大介元帥も『いくら訓練で出来ても、実戦で出来なければ意味は無い。なおかつ、現場では何が起こるか解らない』と言ってもいるし…。

生徒
「宮里教官！砲戦用意出来ました！」

宮里
「よーし！一発いくぞ！撃てぇぇぇ！！」

カチッ

ズガーン！ズガーン！

ネイラーン共和国艦艇

チカッ！チカッ！

ヒューーウ……

水兵1
「お、おい、あの光は…」

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

水兵2
「う、うわ～！！」

水兵3
「な、なんだ～！！」

士官
「慌てるな～！落ち着け～！」

いきなりの砲撃に驚く水兵達、掌握しようと叫ぶ士官。

士官
「くそ！砲撃は何処からだ？！」

水兵1
「あ、あそこです！」

水兵が指差す方を見た士官は……

士官
「ば、馬鹿な…あんな長距離からだと?!」

山城
「う～ん、やっぱり初弾だから乱れてるな…仕方ないけど…」

ガルトナー校長
「うむ…次の射撃には何分掛かるかね?」

山城
「約1分です。宮里の話だと標準調整に時間が掛かりますので…」

ガルトナー校長
「そうか…仕方ないな」

山城
「えぇ、ですがいきなりの長距離砲撃に敵も驚いていますよ」

ガルトナー校長
「それが今我々にある数少ない有利だからね」

山城
「はい」

宮里
「ちぃ、あと数射しないと当たらないか…」

測距儀覗きながら呟く。これが日本海軍なら士官候補生でも、もうちょいマシな結果が出せるのだが……。

宮里
「…嘆いても無駄だな。次弾の装填は完了したか?」

生徒
「は、はい!完了しています!」

宮里
「よし!もう一丁!」

ヒューーウ……

ザバーン!ザバーン!ザバーン!ザバーン!

水兵1
「う、うわ~!」

水兵2
「ひ~~!」

士官

「落ち着け！落ち着くんだ！」

ネイラーン共和国戦艦ハリアーの艦上でも一方的に撃たれる中、必死に士官が水兵を掌握しようとしていた。

「これで何射目だ？」

砲術長
「は、三射目です」

「精度は悪いが……威力は大きいな」

砲術長と話しているのは戦艦ハリアーの艦長、ヒルデン大佐。

砲術長
「この底から響く衝撃は…３６…４０ｃｍ砲ですな」

ヒルデン大佐
「うむ……」

その時……

「か、艦長！何をやっている！早く反撃しろ！」

ヒルデン大佐
「統制士官殿。残念ながら敵は射程外から砲撃しています」

統制士官
「なら！早く…」

ヒューウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

統制士官
「うわ！！」

ガン！

ズル…ズル…バタッ！

ヒルデン大佐
「……統制士官殿を適当に放り込んでおけ」

士官
「はい」

着弾の衝撃で艦が揺れバランスを崩した統制士官が艦橋の壁に頭をぶつけ、そのまま気絶する。

ヒルデン大佐
「まったく…いくら我々を信用出来ないからといってあんな統制士官など送り込むとは…」

ハリアーなど、元からクーデター派では無い人間の多い艦は統制士官と称した人間が乗り込んでいる。
もちろん、乗組員達からは嫌われているが…。

ヒルデン大佐
「さて……どうしたものか…」

シルヴィア
「山城、あの変態からまた連絡だ」

山城
「いや、一言多いよ…」

そう言いつつも、無線を受け取る山城。

山城
「こちら、山城。大澤か？」

大澤
『おう。本日3回目の攻撃だ。そっちこそ、もうそろそろ『あの作戦』の時間じゃないのか？』

山城
「あぁ、手筈通り。よく見といてくれよ」

大澤
『了解』

シルヴィア
「はあ…最近、ヴィクトリアの様子がおかしいのだが…なにか知っているか？」

山城
「いや、知らない……つーか、なんでそんな話になるわけ？」

シルヴィア
「…なんとなく」

山城
「なんとなく…ねぇ…さてと、王子様は打ち終わったかな？」

次号へ

39　撃ち方始め！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

40　離反

戦艦ハリアー艦橋

通信兵
「か、艦長！」

ヒルデン大佐
「どうした！？」

通信兵
「は！敵より我々に対して打電がありました！」

ヒルデン大佐
「なに…貸せ！」

通信兵から打電文を引ったくるとサッと読む。

ヒルデン大佐
「……なんと言う事だ！」

戦艦天城

通信兵
「アルスラーン王子、打電完了しました」

山城

「さて、これで敵はグッと減るな」

シルヴィア
「既に打ち合わせていたのだな。あえてアルスラーン王子の打電は」

山城
「あぁ、敵全員が共和国派じゃない。大部分は強制された人間だ」

ガルトナー校長
「うむ、なるほど。君が余り敵戦力を気にしなかったのはその自信があったからだね」

山城
「はい、天城一隻で勝とうとなると敵内部の脆さを利用する方が適切ですので」

シルヴィア
「ほ～う、そうなのか」

山城
「古来、少数でも結束が固い軍は簡単には負けず、大軍でも結束が無い軍は烏合の衆さ」

ガルトナー校長
「つまり、近代の軍は結束が必要…と言う事か」

山城
「その通りです。ですから我々は学校において歴史を学び、愛国心を持ちます」

ガルトナー校長
「…やはり、君達の知識は我々に必要だな」

ネイラーン共和国艦艇ではアルスラーン王子からの電文を受け取り混乱していた。
生きていたのかと驚く者、喜ぶ者、そして、そんな筈は無いと騒ぐ者……

統制士官
「こ、こんな電文は嘘だ！」

ヒルデン大佐
「『自らの利権のみを追求し、国の根幹たる民を疎かにする者が起こしたクーデターなど国を幸福には出来ない。事実、私を恐れ対外戦争を挑んでいるではないか！心ある者は我の下に集え！　ネイラーン王国王子アルスラーン』……これを嘘と言うなら証拠をお見せ頂きたい」

統制士官
「グッ……」

ヒルデン大佐
「本艦は共和国を離脱し、王子の下へ参る。面舵一杯！」

統制士官
「な！」

ガン！

慌て腰のピストルを抜こうとしたが、後ろからレンチを持った水平に強打されて再び気絶。

ヒルデン大佐
「僚艦に打電。『我これより王子の下に参る。続く者は我に続け』」

通信兵
「は！」

シルヴィア
「ん……お！見ろ！何隻か離れていくぞ！」

山城
「……本当だ。王子の打電は成功だ」

宮里
『おい、山城。どうする？』

山城
「…もうちょっと様子を見る。ただし、砲撃態勢で」

宮里
『了解』

ネイラーン共和国艦隊旗艦戦艦ソミュール

士官１
「戦艦ハリアーからです！『我これより王子の下に参る』！」

士官２
「巡洋艦より打電！」

士官３
「駆逐隊より、『我ハリアーと共に離脱する』！」

指揮官
「ち、王子が生きてると知った途端に元気付きやがって」

ガチガチのクーデター派の指揮官が苦そうに呟く。

士官１
「指揮官！駆逐艦は全艦、戦艦・巡洋艦は半数が離脱！」

指揮官
「……構わん！我々に従わねばどうなるか奴等に教えてやれ！」

士官１
「はい！」

戦艦ハリアー

航海長

「やはり、不満を持つ人間は大勢いますね」

ヒルデン大佐
「あぁ、いきなりクーデターを起こされて巻き込まれた訳だからな」

航海長
「我々は元鞘に収まった方が良いですね」

士官
「か、艦長！ソミュールの砲がこちらに！」

ヒルデン大佐
「く…駆逐隊は退避！砲術長、砲戦用意！」

宮里
『ほうほう…駆逐艦は全部、戦艦と巡洋艦は半分が離脱するか』

山城
「あぁ、これで敵は戦艦一隻と巡洋艦二隻になった訳だ」

宮里
『そうだな…！しまった！敵戦艦が離脱する艦艇に砲身を向けてるぞ！』

山城
「なに！くそ！シルヴィア！上の大澤達に連絡！攻撃再開！宮里！」

シルヴィア

「わかった！」

宮里
『わかってる！任せろ！』

山城
「ガルトナー校長！緊急により、マイヅル以下艦艇を切り離し速度を上げます！」

ガルトナー校長
「うむ、君達に任そう」

山城
「はい！機関長！機関最大！速度３０ノットに上げ！」

機関長
『了解！』

シルヴィア
『あ～、変態。聞こえておるか？』

大澤
「…変態じゃない！それでなんだ？」

シルヴィア
『敵残存艦が離脱する艦艇を砲撃する模様！攻撃再開！』

大澤

「了解！岡田！泉！いくぞ！」

岡田
『了解！』

泉
『オッケー！』

次号へ

４０　離反（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

41　海戦勝利！だけど……

ネイラーン共和国戦艦ソミュール

士官
「主砲！発砲急げ！」

３０ｃｍ連装砲二基が離反艦に向け砲身を向ける。
だが……

ギュイーーン！

水兵１
「う、うわー！」

水兵２
「て、鉄の鳥がまた来やがった！」

甲板に出ていた水兵達が慌て艦内に逃げる。
しかし、大澤達の狙いは別だ。

パシューウ！パシューウ！

ズガーン！ズガーン！

艦長
「ひ、被害報告！」

砲術員

『こちら、二番砲塔！着弾の衝撃で負傷者！』

砲術員
『こちら一番砲塔！砲身に被弾！亀裂発生…発射不能！』

艦長
「急いで二番砲塔に補充員を……」

キャーーン！

ヒューウ…ヒューウ…ヒューウ…ヒューウ……

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

砲術員
『こちら二番砲塔…先程の攻撃で旋回機故障…砲塔の旋回不能』

艦長
「な…」

僅か数分間の攻撃で二基の主砲塔が使えなくなるとは艦長の予想外であった。
しかも……

士官
「か、艦長！司令官！て、敵艦接近！」

司令官
「な、なに！？」

慌て双眼鏡で接近する敵艦を見る。
だが、２人が見た物は自分達の予想を越えた物だった。

司令官
「…バカな…あれ程デカイのに…なんて速さだ！」

戦艦天城

水兵
「機関全速！３０ノット！」

この報告を聞いた瞬間、シルヴィアやガルトナー校長だけでなく、
周りの生徒や水兵も驚く。
しかし、山城は普通の顔。

シルヴィア
「は、速すぎではないか？」

山城
「そうか？まあ、この頃の戦艦はやっとこさ、１９ノットだからね」

やはり１１ノットの速度差はあっという間に敵との距離を詰める。

山城
「宮里、３０ノットだが、大丈夫か？」

宮里
『大丈夫、大丈夫。揺れぐらいは調整するよ…つーか撃つのか？』

山城
「……どうだろうな」

シルヴィア
「…なぜか無計画になっていないか？」

山城
「…気のせいだ」

こんな会話をする間に敵との距離が１００００ｍまで詰まる。

山城
「宮里！主砲、敵旗艦！」

宮里
「成る程！了解！」

ウィーン…ガコン！

主砲が敵旗艦に狙いを定める。

司令官・艦長
「「う、うわ～～！！」」

敵の主砲がこちら向いた瞬間、２人共、周りを気にせず叫び声を上げた。

まあ、４０ｃｍ砲からしてみれば１００００ｍなんて至近距離であり、装甲や砲弾の材質が違うのだから、まず主要装甲部は貫通できる。

士官
「て、て、敵艦より信号！」

司令官
「な、な、内容は！」

士官
「『降伏せよ。さすれば発砲せず。』…これの繰り返しです…」

これを蹴ればどうなるか……それは解りきった事だ。

司令官
「…機関停止……白旗を上げろ…」

司令官はヘナヘナとその場にへたれ込んだ。

旗艦ソミュールの白旗を見た共和国側残存の装甲巡洋艦と巡洋艦も続けて白旗を上げた。

山城
「敵艦隊は全艦離脱及び降伏しました……我々の勝利です！！」

この勝利宣言と言っていい山城の言葉に、艦橋に居た全員が歓声を上げて喜ぶ。

だが……

シルヴィア
「……！た、大変だ！」

山城
「ど、どうした！？」

シルヴィア
「泉から連絡だ！輸送船の一隻が上陸予想地点に向かっていると！」

ガルトナー校長
「ふむ…やはり、先走る輩はいたか…」

山城
「今から大澤達に補給をしても……くそ、ダメか、時間が無い！」
軽く計算しても、補給を終えて阻止爆撃する事は出来ない。

シルヴィア
「なら…あとは…」

山城
「迎撃部隊……ローエン少尉達に任せるしかないな…」

次号へ

41　海戦勝利！だけど……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

42　陸上戦

ラバナスター近くの海岸

ローエン中尉
「やはり…来ましたか」

彼の双眼鏡には今まさに上陸しようとするネイラーン共和国軍兵の姿が見える。

鷲井
「やっぱりテケの出番か」

クレマン
「仕方ないですよ。これは盾であり矛でもありますから」

鷲井
「まあ…そうなんだけどな」

確かに、真正面から撃たれて弾き返せる装甲車は盾であり矛である。

デュリオ
「教官。もうそろそろです」

９９式小銃の槓桿を操作して初弾を装填するデュリオ。

鷲井
「よし、クレマン。いくぞ」

クレマン
「了解」

ローエン中尉
「こちらも、迎撃用意！」

９９式歩兵小銃と９９式軽機関銃、それと迫撃砲を持つローエン中尉率いる小隊は手慣れた様子で配置に就く。

ローエン中尉
「まだまだ…まだまだ…」

自らも９９式歩兵小銃を構えて敵を引き付ける。
敵は４０人乗りボート六隻に重火器（大砲）を載せたのが四隻。
しかし、まだまだ敵はいそうだ。
ならば、敵は出来るだけ引き付けて海岸で叩いた方が効率が良い。

ザア！

まず、敵の第一陣が上陸する。
しかし、まだ撃たない。
そして、同数程度の後続第二陣が上陸した瞬間……

ローエン中尉
「今だ！撃て！！」

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！
ダン！ダン！

ダダダダダダダダ！
ダダダダダダダダ！

ポン！ポン！

ドガーン！ドガーン！

吠える９９式歩兵小銃・軽機関銃。
迫撃砲が放たれ、敵兵を吹き飛ばす。

慌てたのはネイラーン共和国軍。

指揮官
「撃て！撃ち返せ！」

必死に反撃命令を出すが、切れ目の無い…そんな事は無いが…銃撃に次々に殺られていく。
基本的にマスケット銃は装填から次弾発射に時間が掛かる。
対し、９９式歩兵小銃は槓桿式小銃であり、オートマチックよりは遅いが、五連発の薬莢式である。
１分間に２～４発しか撃てないマスケット銃に対し、９９式小銃は３８式歩兵小銃の拡大改良版であり、命中精度は良い。
これに、９９式軽機関銃が加わればマスケット銃には遅れはとらない。
なおかつ……

鷲井
「いっけー！」

ズドン！

ドワーン！

テケとゆう絶対有利な材料がある。

ダダダダダダダダ！

機関銃を乱射しつつ突っ込むテケにネイラーン軍兵の隊列を乱す。

しかし……

ローエン中尉

「く、やはり、多勢に無勢ですね」

４０人の小隊で４８０人の人間を撃退するのは一苦労である。

しかも……

下士官

「中尉！輸送船より敵増援！」

いったい輸送船に何人乗っているのか聞きたくなるものだ。

しかし、敵増援があれば味方の増援もある。

下士官

「中尉！来ました！烈風と襲撃機です！」

グッドタイミングで飛来した烈風と９９式襲撃機。

翼のロケット弾を敵中に叩き込む。

装甲車＋新式装備＋航空機と……これだけで不利中の不利であるが、

更に……

デュリオ
「ローエン中尉！援軍です！陛下の親衛隊が到着しました！」

女性兵
「ユリア隊長！あれを！」

陛下の命を受け、ラバナスターに急行して来た親衛隊。
部下の兵士の声に、隊長のユリアは命令を出す。

ユリア
「総員！射撃体勢で進撃！」

そう言うと、初弾を装填し、海岸に向かう。

ローエン中尉
「ま、まさか…」

ローエン中尉は親衛隊が見えた瞬間、ある事を察した。
全員が馬に乗り、なおかつ銃を構えているとゆうことは……

ダダダダダダダン！

揺れる馬上で一斉銃撃。
しかも、数秒後には再び一斉銃撃。
つまり、同じ銃を使っているとゆう事だ。

ローエン中尉
「まったく…どうなってるんだ?」

装甲車と航空機、それに新式装備の部隊と援軍の前に、ネイラーン軍兵も敵わぬとみて降伏した。
ちなみに、輸送船も駆け付けたマイヅルを見て降伏した。

次号へ

42　陸上戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

４３　一週間が経ちまして……

９月６日

前回の戦闘……ラバナスター沖海戦と命名……から一週間。
アルスラーン王子はボニファス伯爵の館から首都のユニオンに移り、本国奪還へと本格始動しはじめた。
そんな時に、アーネリア姫より首都への参上を要請された。
まあ、要請なのは山城達の微妙な状況を配慮してだろうが、要請されたからには行くしか無い。
そこで、久し振りに４０式輸送ヘリを動かす事にした。１２人まで乗れるヘリなら早く首都に着けるからだ。

バタバタバタバタ……

山城
「泉～、あとどれぐらいで着く～？」

泉
「そうね……あと２０分ぐらいかな」

山城
「そっか、サンキュ～」

飛んでいる間は暇だ。
だから、山城のＰＳＰで交代しながら遊んでいる訳だが……

大澤
「違うって！そこは頭を狙うんだよ！」

宮里
「ばか、そんな方法より、戦車で乗り込んで、守備についてる突撃兵を撥ね飛ばすんだよ！」

岡田
「いえ、狙撃兵で殺ってから、拠点を制圧すればいいんです！」

……占領方法をめぐって言い争っている。

シルヴィア
「…えぇぇい！五月蠅い！私の勝手にさせろ～！」

やっているシルヴィア、ついにキレた。
こんなふうに騒いでいる内に……

泉
「はい、到着。降りるよ」

事前連絡で打ち合わせた通りに王城の一角に着陸する。

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン……

ローエン
「どうも、皆さん。お待ちしておりました」

山城
「お迎えはローエン中尉ですか」

ローエン
「えぇ、陛下がお待ちです。こちらへ」

山城達とシルヴィア・クレマン・デュリオ・ヴィクトリアはローエン中尉の案内でアーネリア姫の部屋へ向かう。

コンコン

ローエン
「陛下、皆さんが来られました」

アーネリア
「どうぞ」

山城
「失礼いたします」

山城達が入ると、部屋にはアーネリア姫とアルスラーン王子が居た。

アーネリア
「山城さんにシルヴィアさん、そして、皆さん。この度は誠にありがとうございました」

大澤

「いえいえ、美女の為なら、例え火の…」

鷲井
「…お前は黙ってろ」

ゴン！

大澤
「痛～～～～～」

山城
「いえ、色々とお世話になりましたので」

シルヴィア
「ぐ、軍人として、当然の事をしたまでです！」

落ち着いている山城と、緊張するシルヴィア。
まあ、前とは状況が違うから仕方ないが。

アルスラーン
「皆さんをお呼びしたのは他でもありません。アーネリアに相談されたのですが、あなた方に勲章の授与をしたいと、アーネリアは考えているのですが？」

これにシルヴィア達は驚くが、山城達は困惑する。

山城
「…陛下、お心遣いは嬉しいのですが、私達は辞退させていただきます」

シルヴィア
「お、お、お主！な、何を言っておるのだ！」

アーネリア
「…何故ですか？」

宮里
「陛下、我々は異世界の軍人です。本国の許可無く、勲章授与は認められません。今、帰れるかは解りませんが、勝手に授与する訳にはまいりません」

鷲井
「ただ、シルヴィア達は今回活躍したので、どうぞ、勲章を授与して下さい」

アーネリア
「……そうですか、残念ですが事情が事情なだけに仕方ありませんね」

アルスラーン
「だけど、何のお礼もしないのは、人としてはどうかな？」

こう言われると、山城達は顔を見合わす。
何せ、何も副案を考えていなかったからだ。

鷲井
「え～と、アルスラーン王子に質問があります」

アルスラーン
「何ですか？」

鷲井
「本国奪還の方は何時開始になりますか？」

アルスラーン
「現在、２ヶ月後に実施予定ですが？」

山城
「…なるほど、なら、技術部と軍事部とできるだけ接触出来る様にしてくれませんか」

アーネリア
「それぐらいなら、お安い御用です。他には？」

山城
「今のところはそれだけです。では、お願いします」

次号へ

43　一週間が経ちまして……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

４４　帰る理由

９月７日

士官学校に戻って来た山城達は何時もの様に、教鞭をとり、操縦桿を握り、パソコンと睨み合っていた。
とにかく……何時も通りだった。
しかし、生徒達の間でもネイラーン王国奪還については噂されており、上層部も生徒達の投入を検討しているそうだ。
まあ、これが海軍だからまだマシだが…。

山城
「はあ～～……」

頭を抱え、悩む山城。
勲章にしろ、戦闘にしろ、現状報告にしろ、一度元の世界に帰らない事には話は進まない。
しかし、いくらこっちが望んでも、次元の穴みたいなものが見付からない限り、帰ることは出来ない。
鷲井曰く、『専門家がいれば多少違うが、今は無理』……とのこと。
まあ、そんな物を見付けるにはそれなりの人員と機材がいるだろうが…。

山城
「どうすりゃいいんだよ……」

生徒

「教官？宮里教官？」

宮里
「ん…あぁ、すまんすまん」

戦艦天城の副砲で、射撃訓練をしている宮里と生徒達。
ついつい、ボーとして指示を忘れていた様だ。
指示を出すと、考え込む。

宮里
「果たして…このままでいいのか？」

今さらながら、こんな事を言うのは場違いだが、ここまで深く関わってしまうと、今更ながら引ける訳が無い。
しかし……このままではどうも組織の壁が出てくる。そこら辺がすっきりしないと、こちらも動きづらくなる。

宮里
「はあ…一度戻らないとな…」

鷲井
「はあ～…」

溜め息を吐きながら愛用のノートパソコンから目を離す。
技術部と戦闘部……関わる事が余り無い筈の山城と会ったのは、一士生（一年生）の時に戦史の講義で席が隣同士だったのが、きっかけだ。
通常、戦闘部とは接触が少ない技術部であるが戦史などで接触があ

る。
特に、近現代では戦闘部・技術部共に大きな変化があり、否応なしに接触がある。
そんな中で、案外気が合い……その結果がこんな非日常的な事態に巻き込まれてしまった。
しかし、自由気ままに開発や研究も出来るから、別段悪くも無い。

鷲井
「だがな…現状下だと、個人や技術陣で出来るのは限界があるからな…」

何せ、日露戦争でもウルトラC級戦術でロシアのコサック騎兵を撃退したのと同様に、逆転の発想やコロンブスの卵的な発想が技術開発に関係してくる。
それに、材料や製造において必要な技術が足りない部分がある。
例えば砲弾1つとっても、火薬や信管は日露戦争の日本レベルは置いとくにしても、世界レベルに少し劣る。
もっとも遅れているのが陸戦兵器で、日露戦争ならば艦艇でも装備されていた機関銃が開発すらされていない。
この時点で陸戦兵器と海戦兵器のギャップがありすぎる。
それに、銃弾もやっと薬莢式に変わったばかりだ。

鷲井
「う〜〜ん……やっぱり一回帰る必要があるよな…」

岡田
「部品が？」

整備兵
「えぇ、８日前の戦闘でかなり磨り減りましたからね」

泉
「じゃあ、交換部品が必要か…困ったわね」

飛行機さえ開発されて無い世界に、烈風や９９式襲撃機の交換部品なんてある筈がない。

大澤
「なら、飛行は自粛だな。さて、ナンパで…」

ジローー……

泉・岡田だけで無く、整備兵達も無言で睨む。

大澤
「……すみません」

泉
「さて、そうなるとやっぱり元の世界に一度戻らないとね」

岡田
「…戻れるんですかね？」

泉
「…それを言ったらおしまいよ」

いくらこちらの暮らしに慣れたとはいえ、誰だって日本に帰りたいのだ。

泉
「はあ……どうやって帰ったものかしらね」
これが解決しないと……前にも進め無いのだ……。

次号へ

４４　帰る理由（後書き）

明日は『異世界日本近代史～第七独立機動艦隊奮戦記～』の特別編を更新予定！お楽しみに！
ご意見ご感想をお待ちしております。

45　突然ですが……帰れました

9月9日

それは偶然だった。
ガルトナー校長から、久々にゆっくりしてはどうかと2日間の休みをもらい、一悶着の結果、首都のユニオンに行く事に決定した。
ただ、いつものメンバー…シルヴィア・クレマン・デュリオ・ヴィクトリア…の内、クレマンとデュリオは日頃貯めている宿題をやるため、ヴィクトリアは用事がある、と言って行けなくなり、付いて来たのはシルヴィアだけだった。
ここまでは何とも無い偶然の重なりだった。
その後の事を思えば……偶然か？疑いたくなるが……

バタバタバタバタ……

山城
「ある意味贅沢だよな…ヘリで目的地に行くのも」

鷲井
「まあ、確かにな」

泉とシルヴィアは操縦席と副操縦席に座り、男性陣は後部の輸送スペースに陣取る。

大澤

「いや～、まさかこんなに早くユニオンに行けるとはな～」

宮里
「どうせ続きは、『ナンパが出来る～』だろ？」

大澤
「あぁ！この野郎！セリフをとるな！」

宮里
「やっぱり…」

山城
「お前なあ…その内全女性から嫌われるぞ」

鷲井
「いや…既に3分の1がそうなってる」

実際、あのスキンシップのせいで士官学校の女性生徒から嫌われている。
1人を除いては……

岡田
「…あの…先輩？」

山城
「なんだ、岡田？」

岡田
「…僕ら…雲か霧に突っ込んでません？」

山城・鷲井・宮里・大澤
「「「「…え?!」」」」

慌て近くの窓から外を見ると……確かに真っ白。

大澤
「おい、泉!どうなって…」

泉
「操縦が…ヘリが言うこと聞かないの!」

山城
「な、な、なんだと!!」

大澤
「嫌だー!異世界に飛ばされた上に、こんな所で死にたくなーい!!」

泉
「なら、あんたが操縦しなさいよ!」

ガタ…ガタガタガタ!

岡田
「き、機体が…ゆ、揺れすぎです!」

鷲井
「いくらなんでもおかし過ぎだ……まさか!」

山城

「お、おい！鷲井、どう言う…」

その時、いきなりヘリを掴まれ揺すられたかの様な揺れに襲われた。
そして、次の瞬間、全員が衝撃波に襲われ、気絶してしまった。

山城
「…う～…ここは…」

一番最初に気が付いた山城が、未だガンガンする頭を堪えフラフラと立ち上がる。
そこは変わりの無いヘリの輸送スペース。

山城
「…そうだ…シルヴィア…泉…無事か？」

シルヴィア
「…それはこっちのセリフだ」

山城
「…なんだ？静かだと思ったら寝てたのか？」

シルヴィア
「あの地震の様な揺れに起こされて…今度は気絶だ」

山城
「そうか…泉？」

泉
「う…うん…大丈夫…なんとか」

まあ…大丈夫でなければ今頃お陀仏だ。

山城
「鷲井…宮里…岡田…無事か？」

鷲井
「あぁ…大丈夫」

宮里
「頭痛を覗けば無事だ」

岡田
「…同じく」

大澤
「…なんで俺は訊かないんだよ！」

山城
「お前の生命力はゴキブリ並みだからだよ」

揺らされたぐらいで死ぬわけが無い。

シルヴィア
「ところで、さっきから赤いボタンが点滅しているが、何のボタンだ？」

泉

「え？あ！本当ね。これは…無線のボタン？」

余り使わなかった無線の受信ボタン…今は切っているから赤く点滅している。

泉
「…どうする？」

山城
「いや、つけるべきだろう」

どちらにしろ、何が起きたのか解らないのだからつけるべきだろう。

シルヴィア
「じゃあ、つけるぞ」

ポチ

『ザー……』

泉
「あ～…周波数調整しないと」

つまみを回して周波数を調整する。

『…す……こちら神戸軍用飛行場管制塔…所属不明機に告ぐ…今すぐ応答せよ…さもなくば撃墜する…繰り返す……』

全員
「「「「「「「「「……」」」」」」」」」

一瞬にして全員が黙る。

宮里
「…いきなり撃墜は無いだろう」

鷲井
「とにかくさ…応答したら…撃墜されるのも嫌だし」

泉
「そ、そうね」

そう言うと、無線を取る。

泉
「こちら、神戸士官学校所属４０式輸送ヘリ、機体コードＧＯ３８４９」

『…誰だ？軍用無線を使って悪戯をしてるのは？そのコードの機は行方不明だぞ！』

泉
「誰がすんのよ！正真正銘のＧＯ３８４９よ！今すぐ前言撤回しなさい、この頭でっかち！」

シルヴィア

「……」

山城
「泉…どうどう」

これ以上言わせたら無線で痴話喧嘩になってしまう。しかし、向こうは向こうでざわざわ騒ぎ出した。

『あの、まさか泉三士生ですか?』

山城
「!泉、代わってくれ!」

泉
「え、えぇ」

突然の事に戸惑いながらも無線を渡す。

山城
「おい、その声は福本か?福本勇気一士生か!?」

『…山城先輩!?山城先輩ですか!まさか、泉先輩のヘリに!?』

山城
「あぁ…とにかく着陸させてくれ…燃料心配だし」

『あ、わかりました。2分以内になんとかします』

一時間後……

神戸士官学校の一室

着陸した山城達は別々の部屋に入れられた。

コンコン

山城
「どうぞ」

「失礼します」

山城
「まったく…お前が聴取役か？福本勇気一士生」

「やめて下さいよ。教官達のほとんどがあっちこっち行ってて、信頼がある人間は自分しかいないと丸め込まれまして」

山城
「…有名人も大変だな……大日本帝国海軍神戸士官学校第一期卒業生福本大介元帥の孫の福本勇気一士生」

福本（勇）
「皮肉ですか？山城先輩」

山城
「いや…ただ、俺の話を信じるかどうかは別だろう?」

福本（勇）
「時間は有りますし、ゆっくりお話し下さい。信じるかはゆっくり決めさせてもらいます」

次号へ

４５　突然ですが……帰れました（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

４６　実家にＧＯ！（前書き）

登場人物

福本勇気（ふくもとゆうき）　年齢　１６歳　一般将校科二士生（二年生）

『異世界日本近代史～第七艦隊奮戦記～』の福本大介元帥の孫で、神戸海軍士官学校の生徒であり、山城の後輩。
祖父福本元帥の事もあり、士官学校の教官達からの信頼も厚く、山城同様軍刀持ち。

46　実家にGO！

一時間後……

福本（勇）
「なるほど……そんな事が…」

山城
「信じるか信じないかは任せる…ただ、俺は大丈夫だからな」

福本（勇）
「いえ、信じます。それに先輩達と一緒にいた…え～と…」

山城
「…シルヴィアだ」

福本（勇）
「そうそう、シルヴィアさん。彼女の服装や何やらが説明出来ませんから」

山城
「はあ…お前は単純だな」

福本（勇）
「ですが、真っ向から信じられ無いよりはいいでしょう？」

山城
「まあな」

コンコン

福本（勇）
「どうぞ」

「失礼します」

入って来たのは士官学校の女性生徒。
しかし、その生徒は福本同様襟章は二士生（一士生と呼んでいるのは呼び慣れているから）だが、山城の記憶の中にこんな生徒いたか？と疑問符が付く。

福本（勇）
「紹介しておきます。今年の春に二士生として編入されました、セルベリアです」

「ご紹介に上がりました。セルベリアです。以後、よろしくお願いします！」

山城
「あ、あぁ、よろしく」

…どこかシルヴィアに似ていると思うのは気のせいか？

セルベリア
「ユウキ、先輩方のお連れさんの健康診断だけど、至極健康、異常も何も無し。完璧な健康体だって」

福本（勇）
「そっか、じゃあお連れさんを連れて来てくれないかな」

セルベリア
「わかった」

そう言うと、セルベリアは出て行った。

山城
「…サーベル持ちで、貴族みたいな足取り……どっかの王族のお転婆娘か？」

福本（勇）
「…まあ、似た様なもんです…よくわかりましたね？」

山城
「つい数時間前まで同じ様な歩き方する世界にいたからな」

福本（勇）
「あはは、そうでしたね。そう言えば、今夜の宿についてですが…」

山城
「ん、あ、そうか。部屋片付けたから無いんだよな」

福本（勇）
「えぇ、鷲井先輩達はどうにかなるんですが、山城先輩とシルヴィアさんは先輩の自宅に…」

山城

「……マジ？」

福本（勇）
「はい、マジです」

山城
「……大丈夫なのか？」

福本（勇）
「まあ…大丈夫かと…」

山城
「…おいおい」

二時間後……

市電や電車を乗り換えて、やって来ましたのは山城の実家。

シルヴィア
「おぉ、これがお主の家か！」

山城
「いや…そんなに驚く事でもないんだけど…」

普通の一般家庭の家をこんなに驚く人間もいないだろう。
まあ、市電や電車で興奮する人間もあまりいないだろうが……。

シルヴィア

「いや、お主も見たであろう。我が民の家と比べれば天と地…宇宙と地ほど違うぞ！」

山城
「い、いや…それは時代が違うからだと…」

シルヴィア
「まあ、そんな事はよい。早くお主の家に入ろうではないか！」

なんだかな～と思いつつ、学校で借りた軍服を着たシルヴィアに押されて、チャイムを押す。

リーゴーン

「はーい」

パタパタパタ

家の奥…多分台所…からスリッパで玄関に来る音が聞こえる。

「はーい……正人！？」

山城
「あはは…ただいま、母さん」

「あ～ん、お帰り～♪」

ガバッ！

いきなり抱き付いて……あれ？

山城
「……母さん…何してんの？」

「え？あ～！間違えちゃった、てぇ♪」

山城
「てぇ♪…じゃない！」

なんと…自分の息子を差し置いて、シルヴィアに抱き付く山城母。

シルヴィア
「……お主…何か間違ってないか？」

山城
「はあ……母さん…お客さん相手に何してんの」

「あはは…冗談よ、冗談」

山城
「…シルヴィア、先に紹介しとく。俺の母さん、山城真希（まき）」

山城（真）
「あら！シルヴィアちゃんってゆうの？初めまして～」

山城
「母さん」

山城（真希）
「…正人、なぜか怒ってない？」

ピリリリリ

山城
「母さん、携帯電話が鳴ってるよ」

山城（真希）
「あ、はいはい…もしもし？あ、福本くん？」

…福本からの電話らしい。

山城（真希）
「ふん…ふんふん…あ、はいはい、わかりました～♪じゃあ」

山城
「福本からはなんだって？」

山城（真希）
「当分の間、シルヴィアちゃんを預かって欲しいって」

タイミング良く掛かってきた電話により、説明する手間が省けた様だ。

山城（真希）

「ようこそ、シルヴィアちゃん。狭いけどゆっくりしてね」

シルヴィア
「はい。よろしくお願いします」

次号へ

４６　実家にＧＯ！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

47　60年後の福本元帥（前書き）

登場人物

山城真希（やましろまき）　50歳　女性

主人公山城正人の母親。
海軍士官学校の息子を支える気丈な親だが、実は娘が欲しかった。
この為、シルヴィアにはベタベタ。

47　60年後の福本元帥

7月21日　山城の実家

ブー…ブー…ブー…ブー…

携帯電話のバイブ音で起きた山城。
いつもの様に6時にセットしていた目覚ましである。基本的に士官学校生でも携帯を持つのは日常的だが、学内での使用は禁止で、寮内での使用は許可されている。
しかし、今朝はそんな士官学校の寮でもなく、また、電池がなくなっても充電出来ない異世界でも無い。
元の世界……自分の実家である。

山城
「…て、なに安心してるんだか…」

パジャマのまま、階段を降りて居間に向かう。

山城
「おはよ～う」

山城（真希）
「あら、揃って早いわね」

山城
「うん……って母さん何してんの？」

見ると、シルヴィアの髪を研いでいた。

山城（真希）
「だって、シルヴィアちゃん寝癖が酷いのにほったらかしにしてるのよ」

山城
「あぁ…なるほど」

それは母さんがほっとく訳が無い。

山城
「朝食は？」

山城（真希）
「テーブルの上」

見ると、ちゃんとご飯と目玉焼き、お味噌汁とゆう定番メニューがのっている。

山城
「いただきます」

一時間半後……

山城
「シルヴィア！行くよ～」

シルヴィア

「待て待て待て！」

ドタバタしながら玄関に来るシルヴィア。

山城
「じゃあ、母さん！行って来るよ～！」

山城（真希）
「は～い。あ、今日は焼き肉にするから、早く帰って来てね～。ついでに福本君誘っても良いわよ～」

山城
「……行って来ます」

一発ツッコミを入れてやろうかとも思ったか、長くなりそうなのでやめる。

シルヴィア
「なあ…お主の母上は何故私にご熱心なのだ？」

山城
「あぁ、あれ？ある意味願望が叶ったからじゃないの」

シルヴィア
「…はぁ？」

山城
「父さんは男が希望だったんだけど、母さんは女の子希望だったんだよ。まあ、結局生まれたのは男の方だったんだけど……それでも母さん諦めきれなかったんだよ」

シルヴィア
「なるほど…だからお主の母上は私を好いていたのだな」

山城
「まあね」

一時間後……

神戸海軍士官学校の一室

コンコン

山城
「福本一士…じゃなかった、二士生。入っていいか？」

福本（勇）
「どうぞ」

山城
「失礼するよ」

何気無く部屋に入る山城とシルヴィア。
しかし、部屋に入った瞬間、山城が驚いた。

山城
「ふ、ふ、福本大介元帥！！」

疑問符が付くシルヴィアを他所に、慌て直立不動で敬礼する。

福本（大介）
「わっはっはっは。元気かね、山城正人士官候補生？」

シルヴィア
「……おい、誰だ？」

正体を知らないシルヴィアは山城に訊く。

山城
「ば、ばか！何度か話したじゃないか！この学校の一期卒業生で、日本海軍を前大戦で勝利に導いた！」

シルヴィア
「…う～、わからん」

……やっぱりこれだけでは解らない。

福本（勇）
「あはは、紹介します、シルヴィアさん。私の祖父で、この学校の第一期卒業生であり、第七艦隊を率いて前大戦を戦い抜いた、福本大介海軍元帥です」

シルヴィア
「…おぉ！思い出した！何度か聞いたな！僅か２４歳で元帥になった……！！」

福本（勇）の助け船でようやく合点がいき、自分が場違いな空気にある事に気付いたシルヴィア。

シルヴィア
「あわわわわ!!す、すみません!!」

福本（大）
「わっはっはっは!構わん構わん!」

今年で齢８５歳の福本元帥。噂によると…山城は実際に見た…６０歳で海軍を引退後、妻のマリーダ元帥と田舎に帰り２人で農業をしているそうだ。
しかし、未だその存在は大きく、引退後も暇を見付けてあっちこっち顔を見せている。

福本（大）
「勇気から昨日連絡をもらって取り敢えず来てみた。まあ、無事で良かった」

山城
「は、はぁ…畏れ入ります」

まあ、山城も福本元帥とは何度か会った事はあるが、こんな事態だからこそ恐縮するしかない。

福本（勇）
「ところで先輩。先輩達の通って来た『時空の穴』ですが…」

山城
「なんだ?」

福本（勇）

「今朝、管制塔のレーダーにはっきりと反応しました。目視では解りませんが、レーダーに特徴的なノイズが出ていて、位置がはっきりしています」

山城
「そ、それじゃあ！」

福本（大）
「君達の言っている事は確かだと言うことだ。今頃、政府上部もどうするか協議中だろう」

シルヴィア
「…テレビは何もいってなかったぞ」

福本（勇）
「それはそうですよ。そんなＳＦみたいな話を表にしたら、まず、国民はトチ狂ったと思いますよ」

そりゃそうだ。
それにこれは重大機密事項に値する事柄だ。

山城
「あ、そういえば鷲井達は？」

福本（勇）
「先輩達なら、事情聞かれてますよ。今回は向こうでの戦闘行為についてですけど」

山城
「あ～、やっぱりか…それについては…」

福本（勇）
「多分大丈夫だと思いますよ。確かに規定違反ではありますが、理由が理由だけに仕方無い事情ですし」

山城
「そうか…それならいいのだが…しかし、お前さんも大変だな。教官達からは頼られてるし、じいちゃんと父親は元帥と中将とは」

福本（大）
「あのボンクラ息子が中将か…歳はとりたくないな」

福本（勇）
「ボンクラって…お爺ちゃんも昔は暴れてたでしょう」

シルヴィア
「お～い、勝手に話を進めるな～。その前に私の解らん話をするな～」

次号へ

47　60年後の福本元帥（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

48　それぞれの現状

鷲井の部屋

コンコン

鷲井
「どうぞ～」

山城
「入るぞ」

入った山城は呆れた。
中の惨状に……

山城
「…嵐でも来たか？それとも戦争でも起きたか？」

机や床には参考書や資料、兵器開発に関する物が散乱していた。

鷲井
「…それは何の冗談だ」

山城
「何も知らない人間から見たら、そう言わざるおえないだろう」

鷲井
「まあな…そう言えば福本元帥が来てるって？」

山城
「あぁ、福本二士生から連絡受けて来たんだと」

鷲井
「ほう…さすが元帥だ」

山城
「ところで、何してるんだ?」

鷲井
「向こうで独自開発出来そうな物を考えてる」

山城
「ふーん」

鷲井
「ところで、考えたんだが…」

山城
「ん?」

鷲井
「この際、向こうと国交交わせないかね?」

山城
「…それはそれで出来たらいいが……難しいぞ」

ただでさえ、異世界の存在で政府内もどうしようかと言うときに、国交などはもう少し先の話だ。

鷲井
「だよな…だが、悪い話じゃないだろう?」

山城
「…向こうがどう思うかは別だがな」

宮里の部屋

コンコン

山城
「宮里、入るぞー」

宮里
「良いぞ」

入ると、鷲井の部屋とは反対にスッキリかつちゃんと整理されている。

山城
「…何読んでるんだ?」

宮里
「砲術教本」

山城
「…そうか」

…向こうに行った時のネタにするつもりだな。

宮里
「それで、そっちはどうだ?」

山城
「いや…ただ、福本二士生と話してた」

宮里
「良いね。こっちは教官達から事情を聞かれたよ」

山城
「…そうだ、今日母さんが焼き肉するけど、来るか?」

宮里
「焼き肉か…鷲井達も誘ったのか?」

山城
「鷲井は誘ったが、大澤達はまだだ」

宮里
「おう、そうか。なら、俺も行くよ」

格納庫

山城

「よう、3人共、元気か？」

泉
「えぇ」

岡田
「同じく」

大澤
「…事情聞いたのが女性教官じゃなくて男だった…」

山城
「お前なあ…」

こんな時に、そんな事を言えるなら大丈夫だろう。

泉
「私としては、向こうにいる整備員達が心配」

岡田
「出来れば、早く交換部品を持って行きたいですね」

大澤
「俺も早く向こう行って貴族のお嬢様方をナンパした…」

ジロリ

大澤
「す、すみませんすみません…もう言いません」

山城
「あ、こんな時に言う事じゃないけど…家で焼き肉やるから来るか

？」

3人
「「「行く！！」」」

山城
「そ、即答…」

しかし、そうなると人数が問題になる。

ピ…ピ…ピ

携帯から登録している山城母の番組を探す。

山城
「あ、母さん？焼き肉の人数の事だけど…」

……暫くお待ち下さい……

山城（真）
『わかったわ。大人数だけど、任せてね！』

山城
「あぁ、それじゃあ、よろしく」

泉
「そう言えば、私達外に出れるの？」

福本（勇）
「その事ですが、先程許可が取れました。外出出来ますよ」

大澤
「おいおい、二士生がよくとれたな」

山城
「そりゃ、元帥の孫で、教官達からの信頼も厚いからな」

福本（勇）
「では、後で集合しますので、準備しといて下さいね」

次号へ

４８　それぞれの現状（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

49　山城の実家へ…

午後2時頃……

山城
「よし、行くぞ～」

全員
「「「「「「おお～！」」」」」」

山城
「…おいおい」

いつものメンバー……鷲井・宮里・大澤・岡田・泉・シルヴィア…
…に福本勇気とセルベリアを加えて山城の自宅に出発しようとする
と……

大澤
「おぉ！これはまた美少女！」

……案の定、セルベリアに突っ掛かる。

大澤
「お嬢さん、これから…」

ガチャ

これに間髪入れずに福本が大澤の後頭部に１００式拳銃を押し付け
る。

福本（勇）
「大澤先輩、今すぐ彼女から手を離さないとあなたを血に染めますよ？」

何故か微笑みながら……

大澤
「わ、わ、わかったから…銃を除けろ～～」

福本（勇）
「わかりました」

スッと１００式拳銃を後頭部から除けると、さすがの大澤も手を離す。

大澤
「…福本、俺がいない間に怖くなってないか？」

福本（勇）
「そうですか？」

サラリと答える福本（勇）。

山城
「お前が手を出すのが悪いんだよ」

宮里
「そうそう。その内、バズーカを頭に突き付けられるぞ」

鷲井
「いやいや、その前に撃つだろう」

大澤
「…弁護する奴はいないのか」

泉
「いないでしょ」

山城
「…いらん時間をくったな。行くぞ」

1時間後……

山城の実家

山城
「母さ～ん。ただいま～」

シルヴィア
「ただいま帰りました」

山城（真希）
「あら、お帰りなさ～い。皆さんも上がって」

岡田
「では、失礼します」

泉
「おじゃまします」

宮里
「失礼します」

大澤
「あがります」

福本（勇）
「真希さん。お久し振りです」

山城（真）
「あら、福本君。やっぱり来てくれたのね」

ガバッ！

福本（勇）に抱き付かず……

山城
「母さん！そのネタは止めてくれ！」

……案の定、セルベリアに抱き付く。

山城（真）
「あら～、また間違えちゃった、てへ♪」

山城
「…母さん…」

本当にこの人は自分の親なのかと問いたい…問い詰めたい。

セルベリア
「…ユ、ユウキ…」

山城
「あ～、母さん！早く離しなさい！」
山城（真）
「え～、正人のいけず～」

山城
「いけずって…はぁ…福本、すまん」

福本（勇）
「慣れました。それに、祖父は同じ様な状況を何回も経験していますよ」

山城
「…そうだったな」

…とその時…

ガチャ

「お～い、帰ったぞ…お！！」

山城
「あ！父さん！」

シルヴィア
「お、お主の父上！？」

「正人！帰って来たのか！！」

回りを気にせず抱き締め……あれ？

ギュ～ウ……

山城
「と…父さ…ん…し…絞め過ぎ～～」

「わっはっは！今まで連絡しなかった罰だ！」

…電話の有無は別として、繋がるか解らない世界にいたのにどう連絡しろと？

福本（勇）
「広樹さん、落ち着いて落ち着いて…」

「おぉ、これはすみません…見苦しいところをお見せしてしまった」

山城
「…父さん」

自分でやっておいてそりゃないだろう。

シルヴィア
「…豪快な父上だな」

山城
「…紹介しておくよ。山城広樹（ひろき）。俺の父さんで、客船の航海長」

山城（広樹）
「ん？なんだ、正人？美人ばっかり連れて」

山城（真）
「あら、正人が帰って来たから、皆さんと焼き肉にしようと来てくれたのよ」

山城（広）
「そうか！なら、玄関じゃあ無粋だ。さあ、上がった上がった！」

福本（勇）
「は、はい」

セルベリア
「はい」

山城（広）
「ほう…つまり、正人はそんな所でそんな事をやっていて、シルヴィアちゃんはお世話になった1人って訳だ」

福本（勇）
「えぇ…そうゆう訳です」

山城
「おいおい、福本…大丈夫なのか？」

福本（勇）
「どうせ隠したところで後々解る事ですから…不可抗力ですよ」

ワイワイ騒いでいる面々の中で、今までの事を山城に代わりに福本が事情を説明する。

山城（広）
「正人。お前も中々面倒な事に巻き込まれたな」

山城
「……どうだろうな」

実際、面倒事ではある。
しかし、人とは違う体験をしている…と思えば面白い。

山城（真）
「あら、あなた。時間じゃないの？」

山城（広）
「ん、あ！そうだな」

シルヴィア
「…時間？」

セルベリア
「？？」

山城
「……まさか」

山城（広）
「そう、そのまさかだ」

そう言うとテレビをつける。

福本（勇）
「…どうしました？」

山城
「……実はな、父さんは大の時代物好きでな…」

福本（勇）
「…それで？」

山城
「……特にお気に入りは『暴れん坊将軍』と『水戸黄門』なんだよな…」

福本（勇）
「……けどあれは…」

山城
「いや、解ってる。父さんもフィクションと解ってる……だけどな

…」

福本（勇）
「……先輩、どうやら、好きになりそうな人が2人増える気がするんですが…」

山城
「……」

山城・福本はテレビの『暴れん坊将軍』に夢中になっている2人の少女を見ていた。

次号へ

４９　山城の実家へ…（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

５０　再び異世界へ（前書き）

登場人物

山城広樹（やましろひろき）　５０歳　男性

正人の父親で、客船の航海長。
長年客船に勤めており、その影響で山城は海軍へ。
実は物凄い時代劇…特に暴れん坊将軍や水戸黄門…が大好き。

50　再び異世界へ

7月27日

山城達が突然ながらも帰って来て1週間が経過した。政府上部もゴタゴタしていた様だが、どうやら一本に筋を纏めたらしい。
ただ、山城達には別段何も言ってもくれないが。

福本（勇気）
「それも今日までですけど」

山城
「で、上はどうするって？」

福本（勇）
「処分は保留。階級については皆さん少尉に任官。ですが、余りにも異世界に入り込み過ぎ…とゆう事で、異世界で今まで通りに先輩達は活動を続けろ……との事です」

鷲井
「じゃあ、向こうに行け…って事か」

福本（勇）
「はい。ですが、形の上では『軍事顧問団派遣』とゆう事です」

宮里
「まあ…すっきりした様な、微妙な様な…」

泉
「それで…なんであなた達は旅支度なんてしてあるの？」
確かに、福本の後ろには大きめのバッグが２つ。
セルベリア
「ユウキのお父様から、特使として行く様に命じられました」
福本（勇）
「本来なら、外務省の担当なんですが……行く人間が…」
大澤
「…おいおい」
山城
「まあ…お前なら下手な外交官よりは状況説明が上手いから…大丈夫か」
岡田
「じゃあ、あの２５式大型輸送ヘリは君達の？」
２５式大型輸送ヘリは陸上自衛隊で採用されているＣＨ４７輸送ヘリ。
ちなみに、４０式輸送ヘリはＵＨ６０ブラックホークの事。
福本（勇）
「はい。あっちには烈風や流星、９９式の予備部品や通信機器一式が積載されています」

大澤
「そら、あんな大型ヘリじゃないと載らないわな」

山城
「で、出発は今から…と」

福本（勇）
「はい。それでは、行きましょう」

そう言うと先に25式大型輸送ヘリへと乗り込む。
山城達も泉が操縦席に乗り込むと、次々に乗り込む。

山城（広樹）
「正人」

山城
「！父さん…母さん…」

何故？と問おうとしたが、どうせ、福本辺りが手を回したのだろう。

「「「……」」」

……何故か沈黙が流れる。転移した時は仕方ない……だが、今回は……

シルヴィア
「何をしておる？早く行くぞ！」

山城

「あ、あぁ」
わざわざ、ヘリから降りて催促するシルヴィア。

山城
「父さん…母さん……お別れは言いません…行ってきます！」

ビシリ！と両親に敬礼する山城。

山城（広）
「あぁ、存分にやってこい」

山城（真希）
「シルヴィアちゃん。正人の事、お願いね」

シルヴィア
「は、はい！」

管制無線
『レーダーにて確認。そのまま真っ直ぐ向かって下さい』

泉
「了解」

誘導に従いながら『時空の穴』に向かう。

山城
「みんな、水無しで飲める頭痛薬は持ってるな？」

鷲井
「もちろん」

岡田
「はい」

宮里
「当たり前だ」

山城
「福本、そっちは？」

福本（勇）
『はい。もちろん持ってますよ』

山城
「よし、総員対ショック用意」

ガタガタガタガタガタ！

シルヴィア
「や、やっぱり揺れるな」

山城
「い、泉…そのまま、突っ切れ」

泉
「了解！」

山城
「みんな…大丈夫か?」

泉
「一瞬、意識喪いかけたけど、大丈夫」

山城
「福本、そっちは?」

福本（勇）
『あははは…確かに頭痛がしますね…セルベリアは平気そのものですけど』

山城
「よし、士官学校に向かうぞ!」

グローリアス士官学校

クレマン
「あれ?あれは教官達のヘリじゃないか?」

デュリオ
「ん?あ、本当だ」

デュリオの部屋で宿題をしていた2人が気付く。

クレマン
「帰って来るの…明日じゃなかったか？」

デュリオ
「あぁ……その筈」

顔を見合せると、宿題を放り出し、慌て部屋を飛び出して階段を駆け降りる。

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン……

シルヴィア
「う～ん…やはり1週間振りとはいえ、故郷はいいものだ」

山城
「…おいおい」

少し苦笑しつつ、周りを見渡す山城。

デュリオ
「山城教官！お帰りは明日じゃなかったんですか！？」

大澤
「……こっちはそんなに時間が進んでないんだな」

山城
「そうだな……2人共！もう一機降りるから気よ付けろ！」

クレマン
「へ？うわ！！」

バタバタバタバタバタバタバタバタ！

鷲井
「また当分騒がしくなりますね」

次号へ

50　再び異世界へ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

51　未知との遭遇

9月10日　首都ユニオン

どたばたで帰って来た山城達は直ぐ様、首都ユニオンの王城に参上した。

王城　謁見の間

アーネリア
「まあ、皆さん元の世界に戻れたのですね！」

山城
「はい。おかげさまで、偶然ながらも戻る事が出来ました」

先ずは昨日（山城達にとっては1週間だが…）の出来事を話しておく。

アルスラーン
「先程から気になっていたのですが、あなたの後ろに居られる御二人は？」

山城
「は、私の後輩で、親書を預かっております、福本勇気とセルベリアです」

そう言うと、山城は下がり2人を前に出す。
あとは2人の仕事だからだ。

福本（勇気）
「先ほどご紹介にあずかりました、福本勇気です。そして、親書はこちらに…」

そう言うと、堂々と、なおかつ慎重にアーネリアとアルスラーンのところに親書を持って行く。

ツンツン

隣に居たシルヴィアが小突く。

シルヴィア
「（お主の後輩…堂々としておるな？）」

山城
「（まあ、大提督の孫だからね）」

実際、福本元帥の息子…勇気の父親…が時として外交の場に家族を連れていった事があるらしいから、それである程度は慣れているのだろう。
それに、福本が入学してから一年間の間に関わった騒動の結末を聞けば、大抵の人間なら驚くか、感心するかの2つである。

福本（勇）
「これが親書にございます」

山城とシルヴィアがひそひそ話をしている間に福本は親書をアーネ

リア姫に渡していた。
すると、アーネリアはアルスラーン王子を交えて、親書を読んでいる。

アーネリア
「…2・3ご質問してもよろしいですか？」

福本（勇）
「答えられる範囲であればお答えいたします」

アーネリア
「この『天皇』とは、なんですか？」

福本（勇）
「一言で簡単に申すならば、我が国のアーネリア様でございます。我が国では独自にアーネリア様の様な方を『天皇』と呼んでおります」

まあ、皇室典範や何やらを持ち出して説明するのは長過ぎるから、すっきり克つ解りやすい言い方をすれば福本が言った様な説明が良い。
これが下手な外交官なら見栄を張って無茶苦茶な説明になりかねない。

アーネリア
「この『西暦』と『皇紀』と『平成』の年数が違うのは？」

福本（勇）
「『西暦』は世界共通で使われている暦で、『皇紀』は日本で独自に使っている暦です。『平成』は先ほど申しました天皇が在位して

いる間に使われる年号で、代替わりしますと年号も代わります」

アーネリア
「へぇー…この親書を見るかぎり、大日本帝国と政府は我が国と国交を結ぶ用意がある…と言う事で間違いありませんね？」

福本（勇）
「はい。間違いありません」

……どうやら、姫様の方に問題は無い様だ。

「しからば！」

……しかし、貴族達の方は別の様だ。
居並ぶ貴族達の中から1人が声をあげる。

「いくら国交を開くと言っておるとは言え、大日本帝国などと聞いた事も無い国に、それ程の実力があるかどうか…」

この貴族の物言いに、シルヴィアがピクッと反応…いや、サーベルの柄に手を伸ばしていた。
しかし、直に聞いた筈の福本は表情を変えなかった。

福本（勇）
「なるほど……確かにそうですね。先輩、お願いします」

山城は頷くと鷲井と一緒に壁の方に退けてあったノートパソコン（映写機能付き）を引っ張り出す。

福本（勇）
「では、鷲井先輩。お願いします」

鷲井
「はいはい」

そう言うと、既に立ち上げていたパソコンからデータを引き出す。

福本（勇）
「陛下、ご足労お掛けしますが、カーテンを閉め、暗くして下さい」

アーネリア
「わかりました」

直ぐに侍従長に命じ、謁見の間のカーテンを閉める。

シルヴィア
「何を……始めるつもりだ？」

山城
「大提督の孫は既に準備万端って事…かな」

福本が準備していた策……それは『映像』だった。
大体、映画が作られたのは日露戦争の後である。
日露戦争より多少技術面で劣るこの世界なら、映画１つで驚くだろうが、問題は中身であった。

中身……それは日清戦争の再現ＣＧから現代まで映像を繋げ合わせたある種の映画であった。
しかし、効果は絶大で、先ほど文句を言った貴族は、ハワイ占領作戦の艦砲射撃の映像を見て度肝を抜かれていた。
福本が時たまに解説を入れているが……真剣に聞いているのは数人、後は映像に釘付けだった。

しかし……実は外では密かに…大変な事が起きていた。

次号へ

51　未知との遭遇（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

52　飛龍との遭遇　前編

その頃……

宮里
「……ん？」

それに気付いたのは４０式ヘリの近くで待機していた宮里だった。
泉やローエン中尉と共にヘリの番をしていた宮里は海の方から霧が掛かり始めている事に気付いた。

宮里
「ローエン中尉。今日の予報は霧でしたっけ？」

ローエン
「いや、そんな予報の筈は……」

しかし、実際に周りは霧に覆われてゆく。

宮里
「……まさか！」

直ぐに携帯電話を取り出し、山城の番号にかける。

ブーブーブー……

山城

「ん？宮里から？」

映画が一段落した時、宮里からの電話に気付く。
目立たない様に壁の方に行くと電話をとる。

山城
「（宮里か？今、映画の途中…）」

宮里
『それより！外を見ろ！外を！』

山城
「（…はぁ？）」

疑問に思いつつ、近くの窓のカーテンを少し捲る。

山城
「（いったい何がどうなって……！？）」

窓の外は真っ白……霧で真っ白に覆われていた。

シルヴィア
「（おい、お主！何を…！？）」

何をしているのか聞きに来たシルヴィアも外の光景を見て驚く。

山城
「（シルヴィア！行くぞ！）」

シルヴィア

「（わかった！）」

2人は気付かれぬように謁見の間から出て行った。

山城

「泉！宮里！異常は！？」

宮里

「いや、今のところは無い」

ヘリの所に行くと、霧は晴れていた。

ローエン

「……あれ？船がいますね？」

山城・宮里・泉・シルヴィア

「「「「え！？」」」」

双眼鏡で港の方を見ていたローエン中尉の言葉に全員が反応する。

港の方は霧が残っているがかなり薄くなっており、シルエットがよく解る。

シルヴィア

「…変わった形だな？新型の貨物船か何かか？」

シルエットを見たシルヴィアは正直な感想を呟く。

だが、艦種とシルエットから推測出来る艦名を知る山城達は慌ててヘリに飛び乗る。

山城
「シルヴィア！」

シルヴィア
「わ、わかったから待て！」

福本（勇）
「先輩！」

山城
「福本！お前…あっちは！？」

セルベリア
「アーネリア陛下が大臣達と協議の為、休憩になりました」

山城
「おいおい…2人も来るのか？」

福本（勇）
「指揮官、前に居らずして、信を得るは不可なり…ですよ」

山城
「はぁ…とにかく乗れ！」

福本（勇）
「ローエン中尉！すみませんが、陛下に訳を話しておいて下さい！」

2人をヘリに乗り込ませると、ヘリは離陸する。
ローエン中尉はやれやれ…と言いたげな表情で見送った。

バタバタバタバタ……

福本（勇）
「艦種は空母……ですが、まさかあの勇艦が転移して来るとは…」

山城
「あぁ…赤城型原子力空母三番艦の艦名にもなった勇艦だからな」

宮里
「間違い無い……飛龍だ」

飛龍……大東亜戦争にて第二航空戦隊旗艦として開戦を迎え、珊瑚海海戦では被弾した赤城に代わり第一機動艦隊を率い、勇将山口多聞少将（後に大将）が乗り組んだ空母である。

泉
「…ねぇ、このヘリ、飛龍に着艦出来る？」

福本（勇）
「…多分、大丈夫かと…」

山城
「さて…発灯信号で着艦許可を取りますか」

空母『飛龍』艦橋

水兵
「艦長！本艦上空に正体不明機！」
見張りの報告に通り、オートジャイロ機を大型化した機体が飛んでいる。

「副長、あの機体をどう思う？」

「さあね…君と同じ意見だと思うよ」
…この馬鹿との腐れ縁はこちらが切りたくても、中々切れてはくれないらしい。

「日の丸だから、大丈夫だと思うけど…あ、発灯信号だ。『貴艦への着艦を許可されたし』…どうする艦長殿？」
…わざとらしく『殿』を付けて呼ぶ…『殿』を付けて呼ぶなと何回言えば解るのだろうか、この馬鹿は？

「現状を知りたい…着艦を許可する！」

許可を得て着艦した４０式ヘリ。
しかし、山城と福本が降りるといきなり、銃を構えられた。

山城
「９９式歩兵銃に１００式短機関銃でのお出迎えか…」

福本（勇）
「まあ…理由は解りますけどね」

見ると、乗組員は男女半々の様だ。

山城
「あ～…出来れば艦長に会いたいんだが…」

「総員、銃を納めろ」

まるで図ったかの様に現れた女性の態度と空気から艦長だろう。

「失礼した。私が日本帝国海軍空母飛龍艦長、山口龍子です。後ろに居る馬鹿は副長の矢萩俊雄だ」

シルヴィア
「…容赦の無い紹介だな」

山城・福本（勇）
「「（山口…？？）」」

山口…と聞いて気になる2人。

宮里

「もしかして…山口多聞大将のご息女ですか？」

「えぇ、そうです」

2人の疑問を宮里が代わりに質問して解明した。

次号へ

52　飛龍との遭遇　前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

53　飛龍との遭遇　後編

空母飛龍会議室

山口
「そ、そんな…バカな！ここが異世界だと！？」

矢萩
「…ふ～ん」

……何、この艦長と副長の反応の違いは？

山口
「おい、バカ！何だその暢気な反応は？」

矢萩
「いや、だってさ…反応のしようが無いもん」

山口
「な、なんだと！？」

矢萩
「それよりも。なんで彼らがここに居るのかが不思議じゃない？」

やっと話が山城達に回ってきた様だ。

山城
「えーと…先に言っておきますが、今居る中でこの世界の出身者は

隣に居るシルヴィアだけですから」

矢萩
「へ～、そうなんだ」

山口
「このバカは気にするな。続けてくれ」

山城
「我々もあなた方と同じく転移者です。ただ、何故かは解りませんが元の世界と『時空の穴』の様な物と繋がっており、今のところ行き来できますがね」

矢萩
「じゃあ、その『時空の穴』を通れば、君達の世界に行ってしまうと」

山城
「はい…多分」

何せ、山城達が『時空の穴』に入ったら山城達の世界に帰れたが、他の世界から転移して来た人間が『時空の穴』に入って山城達の世界に行けるかは、まだ解らない。

山口
「ところで、その様子だとあなた方の日本もアメリカとの戦争に勝った様だな」

福本（勇気）
「えぇ、まあ…だいたいの経過を言いますと……」

そこから福本の解りやすい解説付きで、第６大陸の事から、ノモンハン紛争、１２・８クーデター、日サ戦、日米戦、第七艦隊の欧州派遣、欧州戦、日ソ戦、終戦から現在までの経過を説明した。

山口
「なるほど…同じ様な世界でも、それ程までに違うのか…」

福本（勇）
「そういえば、そちらは転移したのは何時だったんですか？」

矢萩
「残念ながら、そちらみたいに２００５年じゃあ無いけど、僕達は１９６５年の台湾海峡で訓練中に転移してしまって…」

山城
「１９６５年だと…皇紀は２７２５年か…なら、戦闘機はジェット機が主流になる頃ですね」

山口
「飛龍に搭載されているのは紫電改と流星だけだがな」

シルヴィア
「……話の主旨がずれていってないか？」

山城
「……本当だな」

矢萩
「…話を元に戻しますと、こちらの世界では１９４１年１２月８日

にイギリスに宣戦布告。同月１５日に真珠湾を攻撃してアメリカに宣戦布告しています」

福本（勇）
「なぜ、日を分けたのですか？」

山口
「たまたま、魚雷の調整が間に合わなかったのだ」

山城
「それで？」

矢萩
「それが……戦争、半年で終わりました」

福本（勇）
「どうやって？」

山口
「２月にシンガポールが陥落して、イギリスに停戦交渉を実施したら、すんなりと停戦となった。そして、５月にコレヒドール島が陥落すると、アメリカも停戦交渉を持ち掛けてきた」

山城・福本（勇）
「「え？？」」

確かこちらでも同じ様な事をしたが、何もなかった様な……

矢萩
「実は……あとで解った事なんですが、ルーズベルが１５日午後に

急死してしまったそうなんだよね～」

山城
「死んだって……なして！？」

山口
「真珠湾攻撃で４回の攻撃を実施、戦艦６隻、空母３隻撃沈破、湾内の港湾施設とオイルタンクを破壊したのだ。その被害の大きさに心臓発作を起こして逝ったそうだ」

福本（勇）
「（やっぱり…心臓発作で死ぬのかね…ルーズベルトは）」

山城
「なんとまあ……呆れていいのか悪いのか……それで、講和して今に至る…と？」

山口
「まあ、そんなところだ…また、細かく話すかもしれないがな」

福本（勇）
「…それで先輩、飛龍をどうします？」

山城
「え、いや……まあ、本人達が良いと思うなら、こっちで預かるけどさ……ねぇ？」

山口
「う～ん……」

矢萩
「良いんじゃないの?どうせ身寄り無いし、彼らなら大丈夫そうだし」

山口
「はあ…このバカめ、そんな単純に…」

矢萩
「じゃあ、このまま漂流する?それとも、素人が乗り込んで来て、無茶苦茶にしてもらう?彼らに任せれば大丈夫だと思うけどさ」

山口
「う…うーん……」

流石に考える山口艦長。
しかし……

山口
「あ~、もう、わかった、わかったわよ!彼らに任せるわ。ただし、責任はとってもらうからね、バカ矢萩!」

矢萩
「はいはい」

こうして…飛龍とその乗組員が仲間になりました。

次号へ

53　飛龍との遭遇　後編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

５４　変化（前書き）

登場人物

山口龍子（やまぐちりゅうこ）　女性　２６歳　少佐

山口多聞少将の娘で、空母飛龍の艦長。
大戦を戦った勇艦飛龍も練習空母になり、その艦長となったのが龍子。
自分の父親が乗った艦である事から愛着がある。
台湾海峡で訓練中、転移してしまった。
矢萩俊雄とは同級生で腐れ縁。

矢萩俊雄（やはぎとしお）
男性　２６歳　大尉

空母飛龍の副艦長。
生真面目な龍子とは違い、どこかヘタレている。
どうゆう経緯か飛龍副長に任命され、龍子の補佐を担当。
腐れ縁の龍子にバカ呼ばわれされているが、本人は気にしていない様子。

54　変化

9月17日　グローリアス士官学校
……のある一室

シルヴィア
「おい、繋がったのか？その……」

山口
「エンターネット？」

矢萩
「インターネットだよ」

山城
「まあまあ…落ち着いて、落ち着いて」

パソコンを使いながら、周りに合わせる山城。
飛龍が転移してから1週間が経過した。
そして、グローリアス士官学校の空き室を借りて、福本勇気が乗って来た25式大型輸送ヘリに載っていた『通信機器一式』の1つである家庭用パソコンを引いていた。

パカッ

山城
「あ～、鷲井？そっちは？」

鷲井
『ちょっと待てよ…あと、アンテナを微調整すれば…』

山口
「そんな物で、向こうで使っているエンターネットがこちらでも使えるのか？」

矢萩
「いや、インターネットだって…エンタープライズじゃあないんだからさ」

山口
「別にいいじゃないの…言い回しくらい」

山城
「あの…飛龍をほっといていいんですか？」

矢萩
「当分、動かす事も無いから…内務長に任せて来ました」

山城
「…そうですか」

そう言いながら、窓の方に視線を向ける。
窓の外はちょうど軍港が見え、港内には戦艦天城と空母飛龍が並んでいる。
今や飛龍は注目の的で、生徒達が見物に来ている。

鷲井
『山城。微調整完了したぞ～』

山城
「おう…お、繋がった繋がった」

大澤
「ここに帰って来てから8日だな？」

岡田
「えぇ、8日ですね」

大澤
「8日でこんなに様変わりするか？」

大澤達の目の前に広がっている光景は、確かに様変わりしていた。
流星・99式襲撃機が格納していた格納庫も拡張工事中であり、飛龍に搭載していた紫電改や流星が降ろされ青空の下で整備中である。
飛龍からもパイロットや整備員が降りて来て案外騒がしい。
まあ、泉にとっては女性パイロットが増えて嬉しそうだが……。

大澤
「いや…それもそうなんだが…そっちじゃなくて…」

岡田
「あぁ、『赤とんぼ』の事ですね」

そう言いながら、校庭の一角に置いてある複葉機に視線を移す。
93式中間練習機、通称『赤とんぼ』…大戦前に採用され、多くの海軍パイロットを養成した隠れた名機である。
もちろん、2005年の日本海軍では93式練習機は使われていない。

大澤
「いったいどっから引っ張り出して来たんだ?」

岡田
「福本二士生が言ってたじゃないですか。どの機も新品ですよ」

大澤
「え、新品?」

岡田
「……話聞いて無かったんですね」

呆れ気味に言う岡田。
実はこの９３式中間練習機『赤とんぼ』は軍では使用されていないが、個人で所有する人間が国内外にいる。また、零戦や彗星などのレシプロ軍用機をレース仕様に改造するなどした機体がアメリカやヨーロッパなどで存在している。
そう言った目的でレシプロ機を製造している企業や工場は軍がリストアップしている。
これは一度戦争となれば、大量の航空機やその交換部品を生産しなければならないから、軍としては知っておかないといけない事だ。
福本勇気は父親に頼んでそのリストの中から、赤とんぼを製造できる所を探し出し、製造を要請したのだ。

大澤
「あ～、そんな事言ってたな…んで、出来た物がつい３日前に来たんだよな」

岡田

「えぇ、ヘリで誘導して飛んで来たんですよ」

大澤
「はぁ……この学校でパイロットを養成させる気か？」

岡田
「別に良いんじゃないですか？それに第一次大戦の時のパイロットは貴族も居たわけですし」

大澤
「はぁ…ヴィクトリアがこの国第一号のパイロットになるのか…」

ヴィクトリア
「あら？私がなんですって？」

大澤
「うげ！ヴィクトリア！」

ヴィクトリア
「…なんで嫌そうな顔なんですか？」

大澤
「当たり前だ！お前が来ると何かがおこるからだ！」

ヴィクトリア
「そんなの知りません！それに、その何か、とはあなたがあのスキンシップなんかをやってるからではありませんか！？」

大澤
「悪かったな！この巨乳生真面目偉そう女！」

ヴィクトリア
「なによ！このセクハラ変態男！あなたなんか、象にでも踏まれなさい！！」

大澤・ヴィクトリア
「「ふん！！」」

岡田
「……子供の喧嘩みたいですね」

次号へ

54　変化（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

55　ステップアップ

9月20日　グローリアス士官学校

……よりちょっと外れた所

シルヴィア
「お、また来たぞ」

山城
「おいおい…これで3機目だな」

朝から物質を満載して着陸する25式大型輸送ヘリ。
そして、物質は近くのプレハブ式倉庫へと格納される。

福本（勇気）
「あ、おはようございます。先輩、シルヴィアさん」

山城
「おはようさん…で、一体何を大量に運んで来たんだ？」

福本
「見てみます？」

そう言うと、近くにあった箱の封を外して開ける。

山城

「……って、これ…カップヌードル？」

福本（勇）
「そうですよ。なにか？」

今や宇宙にまで持って行ける様になった有名なインスタント食品である。
他にもチキンラーメンとか色々ありそうだが……

福本（勇）
「それは、後で皆さんに食べてもらう物です。他にも、薩摩芋やじゃがいも、その苗や種等を持ち込みました」

山城
「…最初は食糧支援か？」

福本（勇）
「ネイラーン共和国に攻め込むなら、まずは食糧の確保が必要でしょう？」

山城
「だからって…インスタント食品にするか？」

福本（勇）
「先輩、忘れたんですか？インスタント食品は元々日本陸軍の発明品ですよ？」

これは山城の知っている話。
シベリア出兵の戦訓から冬季装備に力を注いだのは有名な話だが、同様に食糧の確保・調理法にも影響を与えた。

何せ、冷蔵庫の中が暖かく感じる程の極寒では、おにぎりも僅か数分でカチンコチンに凍って食べれない。それに、1人辺りの容量が決まっていれば輸送量も計算しやすい……などなどの理由で、日本陸軍でのインスタント食品の元素を開発した。
この技術が終戦後に民間に行き渡り、インスタント食品が日本のみならず、世界に広がった訳だ。

山城
「だからって…戦場で栄養も考えずにインスタントラーメン食わす訳にはいかんだろう（＾―＾；）」

福本（勇）
「それはそうですよ。ただ、こうしらた楽ですよ…って教えるだけですから（＾―＾；）」

シルヴィア
「？？2人だけしか解らん話をするな～（＜―＞）」

話に付いていけないシルヴィアがツッコミを入れる。

山城
「あはは…後で流星に乗りながら説明してあげるよ」

福本（勇）
「流星？先輩、どこかお出掛けですか？」

山城
「…実はお前がいない時に相談したんだが、何人かで転移兵器を探そう…って事になってな」

福本（勇）
「なるほど、現地調達ですか…あてはあるんですか？」

シルヴィア
「あちこちから、噂や何やらをかき集めてあれこる検討した数ヶ所に絞ってみたのだ。そこを回るつもりだ」

福本（勇）
「それも大変ですね…誰が行くんですか？」

山城
「俺にシルヴィア、大澤、ヴィクトリア、岡田、泉のメンバー」

福本（勇）
「鷲井先輩と宮里先輩は居残り組ですか？」

シルヴィア
「あの者は…最近、図面と睨めっこだ。砲術教官は砲術授業で抜けられないそうだ」

福本（勇）
「大変ですね…本官も日が暮れる前に帰りますので…今度は何時来れるか解りませんが、お元気で」

山城
「最後の別れじゃあ無いが…引き継ぎはちゃんとしろよ」

福本（勇）
「あはは…そうですね。そうしないと、学校に通えませんしね」

そう言うと綺麗な敬礼を見せると去って行く。

シルヴィア
「…元帥の孫だと聞いたが…案外普通の者だな」

山城
「…あいつだからかな。あんまり気にして無いんだよ」

そう答えると山城も学校の方に歩いて行った。

校庭のテント

山城
「さて、北か、東か、西か、どっちに…」

ヴィクトリア
「北！」

大澤
「早！」

泉
「じゃあ、私達は東」

岡田
「はい」

山城
「…残りは西だな」

シルヴィア
「そうだな」

山城
「じゃあ、数日後に会おうな」

泉
「オッケー」

大澤
「はいよ」

そう言うと、それぞれの機体に別れて飛び立つ。

次号へ

55　ステップアップ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

56　大澤・ヴィクトリアの場合　1

9月21日

大澤
「……ふが？」

…生徒寮とは違う部屋のベッドで目を覚ました大澤。そして、寝惚け頭で思い出す。

大澤
「…そうか…ヴィクトリアの別荘だっけか」

北を選んだヴィクトリア・大澤のペアは、ヴィクトリアの誘導で北へと飛んだ。ちなみに、ヴィクトリアが北を選んだ一番の要因は自分の家の別荘が有るからだそうだ。

大澤
「……とにかく起きよう」

ベッドからモソモソと出る大澤。

大澤
「おはよ～う」

ヴィクトリア

「あら、おはようございますわ」

大澤
「あ…おはよ……！」

何気なくテーブルを見ると、そこには……出来たばかりの朝食。

大澤
「……まさか、お前が作ったのか！？」

ヴィクトリア
「あ、当たり前ですわ！」

……朝から五月蝿い２人である。

大澤
「まさか、毒入れてないよな？」

ヴィクトリア
「毒なんか入れますか！あなたは踏み殺すのがお似合いですわ！」

大澤
「なに！じゃあ、山城はどうなんだ？」

ヴィクトリア
「あの方はあなたとは大違いですわ！それに、私が手を出す前に、シルヴィアが殺りますわ！」

大澤
「…お前、さらりと怖い事を言ったな…」

ヴィクトリア
「…確かに言いましたわね…」

大澤・ヴィクトリア
「「…ぷ、ぷはははは！」」

双方勢いを削がれ、ついつい笑ってしまう。

大澤
「あ～、とにかく食べよう。朝から大声出したら余計にお腹空いた」

ヴィクトリア
「そうですわね。食べましょう」

朝食後……

大澤
「ところで、やる事を忘れてないよな？」

ヴィクトリア
「わかってますわ」

そう言うと物置小屋に回る。

大澤
「？ここに何か有るのか？」

ヴィクトリア
「えぇ、この中に…」

ガラララ……

物置小屋に置かれている物を見た瞬間、陸戦兵器に疎い大澤も直ぐに解った。

大澤
「キューベルワーゲンか」

ヴィクトリア
「あら、ご存知ですの？」

大澤
「元の世界なら世界に名だたる車会社の製品だ」

そして、ふと思った。

大澤
「…まさか、運転は出来ないよな？」

ヴィクトリア
「まさか！」

大澤
「…だよな」

ヴィクトリア
「…少しなら出来ますわよ」

大澤
「…マジかよ」

頭を抑える大澤。
だから、流星や艦船に乗っていて大丈夫なのか？

ヴィクトリア
「？どうしたんですの？」

大澤
「いや、別に…」

ヴィクトリア
「じゃあ、運転の方よろしくお願いしますね」

大澤
「はいはい」

……運転させて事故をおこされるよりマシだ。

ブーン……

大澤
「…本当に方向は合ってるのか？」

ヴィクトリア
「当たり前です。それに一本道で解りやすいでしょう」

キューベルワーゲンを運転しながら訊く大澤。

大澤
「『最近、北の方で不審な一団が現れた。重武装なので厳重注意』
……一番厄介なのを選んだ様な気がするな…ｍ（＿＿）ｍ」

ヴィクトリア
「あなた、男でしょう？確りしなさい！」

大澤
「…あのな…重武装の相手に拳銃一挺なんてのはバカがやる事だ。
まあ、話が通じれば別だけどな」

ヴィクトリア
「…それ、遠回しに私をバカと言ってませんか？」

大澤
「…どうだろうな？」

ヴィクトリア
「…運転中でなければ半殺しにするものを…」

大澤
「…怖い巨乳女だな」

ぼそりと呟きながら、運転を続ける。

ある村の近く

大澤
「大体ここら辺だよな」

ヴィクトリア
「行商の伝えた話ですから……話の又聞きですからね」

そう言うとキューベルワーゲンから離れて、周辺を歩き回る。

ヴィクトリア
「本当に…いるんでしょうかね？」

大澤
「今更言うなよ」

そう言った瞬間、大澤は気が付いた。

「ウゥー…」

ヴィクトリア
「な、なんですの？」

そんなヴィクトリアの問いに答えた訳では無いだろうが……狼が現れた…しかも１０匹程で大澤達を囲んで。

チャキン

大澤が持っていた零式拳銃を装弾する。

大澤
「狼とは…ついてないな…」

「ワオーン！」

これが合図だった様で、狼が襲い掛かる！

ダーン！ダーン！ダーン！

狙いを付けて乱射する大澤。
二匹を撃ち倒し、一匹に傷を負わせる。
これには残りの狼達も警戒する。
しかし、一斉に襲い掛かられたら…終わりだ。

大澤
「くそ…マシンガンでも持って来るんだった！」

いつもの強気を出せない少女を抱えてるし……。
その時……

ダーン！

ビシ！

「ギャワン！」

森の中からの銃弾で、一匹に命中する。

それを切っ掛けに１０発程の銃弾が狼達に襲い掛かる。そして、最後の一匹を仕留めた時、１人が森の中から出て来た。

「大丈夫ですか！？」

カーキ色の陸軍軍服に鉄兜……の童顔兵士。

大澤

「…噂は本当だった訳だ」

次号へ

56　大澤・ヴィクトリアの場合　1（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

57　大澤・ヴィクトリアの場合　2

村の一角……ある家

「いや～、良かったです。最近、この辺は狼がよく出るんですよ」

大澤
「はあ…」

目の前で話すカーキ色の軍服の少尉。

「あ、申し訳ない。久し振りに日本人に会ったので…本官は田中正少尉、こちらは歩兵分隊を指揮する佐田哲郎軍曹です」

年若い士官に、いかにも古参とゆう風貌な下士官。
ぞくに『軍で物言うのは階級と年数』とは正にこの2人だ。

大澤
「日本海軍少尉の大澤竜です…で、後ろで眠っているのはヴィクトリアです」

堅苦しい挨拶が苦手な為、雑な紹介になっている。
ちなみに、ヴィクトリアは狼に囲まれた時に気絶した為、粗末ながらもベッドで眠っている。

田中

「海軍さんですか…まあ、お互いにこんな世界に飛ばされて、大変ですね」

大澤
「えぇ、まあ…」

……どうも話が続かない。

佐田
「…にしては、服装と言い貴族の連れと言い…我々とは現状が違いますな」

古参軍曹の指摘でやっと話の糸口が見えてきた。

大澤
「実は、あなた方とは世界が違うかもしれませんが、２００６年…６０年後の未来から来ました」

田中
「……６０年後…ですか」

佐田
「…いきなりぶっ飛んだ話になったな」

大澤
「えぇ…その前にお聞きしたいのですが、あなた方はどんな世界から？」

佐田
「うむ。我々は１９４５年８月１０日に本土決戦準備の為、九十九

里浜に移動中だったのだが、季節外れの霧に覆われ、晴れてから気付いたら何故かここに居たのだ」

大澤
「ちょ、ちょっと待ってくれ！本土決戦って…どう言う事だ！？」

普段の言葉使いに成っている事にも気付かずに訊く。

田中
「…１９４１年に米英蘭豪に宣戦布告したのですが…４３年にガダルカナル島から転進、山本元帥が戦死してから米軍の反撃が始まり、８月までにサイパン、硫黄島、フィリピン、沖縄が陥落…」

大澤
「な…なんて…話だ」

歴史や戦略に弱い大澤でも、沖縄や硫黄島が陥落したら日本の終わりだとくらいは解る。
なぜなら、大澤達の世界でもその二ヶ所が本土防空ラインの最前線だからだ。

田中
「それに…６日・９日に広島・長崎に新型爆弾が投下され…」

大澤
「新型爆弾？」

佐田
「噂じゃあ、両市共に一発で壊滅したって聞いたけどな」

大澤
「……」

新型爆弾……なんて呼称を使ったから、なんだ?とは思ったが、そんな爆弾は世界を探しても1つしか無い。
こちらの世界では実戦使用されなかった原子爆弾しか無いと察した。

佐田
「そっちはどうなんだ?その顔ならマシな様だが…」

大澤
「…そうですね。まあ、順を追って経緯を話すとですね…」

ヴィクトリア
「ん…う~ん……ここ、どこですの?」

大澤
「あ、起きたか。村の家の1つだ…狼見て気絶した人間なんて初めて見たぞ」

ヴィクトリア
「し、仕方無いでしょう…始めてなんですから……あれ?少尉さんと軍曹さんは?」

大澤
「俺らの歴史を話したら驚いてさ…どっかに行った」

コンコン

「失礼します」

大澤
「お、君はさっきの…」

「はい、先ほどはドタバタしていて紹介が遅れてしまいましたね。自分は波木一郎二等兵であります」

ヴィクトリア
「……だ～れ？」

大澤
「さっき、狼に襲われた時に助けてくれた、歩兵の１人」

佐田
「お、波木も来てたか」

波木
「あ、軍曹」

大澤
「そう言えば佐田さん。ここに転移したのは何人ですか？」

佐田
「ん、俺の指揮下の歩兵分隊と田中少尉の乗る戦車の乗員と整備兵４人…あと、軍医がいたから…２０人だな」

戦車５人＋歩兵１０人＋整備兵４人＋軍医１人……確かに２０人だ。

佐田
「まあ、我が分隊期待の新人はこの波木だがな。こいつは１８なのに射撃の腕がよくてな、９９式の狙撃銃を使わせたら一発で仕留めれるぞ」

大澤
「それで…田中少尉の戦車は？」

佐田
「三式戦車『チヌ』って言ったかな？７５ｍｍ野砲を載っけた始めての戦車だそうだがな」

大澤
「そのチヌは？」

佐田
「森の中に擬装して置いてある。何時使うか解らんし、役人どもに見付かると面倒だからな」

大澤
「なるほどな」

次号へ

57　大澤・ヴィクトリアの場合　2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

58　山城・シルヴィアの場合　1（前書き）

登場人物

田中　正
男性　２２歳　日本陸軍少尉

三式中戦車『チヌ』の戦車長兼部隊長。
年若いが佐田軍曹とも相性が良く、転移した後も兵達を纏めている。

佐田哲郎
男性　４２歳　日本陸軍軍曹

三式中戦車『チヌ』と行動を共にしていた歩兵分隊の指揮官。
古参兵らしく、田中少尉からも頼られるベテラン兵。

波木一郎
男性　１８歳　日本陸軍二等兵

佐田軍曹指揮の歩兵分隊所属の少年兵。
射撃が上手く、９９式歩兵銃の狙撃仕様を装備している。

58　山城・シルヴィアの場合　1

少し時系列を朝まで戻しまして……

その頃……山城・シルヴィアは……

シルヴィア
「シェフに伝えて下さい。何時も美味しい食事をありがとう…と」

執事
「わかりました。お伝えしておきます」

そう言うと執事は下がる。山城・シルヴィアは貴族の屋敷で朝食をとっていた。

山城
「…本当に…美味しいな…自然栽培？」

シルヴィア
「自然栽培の他にどんな栽培があるんだ？」

山城
「まあ、ハウス栽培とか色々……けど、やっぱり自然栽培だよな」

福本勇気に誘われ、彼の祖父…福本大介元帥の住む田舎へと行った時に実感した。
元帥は気さくに話し掛けて…奥さんのマリーダ元帥もだが…何せ始めて生で喋るのだから、会話が成り立たない。

そんな時に出されたのが、２人が作った自家製栽培の野菜だった。
福本元帥は言った。

「やっぱり、自然栽培の野菜は良い。最近は科学農薬が流行りの様だが、そんなの恐ろしくて食べれん」

解る様な気がした。
確かに病気や害虫は付かないが、怖いのがその作用が人間に向く事だ。
それは毒を自分で食べる様なものである。
そして、もう１つ福本元帥は……

「虫食いがある野菜は安心できる。何故なら虫が食べる程美味いと言う証拠だ」

それはちと違う様な…と思いつつも、否定は出来ない話だ。
見た目・栽培過程での安全を優勢するか。
品質・消費者の安全を優勢するか。
……最終的には個人判断になるが、この世界では自然栽培であって欲しいと、山城は思った。

さて、山城・シルヴィアの２人は西方面の調査に向かった。
２人が重点的に調査するのは『動く砲台』と『２人の英雄』の噂。
ただ、『２人の英雄』に関しては死亡してしまったらしいのだが……。
他にも調査する噂が有るので、寝泊まりと食事が問題になったが……シルヴィアの親戚がいるとの事で、そこにご厄介に成ることにした。

山城
「…で、その親戚って？」

朝食を終え、その親戚に挨拶しておこうと思い、シルヴィアに訊く山城。

シルヴィア
「私は面倒臭いから『叔母様』と呼んでいるが…何せ私の母方の祖母の姉の嫁の娘だから…」

山城
「うわ…それは面倒臭いわ…それで叔母様は？」

シルヴィア
「ん？あそこの畑に…ほれ、居るぞ」

見ると、麦わら帽子に農民の奥さん方が着る服を着た女性が野菜の世話をしていた。

シルヴィア
「ヒルデン叔母さま～♪＼（＾ー＾）／」

「あら、シルヴィアちゃん。おはよう」

……まったく、屋敷の敷地内で無かったら、まず解らない。
まさか…シルヴィアの一族は特殊なのか？

シルヴィア
「叔母様、ご紹介します。山城正人少尉です」

ヒルデン
「あら、こんにちは」

山城
「あ、どうも」

シルヴィア
「叔母様、アリス姉様はどこですか？」

ヒルデン
「アリスなら…学校だと思うよ」

シルヴィア
「そうですか…解りました。また後で」

山城
「あ、失礼します」

ヒルデン
「気よつけて行って来なさい」

馬で移動する途中…

山城

「なあ…アリス姉様って？」

シルヴィア
「ヒルデン叔母様の娘だ。２０歳で、最近は学校で平民の子供達に文字の読み書きと計算を教えておる」

山城
「…君の一族って変わってるね」

シルヴィア
「…そう思うか？」

山城
「普通の人から見ればね…まあ、良い事はしてるけどさ」

シルヴィア
「そうか…とにかく、今は急ぐぞ」

山城
「あぁ」

学校のある村

シルヴィア
「アリス姉様！」

「あら、シルヴィア？」

明らかに服装が違う…それでも着ている物は控え目…女性が居た。
ただ…山城としては彼女と話していたもう1人の人物が気になった。

山城
「あの…そちらの方は？」

アリス
「あ、こちらは…」

「…戦車第2師団機動砲兵第2連隊所属の大倉正志中尉です」

山城
「失礼しました。自分は海軍少尉の山城正人です。もし軍律の事であれば御心配無く。私達はあなた方を探してはいますが、捕まえる為に参ったのではありませんので」

シルヴィア
「…はぁ？どう言う事だ？」

山城
「それについては次号で説明する」

次号へ

58　山城・シルヴィアの場合　1（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

59　山城・シルヴィアの場合　2

村道を歩きつつ、山城とシルヴィアは大倉中尉の話を聞いていた。

大倉
「我々、機動砲兵第二連隊はサクラサク峠にて、フィリピンを奪還するべく進攻して来たアメリカ軍と戦闘を行っておりました。ですが、数が多すぎでした。切り札でもあった我々に移動命令が下り、移動していたのですが…」

山城
「いつの間にかこの世界に転移していた…と？」

大倉
「はい…その事に気が付いたのは夜が明けてからです。自分が偵察に行ったのですが…森を出たらここだった訳です」

山城
「なるほど…」

シルヴィア
「……あ～、その…軍律云々の事は…」

山城
「つまり、移動中にいなくなったから、敵前逃亡…じゃないかって事。敵前逃亡は銃殺刑などに匹敵する重罰事項だからね」

シルヴィア
「……近代軍隊は厳しいな」

山城
「そうやって規定しとかないと、統制が効かないからね」
まあ…指揮官よっては人心掌握とかで統制を効かせた人もいるが…。
大倉
「ここです。ここに格納してあります」
見ると、田舎のトラクター置き場を多少大きくした様な木造倉庫。
兵士
「！中尉！」
大倉
「ご苦労。大丈夫だ、こちらは海軍サンだ。開けてくれ」
兵士
「は！」
ガラララ……
倉庫の引き戸が開けられる。
山城
「これは…」
大倉
「７５ｍｍ野砲を搭載した１式砲戦車『ホニ１』です」

固定された７５ｍｍ野砲に、狭めの戦闘室…９７式チハの車体に取って付けた様な自走砲だが、別段悪くは無さそうだ。

シルヴィア
「なるほど…『動く砲台』の意味がよく解る」

山城
「ところで、弾薬は？」

大倉
「補給前だったから乏しい…１０発程しか無かった…まあ、同じ口径なら９０式野砲でも大丈夫だ」

山城
「…砲弾の補給が先か」

さて、そうなるとここで作るか、向こうから輸送して持って来るしかない。
となると……

山城
「輸送機いるよな…」

最近の山城にとって頭の痛い問題は輸送機の必要性と滑走路の延長である。
大量の砲弾や製造機材を輸送するとなると、第二次大戦中の輸送機では積載量が足りず、軍が使っている輸送機を使うしかない。
そうなると、滑走距離が長くなり自然と滑走路を延長するしかなくなるのである。

シルヴィア
「そう言えば、今までどうやって生活していたのだ？」

大倉
「元々、私も兵も農家出身ですから…まあ、農業やりながらのんびりと…」

福本
「ある意味、日本人にとっては良い所かもしれませんね」

農家での経験が活かせる場だから…。

大倉
「そうですね。何となく、日本に似ていますし…出来ればここに居たいですがね…」

そう言う大倉中尉の横顔は、心無しか寂しそうに山城には見えた。

大倉
「さて…我々はどうなるのかな？」

山城
「先ほども言いました通り、我々とは世界と時代が違います。それに既に時効でしょう…一応、陸軍には連絡しますが、不可抗力かと…」

大倉
「……我々は軍人です」

山城
「はい」

大倉
「軍人は国を守る事が仕事……ですが、我々はここに来て、ここに住んでおります」

シルヴィア
「うむ」

大倉
「ここは住みやすい…そして、人々も好い人達ばかりだ…もし、そんな人達を守れるなら軍人として、あなた方に命を預けたい」

山城
「……話が随分先走ってしまいましたが…良いでしょう。私の他にも、仲間があちこちを調査していますから人数が増えるでしょう…
…よろしくお願いします」

大倉
「こちらこそ…よろしく」

次号へ

59　山城・シルヴィアの場合　2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

６０　泉・岡田の場合　１

これまた朝に時系列を戻しまして……

泉・岡田ペア

バタバタバタバタ……

岡田
「これと言った異常はありませんね」

泉
「こんな所で異常があったら大変よ」

残念ながら、ヘリに零戦や流星の様に３０００ｋｍを飛ぶ能力はない。（よくて１０００ｋｍちょい）
この為、採用時４０式輸送ヘリは約４００ｋｍの航続距離では少し無理……なのだが、１９８０年採用のブラックホークを火縄銃を当時のヨーロッパの倍作り、アジアで一番早く近代化させた国がそのままで放置しておく訳が無い。
なおかつ、試行錯誤しながらも改造・改良を得意とするのが日本人である。
海洋国である日本にとって、足の長さはどうしても必要であり、航続距離延長を主眼に改造・改良が加えられた。
他にも技術進歩により新たな装備・改良された装備も搭載された。
ちなみに、泉・岡田が乗る４０式輸送ヘリは通常で１２００～１４００ｋｍ、増槽装備で２２２０ｋｍとなる。

岡田
「ところで泉先輩。どこまで行きます？」

泉
「そうね…燃料の事もあるから…そう遠くは行けないし…」

日本と違い、飛行機が無いこの世界に飛行場はおろか、燃料の確保すらままならない。

泉
「まあ、行ける所まで調べてはみるけど…本当なら、もう少し人員と機材があればね…」

まあ…無茶な話ではあるが…。

岡田
「あれ……泉先輩、下に何かいますよ？」

見ると、ヘリの下の海面に何か大きめの物体。

泉
「…鯨……じゃないわね。中型潜水艦……伊号の巡潜クラスね」

岡田
「よく解りましたね」

泉
「あのね、私はヘリパイよ？イザとなれば対潜ヘリを飛ばさなければならないの！」

岡田
「す、すみません……で、どうします?ほっとく訳にもいきませんし…」

泉
「先ずは正体の確認ね。伊号にしろ、何しろ、正体を確かめないと…」

岡田
「燃料、多めに積んどいて良かったですね」

１０分後……

岡田
「あ、潜水艦浮上」

泉
「艦橋に船名が書いてあるはずよ…伊号ならカタカナのイに数字の配列で」

岡田
「ちょっと待って下さい……あ、書いてあります。え～と…イ…イ2…9…伊２９です」

泉
「伊２９号か…完全に日本の潜水艦ね…この近くに港か海軍の基地ってないの?」

岡田
「そうですね……あ、数キロ行った所に駆逐艦と水雷艇の基地があります。そっちに行ってみましょう」

泉
「……そうね。そっちの方がいいわね。よし、飛ばすわよ！」

岡田
「……お手柔らかにお願いします」

物によっては日露戦争程度の技術があるこの世界では駆逐艦は３００トン、水雷艇は１００トン前後である。
特型駆逐艦の様な大型駆逐艦（１２００トンクラス）はまだ登場していないから、基地…と行っても、粗末な物だが…もこじんまりとしている。

士官
「大佐！たいさ～！」

「どうした？」

士官
「は！彼らが来ました！」

「……彼ら？」

士官
「彼らです！ほら、忘れました？ネイラーン共和国との戦い…ラバナスター沖海戦を戦った日本人達ですよ！！」
若い士官は興奮しながら大佐と呼んだ士官に話す。

「…ところで、彼らの用件は何かね？」

士官
「え、あ、はい。ここから数キロ下った所で、また転移艦を見付けたので、回航してほしいと…」

「そうか…うむ、いいだろ。水雷艇を一隻回そう」

士官
「は！彼らに伝えて来ます！」
そう言うと、士官は出て行った。

「……まさか、後輩と会う事になるとは……解らんな」

次号へ

６０　泉・岡田の場合　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

61　泉・岡田の場合　2（前書き）

本日・明日と『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。

61　泉・岡田の場合　2

基地から数キロの海域

泉
「大きいわね～…原子力潜水艦に比べたら小さいけどね」

岡田
「まあ…当時の日本潜水艦は大型な方ですから…あと、時代が違いますから…」

水雷艇に同乗し、潜水艦…伊２９にのいる海域に向かった泉と岡田。接近すると、搭載機銃を向けてきたが…岡田が慌てて持って来ていた日の丸を振ると向こうも解ったのか、戦闘態勢を解いてくれた。

「いや～、大きいですね～！１０００トンですか？」

まるで真新しい玩具を見て興奮する子供の様な青年士官が２人に声を掛ける。

泉
「……失礼ですが、あなたは？」

「失礼しました。本官はこの水雷艇艇長、マルコム少尉です」

岡田

「あ、どうも…ちなみにあの艦は基準が約２０００、水中で約３６００トンらしいです」

先程、泉から仕入れた知識を披露する岡田。
ちなみに伊４００潜水艦は３５３０トンの６５６０トン、海上自衛隊のそうりゅう型潜水艦は２９００トンの４２００トンである。
この為、伊４００潜水艦は通常動力潜水艦としては最大の物となる。

マルコム少尉
「……あの…水中って…潜るんですか！？」

泉
「…あ、そっか、この頃はまだ潜水艦無いんだった…」

潜水艦は南北戦争時に南軍で開発された物であり、日露戦争時ではまだまだ研究・開発段階であった。
そして、第一次世界大戦時にドイツがUボートを大量投入し、本格的に兵器として潜水艦を使用する事になる。
つまり、日露戦争時レベルの技術があるこの世界では、開発途上か全く無い…かのどちらかである。

マルコム少尉
「あんな大きな船体が潜水するなんて……すごい…」

まあ、海軍の人間だからこれ位の驚きだろうが、何にも知らない人間からすれば、魔法か何かと疑ってもおかしくは無いだろ。

駆逐艦・水雷艇基地

基地は大騒ぎだった。
何せ、１００～３００トンクラスの水雷艇・駆逐艦しか無いところに、２０００トン、しかも、潜水できる艦が来たのだから、手空きの士官から二等水兵までお祭り騒ぎの様に岸壁に集まっていた。

岡田
「……外、凄い事になってますよ？」

泉
「まあ…そうもなるでしょうね…」

「……やはり、ここは別世界か…」

泉
「はい…木梨鷹一中佐、伊２９潜水艦はどの様にして…」

木梨中佐
「昭和１９年7月２６日、訪独からの帰還途中、フィリピン沖で敵魚雷を受けた…多分、敵潜水艦の雷撃だろう。しかし、気付いたらここにいた…と言ったところだ」

岡田
「…なるほど」

今回は気象等では無く、敵の魚雷攻撃による衝撃か何かで転移した様だ。

コンコン

岡田
「あ、どうぞ」

マルコム少尉
「失礼します。基地司令が皆さんに会いたいとの事です」

そう言ってマルコム少尉の後ろから入って来た人間を見た瞬間、木梨中佐は慌てて敬礼した。
続き、岡田も思い出したのか慌てて敬礼する

泉
「ちょ、ちょっと!?なんで敬礼してるの?」

岡田
「ひ…広瀬中佐だよ…軍神広瀬武夫中佐だよ!」

泉
「え…あ、あの、旅順閉塞作戦の広瀬中佐!?」

『坂の上の雲』を見た人がいるなら解る筈だが、秋山真之の親友である人物である。

広瀬武夫
「その通り…まあ、今は大佐で基地司令をしているがね」

木梨中佐
「では…広瀬大佐もこちらに?」

広瀬大佐
「うむ…閉塞船からボートで退避中に至近弾により海に放り出された……そして、気付いた時にはこの近くの海岸に打ち上げられたのさ」

岡田
「それは…また…」

これ位しか言葉は出なかった。
何せ、相手は軍神……緊張の余り、言葉が出ない。

広瀬大佐
「まあ、私の事はいい。今日はここに泊まるといい。諸君達の話が聞きたい…潜水艦の乗組員もなんとかしよう」

泉
「は、はい…お、お願いします」

なぜか泉が代表する形で返事をした。

次号へ

61　泉・岡田の場合　2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

62　技術革新

山城達が調査に勤しんでる頃……

9月23日

グローリアス士官学校

…のある一室。

コンコン

福本（勇気）
「鷲井先輩。入りますよ？」

鷲井
「ん、入っていいぞ」

福本（勇）
「では、失礼……うわ…また凄い事になってますね…」

鷲井の部屋は大変な状況だった。
机や床には資料や設計図が転がり、足の踏み場を見付けるのに苦労する。

鷲井
「あ～、済まん済まん。昨日の内に短機関銃の案が纏まったから、整理してたらこんな事に…」

福本（勇）
「あ、纏まったんですか！それで、どうゆう風に？」

鷲井
「ドイツのＭＰ１８短機関銃を採用する事にした。あれなら丁度この世界の技術レベルなら出来そうだしさ」

福本（勇）
「確か、ベルクマン社製でしたよね？世界最初のマシンガンで、ＭＰ３８とか１００式短機関銃の基になった」

鷲井
「まあ、ＭＰ３８は発展改良型だから間違っては無いな。拳銃は近代的な１９２５年…大正１４年採用の１４年式拳銃を採用する事にした」

福本（勇）
「…それをこの世界で造るには多少時間が掛かりますね」

鷲井
「まあ、唯一の救いは、軍艦の主砲が日露戦争レベルの物だった事かな」

福本（勇）
「問題はそれを、如何にして銃火器技術に転用出来るか…ですね」

鷲井
「そこで提案。向こうから銃弾製造機、及び銃製造機の輸送、ローラー・ブルドーザーの輸送と大型輸送機の手配を頼む」

福本（勇）
「やはり、滑走路の延長は避けられませんか…」

鷲井
「大型機材の輸送が必要になってくるからな……つーか、日本政府はどこまで足を突っ込むつもりだ？」

福本（勇）
「…既に国防省・外務省、財務省、通産省…一部も有りますがかなりの省庁を巻き込んでますね」

鷲井
「…『次元の穴』が何時閉まるかも解らないのに、日本全部を巻き込むつもりか？」

福本（勇）
「…下手をしたら世界を巻き込むかも知れませんよ。政府はある程度把握したら、全世界に発表する予定で…」

鷲井
「……何時からそんな大胆になったんだ、我が日本政府は？」

福本
「さあ…まあ、時には大胆に成らないとね」

鷲井
「…あ～、アホらしい……飯食いに行こう」

福本（勇）

「あはは…そうですね」

士官学校食堂

鷲井
「そういえば、お前はあっちに帰ったんじゃあ…」

福本（勇）
「父が、何か要る物が有るか聞いてこい…と言われものですから…」

鷲井
「元帥の孫も大変だな～。しかも、綺麗な少女付き…福本元帥に倣ったか？」

福本（勇）
「鷲井先輩！」

鷲井
「冗談…冗談だよ…怒る事も無いだろう。まあ、父親は何れ連合艦隊司令長官か国防総長か…だったけ？」

福本（勇）
「間違ってはいませんよ。ただ、父と自分は別なんで…」

鷲井
「ははは…あ、話は変わるが、最近日本の…おかしくないか？」

福本（勇）
「…おかしいですか?世界征服なんてのは計画してませんが…」

鷲井
「いや、そうじゃなくて…その、技術革新のスピードが速くないか?」

福本（勇）
「そ、そうですか?僕としては普通かと…」

鷲井
「いや…ここ10年間、『あの出来事』以来徐々にだが発展スピードが上がって、この1年は目まぐるしく思うんだが…」

福本（勇）
「…まあ、日本人は手が細かいですからね。そのせいも有るかと…」

鷲井
「まあ、サブルム戦前に来日したアインシュタイン博士はそれを誉めてたが……それでもなあ…」

ちなみに、原子力開発が米英に遅れていた日本はアメリカよりアインシュタイン博士を迎え入れ原子力開発に力を注いだ。
他にも、航空エンジンなどの動力機関の開発にも、アインシュタイン博士は関わっている。

鷲井
「大体、戦中から研究が始まっていた超電磁砲…レールガンの開発は50年間もやっていた…なのに動力やサイズなどの問題で一時中止の動きがあった」

福本（勇）
「えぇ、余りにも時間が掛かり過ぎで、予算を取りすぎだと言われたとかで…」

鷲井
「あぁ…それが１０年前の『あの出来事』以降、その話はすっかり無くなった…他にも、レーザー・ビーム兵器の開発も順調になり出したらしいし…」

福本（勇）
「…さすが技術士官。耳が早いですね」

鷲井
「当たり前だ、それで飯食ってるんだからな。身内の中じゃあ、それこそ、宇宙戦艦ヤマトとかガンダムが実現するんじゃないかと騒いでるぞ」

福本（勇）
「それは…ちょっと…」

鷲井
「さすがにそうなるには後1世紀は掛かるぞ。しかし、実現の可能性はある」

福本（勇）
「まあ…そうですね」

鷲井
「…まあ、技術革新は喜ばしいんだがな…何にも無いのにスピード

が速い…と思ってさ」

次号へ

62　技術革新（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

63　大澤・ヴィクトリアの場合　3

鷲井と福本（勇気）がそんな話をしている頃……ヴィクトリア・大澤はと言うと……

ヴィクトリアの別荘

大澤
「街に行く??」

ヴィクトリア
「えぇ、食料の方が少なくなってきたので買いに行こうと思いまして…」

大澤
「なんだ、堅苦しいと思ってたら、街にも行ってるんじゃん」

ヴィクトリア
「ち、違いますわ！いつもなら、メイド達に行かせるんですの！今回は居ないので行くんですわ！」

大澤
「そんなに怒る事は無いだろう…」

最近思うのだが、俺の言葉に過剰反応し過ぎではないかと……。

大澤
「なら、早めに出ようぜ。どうせ途中であの村に立ち寄るんだろ?」

ヴィクトリア
「え、えぇ…」

大澤
「よし、決まり。早めに行こう。下手すると女の長話は長いからな〜」

ヴィクトリア
「ちょっと！なんですって！？」

大澤
「おっと、ついつい口に出ちゃった…」

数時間後……

ある街

ヴィクトリア
「え〜と…あれ買った…これ買った…それも買った…」

大澤
「……まだあんのか？」

両手一杯に買った物を持たされている大澤。

大澤
「…今更ながら、買い物に付き合わされた男の気持ちが、よーく解

るぜ」

ヴィクトリア
「何か言いまして？」

大澤
「あぁ……つーか、お前は知識だけは有るんだな！」

野菜は何処で買う、肉は何処で買う、魚は何処で買う……買う場所と買い方は一応知っていた。

ヴィクトリア
「あ、当たり前ですわ！メイド達から色々聞いてましたの！」

大澤
「ふ～ん……あ、じゃあ、街に買い物に来たのは今日が始めてか！？」

ヴィクトリア
「えぇ…自分の足で街を歩くのは始めてよ」

大澤
「ふ～ん…そうなのか……」

この時、大澤の脳内では色々と計算をしていた。

大澤
（このまま帰るのは…マイナスだな…しかも、相手はヴィクトリアだし……ここはどっかで時間を潰そう。そうだな……もうすぐ昼だから、何処かで昼食にでもしようとか……荷物は邪魔だな…街外れ

に擬装して置いた車に置いておこう。出来れば車の近くが良いな…
…そういえば、車置いた近くに喫茶店か何かがあったな…あそこに
しよう！）

……などと、女の子の事にならないと活発化しない大澤の頭が活
動する。

大澤
「おい！女の子と活発化は余計だ！！」

ヴィクトリア
「？誰に言ってるの？」

大澤
「作者にだ！」

４０分後……

街外れの飲食店

ヴィクトリア
「ねぇ？」

大澤
「なに？」

食後の一杯…とゆう事で紅茶とカフェオレを飲む2人。

ヴィクトリア
「飛行中にお腹が空く事は無いの？」

大澤
「そうだな…ジェット機になっては無くなったが…レシプロ機の時なら航空弁当が用意してあったとか…」

ヴィクトリア
「航空弁当？」

大澤
「あぁ…まあ、俺も教官や教科書のコラム欄を見て知ったんだけどな」

長距離飛行となると、時として空腹になる事がある。これが戦闘機乗りなら、下手をすれば空中戦の激しい機動により体に変調を起こさないとも限らない。
この為、航空弁当を載せて飛ぶ場合もある。

大澤
「教官の話だと、主に片手で食べれる物…おにぎりとかお稲荷とかだったんだと。けど、第七艦隊がヨーロッパに派遣されてた時は、サンドイッチとか、現地の材料で調理出来る物とか、イギリス・アメリカの部隊が食べていた物を取り入れたんだってさ」

ヴィクトリア
「ふ～ん……」

大澤
「ん？どうした？」

ヴィクトリア
「な、何でもありませんわ！早く飲んで行きますわよ！」

大澤
「…はいはい」

ブーン……

キューベルワーゲンを運転する大澤。

大澤
「はあ…荷物持ちの次は運転か」

ヴィクトリア
「あら、私が代わりに運転しましょうか？」

大澤
「……止めろ。事故る」

それこそ、唯一最良の移動手段であるキューベルワーゲンが壊されたら堪ったもんじゃない。

大澤
「まった…ん！」

キキィィィ！！

ヴィクトリア
「な、何ですの！？いきなり急ブレーキを踏んで！？」

大澤
「バカ、前を見ろ、前を！」

ヴィクトリアが前を見ると、人が倒れていた。
真っ先に降りた大澤が意識の有無を確認する。

ヴィクトリア
「どお？」

大澤
「気絶はしているが、脈はある……生きてるよ」

ヴィクトリア
「……格好からして、この辺の子では無いわね」

大澤
「どっちかとゆうと、俺達の世界の格好だな…しかも、女の子」

ヴィクトリア
「……一言多い。どうする？」

大澤
「村に行こう。どっちにしろ、医者に見せた方がいい」

次号へ

63　大澤・ヴィクトリアの場合　3（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

64　大澤・ヴィクトリアの場合　4

田中少尉達のいる村

田中少尉
「どうですか？」

軍医
「うむ、軽い脱水症状と空腹と疲れによって気絶したのだろう。命に別状はない」

ヴィクトリア
「良かった♪」

軍医
「まあ、当分安静にしておけば大丈夫だ。あとは起きた後にしっかりと飯を食べさせ、水を飲ませて休ませれば回復する」

田中少尉
「ありがとうございます」

軍医
「お大事に」

そう言うと、軍医は部屋を出ていった。

田中少尉
「さて…彼女はいったい何処の子なのか…」

大澤
「多分…俺の時代の子かと…」

田中少尉
「…とゆうと？」

大澤
「俺の居た時代なら、そんなデザインの制服を来た中高生がわんさか居るんで……断定は出来ませんが、俺の居た世界かそれに近い世界の子かと…」

ヴィクトリア
「…詳しいわね。変な事してない？」

大澤
「してたら士官学校に居れんわ！退学させられとる！！」

田中少尉
「まあまあ…病人の前ですから、そんなに騒いだら起きてしまいますよ」

ヴィクトリア
「そうね。彼女はゆっくり休ませてあげましょう。と言う事で出ましょう」

3人はぞろぞろと部屋から出て行った。

夢を見ていた。
おじいちゃんの夢だ。
７５歳…一年前の終戦記念日に無くなったおじいちゃん。
だけど……おじいちゃんは嘆いていた。
おじいちゃんは志願で予科練に入って、毎日厳しい訓練に耐えていた。
しかし、戦況は悪い方向に向かい……遂におじいちゃんも特攻隊に志願したそうだ。
出撃日は８月１６日……の筈だった。
だが…８月１５日にポツダム宣言の受諾と終戦の詔書放送により戦争は終結した。それから５９年……終戦記念日はいつもおじいちゃんは泣いていた。
先輩、後輩、同期生が命を散らしたのに……なぜ生きているのかと……。
だからだろう……おじいちゃんは誠実に生きてきた。だが……世間は違った。
日本は日中・太平洋戦争で暴走したあげく、アジアに迷惑をかけ、原爆や空襲を受け２００万人もの国民を殺した、特攻隊もその犠牲の１つだと……。
この話を聞くと、おじいちゃんは嫌な顔した。
あんな奴らに、その時の人々の気持ちなんて解るものか……と。
私は解らなかった。
おじいちゃんの方が正しいのか……学校や世間で言っている事が正しいのか……？
だから…大学の日本史学科に進学を決めたのに……

フッと…目が覚めた。

「……ここは……」

ヴィクトリア
「あら、目が覚めた？」

「えぇ……ここは？」

ヴィクトリア
「安心して、あなたは道の真ん中で倒れていたのを助けてこの村に運んだのよ。あなたの名前は？」

「西田です……西田（ゆい）結衣です」

ヴィクトリア
「そう…あ、ご飯とお水はここに置いておくから食べてね」

近くの机を指差すと、ニコリと微笑んで部屋から出て行った。

ヴィクトリア
「ふう～……まさかいきなりおむすびを握る事になるなんて…」

大澤
「いや…十分旨いよ」

波木

「はい…とても初めて作った人のおむすびではありませんよ」

ついつい勢いで作り過ぎたおむすびを消費する大澤と波木。

大澤
「で、名前聞けた?」

ヴィクトリア
「彼女は西田結衣…と言っていたわ」

大澤
「そうか…とにかく、今は安静にするべきかな。事情は何時でも聞けるし」

そう言うと、おむすびを1つ食べた。

次号へ

６４　大澤・ヴィクトリアの場合　４（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

65　泉・岡田の場合　3

さて、その頃……。
泉・岡田ペアはとゆうと……

ポートウエイド……泉・岡田のいる都市の名前……には泉達同様転移して来た広瀬大佐が司令を勤める駆逐艦・水雷艇の基地がある。
いくら海軍指向のシリルティア王国でも、どこの基地にも大型艦を配備するのは経済的に無理な為、主に駆逐艦や水雷艇の基地で一応済ましている。
まあ、元々海賊などの武装勢力を抑える為においた基地なので規模は小さいといえば小さい。
しかし、建物はしっかりしており、兵舎も将校なら1人で充分住みやすいスペースを確保している。
空いた将校用の部屋を借りて、毎日ポートウエイドの街に出ては真新しい情報や噂に耳を傾けては、転移者や転移物の情報を探してみたのだが……

岡田
「…なかなか新しい情報は掴めませんね…」

泉
「そうね」

商人が居そうな飲み屋や宿屋を回ってみた2人。
別な情報は大量に入ってくるが、転移者や転移物に関する話は一向に掴めなかった。

岡田
「どうします、泉先輩？」

泉
「そうね……一度基地に戻ってみましょう。お昼を過ぎれば新しい情報も入るかもしれないし」

岡田
「そうですね。一度戻りましょう」

岡田
「ん…あれ？あれは…」

泉
「どうしたの？」

基地に戻る途中の海岸沿いの道を歩いていると、岡田があることに気付いた。

岡田
「ほら、あそこにいるのは…広瀬大佐ではありませんか？」

泉
「え？……あ、本当ね。それに誰かと一緒よ」

妙に気になった2人は密かに近くにあった岩影に隠れる。

泉

「…まさか、陸戦訓練の匍匐前進が役に立つなんて…思ってもみなかったわ」

岡田
「あはは…本当に…世の中わかりませんよね～」

そう言いながら見ていると、広瀬大佐の連れが見えた。

岡田
「女性……ですね」

泉
「女性ね」

しかも、とても仲が良さそうで……。

岡田
「…あれを見てると、福本元帥とマリーダ元帥の恋仲を思い出すのは自分だけでしょうか？」

泉
「あぁ、わかる。私もそう思った」

今なお日本海軍内では伝説の最強コンビ＋夫婦と言われる福本とマリーダ。
あの２人が結婚から６０年もラブラブなのは周知の事実で、なぜあそこまでラブラブなのかと首を傾げる者もいる程だ。
ちなみに、公民問わず新婚夫婦の目標不動の１位は、『福本元帥（マリーダ元帥）の様な幸せな家庭』だそうだ。

泉
「ところで…あの人は誰？」

岡田
「……あの格好だと、良いとこ出のお嬢様か貴族のご息女かと…」

マルコム少尉
「…何をなされているんです？御２人とも？」

泉・岡田
「「！！？」」

いきなり声を掛けられて驚く２人。

泉
「ま、マルコム少尉ですか…あ～、驚いた…」

マルコム少尉
「私としては匍匐体勢で何をしていたのかが気になるんですけど」

岡田
「あれ？マルコム少尉も何を？　確か休憩は午後からの筈…」

マルコム少尉
「えぇ、そうなんですけどね。家から侍従が来て、姉上を探しているんです……まあ、ここだとは思いましたが…」

そう言うと、広瀬大佐のいる方に叫ぶ。

マルコム少尉

「姉上！また屋敷を抜け出したんですね！父上が文句言ってますよ！！」

泉・岡田
「「あ、あ、姉上！！」」

まさか広瀬大佐と一緒にいる女性がマルコム少尉の姉！！

マルコム少尉
「あれ？言ってませんでした？自分には8歳上の姉がいるんです。父上なんか何時結婚するのかと、ハラハラドキドキの毎日で…」

溜め息を吐きながら語るマルコム少尉。
一体どれだけ苦労しているのやら……

岡田
「…そういえば、広瀬大佐は独身の筈…」

泉
「あ、そうなの？」

岡田
「はい…ただ、ロシア海軍将官の娘さんと文通してたのは有名な事実ですよ」

泉
「……似てるのかしら？」

岡田
「さあ？」

次号へ

６５　泉・岡田の場合　３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

66　泉・岡田の場合　4

さて、昼前に広瀬大佐と女性の仲が良いシーンを見た挙げ句、その女性がマルコム少尉の8歳上のお姉さんとゆう衝撃（？）の真実を知った泉・岡田ペア。
そんな2人は午後からの情報収集の為、基地の食堂で早目の昼食をとっていた。その時……

バタパタパタバタバタ！

マルコム少尉
「た、大変です！御2人共！！」

岡田
「どうしました、マルコム少尉？誰かが攻めて来ましたか？」

もちろん、冗談だが。

マルコム少尉
「いや、さすがにそれは……冗談の方はともかく、大変ですよ！」

泉
「あの…すっぱりと言ってもらって構いませんが…」

マルコム少尉
「そうですか…つい先程、近くの漁村から連絡がありまして、どうやら、不審な船が漂着したそうです」

岡田

「不審船が漂着とは…それは大変で」

マルコム少尉
「おやおや、話は簡単には終わりませんよ。話を聞いた者の話だと、見たこともない大きさの船の上に大砲が載っかってる……だそうですよ？」

泉
「…話の又聞きだけど、気になる話ね」

マルコム少尉
「そう言うと思いました。ですから大佐はこれからあなた方も加えて見に行こうと言っておられます」

岡田
「おっと、そうならヘリの方が早くありませんか？」

泉
「えぇ、確かにね…調子見についでにひとっ飛びしてみましょう」

マルコム少尉
「飛ばすんですか！乗れるんですか！？ヤッホー！」

おいおい…遊びに行くんじゃ無いんだぞ…と言うツッコミをしたかったが、歳上相手になんだかな～…と思った泉と岡田だった。

バタバタバタ……

４０式輸送ヘリが調子の良いローター音を響かせながら飛んでいた。
ちなみに、乗っているのは広瀬大佐とマルコム少尉、木梨中佐、そして、泉と岡田。
木梨中佐は『艦種位は見れば解るかも知れない』と言うことで連れて来た。

岡田
「あ、見えました…ですけど…」

広瀬大佐
「…なんだ？」

岡田
「いえ…写真で見た特型駆逐艦に似てるんですが…木梨中佐、すみませんが見てもらえませんか？」

木梨中佐
「ふむ……確かに、特型に似ているが…後ろのスロープの形から見ると…哨戒艦ではないか？」

ちなみに哨戒艦とは、読んで字の如く、哨戒任務を主とする艦……なのだが、日本海軍では主旨が違い、陸戦隊を載せた強襲艦であった。

つまり、外見と中身は大違い…と言うやつ。

岡田
「ですが、哨戒艦は旧型駆逐艦を改造した物でしたよ。ですが、あれは連装高角砲を艦橋前に配置していますから…」

泉
「ちょっと、なんで戦闘機パイロットが駆逐艦に詳しいの？」

岡田
「すみません、教官が『不時着したパイロットを拾うのは駆逐艦が多いから、色々と覚えておけ』と言われまして…」

泉
「…納得」

そう言うと、手近な着陸出来そうな所にヘリを着陸させる。

……後の調査……鷲井と山口・矢萩が資料を取り寄せた……で漁村に漂着した駆逐艦の様な艦船は一等輸送艦と判明。
機関が伊２９潜水艦の機関員達でも扱えたので、指導を受けた基地の機関員達が伊２９と共にグローリアス士官学校に回航される事になる。
まあ、ここまでは日露戦争から現代までなので泉、大澤、ヴィクトリア、岡田は対応出来た。
しかし……山城とシルヴィアは大変だった……。

次号へ

６６　泉・岡田の場合　４（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

67　山城・シルヴィアの場合　3

さて、その頃……山城とシルヴィアはとゆうと……

2人は馬に乗って駆けていた。
ちなみに遊んではいない。2人は調査項目の二つ目、『2人の英雄』について調査しに来たのだ。
しかし、当の2人は死亡している。
話によると、貴族…シルヴィアのおば様…に招待され、馬車で向かっていたところを、馬車を爆破され死亡そしたそうだ。
まあ、これだけなら後回しにも出来たが……2つの事情で調査する事なった。

シルヴィア
「しかし…この報告書を読めば読む程、お主の言った事が本当の事に思えるな」

山城
「『銃から光が出て…』となれば、レーザー銃かビーム銃しか無いよ…まあ、こっちでもまだ実用化出来て無いけど」

シルヴィア
「それが理解出来る程、お主達の世界が進んでいる証拠であろう。私など、銃の発砲炎を見間違えたのかと思ったぞ」

山城
「まあ、それも仕方ないさ」

人間なんてそんなもんである。

シルヴィア
「そこでだ！気分晴らしにお弁当にせぬか！？」

山城
「……え？」

何の気分晴らし？……と訊きたくなるんですけど……

山城
「い、いや…いいけどさ…どうゆう風の吹き回し？」

シルヴィア
「な、なに、おば様が弁当を持たせてくれてな……さ、さすがに断れんでな…」

山城
「そうか…じゃあ、適当な所で食べるか。さすがに馬上で食べるにはもったいないし」

それこそ、落として、あっ…とゆうのは嫌だしね……

……とゆう事で、山城とシルヴィアは馬を近くの木に繋いで小川のほとりで弁当を食べていた。

山城
「…と言ってもサンドイッチなんだけどさ」

シルヴィア
「…文句があるのか？」

山城
「いや、別に」

馬を翔ばせば半日の村に行くのに、お弁当…持たせてらうだけで贅沢だと思う…を作ってもらったのだし。

シルヴィア
「ところで先ほどの続きだが、その『英雄』の２人が男女で夫婦だったのは驚いたぞ」

山城
「しかも、子供がいた…歳上だけどね」

山城が注目したもう１つの理由が、子供がいた事。
資料を調べたところ、両親が死亡した時に１８歳、これが２年前の事だから、今は２０歳…と言ったところか？

シルヴィア
「しかも、爆破の犯人は住んでいた村を襲った盗賊とは…逆恨みもいいところだ」

山城
「当事者は解んないもんだよ…そうゆう事ね」

シルヴィア
「しかし、こんな所に盗賊とは…どうにかならんものか？」

山城
「そうだね…山狩りでもして盗賊を壊滅させた後に、治安維持の警察組織を置いて……かつ、民衆の経済レベルを上げて、行政が支援しないと無理かな？」

シルヴィア
「やはり、上が動かぬと何も動かん…か」

山城
「そう言う事…あ、上で思い出した」

シルヴィア
「なんだ？」

山城
「福本２士生…勇気関連の話だけど…」

シルヴィア
「あぁ、大元帥殿の孫だな。彼がどうした？」

山城
「去年の夏だったかな？…あいつのクラスに、良いとこのお嬢と恋仲の奴がいて、そのお嬢が別の奴と結婚するとかで大騒ぎになったんだ」

シルヴィア
「…それは本人にとっては大事であろう」

山城

「まあな…けど、福本は話を聞いている内に「怪しい」と言い出した。で、そうこうしている内にそのお嬢が相手に家に行く日になった」

シルヴィア
「その筋から察するに、恋仲相手は妨害しに行ったか？」

山城
「まあ、そうだ……後が大変だったがな」

シルヴィア
「…と言うと？」

山城
「何とお嬢の婚約相手の父親は裏では有名な闇ブローカーでな、たまたま早めに来ていたお嬢と恋仲が武器商人との取り引き現場に遭遇して…」

シルヴィア
「ぶっちゃけ…有り得ぬ」

山城
「そんな有り得ない事が起きるのが世の中なんだよ……で、絶体絶命！って時に乱入したのが福本と俺」

シルヴィア
「その様子では相当暴れたな」

山城
「残念ながら、俺は2人を逃がさなきゃならなかったから2・3人

しか張り倒してないが、福本は随分暴れてた」

シルヴィア
「その光景…一度見てみたいものだ……さて、もうそれそろ行こう。長居してしまった様だしな」

山城
「あぁ、そうだね」

そう言うと2人は、繋いであった馬に乗り込み、村に向かって馬を走らせた。

次号へ

67　山城・シルヴィアの場合　3（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

68　山城・シルヴィアの場合　4

さて、馬を走らせた山城とシルヴィアの2人。
そして……

ある村

シルヴィア
「ここで……あっているのか？」

山城
「う～ん…あの報告書に書いてあった簡単な地図と記載通りなら…ここの筈…」
残念ながら、保管場所が悪かったのか…あるいは元々薄かったのか…インクが掠れたりして読みにくくなっている。
そんな中を苦労して解読しながら来たのだから……あっててほしい。

山城
「まあ、間違ってたとしても、人に訊けばいい事だし」

シルヴィア
「……それもそうだな」

そして2人は、村の中に入って行く。

山城とシルヴィアは村の代表者の家を訪ねた。

もちろん、２人の『英雄』の事を訊く為だ。
家の外では見慣れない２人……しかし、服装を見れば貴族と軍人だとは解った様だ……が一体何の用だろうと集まっている。
そんな視線に晒されながら、山城は『英雄』の事で来たと話すと代表者は昨日の事の様に覚えていると話してくれた。
英雄の２人…男女は約２０年前にひょっこりと現れたそうだ。
最初は衣服や言葉の違いから村人も流れ者の外国人程度の認識だった。
そして、行く宛の無い２人を親切な村人達は使わなくなっていた礼拝堂を住居として使う様に勧め、ボロくなっていた礼拝堂を２人を加えた村人総出で住居として直したそうだ。
言葉の方も１～２ヶ月後には苦労しながらも話せる様になったらしい。
そして、月日は流れ、２人の間に子供も生まれ、順風満帆！…といった時に盗賊が村を襲った。
２人は持っていた光の出る銃……レーザー・ビーム銃……を持ち出して撃退。
これを見ていた村人達が２人を『英雄』と称えのだ。そして、２人の噂を聞いた貴族……シルヴィアのおば様……が２人を呼んで……となった訳である。
いきなりの２人の死に村人は悲しみ、埋葬は村総出で行われた。

山城
「…そういえば、御２人にお子さんいましたよね？確か男の子が？」

この質問をした瞬間、村人達はザワザワと騒ぎ出した。

シルヴィア
「（……さすがに、この質問は不味かったのではないか？）」

山城
「（仕方ないじゃん、気になるところなんだし……それに両親から何か聞いてるかも知れないし）」

こそこそ小声で話す山城とシルヴィア。
村の代表者は困惑した顔をしながらも、その息子の話をしてくれた。
それまでは、誰に対しても優しかった好青年が両親の死で一転、冷酷になってしまったそうだ。
そして、今やほとんど誰とも接触しなくなっていた。

シルヴィア
「…それで、今や唯一、一方的ながらも接触しているのは、幼馴染みのエリカとゆう女の子だけか…」

山城
「まあ、両親殺されて性格変わる事は解らんでもないがな……いくらなんでも変わり過ぎだな」

そこが物凄く怪しい……と言うべきかどうかの言葉の定義は置いといて……変だ。

シルヴィア
「……冷たくされても真っ向から向かうか……尊敬に値するな」

山城
「ん、なんか言った？」

シルヴィア

「べ、別に！ひ、独り言だから気にするな！」

山城
「いや…そんなに慌てなくても…」

と言うか、そんなに慌てる事でも言ったのか？
そんな事を気にしつつ、山城とシルヴィアはその幼馴染みの家へと向かった。

次号へ

68　山城・シルヴィアの場合　4（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

69　山城・シルヴィアの場合　5

山城
「山の中…ねぇ」

シルヴィア
「…本当にこっちか？」

山城
「……解らん」

シルヴィア
「…だろうな」

唯一接触のあるエリカとゆう名の女の子を探して山に入った山城とシルヴィア。家に行くと、山に行ったと言われたので、山に入ったのだが……

山城
「どこにいるんだーー！？」

シルヴィア
「……叫んで出て来るなら楽なのだがな」

ザクザクザク……

落ち葉や枝を踏み締めながら前に前にと進む2人。

シルヴィア

「……最終的に迷子になったは無しだぞ」

山城
「あのね…日本海軍士官を嘗めないでもらいたいな」

そう言うと、ポケットから何かを取り出す。

シルヴィア
「！方位磁石か？」

山城
「まさか、六甲山でのサバイバル訓練が役に立つとは思わなかったよ」

本当に人生とゆうのは解らない。

シルヴィア
「そ、そう言えば、お主は向こうの世界ではどんな学校生活をしていたのだ？」

山城
「ん…そうだな…ほとんどシルヴィア達と一緒かな…ただ、他にもさっき言ったみたいにサバイバル訓練とか、ある程度の航空機操縦訓練とか…あるいは陸戦訓練とか…」

シルヴィア
「他には？　何か娯楽の様な事はしなかったのか？」
…周りに人が居ないせいか、何時もより多弁になっているような気がしないでも無いが……あえて気にしない。山城
「娯楽ねぇ……あ、時々、乗馬してたかな」

シルヴィア
「…ん？　幼い頃に乗馬をしていたのは聞いたが…」

山城
「小学校生の時に一年間習った後、疎遠になってたんだけど、士官学校に入学した時に親しくしてた先輩誘われてね…それで乗ってた」

まあ、誘われて再び始まった乗馬が、今や同好会になってるのが凄いのだが……

……と、質問攻めにあいながら、山……森にも見えなくも無いが……を進んだが……

シルヴィア
「見付からん！」

山城
「…仕方ない。一度出るか」

下手に探し回って奥に入り、迷子になりました…とゆうのは避けたい。

シルヴィア
「そうだな……今思えば家の前で待っていれば良かったな」

山城
「…若さ故の過ちだよ」

方位磁石を見ながら山城が呟く。

シルヴィア
「若さ故か……我が父に言ってやりたい」

山城
「え？」

シルヴィア
「……父上は私と会う度に見合い相手を選べと迫ってくる……別によいではないか…結婚などこっちが決める事だとゆうのにな」

山城
「……そうだね」

あれ、無意識に返事が遅れた様な……疲れたかな？今夜は早めに寝よう。

ザクザクザク……

山城を先頭にシルヴィアが後ろから付いて歩く。

無事に山から出て来た2人。

シルヴィア
「もう一度、エリカさんの家に行くか？」

山城

「その方が良いかもね」

もしかしたらすれ違いになるかも知れないが、下手に動いたら余計に会えなくなるし……。

シルヴィア
「ん…おい、あの人ではないか？」

山城
「え？」

見ると、如何にもしょんぼりとした、少し歳上の女性が前を歩いていた。

シルヴィア
「え、えーと…エリカさんですよね？」

ぎこちなくシルヴィアが聞く。

「は、はい…そうですけど…」

山城
「よかった。あなたを探していたんですよ。あなたの幼なじみの事で…」

その瞬間…彼女は人が変わったかの様に叫んだ。

「お願いです！　彼を…リチャードを一緒に止めて下さい！！」

ただただ…2人は驚きながらお互いを見るしかなかった。

69　山城・シルヴィアの場合　5（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

70　山城・シルヴィアの場合　6

一時間後……

山城
「なるほどな…」

エリカから話を聞いた山城が呟いた。
話によると、リチャード・ブラウン……例の2人の英雄の1人息子……は2年前に爆殺された両親の復讐を誓い、盗賊達を殲滅しようとしているらしい。
だから、後々周りに何かが無い様にエリカを始め村人達に対し冷酷に接する様になったそうだ。
しかも、最近盗賊達の隠れ家を見付け出した様だとか……。

山城
「……シルヴィア、どうやって止める？」

シルヴィア
「お主なぁ…こう言った事は得意であろう？」

山城
「こんなのが得意なのは福本の方だよ…残念ながらね」

いったい何でかは……解る様な解らん様な気もするが……福本（勇気）は何故か得意だ。
やはり…あの大提督の孫だからか？

シルヴィア
「なら…何か策は無いのか!?」

山城
「あのね、そんなポンポン思い付く……？」

ふと、ある事が気になった。
隠れ家は解ったがいったいリチャードはどうやって盗賊達を殲滅する気だ？

山城
「あの、いったいリチャードさんはどうやってそれを実行するんでしょうか？」

エリカ
「あ…多分、あのスーツを着るんだと思います」

シルヴィア
「はあ？　スーツ？　服で盗賊達を殲滅だと？　夢でもあるまいし…」

山城
「すみません、エリカさん。そのスーツどこにあります？」

エリカ
「え、彼の家にありますが……何か？」

山城
「いえ、どんなのか気になりまして…出来れば実物を見たいなと…」

エリカ
「あ、じゃあ、行きましょう。多分、リチャードは今家に居ない筈ですから」

シルヴィア
「お、おい…いったい…」

山城
「まあ、まず物を見ないとね」

今から思えば、こんな山や森の中の村に鍵付きの錠がある家は少ない。
それは彼の家も同じで……

エリカ
「あ、どうぞどうぞ。狭くてゴタゴタしてますけど…」

まあ、狭くも無くさりとて広くも無く…また、それほどゴタゴタもしていないと思うのだが……

シルヴィア
「…性格が変わった割には…すっきりしているが…」

山城
「いや、変わったって言っても、周りの印象が変わっただけだからさ」

……多分。

山城
「だが……いったい、その後はどうする気なんだろうか…」

問題はそこだ。
まあ、こう言った事は福本元帥とかの年長者に意見を求めるべきなんだろうが……

エリカ
「あ！　ありました！　これです、これ！」

そう言って出して来た……いや、引っ張り出して来た物を見た瞬間、山城の顔が驚きと焦りとも採れる顔する。

シルヴィア
「ん？　どうした？」

山城
「まさか…こんな物だったとは…」

エリカ
「あの…着てみましょうか？」

山城
「え、着れるんですか！？」

エリカ
「えぇ、リチャードから教わりましたから…私にはブカブカですけど…」

山城
「いえいえ、物が見れただけで十分です」

そう言うと、スーツを元の場所になおす様お願いすると、山城は出ていった。

シルヴィア
「おい！　さっきから黙っておるが、いったい…」

山城
「シルヴィア…俺が未来から来たって言ったよな？」

真剣な顔付きで問う山城に、シルヴィアは疑問に思いつつも、すんなりと答える。

シルヴィア
「何度も聞いた。最低限、お主は我々よりも未来の人間だ」

山城
「……なら、結論を言うと……リチャードさんの両親は俺よりも未来から…あるいは科学技術が発達した世界から来た人間だ」

シルヴィア
「な…はぁ！？」

山城
「さっきエリカさんが出して来た『スーツ』って言うのは、『パワードスーツ』と言って、俺の世界なら世界各国の軍事先進国が挙っ

て開発中の装甲スーツだ」

シルヴィア
「……え～と、言った事の3分の2は解るが…その『装甲スーツ』はどう解釈したら良いか…」

山城
「まあ…ある種の『魔法の甲冑』かな…『パワードスーツ』は腕力が強くなるらしいけど」

シルヴィア
「そこら辺の知識は鷲井の入り知恵であろう…しかし、わざわざそんな物を作らんでも戦車や航空機があるであろう？」

山城
「あのね、戦車や航空機があっても、最終的に陣地の制圧や確保には歩兵が必要なんだよ」

歩兵と言う兵種は弱い様で強い。
第一に山岳地帯などの地形に対して柔軟に対応出来る。
これは戦車や大砲など真似出来ない一番の特徴だ。

山城
「まあ…だから、『歩兵を強く出来ないか？』の答えの1つが『パワードスーツ』って訳さ」

しかし、その存在を知る山城にとって、彼がパワードスーツを着て盗賊達に襲い掛かったら……一方的な虐殺にしか成らないと解っていた。

次号へ

70　山城・シルヴィアの場合　6（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

71　山城・シルヴィアの場合　7

9月24日

山城は馬を走らせていた。普段はゆっくり歩かせる彼も、この時は馬をハイスピードで走らせた。
シルヴィアも山城に負けじと……と言うか付いて行く為に……馬を疾走させていた。
昨日、エリカから話を聞いてから、果たして大丈夫かと心配していた。
人間なにをするかは未知数だ。
特に心の中に黒いものを持つ者は突発的を含めて、どう動くかは予想する事は困難だ。
しかも、リチャードは両親の復讐とゆう、何時行動を開始してもおかしく無いから余計だ。

シルヴィア
「お主！　いくらなんでも急ぎ過ぎであろう！？」

山城
「急がなきゃならないんだよ！　向こうは時間上のリーチが有るんだぞ！」

盗賊を皆殺しに行くにしろ、一度村から離れるにしろ、夜なら一番目立たない。あの村が毎晩毎晩人の出入りを気にするか、と訊かれたら、しないと答えていい。
それに夜なら、土地勘さえ有れば視界が利かない事を利用して、隠れる事も撒ける事も出来る。

山城
「頼む……間に合ってくれ！」
山城は必死に呟いた。

急いだかいあってか、８時頃に着いた。
直ぐに適当な場所に馬を繋ぎ、リチャードの家に向かった。
しかし……家の中に入るまでも無かったか。
エリカがリチャードの家から慌て出て来たからだ。

山城
「エリカさん！」
訊くまでも無い…と思いつつも山城はエリカに声をかけた。

エリカ
「た、た、大変です！　り、リチャードが居ないんです！！」
やっぱりか！…と心の中で舌打ちした。
当たってほしくない予感は何故か当たる回数が多い。

山城
「まずは、落ち着いて下さい……訊きますが、家の中に例のスーツは有りましたか？」
今にも泣きそうなエリカを落ち着かせつつ、山城は肝心な事を訊く。
すると彼女は首を横に振った。

シルヴィア
「では、何処か彼が行きそうな場所は無いか？」
遅れてやって来たシルヴィアが次の質問をする。
するとエリカは、暫く考えてハッとした。

エリカ
「森の中に私とリチャードしか知らない秘密の場所が有ります…そこかも知れません！」

山城
「では、そこに行きましょう！　案内お願いします！」
そう言うと、３人は走り始めた。

エリカに案内されながら、山城は考えていた。
もちろん、リチャードを止める方法だ。
しかし、もし彼がパワードスーツを着た後に自分達が着いたら、例えどれだけエリカが泣き喚こうが彼は聞く耳を持たないだろうし、止める事はもはや不可能だ。
なぜなら、自分達の装備ではパワードスーツを着た人間を止める事は出来ない。唯一、自分とシルヴィアが乗って来た流星艦攻なら使えるかも知れないが、戻っている間に盗賊達を襲っている可能性もある。
まあ、盗賊達の隠れ家を知っていれば先回りも出来るのだが、場所が解らない。それに、もし止める為に放った２０ｍｍ機関銃が変なところに当たった場合を考えると、とてもでは無いが使えない。

この為、リチャードがパワードスーツを着てない事を祈りつつ、急ぐしな無かった……

エリカ
「あ！　あそこです！」

森の中を突っ切る山城達。その時、エリカが声を上げる。
見ると、森が突然開けた。ちょっとした広場になっている所の真ん中に……男が1人立っていた。

エリカ
「リチャード！」

あぁ、やっぱり…と山城は思った。
何せ感じが違う…伊達に数ヶ月を異世界で過ごしていない。

リチャード
「……」

リチャードは何も答えない。
いや、逆に鬱陶しいか？

エリカ
「お願い…やめて！　復讐なんてやめて！　そんな事をしても誰も喜ばないわ！」

涙を流しつつ、必死に叫ぶエリカの声……しかし、今や彼には空耳にしか聞こえない。

こうなると自分の出番だと山城は思った。
幸いにもまだ彼はパワードスーツを着ていない。
これが最後にして最大のチャンスだ。

山城
「シルヴィア…すまないけどこれ、預かっといて」

そう言うと、軍刀と拳銃を預ける。

シルヴィア
「！まさか、丸腰で行くつもりか！？」

山城
「あぁ…エリカさんも頼んだ」

そう言うと、山城はリチャードの所まで歩いて行く。当然、向こうも気付く。

リチャード
「…誰だ？」

山城
「……」

答え無い。

リチャード
「もう一度訊く…誰だ？」

山城
「……」

またも答えない。

そのまま、慎重ながらも軽やかな歩みで一足の間合いまで近付く。

山城
「教えてやるよ……後でゆっくりな」

なに?…と訊きたそうなリチャードを見つつ、そのまま一歩を踏みしめ、右頬に正確かつ強力なパンチを送り込む。

バキッ!!

ちらりと後ろを見ると、シルヴィアとエリカも突然の事に驚愕の表情。
まあ…こんな状況だとこれしか止める方法は無いんだよな……。
そう思いつつ、前を見ると、リチャードが丁度体勢を立て直したところだった。もちろん山城も、両親が未来人だけにパンチの一発二発でノックアウトになるとは考えていない。
長期戦覚悟だ。
問題は……どちらがタフかの話だが……

山城
「いっつう〜〜。（＜＿＞）」

シルヴィア
「当たり前だ。無茶をし過ぎであろう」

そう言いながら、シルヴィアは山城の傷の手当てをしていた。
詳細は省くが、結局山城とリチャードは殴り合いの取っ組み合いをした挙げ句、最後は山城がリチャードより先に止めの一撃を叩き込んで終わった。
もちろん、山城も無事では無く、何発か食らっている。
そして3人はリチャードをエリカの家に運んだ訳だが……

山城
「仕方ないだろう…言って効かないなら、実力行使するしか無いだろう？」

シルヴィア
「あのな……まあ、結果オーライと言うべきだな」

エリカ
「あの…大丈夫ですか？」

シルヴィア
「心配しなくてよい。こいつは鍛えておるからな…それより、あっちはどうなのだ？」

エリカ
「最後の一撃が効いて、気持ち良さそうに気絶してます」

山城
「……その表現はどうかと…」

まあ、そんな事は置いといて……

シルヴィア
「ところで、あの者はどうする？」

山城
「君のおば様に預かってもらうのはどうかな？　そっちが監視しやすいと思う」

シルヴィア
「おば様か…何と言うか解らんな」

山城
「あと、パワードスーツ、こっちで預かろうと思う」

シルヴィア
「待てま……いや、その方が良いかも知れぬな。どうもあれは危険過ぎるところもあるしな」

山城
「エリカさん、よろしいですか？　盗賊の方はこちらで出来る限りの事をしてみます」

エリカ
「はい！　その方がリチャードが無茶をしないと思います！」

シルヴィア
「だが、後が大丈夫か？」

山城
「1週間後に迎えを寄越すさ…それで解決するさ」

結局、預かる件は何とかなり、エリカもその間、屋敷に入れる事になった。
翌日、山城とシルヴィアは爆装倉に三着のパワードスーツとレーザーライフルを載せてグローリアス士官学校へと飛び立った。

次号へ

71　山城・シルヴィアの場合　7（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

72　報告会

9月26日　グローリアス士官学校内

福本（勇気）
「では、先輩方の話を整理させていただきますと…」

今まで、山城達の報告を聞いて福本（勇気）が纏める。

福本（勇）
「つまり、今回の調査で潜水艦一隻、輸送艦一隻、戦車1両、自走砲1両、人員110人以上…かつ、軍神広瀬中佐の発見……なかなか凄いですよ」

まあ、結果的に人員が100人を越えるとは思わなかったし……。
しかしだ……

山城
「…大丈夫なのか？　いくら何でも、多すぎて変な事にならないかね？」

シルヴィア
「今更言っても仕方ないであろう。それに今は貴重な人材なんだろう？」

確かに…だ。
天城を動かすにも人員が足りず、戦争間近で陸戦の可能性があるから、戦車や自走砲はいる。

それにこういった人達が居ると居ないとではまた違うのである。

福本（勇）
「あ、良いニュースかは解りませんが朗報です。天城の乗員と輸送機の確保が出来ました」

宮里
「それは本当か！？」

砲術科の宮里だから、天城乗員の確保が聞きたいのだろう。

福本（勇）
「えぇ、日本海軍からはそれほど出せませんが、シリルティア王国海軍からの人員を回せる様になりました」

これで漸く、主砲が2基しか使えない状況からは脱せた様だ。

大澤
「輸送機の確保が出来たんなら、あの三式中戦車もこっちに持ってこれるな！」岡田
「そうなると…要地の問題が出てきますよ？」

泉
「それは政府間交渉の話だから…ま、上で決着が付くでしょう」

ワイワイガヤガヤ……

それぞれ、自分の言いたい事を言い出した。

山城

「あ～……報告会終わり！　強制終了します！！」

福本（勇）
「あ、飛龍の事ですが、飛龍とその乗員も先輩達同様、軍事顧問団とゆう事になりました」

報告会を強制終了した後、山城・福本（勇）は共に行動していた。

山城
「じゃあ…今から来る人達の殆どが、そうなるんだな？」

福本（勇）
「えぇ…ですが、１ヶ月後には名称が軍事顧問団から異世界派遣部隊に変わりますがね」

山城
「やっぱりか…そう言う運命なのかね…」

そう言うと、近くにあった自販機に小銭を……ん？

山城
「……何で自販機がここにあるんだ！？」

福本（勇）
「鷲井先輩の要望です。毎回毎回、コーヒー作るの面倒だから置いてくれって」

山城

「おいおい…」

少々呆れつつも、再び小銭を入れボタンを押す。

福本（勇）
「そう言えば、鷲井先輩は報告会に居ませんでしたね？」

山城
「あぁ、あいつには俺とシルヴィアがこっそりと持ち込んだ物を分析させてる」

福本（勇）
「え…？　そんなの聞いてませんよ？」

山城は周りを見てから福本（勇）に小声で話す。

山城
「（お前、陸戦兵器にもある程度詳しいよな？）」

福本（勇）
「（先輩、本官を誰だと思っているんですか？　祖父が戦車作れと言ったの知ってるでしょう？）」

山城
「（……愚問だったな…実はパワードスーツが見付かった）」

これを聞いた瞬間、福本は声を出しそうになったが慌て引っ込める。

山城
「（3着あって、その内の壊れた方を分析させてる…今頃あいつは

クリスマスの子供だよ）」

福本（勇）
「（ですが、あれは我が国防省内でも極秘開発品ですよ？　下手に騒げば大変な事に…）」

山城
「（だからお前には話すんだよ。お前の父さんやじいちゃんはそう言うラインがあるだろう？）」

福本（勇）
「（あぁ、解りました。誰にも悟られない様、報告しておきます）」

山城
「さすが、頼りになるのは優秀な後輩だよ」

…と、その時……

鷲井
「や～ま～し～ろ～！！」

そう叫びながら鷲井がこちらに向かい疾走して来る。

福本（勇）
「……鷲井先輩？」

山城
「……だな」

鷲井
「山城！　お前は最高の友達だ～！！」
そう言うなり、山城に抱き付く鷲井。
山城
「……早く離れろ。変な誤解を受ける」
鷲井
「おぉ！　すまんすまん…しかし！　お前は凄い物を持って来てくれたよ！　久し振りに技術者魂に火が付いたぜ！！」
福本（勇）
「……狂喜乱舞ですね」
山城
「……俺ら知ってるから良いが…知らん人なら、かなり引くぞ」
実際…見知っている生徒達が遠くの方で見ている。
鷲井
「いや～、あれを簡易分析したが、あれの劣化コピーが出来れば技術はかなり進歩するな！」
そりゃそうだ。
現在開発中の数歩先を行ってる物を分析させたのだから、劣化コピーでも凄い物になるだろう。
鷲井

「んじゃあ、自分はもうちょい分析して来るわ！」

そう言いながら、スキップしつつ、自分の研究室に戻って行った。

福本（勇）
「大丈夫…ですかね？」

山城
「多分…な」

次号へ

72　報告会（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

73　会議

9月28日　首都ユニオン
王城内　会議室

山城、福本（勇気）、シルヴィアは王城に来ていた。
理由は簡単で1ヶ月後に開始されるネイラーン共和国侵攻作戦に参加する軍事顧問派遣団の代表者として出席する為である。
他にもアルスラーン王子の国王軍とシリルティア王国海軍責任者、国王直轄軍、有力貴族達が参加している。
もちろん、シルヴィアのお祖父様のボニファス伯爵も出席する。
そして、今その会議中ではあるが……山城も福本（勇）も黙って聞いていた。
まあ、新参者がずけずけ口を出す場では無いので、聞く側に徹している。
ちなみに今は有力貴族達の戦力抽出状況……簡単に言うと何れだけ兵を出すのかとゆう事……をアーネリア陛下が訊いているところだ。

福本（勇）
「（しかし、有力貴族の皆さんは自慢気に兵の数を言ってますが…）」

山城
「（実際に出すのはその内の何割かだ……聞くだけ無駄だ）」

もちろん、山城も福本（勇）もボリファス伯爵以外の有力貴族の言う事は最初から信用していない。

ちなみに、先程の話は会議前にボリファス伯爵が密かに3人へ教えてくれた事だ。

山城
「（だいたい、最初からその気なら、最初の戦いで兵隊寄越してるよ）」

シルヴィア
「（お主の言っている通りだ…それどころか反対の事をやってくれたからな）」

福本（勇）は苦笑しながら2人の会話を聞いていた。

さて、ここでこの世界…シリルティア王国…の軍制の話をしておきたい。
シリルティア王国では海軍と陸軍が存在する。
これは普通である……しかし、海軍は王国が保有しているが、陸軍は国王直轄軍と各貴族が編成する私設軍に分かれる。
つまり、国の予算で編成される国王直轄軍と、各貴族が自分の収入によって編成される私設軍…あるいは傭兵軍…がシリルティア王国の陸軍である。
皮肉にも、これは17～18世紀のヨーロッパに相当する軍隊編成である。
20世紀初頭の装備・編成の海軍と18世紀初頭の装備・編成の陸軍…これがシリルティア王国軍の現状である。
これを知った山城はこの現状の早期打開が必要だと感じていたが……これは別の話である。

さて、話は有力貴族達の方へ戻る。
ボニファス伯爵は先に山城達へ伝えた兵数を答えた。そして、アーネリアは次の貴族に視線を向ける。

アーネリア
「ユリアヌス侯爵、貴公はどうですか？」

名前を呼ばれて立ち上がった人物を見て、山城と福本（勇）は驚いた。
顔立ちからして、２０代前半…もしかしたら後半かも知れないが…程の若い人物。

山城
「（シルヴィア、誰？）」

シルヴィア
「（えーとだな……確か2年程前に敵が侵攻して来てな…その時に援軍到着まで防衛線の指揮をとったのが下士官だったユリアヌス侯爵だ）」

山城
「（…と言う事は、侯爵は貴族のご子息？）」

シルヴィア
「（あぁ、名前は忘れたが、国王直轄軍以外唯一の常備軍を備える貴族の跡取りだ）」

福本（勇）

「（じゃあ…なんで跡取り息子が会議に？）」

シルヴィア
「（何でも、老衰のせいで今や息子が取り仕切っているそうだ）」

……とヒソヒソ話をする3人。
立ち上がったユリアヌス侯爵は一礼すると、よく通る声で発言した。

ユリアヌス
「僭越ながら陛下、ボニファス伯爵以外は嘘を申しております。ですので私は0と申し上げます」

「な、なんだと！？」

もちろん……会議は紛糾した……。

福本（勇）
「皆さん…怒って帰りましたね」

山城
「あんな事言われたら帰りたくなるよ…まあ、別にやる気が無いなら帰ってもらって構わないんだけどさ」

今や会議室に残っているのはアーネリア陛下、アルスラーン王子、クロイツ、ボニファス伯爵、ユリアヌス侯爵、シルヴィア、山城、福本（勇）、そして、海軍責任者と国王直轄軍の責任者である。

ユリアヌス
「陛下、お許し下さい。まさか、この様な事に…」

山城
「ユリアヌス侯爵、お芝居はそこまでで結構ですよ」

そう言って謝罪の言葉を止めさせる。

山城
「アーネリア陛下、ユリアヌス侯爵は上手く篩をかけてくれました。私としましては、ここにいる者達の動員出来る兵を使い、ネイラーン共和国に侵攻すべきと思います」

アーネリア
「ですが山城司令官、ユリアヌス侯爵は兵は出さないと…」

福本（勇）
「それは数字と言葉のトリックでございます。確かに侯爵は０と申しましたが、兵は出さないとは一言も申しておりません…それに、出ていった貴族達はやる気が無い様子、そんな兵を持って行っても何の役にも立ちません」

アーネリア
「…侯爵、御二人の言う事は本当ですか?」

ユリアヌス
「…本当でございます。まさか、そこまで読まれているとは…」

そう言うと、ユリアヌスは山城と福本（勇）に向き直る。

ユリアヌス
「異世界の…しかも未来から来られたとは聞いておりましたが……
いやはや、感服いたします」

山城
「いえいえ、最初は驚きましたよ…しかし、その後の言動とあなた
の話を見聞きすれば自ずと解りました」

シルヴィア
「しかし、兵数が減ってはネイラーン侵攻に影響するぞ」

山城
「それは戦術・戦略・謀略でカバーさ。すみません、クロイツさん。
王城付近の地図をお願いします」

クロイツ
「あぁ、いいよ」

地図を近くの机に広げ、部屋に残った全員が机に集まる。

山城
「我々の主目的は共和国の討伐です。首脳陣は王城で優雅に過ごし
ているでしょう。ですから、我々は首都及び王城、そして、敵首脳
陣の確保を第一目標とします」

シルヴィア
「…簡単そうに言うが、首脳陣の確保は難しいであろう?」

山城
「福本、お前のお祖父様がベルリン奪還戦で採った戦法は?」

福本（勇）
「潜入部隊による敵指揮系統破壊後、郊外に待機していた主体による夜襲作戦です」

ユリアヌス
「なるほど、少数の夜襲隊で王城にいる首脳陣を一度に捕らえようとゆう訳ですか」

山城
「はい。ですから我々は首都近くのこの海岸に上陸し、敵を陽動します。そして夜になったら王城付近に潜入部隊を送り込み、王城と敵首脳陣を確保します」

アーネリア
「…では部隊の上陸は…」

福本（勇）
「出来る限り戦闘時間を減らす為、午後になってから行います」

シルヴィア
「では、午前中は何をしているのだ？」

山城
「付近の軍港に点在する艦艇を出撃しないよう空襲で叩きます……以上がこちらで考えている作戦です」

ボニファス
「ふむ…何か懸案事項は無いのか？」

山城
「…向こうに、我々より性能の良い転移兵器があるかどうか……これぐらいですかね」

これが一番の心配事なのだが……。

アーネリア
「では皆さん、山城司令官の作戦でよろしいでしょうか？」

全員が首を縦に振り。

山城
「…こんな簡単に決まって良いのか？」

福本（勇）
「良いんじゃないですか」

……こうして、会議は終了した。

次号へ

73　会議（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

74　訓練

9月30日　グローリアス士官学校

向こう（元の世界）なら8月の始めか中旬になっているのかもしれないが、こちらでは秋になろうとしていた。
あと1ヶ月後にはネイラーン共和国侵攻作戦の開始される。
そんな中、山城達は久しぶりに戦艦天城と空母飛龍を動かしていた。

天城艦橋

山城
「飛龍も加わったし、乗組員の練度を考えると、一度訓練しておいた方がいいだろう？」

宮里
「空母が加わるなら、艦隊行動の練習をする必要があるからな」

山城
「あぁ。さすがに、いきなり戦艦と組め…と言われても、向こうが困るだろうし」

シルヴィア
「しかし…戦艦と空母の二隻だけでは味気無い様な気がするが…」

山城

「仕方ないよ…本来なら駆逐艦とかと一緒に行動するんだけどさ…無いからね」

宮里
「３０ノットも出る駆逐艦も無い。そして、余りにも小型だからな……残念ながらね」

何せ今居る世界に１２００トンや２５００トン級大型駆逐艦は存在していない。
６００トン級駆逐艦が造られるのも第一次世界大戦前の話である。
それに、日露戦争の駆逐艦の最高速度は３０ノットにも至っていない。
そんな駆逐艦と天城を一緒に動かし艦隊行動をしている最中に接近すれば……４万トンの戦艦が立てる波だけで転覆してしまう。
まあ、時代が違うから仕方がないのだが……

シルヴィア
「ん、お主。飛龍の矢萩副長から連絡だぞ」

山城
「きましたか…はいはい、こちら山城です」

矢萩
『こちら飛龍です。本艦の準備も終わりました。いつでもいけますよ』

山城
「はい、わかりました…てっきり、山口艦長が連絡してくると思ったのですが？」

矢萩
『あはははは…実は「何時も暇なんだから、連絡ぐらいあなたがしなさい！」…ときつく言われましてね』

山城
「なるほど…では、本艦も出港します…続いて下さい」

矢萩
『了解』

訓練は順調だった。
世界は違え、双方を指揮する士官は戦後に機動部隊の運用を叩き込まれている。だから、基礎たる艦隊行動はしっかりしている。
その後、高速共同航行、発着艦訓練……とスケジュールを次々とこなしていった……。

シルヴィア
「はぁ～、美味しかった！」

山城
「やっぱり、調理は日本から主計科を呼んできといてよかったよ」

味にうるさい日本人だけに、主計科は日本から配属させたのだが…
…これが成功し、乗り組んだシリルティア王国出身者でも昼間に意気揚々と食堂に来る程だ。さて、昼食を終えた山城とシルヴィアは、先に昼食を終え、天城の指揮を執っていた宮里と交代する。

その時……

シルヴィア
「ん……霧が出ているぞ！」

山城・宮里
「「え！？」」

確かに霧が出ていた。
しかも、霧はまるで意思でもあるかの様にこちらに向かって漂って来る。

山城
「速度１０ノットに落とせ。飛龍にも通達。手空き乗組員は周囲警戒に当たれ」

シルヴィア
「了解」

宮里
「しかし、こんな所…しかも、昼間に霧…おかしくないか？」

山城
「でも、高速航行は出来ないだろ？」

丸で何かを隠すかの様な霧……しかし、後ろにいる飛龍は見える。
そんな内、少しづつ霧は晴れてくる。

水兵
「前方に大型船影！！」

そんな時に入ったこの報告。
報告に山城、シルヴィア、宮里は前を見る。
霧のせいでシルエットは微妙にぼやけているが、それでも大型船であるとは解る。

宮里
「あ～…確かに大型船だな」

山城
「…気のせいかな？　あの艦橋に見覚えがあるんだけど？」

……なんて話している内に……

シルヴィア
「……あの船…接近してないか？」

宮里
「…う～ん…確かに接近してるね…しかも速足で…」

山城
「まさか…気付いて無い？」

3人
「「「……」」」

…なぜか沈黙する3人……

山城
「面舵一杯！緊急回避！！」

操舵手に向かって叫ぶ山城。
操舵手も慌て舵輪を回す。その時、船首がヌッと現れた。

シルヴィア
「しょ、しょ、衝突するー！！」

しかし、この時、天城の操舵が効いて…ギリギリのところで衝突を回避する。

シルヴィア
「し…死ぬかと思ったぞ…」

ヘタヘタ～と成りながら声を絞り出すシルヴィア。
だが、山城と宮里は別だった。

山城
「…間違いないな」

宮里
「あぁ…高雄型巡洋艦だな」

霧から出て来た船を見ながら2人は呟いた。

次号へ

74　訓練（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

75　勇艦名将

空母飛龍艦橋

矢萩
「……あれは鳥海だね」

双眼鏡で天城の前にいる大型艦の名前を導き出す副長。

山口
「…良くわかったな。私には高雄型巡洋艦にしか見えない。艦名までは無理だ」

矢萩
「何度か話さなかった？　僕の父親は鳥海の元航海長だったって」

山口
「…そうだったな。さて、天城はどうするかな？」

矢萩
「多分、僕と同じ事を考えているよ…内火艇の用意をして来る」

そう言うと艦橋を出て行った。

山口
「あの阿呆め…この状況を楽しんでいるな」

天城艦橋

宮里

「……あれは高雄型巡洋艦四番艦鳥海だな。しかも改装前の」

右に舵をきった為、相手の左舷がよく見える。

この為、宮里は単装高角砲やその他艦上構造物を見て相手の正体を導き出した。

山城

「…改装前だから、１９４１年１２月以前からの転移だな」

ちなみに、元の世界では対サブルム帝国戦時に鳥海は３番艦摩耶と共に改装の為ドックに入っている。

山城

「さて、重巡洋艦が転移して来たって事はもしかしたら……人事問題が解決するかも知れないな」

そう言うと山城は再び双眼鏡をで鳥海を見る。

実は山城、出港前にある辞令を受けていた。

それは『貴官を少佐に任官す』…と言う簡単な物だった。

多分、軍事顧問団とはいえ、責任者が少尉と言うのは余りに格好が悪い。

だからこそ、一番に転移し、天城の指揮を執る自分に回ってきた…のだろう。ちなみに、少佐任官を知っているのは本人と宮里、シルヴィアの３人だけだ。

山城

「さーて……将旗はと……あったあった……おいおい」

双眼鏡を目から離す。

山城
「危うく有名人の顔を叩くところだったな」

シルヴィア
「……はぁ？　何を言っているんだ？」

訳が解らんとゆう顔をするシルヴィア。
しかし、宮里も双眼鏡を降ろすと溜め息を吐いた。

宮里
「まったくだな。さて、どうする？」

山城
「もうすぐ向こうから訊いてくるよ…ほら」

その時、鳥海から発灯信号が瞬いた。

シルヴィア
「『我、鳥海なり。貴艦の艦名を問う』と訳すべきか？」

山城
「似た様な意味さ。さて、返信『我、戦艦天城なり。貴艦と話し合いの場を持ちたい。貴艦への乗艦を希望する』」

シルヴィア
「了解……問題は向こうの反応次第だな」

山城
「大丈夫、こちらも日本艦だ。多分、受諾の返信がくるさ」
果たして……鳥海からは山城の予想通り受諾の発灯信号が返ってきた。

宮里に天城の指揮を任せ、山城はシルヴィアを連れて飛龍から来た内火艇に乗り込み、山口龍子少佐と共に鳥海に向かう。
そして、鳥海のタラップを上がる。

シルヴィア
「（……妙に視線が痛いのだが…）」

山口
「（まだ、女性将兵が採用される前だからな）」

山城
「（…俺の世界では当たり前にいたがな）」

ボソボソ話ながら、士官に案内される。
そして、ある一室に通された。
そこに居たのは……

「艦長の川辺。階級は大佐だ」

「マレー部隊司令長官小澤治三郎だ」

……山口・山城にとっては超有名人の顔があった。

参謀

「バカな！　そんな事がある訳が無い！」

……まあ、やっぱりと言うべきか…参謀の1人が反論する。

そりゃ、「あなた達は異世界に居ます」なんて、すんなり信用する訳が無い。

参謀

「長官！　これは敵の謀略です！　訳の解らない事を言って我々の戦意を削ぐのが目的でしょう！」

山口

「何ですって！！」

山城とシルヴィアが振り向いた時には、山口龍子少佐は立ち上がり、その参謀に食って掛かった。

山口

「あんたね！　人が親切に教えてやってんのに、さっきから謀略だの、何だのって…終いには海に放り投げるわよ！」

シルヴィア

「や、山口少佐！　お、落ち着いて落ち着いて…」

シルヴィアが山口を宥めている間、山城はジッと小澤中将を見ていた。
自分が知りうる限り、小澤中将は常に冷静沈着、優秀な名将であり、山本五十六元帥の後任として連合艦隊司令長官になった人物だ。ただ、アルコール中毒でニコチン中毒だったらしいが……。
まあ、そんな事をいえば、福本元帥は酒とタバコは大の苦手（酒はちょっとしか飲めなかったらしいが）の上に英語が苦手だったそうだから……人間そんなものだろう。
そして……

小澤中将
「…参謀の懸念は解らなくも無い。しかし、敵の謀略にしては附に落ちない点が多すぎる」

この言葉に部屋に居た全員の視線が小澤中将に集まった。

小澤中将
「まず、第一に艦艇だ。天城にしろ飛龍にしろ、余りにも擬装が細か過ぎる。アメリカやイギリスが保有する船舶を改造したり、似せて新造したら我々が知っている筈だ。それなら駆逐艦を改装すれば安上がりだ。第二に戦術だ。向こうは戦艦だ。なら、何発か撃って同士討ちの様にすればいい。わざわざ会談を申し込む必要はない」

参謀
「し、しかし…」

小澤中将
「第三に双方の状況と天候だ。我々は２０ノットで走っていた。彼らは１０ノット、霧が出たから速度を落としたとしても、それほど

高速で走ってはいないだろう。そして、霧はほんの１０分程だった。
その間に走った距離は多かが知れている。そこから逆算すると、霧が出る前に双方が視認している。しかし、我々は視認していない。
それに敵ならばそのまま回避せずに突っ込めばいい…わざわざ回避する必要はない。質問は？」

参謀
「い、いえ…」

ここまで淡々と論ぜられれば反論の余地も無い。
さすが、後の連合艦隊司令長官。

小澤中将
「それに、僚艦との連絡が駆逐艦４隻としか取れない……この時点で、彼らの言うことの筋が通る…違うか？」

参謀
「……」

……流石に答えられないか、黙る参謀。

小澤中将
「さて、君達の話をもう少し聞いてみようか」

そう言うと『鬼瓦』と呼ばれた顔が微笑んだ。

次号へ

75　勇艦名将（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

76　8月15日　帝都

8月15日（元の世界の月日）　帝都東京

山城、シルヴィア、福本（勇気）、セルベリア、そして、山口龍子少佐、矢萩俊雄大尉、背広姿の小澤治三郎中将…の面々は帝都東京に来ていた。
小澤中将の乗った旗艦鳥海を含め駆逐艦磯波、浦波、敷波、綾波の計5隻が転移した為、一度編成・人事を見直す事にした国防省は人数を絞って東京に呼び寄せた。
そして、案内役は山城、福本（勇）、セルベリアの3人。
まず山城と福本が行こうと提案したのは……

その日のその場所は人が多かった。
8月15日…60年前、独裁者スターリンが前日14日に死亡し、頭を失ったソ連は連合国軍に降伏した。
この時から、8月15日に世界中で犠牲者の冥福を祈る。
日本では陸海空の軍人が一年に一度は足を運ぶ場所……靖国神社で行われる慰霊祭が行われる。
山城達はその前に参拝する為、朝早めに出たが……人は多かった。

シルヴィア
「…お主達からこの神社の事は聞いていたが……いやはや、恐れいった」

セルベリア

「私も、3月に一度詣りました。その時はここまで人は多くありませんでしたけど…」

しかし、あとの5人は黙っている。
何故なら、小澤中将にしろ、山口・矢萩にしろ、そこが軍人にとって祀られる場であり、先人達の生きた痕跡が残る場である。
『歴史は生者だけで作られた訳ではない』…と否応なしに解る場所に…また、祖国を思い戦った者を祀る場所に一国の首相が参拝出来ない我が国は、果たして未来は有るのだろうか…？
話が逸れた。

大鳥居、第二鳥居、神門を抜け、拝殿に辿り着く。
そして、参拝。

シルヴィア
「え、え、え～と～……」

山城
「二礼、二拍手、一礼」

慣れない事だけにどうすればいいか解らないシルヴィアに空かさず山城がホローを入れる。
シルヴィアも小澤中将や山口、矢萩達の見よう見まねでギクシャクしながら、二礼、二拍手、一礼を行った。

小澤中将
「変わらぬものだな」

小澤中将が染々と呟く。
参拝を終えた山城達は近くの茶屋で一服していた。

福本（勇）
「靖国神社一帯は特別地域に指定され、出来る限り風景を変えない様にしております」

小澤中将
「ほう…そうか」

ちなみに、靖国神社一帯が特別地域に指定されたのは１９６０年代頃の事。
国民の平均所得が上昇し、一戸建て住宅やマンションが建つ様になり、さすがに政府や都も英霊が祀られている靖国神社一帯を特別地域に指定したのだ。

矢萩
「ところで、国防省はどこに？」

山城
「皇居の反対側…国会議事堂の後ろで、元陸軍参謀本部があった所です」

山口
「…結構歩くな」

福本（勇）
「都電で行きます。最近は都電が外国人で密かなブームになっているそうですから」

…まあ、大人数の移動となると、手段は限られる訳だが…。

日本帝国軍には3軍が存在する。
いわゆる陸軍・海軍・空軍である。
そして、平時・非常時にこの3軍を統制するのが国防省である。
そんな国防省の一室の前に、山城達は来ていた。
ドアのプレートには……

『海軍次官室』

山口
「…また随分と大物が相手ね」

矢萩
「そうかな？　首相が出て来るなら解るけど…」

福本（勇）
「失礼します」

ノックもせず、返事も待たず、勝手知ったるかの如く入る福本（勇）。
それを苦笑しながら続いて入る山城。
他の面々も、続いて入る。そして、部屋には年季が入った５０代程の人物と福本（勇）がいる。

福本（勇）
「紹介します。本官の父親で海軍中将の福本伊吹です」

福本（伊吹）
「福本伊吹です。息子と後輩がお世話になっています」

シルヴィア
「…じゃ、じゃあ…あの元帥の息子！！」

元帥に会っているだけに、逸早く反応したシルヴィア。

小澤中将
「親子三代海軍でご奉公…さぞかし、縁深いんですな？」

福本（伊）
「我が家では、職業選択の自由が存在するんですが……親子共々、父親の背中を見たせいか…ね」

福本（勇）
「父さん、小澤中将にお話があるんでしょう？」

福本（伊）
「お前こそ、観艦式まで時間が余り無いぞ」

山城
「親子だな～」

第3者である為、暢気に構える山城。

福本（勇）
「まあ、とにかく行きましょう」

福本（伊）
「上に待機させてあるヘリを使え。少佐が2人も居るなら誰も文句は言わんだろう」

福本（勇）
「ありがとう、父さん」

そう言うと、福本（勇）は皆を連れ次官室を出て行った。

次号へ

76　8月15日　帝都（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

77　8月15日　横須賀　観艦式

バタバタバタバタ……

帝都の国防省から横須賀に向けて一機の白色塗装４０式ヘリ…ＵＨ６０ブラックホーク…が飛んでいた。
しばらくすると、艦艇が航行する横須賀が見えて来た。

福本（勇気）
「そのまま、横須賀市上空を通過して下さい」

パイロット
「了解」

山城
「ん、軍港のヘリポートに降りるんじゃないのか？」

福本（勇）
「えぇ、僕達は別の場所です」

そのまま横須賀市・横須賀軍港上空を通り過ぎ、海に出る。
そして、着艦する艦艇が見えて来た。

山城
「……福本、あれは無茶しただろう？」

福本（勇）
「無茶なんかしてませんよ。父を通じて正式かつ公式なルートを通じて許可を取りましたから」

苦笑する山城と当然とばかりに微笑む福本（勇）。
そんな彼らの視線の先に有る物が物だけに、山城もついつい言うしかなかった。灰色の軍艦色に塗られた重厚かつ何者も圧倒する船体、三連装砲塔３基の主砲、軍艦の顔と言っていい高めの艦橋、そして、改装により多少変わってしまったが、特徴的な艦上構造物……大和型弩級戦艦三番艦信濃である。
今や『ＪＡＰＡＮ　Ｉｍｐｅｒｉａｌ　Ｎａｖｙｓ　Ｂｉｇ　７（日本帝国海軍の７戦艦）』と世界から称される戦艦の１隻である。
ちなみに残りの７隻は、大和、武蔵、播磨、河内、和泉、近江で、大和型３隻、播磨型４隻の計７隻である。また日本海軍には薩摩型戦艦の薩摩、土佐、伊豆型戦艦の伊豆、伊賀、春日、日進が現役であり、長門は呉軍港で記念艦、陸奥は神戸海軍士官学校の練習艦として在籍している。
つまり、長門型を除けば１３隻の戦艦を日本帝国海軍は保有している。

山口
「あれは…大和…だな？」

矢萩
「う～ん…少なくとも大和型ではあるね」

シルヴィア
「……あの様な戦艦が存在するとは……負けた」

セルベリア
「し、シルヴィアさん、気を落とさずに！」

山口と矢萩は知ってるから置いとくとして、シルヴィアはガックリ

と肩を落としている。

福本（勇）
「…あれであと信濃みたいな戦艦が６隻あると知ったらどう思うでしょうかね？」

山城
「…嘆くだろうな。現状との差に」

まあ、これが１００年以上の差と言ってしまう慰めに果たして成るだろか？
そんな事を考えながら、ヘリは信濃の後部甲板に着艦した。

艦橋上部に居た信濃の艦長に乗船報告を行い、後部艦橋上部に移動した山城達一行。

山城
「…福本、まさか、お前…」

福本（勇）
「さて、何の事やら？」

惚けているが、魂胆はわかった。
日本の観艦式は『移動観艦式』と言われるもので、観閲部隊と受閲部隊、そして上空に航空部隊を飛来させ、一糸乱れぬ見事な隊列を組んで相互すれ違いながら観閲を行う、とてもレベルの高い観艦式である。なぜなら、海上部隊と航空部隊を一緒に受閲させるのだから、秒単位の時間調整が必要なのである。

対し、世界各国海軍が整列停泊する受閲部隊を観閲艦が前を航行するのとは雲泥の差があり、世界各国の海軍関係者並びに海軍ファンは日本海軍の観艦式を絶賛している程だ。
つまり、福本（勇）は今回の観艦式で受閲部隊の先頭を勤める信濃の特等席で見ようとゆう気だ。

山城
「…あいつの頭を時々覗きたくなるな」

シルヴィア
「お主の後輩であろう？」

山城
「あいつの頭は小宇宙なんだよ」

シルヴィア
「……はぁ？」

山城
「…すまん、難解な表現だったな」

セルベリア
「ふふ、確かにそうですよね」

山城
「…そう思うか、セルベリア二士生？」

セルベリア
「セルベリアで結構です、山城正人先輩…いえ、少佐」

山城
「…フルネームは止めてくれ、山城か正人…どっちかにしてくれ」

セルベリア
「はい、わかりました。山城先輩」

シルヴィア
「…なんか、むかつく空気だな」

シルヴィアが呟く。
そこで山城は話題を変えた。

山城
「ところで、セルベリアはどこの出身なんだ？　ダエヴィサ大陸の留学生を知っているけど、少し感じが違う様な気がするんだけど？」

ちなみに、ダエヴィサ大陸とは第二次大戦後に決定した第６大陸の名称である。

セルベリア
「あ…え、え～と……あははは…」

山城
「？？」

福本（勇）
「先輩！　観艦式始まりますよ～」

後輩の暢気な声に誘われ振り向くと、信濃の前方から観閲部隊が航行して来る。先頭は伊豆型戦艦三番艦の春日、その後ろには四番艦

日進。
そして、原子力空母赤城、飛龍、軽空母鳳翔、重巡洋艦高雄、愛宕、軽巡洋艦夕張……と続いている。
ちなみに受閲部隊は信濃、重巡洋艦六甲、畝傍、原子力空母翔鶴、瑞鶴、軽空母龍鳳、軽巡洋艦川内、五十鈴……と続く。

山口
「あ、あれが６０年後の飛龍！？」

矢萩
「あえて注意させてもらうと、この世界の飛龍だよ」

山城
「まるで、大人の事情みたいな解説だな」

そう呟くと、隣に居るシルヴィアを見る。

シルヴィア
「…負けた…完全に負けた……これが時代の差なのか…」

……余計落ち込んでいた。

キィィィィィィン！

山城が必死にシルヴィアを元気づけている上空でジェット戦闘機の編隊が通り過ぎていった。

次号へ

77　8月15日　横須賀　観艦式（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

78　8月15日　帝都　国防省

山城達が信濃で観艦式を見ている頃……

帝都　国防省内
福本海軍次官室

福本勇気の父、福本伊吹中将と小澤治三郎中将はテレビで観艦式を見ていた。

小澤中将
「…あれが未来の帝国海軍ですか」

福本（伊吹）
「まあ、そう言ってしまえばそうですね」

テレビ局のヘリからの映像であろう、カメラは信濃を写し出している。

小澤中将
「やはり、航空機が戦いの主導権を握っているのでしょうな」

カメラが信濃から赤城、飛龍を写し出す。

福本（伊）
「それは…微妙ですね。確かに戦艦よりも空母の保有数は多く、空を制する者は戦を制す、と言われいます」

そう言うと、近くにあるコップの水をグイッと飲む。

福本（伊）
「サームイール軍港、アルドゥオ海、ギルバート諸島、真珠湾、珊瑚海、ハワイ沖の海戦で航空機は多数の艦船を沈め、特にギルバートでは戦艦2隻を撃沈しました……ですけどね、この世界の帝国海軍は中途半端なんですよ」

小澤中将
「中途半端？」

福本（伊）
「はい、戦艦も空母・航空機も主眼に置いている…だから、中途半端なんですよ」

小澤中将
「しかし、中途半端だと予算が掛かり、面倒な事にならんか？」

福本（伊）
「確かになります。ですがね、これは私の父…福本大介の提案なんですよ」

小澤中将
「君の父上が？」

福本（伊）
「はい、父は一本に絞る事をやらなかった。逆に選択肢を増やす為に中途半端にしたんです。それに父は航空派と戦艦派の対立を意外な形で治めたんです」

小澤中将
「どうやってかね？」

福本（伊）
「父は『戦艦だ、航空だ、と俺が王さまだと言うからダメなんだ！お互い長所短所があるんだから、それを補う…協力する様にすればいいんだ！』…と、ちょっと無理矢理な理屈を説いたんです。これが今は『大艦・航空協同主義』なんて言われていますがね」

小澤中将
「なるほど…確かに無理矢理だが、言われてみればそうかも知れないな」

福本（伊）
「だから、父の率いた第七独立機動艦隊は活躍したんだと思います。実際、父は『あの艦隊が俺の主張の実体化だ』って言ってましたからね」

小澤中将
「そうか…父上は元気かね？」

福本（伊）
「引退して田舎で農業やってます…８０後半に入るのにまだまだ元気ですよ」

笑いながら福本伊吹中将は言った。

小澤中将
「ところで、私にお話と言うのは？」

福本（伊）
「おっと、話が大分寄り道していましたね。失敬」

そう言うと、福本伊吹中将は姿勢を正す。

福本（伊）
「向こうの世界については説明を受けられましたね？」

小澤中将
「あなたの息子さんや、その先輩の山城少佐から何度か」

福本（伊）
「なら、結構です。実は我々はこの件に関しては最重要機密として、国外はもちろん、国内にも知る人間は一握りです。まあ、父も承知ですし、本官がこの事の総責任者です。そして、現在は山城少佐を現場指揮者としています。ですが…」

小澤中将
「何か問題でもあるのかね？」

福本（伊）
「重巡洋艦鳥海に駆逐艦４隻が転移した為、艦隊編隊となります。となると、将官の派遣が必要なのですが……異世界への派遣ゆえ、軍・政府共に二の足を踏んでいるんです」

小澤中将
「…なるほど、つまり、私を現地指揮官にしようと？」

福本（伊）
「あなたの手腕は世界が違うとはいえ、歴史が証明しています。軍・政府共に反対は出ないでしょう」

小澤中将
「…何時の時代も、指揮官の苦労は絶えませんな」

福本（伊）
「それが指揮官の宿命かも知れませんね。まあ、それを覚悟の上で居るんですがね」

次号へ

78　8月15日　帝都　国防省（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

79　あちこち訓練中

１０月１５日

小澤治三郎中将が１０月１０日、日本帝国海軍より正式に司令長官に就任、『異世界軍事顧問団』から『異世界派遣部隊』に命名変更され、天城、飛龍、鳥海、駆逐艦４隻、伊２９、１等輸送艦、その他人員・装備が編入された。
それから５日後……

戦艦天城艦橋

山城
「やっと部隊としての形が整ってきたな」

シルヴィア
「本当だな」

艦橋でのんびりとお茶をすする山城とシルヴィア。

シルヴィア
「…あと半月で我々は敵地に行くのか…」

山城
「そうだね……」

宮里
「お～い、そこ～、まったりしな～い！」

そう言いながら、竹刀を持った宮里が現れた。

山城
「別にいいじゃん」

宮里
「まったく…それと、少し厄介な問題が噴出しそうだ」

山城
「問題？　何がだ？」

宮里
「…ヴィクトリアの事なんだが…」

シルヴィア
「ヴィクトリアなら、今日はお主達の世界から航空科教官を呼んで飛行試験の筈だが？」

宮里
「いや…それはそうなんだけど……」

グオーン！

その時、３人がいる艦橋の前を１機の烈風が直ぐ目の前を通過した。

宮里
「…あの通り、まるで手足の如く使えるから、もしかしたら飛龍の

乗せられるかも…」

山城
「え、さっきのヴィクトリアが操縦してたの！？」

シルヴィア
「…てっきり、あの変態が操縦しているとばかりに思っていたぞ！」

宮里
「……で、どうする？」

山城
「…連れて行ったら面白い事に成りそうな気がするのは俺だけか？」

シルヴィア
「もし、教官のお墨付きが貰えれば…ヴィクトリアはどうなる？」

宮里
「多分…この世界出身者初のパイロット……あるいはこの国最初のパイロット…かな？」

山城
「だろうな」

空母飛龍　飛行甲板

教官

「大澤少尉」

大澤
「なんですか、教官？」

双眼鏡でヴィクトリアの乗る烈風を見ながら教官が、大澤に質問した。

教官
「本当に、あの娘は一年も航空機に乗ってないんだな？」

大澤
「しつこいですね、教官。何度も言ってるでしょう、彼女は数回車を運転した事はあるけど、操縦桿握ったのはつい１ヶ月前、まあ、その前から後部座席に座らせたりしましたがね」

教官
「うむ…ならば、あの娘は天才か…あるいは飛行機乗りとなる運命だったのか…上手い」

大澤
「……え？」

教官
「お前なあ……烈風で天城の艦橋に最接近する無茶をしたんだぞ。お前並みの操縦感覚や技量、自信が無いと出来んな」

大澤
「え…ほ、本当です…か？」

教官
「誰が見て喋っていると思っているんだ？　お前みたいな無茶な人間を過去に何人も見ているんだぞ」

大澤
「…嘘だろう…おい…」

あ～…もしかて敵に塩を送ってしまったのだろうか……と密かに思った大澤であった。

ドン！

ヒューーウ……

ドガーン！

大倉
「…この様に、この野砲は貴官達が保有する大砲よりも長距離を破壊出来る砲である」

大倉正志中尉が一式砲戦車の前で若手の王国陸軍砲兵隊員達相手に講義をしていた。

大倉
「ではこれより、諸君達には９４式山砲を組み立て・発砲してもらう。野砲より威力・射的は劣るが、充分使える砲だ。先ずは組み立て見本を見せよう」

そう言うと一式砲戦車の乗員が降りて来て、９４式山砲を組み立て始める。

その近くで……

タタタタタタタ……！

佐田
「こら、そこ！　けつが上がっとるぞ！　下げんか！」

９２式重機関銃が空砲を放つ中、佐田哲郎軍曹の怒号が響く。
見ると国王陸軍歩兵隊員達が匍匐前進の訓練中。
今までに無い訓練のせいか、どうやら歩兵隊員達も四苦八苦している。

そして……これまた近くでは……

パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！……

３８式歩兵小銃を撃つ士官学校の生徒達。
マスケット銃から３８式歩兵小銃に変わり、ドンパチ派手に『使用訓練』をやってる訳だが……

ローエン
「…慣れていないせいだな…命中率が悪い」

ほとんどが的の前に当たっており、今のところ、命中させたのはいつもの２人だけ。

ローエン
「おい、クレマンとデュリオの2人はどうした?」

兵士
「は、チヌとテケの方に行きました」

ローエン
「そうか」

まあ、あの2人は別段問題は無い。
それよりも、あと半月で生徒達をどこまで鍛えられるかを考えなければならない。

次号へ

79　あちこち訓練中（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

80　出撃用意

１０月３０日

山城は天城の艦橋で集まった艦艇を見ていた。
先ずは三笠などとよく似ている戦艦が３隻。
『マツシマ』『イツクシマ』『ハシダテ』…やっぱり名前は三景艦だった。
その次にこの世界なら二番目に砲力がある装甲巡洋艦『ヒタチ』『イナバ』『キイ』『オワリ』『アイヅ』の日本人なら誠に覚えやすい５隻の艦名だった。
等級順ならば次は防護巡洋艦の『アカギ』『タカオ』『アタゴ』『ミョウコウ』『コンゴウ』『ヒエイ』『キリシマ』『ハルナ』の８隻と駆逐艦２０隻……これがシリルティア王国海軍の参加艦艇である。
一方、ネイラーン王国海軍は戦艦『ハリアー』を旗艦に僚艦『ソミュール』を加えた２隻に、装甲巡洋艦２隻、防護巡洋艦４隻、駆逐艦１０隻の艦隊である。
双方、出せるだけの海軍戦力……ネイラーン王国は全力……を投入するだけに中々壮観である。

山城
「…けどな～……」

そう言いながら、山城は苦笑するしか無い。
皮肉かな、目立つのは天城、飛龍、鳥海の派遣部隊艦艇である。
何せ、天城と鳥海は「あれが戦艦、あっちは巡洋艦」と言っても、４０年の差があるのだから「本当!?」と訊かれる程である。

まあ、戦艦・装甲巡洋艦で連装砲塔2基4門と副砲装備なのに、天城は41cm連装砲5基10門と副砲、鳥海が20cm連装砲5基10門と61cm魚雷発射管…と火力が段違いだ。
そんな事を言ってしまえば、船体・速度・通信機器もまた段違いだが……。
そして、飛龍は「あの真っ平らな甲板から飛行機が飛ぶ」と説明したら「本当か!?!?」と言われる始末だし……

山城
「さ～て…どうなるやら…そして、どうなるか…」

どうも、終わったら終わったらで、また厄介な事に成りそうだが……

シルヴィア
「なーに、陰気そうにして艦隊を見ておる」

何処からか、シルヴィアが現れた。

山城
「そうか？　普通に見てるだけなんだけどな」

シルヴィア
「顔にしっかりと『陰気です』と書いておる」

山城
「そうかな……って、君も何してるの？」

見ると、右手にワインの瓶をしっかりと持っている。

シルヴィア

「下で壮行会をやっておる。2本拝借してきたのだ！」

山城
「……あのね、シルヴィア…君、未成年でしょう？」

シルヴィア
「何を言っておる、この世界に未成年の飲酒は禁止しておらんぞ？」

山城
「いや…そう言う問題じゃあ…」

シルヴィア
「おぉ、それと、小澤長官が酒宴会の許可も出してくれたぞ！」

山城
「……おいおい」

小澤長官……何をしているんですか…あんたは……

シルヴィア
「とにかく～、お主も飲め～～」

山城
「…え、遠慮しとく…二十歳に成るまで飲まない様にしてるから…」

シルヴィア
「なんだ、つまらんの…なら、飲むのに付き合え！」

山城
「…まさか、艦橋で飲むつもりか！？」

シルヴィア
「ダメか？」

山城
「ダメだ！！」

飲ませてたまるか！

山城
「上行くぞ、上！　防空指揮所に行くぞ！」

シルヴィアの腕を掴むと、上にある防空指揮所に上がった。

シルヴィア
「おぉ、いつの間にやら、良い満月が出ておるわ」

見ると、シルヴィアの言う通り見事な満月が空に浮かんでいる。
本来なら団子でも持ってきて月見と洒落込みたいところだが……

山城
「はい、ダメ。もう、おしまい」

シルヴィア
「むう、まだ残っておるだろうが！」

山城
「ダメだ。下手に飲んで、二日酔いか船酔いか解らなくなって、最

終的に吐かれたら面倒だ」

まだ一本目は3分の1程残っていて、二本目はまだ封も開けていない。

しかし、だからと言って飲ます訳にはいかない。

シルヴィア
「飲ませろ～～」

山城
「ダ・メ・だ！」

……まるで駄々をこねる子供だ。

「なら、この酒は私が貰うぞ」

山城
「えぇ、どうぞ……え？」

ノリで返事をしたが、居る筈の無い第三者の声に山城は振り向いた。

ゴクゴクゴクゴク……

見事ならっぱ飲みを見せる女の子がおりました……

シルヴィア
「な、な、な、な、（ガン！）な、何者だ～～！？　い、いつの間にそこに居た～！！？」

いきなりの第三者の乱入に慌て下がったシルヴィアが頭を壁にぶつけながらも訊いた。

「私か？　私はずーと、ここに居たが？」

シルヴィア
「な、なに!？　は、さては貴様、敵のスパイだな！」

「…戦艦と言う警戒厳重・軍事機密の詰まった所にやすやすとスパイが入れる訳が無いだろ。それに、わざわざこんな所に隠れん」

シルヴィア
「な、なんだと～！」

……こんな痴話喧嘩の一歩手前にある状況の中、山城は冷静に頭を回転させた。凛とした出で立ち、背中の日本刀、日本海軍の服装…
…これから導き出される答えは1つ。

山城
「まさか…あなたは…艦魂！？」

「お、艦長は物解りがいいな。そうだ、私は天城の艦魂、天城だ。よろしくな」

まるでス○ライ○ウィッ○ーズの坂本少佐……眼帯はして無いけど

……似の天城を山城とシルヴィアは呆然と見ていた。

次号へ

80　出撃用意（後書き）

先ず布石を出してみました。
ご意見ご感想をお待ちしております。

81　作戦開始！

11月4日

戦艦天城天防空指揮所城

シルヴィア
「確か、前回は艦橋で指揮を執っていなかったか？」

山城
「前回は人数が少なかった事と艦隊司令部と艦司令部がごちゃ混ぜだったからね…まあ、今回は人数も充分だし、小澤中将の艦隊司令部もいるし…それに日本海軍の戦艦艦長は防空指揮所で艦の指揮を執るのが伝統なんでね」

天城
「そうゆう事だ、小娘」

シルヴィア
「だ・か・ら！　あんたはなんで偉そうなの天城！」

今や防空指揮所に立つ事が多くなった為、天城の艦魂天城ともすっかり顔見知りの仲。（シルヴィアは別かもしれないが……）

天城
「言っておくが、私は君より年上だぞ？」

シルヴィア
「だから、なに!?　それに小娘じゃない！」

山城
「まあまあ、2人共……シルヴィア、伝声管の方も頼むよ」

シルヴィア
「むう～…」

さすがに山城が出て来ると気まずいか、不満を持ちつつも引き下がった。

山城
「（天城さん…頼みますから、シルヴィアをからかわないで下さいよ…）」

天城
「（いや…あの娘の顔を見るとついな…）」

山城
「…とにかく、やめて下さい」

まあ、それはそれで親しい証拠なの……か？

シルヴィア
「下の司令部からだ。攻撃隊発進の為、速度を上げろとの事だ」

山城

「オッケー、速度３０ノット～、艦を風上に向け～。見張りは飛龍の動きに注意」

ちなみに、艦隊は輪形陣を組んでいる。
真ん中に飛龍を置き、前後を天城と鳥海、周りを駆逐艦で固めている。
図にすると……

→　進行方向

天城　磯波　浦波
飛龍
敷波　綾波　鳥海

……とこんな感じ。

そして、速度を上げた瞬間、山城はある事を思い出した。

山城
「あ！　しまった…やっちまった！」

シルヴィア
「ど、どうした!?」

山城
「Z旗上げるの忘れてた」

シルヴィア
「…はあ？」

天城
「残念だが艦長…それは無い」

その頃……飛龍艦橋

矢萩
「あ、しまった」

山口
「どうした、副長？」

矢萩
「Z旗上げるの忘れてた」

山口
「…別に大丈夫だろう。それより、合成風力は大丈夫だな？」

飛龍は空母用カタパルトを装備しているが、やはりここはカタパルトを使いつつ基本に立ち返り運用する。

矢萩
「海面は穏やかだし、合成風力もバッチリだよ…出す？」

山口
「当たり前だ、既に出撃命令が下っている。攻撃隊、発艦せよ！！」

この命令が伝わると待ってましたとばかりに、攻撃隊の機体にエン

ジンが始動する。

飛龍は転位時に紫電改・流星合わせて６０機を搭載していた。その内、紫電改・流星が７機づつを予備機として分解搭載していた。
今回の作戦参加機は４６機、これからその内艦隊直衛用の紫電改１２機が引き抜かれる。
この為、紫電改は１１機、流星２３機が２波に別れて攻撃する手筈だ。
だが、これでは紫電改隊のバランスが悪い為、大澤、岡田、そしてヴィクトリアが烈風２機と山城達の世界で新たに造られた紫電改を配備して参加。
また、泉の乗る４０式輸送ヘリも飛龍に搭載されていた。

大澤
「発艦命令か…よし、行くか！」

既にエンジンを掛け、カタパルトで射出準備を終えていた烈風に大澤が乗り込む。
その後ろではヴィクトリアの乗る紫電改と飛龍搭載の紫電改５機、流星１２機が発艦準備を終えてエンジンを掛けている。目の前で発艦許可が降りた事を示す赤旗が振られる。
ズドン！

大柄である烈風を先に発艦させ、零戦並みにコンパクトな紫電改を続けて発艦させる。

天城防空指揮所

シルヴィア
「第1波攻撃隊発艦完了したぞ」

山城
「あぁ…わかった」

空を見上げると、編隊を組んだ攻撃隊が天城の上を通過した。
そして山城は海軍の伝統に則り、敬礼で攻撃隊を見送った。
ここにレイラーン王国奪還作戦『解放のラッパ』が開始された。

次号へ

81　作戦開始！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

82　軍港空襲（前書き）

登場人物

天城

戦艦天城の艦魂。
外見はス○ライ○ウィ○チーズの坂本美緒少佐似（眼帯無し）。
よくシルヴィアと喧嘩する姿を目撃（見える人に）されている。
背中に日本刀を装備。

82　軍港空襲

グオングオングオングオングオングオン……

勇ましきエンジン音を響かせつつ……言い過ぎかもしれないが……
飛龍から発進した烈風・紫電改７機、流星１２機が飛んでいた。
烈風・紫電改はロケット弾装備、流星は雷装６機、爆装６機である。
敵機は多分出て来ないから、爆撃能力を増やす為、烈風・紫電改にもロケット弾を装備させていた。

大澤
「片道４００キロ、往復８００キロ…散歩の距離だな」

そう大澤は呟いた。
本来なら、その倍の距離を飛べる烈風・紫電改・流星。
しかし、今回参加のヴィクトリアがまだ長距離飛行に慣れていない為、随分接近する形になったが、大丈夫なので気にしない。

ヴィクトリア
『ちゃんと前見てますか？』

大澤
「当たりまえだ。お前より飛行時間は長いんだからな」

ヴィクトリアの乗る紫電改から無線通信が入った。

ヴィクトリア

『では、我々は今飛龍から何キロの地点にいるか解りますか？』

大澤
「あん、確か飛龍から１２２キロの地点に…」

ヴィクトリア
『違います、飛龍から１２４キロですわ』

大澤
「……別に良いじゃねえかよ、飛龍からの距離なんぞ！」

ヴィクトリア
『何を言ってますの！　航法は単座戦闘機パイロットには必要な技量でしょう！』

大澤
「うるせい！　だいたい、お前が参加したから２００キロになったんだろうが！」

ヴィクトリア
『まあ、まるで私が参加したから作戦が変更された風に…』

大澤
「された風に、じゃあなくて、されたんだよ！　薄のろトンカチ！」

ヴィクトリア
『薄のろトンカチですって！　あなたは変態野郎でしょうが！！』

大澤
「何を言うかこの巨乳女！」

ヴィクトリア
『あなたこそ、エロ男ですわ！』

……とぎゃあぎゃあ無線を通じて痴話喧嘩をやりだした2人。
だからと言って、長くも続かない訳で……

『……あんた達！　痴話喧嘩なら帰ってからやりなさい！　それ以上続けると、撃墜するよ！！』

無線から割って入る……と言うより強制停止させたのは飛龍流星隊隊長兼第1波攻撃隊隊長の斎藤美保中尉（26）。
彼女は山口や矢萩と同期で、これまた腐れ縁で飛龍に配属された。
また彼女は新撰組三番隊組長斎藤一の子孫で、彼女の乗る流星の尾翼には『誠』の一文字が書かれている。

斎藤
『それと、あんた達が痴話喧嘩してある間に目標が見えてきた。しっかりと警戒しなさいよ』

その言葉に、大澤・ヴィクトリア共によく見るとネイラーン国が見えて来た。

王城と首都の近くにある、第二軍港では何時も通りの朝を迎えていた。
シリルティア王国が宣戦布告し、こちらに向かっている事は知って

いたが、船足からして奇襲を受ける訳が無い……と誰もが思っていた。
しかし、世の中そうはいかない。
始めに気が付いたのは戦艦の水兵達だった。
軍港には3隻の戦艦が停泊しており、その内の1隻の水兵達が自分達に向かって空から来る物を発見した。数は20前後…そう思った時、それは別れて、別々に接近して来た。
その内の2機が低空で戦艦に接近して来る。
そして、水兵達は叫んだ…「鉄の鳥が来た！」…と……

斎藤
「よーし…全機攻撃開始！！　トラ・トラ・トラを打電！」

搭乗員
「了解！」

直ぐに攻撃命令を出し、編隊を解く。
斎藤機は雷装機。
やっぱり艦攻隊は魚雷による大物食いである。

ギューーン！！

対空砲火も無く、余裕に三笠に似た戦艦に接近する。確かこの頃の戦艦は対水雷防御のバジル等が装着されていない。
まあ、魚雷の性能が低い事もあったからだろうが……

斎藤
「よ～そろ…よ～そろ……てぇ！」

カチン

ザブン！

シャーー……

ゴゴーン！ゴゴーン！

斎藤
「よし！　攻撃成功！」

命中を示す水柱を確認した『女鬼隊長』の顔が微笑む。

搭乗員
「隊長！　残りの雷装機も攻撃成功！」

斎藤
「よし！　残りは爆装機に任せ雷装機は飛龍に戻れ。本機は攻撃を見届ける」

搭乗員
「はい！」

キャーーン……

カチッ

ヒューウ……

ドガーン！ドガーン！ドガーン！

爆装の流星が急降下爆撃で確実に装甲巡洋艦や防護巡洋艦にダメージを与えてゆく。

烈風・紫電改は主翼のロケット弾を防護巡洋艦や駆逐艦に向けて発射する。

シュパーン！

ヒューーー……

ボーン！ボーン！ボーン！ボーン！ボーン！ボーン！

大澤

「……こんなもんか？」

軍港に集結していたと思われる艦艇のほとんどが黒煙を上げている。

斎藤

『全機に告ぐ。攻撃は成功。後は第2波に任せて引き上げる』

無線から、斎藤隊長の声が聞こえた。

大澤

「やれやれ、おい、ヴィクトリア、飛龍に戻るぞ」

ヴィクトリア

『了解』

攻撃を終え全機が翼を翻し、飛龍の方へと向かった。そして、戻る途中、岡田の乗る烈風を含めた第2波攻撃隊とすれ違った。

次号へ

82　軍港空襲（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

83　上陸

戦艦天城　艦橋

士官
「戦艦3隻、装甲巡洋艦5隻が大破、他巡洋艦、駆逐艦に損傷を与えた模様」

小澤中将
「さすが飛龍隊だ。初実戦だが山口の娘が艦の指揮を執っているだけはあるな」

第2軍港に対する戦果を聞いて、飛龍隊の実力を把握出来た様だ。

小澤
「さて、次の段階に移るとするか…マツシマ、ハリアーに打電してくれ」

士官
「はい」

3時間後……

シルヴィア
「それで、次はあの一等輸送艦に搭載してある陸軍部隊の出番…と

ゆう訳か？」

山城
「まあ、そうゆう事だね」

合流したシリルティア王国海軍艦隊とネイラーン王国海軍艦隊を防空指揮所から見ているシルヴィアと山城。

天城
「ふむ、皇紀２６００年の観艦式を思い出すな。あの時はもっといたがな」

シルヴィア
「…悪かったわね！　貧乏海軍で！」

山城
「いや、誰もそんな事言って無いし」

また喧嘩されてはかな面倒だと山城が間に入った。

更に３時間後……

山城
「１５００（ヒトゴーマルマル）……上陸時間だ」

シルヴィア
「展開が早く無いか？」

天城
「作者の都合だ。それに長々も書けんのだし」

はい、まったくその通りです。

山城
「まあ、今回は戦艦がやる事は少ないけどね」

何せ今回は日本軍が開発した大発（大型発動機艇）を使用した上陸作戦で、ろくな上陸阻止戦をやっていない敵が相手だから、戦艦は余りやる事は無い。

シルヴィア
「…見物でもするか」

そう言うと、双眼鏡で上陸する浜辺を見だした。

天城
「…あの娘、しっかりしているではないか」

山城
「もともと彼女はしっかりしてますよ」

天城
「いや、お似合いなのに勿体無いと思ってな」

山城
「え、何か？」

天城
「ん、いや、こっちの事だ」

一等輸送艦に搭載されていた大発及び特大発（大型戦車輸送の為、開発された大型発動機艇）による上陸・輸送は順調だった。
なぜなら、まだこの頃は上陸したところを撃退するとか以前に大規模上陸作戦さえも実行されていない。
だから、邪魔などされずに大発や特大発は手漕ぎで砂浜に向かうボートを尻目に輸送船団と砂浜を行き来していた。
そして、一番先に上陸した田中少尉と佐田軍曹のチヌと歩兵分隊、大倉中尉の一式砲戦車、ローエン中尉の一個小隊は既に海岸から数キロの地点まで進出し簡単な防御線を敷いていた。
そして９７式軽装甲車テケは砂浜の海岸で物質揚陸・輸送に使われていた。
トラックの数が少なく、また原型となった９４式軽装甲車ＴＫが元は弾薬・火砲の牽引車だったのと、その小ささ故にそちらに回された。
まあ、とにもかくにも、シリルティア王国軍の揚陸は進んでいた。

その報告がきたのは５時頃…１７００…の事だった。
鳥海搭載の零式水偵が海岸に接近する部隊を発見した。
これはたちまち鳥海、天城、三式中戦車チヌに無線によって伝達された。
これを聞いた小澤中将は、同士討ちの恐れありと見て艦砲による援護射撃は取り止めた。
まあ、それでも近代装備で身を固めた日本陸軍部隊による合同部隊

だから大丈夫だと見ていた。
一方、陸上部隊の方は大倉正志中尉を派遣部隊陸上指揮官として行動しており、敵部隊接近を聞いても逆に「来るなら来い！」と意気込んでいた。
防御線には三式中戦車チヌと歩兵分隊、ローエン中尉の歩兵小隊、一歩下がった所に一式砲戦車と王国軍砲兵隊と９４式山砲２門が配置され、総人員はチヌや砲戦車、砲兵を入れて７０名。
対し接近する敵部隊は騎兵約２００名と歩兵約４００名程。
まともにぶつかれば全滅間違い無しだ。

佐田軍曹
「おうおうおう…これ見よがしに進んで来るな」

土嚢と簡単に掘った塹壕で余裕たっぷりに敵を見ていた。

ローエン中尉
「…あなた方にとっては容易い敵とゆう訳ですか」

佐田軍曹
「まあ、２０年も軍隊生活してれば大概の事には慣れますわ」

そう言うとガッハッハッハと笑い敵を見る。
何故かローエン中尉はこの古参軍曹には勝てない様な気がした。

田中少尉
「佐田軍曹、出来る限り引き付けてやりますよ」

佐田軍曹

「わかっております」

こんな会話をしている間に、共和国軍の騎兵隊が突っ込んで来る。
まず騎兵が陣地に突撃・突破した後、歩兵が制圧する作戦だろう。
しかし、その思惑は露と消えた。
あと陣地まで一息とゆう所で一斉に銃の火蓋がきられた。
まずチヌの車体機銃、続いて９９式軽機関銃と９２式重機関銃、そして９９式歩兵銃が一斉に吠えた。
また、迫撃砲、一式砲戦車・９４式山砲の７５ｍｍ砲が火を吹いた。
迫撃砲は機関銃・歩兵銃の射程外を、一式砲戦車と山砲は迫撃砲の射程外に向けて撃ち込んだ。
撃たれる方は堪らない。
騎兵は瞬く間に壊滅、歩兵も大損害を被った。
この為、戦闘は短時間で終わった。
敵部隊はほうほうていで逃げ出した。

田中少尉
「…佐田軍曹、負傷者の回収は大丈夫かな？」

佐田軍曹
「支那戦線の便衣兵ではありませんから、まあ、大丈夫でしょう」

田中少尉
「よし、では、負傷者を回収しよう」

次号へ

83　上陸（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

８４　戦の合間

天城防空指揮所

山城
「……結局、一方的展開に成って終わったとゆう事ですか…まあ、当たり前と言えば当たり前ですがね」

わざわざ防空指揮所に上がって来て報せに来た通信兵に礼を言って呟いた。
何せ相手は近代装備軍隊……正面から突っ込んでは僅か６００名程度で敵う筈が無い。

宮里
「山城。お前、乗り込むんだろう？　交代するから、飯食って、少し寝たらどうだ？」

そう言いながら、どこからともなく出て来た宮里。

山城
「ん、あぁ、そうだな。そうするわ。じゃあ、後よろしく」

そう言うと、ラッタルで下に降りる。
すると、その途中である人物と出会った。

山城
「小澤中将！」

小澤中将
「ん…おぉ、君か。小休止か？」

山城
「あ、はい…この後の事があり、砲術長と先程交代しました」

小澤中将
「…そうか、君は王城に乗り込む班の1人だったな」

山城
「はい…中将も小休止ですか？」

小澤中将
「いや…少し考え事をしていた」

山城
「考え事…ですか？」

小澤中将
「あぁ…この世界は元いた世界とは別世界だ……しかし、日米戦は本当に避けられなかったのだろうか…とな」

多分、戦場に身を置いているからこそ、元いた世界の事を考えてしまうのだろう。

山城
「…これは答えに成るかは解りませんが…本官の世界では開戦まで2年の月日がありました。そして、陛下がアメリカを訪問し、イギリスとも協力関係にあった。しかし、結局は開戦に成りました……いくら日本が避けたくとも、アメリカ自身がやろうとしたのです。

避けたくても、避けられません」

小澤中将
「……フッ、結局は遅かれ早かれ対決する運命だったか」

山城
「はい……では、本官はこれで」

小澤中将
「うむ。引き留めて済まなかった」

山城
「いえ…また明日会いましょう」

そう言うと山城は再びタラップを降りて行った。

天城艦長室

夕食を食べた山城はベッドに転がった。
しかし……普段よりも早いせいか寝れない。

山城
「……徹夜に成るかも知れないのに…体は正直とゆうか…」

自分の身体なのに呆れてしまう山城。

コンコン

山城
「（誰だ？）どうぞ」

シルヴィア
「失礼するぞ」

山城
「なんだ、シルヴィアか」

シルヴィア
「…なんだとは、なんだ？」

山城
「いや、誰かなと思ったからさ…それより、君も乗り込み組だろう？　休んだ？」

シルヴィア
「……その事だが…」

ガバッ！

山城
「うお！？」

いきなりシルヴィアが山城に抱き付いてきたー！！（おいおい…（－－；））

山城
「あ、あの～…シルヴィアさん？」

困惑しつつも訊くしか無い山城。

シルヴィア
「……笑うなら笑え……貴族の家に生まれおきながらこの様な醜態を見せるのだからな…」

蚊の鳴く様な声で呟く。

シルヴィア
「しかしな……何故か怖いのだ…既に三度も修羅場を潜り抜けた筈なのに……今になって…怖いのだ…」

……最後には涙声になってるし…

シルヴィア
「ふ…今さら怖じ気づくとは……どれだけ強がっても所詮は女なのだな…」

…最後は自己嫌悪かよ……なら、容赦はせん。

ギュウ

シルヴィア
「な…！」

山城
「…バーカ、怖い時は男だろうが、女だろうが、貴族だろうが、軍人だろうが、誰だって怖いんだよ」

山城はシルヴィアを安心させる為に強く抱き締めながら頭を撫でる。

シルヴィア
「…グズ…ずまぬ…やまじろ…」

山城
「…はいはい」

山城
「……ん？…あぁ！」

いつの間にやら、山城はシルヴィアを抱き締めながら寝ていた。
しかも、シルヴィアも安心したのか眠っていた。

山城
「え、えーと、時間時間……２００（フタフタマルマル）…うそ…この体勢で２時間も寝たのかよ……どんだけ～」

呆れるべきか何なのか……とにかく言える事は１つ…これは現行犯だな。

山城
「はあ…シルヴィア～、時間だよ～、起きろ～」

シルヴィアを軽めに揺すって起こす。

シルヴィア
「フガッ……時間か？」

山城
「そう、時間」

シルヴィア
「…長居してしまったな……着替えて来る」

山城
「あぁ、わかった」

そう言うと、シルヴィアは艦長室から出て行った。
ただ、顔が真っ赤だったが……

1時間半後……飛龍甲板

山城
「泉、ヘリは大丈夫か？」

泉
「もちろん、毎日ちゃんと整備してたんだから」

そう言うと片目を瞑り、ブイサインを出す。

山城
「よし、なら行こう」

そう言って山城はシルヴィアと共にヘリに乗り込んだ。

山城
「さて、明日はどうなってるかな?……お天道様しか解らないよな」
山城がそう呟いた時、ヘリは飛行甲板から浮き上がった。

次号へ

８４　戦の合間（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

85　潜入

２３：４０…４０式ヘリ機内

山城
「さて、最終確認を行います…いいですか？」

クロイツ
「あぁ、かまわないよ」

アルスラーン王子の命を受け、案内役になった親衛隊長のクロイツが代表して返事をした。
ちなみに、今ヘリに搭乗しているのはクロイツとユリア隊長率いるアーネリア陛下の親衛隊女性兵６人、山城、シルヴィア、ガンナー役のクレマン、デュリオの１２名と操縦士の泉。

山城
「では、我々はこの近くの『秘密の入り口』から王城に侵入、共和国首脳陣を逮捕・拘束します」

クロイツ
「首脳陣の部屋は既に確認済みです」

シルヴィア
「あとはそいつらが逃げて無いかだな」

山城
「それについては自信がある。まだ1日目だからね」

まさか、1日目に敵が乗り込んで来るとは考えてはいないだろうし。

山城
「……そろそろか」

そう言って腕時計を見た瞬間、海上から轟音が響き渡った。
天城、鳥海以下大型艦艇による艦砲射撃。
王城側の注意を逸らす為に実施させた艦砲射撃である。

泉
「着陸するわ、準備いい？」

山城
「オッケー、後は頼んだよ」

独特の風切り音を響かせながら、ヘリは着陸した。

山城
「直ぐ離陸します！　素早く降りて下さい！」

そう言って真っ先に山城が降りた。
続いてシルヴィア、クロイツ、ユリア隊長、そして、親衛隊兵の6人。
全員が降りたのを見計らい、ヘリは離陸した。

クロイツ
「こちらです。皆さん」

そう言われ付いて行くと、簡単な井戸があった。

そして、被せてある蓋をクロイツが外した。

山城
「何ともまあ…典型的な事ですね」

クロイツ
「おや、では、向こうの世界でも？」

山城
「よく『秘密の出入口』で使われていますね…やっぱり、人間考える事は同じという事でしょう」

直ぐに持ってきていた懐中電灯で井戸の中を照らす。

クロイツ
「私が先に降ります。後に続いて下さい。山城君、予備はありますか？」

山城
「あと2つ持ってきてますよ…どうぞ」

1つを渡すと、山城達潜入班は降り始めた。

バタバタバタバタ……

泉のヘリは離陸後、飛龍に戻らず王城の上空で待機していた。

泉

「あそこまで派手に撃っちゃって大丈夫なの？」

クレマン
「あぁ、艦砲射撃ですか？　半分は空砲ですよ」

『情報屋』の自負しているクレマンが言った。

泉
「……妙に納得」

クレマン
「それより、自分達は何時までここに留まるんですか？」

デュリオ
「お前なあ…話をちゃんと聞いてたか？」

ガンナーとしてＭ２４９ミニミ軽機関銃……日本軍では６４式軽機関銃、愛称『６４』……の前に陣取ったデュリオが呆れながら言った。

クレマン
「いや～、寝てた」

デュリオ
「…バカ…合図があったら、この機関銃で教官達を支援する為にいるんだ」

クレマン
「あ…そうだったの？」

泉
「……大丈夫かしら？」

井戸の下には一段高くして道がついていた。
その道に従い、クロイツを先頭に進む。

クロイツ
「…着きました」

山城
「……ここは？」

今まで狭く暗い地下道を通って来たと思ったら、突然石造りの広い空間に出た。

クロイツ
「城内の地下にある水汲み場兼水質確認場所です」

山城
「…はい？　水質確認場所？」

シルヴィア
「つまり、籠城をした時に井戸の水に毒を放り込まれていないかを確認する場所だ」

山城
「なるほどね」

クロイツ
「ここなら、装備の最終点検も行えますから」

山城
「では、自分が見張りに立ちますから、皆さん点検してて下さい」

そう言うと軽快に石段を上がり扉を少し開け、持っていた鏡で扉の外を見る。

山城
「……見回りはいないな…手筈だと２０分程で艦砲射撃は終わる筈だから、既に終了しているか…就寝中かな？」

そして、腕時計を見た。
針は０時５０分を指していた。

山城
「開始まであと２０分か…まあ、ゆっくりさせてもらいますかね…忙しくなるし」

次号へ

85　潜入（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

86　作戦

シルヴィア
「隣、良いか？」

山城
「ん、あぁ、いいよ」

見張りを続ける山城に点検を終えたシルヴィアが近付いて来た。

シルヴィア
「ほれ」

山城
「え？」

シルヴィア
「お主の百式だ。代わりに点検しておいてやったぞ」

山城
「あぁ、ありがとう」

シルヴィア
「…ついでだ」

素っ気なく言ったシルヴィアに山城は頭を下げた。
ちなみに潜入班の装備は主に携帯火器であり、拳銃と山城・シルヴィアは１００式短機関銃、クロイツ及びユリア隊長と親衛隊員４人は一体どっから見付けて来たのかドイツのＭＰ４４アサルトライフ

ル＋各自の予備マガジン。
やはり、建物の中だとマガジン系やアサルトライフル系のコンパクト克つ弾をばら蒔ける物が便利だ。
まあ、相手が持っているのはマスケット小銃かピストルだから有利といえばこちらが有利だが…。

シルヴィア
「……お主はどうする？」

山城
「何が？」

シルヴィア
「この戦が終わったら、だ」

山城
「終わったら？　う～ん、そうだな、報告書書いて、書類整理して、え～と……」

シルヴィア
「違う違う、この世界にいるかどうかだ」

山城
「…あぁ、そっちか。そうだな…時々帰るかもしれないけど、多分こっちにいる時間が多いかな……多分」

シルヴィア
「そ、そうか…」

山城

「まあ、天城さんに妙に気に入られちゃったから、天城さんが離してくれなさそうだし…」

シルヴィア
「ふーん、そうか、そうだな、うむ。（怒）」

山城
「…シルヴィアさん？」

…やっぱり、天城さんの事は禁句かな？

クロイツ
「山城君、点検が終わりました。時間もそろそろいいのでは？」

山城
「……えぇ、そうですね。では、後で会いましょう」

クロイツ
「えぇ、後で…生きてたら、ですが」

山城
「大丈夫ですよ。では、お先に」

そう言うと山城はシルヴィアの手を掴み出ていった。

山城
「さて…と…どうするかね～」

さて、城壁に上がった山城・シルヴィア。

2人はアルスラーン王子から預かった旗を市内から見える東門に掲げる為に様子を伺っていた。

シルヴィア
「いっそのこと、2人で百式を乱射しながら突っ込むか？」

山城
「弾が足りない。それよりは手っ取り早く拳銃で1人づつ片付けた方が早い」

シルヴィア
「…だが、射程が足りないであろう？」

山城
「イエス」

シルヴィア
「……手詰まりだな」

山城
「普通はね」

そう言うと山城は懐中電灯を空に向け点けたり消したりし始めた。

待機中の４０式ヘリ機内

デュリオ
「発灯信号確認。『イ・カ・ク・セ・ヨ』の繰り返しです」

ガンナーだけに素早く判断・報告したデュリオ。

泉
「やっぱり、くると思った。デュリオ、６４で適当にやっちゃって」

クレマン
「あのー、俺は？」

泉
「発灯信号でも見といて」

クレマン
「りょうかーい」

ダダダダダダダ！

６４が唸りだした。

山城
「よし」

軽快な速射音に伝わった事を確信した。

シルヴィア
「そう言えば、ヘリが待機していたな」

山城

「3で行くよ？」

シルヴィア
「いいぞ」

山城
「1…2…3！」

バッと飛び出た2人。
あとは全力疾走である。
城壁の見張りは混乱するか、ともかく空に向かってマスケット銃を撃つ。
注意は空に向いている。
しかし、近くを通過すれば感づかれる。
そこは山城の軍刀で張り倒す。
正に強行突破だった。
そんな風にしながら、東門の塔に旗を立てた。

クロイツ
「くそ！」

扉を打ち破ったクロイツが舌打ちしながら言った。

ユリア
「どうした、クロイツ隊長？」

クロイツ
「ユリア隊長、一杯食わされた」

見ると、部屋の中は空っぽだった。

クロイツ
「ここには今回の主犯がいた。しかし、見ての通りだ、悪運の強い奴め」

親衛隊員
「ユリア隊長、他の制圧は完了しました」

ユリア
「早かったな」

親衛隊員
「はい、これのお陰で楽々制圧出来ました」

そう言う音響閃光弾を見せる。

ユリア
「では、あなた達は残りなさい。私とクロイツ隊長は最後の1人を追いかける」

親衛隊員
「はい！」

ユリア隊長
「行きましょう、クロイツ隊長」

クロイツ
「えぇ」

２人は走り出した。

東門

山城
「一仕事終わり」

通用門の閂を抜いた。

シルヴィア
「さて、クロイツ隊長達と合流するか？」

山城
「そうしよう…か…？」

ふと、複数の人間が近付いて来る気がした。
直ぐに１００式短機関銃に手を伸ばし、いつでも発射出来る様にする。

山城
「止まれ！　誰か！？」

もちろん答えは返ってきた……発砲で。

バウン！バウン！

夜に発砲する場合、自然と狙い射線は上に向く。

かつ、相手がどこに居るかも解らず発砲したから、検討違いの所に弾は飛んでいく。
しかし、山城はそれは知っているから、発砲炎が瞬いたところに１００式を撃ち込む。

タタタタタタタ！
タタタタタタタ！

山城
「シルヴィア、後ろにいる奴を捕えろ」

シルヴィア
「わかった」

クロイツ
「山城君！」

山城
「あぁ、クロイツさん。誰か逃げました？　もしかしたら、そこで捕まっている奴かもしるませんよ」

……終わりとして適切かは解らないが、こんな形で終わった潜入作戦だった。

次号へ

86　作戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

87　不審艦艇群（前書き）

新米士官
「お約束通り～、の更新です」

山城
「大変だね～、大学の試験も」

新米士官
「あははは…全くです」

山城
「で、一番苦戦しそうなのは？」

新米士官
「３つありますが、提出期限からみると、ワープロのレポート」

山城
「……はあ？　そんなもんちゃっちゃと…」

新米士官
「いや…実はですね。自分このかた携帯、パソコンは触れた事はあるんですが、ワープロはあんまり……」

山城
「……いや、ヤバいだろう！！」

新米士官
「だって～、今まで自筆で済んでたのが、いきなりワープロで書け

だよ…いっそ長門で…は無理だから、天城で首吊っていい！？（泣）」

山城
「あほ！　天城さんに殺されるわ！」

新米士官
「だよね～、では、どうぞ～～（泣）」

87　不審艦艇群

11月9日

戦艦天城　艦長室

山城
「うげ～…まだあんのかよ～～（ー＿ー；）」

艦長室で膨大な報告書や決済書類と格闘する山城。
軍隊も組織、デスクワークとは切っても切れないのである。

山城
「福本元帥が書類仕事は嫌だったって言ってたけどさ……艦長でこんなにもあんのかよ～～」

仕方ないって。

山城
「うるさい！　お前もレポートとかやりやがれ！」

わかってるよ！

王城に潜入し、共和国派首脳陣を捕らえてから5日……正確には4日……が経過した。
僅か1日…あるいは一晩…と電撃的展開に共和国派は大混乱に陥った。

頭がいない組織は脆い。
実際、首都の近くにいた共和国派の部隊は早朝、東の城門に掲げられた国旗を見て王城に向かったものの、直ぐにアーネリア陛下の親衛隊の一斉射撃の前に手も足も出ず降伏した。
そして、アルスラーン王子が王城に入ったところで、クロイツ率いる親衛隊が街に出てアルスラーン王子の帰還を宣伝（？）した。
同時に、飛ばせるだけの航空機を飛龍から飛ばし、近くの町や軍港、付近にいる部隊の真上からアルスラーン王子帰還のビラを蒔いた。
後はお決まりのパターンで、元からアルスラーン支持の貴族や勝ち馬に乗ろうと傍観していた貴族がアルスラーンの下に馳せる。
また、共和国派の部隊・貴族もほとんどが降伏した。しかし、頑固な者も何処かしらにいるから、共和国派の抵抗も確認されている。
しかし、ほぼ少数の上、兵の逃亡・脱走が相次いでいる事からそれほど時間はかからないだろう。

それは丁度、未処理の箱と処理済みの箱の書類・報告書の量が入れ替わった時に起こった。

山城
「や、やっと終わった～～」

ドンドンドン！

シルヴィア
「山城！　緊急事態だ！」

山城
「勝手に入って～～」

バタン！

シルヴィア
「何を気の抜けた……疲れておる暇などあるか！　大変だぞ！」

山城
「……何が大変か教えてもらわないと解んないよ」

シルヴィア
「先程、飛龍の矢萩副長から連絡があってな、飛龍のレーダー画面が乱れたのだ」

山城
「……只の故障じゃないの？」

シルヴィア
「話を最後まで聞け。担当兵はその事を矢萩副長に報告した。しかし、それも僅かな間だ。その僅かな間にレーダー画面に４つの光点が出現していたのだ！」

山城
「……え、４つの光点？　それ、対空レーダーじゃなくて？」

シルヴィア
「水上レーダーの方だ」

この時、山城の頭は最速回転させていた。
水上レーダー、画面の乱れ、４つの光点……これから導き出されるのは只１つ……

山城
「シルヴィア！　飛龍に行くぞ！」

……４０分後……飛龍艦橋

山城
「じゃあ、飛龍のレーダーはまだ４つの光点を捉えたままなんですね？」

矢萩
「あぁ、位置はそれ程動いていない。ついさっき偵察の流星を飛ばした」

迎えた矢萩が状況を説明していた。

山城
「確認しますが、本当に僅かな時間だったんだですね？」

矢萩
「あの時、艦橋に居たから本当に僅かな時間だ。それこそ1分も経っていない…３０秒程の出来事さ」

山城
「僅か３０秒の間にレーダー画面が乱れ、４つの光点が出現した…か」

となると、もはや結論は1つしかない。

シルヴィア
「ところで、山口艦長は？」

矢萩
「あぁ、彼女なら少しト…」

カッ！

山口
「…それ以上余計な事を言うな」

何処からか飛んできた短剣と出て来た山口艦長……これで大体察しが付く。

矢萩
「お帰り、艦長」

山口
「ふん…流星から報告は？」

矢萩
「今のところはまだ」

山口
「そうか」

壁に刺さった短剣を引っこ抜きながら、矢萩副長に現状を報告させる。

シルヴィア
「…あの2人……仲が良いのか悪いのかわからぬ」

山城
「う～ん…普通じゃないかな？」

『こちら流星。飛龍、応答願う』

矢萩
「こちら飛龍。見付けたか？」

『はい、艦影4つを確認。これより接近します』

矢萩
「了解。但し、慎重に近付け」

無線の内容は艦橋内限定放送だから、山城達にも聞こえていた。

山城
「……出来れば、スクリーンと撮影機器があったら、映像を送ってもらって、こっちで判断出来たんだけどな」

矢萩
「おや、そうなんですか？」

山城
「えぇ、向こうなら偵察機の名の付く物なら本部や旗艦に搭載してある撮影機器で撮影した映像を送って見られる様になってますから」

矢萩
「へえ～、凄いですね」

山口
「こら、そこ。２人だけ解る話をしなーい」

シルヴィア
「……半分も理解できぬ」

……女性２人から批判が飛んだ。

『こちら流星。艦種はっきりしてきました。空母２隻に巡洋艦クラスが２隻です！』

矢萩
「なに！　空母だと！！　それは本当か！？」

『はい！　あれは間違い無く空母です！』

この報告を聞いて艦橋に居た誰もが驚いた。
相手の正体は不明だが、空母２隻となれば、自分達に不利過ぎる。

山城
「こちら、天城艦長の山城です。４隻の特徴を出来る限り報告して

下さい」

呆然とする矢萩から無線機を拝借し、冷静に指示を出す山城。

『はい…空母は立派な島型艦橋を備えた全通甲板で、甲板上にはヘリが見えます。また、巡洋艦クラスは主砲が前部甲板の単装砲１門のみ以外は目立つ砲装は無し。後部甲板は真っ平らで、艦橋が高雄型巡洋艦に似ております…あ！』

山城
「どうしました？」

『あれは…軍艦旗です！　旭日軍艦旗です！』

山城
「わかりました。そのまま偵察を続けて下さい」

そう言うと、無線を矢萩に返した。

山城
「さて、山口艦長。どうします？」

山口
「え、あ、あぁ、そうだな……副長、どうする？」

矢萩
「ここは陸に居る小澤長官に判断を仰いだ方がいいと思う。相手の正体も解った事だし」

山口
「そうだな…副長、ひとっ走り通信室に行って小澤長官に連絡してこい」

矢萩
「はいはい」

次号へ

87　不審艦艇群（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております～～。（泣）

88　自衛艦隊（前書き）

新米士官
「なんとか暇を見付けて、本日更新！　出来れば明日も更新したい！！」

福本
「いや、待てい！　なんであっち（第七独立機動艦隊奮戦記）じゃなくて、こっちを更新する!?」

新米士官
「それは偶々で…」

福本
「本当か？　本当に偶々か!?」

新米士官
「……と、とにかくどうぞ（パン！）ゲフ！」

88　自衛艦隊

1時間後……飛龍艦橋

矢萩が打った電文から、事態の重要性を理解した小澤中将は泉の40式ヘリに乗り、飛龍へと向かった。
そして、飛龍にて事の詳細を聞いていた。

小澤中将
「ふむ…それで、どうするつもりかね？」

山城
「やる事は1つ、会います」

きっぱりと言った山城の言葉に山口が反論した。

山口
「だが、向こうに攻撃の意思があるかもしれん。ここは1日2日様子を見てはどうだ？」

矢萩
「いや、その必要は無いし、向こうに攻撃の意思も無い」

山口
「いやにはっきり言うな…根拠を聞きたい」

矢萩
「まず第一に、もし攻撃する意思があるなら、既に流星が彼らの上空に到達する前に撃墜されているよ。それに、僕らが転移した時は、

まず情報の収集から始めたよね？　流星を撃墜したら、結果的に情報源を無くす事になる。だから、撃墜もしないし、攻撃もしない。向こうにとっては何の得にもならない」

山口
「むう…そうか」

山城
「と、言う訳です」

小澤中将
「うむ、それで、飛龍で行くか？」

矢萩
「はい。ヘリも帰って来たわけですし、内火艇で行くのも面倒くさいですし」

小澤中将
「そうか。ならば、行くとするか」

……2時間後……

水兵
「正体不明艦４隻視認！！」

この声に艦橋にいた全員が首に掛けている双眼鏡や、備え付けの大型双眼鏡に群がる。

山城
「…やっぱり、と言うべきかな」

苦笑しながら顔から双眼鏡を離す山城。
そらそうだ、この中で一番未来から来た人間の1人である。
流星からの無線である程度艦艇については想像がついていた。

山城
「イージス艦と軽空母……さて、どの世界からの転移かな？」

泉
「あの空母、ヘリだけの搭載ね…ヘリ空母？」

シルヴィア
「…見た目はひ弱な艦隊だな。あれで大丈夫なのか？」

山口
「…空母と聞いていたが…この飛龍と比べるとスッキリしているな」

矢萩
「まあ、確かに」

小澤中将
「ふむ、未来の船だな」

それぞれ思った事を口にする艦隊・艦艇幹部の皆さん。

士官
「正体不明艦隊より打電、『我第１護衛隊群旗艦日向。貴艦ノ名ヲ

問ウ』」

山口・小澤中将
「「……日向？？」」

不思議そうに呟いた山口と小澤中将が向こうを見た。……どう見たって、あの重厚な戦艦日向の影も形も無い。

矢萩
「返信『我空母飛龍成リ。貴艦隊ト会談ヲ望ム。許可サレタシ』以上」

士官
「はい」

艦長の代わりにてきぱきと指示を出す矢萩副長。

山城
「泉。ヘリの用意を頼む。俺とシルヴィア、山口艦長、小澤中将の４人だ」

泉
「オッケー」

返事をすると艦橋を出て行った。

士官
「返信です。『了解セリ。会談ハ貴艦デ行ウカ？』」

矢萩

「『貴艦隊旗艦デノ会談ヲ希望ス。ソノ際ヘリニテ向カウ為、誘導ヲ養成ス』」返信内容を書き取った士官が通信室へと引き返す。

小澤中将
「さて、向こうに行くとするか」

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン……

４０式ヘリは無事に旗艦の『日向』に着艦した。
しかし、一行が甲板に降り立つとたちまち違和感が沸いて出た。
何せ顔は日本人だが、どうも着ている服が違う。
それほど時代に変わりが無い山城でさえ心中では「あんな服装だったけっか？」と首を傾げていた。
そして、士官…多分、尉官クラス…に案内され、会議室に通された。
入ってみると、人数が予想より多い。
多分、残りの3艦の艦長が混じっているのだろう。

「初めまして。海上自衛隊第1護衛隊群司令の滝口海将補です」

「ひゅうが艦長の田崎一佐です」

「いせ艦長の太田一佐です」

「こんごう艦長の篠田一佐です」

「あしがら艦長の佐々木一佐です」

シルヴィア
「シリルティア王国海軍士官候補生、シルヴィア」

泉
「ヘリパイの泉少尉です」

山城
「戦艦天城艦長、山城少佐です」

山口
「空母飛龍艦長の山口中佐です」

小澤中将
「派遣艦隊司令小澤治三郎中将です。」

小澤中将の紹介の後、向こうはソワソワし始めた。
どうやら、向こうの世界でも何かしら有名の様だ。
しかし、問題はこれからなのだが……

今や説明し慣れた山城にとって、相手がどんな反応を示すかは大体想像がつく。「そんな事は無い！」と言って怒鳴って認めないか、あるいは認めるかは置いといて驚くか……まあ、数少ない例外としてそのまま冷静に受け入れるかもしれないが……彼らは後者だった。それもそうだろ、普通に起こる事の無い筈の事が起こったのだし。しかし、正直にいえば彼らの世界については……一瞬声を失った。

戦争に負け、軍を悪者にし、自由主義・個人主義なるものが闊歩し、愛国心が失われ、日本国民を拉致し、核兵器をちらつかせるしか継続出来ない小国に何時までも負ける日本……そんな日本を想像しただけで悪寒が背中を過る。
それは他の3人もそうだ。特に小澤中将のショックは大きいだろう。
それと、彼らが転移した状況もわかった。
2012年、韓国がいきなり対馬を強襲、海上自衛隊第1護衛群は対馬に向かう途中、何者かの核兵器攻撃を受け……その内4隻がここにいるとゆう訳だ。

滝口海将補
「しかし、わからん。それならなぜ異世界に日本海軍がいるのです？」

小澤中将
「私も彼らもあなた方と同じく何かが原因で転移した者達だ」

篠田一佐
「ならば、あなた方の方が転移した可能性もある」

やはりとゆうか、その意見が出てきた。
ならばこっちはかまを掛けよう、その方が後の話がしやすい。

山城
「それでは、GPSや衛星通信、あなた方の連絡先である防衛省と繋がりましたか？」

「「「「「……」」」」」

自衛隊側は驚きながら沈黙している。
やはり、図星か？

田崎一佐
「なぜＧＰＳや衛星通信の事を知っている！？」

やっぱりだ。
彼らはこっちが昭和年代の日本海軍軍人だと思っていたのだろう。

山城
「それは当たり前です。本官は２００５年の大日本帝国から転移して来ましたから、ＧＰＳや衛星通信の事は容易に想像がつきました。なにかご質問は？」

「「「「「……」」」」」

またも沈黙…いや、驚愕して沈黙したのだろう。
彼らからすれば戦争に勝利して２００５年を迎えた日本帝国は驚きだろう。

滝口海将補
「確かに……すでに2時間が経過しているが…回復した様子は無い…今使えるのはモールスだけだ」

佐々木一佐
「…いよいよ彼らの言っている事が正しく思えてきましたね」

篠田一佐
「どうします？」

太田一佐
「……残念ながらな…とにかく一度何処かに寄港しないといかん」

田崎一佐
「何処にだ？　我々にあては無いぞ」

……艦長同士で相談が始まった。

小澤中将
「ならば、我々が仲介しても構いませんが？」

この発言に艦長達が小澤中将に注目した。

小澤中将
「但し、この世界の技術力は良く言って日露戦争の頃と同等です。
その為、我々の指示に従ってもらいますが」

滝口海将補
「……やもえない。小澤中将の指揮下に入ろう。みんなはいいな？」

艦長達も各々で首を縦にふった。

滝口海将補
「それでは小澤中将。よろしくお願いします」

小澤中将
「わかりました」

次号へ

88　自衛艦隊（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

89　帰還後

11月16日

ネイラーン王国内の混乱も沈静化し、任務を終えたシリルティア王国と異世界派遣艦隊は例の海上自衛隊護衛艦4隻を連れ帰航した……。

山城
「……それはいいんだよ、それは！　問題はなんでこうなったかだ！！」

天城の防空指揮所からツッコミを入れる山城。

鷲井
「仕方ないさ。それにお陰で早く確認がとれたし」

山城
「そうゆう問題か？　あれはそうゆう問題なのか！？」

ビッと指差す方には全通甲板の空母……いや、空母擬きの輸送艦おおすみがいた。
そして、目を陸に移すと3式中戦車とは明らかにスケールが違う戦車がある。
10式及び90式戦車、87式自走対空高射機関砲、87式偵察警戒車、89式装甲戦闘車、96式装輪装甲車、軽装甲機動車……などが揚陸されている。
どれもこれも、似たようなのを元の世界で見ているだけに親近感が

湧くが……問題はそこじゃあなくて！

山城
「あの輸送艦が俺達が一緒に連れて来た４隻の僚艦で、同様に転移してきたのはわかる……だが！　こんな状態をなぜ連絡しなかった！！？」

鷲井
「仕方ないだろう。連絡しても繋がらなかったんだ。まあ、原因はわかったが…」

山城
「なんだ！？」

鷲井
「簡単な事だ。時空の穴？　異世界へのゲート？　まあ、何でもいいやか……が新しく開いた」

山城
「……え？　今なんて言った？　聞き間違えじゃあないと、ゲートが新しく開いた！！？？」

鷲井
「あぁ、聞き間違えじゃあ無い。新しく海でゲートが開いた」

山城
「…何処だ！　何処に繋がっている！？」

鷲井
「驚くなかれ、なんと俺らの世界の大阪湾、神戸寄りに繋がってる」

山城
「…マジかよ……作者、余りにもご都合主義やしないか？」

そうゆう仕様の小説ですから。

鷲井
「こっちはおおすみのレーダー、向こうはミサイル艇のレーダーで発見した。今のところ、確証は無いがあっちに繋がっている可能性はある」

山城
「…この事は誰が知ってる？」

鷲井
「ここに居る全員、あとは向こうの神戸鎮守府の人間と福本次官…あとは政府のお偉いさんかな」

山城
「……いくら日本国内の中とはいえ、下手をしらた怪しまれるぞ？」

鷲井
「あぁ、それも大丈夫。今んところは海底地殻の異変とか何とか言って通行規制してるんだとさ」

山城
「はぁ…良く考えたもんだな…それでも長くは保たんぞ？」

鷲井
「それについては…」

シルヴィア
「おーい、そなた達に電文だぞ～」

通信室から上がって来たシルヴィアが山城に電文を渡す。

山城
「…2日後、福本次官がこっちに来るそうだ。今後の事を検討する為にな」

電文を一読し、鷲井に喋りながら渡す。

鷲井
「あ～、やっぱりか。そうくると思った」

そりゃそうだ。
今までなら、現地で何とか出来ていた問題が近代装備の軍艦（自衛隊の事）と海でも向こうへのゲートが開いてしまったのだ、色々と計画修正が必要になってくる。

シルヴィア
「今度は総責任者のお出ましか」

山城
「そうゆう事」

鷲井
「あ～あ、現場責任者は楽でいいね」

「あらあら、現場責任者なんて…しばらく見ない内に随分出世したわね」

山城
「その声は…横井軍医中尉!?　お久し振りです！　2年振りですね！」」

防空指揮所に上がって来たいかにも歳上の女性に山城は驚きと喜びの声を上げる。

山城
「紹介するよ、シルヴィア。海軍軍医で4年先輩の横井真弥(よこいまや)中尉」

横井
「初めまして」

シルヴィア
「あ、はぁ…」

間の抜けた様な声を出すシルヴィア。

横井
「あら、鷲井君も居たの？　どう、あれから？」

鷲井
「あははは……その話はまた今度に…」

シルヴィア
「何かあったのか？」

山城
「いや…3年前に横井さんが研修かなんかで神戸に来てた時、あいつの不幸体質のせいか何かがあたってな……腹痛起こして、運んでやったんだ。それが横井さんとの縁の始まり」

シルヴィア
「ふーん」

鷲井
「山城…余計な事を言うな…」

山城
「ところで、横井中尉はなぜこちらに？」

横井
「あら、あなたは現場責任者で少佐なんでしょ？　わざわざ階級で呼ばなくていいのに」

山城
「いえいえ…ところで質問の方は？」

横井
「あの後、1年半程現場回りしてたわ。けど、半年前にいきなりデスクワークに飛ばされたのよ！　酷くない！？」

山城
「は、はぁ…」

横井
「最初は我慢してたわよ。けど、最近になって飽きてきたの。で、

たまたま見た掲示板に現場急募があったから、応募したの。多分、他にも応募した人はいたと思うけど」

この時点で、山城は大体のところまで話が見えていた。
しかし、機密事項に関する事を掲示板で応募するとは……どれだけ大胆不敵なのか……。

横井
「面接が2回あったけど、まさか2回目に福本次官が面接官を努めてたのは驚いたわ。けど、そこであなた達と顔見知りと言ったら、オッケーでちゃて……その理由が今わかったわ」

鷲井
「そりゃそうですよ。何せ特一級…表にバラしたら即死刑級の機密ですから」

山城
「オーバーだ。ところで、こちらでの活動は？」

横井
「何時も通り。怪我人、病人の治療に、軍民の診断、現地の衛生環境の調査、予防接種、その他色々ね」

山城
「あはは、本当に何時も通りですね」

横井
「さて、司令官に着任挨拶しないと……話だと、酒好きタバコ好きの小澤中将だっけ？」

山城
「いや…間違ってはいませんが…まあ、行きましょう」

……相変わらずの山城達だったが……翌日、彼らを巻き込む大騒動が起きてしまう……

次号へ

89　帰還後（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

９０　事件発生！（前書き）

新米士官
「うおおお！　本日より完全復活！！」

山城
「やっとテストとレポートが終わったんだな？」

新米士官
「おう！　だから今日と明日はこっちを、月曜日からバイトだが第七艦隊の更新も再開だ！！！　待ってろよ～、スターリン！！」

山城
「…では、本編をどうぞ」

９０　事件発生！

１０月２日　神戸海軍飛行場

残暑の９月が終わり、過ごしやすい秋の１０月になった山城達の元の世界。
そんな神戸港の近くではミサイル艇と観測艦、練習艦陸奥まで動員しての名目上『海底地殻変動の調査』が行われている。
しかし、そんな事は神戸軍用飛行場（海空軍共同使用。場所は現実世界の神戸空港）の管制塔には何の関係もなかった。
それよりも、７月後半より増加した輸送機やら何やらの管制と、空側のゲートに近付く不審機の警戒をしなければならず、ここ最近は人員を増やした程だ。
まあ、とにかく空の人間にとって、海の事はあんまり気にしていなかった。
しかし……事件は大阪湾上空で起きた。

０８０５　管制塔

レーダー員
「う～ん…ん？」

もうすぐ交代と思い、伸びをしたレーダー員はレーダー画面を見てある事に気付いた。

レーダー員

「班長、この時間にこの上を通過する編隊なんてありましたっけ？」

班長
「いや、緊急も含めてそんな予定は無い」

レーダー員
「じゃあ、この光点はいったい…？」

班長
「なに！？」

班長が慌ててレーダー画面を見ると、南から北上する光点が９つ。
それも、見事な3機一個分隊が三角形を作り、９機一個小隊で大三角形を形成している。
これは日本陸海空軍の基本的編隊体型である。

班長
「湾内のミサイル艇、観測艦、陸奥に連絡しろ！　接近する編隊の確認を要請！　念のため、迎撃用意！」

騒然となった飛行場の管制塔であった。

練習艦陸奥甲板

福本（勇気）
「嘘…だろう！？」

生徒の中で数少ない真実を知る1人で、今回の騒ぎで引っ張り出さ

れた福本勇気が驚愕しながら呟いた。
甲板には同じように引っ張り出された同級生達が上空を指差し、騒いでいる。

セルベリア
「……ユウキ」

福本（勇）
「…いくら何でも、冗談にしてはキツ過ぎるぞ！」

上空を見ながら叫ぶ福本勇気の視線の先にあったのは、悠々と飛ぶ一式陸攻……一式陸上攻撃機……の一個小隊の編隊だった。

班長
「本当に…一式陸攻…」

管制塔から双眼鏡で機種を確認した班長は呟いた。
しかし、問題はそこでは無い。

レーダー員
「班長！　一式陸攻の編隊、神戸市内に向かっています！」

班長
「なに！？　止めろ！　とにかく止めろ！」

レーダー員
「…どうやってですか？」

無線は通じず、対空ミサイルや対空機関砲などが狙いを定めていたが、日本機にはさすがに撃てない。

班長
「迎撃機はどうした!?」

管制員
「あの…現代のジェット機では一式陸攻を追い越してしまいますよ？」

班長
「あがーー!!」

止める手段が全て封じられた事により、班長は断末魔の様な叫び声が上がる。

管制員
「まさか、班長…爆撃される事を心配しているんですか?」

班長
「そうだ!」

管制員
「なら、大丈夫ですよ。彼らは日本人ですよ?　それに、彼らはミサイル艇や陸奥で軍艦旗を見ている訳ですから…」

班長
「誤爆の可能性があるじゃないか!?」

管制員

「ここ、日本の神戸ですよ？」

班長
「……あ」

レーダー員
「大丈夫ですか？」

こんな会話が交わされている内に神戸市上空に進入、１０分程飛行すると進路を変えた。

レーダー員
「一式陸攻の編隊、進路変えました！」

班長
「どこにだ！」

レーダー員
「えーと…！　真っ直ぐ空のゲートに直進中！」

班長
「な、なんだと！？」

つまり、このまま行けばゲートに入って……

管制員
「向こうに連絡しましょう。向こうなら紫電改や烈風がありますから」

班長

「あぁ、頼む」

管制員の提案に班長は許可を出した。
そして、一式陸攻の編隊は班長やレーダー員の見ているレーダー画面上の空のゲートに接触すると反応が消えた。

……その頃　異世界上空

大澤
「……なあ？」

岡田
『何ですか？』

大澤
「なんで俺達がヴィクトリアの訓練飛行に付き合わなきゃいけないんだ？」

岡田
『仕方ないですよ。飛龍の搭乗員達はほとんど休暇中。残りも機体整備の手伝いです』

大澤
「あ～あ、なんであいつのお供をやるなんて…ついてね～～」

ヴィクトリア

『……今から回り込んで撃ち落としましょうか？』

大澤
「ふん、ペーペーの癖に」

ヴィクトリア
『あら、やってみる？　死んでも知らないけど？』

岡田
『はいはい、命掛けの喧嘩なら地上でじっくりやって下さい。なんなら、衛生兵とＡＥＤを用意しておきますよ？』

ピーガ～……

山城
『こちら、山城。喧嘩なら本当に地上でやってくれ』

大澤
「聞いてたのかよ…用はなんだ？」

山城
『実は向こう（元の世界）から連絡があって、空のゲートから一式陸攻の９機編隊が入って来た』

大澤
「はあ！？」

岡田
『あの～…一式陸攻ってうちら（日本）の物じゃあ…』

鷲井
『その一式陸攻の編隊は向こうの大阪湾上空で突然出現したんだ！』

大澤・岡田
「『はあ！！？』」

ヴィクトリア
『？？？』

山城
『詳しい事は後だ。今から誘導するからそっちに向かってくれ』

大澤
「わかった！」

岡田
『了解！』

ヴィクトリア
『訳が解らないけど了解』

大澤
「あれ……だな？」

岡田
『あれです』

暫く飛行すると、少しづつだが見えてくる９つの黒点。

大澤
「よし、一度擦れ違って一式陸攻の編隊か確認する」

岡田
『はい』

ヴィクトリア
『了解』

フルスロットにして、全速で一式陸攻の真横を通過する。

岡田
『確かに一式陸攻ですね。しかし、一体どこから?』

大澤
「知らん。だが、もうそろそろ地上に降りてもらうか。岡田、行け」

言われた岡田機は直ぐに前に出ると、スケッチブックとサインペンを取り出し、「我に続け」と書き、一番前を進む一式陸攻に見せる。すると、従うとゆう合図のバンクが振られ、岡田機を先頭に飛行場へと向かう。

山城
「……見えて来ました!」

現れるであろう方向にずっと双眼鏡で見ていた山城が叫んだ。
この叫びに小澤中将、山口少佐、滝口海将補達が双眼鏡を向ける。

小澤中将

「…確かに一式陸攻だ」

山口少佐

「しかし、なぜ向こうなのだ？」

一式陸攻を確認した人間の言う事は様々だ。

しかし、山城は1人思った。

あぁ、こりゃ、大変な事になたったな…と……

そう思いながら、着陸体勢に入った一式陸攻を見ていた。

次号へ

９０　事件発生！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

91　事件処理

11月18日　飛行場

バタバタバタバタ……

1機のヘリがロータによる風切り音を響かせながらやって来た。
そして、着陸体勢に入り、ゆっくりと整地された平地に着陸する。
そして、開いたドアから出てきたのは、福本勇気の父にして国防省海軍次官の福本伊吹中将である。

山城
「ご足労お掛けしてすみません！」

ローター音で半分叫ぶ様な声を出す山城。

福本（伊吹）
「いや、どうせ一度は総責任者として来るつもりだったからな…向こうの騒ぎは知ってるか？」

山城
「はい。パソコンのニュース欄を見ました」

福本（伊）
「そうか…なら、新聞は要らなかったな」

そう言って懐から出したのは向こうの新聞……10月3日の朝刊だった。

山城
「相変わらず…ですか？」

福本（伊）
「今回はブンヤ（マスコミ）が丁度ネタ不足の時に起こったからな…きっちり食い付いてきた」

福本次官より新聞を受け取り広げると、一面から『謎の編隊現れる！』『海底地殻異変との関連は？』『政府・軍共に発表無し』等々の見出しが目に付く。

福本（伊）
「まったく…時として、ブンヤ程滅びてほしい物は無いと思ってしまうよ」

山城
「あははは……」

本当に……特に利益主義に走ると余計に……

福本（伊）
「ところで、皆さんは？」

山城
「プレハブ兵舎の会議室です。ご案内致します」

案内されたプレハブ兵舎の会議室には既に各艦の艦長と小澤中将、滝口海将補が居た。

そして、もう1人……

山城
「ご紹介致します。昨日転移した一式陸攻に搭乗しておりました第26航空戦隊司令有馬正文少将です」

福本（伊）
「有馬…あ、まさか！？」

有馬少将
「はい。空母翔鶴艦長でした」

有馬正文少将は山城達の世界でも元翔鶴艦長であり、部下に対して低姿勢で接した事は有名である。

有馬少将
「昨日はこちらの行動により軍・民にご迷惑をお掛けした事を謝罪します」

福本（伊）
「いえいえ、あれは不可抗力とゆうやつですから」

そりゃそうだ。
それに、騒いでいるのはマスコミだけだ。

山城
「中将、そろそろ…」

福本（伊）
「あぁ、そうだったな」

有馬少将を席に就かすと福本伊吹次官は話を始めた。

福本（伊）
「では、皆さん。本来なら自衛隊と海のゲートに対する皆さんの意見を聴きたかったのですが、昨日の事で向こうのマスコミや諸外国が騒ぎ出しました。この為、昨日政府によって決定した事を伝えます」

そう言って福本伊吹次官は政府決定を話した。

シルヴィア
「う～…未だか？」

流石に今回は外で待っているシルヴィア。
しかし、そんな彼女の我慢も既に限界だった。

シルヴィア
「うぅ～…会議室の声は聞こえんし…」
いくらプレハブ兵舎とはいえ、防音性は確保している。

シルヴィア
「……既に1時間…長いな…」

そう呟いた時……

バン！

プレハブ兵舎の扉が開き、山城が出て来た。

シルヴィア
「山城！」

山城
「お、シルヴィア！　丁度よかった！　姫さんに会いに行くぞ！」

シルヴィア
「あ、あぁ…？？」

まるで状況が読めないシルヴィアは山城に言われるがまま、付いて行く。

2時間後……
首都ユニオン　王城内

山城、シルヴィア、そして福本伊吹次官が到着した時、アーネリア陛下は昼食を摂ろうとしているところだった。
流石にこれは山城も、また後で…と遠慮したのだが、本人はまったく問題無かった様で、それどころか、食べながらでも話せると言って、3人の昼食まで用意してくれた。

山城
「ご紹介致します。本件の総責任者で海軍次官の福本伊吹中将でございます」

福本（伊）
「お初にお目にかかります、陛下。大日本帝国海軍中将の福本伊吹です」

アーネリア
「シリルティア王国女王のアーネリアです。どうぞ、お座り下さい」

福本（伊）
「失礼します」

一礼すると椅子に座る。

アーネリア
「ところで…福本と申しますと…」

福本（伊）
「はい。私は福本勇気士官候補生の父親です」

アーネリア
「まあ、どおりで顔が似てると思ったら…親子だったのですね」

福本（伊）
「いえいえ…それに、僅か１８歳でこうして振る舞われる陛下もお凄いですよ」

アーネリア
「いえ…統治者としてはまだまだ未熟者です」

福本（伊）
「…そうですか。では、本題に入らせて頂きます。昨日の事件はご

存知ですね？」

アーネリア
「はい。シルヴィアさんから報告は受けています」

福本（伊）
「その件と海上ゲートの件を検討し、政府の決定が出ました」

アーネリア
「どのように？」

福本（伊）
「…もう少し、この世界のバランスを見てから、と思っておりましたが、作戦の成功と海上ゲート・今回の事件の発生から諸外国の目も日本に向いています。そこで、近々この事を世界に発表する事になりました」

シルヴィア
「え…えぇ！？」

アーネリア
「……今ですか？」

福本（伊）
「はい。ですが、存在の公表です。国交の事はまた別です……当事者に報せずに公表して後々禍根を残す訳にはいきませんから」

こういった外交面での配慮も大切だ。

福本（伊）

「日取りはまた伝える事に成りますが、こちらの世界に来て頂く事になるでしょう……すみません、こちらの都合ばかりになりますが…」

アーネリア
「うふふ、そうゆうものですよ…ところで、派遣部隊の皆様は？」

福本（伊）
「陸上部隊はそのままですが、艦艇はメンテナンス…整備・修理の事がありますので、海のゲートを通り神戸鎮守府のドックで行いたいと思います」

山城
「その事についてですが、こちらから数名同行させたいのですが…それと、そちらの技官も」

アーネリア
「即断は出来ませんが、掛け合ってみます…あ、昼食が出来た様ですし、後は昼食後に話ましょう」

次号へ

91　事件処理（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

92　記者会見（前書き）

注意

実在の人物・団体等が出てきますが、本作はフィクションであり架空戦記です。また、実在人物も作者が設定している為（また、世界・歴史が変わっている為）、変わっている部分があります。ご了承下さい。

92　記者会見

10月6日

その日、国内外の各新聞社及び報道局の報道陣は記者会見場所に指定された場所で、今か今かと待っていた。
彼らは、昨日本社や支社に届いた神戸における『海底地殻変動』や『謎の一式陸攻の編隊』の情報開示が行われると政府側から通達があった為に集まっている。すでに戦後60年、日本の行動が世界に何らかの影響を与えるだけに、諸外国の注目度も高かった。

『一連の騒動に対し、軍・政府共に発表を控えてきましたが、今回の発表により真実が多少なりとも明らかになると思われます。会見場所の…』

――プツ――

テレビの会見前の事前報道に見飽きたのか、さっさとテレビを消した。

「彼らが驚く顔を想像すると面白くなるね、福本海軍次官」

福本（伊吹）
「はあ…ですが、今回はお早い決断でしたね。首相」

「今回は勝手にマスコミが騒いでくれたからね…ただ便乗しただけだよ。それよりも、後の事は大丈夫かね？」

福本（伊）
「はい。外務省も向こうも受け入れ体勢はバッチリです…ひと悶着ありましたがね」

「君の父上には随分世話になった。公僕とは、政治家とは、国とは…独創的だが色々教わったね。なんで政治家に成らなかったんだね？」

福本（伊）
「あははは、父曰く『政治家に成ったら担ぐ馬鹿が居るから嫌だ』と」

「…元帥らしいなあ。お元気かね？」

福本（伊）
「今日も日課の畑仕事です。いつか首相に野菜を持って行きますと」

「私も引退後はそんな風に暮らしたいな」

秘書官
「首相、次官。そろそろお時間です」

「そうか…さあ、行こう。劇場の開幕だ」

そう言って立ち上がった現日本帝国内閣総理大臣小泉純一郎は福本伊吹次官と共に会見場所へと向かった。

記者会見は首相官邸で行われる事になっており、国内外のテレビは特別番組を組んで盛んに報道し、報道陣は待機していた。
そして、１０時になると福本伊吹次官を引き連れた小泉純一郎総理大臣がやって来た。
これを見た報道陣は何かあると感じていた。
首相が出て来て、日本帝国元帥の息子の次官が出て来たのだから、ただ事では無い。

小泉首相
「それでは記者会見を始めます。今回、一連に起こりました出来事については政府・軍共に公表を控えてきました」

パシャ　パシャ

カメラのフラッシュが瞬く中、小泉首相は言葉を続ける。

小泉首相
「これから申し上げます事は全て真実であり、詳細は福本次官に後程説明致します」

この発言に記者達はお互いの顔を見て頭上に疑問符を浮かべる。

小泉首相

「まず、名目上『海底地殻変動の調査』と呼ばれて行われている調査は…実は海上に出現した異世界へのゲートの調査であります」

これを聞いた報道陣はポカーン…としていた。
無理も無い、余りにも話がＳＦマンガ・小説の様な話だからだ。

小泉首相
「また、先日の『謎の一式陸攻の編隊』ですが、様々な学者の意見と搭乗員達の証言から我々の世界と異なる歴史の世界から転移したと結論になりました」

――ザワザワザ――

報道陣が騒がしくなった。ゲートだの、異世界だの、転移だのとファンタジー小説の類いの事を現役首相が発表しているのである。

小泉首相
「更に、我が日本帝国政府は水面下ではありますが、異世界の２ヵ国と約３ヶ月前から接触を始め、既に国交の樹立まで漕ぎ着けております」

ここまで来ると与太話では無い。
だいたい、それなら超有名海軍次官が出て来る訳が無い。

小泉首相
「今までは主に軍が間に入っておりましたが、異世界の確認を行ったのも軍です。ここからは軍責任者の福本次官に説明させます」

福本（伊）
「では、まず広報部の人間が撮影・編集しました短編映画を観ても

らいます。そうすれば皆さんも納得出来るでしょう」

そう言って準備していたノートパソコンとプロジェクターが出て来た。

一時間後……

福本（伊）

「如何でしたでしょうか？」

観ていた報道陣は唖然としている。

そりゃそうだ、合成などを一切せず、広報部の映画作成が好きな連中を選抜して送り込み、生で撮影したのだ。

記者

「政府・軍としてはこれからどのような対応をするつもりですか？」

1人の記者が質問した。

福本（伊）

「申し上げました通り、我が国は国交樹立を水面下で進めてきました。2ヵ国やその他詳細は明かせませんが、時期が来ましたら、正式に軍事・通商に関する条約を結ぶ事になりますね」

小泉首相

「では、会見を終わります」

そう言って小泉首相、福本次官は会見を終わらせた。報道陣が再び

騒がしくなった。
訊きたい事はあっただろうが、一刻も早くこの天変地異事を伝えなければならないからだ。

次号へ

92　記者会見（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

93　海軍の艦魂

11月24日

軍港では大忙しいだった。天城以下艦艇のメンテナンスを兼ねて、山城達の世界の神戸に向かう為の出港準備（と言っても、すぐそこなのだが）が行われている。
それを上から眺める3人がいた。

天城
「まさか、こんな形で艦長の日本へ参る事になるとは…」

シルヴィア
「なに、天城。文句でもあるの？」

天城
「いや、未来の日本に興味は大いにある。それに我が故郷だ…唯一の文句はシルヴィアが付いて来る事だ」

シルヴィア
「なんですって!?　私はね、国からちゃんと命令を受けてるの！私からみたら、あなたが付いて来る事がお断りよ！」

天城
「なに……海に放り込むぞ、小娘」

シルヴィア
「やってみなさいよ、年増女」

天城
「ふん、偉そうに言うな幼女」

……防空指揮所で嫁姑戦争（？）勃発！？

山城
「あのね…喧嘩ならひっそりとした山の中でやって下さい」

天城
「お帰り、艦長」

シルヴィア
「お帰りなさい。用事は？」

山城
「（…ころりと変わったよ…しかも話題も）別に、向こうの神戸がどうなってるか訊かれたから答えてただけ」

シルヴィア
「ふ～ん、そうなの」

山城
「それより、時間を作れと言ってきたのは天城さんでしょう。それで、何の御用ですか？」

天城
「おぉ、そうだったな。艦長は1艦に1人の艦魂がいる事はご存知ですな？」

山城
「そりゃ、基礎中の基礎ですから」

それに、教官から真っ先に薦められた本は福本元帥の自伝だし。

シルヴィア
「…天城の様な奴がまだおるのか？」

山城
「いや、艦にも個性があるからね」

天城
「そうだぞ、小娘」

シルヴィア
「天城…あんたね…」

チャキャン

山城
「だからって、ワルサーを出さない」

天城
「…話を続けていいか？」

山城
「えぇ、どうぞ」

天城
「この際だから、皆を紹介しようと思ってな。何時の間にやら似合

わぬ姉御役をやっている手前もあるしな」

山城
「どこです、会議室ですか？」

天城
「あっはっはっは、よく解ってるじゃないか。うむ、そうだ」

山城
「なら、ひとっ飛びしますか？」

天城
「うむ、飛ぶか」

シルヴィア
「はあ？　飛ぶ？」

天城
「そうだ。こうゆう風にな！」

天城はスッと腕を伸ばすとシルヴィアの右手を掴んだ。

天城艦内会議室

山城
「よっと」

ドシーン！！

シルヴィア
「いたたた…」

「あの…大丈夫ですか？」

水兵服姿の少女がシルヴィアに手を差し伸べる。

山城
「え～と…あちらは？」

天城
「伊２９の艦魂だ。数字なんで、本人は津九と名乗っている」

山城
「津九…津九（ツーく）？」

伊２９（津九）
「はい、不束者ですがよろしくお願いします」

山城
「あぁ、よろしく」

「やあ、天城。おぉ、山城艦長にシルヴィアさんも」

今度はだんだら模様に浅ぎ色の羽織、背中の誠一文字……新撰組の衣装だ。

天城
「いま入って来たのが飛龍の艦魂、飛龍だ。あの格好は艦攻隊長が関係しているそうだがな…」

飛龍
「我が艦長と副長、その他にもろもろお世話に成っているな」

山城
「いえいえ、こちらこそお世話に成っております」

……妙な挨拶になったな。

「天城さ～ん、飛龍さ～ん、来ましたよ～」

士官服を来た少女が水兵服姿の少女４人を引き連れ現れた。

山城
「鳥海さん、浦波さん、磯波さん、敷波さん、綾波さん…ですか？」

天城
「よく解ったな」

山城
「いえ、連携感がありましたから」

「あら～、あなたが山城艦長？　お初にお目にかかります。鳥海です」

山城
「あ、どうも」

「吹雪型駆逐艦１０番艦磯波で～す」

「同じく、吹雪型駆逐艦１１番艦浦波」

「……綾波」

「綾波型駆逐艦２番艦敷波だぜ」

山城
「…えーと、綾波さんは無口なんですか？」

鳥海
「そうね。その代わり敷波が元気なのよね」

４人のキャラを簡単に把握するなら、お気楽、生真面目、無口、元気娘……か？

山城
「あれ？　海自の艦魂は？」

天城
「あぁ、海自は次の作品だ」

シルヴィア
「……はい？」

次号へ

93　海軍の艦魂（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

９４　海自＋輸送艦の艦魂

さて、日本海軍の艦魂（伊２９、飛龍、鳥海、敷波、浦波、磯波、綾波）と一通りの挨拶を終えた後、どっから銀バエして来たのか各自持ってきた物で細やかな歓迎会の準備をしていた。

山城
「…で、海自の艦魂は？」

天城
「向こうは向こうで準備するから、遅れて来るそうだ」

山城
「そうですか…早く来てくれませんかね。後々の事を考えると、今の内にご挨拶したいんですが…」

その時、光と共に５人の少女が転移してきた。
容姿は、ツインテールが１人、ポニーテールが１人、ショートカットが１人、そして、正に瓜二つの少女……多分姉妹……が２人。

天城
「おぉ、来たか。わかると思うが、海自の艦魂だ」

山城
「……え～と、瓜二つの少女は『ひゅうが』と『いせ』ですか？」

「「よくわかったね！？」」

「いや、解るでしょう」

瓜二つの少女2人の言葉にショートカットの少女がツッコミを入れる。

「貴官が天城司令の言っていた、若艦長か？」

今度はツインテールの少女が山城に質問した。

山城
「う～ん…天城さんがなんと言ったか知らないけど、そうだよ」

シルヴィア
「なんと言ったのだ、天城？」

天城
「『ダメ娘にベタベタ引っ付かれた若艦長』と言った」

挑発するかの様に……いや、明らかに挑発している。

シルヴィア
「あーまーぎ～、貴様、我が剣の錆にしてくれるわ！！」

天城
「ふっ、やれるならやってみろ。小娘」

山城
「……はあ～…だれか～…どうにかして～～」

どうにもならず、天に向かって叫ぶしかなかった。

…その後、双方罵倒の浴びせ合いになったが、ようやく収まり紹介再開。

「こんごう型イージス艦一番艦『こんごう』。以後よろしく」

ツインテールの少女……こんごう。

「あたご型イージス艦二番艦『あしがら』です」

ポニーテールの少女……あしがら。

「「ひゅうが型護衛艦一番・二番艦『ひゅうが』『いせ』で～～す」」

シルヴィア

「……天城、お主はどっちが誰か解るか？」

天城

「……いや、姉妹艦とは言え、声も容姿も似すぎで……解らん」

瓜二つ…そっくり過ぎて見分けがつかない…ひゅうが・いせの姉妹。

山城
「……う～ん……あ、わかった！」

シルヴィア
「何がわかったのだ？」

山城
「いや…左がひゅうがで、右がいせじゃない？」

こんごう
「な、なに！？」

あしがら
「うそ…私達でも見分けられないのに！？」

ひゅうが・いせ
「「え～！　なんでわかったの！？」」

山城
「いや…髪留めゴムが左右反対に留めているから…」

シルヴィア
「……うむ、本当だ。左右違うな」

天城
「で、どうやって見分ける？」

山城
「髪留めゴムを左の方にしているのがひゅうが。右の方にしているのがいせです」

ひゅうが・いせ
「「当ったり～～！！」」

シルヴィア
「この2人を使えば面白い事になるな」

飛龍
「うむ…確かに」

妙に納得するシルヴィアと飛龍。

「おおすみ型輸送艦一番艦『おおすみ』。よろしく」

ショートカットの少女……おおすみ。

山城
「え～と、不躾で申し訳ありませんが、なんでショートカット？」

おおすみ
「ほら、私の艦て見た目あれじゃない？　あんまり周りが騒ぐから、キレてバッサリと切っちゃた」

鳥海
「切っちゃたって……」

山城
「うわ～…もったいね～」

……確かに。

シルヴィア
「…これで全員だな？」

「私の事を忘れてま～～す！」

そう叫びながら転移して来たのは、おかっぱ頭の少女。

天城
「あぁ、忘れるところだった。一等輸送艦の『第一号』だが…数字じゃあ解らんから、本人は一美（ひとみ）と名乗っている」

「一等輸送艦『第一号』の一美です」

山城
「あぁ、よろしく」

シルヴィア
「これで本当に全員だな？」

天城
「あぁ、全員だ。さて、全員が集まったし、歓迎会開始だ！」

「「「「おぉぉ！」」」」

次号へ

９４　海自＋輸送艦の艦魂（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

95　社民党首ＶＳ海軍次官（前書き）

新米士官
「作品更新の関係でこちらになりましたが、本日8月15日です」

福本
「二回目の8月15日だな」

山城
「自分は初めてです」

新米士官
「明日を思い、守る者を思い、日本を思い、命を手段とし、自らよりも公を貫くべく命を散らせた者達を未だに無駄死にの犠牲者とゆう空気のある我が日本……根拠の無い談話を出し、国を売る首相……今の日本に存在する問題のほとんどが敗戦後の自虐的視観や否定思想にあると思うのは自分だけでしょうか？」

福本
「悲しいな……しかも、日本の中で戦争を語るとなると、どうしても、悲劇談が蔓延る」

山城
「戦争は確かに悲劇です。ですが、その中でも美談があります」

新米士官
「それに、あの戦争を欧米列強の学者の中でも新時代を築いたと評価しています。また、『被害にあった』とされる（中国・韓国を除く）東南アジア諸国は『日本が勇気を与えてくれた』『日本は自ら

を犠牲にして、独立させてくれた』『日本はお母さんだ』と言ってくれる国があります……なのに、耳を傾けない現在の日本」

福本
「『真夏のオリオン』は見るか？」

新米士官
「見ます。『たかじんのそこまで言って委員会』ももちろん見ます……読者の皆様、正午には心中でもいいです。命を犠牲にして日本を守った方々に黙祷をお願いします」

９５　社民党首ＶＳ海軍次官

１０月１３日　国会議事堂

衆議院

福本伊吹次官は衆議院に来ていた。
ここ一週間毎日来ている。理由は簡単、あの記者会見後、政府は直ぐ様、通商・軍事条約の内容及び締結の是非を問う為、衆議院及び貴族院で審議中だ。
しかし、小泉首相の話だと、自民党内部は「なんでもっと早く知らせなかったのか？」と言う声は有るが、条約締結に関しては賛成であり、貴族院に関しても支持派が多数を占めているそうだ。
後の問題は衆議院の野党勢力がこの一週間の説明でどれ程双方の状況を解ってくれたか…だが。

福本（伊）
「…しかし、うんざりするな…」

今は野党最小勢力、社民党のなんとかと言う女性議員の質問だが、金切り声を出して微妙に外れた質問を小泉首相や外務大臣にしている。
やれ、これは一方的条約では無いかだの、やれ、正当な対価が明記されて無いだの……等々、まるでヒトラーが演説しているかの様に質問している。

福本（伊）

「だから社民党はいつまでも衆議院で3議席、貴族院は零のままなんだよ……馬鹿か？」

まあ、党名からして社会主義を背負っていそうなだけに、２０世紀に行き過ぎた社会主義が破壊と殺戮しか生まなかった事を中学校の日本史の授業から教わる今の日本がある限り社民党が政権を担う事は絶対に無い。

議長
「それでは、次に軍事条約について…福島瑞穂社民党党首よりご質問です」

福本（伊）
「（まじかよ…）」

また、あの金切り声を聞かなければならないのか……

福島党首
「福本次官に質問致します。異世界でのこの士官候補生達の行動は国内法違反ではありませんか？」

……はあ？
あんた…元かは忘れたけど弁護士だよね？
なんで異世界って認めたのに国内法を持ち出す訳？
いや…その前に……

議長
「福本次官」

福本（伊）

「お答えする前に答えて頂きたい。何をもって国内法違反かと」

（本来なら指名者の名前を議長が言いますが、議長も大変ですから省略します）

福島党首

「この士官候補生達は幾度か拳銃他武器を使用し、克つ、その武器により多数の人間を殺害しております。これは国内法における銃刀法違反及び殺人罪ではありませんか！？」

はあ？　何を言ってるんだ？

職務中、あるいは任務中における武器使用は個人裁量だと国内法で認められている。

それに彼……山城達の事……は士官候補生であり、武器使用については国内・国際法の定義は充分に解っている。

福本（伊）

「残念ながら理解出来ない。彼らは軍人である。また、武器携帯・使用については向こうの法律で裁かれるべきだ…もしそれに該当する法律がなければ国際法で裁かれる事項である」

福島党首

「では、殺人罪についてはどうなのですか？　彼らは多数の人間を殺害しています！」

福本（伊）

「彼らからの報告書は綿密に読みました。また、関係者にも話を訊きました。彼らの行動はラバナスター沖海戦前後は戦闘行為と見なされる。また、その前に発生した件については、殺害と言っても彼らが殺傷させたのは盗賊、あるいは敵対者であり、国内法であれば

正当防衛、国際法においては何の問題も無い事項である」

福島党首
「わかりました…次の質問に入ります」

憎たらしそうな顔をしながら、これ以上の反論は無理とみて、次に移った。

福島党首
「今回のこの軍事条約は武力を背景にして一方的に結ばれる事項と解釈しますが、如何ですか?」

……また訳の解らん質問を……

福本（伊）
「いったいこの条項の何をもってあなたの言う『一方的に結ばれる事項』になるんですか!」

ちなみに、簡単な条項内容は以下の通り。

1　兵器の使用・製造・整備の技術的・人員的協力。

2　軍事教練教官に日本人教官を派遣する。

3　派遣艦隊・部隊使用敷地の借用。

4　戦争・戦闘時の相互協力。

5　将来を見据えた両国軍の人員交流・留学の検討。

等々……

いったいどうゆう解釈をしたら『武力を背景にした……』とかになるんだ？
まさか、戦前の『対中二十一ヶ条要求プロパガンダ』に似てるのを根拠にして無いよな？

福本（伊）
「どの条項も双方の協議で取り決めたもの。武力を背景にしたとゆうのは失敬である。その前に、これをどの様に見ればその様な解釈が出来るのか？」

福島党首
「派遣部隊の敷地借用はどう見ても必要無いと思われます。また、日本人教官の派遣は派遣先の軍隊形式を変える事になります」
何を馬鹿な事を言っているかの！

福本（伊吹）
「敷地借用は既存事実であり、再確認の為に条項に入れたのだ。それに、派遣部隊が現地に居なくては活動のしようが無い。また、戦争に成れば、僅か１日で戦局は反転してしまう。実際、珊瑚海海戦で危うく日本海軍は正規空母を一気に大量損失するところだったではないか！　教官派遣は、向こうが武器関連と一緒に真っ先に出した条項である！　向こうは天城などの転移兵器や山城達に触れて、直轄軍の軍隊・戦術体型を変えようと必死なのだ！　しかし、無から有は生まれない。それに、現地にいる人間だけでは到底カバー出来ない部分が出てくる為に派遣するだ！　何にも知らないくせに、今やプロパガンダに利用された対中二十一ヶ条に似ている事を根拠にするな！」

最後は感情が出てしまう。何せ、向こうが国交をしたいと思う様になったのは転移者達が誠実克つ勇敢に物事にあたって来たからだ。それこそ、日英同盟が結ばれたのが、義和団事件時の日本軍の活躍によりイギリスの孤立主義を捨てさせ、アジアのパートナーと認めたのと同じではないか！

「黙れ！　黙れ！」

「次官の発言範囲を越えてるぞ！」

2人分の野次が飛んだ福本伊吹は一向に気にしない。どうせ、社民党議員に決まっている。

福島党首
「……質問を終わります」

ようやく、あの声から解放された。
後は承認されるかどうか…だ。

議長
「それでは決議を取ります。賛成の方、ご起立下さい」

ガタガタガタ！

見ると、議員席は起立している議員が圧倒的多数だ。座っているのは……見える限り、福島社民党党首だけか？

議長

「賛成多数により、条約調印は現条項による調印と認可されました」

つまり、これで正式に国交が出来る様に成った訳だ。

福本（伊）
「ふう…」

小泉首相
「ご苦労様だったね」

福本（伊）
「あ、どうも…やっと一段落です」

小泉首相
「そうだね…まさか、福島党首があそこまで噛み付くとはな」

福本（伊）
「えぇ…ですが、成功の為ならどんな障害も潰すのが軍人です。特に今回の様な時はね」

小泉首相
「そうだね…早く彼等に伝えねばならないんじゃないのかね？」

福本（伊）
「はい、今から超特急で報せて来ます。失礼！」

福本伊吹次官はそう言うと直ぐに走って行った。

小泉首相
「さて…日取りを決めるとするか…」

次号へ

９５　社民党首ＶＳ海軍次官（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

96　横井中尉の1日

12月1日　グローリアス士官学校

この日、士官学校では日本に行く人間の健康診断が行われていた。
何せ異世界だけにどんな病気が存在しているか解らない。
各艦の乗組員は乗艦の軍医に任せ、横井達派遣組は司令官クラスと山城達、シリルティア王国・ネイラーン王国参加者の診断にあたっていた。

学校内の一室

横井
「しかし、あんたって本当に健康体ね。何かしてる？」

山城
「いいえ、なにもしてませんよ」

午前中分の健康診断者を診終わった横井が、山城の診断書を見ながら山城に訊いた。

横井
「ふ～ん…本当に？　ただ朝の日課を続けてるだけ？」

山城
「続けてるだけです」

横井

「怪しいわね…実は、あの…シルヴィアちゃんだっけ？　あの子と朝まで仲良ししてるんじゃないの～？」

山城
「…なにを言ってんですか、あんたは…」

もし、この人の欠点を訊かれたら、下ネタが少し多い事だ……。

横井
「あ、今さらだけど、シルヴィアちゃんは彼女？」

……本当に今さらだが、見たら判るだろうに……

山城
「違います。第一発見者でお世話になった御領主の孫娘で教え子です」

横井
「教え子って…一歳違いじゃないの」

山城
「それは偶々」

横井
「ふ～ん……ねえ、ああいったタイプの子はさっさと押して奪っちゃうのがいいわよ」

山城
「はあ？？」

なんつう、訳の解らん御教授なんだ？

午後3時　お茶休憩

シルヴィア
「横井中尉、おかわり」

横井
「あなた……抹茶（インスタントだけど）が気に入ったの？」

シルヴィア
「あぁ、少し癖は有るが、なかなか美味いぞ」

横井
「ふ～ん……（ヨーロッパ似の国の貴族が抹茶飲む……健康ブームのイギリス？）」

そんな事を思いつつ、新しいのをいれて渡し、シルヴィアの診断書を見る。

横井
「あなたも健康体ね。シルヴィア」

シルヴィア
「当たり前だ。軍人が不健康であってはイザとゆう時に戦えぬでは無いか？」

横井
「まあ…そうね」

いや、健康なのは良いのよ……問題はあなたの数値、そんじょそこらの男共とは違うよ！？

シルヴィア
「まあ、山城に付き合って朝練をしてるからな…健康体だぞ！」

横井
「……付き合ってんのね……朝練に…」

なら、福本勇気とセルベリアの『朝練』も見る？
後輩が送ってくれた携帯ムービーだけど！
もう、人間とかって言う物じゃないから！！

シルヴィア
「…どうした？」

横井
「え…あ、何でも無い何でも無い！」

シルヴィア
「？そうか…」

横井
「おほほほ…あ、ところでシルヴィアは山城君の事は…」

シルヴィア
「只の元居候。今は教官で、戦艦の艦長兼保護者」

横井
「……」

あっさりと答えたわね。
しかも、保護者って……

横井
「シルヴィア、山城君を落とすなら、彼の部屋に行くことよ！」

シルヴィア
「……はあ？　何を意味の解らぬ事を言っておる？」

……山城よ、この歳上軍医は大丈夫だろう…な？

午後６時

横井
「はあ～、終わった終わった」

助手
「お疲れ様っス。これ、持って行きますよ？」

横井
「あ、ちゃんと扱いなさいよ。今回の条約調印の主役方のなんだからね」

助手

「はーい」

パタン

横井
「ふう…」

助手が診断書を持って出て行くと、横井は溜め息を吐いた。

横井
「いいわね～、若い子達は…異世界でも青春真っ盛りだし」

お前もまだ若いだろう。

天城
「あっはっはっは！　まだまだ君も若いぞ、横井」

横井
「ん、天城！　何しに来たの？」

天城
「同じ後輩を思う者同士、飲もうと思ってな」

横井
「オッケー…あ、もちろん、私の部屋でよ」

天城
「わかっている」

２０分後……

横井の部屋

横井
「じゃあ、かんぱ～い」

天城
「乾杯」

横井の部屋で特別に置いている小型冷蔵庫から、カップ焼酎や缶ビールを出して乾杯する、横井と天城。
その時……

ガチャ

山城
「横井…先輩、また飲んでるですか？」

様子を見に来た山城とシルヴィアが入ってきた。

横井
「良いじゃな～い、未成年がいちいち口出さないの～」

シルヴィア
「私は付き合うぞ。何でも持ってこい！」

山城
「またか……愚痴ぐらいなら付き合います」

その後、夜遅くまで飲んだ3人は最終的に酔い潰れた。
その後始末をしたのが山城だった事は言うまでも無い……。

９６　横井中尉の１日（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

97　神戸へ…

12月8日

天城防空指揮所

『機関室、出港準備完了』

『総員、配置完了』

『艦長、所属艦艇の出港準備は完了した』

山城
「了解。シルヴィア、マツシマとハリアーは？」

シルヴィア
「……まだの様だな」

山城
「そうか…よし、小休止」

そう言うと山城は首から下げている水筒の中身を飲む。

山城
「飲む？」

シルヴィア
「少し貰うぞ」

受け取ったシルヴィアは少し飲んだ。

シルヴィア
「……紅茶？」

山城
「あぁ、炊事長の特製品」

もう一度飲むと飲み口に蓋をして、同じように首から下げた。
この光景を天城はニヤニヤしながら誰にも気付かれずに見ていた。

多少遅れたものの、マツシマ、ハリアーの準備も完了し、出港した
派遣艦隊とマツシマ、ハリアーは海上ゲートの前まで来ていた。

山城
「さて、吉と出るか、凶と出るか…」

シルヴィア
「……お主、あまり不吉な事を言うな」

山城
「仕方ないだろう。海上ゲートは誰も通ってないんだからな」

何故か実験台になってしまった様な気がするが……今さらなにを言

っても何かが変わる訳でも無いし……。

山城
「これより、本艦は海上ゲートに入る…総員、対ショック用意」

果たして、この命令にどれ程の効果が有るか解らないが、なにもしないよりマシだ。
速度は１８ノット、マツシマやハリアーに合わせている。
また、陣形も輪形陣ではなく、天城が先頭を進み、その後ろからマツシマ・ハリアーのを入れた輪形陣が来る形だ。

山城
「頭痛薬、持ってきてるよな？」

シルヴィア
「もちろんだ」

……こんな会話をしている間に、舳先の直ぐそこが海上ゲートだった。

山城
「さあ…来るぞ！」

まず、艦首が、次に第一主砲塔…第二主砲塔…次は……

飲み込まれる瞬間、山城は目を瞑った。

……

山城
「…あれ？」

あの揺れも…あの衝撃も…あの頭痛も……何もこない？
狐に騙された様な感じを感じつつ、ゆっくりと目を開けた。
見えたのは……元の世界の大阪湾……

シルヴィア
「…何もおきなかったな」

山城
「あぁ」

拍子抜けしたと思いながら、伝声管に命令を出す。

山城
「各部署、異常が無いか調べろ」

命じた後、直ぐに返事が返ってきた。

『機関室、異常無し』

『第一主砲塔、異常無し』

『第二主砲塔、人員含めて異常無し』

『艦橋、小澤中将以下司令部員を含めて異常無し』

その後もあちこちから報告が入るが、別段異常は無い。

シルヴィア
「他の艦も無事に通って来れた様だな」

後ろを見ると、飛龍、鳥海、磯波、浦波、敷波、綾波、一等輸送艦、伊２９、ひゅうが、いせ、こんごう、あしがら、おおすみ、そして、メインのマツシマ、ハリアーが入る前と同じ姿で出てきた。

山城
「見たとこ、変わって無いね」

シルヴィア
「当たり前であろう。ただ、入って出ただけだぞ？」

その、『入って出た』で何がおこるか解らないんだよ……。

水兵
「１１時より陸奥及びミサイル艇！」

シルヴィア
「予定通りに先導艦が来たな」

山城
「日本海軍は時間にはうるさいからね」

そう言うと直ぐに伝声管に叫ぶ。

山城
「各部署に伝達。これより出港前に通知した通り、先導艦に誘導され神戸鎮守府のドックに入渠する。準備せよ」

シルヴィア
「ここで、陛下達とは別れなければならんのだな」

山城
「仕方ないさ。艦の保全が任務だからな」

まあ、艦長の仕事とはそんなものだ。

次号へ

97　神戸へ…（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

98　ドックにて……

11月24日　神戸鎮守府

艦船修理ドック

天城などの派遣艦隊艦艇をドックに入渠させた山城達。
まあ、一安心……とはいかない山城は…。

山城
「では、修理・点検共にそれほどの日数は掛からないと？」

技官
「はい。どの船も世界は違うにせよ、日本製ですから」

シルヴィア
「は～あ」

技官から状況を聞く山城と、明らかに付いて来て暇なシルヴィア。
ならば、どうかは解らないが少し興味が出そうな話を……

山城
「それで、各艦に行う装備改装はどうゆう風に？」

技官
「こんごう、あしがら、ひゅうが、いせ、おおすみ以外の艦は、ま

ず、新型レーダー・ソナーの装備ですね。飛龍は取り換えですが、天城、鳥海、磯波、浦波、敷波、綾波、一等輸送艦、伊２９は最初からレーダー未装備ですから、設置に多少苦労しますが…まあ、古い改装図面がありますから、大丈夫です」

山城
「やはり、レーダーは搭載しますか…兵装については？」

ピク！

ようやく琴線に触れたか、シルヴィアが興味深そうな顔をした。

技官
「全艦の一部九六式２５ミリ機銃を撤去し、新たに４０ミリ機銃を連装、あるいは四連装で設置します。また九六式２５ミリ機銃も、零式２５ミリ機銃（陸軍なら百式）に取り換えます」

シルヴィア
「なぜ、同口径機銃を取り換えるのだ？」

山城
「同じ２５ミリ機銃でも、九六式はフランス・オチキス社製機銃が素で、射撃時の銃身加熱で撃てなくなる代物なのさ。だから、改良されて、ベルト装弾式になった零式に取り換える」

技官
「駆逐艦はヘッジホッグを搭載し、鳥海は単装高角砲から連装高角砲に取り換えます。また、鳥海に関しては近代化改装も合わせて行う予定です」

山城
「ふむ…そういえば、駆逐艦と鳥海から酸素魚雷が予備も含めて降ろされていましたが…」

技官
「そちらは専門外ですが、どうやら、弾頭にホーミング信管を装着するそうです」

山城
「なるほど。海上自衛艦はどうなります？」

技官
「当初心配されていました、ミサイルを含めて武器規格はこちらの物でも合いますので心配ありませんし、別段、装備改変は必要無いと思われます。ただ、時間があるのなら、おおすみの機関を変更しよう考えています」

山城
「コンパクト克つ高馬力機関にですか？」

技官
「はい。一等輸送艦にも同様の改装を行う予定です」

山城
「そうですか。すみません、お忙しいところにわざわざ時間を割いていただいて」

技官
「いえ、福本次官からあなたからの質問は出来る限り答える様に言われていましたので。それでは作業に戻ります」

シルヴィア
「しかし…このドックを見るだけでも、国力の差がよく解る」

山城
「仕方ないよ。だって、そっちは2万トン級艦が最盛期の時代だし、それに…」

シルヴィア
「我々の技術力はお主達から見れば１００年前だから仕方ないと言いたいのであろう？　既に耳にタコが出来たぞ」

まあ、わかってくれているなら、それでいいが。
それに、この程度なら旅順の軍港を見ればまだ小さい方である。

シルヴィア
「これを見れば、未だ日本を馬鹿にする輩も、当分ノイローゼになってしまうだろな！　まあ、それはそれで痛快事だがな」

ノイローゼどころか、ショックで死んだりして。

シルヴィア
「だからこそ、お主達の祖国である、日本帝国は学ぶべき事がある。まことに刺激的な事だ」

そりゃそうだ。
何せ、東洋の小国がいきなり世界の荒波に叩き落とされて百数十余年、二度の世界大戦、数度の戦争、幾回の海外出兵を経験し、生き

残った国だから……

シルヴィア
「まずは、歴史と言う『体験』を学ぶとするか」

山城
「ご自由に…と言っても結局、付き合わされるんだろう？」

シルヴィア
「その通りだ！　頼むぞ、教官！」

山城
「やれやれ」

次号へ

98　ドックにて……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

99　外交とは…

神戸鎮守府　兵舎内

クレマン
「うお～～…デュリオ～、助けて～」

デュリオ
「あのな…これぐらいで詰ま付いてたら、ここまで来た意味がないぞ」

2人の前には山の様に積まれた日露戦争関連書籍。
今回、士官学校生の中からクレマン、デュリオ、ヴィクトリアの三名が公欠として参加していた……が、この三名には宿題として簡易レポート提出を命じられた。
内容は日露戦争に関して事。

シルヴィア
「なにをヘバっておる、クレマン？」

そこに山城を連れてシルヴィアが部屋に入って来た。

クレマン
「このレポートだ！　つーか、なんでシルヴィアは無いんだよ！？」

シルヴィア
「あぁ、同じ様なレポートなら随分前に出し…」

クレマン
「裏切りもの～～（；＿；）」

デュリオ
「口より、手を動かせ」

クレマン
「ぐ～……教官、手伝って下さい！」

山城
「そうしてやりたいのは山々だが、本当にギリギリになるまで手伝うなって…」

クレマン
「教官にも裏切られた～～（；＿；）」

デュリオ・シルヴィア・山城
「「「はいはい」」」

この3人による返事に、クレマンも沈黙した。

シルヴィア
「さて、どうする？」

山城
「どうすると訊かれてもな～」

クレマン・デュリオの部屋から出て、廊下を歩く山城とシルヴィア。

シルヴィア
「そう言えば、調印は明日なのに、なぜ今日の内に陛下達は帝都に向かったのだ?」

山城
「ある意味で言うなら健康維持の為かな」

何せ、海上ゲートを通ってから政府専用機に乗って東京……と言う単調そうな予定である。
しかし、これの理由は幾ら若い君主2人とは言え、慣れない環境下にいる事には変わりなく、今回の訪問については日本帝国政府はいつも以上に慎重克つ相手側にて配慮していた。
何せ、この世界の人間なら帝国政府もある程度調整できるが、異世界の王国君主となれば、こちらの知識が何処まで通じるか解らない。
また、環境が違う為、休息時間は多めにとり、スケジュールは薄く細くし、環境に出来る限り慣れさせる様にしている。
また、軍事・公共施設の見学も体調に考慮して柔軟に対応する様にしていた。

シルヴィア
「なるほど、そこまで考慮していたのか」

山城
「そりゃそうさ。訪問先で倒れた!…なんてなったら、今ならまだましも、昔なら戦争になってもおかしくなかったからな」

日本なんか、ロシア皇太子が警官に斬り付けられた大津事件の様な事例があるわけだし。

山城
「それに、明日の調印は皇居にある宮内庁管理の倉庫から馬車を出して、儀仗騎馬隊まで出す予定…」

山城
「馬車!?　車が我が物顔で走っておるのにか!?」

山城
「もちろん、警察が交通整理して止めるよ。それに、馬車って外国大使が喜ぶんだぜ」

シルヴィア
「これが１００年の差か？」

山城
「仕方ないよ。熾烈な欧米列強との外交戦を、時には重傷者まで出して掻い潜ってきたからな」

シルヴィア
「外交戦か…外交もまた戦なのだな」

山城
「今なんか、まだマシだよ。開国した時なんか、対等扱いどころか、二等・三等国扱いだからな」

それを打開する為に二度の戦争と数人の外務大臣の犠牲、何十回の外交交渉などをやって勝ち取ったものだ。

シルヴィア

「なら、今の我らは状況的にマシな方か」

山城

「今回の様に話がスムーズにいく事自体が稀だからね」

しかし、国交に関しては日本から接触して国の運命が決まってしまうのは皮肉としか言い様がない。

実際、共に近代化しようと思い条約を結びながら、時代の流れが読めず、中華思想の下に日本の主張を頑固に否定した結果、清は滅び、朝鮮は自力で国を守る事が出来ず、日本と併合した。

対し、多少揉めたものの、日本の主張を真摯に受け止めた、エステロール王国やサブルム帝国などは今やトルコ、フィンランド、台湾と並ぶ親日国だ。

シルヴィア

「外交は大切だな」

山城

「全くだ」

次号へ

99　外交とは…（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１００　あれ？　なんで…

今回の条約調印式における最大の問題だったのはお出迎えの事だった。
通常なら首相同士か、首相と大統領の場合が多く、首相が出て来る事で物事はすんでいた。
しかし、今回は宰相が元首である女王・国王が来日する事により、代理として国を見なければならない為、宰相は参加していない。
そして、代わりに元首自ら条約調印式に出るのだから、首相のみのお出迎えは失礼である。
本来なら華族の誰かが天皇の代理として、あるいは皇太子がお出迎えするのが礼儀と言うものだ。
だが、異世界の方々と言う事もあり、政府・外務省も困ってしまった。
そこで宮内庁を通じて、天皇陛下にお伺いをたてた。すると、今上天皇豊仁陛下は皇后様を連れて自ら出迎える事を提案した。
これには周りも驚いたが、陛下は「異世界とはいえ、君主を迎えるのは礼儀である」との発言により、実行にうつされた。
もちろん、警備は厳重で、警察・公安警察・軍などを巻き込み、最大限の警備が行われた。

１１月２５日　帝都

調印式は何事も無く進み、最後は調印後、アーネリア陛下とアルスラーン陛下は小泉首相と豊仁陛下と握手を交わし合っていた。

シルヴィア
「無事、終わったな」

山城
「あぁ…いきなり引っ張り出されたけどね」

さて、なぜシルヴィアと山城がここにいるかと言うと、昨日夕方にもう2人の人間と共に特別機に押し込まれ、帝都に連れて来られたのである。
ちなみに、残りの2人は……

ヴィクトリア
「なぜ、あなたと一緒に連れて来らて、一緒にいなければならないんですか！」

大澤
「知るか！　こっちだって知りたいわ！」

山城
「…また始まったよ」

何故か一緒に連行されたヴィクトリアと大澤の仲悪コンビ。

福本（伊吹）
「やあ、諸君。歴史的瞬間に立ち会った気分は？」

ヴィクトリア
「……誰ですか、この方は？」

……説明中…暫くお待ち下さい……

ヴィクトリア
「……1つ、お訊きしてよろしいでしょうか？（、へ、）」

福本（伊）
「えぇ、どうぞ？」

ヴィクトリア
「なぜ、この変態と一緒に連れて来られなければならないんですか！？」

大澤
「おい！　変態は無いだろ！？」

福本（伊）
「……面白そうだったから」

山城
「福本次官…それは無いでしょう…」

あの父（福本元帥）あれば、この息子あり…この父あれば、あの息子（福本勇気）あり……か？
だけど……いくら何でも、そりゃないだろう……。

さて、山城とシルヴィアは今回の功労者と言う事で、ヴィクトリアと大澤は偶々そこに居て、面白そうだったから……では無く、2人がパイロットであり、克つ、ヴィクトリアが貴族で、財務卿の娘であったからだ。

そして、４人の名目はアーネリア陛下・アルスラーン陛下の追加護衛官と言う事に成っている。

シルヴィア
「次はどこだ？」

山城
「え～と、次は……赤橋区の陸軍練兵場で陸さんの訓練見学」

調印式会場の迎賓館（旧赤坂離宮）から靖国神社→日本銀行→国会議事堂…と回り、本日最後の見学場所である陸軍練兵場に向かっていた。

大澤
「……なんで俺は運転なんだ？」

山城
「ヴィクトリアと喧嘩させたくないから」

シルヴィア
「うむ」

ヴィクトリア
「この男と一緒にいなければならないのが不満です！」

山城
「まあまあ…これが終わったら、晩餐会が…」

シルヴィア・大澤
「「晩餐会！！」」

山城
「飲めないし、ナンパ出来ないよ」

こんな説明まで付けなきゃいけないのか…。

ヴィクトリア
「ところで、なぜ私達が特別護衛官としてここにいるんですか？
陛下達にはユリア隊長とクロイツ隊長が…」

山城
「確かに、付いていますよ。ですが、顔見知りがいないんですよ」

つまり、昨日今日に出会った人間と意志疎通は出来ないから、顔馴染みの自分達がわざわざ神戸から呼ばれた…と言う訳だ。

山城
「まあ、2・3日程の事だから、大丈夫だと思うけど」

さすがに、何時までも張り付けておく訳にもいかないし……。

大澤
「やましろ～、練兵場が終わったら、運転交代な～」

山城
「阿呆、交代するか。喧嘩されたら困る」

大澤
「なに！　俺はお抱え運転手じゃないんだぞ！　それに喧嘩って…」

山城
「なら、ヴィクトリアが何を言っても反論せずに静かにしてろよ。喧嘩して、マスコミなんぞに撮られたら、後々面倒だからな。ヴィクトリアもだぞ……そうしてくれるなら、運転は代わってもいいぞ」

大澤
「……運転します」

次号へ

１００　あれ？　なんで…（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０１　密談

陸軍練兵場見学後、迎賓館（赤坂離宮）で行われる晩餐会に出席した。

まあ、晩餐会と言っても、今回の事に関わりのある関係者と各国大使、あるいは本国からわざわざ来日して出席した外交関係者の簡素な立食パーティーと言ったところだ。

何せ、こういった場はアーネリア陛下・アルスラーン陛下の数少ない接触機会であり、また、本国を宣伝出来る数少ない機会であった。

そんな晩餐会の開催に真っ先に参加希望を出したのはダエヴィサ大陸……旧称第六大陸……の三ヶ国、ダリア・エステロール連合王国、ヴィントラント王国、サブルム帝国であった。

何せ、『世界一親日の大陸』と言われる程、日本との結びつきは強く、また、この絆は切れないと言われていた。

この他に、トルコ、タイ、フィンランド、満州帝国、台湾、インド、インドネシアなどからも出席者が出ていた。

まあ、顔合わせ会みたいな形になってしまったが……。

帝国ホテル

山城

「あ～、疲れた」

晩餐会後、宿泊先の帝国ホテルに向かい、護衛任務を続ける山城達。

しかし、晩餐会ではワインに手を伸ばそうとするシルヴィアの襟を山城が掴み、ナンパしようとする大澤の耳を引っ張るヴィクトリアと言う、笑える姿がちらほら見られたが…。

福本（伊吹）
「お疲れさま」

山城
「ありがとうございます」

廊下の椅子に座っていると、缶コーヒーを持った福本次官がやって来た。
そして、受け取った缶コーヒーの蓋を開けて飲む。

福本（伊）
「3人はどうした？」

山城
「部屋で寝てます。最初の苦労は指揮官なので……次官こそ、寝なくいいんですか？」

福本（伊）
「はっはっは……この歳になると、夜更かしが得意になってしまった」

山城
「皮肉ですね」

親子程歳が違う男2人が帝国ホテルの廊下の椅子で缶コーヒー片手に話す……なんだ、この光景？

福本（伊）
「……今から言う事は機密事項だ。まあ、あのお嬢さんには言ってもいいが、余り多くの人間には喋るな」

山城
「…いいんですか、一介の少佐風情に軍事機密を話して？　それに、ここはホテルの廊下ですよ？」

福本（伊）
「大丈夫だ。この階は日本政府・軍の貸し切りだ」

山城
「なるほど……続けて下さい」

福本（伊）
「『新八八艦隊計画』は知っているな？」

山城
「確か、１９６０年頃に計画された海軍増強計画ですね。７０年頃に福本元帥が計画凍結を命じた筈ですが？」

福本（伊）
「あぁ、正確には１９６８年に立案開始、７８年に国際情勢が安定し続ける予想により、凍結された……１０年前、秘密裏に解凍したがね」

山城
「１０年前……阪神大震災の年だから……やはり、あの噂は…」

福本（伊）
「『日本政府は宇宙人と接触した』か？」

山城
「『そして、密約を結んだ』……違いますか？」

福本（伊）
「…そこまで噂が広まっていたのか？」

山城
「友達の鷲井が凄く気にしていたので……それで、どうなんですか？」

福本（伊）
「そうだな……君には知る権利があるしね。詳細は語れないが、イエスかノーで答えるなら、全てがイエスだ」

山城
「…やはり、接触したんですね…しかも、密約も交わしていた」

福本（伊）
「一応、理解は出来るだろう？」

山城
「まあ、密約はどこでもやってるんで……脱線してません？」

福本（伊）
「しているな。その密約の中には技術譲与もあったんだが、その詳細も避ける。まあ、譲与もあって、新八八艦隊計画は解凍された。そして、その１つとして新型艦が現在旅順造船所で建造中だ」

山城
「艦種は…何ですか？」

福本（伊）
「戦艦だ。艦名も既に決まっている。扶桑、山城だ」

山城
「我が国初の弩級戦艦の艦名ですね。察するところ、福本元帥の意志ですね」

福本（伊）
「まあ、一番世話になった軍艦だからな……一応、『扶桑型戦艦』となる」

山城
「何時から造っていたんですか？　さすがに、４・５年前から？」

福本（伊）
「設計図が出来たのが２年前、建造は１年４ヶ月前からだ」

山城
「……なんと、まあ、早い事で」

福本（伊）
「技術譲与のお陰だ。他にも、主砲、装甲、レーダー、機関等を改良している。しかも、いざとなれば量産も可能だ」

山城
「宇宙戦艦ヤマトの主力戦艦じゃあないんですから……それで、そ

んな最新艦をどうするおつもりで？」

福本（伊）
「あと６ヶ月で完成する予定だが、連合艦隊配備は来年８月だ…ここまで言えば分かるだろう？」

山城
「まさか、あっち（異世界）に持ってって訓練する気じゃあないですよね？」

福本（伊）
「ご名答」

山城
「……はあ～、許可の方は？」

福本（伊）
「今朝話した。調整はするがな」

そう言うと、缶コーヒーをグイッと飲んで立ち上がった。

福本（伊）
「さてと、寝るか。お休み」

山城
「お疲れ様です」

そのまま福本伊吹次官は廊下の奥へ消えて行った。

次号へ

１０１　密談（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０２　新たなる戦雲

アーネリア陛下・アルスラーン陛下は日本に２週間（こちらの暦で１１月２５日～１２月１２日、異世界の暦だと１２月９日～１２月２３日まで）滞在し、１３日（向こうは２４日）にそれぞれが乗って来たマツシマ、ハリアーに乗り、改装が終了した派遣艦隊（海上自衛艦は改装の余地有りとして残留、伊２９と第１号艦は機関変更のため、残留）にエスコートされ、練習艦陸奥などの神戸鎮守府所属の艦艇に見送られながら海上ゲートより異世界へと向かった。その後、ハリアーと別れ、グローリアス士官学校の軍港に入港、飛龍搭載の４０式輸送ヘリを使い王城のある首都ユニオンへアーネリア陛下を送って行った山城とシルヴィアだが……

王城　ヘリ着陸ポイント（中庭）

山城
「……どうなってるんだ？」

シルヴィア
「……さあ？」

アーネリア陛下が帰って来ているのに、王城内は右往左往、上へ下への大騒ぎ。主が帰って来ているのに、気が付かないって……

山城
「シルヴィア……まさかとは思うが、これが主が帰った時の作法じ

ゃあ…」

シルヴィア
「そんなわけ無かろう！！」

山城
「だよな～」

シルヴィア
「まったく…おい、そこの者、待て！」

そう言うとシルヴィアは近くを通った人間の襟を掴み強制停止させる。

「な、何か！？」

シルヴィア
「この騒ぎはなんだ？　まるで天変地異でもおこるかのような様子ではないか！」

「じ、実は先程までチャイナー帝国より勅使が来ておりまして、１０年前と同じ要求を…」

シルヴィア
「なに！　また懲りずに言ってきおったのか、あの国は！？」

「それで…陛下が帰る前に関係各所に連絡を…」

山城
「あ～、訊きたい事は山程有るけど、陛下は帰って来てるよ？」
そう言われてようやく気付いたらしく……
「へ、陛下のお戻りだ～～！！」
そう叫びながら慌てて走って行った。
山城
「…帰って早々、問題発生だな」
２０分後……王城内アーネリアの執務室
外務卿
「…と言う事です」
アーネリア
「ご苦労様です、外務卿。退室して下さい」
外務卿
「はい、失礼します」
外務卿が退室するとアーネリアは頭を抱えた。
アーネリア

「困った事になりましたね」

「はい。真にゆゆしき事態です」

こう言ったのはこの国の宰相にして、誰もが認める老年な政治家のグロワール公爵。
公爵は先代（つまり、アーネリア陛下のお父さん）時代から宰相を勤めるベテラン政治家だ。

グロワール男爵
「…ですが、返事は出さなければなりません。それに、４日後に正使を乗せたチャイナー帝国艦隊が港に入港する事になっております」

ちなみに、この執務室にいるのはアーネリア陛下、グロワール宰相、親衛隊ユリア隊長、シルヴィア、そして、山城の５人。
しかし、山城以外の４人は頭を抱えていたが、山城を控えめに手を挙げた。

山城
「あ、あの～…基礎情報が無いので、どうにもこうにも…」

なんとかが持って来た外交文章の内容わわかった。
簡単にすると『領土返せ！』である……根拠は解らないが。

グロワール男爵
「ふむ…そうだったな。シルヴィア、説明しなさい」

シルヴィア
「はい」

返事をすると、久々に見るこの世界の地図（と言っても世界の一部）を広げた。

シルヴィア
「先程から出ておるチャイナー帝国は我が国から海を越えた大陸にある帝国だ」

確かに、半島を含めた『シリルティア王国』の海を越えた先の大陸に『チャイナー帝国』と書かれた広大な領土を持つ国がある。

シルヴィア
「我らが祖先がこの国を作った時、帝国は直ぐ様ある書簡を我々に提示した」

山城
「それが今回と同じ『領土返せ！』か？」

シルヴィア
「そうだ。この話は１００年前から続いている。まあ、最近１０年間は領土内で起きた内乱を鎮めていたから静かだったが……また、言い出してきた」

山城
「それで…彼らの根拠は？」

シルヴィア
「我らが祖先が困難を切り抜けてこの地に立ったのが８００年前、その後、統一、分裂を繰り返して今になったが、向こうは５００年前にここはチャイナー帝国の領土で、ここを我らが祖先に奪われた

と言っておる。しかし、今見付かっておる文献史料にはそんな事は書かれておらぬ」

山城
「…どっかで聞いた様な話だな……まあ、だいたいの事情は読めたよ」

シルヴィア
「当然であろう。お主なら僅かな説明で充分把握出来るであろう…で、策は無いか？」

見ると、他の3人もこっち見てるし……もう少し考えましょうよ…。

山城
「…まず、領土については、国交条約中にある『現段階で保有する領土を貴国の物と承認する』で大方決着が付いています。ですから、返事はノーです」

グロワール男爵
「だが…それを正使の前でてなると…」

山城
「それについては考えがあります。これにはあなた方の協力が必要です」

ユリア隊長
「必要とあらば、我が親衛隊は何でもする」

アーネリア
「私も…出来る限りは」

山城
「結構です。まあ、まず必要なのは、演技力ですね」

シルヴィア
「なんだ？　芝居でもやるつもりか？」

山城
「あぁ、それも大規模で向こうが驚くぐらいの芝居をね」

グロワール男爵
「……話だけも聞いてみるか」

次号へ

１０２　新たなる戦雲（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０３　準備・調査・新兵器！？

１２月２５日　派遣部隊駐屯地

プレハブ兵舎内の会議室

山城
「……と、これが現状と作戦の内容です」

王城から帰った山城はそのまま小澤長官の下に走り現状を報告、詳しい現状説明の為、翌日各艦艦長と各部署責任者を召集してもらった。

小澤中将
「確かに、ゆゆしき事態だな」

山口
「…どこぞの『革命外交』とかほざいていた国を思い出した」

矢萩
「それ、中国だよ」

有馬少将
「日清戦争前の清帝国と同じだな」

小澤中将
「ところで山城少佐、今回の策は成功しても失敗しても戦争になるぞ？」

山城
「はい。向こうは中国人並みに自己中ですからね。いずれは戦う事になります。ならば、正体が完全見破られる前に決着をつけます」

小澤中将
「ふむ……まあ、曖昧な根拠と武力による領土強奪とは同盟国として、武士としても許せんな」

小澤中将の言葉に艦長達も同意する。

山城
「では、こちらも協力出来ると言うことで…」

小澤中将
「まったく…君は策士だな」

山城
「その割には、その場対応なんですけどね」

山口
「それより、内容はわかったから、早く我々の役割を教えてほしいのだが？」

山城
「了解しました。では、我々の役ですが…」

会議終了後……

山城
「ふう…」

シルヴィア
「疲れたか？」

山城
「いや。それより、チャイナー帝国艦隊の主力艦を調べたいんだけど…」

シルヴィア
「う～む…最近のが有るかどうか…」

鷲井
「よお、御二人さん！」

山城
「鷲井か。さっき久々に顔を見たぞ」

鷲井
「当たり前だ。ここんとこ毎日、部屋で図面とにらめっこだ」

山城
「たまに外に出ないと、直ぐに腐るぞ」

鷲井
「わかってるよ。それより御二人さんに相談なんだが…」

シルヴィア

「なんだ？　金銭トラブルは無しだぞ」

鷲井
「違うよ…実はアーネリア陛下に都合をつけてほしいだが…」

山城
「珍しいな。新兵器の御披露目か？」

鷲井
「あぁ、だから、出来る限り都合をつけてほしい」

シルヴィア
「それなら構わんが…何時だ？」

鷲井
「え～と、確か…１２月２９日」

山城
「…なんでチャイナー帝国艦隊の来た次の日なんだ？」

鷲井
「たまたまだ！　御披露目は前からこの日に決まってたから……向こうが悪いんだ！」

シルヴィア
「わかった、わかった…陛下にはちゃんと伝えておく」

鷲井
「なんだ？　これから用事か？」

山城
「あぁ、チャイナー帝国の軍事能力を調べる」

鷲井
「そうか…じゃあ、何か見慣れない兵器があったら持って来い。部屋に居るから」

山城
「出来れば…それが無い事を祈るよ」

資料室

シルヴィア
「う～ん……無いな。そっちはどうだ？」

周りを引っ張り出してきた本の山に囲まれながら、シルヴィアが訊いてきた。

山城
「2～3年前にアーネリア陛下のお父さんが派遣した宮廷画家のスケッチがあった。あと、こっちはスパイだな…詳しく調べた報告書が添付されてる」

シルヴィア
「そんな物、どこにあった？」

山城
「閲覧厳禁の本棚。会議前に閲覧申請しといて良かった」

シルヴィア
「そうか…それで、何が書かれておる？」

山城
「簡単明瞭な一文がある。『チャイナー帝国は2～3年後に戦艦6、装甲巡洋艦8の6・8艦隊を完成させるつもりである』…とさ」

シルヴィア
「数なら負けだ。戦艦など向こうの半分しかない」

山城
「それはどうかな？　勝敗を決めるのは船の数だけとは限らない。それより、こっちが気になる」

そう言うと山城はシルヴィアにスケッチを渡した。

シルヴィア
「これは…チャイナー帝国戦艦のスケッチだ。別に気にはならないが…」

山城
「その戦艦は僕達の世界でもあった。名前も同じ『鎮遠』。しかも、僕達の世界なら最終的に鹵獲された船さ」

シルヴィア
「な、なに！？」

山城
「これなら大丈夫さ。それよりも、チャイナー帝国に転移兵器が有

るかどうかが気になるところだ」

シルヴィア
「そうか…そうだな。確かに気になるな」

次号へ

１０３　準備・調査・新兵器！？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０４　チャイナー帝国艦隊来航

１２月２８日　首都ユニオン

……の港

この日、ユニオンの市街地では華やかに飾り付けられていた。
チャイナー帝国艦隊が来る事は既に伝わっている筈なのに、市民の顔には殺気だった気配は無い。
それどころか、子供がはしゃぐ程、港の方に人が集まっている。
そんな雰囲気の中、チャイナー帝国艦隊は主力戦艦鎮遠型六隻を中心にユニオン港へ入港した。
ちなみに旗艦は一番艦『鎮遠』。
日清戦争前の政府がそのスペックと軍事力から無理矢理感たっぷりの三景艦を作った程の艦がこちらの世界には六隻ある。
まあ、こちらの三景艦はまともな艦ではあるが……
そんな鎮遠から一隻のカッターが降ろされた。
そのカッターは桟橋に向かい、桟橋で待つ人物の前で止まる。

「グロワール宰相に訊きたいネ！」

グロワール宰相
「はぁ、なんですかな？」

「惚けるなネ！　我々チャイナー帝国艦隊の停泊場所に停泊出来なくなっているのはどうゆう事ネ！？」

グロワール宰相
「まあまあ、落ち着いて話しましょう、オン・カ・ホウ総大臣」

このオン・カ・ホウこそチャイナー帝国の正使であり、チャイナー帝国のナンバー2の人物である。
ちなみに、総大臣とはチャイナー帝国の宰相の名称だ。

オン
「聞いたところによると、我がチャイナー帝国艦隊以外の国の艦隊があそこに停泊する事になってるアルヨ!?　これはどう言う事ネ!」
グロワール宰相
「聞いた通りだよ。そこにはついこの間国交条約を結んだ国の艦隊が停泊する事になっておる」

オン
「フン!　この様なちっぽけな国と国交を結ぶ国が有るわけ無いアル。いたとしたら、よほどのバカでお人好しの国アルヨ!」

こう言われて、グロワールは内心キレたが、顔には出さなかった。
自分達は何を言われ様と、シナリオ通りに踊り続けなければならないから……。

オン
「まあ、いいアル。それより、アーネリア陛下はどこネ?」

グロワール宰相
「はあ、陛下は親善艦隊をお迎えする為に旗艦のマツシマへ…」

オン
「ちょこざいな国アル！　我がチャイナー帝国を差し置いて……なんと言う国アルか！？」
グロワール宰相
「確か…大日本帝国だったと…」

オン
「帝国！？　帝国は我がチャイナー帝国のみが許された名称アルヨ！　それに加え『大』をつけるとは…万死に値する行為ネ！」

グロワール宰相
「（お前達に比べれば、遥かに帝国と呼んでも良い国だ。歴史・経済力・礼儀は向こうが上だ！）まあ、国の名称は国それぞれですからのう」

そう言った時、秘書官が近付いて何かを耳打ちした。

オン
「何かおこったアルか？」

グロワール宰相
「いえいえ、大日本帝国親善艦隊がもう直ぐそこまで来ていると…」

オン
「ちょうどいいアル。大日本帝国とか言うアホの面見るアルヨ！」

グロワール宰相
「どうぞどうぞ。（それで腰でも抜かしとけ、バカ）」

数分後……現れた艦隊を見たオンは見下すように笑った。

オン

「あれかネ？　大日本帝国の艦隊は……よほど貧乏の様あるネ！」

確かに、チャイナー帝国艦隊は鎮遠型戦艦六隻の他に装甲巡洋艦六隻、防護巡洋艦八隻の艦隊……ちなみに、駆逐艦がいないのは長距離航行が無理な為……である。

対し、見えるだけで三隻…正面から見ている為…程しか見えない。

ただ、近付くにつれて、もう四隻程が後ろから付いてきている事はオンにもわかった。

それでも、その顔にはまだまだ余裕がある。

向こうは七隻、こちらは二十隻……勝ったな、と思っていたのだろう。

しかし、徐々に近付いて来るにつれて、オンにも頭に疑問符が付き始めた。

自分達が知るよりも大型の船体……なのに速い速力……異様な威圧感……。

その艦隊が港口に来る頃になると、オンの顔は驚愕に変わっていた。

主砲配置や艦形は違えど、連装五基の砲塔に鎮遠型より大型な船体が彼の目に入ったからだ……。

戦艦天城艦橋

小澤中将

「君の策略が当たった様だね。山城少佐」

山城
「身の程を知らないバカに現実を見せただけですから」

そう、これこそが山城の出した策だった。
つまり、グロワール宰相に何も知らない役を演じてもらい、相手を油断させ、一気に現実を見せた……それだけである。
まあ、これ以上の断り方法も無いだろうが……

小澤中将
「全艦、向ける砲を全てチャイナー帝国艦隊に向けろ」

山城
「艦長よりテッポウ。全砲をチャイナー帝国艦隊に向けよ」

宮里
『ヨーソロ』

オン
「ぐぐぐ……グロワール宰相、これはどう言う事あるネ！？」

既に『大日本帝国』の艦隊艦艇の主砲がチャイナー帝国艦隊に向けられている。それは効き目充分な無言の圧力。

アーネリア
「オン総大臣。我がシリルティア王国は貴国の要求の一切を拒否します」

なんと、そこにマツシマに乗っている筈のアーネリアがユリア親衛隊長を連れて、その場にいた。

オン
「…騙したネ！　我々を最初から騙したアルネ！」

アーネリア
「既に我が国が保有する領土は大日本帝国より正式認められたもの。あなた方が入る隙間はありません！」

オン
「…フン！　強がりも今の内ネ！　貴様らを皇帝陛下の前で処刑してやるネ！」

そう言うと慌てカッターに乗り、鎮遠に向かった。
その後、大歓声を後ろから聞きながら、チャイナー帝国艦隊は惨めに引き上げて行った。

次号へ

１０４　チャイナー帝国艦隊来航（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０５　２つの新兵器

１２月２９日　ユニオン郊外
……の上空

オン・カ・ホウ総大臣を正使として乗せたチャイナー帝国艦隊を堂々と追い返した次の日、今度は新兵器の御披露目であった。
それで……なぜ空の上かと言うと……

シルヴィア
「……遅いな」

山城
「まあ、飛行船ですからね」

鷲井の言っていた新兵器とは自らが苦心して作り上げた飛行船。
その名も多目的中型硬式飛行船『クジラ君１号』。
まあ、名前の時点で山城・シルヴィアにツッコミを入れられたが、別段悪くは無い。

鷲井
「よお、お二人さん」

山城
「おう。しかし、飛行船とは…大丈夫かい？」

鷲井
「大丈夫だ。どっかの飛行船みたいに、ドカン！…とはならないから」

シルヴィア
「わ～し～い～、速度遅い。なんとかしろ」

鷲井
「残念ながら、これが精一杯」

ちなみに、機内にいるのは山城達の他に、何時呼んだのかアルスラーン陛下、クロイツ親衛隊長、アーネリア陛下、ユリア親衛隊長等々の両国の主な人物、そして……

福本（伊吹）
「まあ、飛行船は速度よりも飛行時間を重視しているからね」

山城
「福本次官…なぜ、あなたがここにいるんです？」

福本（伊）
「いや～、新兵器の御披露目と聞いて、ついつい…」

山城
「つまり、国防省から逃げて来た、と？」

福本（伊）
「あははは…若い者には勝てんな～」

いや…読みやすいだけです。
しかし、周りを見ると、軍・政治関係者は驚きながらも何だか興奮している。
一方、アルスラーン陛下とアーネリア陛下は楽しそうだ。
ただ、ユリア親衛隊長は落ち着いていない。
逆にそわそわしている。
まあ、今までヘリにしか乗っていないからかな？

ちなみに、この多目的中型硬式飛行船『クジラ君1号』のスペックは……

全長　１５０ｍ
直径　　２０ｍ
重量　１２．４ｔ
気体最大容量　３０００立方メートル

使用気体　ヘリウムガス
速度　８５ｋｍ／ｈ
航行距離　２０００ｋｍ
上昇限界高度　３０００ｍ　（最大搭載時２５００ｍ）

最大搭載量　１４ｔ

エンジン　水冷直列６気筒（２４０馬力）×４基

乗員２０名（＋４０名）

武装　１３ｍｍ機銃×６基

鷲井
「…とまあ、こんなところか」

山城
「で、わざわざ福本伊吹中将を呼んだのは、これを次の戦いで使わせてほしいか？」

鷲井
「…お見通し…か、つまんないな～」

山城
「俺とお前の仲だからな…しかし、次は海戦だ。爆撃となると、水平爆撃だが…」

福本（伊）
「いや…機体を活かした砲撃観測を行おうと言うのが鷲井技術中尉の考えだ」

山城
「なるほど……これぐらいの大きさなら充分、観測機材を搭載出来る…ん、中尉！？」

福本（伊）
「昨日…いや、本日０時の時点で彼は中尉に任官したんだよ」

山城
「それは良かったな！」

鷲井
「あはは…出来れば起きてる時間にしてほしかった…」

福本（伊）
「それと…これは餞別だ」

そう言い、懐からテレホンカード位の大きさのカードを取り出し、山城に渡すと、アルスラーン・アーネリア両陛下の所へ行ってしまった。

鷲井
「マル秘…って書いてあるぞ？」

山城
「…まさか」

裏返すとＣＧで作られた波を掻き分けて悠然と進む戦艦が描かれている。
左端には『戦艦扶桑』と書かれていた。

鷲井
「…噂だが、旅順で新造艦が二隻造られてるって聞いたけど……これか」

山城
「さすが技術屋…知ってたんだな」

マル秘と書かれた面にはスペックが書かれていた。

戦艦扶桑型スペック

全長　２２５，５ｍ
全幅　３３，８ｍ
基準排水量　７５２００ｔ
最大排水量　８０６００ｔ
最高速度　３３ノット
（機関にロックあり）
機関　原子力機関
航続距離　原子棒交換まで航行可能

武装

４１ｃｍ５０口径三連装砲×３基
１５，５ｃｍ７５口径単装速射砲×８基
１２，７ｃｍ７５口径単装速射砲×８基
四連装『桜花』対艦ミサイル発射筒×４基
ＶＬＳ（８セル）式『征空』対空ミサイル×４基
ＶＬＳ（８セル）式『潜龍』対潜ミサイル×２基
４０ｍｍ自動稼働単装機関銃×８基
２０ｍｍ自動稼働単装機関銃×１２基

対潜ヘリ４機搭載

別記

ミニイージスシステム（ＦＣＳ３改）を搭載。

山城
「……なあ、鷲井…こんなハイスペック艦、造って良いのか？」

鷲井
「いいだろう……多分」

山城
（こんな艦が熟練期間とは言え……来ていいのか？）

まあ、世界征服なんて事はしないと思うが…。

次号へ

１０５　２つの新兵器（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０６　チャイナー帝国御前会議

１月５日　チャイナー帝国首都ホクキンの宮殿

謁見の間

「……それは本当か？　オン・カ・ホウ総大臣」

オン

「は、陛下。シリルティア国は我が帝国の寛大な勅命を無視し、どこの馬の骨とも解らぬ『大日本帝国』と言う蛮族国と手を結び、我々に対抗しようとしております」

シリルティア王国での傲慢な口調とは違い、丁寧な口調を使うオン総大臣。

そして、謁見の間には各諸大臣や将軍達が控えている。そして、玉座に座る陛下……コ・キン・トウ第５２代チャイナー帝国皇帝である。

コ

「ふむ…総大臣が言う通り我が天命を無視しただけで無く、我が国しか許されぬ『帝国』の名を語り、更に『大』を付けるとは国と手を結び我らに対抗してくるとは…蛮族の癖に生意気だな」

この言葉に諸大臣や将軍達が同意する。

まるで何処かの国の様に……

コ
「して、オン総大臣。シリルティア国の戦力はどうか？」

オン
「は、戦艦３隻、装甲巡洋艦５隻、防護巡洋艦８隻、駆逐艦３０余隻程です。まあ、我が艦隊の前には貧弱な艦隊でありますな」

コ
「そうか…ところで蛮日族（ばんにっぞく）の方どうか？」

……もし、日本人がこの名称を聞いたら良くても機嫌が悪くなるだろう。
しかし、中華思想と似た自己中思想を持ったチャイナー帝国の者にとって、自分達以外は蛮族なのだ。

オン
「はい。親善艦隊として送り込まれたのは戦艦１隻、装甲巡洋艦（鳥海の事）１隻、駆逐艦が４隻、用途不明の船（飛龍の事）が１隻です」

コ
「その様子では蛮日族の保有する戦艦は最大２隻、装甲巡洋艦も同数か少し多い位、防護巡洋艦、駆逐艦の数も大した事は無いだろう」

大臣
「さすが、陛下。僅かな情報だけで蛮日族の戦力まで当てるとは」

この大臣の発言に合わせるかの様に、他の大臣や将軍達が次々に賛美の言葉を述べる。
しかしだ……この予想はちゃんとした確認が取れていない、自分達

に都合のいい物だ。
もし、この時点で彼等が『大日本帝国』が自分達より１００年先の技術を有した異世界国家で、戦艦だけでも高性能な戦艦を１３隻保有していると知っていたらこれ程暢気な事は言えなかったであろう。
いや、その前にオン総大臣はある事を報告していない。
それは、天城・鳥海がどの様な船だったかを報告していなかった事だ。
もし、ここで戦艦と装甲巡洋艦は連装砲塔５基１０門搭載艦だと言っていれば、さすがにコ・キン・トウ皇帝以下誰もがおかしいと思っただろう。
今の技術でその様な艦船が出来る訳が無い。
残念ながら、後の調査でもこの事に関する史料が少なく、学者達の見解になってしまうが、オン総大臣は日本艦船を只の『張り子の虎』だと思ったのでは無いだろうか。
世界最強のチャイナー帝国でさえ持っていない軍艦がある。
←
←
そんな筈が無い。あれはきっと中身の無い作り物に違い無い。
←
←
……結果、非現実的だとゆう結論出してしまったのだろう。
あるいは、錯覚だと思い無視したのだろう。
または、親善艦隊という一時的な物で自分達の脅威にならないと考えたのだろう。
まあ、人間とは自分の知識内の事でしか判断出来ない物だ。
こう言った事は充分に考えられる。

コ
「チョ・コウ・キン海軍大将！　我がチャイナー帝国艦隊はいつ戦が出来る？」

こう問われ、居並ぶ将軍・大臣達の中から1人の人物…チョ・コウ・キン海軍大将が前に出る。

チョ
「は、本来なら整備・点検に2ヶ月を有する事ですが、1ヶ月後には戦が出来る様にいたしましょう！」

コ
「うむ…もちろん、『あれ』は出せるな？」

チョ
「はい。そちらの方も抜かり無く」

コ
「皆の者、我がチャイナー帝国は礼を失したシリルティア国と1ヶ月後に戦端を開く。良いな！？」

将軍・大臣達
「「「「「「「「「おおぉ！！」」」」」」」」」

………こうして、チャイナー帝国はシリルティア王国との戦争を決めた。

次号へ

１０６　チャイナー帝国御前会議（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０７　合同作戦会議　前編

１月６日　首都ユニオン

港近くシリルティア王国海軍本部

昨日にチャイナー帝国がシリルティア王国に対して戦争を決めた次の日、今度はシリルティア王国で動きがあった。
赤煉瓦で作られた海軍本部の会議室で日本海軍派遣艦隊とシリルティア王国海軍との合同作戦会議が行われていた。
そして……今回の中心人物は……

山城
「……小澤長官…一つ訊いていいですか？」

小澤中将
「何かね？」

山城
「…なんで一隻のしがない艦長でしかない自分が、参謀皆さんを差し置いて、作戦会議に同行する事になったんですか？」

しかも、シルヴィアを連れて！（仕方ないけど）

小澤中将
「その１、君は誰よりも早く、そして長くこの世界に居るから、彼らのやれる事とやれない事が解っている。その２、その事に対する対応策がある。その３、君は一般将校科卒業だから、兵科に対する

執着心が無く、また知識も豊富。その4、周りに顔が効く。その5、既にこの作戦の計画を立てている」

山城
「……なんでその事を知ってるんですか？」

シルヴィア
「私が話した」

山城
「いつ！？」

シルヴィア
「1月1日。小澤中将と酒の話をした時に…」

山城
「話すな！！」

それで喧嘩になったらどうするんだよ……と心配して頭を抱えた。

しかしだ、山城の心配は杞憂に終わった。
何故なら……

山城
「な、なんですって！　そちら側の作戦は廃案になった！！？？」

会議室に入り、王国海軍側からの状況説明を聞いた山城は唖然とし、別の意味で頭を抱えた。

「残念ながら、我が方の作戦はどうも沿岸での戦闘になってしまうのでな。私の権限で全て廃案にした」

山城
「いや…さすがにそれは無いでしょう、ドレイク大将！」

味方の作戦を全て廃案にすると言う無茶っぷりを見せたこの人物こそ、シリルティア王国海軍総司令官ドレイク大将である。
ドレイク大将の祖先は海賊で、一時期この付近を縄張りに荒らし回っていたが、何代か前の当主がどこかの貴族の娘を助けたとかでシリルティア王国に仕え始めたとそうだ。
その後、シリルティア王国専属の……まあ、戦国時代の水軍の様な事をしていたらしい。
しかし、ドレイク大将が家を継ぐ以前から各国の軍艦事情が急激に変わり始めた。
技術が日進月歩であり、外車輪船がスクリュー船、鋼鉄船…と、進んで行くに従い今までの様に貴族の収入では支え難くなった。
この為、彼は直ぐに海軍の創立を願い出た。
そして、今が有るわけだが……

山城
「…お聞きしますが、廃案の基本的な内容は？」

ドレイク大将
「敵艦隊が強大な為、沿岸海域に誘き寄せ、沿岸砲台と協力し、これを撃破・撃退……」

山城

「……大体わかりました」

つまり、戦前の漸減作戦の沿岸版をやるつもりか…。しかし、今回はドレイク大将は討って出て戦う様だ。となると……やはり、この作戦か…。

山城
「え～…今回の戦争は海戦一回…つまり、日本海海戦の一回で終わらせたいと思います」

シリルティア王国海軍幹部（大佐～大将）の顔を前にして、山城は緊張しつつも発言した。
ちなみに、シリルティア王国海軍幹部には既に日本海海戦に関する資料を配布している。

ザワザワザワ……

広瀬大佐
「つまり、海上で敵艦隊に決戦を挑み、そのまま戦争を終わらす…かね？」

山城
「はい。そうです」

さすが軍神広瀬中佐…当時わ生きていただけに飲み込みが早い。

中将
「そんな事が…可能なのか！？」

山城
「可能です。まあ、極論すれば一発勝負ですね」

そう言うと海図が張られた移動式黒板を持ってくる。

山城
「チャイナー帝国艦隊は途中まで通常航路を使い、シリルティア王国近海に向かうと思われます。例え変えるとしても、艦の性能上、この近くを通ると思われます」

指し棒を使い、説明する山城。

山城
「対し、我が方は飛龍搭載の航空機、鳥海の水上機と飛行船による索敵が可能です。我が方は敵を見つけ次第、全速力でそちらに向かいます」

ドレイク大将
「ふむ、接敵まではわかった。それで、敵をどう討ち取る？」

山城
「残念ながら、今は話せません。明記してしまえば、読者に申し訳無いので」

山城は苦笑しながら言った。

山城
「（それよりは…今から出す事の方が色々と問題なんだけどね……まあ、次に回すか…）」

次号へ

１０７　合同作戦会議　前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０８　合同作戦会議　後編

会議室でシリルティア王国海軍幹部達の前で山城が発言する。

山城
「今回の海戦はシリルティア王国海軍創立後、初の本格的海戦になる事は間違いありません」

海軍幹部の人間も頷く。

山城
「ですが……こんな事を言うのは気が引けるのですが…勝てるかどうかは微妙です」

全員
「「「「「「なんだと!!?」」」」」」

……やっぱり、その反応ですよね……。

中将
「それはどう言う事だ！　日本海軍の力があれば勝てる筈だぞ!?」

山城
「そこです！」

ある中将の発言に山城は空かさずツッコンだ。

山城
「こう言っては何ですか…シリルティア海軍は我が日本海軍を頼り

過ぎています…この事が本官の述べる『勝てるか微妙』の要因です」

中将
「きょ、強力な同盟国艦隊と共に戦うだけでだが…」

語気が弱まっている事から、図星……かな？

山城
「確かに、そうかもしれません…ですが、それは我々が居なければ勝てない…のでは？」

中将
「き、貴様！」

ドレイク大将
「静かにせぬか」

語気は強く無いものの、重く威厳を感じさせる声が響いた。
これには例の中将も静かになる。

ドレイク大将
「わざわざこの様な事を言うのはこの先不可欠な事だと言う事だ…日本にはこんな諺があるそうだ『訊くは一時の恥　訊かぬは一生の恥』……多少使いどころが違うかも知れんが、今の我々は一番必要な事だと思うが？」

まあ、確かに使いどころが違うが……それ以上に恨み役をかわしてしまった事に山城は申し訳なく思った。

山城
「それでは…皆さんが指揮を執られる艦や戦隊の戦闘配置に就くまでの平均は何分ですか？」

「「「「「「……」」」」」」

一転、沈黙……。

広瀬大佐
「私の所は大体３０秒だな。まあ、駆逐艦と水雷艇ばかりだからね」

山城
「ありがとうございます。他の方々は？」

「「「「「「……」」」」」」

山城
「はい、結構です。残念ながら、敵に勝つ事は無理です」

ドレイク大将
「どうすればよいかね？」

山城
「今から戦力増加は間に合いません。しかし、戦力の強化なら出来ます」

ドレイク大将
「…と言うと？」

山城
「出来れば明日から、王国海軍には猛訓練をやって貰いたいのです。艦隊運動、単艦運動、砲撃戦訓練等々…各艦将兵の練度を上げます。これが戦力強化です。詳細に関してはこちらに書いておきました」

そう言うと山城は、ドレイク大将にノートを渡した。

ドレイク大将
「わかった。この会議後直ぐに検討してみよう」

山城
「ありがとうございます。皆さんもご承知の通り、船は人が動かすものです。例え敵より数が少なくても、練度が高ければ、勝てないまでも負けない戦いを行う事が出来ます。その為の猛訓練の提案です」

……会議後

山城
「……大丈夫ですかね？」

小澤中将
「大丈夫だろう。彼らも勝つためならば、何でもするさ」

山城

「はあ……その前に、小澤中将、これでは自分がまるで主席参謀の様な事に…」

小澤中将
「やっと気付いたのか？」

山城
「嫌ですよ！　只でさえ、天城の指揮で忙しいのに、更に参謀職に就いたら過労死してしまいますよ！」

シルヴィア
「よいではないか。お主の頭ならそれ位が丁度良いのではないか？」

小澤中将
「ほら、彼女もこう言ってるし」

山城
「それを認めたら、いくらこの話がご都合小説でも、無茶苦茶になりますよ！　断固拒否します！」

……こんな会話が交わされながら、３人はヘリが待つ場所へと向かった。

次号へ

１０８　合同作戦会議　後編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０９　年終わり

１２月３１日（異世界１月１０日）

首相官邸　応接室

福本伊吹海軍次官兼中将は首相官邸に来ていた。

小泉首相
「わざわざ足を運ぶ必要も無かったのではないかね？」

福本（伊吹）
「マスコミの追っかけですか？　それなら大丈夫です。今頃、囮の秘書官を追い掛けているか、私の抜け道で巻かれて、あたふたしてますよ」

小泉首相
「あっはっはっは…それは彼らも大変だね」

福本（伊）
「それより…首相、なぜ、自分が大晦日をゆっくり過ごそうとする首相の元に来たか気にならないのですか？」

小泉首相
「君が私の所に持ってくる物は限られるからね……ただ、中身に興味はあるよ」

福本（伊）

「やれやれ…今朝届けられた物です。しかも、本人の手で」

小泉首相
「山城正人少佐からだね」

福本（伊）
「はい。まあ、彼こそ、部下を使って届ければ良いのに、自分の足で届けて来ましたが」

小泉首相
「彼は来て無いのかね？」

福本（伊）
「えぇ、明日が正月なので、正月は向こうで過ごす為だと…どうやら、向こうの居候先の娘にせっつかれた様です」

小泉首相
「ほう、そうか」

福本（伊）
「はい…まあ、向こうでは正月が2回に増えたとゆう事で、案外陽気に騒いでるそうですよ」

小泉首相
「ふむ…話が脱線しているな」

福本（伊）
「そうですね。山城少佐によると、チャイナー帝国は我が世界の清帝国、思想的にはごりごりの中華思想……山城少佐の結論は交渉するだけ無駄…と」

小泉首相
「なるほど……元帥の息子はどう見るかね？」

福本（伊）
「止めて下さいよ……来航翌日、飛行船の御披露目に出席しましたが……山城少佐の結論は状況に合っています。アルスラーン陛下に話を聞きましたら、チャイナー帝国は同じ事をネイラーン王国にも言って来ていました」

小泉首相
「昔は？」

福本（伊）
「はい…理屈は一緒でした。ですから、ネイラーン王国も海軍の増強をしていた訳ですが…」

小泉首相
「それが今回はシリルティア王国か…何故だ？」

福本（伊）
「首相、ネイラーン王国とシリルティア王国の位置を我が日本と朝鮮半島に置き換えてみて下さい」

小泉首相
「……なるほど、日本が欲しければ朝鮮を制せ、か…元寇と同じだな」

福本（伊）
「日清・日露戦争の要因ですからね。まあ、今回はどちらかと言う

と日清戦争ですかね」

小泉首相
「やっとここまで漕ぎ着けたんだ……勝てるかね？」

福本（伊）
「作戦計画書は読みました。派遣艦隊だけでなく、主役のシリルティア王国海軍も猛訓練中です。状況報告の最後の欄に『その活気、日本海海戦前夜の如し』と書かれている事でも解ります。懸念があるとすれば、原爆の様な兵器か、大和型の様な戦艦が多数出てくる事ぐらいでしょうが…それ以外なら充分に」

小泉首相
「…ならば、後の問題は戦費か」

福本（伊）
「はい、これさえ解決出来ればいいんですが…山城少佐は『一戦で終わらす』と断言していましたけど…」

小泉首相
「うーむ……緊庫から出すか…」

福本（伊）
「難しいですね……今度、蔵相と相談出来る様、こちらも調整しておきます」

小泉首相
「うむ、頼むよ」

福本（伊）
「あ、山城少佐から言伝てです。『独断専行については戦後に罰を受ける』と」

小泉首相
「今までの事から見れば、±0だと思うけどね……海軍に任すよ」

福本（伊）
「わかりました」

小泉首相
「それより…大晦日はどう過ごすのかね？」

福本（伊）
「実は息子と許嫁、父と母が家に来ておりまして……今夜はゆっくり過ごそうかと」

小泉首相
「そうか…なら、福本元帥に一極勝負出来ないかな？　官邸に来てもらって」

福本（伊）
「はあ……出来ない事も無いと思いますが…家族全員ですよ？　大丈夫ですか？」

小泉首相
「なーに、大丈夫さ」

次号へ

１０９　年終わり（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１０　訓練＋雑談

１月１７日（現世界１月７日）

首都ユニオン近海の演習海域海上

士官

「撃て！」

ドーン！ドーン！

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！……

『マツシマ』の主砲、副砲が火を吹き、海上にある曳航された標的に砲弾が襲い掛かる。

それを、ドレイク大将以下王国海軍と派遣艦隊上層部員が天城の昼戦艦橋で見ていた。

ドレイク大将

「……どうかね？」

山城

「お待ち下さい。鷲井、結果は？」

鷲井
「ん～…陸奥からの総合評価４５％」

シルヴィア
「…大丈夫なのか？」

山城
「まあ…主砲弾全部が敵に当たる訳じゃあないから…多分」

鷲井
「けど、さすが福本次官だよな～、陸奥を回してくるとは…」

シルヴィア
「そんな事を言ってしまえば、ついでとばかりに士官学校生同士の交流とは恐れいったぞ」

そう……練習戦艦となった陸奥だが、戦艦であるが故に巨体であり、近代化改装により重量物搭載にそれほど影響を受ける事は無く、センサーや射撃指揮装置、観測機器など必要な機材を搭載していた。
そして、神戸士官学校所属の陸奥をシリルティア王国に送る理由の一つとして、密かに選抜した神戸士官学校生をグローリアス士官学校へと派遣する輸送手段としたのである。
本来ならこう言った訓練支援業務は訓練支援艦『琵琶』型（琵琶、猪苗代、河口、奥多摩、諏訪、浜名、十和田、田沢が配備。艦名は湖名）が派遣されるべきだが、残念ながら今回は急だった為、陸奥が代役として派遣されたのである。
もちろん、ちゃんとした艦が決まれば、陸奥は戻れる訳だが。

山城
「まあ、今頃グローリアス士官学校生は神戸士官学校生相手に兵棋演習で大変な事になってるかも知れないけどね」

鷲井
「あ、そうか。今日は合同兵棋演習か……多分、グローリアス生はボコボコにやられてるかもな」

シルヴィア
「まあ、良い経験にはなるだろう」

山城
「…君が言うセリフか？」

軽くツッコミを入れる山城だった。

その頃……天城防空指揮所

天城
「貴艦の方は忙しそうだな、陸奥さん」

陸奥
「いえいえ…本体自身は暇ですから」

え～…第七艦隊の方では随分ご無沙汰でありました、陸奥の登場でございます。

陸奥
「それは作者さんのせいでは？」

はい、全くもってそうでございます。

天城
「あっはっはっは、元の世界でも陸奥姉さんには世話になったが…
…世界が変わるとこんなにも変わるものだろうか？」

陸奥
「さあ…多分、世界それぞれだと思いますよ」

天城
「世界それぞれか……まあ、この世界もまんざら悪い物でも無いがな」

陸奥
「私なんか、あっちに慣れすぎて……本当に明治時代にタイムスリップしたと思ったぐらいですよ」

天城
「ほ～…まあ、その割りにはお似合いなカップルがこの下に居るな」

そう言うと、足で床をトントンと踏んだ。

陸奥
「あら、案外シルヴィアさんの事も認めてるんですね」

天城
「ただ艦長にべったりとくっついてる娘ではないからな」

陸奥
「あははは、天城さんを見てると山城さんの事を思い出しちゃいま

す」

天城
「え、山城姉さんの？」

陸奥
「はい。私達の山城さんは『山城剣道場』の主でしたから…まともに戦って勝てた人間は福本元帥だけでしたし」

天城
「あぁ、あの艦長の後輩のお祖父さん？」

陸奥
「はい、若冠２３歳で元帥になられたお方で…」

天城
「……え？　２３歳？　元帥！？」

陸奥
「えぇ、まあ、正式な元帥府入りは２５歳…」

天城
「つかぬことをお聞きするが……皇族出身ですか？」

陸奥
「いえ、兵庫の片田舎だと…」

天城
「ぶっちゃけ有り得ん！！」

……とまあ、驚愕（？）の真実を知った天城だった。

次号へ

１１０　訓練＋雑談（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１１　痴話喧嘩・技術士官の呟き

１月１８日（現世界１月８日）

ユニオン港　飛龍艦橋

山口
「聞いたか、矢萩？」

矢萩
「何を？」

チャイナー帝国と唯一圧倒的優位である派遣艦隊空母飛龍はユニオンにて、航空整備にあたっていた。

山口
「チャイナー帝国との海戦日の我が艦の護衛の事だ」

矢萩
「いや、聞いてないよ。それが？」

山口
「はぁ…お前は暢気だな…主隊が突入したら、護衛は先日到着した足柄だ」

矢萩
「……あのさ、そこは漢字じゃなくて平仮名で『あしがら』だよ」

山口
「表記などどうでもいい。しかし、護衛艦一隻で大丈夫だと思うか？」

矢萩
「大丈夫だって」

山口
「……意外にあっさり…しかも、自信満々に答えたな…何故だ？」

矢萩
「これに書いてあったから」

そう言って見せたのは『読めば解る！　現代艦』と題名が書かれた書籍。（笑）

山口
「い、いつの間に…」

矢萩
「あっちに行った時に購入した」

山口
「何故だ…」

矢萩
「いや～、４０年も技術差があるとヤバいと思ってさ、後々ためになるかと…」

山口
「もういい…」

普段は昼行灯なのに、こう言った時にはまるで覚醒したかの様に、
普段では見せない顔を見せる。
まったくもって解らん……

矢萩
「なに？」

山口
「何でもない」

話題を変えよう。

山口
「もう一つ訊くが…」

矢萩
「…話題変えたね」

山口
「うるさい…この兵器表の中にある『対空ミサイル発射筒及び予備弾薬』とは何だ？」

矢萩
「あぁ、それね。向こうで５１式携帯地対空ミサイルがあったからそれを念のために何個か…」

ちなみに５１式携帯地対空ミサイルとは陸上自衛隊の９１式携帯地対空誘導弾の日本陸軍の採用名称の事。

山口
「いるか！！　ここは空母だぞ！　対空装備ならしっかりしている！」

矢萩
「いや、だから念のため…」

山口
「え～い、このバカ者！　大バカ者！　昼行灯！」

そう言いながら、手当たり次第の物を矢萩に投げつける。

矢萩
「いや、ちょ、痛い！　いてっ、痛いってば！」

一方的投擲攻撃を受ける矢萩であった。

その頃……港近くの飛行場

斎藤
「あのバカ達…またやってるわね」

呆れるべきか、恥ずべきか……あの２人は何故ああなのか……

大澤
「だ・か・ら！　何でお前まで付いてきてるんだよ！？」

ヴィクトリア
「仕方ないありませんわ！　自分の乗る機体に搭載される装備を確認するのはパイロットの義務ですわ！」

大澤
「何を言うか、半人前！　お前は神戸で一人前になるまで訓練してろ！」

ヴィクトリア
「あなたみたいな変態に言われる筋合いなんて、爪の先ほどもありませんわ！」

大澤
「言ったな、この胸デカ娘！　お前が現代装備を知るなんぞ、１００年早いわ！」
……いつの間にやら展開されている、あの２人に似たバカ２人。

斎藤
「…あの２人を止める方法は無いか？」

岡田
「残念ながら……ありません」

泉
「ミニミでも乱射する？」

ミニミ……あぁ、あの６４式機関銃か……。

聞いた話では１９８４年……皇紀４４年になるはずが、担当者の間違いで『６４』になった軽機関銃。

斎藤
「…他に方法は？」

岡田
「放置するしか無いかと…」

泉
「まあ、止める人間２人は今頃、海の上だし」

斎藤
「……仕方ない、あの２人は放っておくか。鷲井技術中尉、続けてくれ」

鷲井
「はいはい。まず、流星・紫電改は新型の敵味方識別装置を搭載しました。ミサイルにも効くやつです」

岡田
「…そのミサイルを、レシプロ戦闘機に載せるのはどうかと…」

泉
「しかも、ヘリ搭載用の５１だし」

鷲井
「まあ、念のためなんだし…」

岡田・泉

「「言葉を合わすな！」」

斎藤
「……漫才やってるのか？」

鷲井
「コホン…あとは、ポインターと誘導爆弾と復活の航空用『回天』と…」

泉
「とにかく…改良・改造満載ね」

岡田
「と言っても、次に使うのは第二次大戦用の通常兵装ですけどね」

鷲井
「つーか、ミサイルの時点でオーバーキルなんだけどさ」

斎藤
「だが、ミサイルに戦艦級装甲を撃ち抜く威力は無いぞ」

鷲井
「問題はそこなんですよね…」

実際、昔は爆弾と魚雷が戦艦を沈める兵装であった。
しかし、今は爆弾のみになってしまった。
やはり、ミサイル需要が高くなった為だ。
しかし、ジェット機…しかも、マッハ2～3も出す現代の爆撃機、戦闘爆撃機等に魚雷は積載出来ても第二次大戦の時の様な雷撃は出来ない。（まあ、事故による犠牲も覚悟の上なら知らないが）

そう言った意味なら、鷲井としては今の海軍が福本元帥の言い付けを守り、『短所を長所で補う』事をし続けている事に感謝している。まあ、日本を除き、戦艦を少数にして、あとはミサイル搭載艦で固めようとする世界の海軍事情は解らなくもない。
しかし……だからと言ってミサイルも万能では無い。

鷲井
（一番危惧するとしたら、ミサイルの誘導システムが効かず、ミサイルが目標に到達しないとなったらだな……いや、下手をしたら、撃った艦がそのミサイルに襲われるなんてのは皮肉以上だ……そう言った事態になると、戦術転換が容易なのは日本海軍だけだな）

行きすぎな傾倒の危うさ……と言うべきか？

次号へ

１１１　痴話喧嘩・技術士官の呟き（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１２　宣戦布告

２月５日（現世界１月２６日）

首都ユニオン王城

アーネリア
「……いよいよ、こうなりましたね」

つい先程、外務卿が持って来たチャイナー帝国からの宣戦布告文を受け取ったアーネリア陛下。

アーネリア
「日本大使と派遣艦隊の方々を呼んで下さい」

外務卿
「わかりました」

山城
「宣戦布告が出た！　間違いありませんか！？」

「あぁ、間違いない。外務卿経由の報せだ」

小澤中将が会議中（？）で偶々手の空いていた天城艦長兼主席参謀

（非公式）の山城がシルヴィアを連れ、揺れるジープの上で話していた。

シルヴィア
「もうそろそろ仕掛けてくるだろと思っていたがな」

山城
「それで杉下先輩。陛下の方は？」

「陛下は取り乱しもせず、平然としていたそうだ」

シルヴィア
「当たり前だ。ここで陛下が取り乱せば我ら海軍の士気に関わる」

さて、ここで山城・シルヴィアと話しているのは駐シリルティア王国日本大使杉下将大使（２６）である。
彼は（当たり前だが）外務省の人間だが、実は神戸海軍士官学校卒業とゆう異色の外交官で、卒業後２年を費やし外務省に入省している。
実は大使館設立にあたり問題となったのが人選で、これから色々と問題が出てくるであろう異世界において精神的・肉体的にタフで、知識的であり、余り軍に対する敵対意識を持たず、情報交換をしっかり出来る人間を外務省に要請したところ、彼が選ばれたのである。
福本伊吹次官もこの人選に満足で、山城にしても自分の８期先輩である事からも充分な人物であった。

王城

アーネリア
「これが宣戦布告文です」

杉下
「拝見いたします」

一礼して受け取ると素早く目を通し、山城に渡した。

杉下
「まるでどこかの詐欺と侵略が得意な共産国家の様な宣戦布告文ですね」

山城
「え～と、何々、『我がチャイナー帝国の寛大なる勅命を無視し、祖先が治めた土地を不法支配を続ける行為は天を侮辱する行為である。我がチャイナー帝国はこれを討伐すべくここに宣戦を布告す』……確かにチャイナー思想たっぷりの布告文ですね」

シルヴィア
「……ほほう…我々は盗賊の類いと見られた様だな……1人残らず皆殺しにしてくれよう！（怒）」

アーネリア
「我が国もこれに対する宣戦文を布告する予定です。それと、これは先程届いた日本政府に対する要求文です」

杉下
「『小日本に以下の事を要求する。我がチャイナー帝国を侮辱した当事者及び責任者を明け渡し、謝罪団を天都ホクキンに派遣せよ。

また、賠償として８０億テイルと領土の3分の1を分割せよ』……傲慢に満ちた要求文ですな」

山城
「…いったい何を勘違いしているのやら」

普通ならこの時点で戦争である。

杉下
「私は大使館に戻ります。この様な要求文が出たとあっては日本政府にも通達しなければなりません」

山城
「では、我々も艦隊の方に戻ります。この事を伝えなければなりませんので」

アーネリア
「わかりました。では皆さん…ごきげんよう」

この時の彼女の言葉は……多分、またこうして話そうとゆう意味が込められたものだった。

戦艦天城　会議室

山口
「…この様な要求を受け入れれるか！！」

矢萩
「それは誰もが一緒だから。とにかく落ち着こうね」

怒る山口、抑える矢萩…絶妙たる連携プレイ。

小澤中将
「完全に見下されているな。この要求文もまるでハル・ノートの様な無茶ぶりだな」

宣戦布告文にしろ、要求文にしろ、完全に見下し、対等の「た」の字も無い。

杉下
「失礼します」

山城
「あ、杉下大使。なぜこちらに？」

杉下
「政府から回答がありました。『この様な要求を受け入れる気は無い』と。また『我が大日本帝国は条約に従い、シリルティア王国に協力する』とも」

山城
「出撃・戦闘命令…と受け取っていいんですね？」

杉下
「正式な物はまだですが、それ程時間は掛からないかと」

小澤中将

「うむ…全艦に出撃準備をしておこう」

山城
「わかりました」

次号へ

１１２　宣戦布告（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１３　双方宣戦布告ス

シリルティア王国宣戦布告文

『我が祖先が築き上げた祖国に対し出された根拠無き不当な領土返還要求を全面的に拒否し、祖国の民と独立を守るべく、チャイナー帝国に宣戦を布告する。　シリルティア王国女王　アーネリア』

大日本帝国政府返答及び宣戦布告文

『我が大日本帝国に出された謝罪要求は不当な物であり、軍事力を頼みとした独裁国家が出す物である。また、他国をまるで属国、あるいは劣等国に扱った外交文章は何れ程貴国が賓と礼を欠いているかが充分に解るものである。我が大日本帝国は貴国の傲慢な要求を全面的に拒否する。更に貴国が出したシリルティア王国に対する不当な領土返還を同盟国として拒否し、正式な軍事同盟に従い、シリルティア王国の平和と国民と独立を守るべく、ここチャイナー帝国に対し宣戦を布告する。　大日本帝国元首　豊仁今上天皇　首相　小泉純一郎』

チャイナー帝国天都ホクキンの宮殿

オン

「なんとこれは！　蛮日族は『天皇』なる者を出してきましたぞ！」

コ

「『天皇』だと？　我が皇帝と同等、あるいは上位だと言い張るのか、蛮日族は？」

大臣
「陛下、尻王国（シリルティア王国の事）も小日本も我が寛大なる勅命に従う気は更々無いようですな」

シリルティア王国と大日本帝国からの返答に、最後の御前会議が行われていた。

コ
「揃いも揃って朕に刃向かうとは……身の程知らずの蛮族共め」

オン
「まったくです。蛮族同士が同盟し、２人で掛かってきても、敵わないと知らずに……可笑しくなりますな」

コ
「チョ大将。無敵艦隊の準備は整ったな？」

チョ大将
「は、鎮遠型６隻以下甲巡、防巡、駆逐艦、そして、陛下の名を賜りました、超無敵戦艦の準備も整っております」

コ
「ふむ…よし、今回は朕自ら出よう」

チョ大将
「皇帝陛下自らですか！？」

コ
「うむ。朕自ら出て討伐する事は後々他国にも良い威圧材料になる。それに刃向かった両蛮族は余りにも朕を怒らせた。朕自ら出て成敗する」

オン
「確かに…今回は陛下自ら出て成敗なさるのがよいでしょう。そうすれば勝てる戦の勝率も上がるでしょう。僭越ながら私も同行致します」

コ
「そうゆう事だ。チョ大将。いいな？」

チョ大将
「わかりました」

その頃……ユニオン軍港

旗艦マツシマ艦内

中尉
「わかってはおりましたが……いよいよとなると、不安ばかりが積もります」

ドレイク大将
「仕方ないだろう。我々は今まで陸上支援や海賊退治、訓練程度し

かやっておらん。ほとんどの人間が近代海戦を今回初体験するからな」

司令長官付きの中尉とドレイク大将は長官室で話していた。

中尉
「それに比べて…日本の派遣艦隊は意気軒昂と言うべきか……まるで余裕の様です」

ドレイク大将
「彼らからしてみれば、彼らの先輩達が切り抜けて来た道を歩む様なものだ。それに、彼らは我らに勝る猛訓練を積んでいるからな」

しかも、彼らの先輩達は装備的に一歩劣っていながらにして、錬度と工夫であの鎮遠型に挑んでいるのだ。

中尉
「あ、話は変わりますが…あくまでも噂ですが、陛下が乗られるとは本当ですか？」

ドレイク大将
「耳が早いな…あぁ、そうだ。しかし、当日まではあくまで噂の範囲内にしておけ」

中尉
「それは構いませんが…しかし、危険ではありませんか？」

ドレイク大将
「中尉。我々が負ければ国は終わりだ。そうなればあんな断り方をしたんだ、陛下は間違い無く処刑される。陛下の命はいつも危険と

隣り合わせ……時と場所が違うだけだ」

中尉
「…ですが、しかし！」

ドレイク大将
「それに、そっちの方が士気の上がりが高い。それに付け焼き刃ではあるが、陛下に我々の猛訓練の成果をお見せする事が出来る」

中尉
「……わかりました」

中尉は大人しく引き下がった。
いや、引き下がざるおえなかった…と言うべきか？

戦艦天城甲板

山城
「ふう……」

山城は甲板で少し憂鬱になりながら缶コーヒーを飲んでいた。

小澤中将
「ここに居たのか」

山城
「小澤長官」

後ろから声を掛けられ、敬礼しようとすると「よい」と小澤中将は言った。

小澤中将
「憂鬱そうだな？」

山城
「先程、上から釘を刺されましたから」

小澤中将
「釘？」

山城
「海戦一回で終わらせよ、との事です」

実際、今回の戦費（主に弾薬調達）に緊急国庫（戦争時、或いは大規模災害時等に政府が責任を持って使用する事ができる貯蓄国庫）から出そうとしたのだが、いつの間にやら漏れていたらしく、社民党が噛み付いてきたのである。
もちろん、緊急国庫の使用には事前通知が必要だが、社民党の噛み付きはその事前通知前に行われたので、まあ、ある意味では余計な手間が省けた。
しかし、やれ『侵略戦争に緊急国庫を使うな！』だの『さっさと謝罪すればいいだろう！』と…まあ、何時もの戯れ言を展開していた。
しかし、それもシリルティア王国に出された宣戦布告文と日本に対する要求文が公開されるまでだった。
それでも、『必ず一戦で終わらす』とゆう確約の下であるが。

小澤中将

「自信が無いのかね？」

山城
「あります…ですが、戦は最後までやらないと解りませんから」

実際、どれ程綿密に作った勝利への方程式も、ちょっとした事で崩れるのだから……

山城
「今さらながら、秋山参謀の苦労が解ります」

小澤中将
「それを１８で経験するのだから余計だな」

山城
「だからと言って、今更逃げれるものではありませんし……そんな事をやれば日本海軍の名に傷が付きます。それに…」

小澤中将
「ん？」

山城
「ここまで踏み込んだ以上、我が日本は責任を果たさなければなりません」

小澤中将
「…それだけの覚悟があるのなら、主席参謀を公式化してもよいだろ」

山城

「止めて下さい。只でさえ、艦長職で忙しいのに…それに、参謀の方々が怒りますよ」

小澤中将
「なに、変わり者が1人入るくらい、いちいち目くじらをたてんよ」

山城
「……知りませんよ」

次号へ

１１３　双方宣戦布告ス（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１４　索敵（前書き）

新米士官
「第七艦隊が終わりましたので、こちらを更新いたします！」

山城
「連日で？」

新米士官
「いや…外伝との兼ね合いだから…一筋には…」

天城
「出番が増えるな」

シルヴィア
「なんで天城が出てるのよ！？」

山城
「……喧嘩になる前に、本編をどうぞ」

１１４　索敵

２月１０日（現世界１月３１日）

チャイナー帝国～～シリルティア王国中間海域

戦艦天城艦橋

山城
「飛行船は、その速度上ゆっくり飛びますから素早く情報は集めれません。索敵機を出す必要がありますね」

小澤中将
「うむ…何機出せる？」

山城
「鳥海から一機、飛龍から三機…ですね」

小澤中将
「よし、発進してくれ」

山城
「わかりました。通信長、飛龍、鳥海に打電。『発進せよ』」

通信長
「了解」

山城
「…ふう…二足のわらじは疲れる……では、艦の指揮がありますので」

小澤中将
「うむ、ご苦労」

……非公式とは言え、艦長と主席参謀とを兼ねる人間は大変である。

１０分後……防空指揮所

山城
「変わった事は？」

シルヴィア
「別に無い」

天城
「何かあったら私が呼びに行く…こんな頼り無い娘を放ってな」

シルヴィア
「天城…人に喧嘩をうっているのか？」

天城
「誰もシルヴィアだと言っていない」

シルヴィア
「ここにはどう見ても、私しか娘は居らぬな」

天城
「ほう…娘ではなく、半分男だと思うがな」

山城
「あのさ…こんな狭いところで喧嘩しないで…死人出たらどうすんの？」

しかも、戦闘前だから余計だし…

シルヴィア
「何時か必ず決着をつけてやる」

天城
「そうだな」

山城
「…やるなら、人の居ない所でやってくれ」

これ以上、余計な事に関わりたく無いものですから……

索敵に出たのは鳥海の零式水偵（エンジンなど各所改良）と飛龍の二式艦偵（エンジンを整備のしやすいグリフォンエンジンのライセンス生産版『鷹』エンジンに装換した機体。現世界で生産）を出した。
両機共にレーダーを装備し、広範囲の索敵が可能であった。

この為、僅か４機でも充分に事足りて……今回は、であるが……いた。
またレーダーの装備により、雲量が多い日……ちなみに、この日は雲が多かった……でも、索敵出来た。
この為、最初にチャイナー帝国艦隊を発見したのは飛龍の二式艦偵一番機であった。

通信長
『艦長、二式艦偵より敵艦隊発見の打電！』

山城
「よし！　先手は取った…数は？」

伝声管により伝わってきた報告に山城は最も重要な事を訊いた。

通信長
『鎮遠型６、経遠型（装甲巡洋艦）８、致遠型（防護巡洋艦）１０、駆逐艦多数』

山城
「敵さんは全力出撃だな……やってやろうじゃないの！」

だが……この報告から１０分後、誰もがひっくり返る様な報告が飛び込んできた。

『敵艦隊先頭に異なる艦影あり。三万トンクラスの近代艦艇なり！』

バン！

山城
「小澤中将！　先程の打電は本当ですか！？」

昼戦艦橋のドアを乱暴に開けて入って来た山城。

小澤中将
「あぁ、ほら、テレビにも映っているだろう？」

実は神戸でドック入りしている最中、天城の内装にも手が加えられていた。
その１つが、空きスペースにスクリーンを設けた事だ。

山城
「……確かに」

二式艦偵は爆装庫の場所に偵察用機材を搭載している。
搭乗員も機材の扱いに慣れた現世界の搭乗員だ。
だから、真上から見た映像なのだが、充分に艦艇の違いが解る。

山城
「連装砲塔４基…どう見ても、チャイナー帝国自作の艦じゃない」

軍艦…特に戦艦となると、案外民族性と言おうか、国民性と言おうか…つまりお国柄が出る。
しかし、この艦は雰囲気が違う。山城
「通信長。一番機に高度を下げて、距離をとって平行飛行で横のカメラにしてくれるように命じて」

通信長
「はい」

一度映像が切れた。
しかし、１０分もしない内に再び映った。
しかし、今度は横に艦艇が見える。
そして、映像が例の艦に固定された瞬間、正体がわかった。

山城
「あれは…間違いありません、コロラド型戦艦です！」

シルヴィア
「なに！？　あやつの正体を知っておるのか！？」

付いて来ていながら、会話に参加していなかったシルヴィアが入ってきた。

小澤中将
「それはそうだ…なぜなら、あの艦は我々の敵国艦だったからな」

シルヴィア
「な、何故その敵艦がここにおるのだ！？」

山城
「多分、俺達同様、どこかの世界からこっちに転移してきたんだろう」

小澤中将
「まあ、それ以外はあり得んだろう…だが、問題はそこでは無い」

山城
「えぇ…厄介事が増えました」

次号へ

１１４　索敵（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

115　接敵

天城昼戦艦橋

山城
「…本艦の行動を変更します」

小澤中将
「どの様にだね？」

山城
「本来なら、シリルティア海軍戦艦戦隊の援護をする予定でしたが…コロラド型戦艦がいるとなっては本艦以外に彼の艦を排除出来る艦はいません。本艦は敵艦隊視認後先行し、コロラド型戦艦と一対一で勝負します」

小澤中将
「…他の艦を動かさずにかね？」

山城
「彼らには味方支援の任務があります。穴を開ける訳にはいきません」

小澤中将
「うむ…わかった。そうするか」

山城
「通信長、マツシマに本艦行動変更を通達」

通信長
「了解」

山城
「宮里、聞こえるか？」

宮里
『ばっちり聞いたぞ。伝声管の蓋が開いてからな』

横を見ると、シルヴィアが伝声管の側に居た。

山城
「それならいい。砲術は任せた」

宮里
『了解』

シルヴィア
「別に問題はなかろう？」

山城
「手間が省けて助かったよ」

シリルティア王国艦隊旗艦マツシマ

ドレイク大将

「……」

アーネリア
「…どうかしましたか？」

天城からの電文を受け取ったドレイク大将の沈黙に、気になったアーネリア（今回は士官服装）がドレイク大将に声をかけた。

ドレイク大将
「はい、天城から行動変更の通知です」

既に彼らはコロラド型戦艦の事は知っている……何せ、旗艦マツシマには受信機がある……から、なんで行動変更するかは誰にだって説明不要でわかった。

ドレイク大将
「まあ、敵３万トン戦艦は彼らに任せましょう…我々が手を出したところで、彼らの邪魔になりますし」

幕僚達が頷く。
だいたい、敵は手数も多いのに３万トン艦なんかに相手をしている暇など無い。

午後１時０４分……

オペレーター
『敵艦隊、レーダー近距離探知！！』

山城
「総員戦闘配置！　隔壁封鎖！」

ドタバタドタバタドタバタ！！

駆け足で配置に就く将兵が走り回る。

山城
「…本当に下へ行かなくていいんだな？」

シルヴィア
「当たり前だ。私も海軍軍人だ」

天城
「半人前だがな」

山城
「…それが余計なんです」

実は山城、今までと違い本格的撃ち合いになる為、何度か下に降りるように助言したのだが、頑として拒否していた。
だから、半場諦めて最後の確認をしたのである。

山城
「何が起きても知らないよ」

シルヴィア
「その何か…とは、ここが被弾する事であろう？」

……本当に逞しくなったもので。

シリルティア海軍旗艦マツシマ

ドレイク大将
「陛下、本艦も戦闘配置に就きます。どうか、下の司令塔の方に…」

アーネリア
「お気遣いありがとうございます、ドレイク大将…ですが、私はここに居ます」

これには周りが驚く。

ドレイク大将
「ですが陛下。戦闘となれば何時ここも被弾するか解りませ。あなたは祖国の元首…もし、戦死されましたら、我らは先王に合わす顔がございません」

アーネリア
「…その時は……まず私が御父上に怒られますね」

この言葉を聞いた時、ドレイク大将は今の時点での説得は無理だと思った。
そこで、妥協案を出す。

ドレイク大将
「わかりました。ですが念のためです。本艦が被弾しましたら、大

事をとって司令塔にお降り下さい」

アーネリア
「わかりました」

中尉
「何とか、陛下を司令塔に避難出来る口実を作りましたね」

ドレイク大将
「あの2人に感化されてしまったか…あるいは先代陛下の癖が出てしまったかな…」

そして……両軍は接敵する……

次号へ

１１５　接敵（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

116　陣取り

コロラド型戦艦……もとい、超戦艦コ・キン・トウ艦橋

見張り
「敵艦隊発見！！」

コ
「ほう…沿岸戦闘を捨て、討って出て来たか…むざむざ死にに来たようだな」

オン総大臣
「まったくです」

チョ大将
「……」

ある意味楽観論を語る2人の隣で、チョ大将は妙な違和感を感じていた。
確かにコ皇帝が言う通り、敵は沿岸戦闘の方が有利だ。
何故なら、自分達の領域内で戦うからだ。
しかし……その優位を捨て、討って出て来た…となると、納得がいかない。
よほどのバカか勝てる自信が無いとこうはならない。そう思いつつ、望遠鏡で敵を見た瞬間、内心驚いた。何故なら、敵艦隊の先頭を走る艦はどう見ても、この艦に大筋似ているからだ。

チョ大将

「陛下、ご覧下さい」

コ
「うむ」

とりあえず、陛下に見てもらう……もしかしたら、自分の見間違いかも知れないと思ったからだ。
が…そんな物は直ぐに否定された…

コ
「なんだ、あれは!?　オン総大臣、尻王国にあんな戦艦はあったか!?」

オン
「え……!!　バカな!?　あの戦艦がなんでここにいるんだ!?」

チョ大将
「総大臣!　『あの』とはどうゆう事ですか!?」

オン
「え、あ、い、いえ…その…」

何か不味いのか、言葉の歯切れが悪い。

コ
「オン総大臣…貴様、何を知っている?」

オン
「は、はい!　あ、あれは蛮日族の戦艦でして…」

コ皇帝の口調が変わり、慌て話す。

チョ大将
「オン総大臣！　それはつまり、あなたは正確な報告を怠ったとゆう事ですか！？」

オン総大臣
「ば、馬鹿者！　あの時、蛮日族の艦隊は『親善艦隊』とされていたからだ！　親善艦隊なら一時的だろうと…」

チョ大将
「それでも！　正確な報告を…」

コ
「もうよい！　何があろうと、我が艦隊に勝てる訳が無いのだ。叩き潰してやれ」

この一言で、チョ大将とオン総大臣の言い争いは強制終了された。
しかし、チョ大将の違和感は拭い去れなかった。

天城防空指揮所

山城
「機関長、２２ノットに速度上げー！　通信長、他艦に伝達、『我、先行ス。他艦は作戦通リ！』」

機関長・通信長
『『了解』』

伝声管を通じ、艦の各所に指示を伝達する山城。

シルヴィア
「…敵を誘う気か？」

天城
「近場でやると、お前の艦隊も巻き込まれるからな」

水兵
「敵コロラド型、増速！」

山城
「誘いにのったな…宮里！　準備は良いな！？」

宮里
『こちら射撃指揮所！　鎮遠のオンボロと撃ち合うより、わくわくするよ！　操艦は頼むぜ！』

山城
「おう、任せとけ！　そっちも、日本海軍砲術の腕を見せてやれ！」

シルヴィア
「……妙に燃えておるな」

天城
「お前も一艦の艦長になれば解る」

チョ大将
「艦長！　艦の速度を上げろ！」

艦長
「わかりました」

天城の増速に気付いたチョ大将は直ぐに速度を上げさせた。
明らかに敵…大日本帝国海軍の戦艦…は我々を誘い出している。
しかし、このまま放置しても、何の解決にもならない。

水兵
「敵艦、左舷に進路変更！」

チョ大将
「艦長、本艦も左舷に進路変更！」

旗艦マツシマ

士官
「天城、右舷にターン！」

ドレイク大将
「全艦に通達、旗艦のターンを合図に左舷にターンせよ」

通信士官
「わかりました」

アーネリア
「左へ？」

ドレイク大将
「天城はあの戦艦から我々を引き剥がす為に右舷にターンしました。ならば、我々は左舷にターンして、距離をとります」

にわかに忙しくなった吹きさらしの艦橋で説明していた。

士官
「敵艦隊、左舷に進路変更！」

これを聞いたチョ大将から艦隊指揮を継承していたキム・イル・ソン中将は指示を出した。

キム中将
「本艦隊も左舷へ進路変更！　敵艦隊を殲滅せよ！」

さすがに先頭の戦艦には驚いたが、超戦艦が相手をするから心配は無い。
あとはひ弱なシリルティア艦隊を片付ければいい……とキム中将は思っていた。しかし……まだ後ろの敵に気付いていなかった。

シルヴィア
「山城！　我が艦隊は反対側にターンしたぞ！」

山城
「よし…全砲塔砲戦用意はいいな？」

宮里
『当たり前だ！』

小澤中将
『こちら、艦隊司令の小澤だ。指揮は全て山城艦長に任せる。思う存分やってくれ』

山城
「わかりました！　思う存分やらせていただきます！」

シルヴィア
「あ、敵艦が横に並んだぞ！」

山城
「よし…海軍旗と国旗を相手に見える様に掲揚！　発灯信号で艦名を名乗ってやれ！」

次号へ

１１６　陣取り（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１７　射撃開始

超戦艦コ・キン・トウ艦橋

コ
「忌々しい蛮族め！　成敗しろ！」

コ皇帝は激怒していた。
理由は簡単…これ見よがしに掲揚された２つの旗と発灯信号。
上は白地の真ん中に赤丸を描いた旗。
下は太陽をイメージした旗。
そして、発灯信号の内容は『我、アマギなり』とゆう簡単なもの。
しかし、コにとっては自分が侮辱されたと思ったらしく…そう言った意味なら山城の作戦勝ち…、『あの目障りな蛮日族の艦を沈めろ！』と叫び出した。

チョ大将
「艦長、あとどれぐらい掛かる？」

艦長
「あと少しで、各砲塔の準備完了します」

天城防空指揮所

山城

「全左舷対空銃座及び同高角砲座に告ぐ。総員、主要装甲区画内に退避せよ！」

手元にある伝声管に叫ぶ山城。
伝達が伝わったのか、対空銃座・高角砲座に居た将兵が艦内に入る。

士官
『総員、退避完了！』

山城
「よし…宮里！　いいか！？」

宮里
『何時でも言ってくれ！』

山城
「さて…先ずは試射だ…撃て！！」

ズガーーン！！

五基の連装砲塔の内、五門の左砲が火を吐いた。
試射は交互一斉打ち方、夾叉が出た瞬間、斉射（一斉射撃）に移行する。

水兵
「だんちゃ～く、いま！」

ズシャーン！

水兵
「全遠！」

宮里
「ち、飛び過ぎだ…修正まだか！？　左砲は装填急げ！　次は右砲！」

グイーン……

モーター音を響かせながら次に撃つ右砲が仰角を調整している。

下士官
「右砲よし！」

宮里
「撃て！」

ズガーーン！

ヒューーウ……

水兵
「だんちゃ～く…いま！」

ズシャーン！

水兵
「先よりも至近…されど全遠！」

宮里
「敵だって撃ってくるぞ！　修正急げ！　左砲は装填出来たか！？」

下士官
「装填完了。仰角修正中」

慌ただしい射撃指揮所であった。

シリルティア王国海軍旗艦マツシマ

士官
「飛行船より、天城発砲！！」

ドレイク大将
「始まったか…砲術参謀、距離は？」

砲術参謀
「距離１万メートル！」

士官
「後方より、高速で日本艦隊接近！」

通信士官
「飛龍より、攻撃隊出ました！」

次々に入る報告に、ドレイク大将は機は熟したと感じた。

ドレイク大将
「本艦隊は同航砲戦にて敵を殲滅する……用意はいいな！？」
全員
「「「「「「「「「「「「「「はい！！」」」」」」」」」」」」」
」
ドレイク大将
「全艦砲戦始め！　祖国の未来を死守せよ！」
艦長
「撃て！」
ドドーン！　ドドーン！
二基の連装砲塔を手始めに、側舷の１５ｃｍケースメイト副砲も一斉に射撃を開始した。
士官
「弾着します！」
ズシャーン！ズシャーン！
通信士官
「飛行船より、一番砲塔は３０メートル、二番砲塔は５０メートル、敵一番艦手前で着弾！」
無線により、飛行船からの着弾観測を受け取った通信士官が手元の伝声管に叫ぶ。

「仰角修正急げ！」

「敵より早く主砲を当てろ！」

各砲塔の砲塔長が砲塔内で檄を飛ばす。

ズシャーン！

水兵
「第３射、全近！」

宮里
「全近！？　間違い無いな！！？」

水兵
「間違いありません！」

宮里
「よし！　ここまで待たせたんだ！　次は夾叉だぞ！　右砲、用意いいか！？」

下士官
「用意よし！」

宮里
「撃て！」

ズガーーン！

ヒューーウ……

ズシャーン！！

水兵
「きょ…夾叉！！」

宮里
「一斉射撃に移行！　右砲装填急げ！」

ウィーン……ガゴン！

下士官
「全砲塔右砲、装填完了！」

宮里
「全砲一斉射撃！　撃て！」

ズガガーーン！！

……天城、本領発揮を開始。

次号へ

１１７　射撃開始（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

118　鎮遠型轟沈

超戦艦コ・キン・トウ艦橋

ヒューーウ……

ズシャーン！！

コ

「ええい！　何をしとる！　さっきから一方的に撃たれているだけではないか！？」

チョ大将

「艦長、準備は！？」

艦長

「いま、整いました！　各砲塔、撃て！」

ドパーン！

先ず第一砲塔の４０ｃｍ砲が火を吹いた。

しかし、そのあとは各砲塔の判断による砲撃であった。

天城防空指揮所

山城

「う～ん…そうそう簡単には当たらないか…」

一斉射撃に移行した第一斉射は再び夾叉を出しただけであった。

天城
「なに、まだまだ一回目。腰さえ落ち着けば必ず当たります」

それを横で聞くシルヴィアは一瞬不機嫌な顔をするが、突然の砲声に直ぐに叫んだ。

シルヴィア
「山城！　敵艦発砲！」

山城
「向こうも撃ってきたか…案外遅かったな」

ヒューーウ……

ズシャーン！
ズシャーン！

シルヴィア
「……着弾が…2つ？」

山城
「…まさか…各個砲塔射撃？」

この時、山城は予想はしていたが、現実に出されると驚くしかなかった。
なぜなら、測距儀以下の機材を使用した照準・統制射撃が世界中の

海軍で常識になったのは第一次大戦以降の話だ。
無論、それに至る経過は海軍士官なら海戦史などの授業で知っている。
しかし、コロラド型に日露戦争時の射撃方法では真の力は発揮出来ない。
この後、天城とコロラド型の運命を分けたのは皮肉にも指揮を執る人間が扱いを知っているかどうかだった。

その頃……鎮遠

ヒューーウ……

ズシャーン！ズシャーン！

キム中将
「くそ、敵艦の主砲もいやに正確だな」

鎮遠以下チャイナー帝国艦隊の指揮をチョ大将より任されたキム中将は呟いた。何せ、直ぐ目の前に水柱が立つ程だ。
また、副砲に関しては既に何発か命中している。
その時……

ゴワーン！！

キム中将
「どうした！？」

水兵
「三番艦公遠に敵弾命中！」

旗艦マツシマ

吹きさらしの艦橋に通信士官が慌て上がって叫んだ。

通信士官
「ハシダテより打電！　主砲弾、敵三番艦に命中！！」

士官達
「「「「「おぉ！！」」」」」

ドレイク大将
「時間は掛かりましたが、幸先が良いですな」

アーネリア
「…はい」

しかし、敵は六隻、対しこちらは三隻……主砲門数は拮抗、副砲門はシリルティア側に俄然有利……だが、まだまだ全体的には先は見えない。
その時……

水兵
「上空、日本海軍機編隊！」

見ると、何機かがマツシマの上空を通過した。

アーネリア
「心強い味方が参りましたね」

安心した様に呟いた。

斎藤
「雷撃隊突入！」

ギューン……

６機しかいない雷撃隊が２機づつに分かれ、六隻の鎮遠型の内、四番、五番、六番艦に狙いを絞る。

斎藤
「よーそろ…よーそろ…てぇ！」

カチッ

ザブン

シャーー……

ホーミング魚雷の為、１０００メートル手前で魚雷を投下する。

ガガーン！ガガーン！ガガーン！

搭乗員
「やりました！　全部命中！」

斎藤
「当たり前でしょう。相手は鎮…」

ズドドドドン！！！

斎藤の言葉を掻き消す程の大爆発音が響いた。

ドレイク大将
「どうした！　何が起こった！？」

士官
「敵六番艦、轟沈しました！」

見ると、確かに敵六番艦が居た位置から盛大な黒煙が上がり、海上には既に敵六番艦の姿が無い。
これには誰もが唖然とした。
沈んだ原因は海軍士官なら誰でも解っていた。
しかし、初めて『轟沈』を見た為に誰もが呆然とするしたなかった。

ドレイク大将
「対魚雷防御が無いとは聞いていたが……恐ろしいものだ」

1人、ドレイク大将がポツリと呟いた。

キム中将
「バ、バカな…」

鉄の鳥が降りてきて、魚雷を落とし、被雷しただけで無く、六番艦鎮京が轟沈した……なんて、現実に見せられても、信じられなかった。
まあ、轟沈に関しては簡単で、対魚雷防御の無い横っ腹…しかも、主砲直下…に一発が命中し、弾薬庫が爆発した……とゆう典型的な話だ。
しかし、キムが信じれなかったのは『鉄の鳥』よりも魚雷に関してだ。
何せ、この頃の魚雷は日本海軍で『自走水雷』と呼ばれ、速度は当時としては速かった（２８ノット）が、衝撃に弱く、駆逐艦以外の艦艇が船体固定発射管だった理由が、この衝撃に対する弱さだった。
しかし、目の前の光景はその『常識』を引っくり返された様な物だった。
しかも……

士官
「後方より、敵増援!!　大型艦１、中型艦４…２０…いえ、２５ノット以上で接近!」

キム中将
「な、なんだと!?」

次号へ

118　鎮遠型轟沈（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１１９　日本隊突入

後方から接近して来た艦艇…もちろん、これは派遣艦隊の後方隊、鳥海、磯波、浦波、綾波、敷波の５隻。ちなみに、水兵が『中型艦』と言ったのは仕方がない。

なぜなら、日露戦争時の駆逐艦は約４００トン程度、吹雪・綾波型が約１６００トン程度…４倍の大きさである。

しかし、大きさよりも速度は速い。

鳥海は３５ノット、吹雪・綾波型は３８ノットの最高速度を発揮出来る。

流石に今回は抑えたが、それでも３０ノット以上の速度で進撃して来た。

そして……先に蹴散らしたのは駆逐艦だった。

シリルティア王国海軍の駆逐艦隊と撃ち合っていたチャイナー帝国海軍駆逐艦隊に磯波、浦波、綾波、敷波の４隻が割り込んだ。

１２，７センチ砲を撃ちつつ、その船体で割り込んで来るもんだから、散々である。しかも、近距離なら４０・２５ｍｍ機銃を船体に向け駆逐艦から撃つ。

日露戦争時、駆逐艦の主砲は８ｃｍ単装砲２～３基、対し、第二次大戦時は１２，７ｃｍ砲以上、搭載方によるが５門から６門……はっきり言って正面から戦っても勝ち目が無い。

また、シリルティア王国海軍の方もこれを見逃す筈も無く、とにかく備砲を乱射した。

中でも、広瀬大佐指揮の駆逐艦４隻は伝を使って手に入れた百式２５ｍｍ機単装機銃をチャイナー帝国駆逐艦に向けて乱射、接近戦で敵駆逐艦を抑え込んだ。

そうやって駆逐艦が暴れている脇を鳥海は通過し、防護巡洋艦に２０，３ｃｍ主砲を向けた。

防護巡洋艦同士の撃ち合いは少しシリルティア側の有利に傾いていた。
ロケット弾を装着していた紫電改・烈風が防護巡洋艦に襲い掛かったからだ。
既にロケット弾攻撃が艦艇攻撃において効果がある事は証明されている。
そして……これが襲われた方には堪ったものではなかった。
ロケット弾が発車されると、露天に近い上甲板の主砲が沈黙する…
そこにシリルティア海軍の防護巡洋艦の砲撃が加わる。
1ヶ月とゆう短期間ながら、必死に猛訓練を積ませた結果は出ていた。
しかも、各艦将兵には既にアーネリア陛下が旗艦マツシマの艦橋に居る事を知っていた。
この為、全将兵が『恥ずかしい戦いは出来ない！』『ここで負ければ、祖国や陛下に申し訳がたたない！』…と心を1つにして戦っていた。
対し、チャイナー帝国将兵は既に勝った気でいた。
そして、これは時として心の脆さ作り出す。
余りにも激しいシリルティア海軍の砲撃に、簡単に勝てると思っていたチャイナー帝国将兵は戦意が鈍っただけで無く、意志の強さに圧倒されていた。
こう言った意味では戦とゆうのは時としてやってみないと解らないし、最後まで解らない。
そして……皮肉にも、チャイナー帝国将兵の練度は日清戦争の清帝国将兵の様に低かった……。

そこに現れたのが鳥海だった。
鳥海は２０，３ｃｍ主砲を防護巡洋艦に向けると一斉射撃を加えた。
これに驚いたのはチャイナー帝国側。
２５ノット以上の速度、戦艦並みのデカさ、１０門の主砲……どれをとっても防護巡洋艦には不利だった。
そして……砲弾は易々と装甲を貫き、チャイナー帝国防護巡洋艦は直ぐに大破・中破の損害を１０隻に与えた。
この内、大破した２隻が爆沈している。
それを見た鳥海は残りをシリルティア海軍の防護巡洋艦８隻に任せ装甲巡洋艦の方へ向かった。
あと……一方的な展開だった。
防護巡洋艦の船体固定魚雷発射管から必殺の魚雷が発射され、被害対応に忙しいチャイナー帝国防護巡洋艦を襲った。
詳細は割愛するが、結果としては、チャイナー帝国は防護巡洋艦２隻は何とか脱出したものの、残り６隻は転覆沈没、あるいは浸水多過・火災鎮火失敗などの理由で放棄された。
そして、駆逐艦を撃退した４隻も、装甲巡洋艦の方へ向かった。

鎮遠

キム中将
「馬鹿な…我が無敵の艦隊が…僅か５隻に掻き回されているだと！？」
既に駆逐艦隊、防護巡洋艦隊が壊滅的打撃を受けている。
ガガーン！！

キム中将
「どうした！？」

士官
「敵主砲弾命中しました！」

水兵
「鉄の鳥、また来ました！」

次号へ

１１９　日本隊突入（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２０　次元差故の圧倒

天城防空指揮所

水兵
「だんちゃ～く、いま！」

ズシャーン！

山城
（…水柱は…９つ！）

ガガーン！！

水兵
「敵船体中央部に命中！」

シルヴィア
「おぉ！」

天城
「よし！」

周りが喜ぶ中、山城は静かだった。
確かに命中は嬉しいが、敵に与えた打撃を考えると（心理的なものは別として）それほどダメージは無いと考えた。
これが主砲の電路を途絶させていたとしても、砲塔照準・砲撃の敵には何の意味も無い。
まあ、口には出さないが……

射撃指揮所

宮里
「くそ、船体中央に当たっても仕方無いつーの！」

下士官
「ですが、命中しただけマシでは？」

宮里「そりゃ、空振り続くよりはマシだが…装填出来たか！？」

下士官
「…はい、完了です」

宮里
「よし、撃て！」

ズガーーン！

超戦艦コ・キン・トウ艦橋

ヒューーウ……

ズシャーン！

コ
「ええい、何をやっておる！　相手は蛮族だぞ！　何故先に当てられておる！！」

オン
「チョ大将、大丈夫だろうな！？」

チョ
「……」

怒るコ皇帝、慌てるオン総大臣、黙るチョ大将……。チョ大将は砲戦開始から持つ違和感が少しずつ解ってきた。
どうも、自分達と次元が違う…主砲の扱い、艦の扱いが手慣れている。

チョ大将
（まさか、日本人は……いや、そんな訳が…）

否定は出来ても、完全には否定出来ないチョ大将だった。

宮里
「ええーい！　ちんたらやってる暇は無いんだぞ！」

第４斉射が当たらなかった事に業を煮やし叫ぶ宮里。

下士官
「砲術長、こうなれば砲弾を変えましょう！」

宮里
「９１式改から出撃前に受け取った試制弾にか？」

下士官
「はい！」

宮里
「……こちら射撃指揮所、防空指揮所、どうぞ」

山城
「試制弾を？　別に構わんが…なんで俺の許可を？」

伝声管を通じて話す宮里と話す山城。

宮里
『試制弾を受け取る時に担当者から言われたんだよ。『使用に際しては艦長の許可を取るように』ってな！』

山城
「……なんじゃそりゃ？」

宮里
『俺だって、砲弾を変えるぐらい現場の判断だと思うんだがな……それこそ、初速が増える訳でもあるまいし…』

山城
「まあ、許可は出したぞ」

宮里
『了解』

宮里
「主砲の装填は終わったか？」

下士官
「はい。ついでに次から試制弾を使う事も通知しました」

宮里
「早いな…よし、撃て！」

ズガーーン！

ヒューーウ……

ズシャーン！

ガガーン！ガガーン！

艦長
「ひ、被害を報告しろ！」

水兵
「第三砲塔被弾！　砲身損傷…発射不能！」

士官
「後部艦橋下部に被弾！」

入ってくる被害報告を近くで聞いたチョ大将は不味いと感じた。
敵は5基10門…対し、こちらは4基8門…さっきの報告から察するに、3基6門と重大な火力低下である。こちらは各個砲塔射撃だから対応はバラバラ…対し向こうは一斉に砲撃……無理だ、1基の砲塔で敵戦艦と戦っている様なものだ。

旗艦マツシマ

士官
「敵装甲巡洋艦隊、航空攻撃により轟沈1、沈没2、大破5」

ドレイク大将
「やはり、上から降ってくる爆弾や砲弾に対する防御は、今の我々には無いか」

第一次攻撃隊の急降下爆撃隊と第二次攻撃隊の攻撃を受けたチャイナー帝国軍装甲巡洋艦隊は一身に受ける羽目になった。
特に第二次攻撃隊の急降下爆撃隊は装甲巡洋艦の1隻を轟沈させている。
また、沈没した2隻の内1隻は被弾による浸水が原因で、1隻は被弾後の魚雷攻撃によって止めを刺された。

水兵
「鳥海及び駆逐艦2隻、敵4番・5番艦と交戦！　駆逐艦2隻が装

甲巡洋艦隊の援護に回りました！」

避雷した４番艦・５番艦は浸水の為かノロノロと進んでいたところに鳥海、磯波、浦波が襲い掛かり、綾波、敷波が装甲巡洋艦隊の援護に回った。

次号へ

１２０　次元差故の圧倒（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２１　再び滅びる北洋艦隊

鳥海は敵４番艦、磯波、浦波は敵５番艦に狙いを定めた。
もちろん、それは当の本人達も解ってはいるだろう。しかし、あまりにも状況が悪かった。
４番艦・５番艦共に威力は弱いとはいえ、魚雷を食らっている、しかも、対魚雷防御が無い…浸水で大変な事になっているだろ。
鳥海は２０，３ｃｍ主砲、磯波、浦波は６１ｃｍ酸素魚雷を一本づつ発射した。

シャーー……

ガガーン！ガガーン！

…第二次大戦当時の戦艦が僅か数本で半身不随に出来る威力をもつ酸素魚雷２本は鎮遠型には余りに威力が有りすぎた。
数分後…鎮遠型５番艦は真っ二つになって沈没。
４番艦は……鳥海の放った２０，３ｃｍ弾が前甲板の１５ｃｍ副砲塔下の弾薬庫に船体を貫いて爆発……舳先から沈没した。

装甲巡洋艦隊を援護する綾波、浦波は速度を活かし、装甲巡洋艦隊の前に出ると先頭の２隻に向けこれまた一本づつ発射した。
ホーミング魚雷とゆう事もあり、それぞれ狙った艦を襲った。

ガガーン！ガガーン！

あっという間に命中し、浸水を起こす２隻…いきなりの事に後続が

対応出来ずに接触、対応出来ても、隊列を乱す。
先頭の3艦は悲惨である…動け無いところにシリルティア海軍の装甲巡洋艦が次々に砲弾を浴びせる。
結局この3艦は被弾多数で沈没した。
しかし、それでも装甲巡洋艦はまだ5隻残存している。
しかし、そこに第三次攻撃隊が到着。
斎藤美保隊長は足止めをするため、戦闘機隊・爆撃隊に攻撃を開始させた。
受けるチャイナー帝国は散々である。
上から降ってくる爆弾で機関が停止したり、浸水が発生する。
ロケット弾で無事な主砲や砲座が目ざとく狙われ沈黙する。
頃合いと見た斎藤隊長の雷撃隊が突入する。
残存ながら、これを阻止する方法は無い。
これが低速の複葉雷撃機なら副砲を撃てばよかっただろう、しかし、相手は高速の単葉機である。
あっという間に被雷…内1隻が沈み始めた。
先の3隻を片付けた装甲巡洋艦が止めとばかりに撃ちまくった。
また、後方から駆け付けた駆逐艦が至近距離まで近付き、魚雷を発射した。

鎮遠

キム中将
「……バカな…」

余りの事に絶句するキム中将。
最強を誇ったチャイナー帝国艦隊が……誰もが勝てると挑んだシリルティア王国海軍と日本海軍により、艦隊は壊滅していた。

どの艦も一方的に撃たれ、その船体を波間に沈めている。
最強の筈の鎮遠型は既に3隻が沈没…いや、二番艦定遠は傾き、三番艦公遠は小爆発を繰り返している。

士官
「中将！　これ以上は！」

キム中将
「……右舷に９０。回頭！　目標敵旗艦！」

士官
「中将！？」

キム中将
「帰っても処刑されるだけだ！　行け！」

旗艦マツシマ

士官
「敵一番艦回頭！！」

ドレイク大将
「逃げるか？」

士官
「……いえ！　真っ直ぐこちらに突っ込んで来ます！」

アーネリア

「どうゆう事ですか？」

ドレイク大将
「本艦を道連れに刺し違えるか…あるいは本艦に乗り込む気か……どちらにしろ、放置する訳にはいけません」

その言葉に答えるが如く、マツシマの主砲・副砲が吼える。
また、敵一番艦の意図に気付いた僚艦イツクシマ、ハシダテの主砲・副砲が吼える。
更に鳥海、磯波、浦波も加わり、鎮遠に向けて撃ちまくる。
これにには鎮遠も耐えられなかったか鎮遠は大爆発を起こし沈没した。

天城防空指揮所

ヒューーウ……

ズシャーン！

シルヴィア
「キャッ！」

山城
「とっ」

ボフ！

至近弾で揺れた防空指揮所でバランスを崩してしまったシルヴィアをバランスを保った山城が抱き止める。

山城
「大丈夫か？」

シルヴィア
「あ…あぁ！　大丈夫だ！　大丈夫だぞ！」

山城が顔を覗き込んで見ると、その視線に慌てるシルヴィア。

山城
「それならいいけど」

シルヴィア
「う、うむ！（はあ～、びっくりした～～）」

その光景を天城はニヤニヤしながら見ていたが、直ぐに真顔に戻る。

天城
「至近弾ですな」

山城
「えぇ、これ以上伸ばすと面倒だ」

天城
「なら、もうそろそろ」

山城
「今頃、砲塔は試制弾を装填中でしょう」

射撃指揮所

下士官
「全砲塔、試制弾装填完了！」

宮里
「よし！　いいか、なんだか実験に使われたような気がするが、とにかく当てろ！　３斉射分しか積んで無いんだからな！」

『『『了解！』』』

宮里
「撃て！！」

ズドドーン！

……さて、この試制弾だが、今まで日本海軍が改良を加え使い続けていた『９１式徹甲弾改三』の限界を見た海軍が技術進歩を背景に新たに開発した物であり、後に６６式徹甲弾として採用された物だった。
ちなみに、天城に配備された理由は主砲口径が実験に使った陸奥と

一緒（４１ｃｍ）であり、異世界情勢が不安定であり、使ってくれればどうなるか解るから儲け物……とゆう感が上層部にあったからだ。
まあ、確かに使っただけの事はあった……なぜなら……

超戦艦コ・キン・トウ艦橋

コ
「オン総大臣！　貴様のせいだ！」

オン
「は、はい！？」

コ
「貴様がちゃんと蛮日族の派遣艦隊の事を報告しなかったからこんな事になったのだ！」

オン
「そ、そんな無茶苦茶な！」

…無茶苦茶かどうかは置いとくとして……例え正直にオンが話したとしても、果たしてコ皇帝以下周りが信用しただろうか？
多分、この答えは『否』であろう。

コ
「ええい、黙れ黙れ！　帰ったら貴様は処刑だ！」

チョ大将

「陛下！　総大臣！　今は落ち着いて…」

水兵
「て、敵弾きます！！」

ガガーン！ガガーン！ガガーン！

……この時、コロラド型には3発が命中した。
しかも…神様の悪戯か、この3発は艦の命脈に関わる箇所に命中している。
一発は船体後部機関室…一発は第2砲塔…一発は艦橋に飛び込んだ。
特に第2砲塔に命中した試制弾は楽々と砲塔装甲を貫き、弾薬庫の床に突き刺さった。
後は……言わずとも解ろう…

ズガガガガガガン！！！

水兵
「敵コロラド型轟沈！！」

シルヴィア
「……轟沈？」

山城
「…どうな試制弾を載せたんだ？」

盛大な黒煙を上げながら波間に沈むコロラド型を唖然としながら見るシルヴィアと、試制弾の威力に内心驚く山城だった。

４時１６分……チャイナー帝国艦隊、総旗艦コ・キン・トウ、艦隊旗艦鎮遠沈没…チャイナー帝国艦隊敗北によりシリルティア艦隊・日本艦隊の勝利に終わる。
ちなみに……チャイナー帝国艦隊残存艦…防護巡洋艦２隻、駆逐艦１３隻のみ。

次号へ

１２１　再び滅びる北洋艦隊（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２２　講和へ（前書き）

新米士官
「あっはっはっは！　ざまあ見やがれ～！」

山城
「…どうしたんですか、作者は？」

福本
「中国との首脳会談がドタキャンされたから…作者曰く「これで『平和的解決』なんて言えないね！」…って」

山城
「政府もバカにされましたか……いや、本物のバカ？」

新米士官
「こうなりゃあ、ビデオを未編集で世界に公開してしまえ！　向こうは話し合いで解決する気はないしね～」

122　講和へ

シリルティア王国海軍、チャイナー帝国海軍に大勝利！！

このニュースにシリルティア王国民が湧かない訳が無い。

海軍戦力は向こうが圧倒的であり、一発勝負であった……しかし、海戦は敵側に一方的に大損害を与え、味方の沈没は無しとゆうパーフェクト勝利であった。

これに国内はたちまちお祭り騒ぎとなった。

これは艦隊が入港すると最高潮に達した。

しかし、これに対して直ぐに冷静になったのが外務部と内政部であった。

やはり、いくら敗れたとは言え大国……次はどんな手を使ってくるか解らないから外務部は冷静になった。内政部が冷静になったのは日本からの忠告だった。

それは熱狂的になった国民が講和条約に不満をもち日比谷焼き打ち事件の様な事態を起こさないとは限らないからだ。

もちろん、この可能性は低いだろうと思っていた。

しかし、油断が出来ないのが世の常である。

だが、チャイナー帝国は意外にもあっさりと（外交通信で）２月１６日（現世界２月６日）に講和を申し入れてきた。

この時になってようやくシリルティア王国・大日本帝国も沈めたコロラド型に元首コ・キン・トウ皇帝とオン・カ・ホウ総大臣が乗っ

ていた事を知ったのである。
この事は直ぐに杉下大使により、日本政府へと通知された。
これを知った福本伊吹次官は「まるで日清戦争の時みたいな皮肉だ」と言ったそうだ。
とにもかくにも、相手が講和したいと言って来たのだから、海戦をやっただけの事はあった訳だ。

2月20日、ユニオンからチャイナー帝国に向かった講和交渉団は護衛として日本海軍から鳥海、シリルティア王国よりマイヅル、防護巡洋艦2隻、そして陸戦隊を連れ、同28日に首都ホクキンに到着、直ぐ様交渉に入った。
まあ…交渉といっても、最早こちらの要求をチャイナー帝国が応じる…となっている。
結局、3月2日には『ホクキン条約』が結ばれ、講和となった。
内容は以下の通り。

1　シリルティア王国の領土承認及び不可侵。

2　シリルティア王国・大日本帝国対し賠償金100億テイル（シリルティア　8対2　日本）を支払う。また、日本への支払いは金塊とする。

……まあ、比較的に認めやすいものである。
ちなみに、領土の割譲は貰っても負担増でしなかったから求めなかった。
また、日本への支払いが金塊なのはまだ為替金額が定まっておらず、換金出来る物にしたからだ。
それに、賠償金はいくらでも良いとゆうチャイナー帝国側に相乗り

する形で１００億テイルとした。（何故か向こうはホッとしていたが…）

締結１ヶ月後に届いた賠償金はシリルティア王国では艦船の修理、戦死者・戦傷退役者の慰労金、新造艦の建設費用などに回された。
また、日本政府は受け取った２０億テイルを金相場に従い換金、消費分＋１０億テイル分を緊急国庫に返納した。
また、残り各省庁に閣僚・内閣管理の下、分配された。
そんな中、チャイナー帝国は滅びの道を歩んだ。
コ皇帝の後継者争い、地方の反乱、天災……等により賠償金を払っても余裕のあった国庫は急速に無くなり、１５年後には滅亡した。
そう、それは日清戦争や義和団事件により滅びた清帝国の様にだった……

次号へ

１２２　講和へ（後書き）

ご意見ご感想んお待ちしております。

１２３　山城少佐の処罰（前書き）

早く出来たので遅くながらも更新致します。

１２３　山城少佐の処罰

３月５日（異世界３月１５日）

帝都　国防省海軍次官室

福本（伊吹）
「わざわざ持って来てもらうのはいいが……人を使うと言う事を知らないな～」

山城
「何を言ってるんですか…下手したら、自分は今頃幽霊ですよ？」

福本（伊）
「だからだな…何度も言ってるだろう、「確かに独断専行はあったが、内政干渉とは言えない」って」

山城
「…そのせいで、衆議院で大事になったんでしょう？」

福本（伊）
「あぁ、偽物弁護士福島と喧嘩しただけだ」

山城
「社民党と一部野党議員の間違いでしょう！」

福本（伊）

「真っ赤の奴等に興味はない」

山城
「はぁ～…」

……実は『ホクキン条約』が結ばれた日、山城の『独断専行及び内政干渉』の査問委員会判決日であった。結局、判決（？）としては「独断専行はあったが、内政干渉の証明に至らず、あったとしても善意的干渉」…と、ある意味ツッコミどころ満載だった。
その後、その足で福本次官の所に行き「大丈夫なんですか？」と訊くと……

「大丈夫大丈夫、何せ、君の為にグロワール宰相やアーネリア陛下まで全部話してくれたから」

……と、言われては納得した。
まあ……その後の国会放送を見た瞬間、大丈夫か？と再び思ったが……。

福本（伊）
「まあ、君は作戦を立案、コロラド型が出て来ても冷静に艦を指揮し、海戦を勝利した……これで罪状は±0だ」

山城
「だからと言って、罰が反省文と減給1週間は軽すぎでしょう…普通なら1ヶ月＋αで…」

福本（伊）
「異世界に回せる人間が少ない中、貴重な長期滞在者の行動を縛れ

と？」

山城
「いや…なら代わりは…」

福本（伊）
「人事を動かすのは簡単だが、右から左にはいかんぞ」

山城
「まあ、そうですが…」

福本（伊）
「それに、小澤中将から「うちの主席参謀を長期間離すのは止めてくれ」と要望が…」

山城
「うわぁ～！　主席参謀とか云々は非公式ですよ！」

福本（伊）
「それはわかっている」

山城
「よ、よかった～～（´Д`）」

福本
「だから、公式に小澤中将の主席参謀にした」

山城
「次官殿！！（ ゜ロ ゜）」

福本（伊）
「いいじゃないか、名将の下で将たる勉強が出来るぞ？」

山城
「その前に過労死してしまいますよ！！」

福本（伊）
「そう簡単に過労死なんてしないよ～」

山城
「他人事だからって、涼しい顔すんなー！！」

福本（伊）
「多分、今頃は杉下君経由で承認の通知が…」

山城
「出すな！！　その前に他の参謀方々から反対されますよ！！」

福本（伊）
「大丈夫だと思うがね～」

山城
「大丈夫な訳ないでしょう！！　火種を作るつもりですか！？」

福本（伊）
「まあ、先ずは落ち着きたまえ」

山城
「誰の所為（せい）だと思ってるんですか…」

呆れつつ、冷静になる山城。

福本（伊）
「そもそも、なんで君を天城艦長に据え、今回、小澤中将の主席参謀認定をしたと思う？」

山城
「天城の件は適任者がいなかったからでしょう。主席参謀は…面白いから」

福本（伊）
「確かに、本音を言えばそうだ」

山城
「やっぱり…」

福本（伊）
「しかしだ…もう1つの本音を言えば…君が最大の適任者だからだ」

山城
「……はい？」

福本（伊）
「君の話は息子からも、そして父からも聞いていた……だから、君をそのまま異世界派遣部隊の中に編入したのさ」

山城
「……あの、話が見えないんですが…」

福本（伊）

「息子は「冷静で、知識があり、我を通す」と」

山城
「…それで決めたんですか？　なら、買い被りだと…」

福本（伊）
「これからはあの世界では何が起こるかわからん……例えば、複数の国が『宗教』に従い、特定民族の追い出し・虐殺・強制同化を行っていたら…どうする？」

一瞬で冗談では無い…真剣な話だと察する事が山城には出来た。

山城
「……飽くまで私心ですが……そんなのは何が何でも止めます」

福本（伊）
「彼らがそれを『神の名の下の正当な行為だ』と言ったら？」

山城
「その宗教は何かが狂っています…何かは解りませんが…」

福本（伊）
「…それが彼らの『常識』ですよ？」

山城
「だが、我々の『常識』では違う……例え、世界を滅ぼす民族…と言われても」

福本（伊）

「……だから、君を選んだ……我を通すからね」

山城
「……」

福本（伊）
「…通知がある…本日より、『異世界派遣艦隊』は『第零艦隊』と呼称される」

山城
「第零艦隊……良いんですか？」

福本（伊）
「いいのさ…派遣艦隊など言いにくいだろう…通知は以上だ」

山城
「……わかりました。では、明日が有りますので…」

福本（伊）
「あぁ、確か明日は君のガールフレンドの卒業日だったな（（ -（（）」

山城
「……じ～か～ん～！！　怒りますよ！！」

福本（伊）
「もう怒ってるぞ～～」

山城
「失礼しました！？」

そう言うと、次官室から出て行った。

福本（伊）

「山城少佐……あの異世界はこれから困難事が多くなる……彼女の存在は大きいんだよ」

出て行った後、福本伊吹次官は静かに呟いた。

次号へ

１２３　山城少佐の処罰（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２４　夜の告白　前編

３月１６日（現世界３月６日）夜１９時　グローリアス士官学校

卒業式を終えたグローリアス士官学校。
そして、夜は生徒達が待ちに待った卒業パーティーが行われていた。

山城
「まあ、関係無いけど」

準講師として（短期間とはいえ）参加していた山城も来ていた。
ちなみに、西洋マナーはある程度神戸士官学校ど学んでいる。

オーガス
「山城君」

山城
「あ、お久し振りです。オーガス教官」

オーガス
「君もすっかり有名人だね」

山城
「そうですかね…ただ周りが勝手に騒いでいる様な気もしますが…」

オーガス
「我々の手に余っていた戦艦の艦長だ。有名にもなってしまうよ」

山城
「お陰で苦労と疲労が溜まります」

オーガス
「あはは…では、今夜はごゆっくりと」

山城
「えぇ…では」

……ごゆっくりと言われてもな……まあ、適当にするか…

山城
「……で、やっぱりこうなるのね」

後ろでワインを飲んで寝たシルヴィアを背負いながら呟いた。
しかも、今回は熟睡のご様子……

山城
（さ～て…今回はシルヴィアの部屋は遠いしな…それに、無断で女の子の部屋に入るのはな～…理性的抵抗があるんだよな）

だからと言って、適当に放置するのもなんだしな……

山城
「……俺の部屋かな…久しぶりに床で寝るか」

ポツリと呟いた。

山城の部屋

山城
「よいしょと」

本来の主である山城が寝る筈のベッドに、シルヴィアを静かにベッドへと寝かす。

山城
「まったく、暢気に熟睡か……そう言えば、シルヴィアから何処に行くとも聞いて無いな…」

小耳に挟んだ程度だが、確か大抵の生徒は卒業前に赴任先が決まってるとか決まってないとか……

山城
「会える回数も少なくなるかな……バカ、なに考えてんだか…」

当たり前の事……だった筈の事をなぜ残念がる？

山城
（…それよりも…さて、寝床の方を…毛布あったかな？）

そう思い、部屋を探ろうとした時、ふと気が付いた。右腕が引っ張られている事に……まあ、原因は直ぐ解ったが。

山城
「……シルヴィア…」

熟睡している筈のシルヴィアの右手が右腕を掴んでいた。

山城
「…酔っ払ってふざけてるのかな？」

シルヴィア
「…ふざけてなどおらぬぞ」

山城
「……シルヴィア？　酔っ払ってたんじゃ…」

酔っ払って熟睡していた人間がちゃんと喋って……立ってる？

シルヴィア
「あれは芝居だ……騙されたかであろう？」

と言った瞬間、そのまま倒れ込む様に山城に抱き付く。

山城
「シルヴィア…さん？」

シルヴィア
「山城～…お主が査問に問われている時……私は眠れなかったのだぞ…」

山城
「……シルヴィア？」

シルヴィア
「…おかしなものだの…お前が隣から居なくなった瞬間……ずごぐじんばいじだのだぞ…」

山城
「…バカ…泣くなよ」

シルヴィア
「なぐ（泣く）など無理だ～…夢にばおぬじ（お主）が出でぐるじ…何時もお前の事が出てぐるんだぞ！」

山城
「…まずは涙を拭きなさい」

シルヴィア
「要らぬ！」

そう言うと自分の服の袖でグイグイ拭いた。

山城
「…顔…真っ赤だよ」

シルヴィア
「う、うるさい…お主だって顔が赤い…」

……その後の言葉をシルヴィアは紡げなかった。
なぜなら……山城がシルヴィアをベッドへ押し倒したからだ……。

シルヴィア
「や、や、や、や、や、山城！？」

山城
「……大丈夫、襲わない…」

シルヴィア
「……押し倒しておいてか？」

半分諦めた様にシルヴィアが訊いた。

山城
「……嫌なら殴っていいから…今は聞いてほしい……シルヴィア…好きだ！」

シルヴィア
「……ぁぁ…ば、バカ者！　私…で遊ぶな…（＊＾＾＊）」

山城
「……遊んでない…俺だって無性にお前の事、気にしてるし…」

シルヴィア
「う、嘘を…」

山城
「今日1日…君と話して無い事が直ぐ解るのに？」

シルヴィア
「……ぅぅ…」

次号へ

１２４　夜の告白　前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

125　夜の告白　後編

シルヴィア
「……もし、その言葉が本当ならば…」

恥ずかしそうに顔を背けながら呟くかの様な声で言う。

シルヴィア
「その…その証を見せてほしい…のだ」

山城
「……大胆だね」

シルヴィア
「っぅ……（照）」

山城
「…やっぱり、君は可愛い女の子だね」

シルヴィア
「ば、バカ！　可愛いだの綺麗だのとう……！！」

最後まで言えなかったがシルヴィアは気にしなかった。
何故なら……山城が彼女のファーストキスを奪ったからだ……

シルヴィア
「……1つ訊いていいか？」

山城
「なに？」

シルヴィア
「…キス、上手かったから…経験があるのか？」

山城
「いや…ライトノベル小説通りにやったんだけどな…」

シルヴィア
「なに、お前のファーストキスを…わ…た…し…が……」

たちまち顔を真っ赤にするシルヴィア。

山城
「大丈夫か？」

微笑みながら訊く山城。

シルヴィア
「……はぁ…今頃遅いな」

山城
「そうだね…さて、寝るか」

シルヴィア
「まさか、床で寝る気か？」

山城

「可愛い御姫様の御望みとあらば…ね」

シルヴィア
「馬鹿者……一緒に寝るぞ…今度は向き合ってな」

山城
「あぁ」

シルヴィア
「そう言えば…今になってしまってすまないな…配属先の事だが…」

山城
「あぁ、それが気になってたんだ…それで、何処？」

ベッドで寝転びながら向き合って話すシルヴィアと山城。

シルヴィア
「3週間前の事前面接で『天城への配属を希望する』と言ったのだ……そしたら、1週間前、正式に天城配属が決まった」

山城
「じゃあ…肩書きが変わるだけで今までと一緒か」

シルヴィア
「不満か？」

山城

「いや…逆に嬉しいよ」

シルヴィア
「そう言うと思ったぞ」

そして、お互い笑った。
2人共解っていた……どうやら全て、話は何処かの時点で日本海軍とシリルティア海軍双方で片付いていたのであろう……と。

シルヴィア
「また、天城だ……よろしく頼むぞ……山城艦長」

山城
「いいよ…こっちもよろしく…シルヴィア」

シルヴィア
「あぁ……少し気恥ずかしいがな」

山城
「それはお互い様だよ」

翌朝……

シルヴィア
「終わったか？」

山城
「あぁ…部屋は何時でも使える様にしとくって」

部屋を引き払った山城がそう言いながら、馬に跨がる。

シルヴィア
「それで、今度はどうするつもりだ？」

山城
「天城で暮らすかな…けど、ドックに入った時は……ボニファス伯爵の所でお世話になる…かな？」

シルヴィア
「元からそのつもりであったのだろう？……ふてぶてしい奴め」
…と言いながら、嬉しそうに笑うシルヴィア。

シルヴィア
「では…久しぶりに馬術の腕が鈍っておらぬか見せてもらうぞ！」

そう言った瞬間、シルヴィアは自分の乗る馬を走らせた。

山城
「…お転婆彼女に振り回されるのも……悪くは無いか」

そう呟くと、山城も馬を走らせた。

次号へ

１２５　夜の告白　後編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２６　真昼の侵入者（前書き）

晴れて非公式ながら恋人となり、一時の平和を満喫する山城・シルヴィア……しかし、波乱の波は彼らを巻き込む！？

１２６　真昼の侵入者

４月１日（現世界３月２１日）

首都ユニオン　日本大使館

日本大使館は首都ユニオンの（階級制度上から言えば）平民が住む市内エリアと貴族が住む郊外エリアの丁度境目真ん中にあった。
これは、大使館の建物が元は貴族が住む屋敷の流用だったからだ。
これはラバナスター沖海戦前に行方を眩ませた一部貴族の屋敷を放置していては面倒……後々に浮浪者や犯罪者の巣窟にするのは治安上問題有り……だから、一部は砲兵部隊の射撃訓練の的にするなどの案が浮上していた。
しかし、街中にあるこの屋敷だけは難しい……と考えていた時に、日本と国交を結んだ為、大使館としてこの屋敷を提供したのであった。
ちなみに、この大使館提供に端を発し、シリルティア王国が行方を眩ませた貴族の屋敷を売却し、購入した人間や団体がホテルや美術館に改装するなどの有効活用が行われている。

……そんな日本大使館に山城と海軍大尉となり、シリルティア王国海軍からの派遣将校として第零艦隊に配属されたシルヴィアが来ていた。

山城
「お久しぶりです、杉下先輩」

杉下
「公式に小澤中将の主席参謀になって1ヶ月経ったが……元気そうだね」

山城
「いえ、本当にキツいですよ…」

杉下
「そして、シルヴィアさん…天城配属おめでとうございます」

シルヴィア
「はい、ありがとうございます」

杉下
「まあ、わざわざ明日の事で人を寄越すまでも無いのですが……事が事だからね」

実は明日、チャイナー帝国からの賠償金が届く為、その打ち合わせ（それほど大規模な事でも無いのだが…）をしに来ていた。

山城
「いえいえ、お陰で余計な事から逃げれましたから…ですが、広いですね～」

杉下
「元貴族の屋敷ですから…お陰でスペースや部屋には困ってません」

まあ、下手にボロい建物を押し付けられるよりは見栄えはいい。

シルヴィア
「…メイドも雇ったんですね」

杉下
「下手な職員よりはプロですから…その内、恋愛結婚もあり得るかも知れませよ」

……まさか、その候補者が目の前にいるとは解らないだろう。

ドタドタドタドタ！

山城
「……外が騒がしいですね？」

シルヴィア
「盗人でも入ったか？」

杉下
「いくら何でも、真昼に人がいる屋敷へ盗人は……」

大使館職員
「杉下大使！」

杉下
「どうしました？　表の騒ぎはいったい…」

大使館職員
「し、侵入者です！　誰かが、壁を乗り越えて侵入しました！」

山城
「…そう言えば、警備の陸戦隊1個小隊はまだでしたね？」

杉下
「あぁ…明日来る予定だったんだよ」

シルヴィア
「…あの壁を乗り越えて…」

そう呟きながら、シルヴィアは窓の外にある壁を見る。

山城
「それで、侵入者は？」

大使館職員
「それが…未だに捕まっていません…物凄く軽快で、あっという間に…」

当たり前だ…壁を乗り越えて来たのだから、素人の大使館職員達が寄って集っても捕まる訳が無い。

杉下
「とにかく…その侵入者を見付けて…」

シルヴィア
「あの者では無いか？」

山城・杉下
「「え？」」

シルヴィアの指差す先は誰も居ない窓の外……。
しかし、その次の瞬間、バサッ！…と言う音をたて前の開いていた窓から何かが転がり込んできた。

山城
「な、なんだ！？」

杉下
「…人？」

大使館職員
「あ！　あいつです！　あいつが侵入者です！」

山城
「…もう少しマシな言い方は無いのか？」

大使館職員にツッコミを入れつつ、転がり込んだ人物を注視する。

「…ここは日本の役所か？」

少しシルヴィアに似た……つまり、男ぽい喋り方をする……声が謎の人物から聞こえた。
……どうやら襲撃が目的では無い様だ。

杉下
「えぇ、ここは日本の大使館ですが…何か？」

冷静に答える杉下大使。

すると、謎の人物は……

「無理な願い事だが頼む！　我ら民族を救ってくれ！」

いきなり、床に額を押し付けんばかりに土下座した。これには山城・杉下もお互いの顔を見て困惑するばかり。
しかし、答えは直ぐに出た。

シルヴィア
「尖った耳……まさか、お主はエルフ族か！？」

山城
「……嘘だろう？」

次号へ

１２６　真昼の侵入者（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２７　波乱の始まり（前書き）

大使館の壁を乗り越えてまで侵入したエルフ族少女の事情とは…？
そして、それが巻き起こす波乱！？

１２７　波乱の始まり

日本大使館　応接室

杉下
「……なるほど、お話の方はわかりました」

わざわざ壁を乗り越えて侵入して来たエルフ族の少女…と言っても１８歳…レイの話を聞いた杉下は納得した様に頷いた。

レイ
「では！」

杉下
「ですが……ここは日本の役所では有りますがただの出先機関です。残念ながら、軍を動かす事は無理ですね」

レイ
「そんな…」

その言葉を聞いたレイがシュンとなる。
まあ、多少誇張表現はあるが、軍を使える権限は大使館には無い。

杉下
「だからと言って、あなたの話を信じていない訳ではありません…
…我々の歴史でも同じ事はありましたから」

彼女……シルヴィアの知識を擦り合わせてだが……レイの話だと、

エルフ族はシリルティア王国北方の大森林地帯に住んでいる。
…俗にファンタジー小説で『森の住人』と言われているのは嘘では無い様だ。
それは置いとくとして、つい数ヶ月前までは普通に暮らしていた。
しかし、2ヶ月～1ヶ月半程前、いきなり大森林地帯の北方より侵略行為を受け、現在エルフ族は防戦中……だと言う。

杉下
「先ずは政府に報告して、その後に…」

レイ
「そのな事をしていたら、我らは滅びてしまう！」

山城
「ま、先ずは落ち着いて…」

実際のところ、山城もレイの言うことは充分に解っている。
しかし、現地展開済みならいざ知らず、数百キロも離れた場所となると、最低限、政府の許可がいる。
何せ、山城の独断専行の場合と状況・場所が違いすぎる。

レイ
「うるさい！　こんな事をしている間にも、村が焼かれ、人が殺されておるのだぞ！！　暢気に結果を待っていたら、一年も掛かってしまう！」

山城
（あ、そうか…彼らは噂で聞いた程度でちゃんと日本の事を知らないんだった！）

どうも、シリルティア王国に居すぎた所為でその事を失念していた。
しかし、見事なホローが恋人の方から出た。

シルヴィア
「大丈夫、一民族が滅びるかどうかの時に空かさず決断を下すのが大日本帝国と言う国だ…先ずは落ち着け」

レイ
「シルヴィアさん…」

シルヴィア
「止めてくれ、同い年ではないか…シルヴィアでよい」

山城
「…ナイス、シルヴィア」

シルヴィア
「ふっ、当たり前であろう…（我らは恋人同士だろう？）」

山城
「そうだね」

山城の耳元で素早く、しかし静かに言ったシルヴィアに頷き返す山城だった。

その後、執務室に入った杉下大使。

山城

（多分、ラバナスターの通信塔経由で現世界の外務省か、あるいは総理官邸に電話しているのだろうな）

ちなみに、執務室には2つの電話がある。
1つは王城に繋がる電話、1つが日本に繋がる電話だ。

シルヴィア
「いざとなったら、陛下からも掛け合ってみようか？　国境問題になる事柄だからな」

山城
「その時は頼むよ」

そう言った時、1人の大使館職員がこちらに向かって走って来た。

山城
「どうしました？」

大使館職員
「は、はい…実は先ほどのエルフ族の少女を引き渡せ、と言う者が2人、無理矢理入って来まして…」

山城
「なに……武器は？」

大使館職員
「2人共、剣を持っています」

山城
「わかりました…自分が行きます。シルヴィアはレイを頼む」

シルヴィア
「あぁ」

シルヴィアにその場を任せ、山城はその2人が居る玄関へと向かった。
すると、案の定、男が2人居た。
慎重に、だが堂々と山城は2人に近付く。

山城
「現在、大使は用事の為、出れませんので、本官が代理を勤めます」
男1
「そんな事はどうでもいい。エルフ族の女を出せ！」

最初から高圧的に出て相手をビビらす気だろうが、そんなのは効かない。

山城
「なら、なぜ出さなければならないか、明確な理由を提示して頂きたい」

男2
「貴様にその理由を知る必要は無い！　いいから引き渡せ！」

山城
「それは出来ません。何の理由も無く、この大使館に入って来た者を引き渡す事は出来ません」

男1
「な、なんだと！？」

山城
「それとも、言えぬ様な理由なのか？　しかも、他国の人間に…」

男2
「う、うるさい！」

そう言うと、男の1人が剣の柄を握る。

山城
「言っとくが、ここで剣を抜くと銃刀法違反と言う罪になるぞ？」

確かに大使館となると、中に入った瞬間、その国の領地としてその国の法律が適用される。
ちなみに、武器携帯時の大使館入りは門前での許可が必要。（軍人・貴族を除く）

山城
「もう一度言う。明確たる理由を提示して頂きたい。もし、提示出来ないのなら今すぐお帰り下さい」

返事は……声では無く、剣を抜く音であった。

次号へ

１２７　波乱の始まり（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２８　深まる謎（前書き）

レイの引き渡しを拒否した山城。
対し、相手は実力行使に！果たして…どうなる！？

128　深まる謎

杉下
「ふう」

執務室で受話器を置いた杉下が溜め息を吐く。
電話を掛けようとした時、ふと腕時計を見て気が付いた。
それは今の時間、本会議か何かで、外務大臣も首相も居ない事をだ。
そこで、直ぐに執務室でぶつぶつと呟いているであろう福本海軍次官に掛けた。直ぐに陽気な福本次官の声が聞こえたが、レイからの話を手短に話すと直ぐに真剣な声になり、「わかった。伝えておこう」と言ってくれた。

杉下
「さすが、元帥殿のご子息……血を引いているだけはある」

そう呟くと、執務室を出た……しかし、次に聞こえたのは、ガキン！…と金属同士がぶつかる音……

杉下
「なんだ！？」

慌て玄関ホールに向かうと、職員の1人が気付いた。
大使館職員
「大使！」

杉下
「いったいどうした！？」

ちなみに、シルヴィア他職員達は二階から見ている。

大使館職員
「じ、実は先ほどのエルフ族の少女を引き渡せと無理矢理男が２人入って来まして…山城少佐が「明確たる理由が無いと引き渡せない」と申しましたら、あんな事に…」

この瞬間、元士官候補生で外交官の杉下は事の重大性に気付いた。つまり、わざわざこの様な実力行使を行ってでもレイを引き渡せようとしているからには、とんでもなく自分達の行為がバレたく無い奴等……しかし、ここがどんな場所だか認識していないからこうなっているのだ。

杉下
「それよりも…1対2で大丈夫なのか!?」

シルヴィア
「大丈夫だ、杉下大使。あいつを殺すには最低１０人の兵隊がいるぞ！」

杉下
「その根拠は？」

シルヴィア
「１０ヶ月程前かな？　２人で盗賊１０人を倒した事がある！」

杉下
「…なるほど」

確かに……今のところ不利ではなさそうだ。

2人はいきなり…それでも予想通り…剣を抜いて襲い掛かって来た。
しかし、山城はそれを素早く避けると軍刀を抜いた。後は防御→攻撃→防御→攻撃……の繰り返し。
しかし、僅か1人に余りにも時間を掛けた事に業を煮やしたか、1人が階段を上り、レイに向かって突っ込んで来た。
だが……そこまでだった。男が階段を上り終えた瞬間、シルヴィアがホルスターから抜いたワルサーP38を発砲、男を打ち倒した。
これを見た相棒の男は見せ掛けの攻撃をすると素早く扉を開けて逃げて行った。

シルヴィア
「あ、待たんか！」

山城
「追い掛けても無駄だよ……それよりも…」

そう言うと、シルヴィアが打ち倒した男に近付く。
ワルサーの弾は左胸に命中し、命に別状は無い。

山城
「お前らは何者だ？　なぜ、彼女を襲った？」

服の襟を掴み問い質す。
しかし、男は不敵にニヤリと笑い、カクンと死んだ。

杉下
「…どうした？」

山城
「…死にました」

シルヴィア
「ば、馬鹿な！　致命傷では…」

山城
「いや、即効性の毒だ。この手だと、スパイか特殊部隊員の自決方法ですね」

杉下
「スパイか特殊部隊…と言う事は！」

士官学校卒業の杉下は直ぐに答えを導き出した。

ドタバタドタバタ！

とその時、表が騒がしくなった。

シルヴィア
「やっと来おったか…遅いぞ」

どうやら、裏口から出た大使館職員がやっと役人と兵士達を連れて来た様だ。

山城
「さて…後はもう1人の男に聞くしかありませんね…念のため、この事も伝えた方がよいかと」

杉下
「あぁ、そうだね」

しかし……それは出来なかった。
何故なら、その男は翌日、川の中で死体となって発見されたからだ
……

シルヴィア
「どう思う？」

山城
「口封じで殺され、水死に見せ掛ける為に川へ…ってとこかな」

シルヴィア
「なら、連絡員兼スパイがこの街にいる訳か…」

山城
「それを探すのはウチらの仕事じゃない…まあ、事が大事になった
事は確かだ」

シルヴィア
「さすがに陛下も静かには出来んだろうしな」

次号へ

１２８　深まる謎（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１２９　調査隊（前書き）

日本大使館での出来事、そして、襲撃の片割れの不振死……やはり、日本政府も黙ってられない？

129　調査隊

4月7日（現世界3月28日）

日本大使館　大使執務室

杉下
「シリルティア王国の要請もあり、日本政府も正式に調査隊を派遣する事になりました」

山城
「当然と言えば当然ですね…規模は？」

杉下
「一個小隊程…これが限度ですね」

山城
「まあ、妥当と言えば妥当な数ですね…やはり、『おおすみ』の自衛隊の出番ですかね」

杉下
「日本陸軍の一個分隊は出せませんか？」

山城
「現在、シリルティア王国正規軍の訓練教官を全員でやってますから…1人引き抜けるかどうかですね」

杉下
「ならば、自衛隊ですね…シリルティア王国も親衛隊と正規軍からも一個小隊づつ選出するそうです」

山城
「……交戦権については？」

杉下
「当然、出ています。ただ、エルフ族には撃たないで下さい」

山城
「はい」

杉下
「それと、不肖この私も付いて行きます、よろしく」

山城
「…そのまま外交交流を行うお積もりで？」

杉下
「いけませんか？」

山城
「いいえ」

杉下
「出発は5日後、装備は出来る限り軽量の物を…ですが、出来れば装輪装甲車や高機動車を持って行きたいですね」

山城

「…となると、１６式『清空』３３型輸送機（Ｃ－１３０Ｈハーキュリーズの独自改良型）しかありませんよ？」

杉下
「既に充分な数の清空を陸軍は揃えているよ。今回は陸軍の出番だからね。今頃自衛隊にも同じ通知が到着している頃だよ」

山城
「なるほど」

杉下
「それと、貴官にも同行してもらいますよ」

山城
「それについては予想済みです」

ええ、そうでしょうとも、何せ私は『現場責任者』で『主席参謀』なんですから…巻き込まれるのは同然でしょうね。

杉下
「そう言えば…シルヴィアさんは？」

山城
「シルヴィアは王城です。多分、自分と同じ理由かと」

杉下
「そうですか…では、よろしくお願いしますね」

山城
「はい」

預けていた馬に跨がり、大使館を出た山城。
ついこの間とはうって変わり、特別海軍陸戦隊の兵士が警備にあたっている。
まあ、あんな事があっては当然だが……
そう思いながら、門を出るとシルヴィアがいた。

シルヴィア
「そっちも終わったのか？」

山城
「あぁ」

シルヴィア
「そうか…なら、腹ごしらえと行こう」

山城
「そうだね」

返事をすると、２人共馬の歩みを進める。

シルヴィア
「…はぁ～」

山城
「……大丈夫か？」

シルヴィア

「え、あ、だ、大丈夫だ」

そう答えても、「う〜〜ん」と唸りながら悩んでいる。
何回か唸った後……

シルヴィア
「あぁ〜、やはり無理だ〜…なんか、騙しているようで後味が悪い〜〜」

山城
「…どうした？　王城で何かあったか？」

呆れつつも、これ以上唸らせると迷惑だな、と感じて訊く。

シルヴィア
「実はだな…陛下から、キツく口止めされておるのだが…」

山城
「ちょい待ち、それは国家機密級か？」

シルヴィア
「……多分」

山城
「よし、先ずは飲食店を探してから…話はそれから」

シルヴィア
「…わかった」

シルヴィア
「実はだな…今回の事で一番疑いの高い国がアンデュラス王国だ」

山城
「大森林地帯に一番近くで、国力のある国だから？」

シルヴィア
「差し詰め言えばそうだ」

飲食店に入った2人は、昼食の喧騒に紛れる様に話す。

シルヴィア
「…実はそのアンデュラス王国の現国王は陛下とは血繋がりだ」

山城
「つまり、血縁の親戚？」

シルヴィア
「あぁ…よくは解らんが６０年程前の王国が妹を嫁として向こうの王族一族へ出したそうだ。その時の孫が今の国王だ」

つまり、ヨーロッパの国王同士の血縁関係みたいな物だ。

山城
「それで…アーネリア陛下は何が引っ掛かってる訳？」

シルヴィア
「……僅か数回とは言え、幼き時に遊んだ体験から、そんな事は無いと言っておられたが……年月は人を変えられるからな…」

山城
「うーん……その可能性は低いと思うけどな…」

シルヴィア
「…はぁ？」

山城
「つまり、国王が関与している可能性…無いとは断言出来ないが…低いよ」

シルヴィア
「バカな…例え1貴族の暴走だったとしても、国王が知らないとは…」

山城
「歴史的な事から言わせてもらえば…わざと情報が漏れない様にする事は出来るよ。例えば、国王周辺の人間を買収するとか」

それを聞いたシルヴィアはハッとなった。

シルヴィア
「まさか…裏の人物は大物だと言うのか！？」

山城
「有り得なくは無い。まあ、後は現地に行って調べてみる必要があるけど」

そう言うと出されたパスタを行儀良く食べる。

シルヴィア
「お主…物凄い発想をするな」

山城
「うちの元帥ならもっと凄い発想をするよ。それに…」

シルヴィア
「それに？」

山城
「レイの前じゃあ、口が裂けても言えないが……中にスパイがいるよ」

シルヴィア
「な、なに!?」

山城
「そう考えるのが自然だ……そうで無いと、耳を隠す様に髪を伸ばしたり、帽子で隠したエルフ族の少女をどうやって見付けるんだ？」

シルヴィア
「…た、確かにそうだ」

山城
「まあ、後は現場を見ないと解らないな」

そう言うと、また美味しそうにパスタへとフォークを伸ばす。
一方、シルヴィアは……

シルヴィア

（なんと言う奴だ…ここまで深く考える奴はいないぞ…まあ、お陰でこうやって、生きて恋人になっておるのだがな…）

山城
「あ、そう言えば…」

シルヴィア
「どうした？」

山城
「機密聞いたのに、喋らないって誓約してない」

シルヴィア
「よいよい、お主は機密と人の秘密は喋らんだろう」

山城
「いや、でもさあ…」

シルヴィア
「大丈夫だ」

山城
「……よし、これを誓約にしよう」

シルヴィア
「はあ？」

疑問符だらけで振り返ったシルヴィアの頬に山城の顔が近付いた。

そして数秒後、スッと離れた。

山城
「これが誓約だよ」

シルヴィア
「（ほ、ほ、頬にキスされた～～！！）バ、バカ者！！」

そして、思った……あぁ、このままいけば、こいつを婿にする前にこちらが悶え死ぬかも知れないと……

次号へ

１２９　調査隊（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３０　いざ、現地へ！（前書き）

新米士官
「尖閣事件の映像流出…少しは溜飲が下がったわ！」

山城
「まあ、中国様のご機嫌を取ろうとした結果だな。自業自得」

福本
「まあ、証拠流出の犯人を見付ける気だろうが……問題はそこじゃないだろう。これを機に、どう日本政府が外交的攻勢に出れるかだな。もし、ここで引っ込んだら、政府は国民どころかアジア諸国（中国・北朝鮮以外）からの信頼も回復出来んと見放されるのがオチだな」

新米士官
「しかしな～、売国奴党の政権だからな…中国様のご機嫌取る為に、誰かを更迭して、無理矢理にでも終わらすかも」

福本
「その時は民主党日本の終わりだな」

山城
「これが昭和なら、首相が皇居に呼ばれて叱責されて『朕自ら出る、艦を出せ！』て天皇陛下が言われるかも知れないぞ」

１３０　いざ、現地へ！

４月１２日（現世界４月２日）　午前１０時

シリルティア王国北方

ユリアヌス
「しかし…凄い光景だな」

早馬が来たのは４日前……最新鋭の飛行船２機、日本軍の輸送機が１機づつ飛来するとの通知がユリアヌスの元に届いた。
これを読んだユリアヌスは直ぐに常備軍と付近住民達に呼集を掛け、直ぐに近くの滑走路に使える演習場と休農地を整備し、到着を待った。
ちなみに、今、彼の視界の前には飛行船２機が到着し、兵員と物資、兵器を降ろしていた。

ユリアヌス
「何かの役に立つだろと思って確保しておいた広大な演習場と休農地がこんな風に役に立つとは…」

若いユリアヌスでも、日本が入って来た世の中の変化に付いて行くだけでも一苦労だが、日本と国交を結べた事は良かったと思っている。

ユリアヌス
（確かに日本の技術は我々の１００年先を行っている……だが、そ

の技術の１００分の１でも使えれば我が国にどれだけプラスになるか）

そう思った直後、副官が大型機が来たと報告して来た。

着陸した１６式『清空』輸送機は早々と搭載していた物を降ろす。
機体横の乗降口からは兵員が、機体後方の搬入口からは軽装甲機動車が降りて来る。
これが日本側『調査隊』の先遣隊である。
部隊は一個分隊＋ａ、車両は軽装甲機動車２台。
ちなみに＋ａは山城、シルヴィア、レイ、杉下に……

波木
「自分、始めて飛行機に乗りました！」

横井
「なんで軍医が私なの？」

佐田軍曹率いる日本陸軍分隊から借りた波木二等兵と山城の先輩、横井中尉……。

山城
「不満ですか？」

横井
「まあ、デスクワークよりマシね」

……こんな会話の中を普通にしているが、山城達の格好を見たユリ

アヌス配下の常備軍の者達から見たら、異様に感じていた。
何せ、山城、シルヴィア、横井は迷彩服にボディーアーマー、戦闘帽（横井の左腕には赤十字の腕章）、波木はカーキ色の日本陸軍軍服、杉下は背広の上にボディーアーマーと戦闘帽、レイはそのままだがボディーアーマーを着ている……とシリルティア王国軍と同様の軍服を着ているユリアヌスの常備軍兵士から見れば良くて地味、下手したら奇妙な格好だった。

ユリアヌス
「お久しぶりです、山城少佐、シルヴィア大尉」

山城
「あぁ、ユリアヌス伯爵。これはどうも…奇っ怪な格好でしょう？」

ユリアヌス
「いえ、まあ…戦争のやり方が違いますからね」

山城
「あはは…ご紹介します。外交官の杉下さん、軍医の横井中尉です。御二人方、ユリアヌス伯爵です」

杉下
「大使の杉下将です」

横井
「軍医の横井真弥です」

ユリアヌス
「北方の守備を任されております、ユリアヌスです。どうぞ、よろしく」波木

「……次元が違う」

シルヴィア
「それは仕方ない」

日本陸軍の一兵卒の呟きにシルヴィアがツッコミを入れる。

ユリアヌス
「それで、これから調査ですか？」

杉下
「えぇ、ですがもう一便待つ必要が有ります」

……その一時間後に到着した清空には日本陸軍のいすゞ製１５式軍用自動貨車（トラック）２型２台と軽装甲機動車１台が新たに加わり、１５式トラック２台と軽装甲機動車２台に日本軍側は現場の大森林地帯の入り口へと向かった。

杉下
「ここが貴国の国境ですね？」

ユリアヌス
「えぇ、この川の中心線より向こう側がエルフ族達との境界線になっています」

軽装甲機動車に便乗し、現地を説明するユリアヌス伯爵。
既に人が渡れる程度の仮設橋が出来ており、対岸には簡単な塹壕と麻袋の土嚢による簡単な陣地が造られており、また、一個分隊程が

配置されていた。
流石に、今回は軽装甲機動車や１５式トラックを渡河させるつもりは無い。

ユリアヌス
「本来はここまではしないのですが、状況が状況ですので…」

杉下
「妥当な判断と思います」

仮設橋を渡りながら話す2人。
その後ろから、山城達と自衛隊の一個分隊が続く。
そして……全員が渡り終わった瞬間……

パーン！

……銃声が響き渡った。

次号へ

１３０　いざ、現地へ！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

131　銃撃戦（前書き）

鳴り響いた銃声…そして、森の中からは…！？

131　銃撃戦

山城
「総員、伏せて！」

そう言った瞬間、山城も急いで伏せた。
直ぐに持っていた６４式小銃を確認する。
６４式軽機関銃と同時に採用され、『４４式』となる筈が軽機関銃が６４式になった為に、合わせて６４式小銃となった。
しかし、案外この呼び名は陸海空の兵から好まれている。

シルヴィア
「どこからだ？」

匍匐前進で後ろから来たシルヴィアが訊く。

山城
「多分、森の中から……負傷者はいませんね！？」

反応は無い。
なら、大丈夫だ。

山城
「自衛隊の皆さんは散会して各個で射撃位置に就いて下さい。杉下大使とユリアヌス伯爵、横井中尉は後方へ」

波木
「自分は？」

山城
「同じく射撃位置へ…但し、撃たないで下さいよ」

シルヴィア
「着いて早々これとは……何かち憑かれたかな？」

山城
「さあ」

戦場での1分1秒は長い。そんな匍匐待機状況の中、村田一郎（むらたいちろう）軍曹（陸自も陸軍に編入され、階級名称も陸軍式に変更）は部下で同期の島田洋介（しまだようすけ）伍長とヒソヒソと話していた。

島田
「やるじゃないか。あの少佐」

村田
「ふん、伏せろや、散会なんて一通り知識があれば出来るよ」

実は村田軍曹は上官から「本隊到着まで山城少佐の指示に従う様に」と命じられていた。
しかし、少佐と言っても僅か18かそこらの若僧で、しかも海軍軍人と聞いて村田は不満よりも不安でいっぱいだった。
そりゃそうだ、何せそんな人間に自分を始め、部下達の命を一時的とは言え預けなければならないからだ。

さて、当の本人は既に村田軍曹の心の内に気付いていた。

だからこそ、余り高圧的な態度もとっていなかった。何せ、『第２の連合艦隊』と言われた第七艦隊を率いた福本元帥から人心掌握の基礎は学んでいた。
基本は僅か３つ、『威張らない事』・『行動する事』・『気にする事』……これだけだ。
これが普通の人間から聞いたらどうかな？と思うが、教えたのが『仁将』福本元帥だと説得力がある。だから、それを実践しているに過ぎない。

それは唐突だった。
森の中から怒号、叫び声、人が走る音が聞こえ始めた。
しかも、それは二種類に分けれそうだ。

山城
「（エルフ族の方は切羽詰まってるな…よし）レイ、大声でこっちに来る様に叫ぶんだ！」

レイ
「わかった！」

返事をすると、森に向かって叫んだ。
但し、「こっちに来い」ではなく、訳の解らない単語……多分、何かしらの合図……を言っていた。

山城
「いいですか、自分が撃ったら全員撃って下さい…間違ってエルフ族の方々を撃たないで下さいよ」

周りに注意を促すと、直ぐに波木の方を向く。

山城
「波木二等兵、敵の将校らしき人物が至ら構わず狙撃して下さい。
負傷でも構いません」

波木
「了解！」

シルヴィア
「まったく…お主は艦長か？　部隊指揮官か？」

山城
「……両方だな」

そう答えると再びレイに声を掛けた。

山城
「合図したら、こっちに来るエルフ族の皆さんに伏せるように言って下さい」

レイ
「わかった」

山城
「だけど、シルヴィア……本当に６４式で良かったのか？」

シルヴィア
「イザとなったら、お前の予備を使えるからな…それに『アタレ３』はおもしろそうだ」

山城
「…そうかい」

ちなみに、言い忘れていたが、６４式小銃は陸上自衛隊の８９式小銃の山城達の世界の帝国陸軍版…と考えて頂きたい。

またもジリジリと時が過ぎるのを待つ……しかし、それは早かった。
レイの合図（？）が聞こえたか、こっちに向かう人影が見えてくる……しかも、数は増えている。
しかし、それは裏返せばそれなりに規模がある村が襲われていると言う事……そして、敵は確実に後ろに居る事……。
実際、発砲炎が確認出来る……連射速度は遅いが。

シルヴィア
「……遅い」

山城
「我慢、我慢」

正に我慢比べの如く…ジリジリと…近付くのを待つ。本当なら撃ちたいところだが……それは出来ない。
今撃てば……解るだろう。

レイ
「山城さん！　まだですか！？」

山城
「……まだ」

焦る気持ちは解る……だが……

ピシッ

その時、近付くの木に銃弾がかすった。
そして……

山城
「レイ、今だ！」

レイに向かって叫ぶ。
レイは直ぐ様、また意味が解らない単語を叫んだ。
すると、全員が伏せた。

山城
「全員、撃て！！」

タン！

叫びながら引き金を引く……そして、狙っていた敵兵が引っくり返った。

山城
「自衛隊は援護射撃！　レイ、シルヴィア、行くぞ！」

シルヴィア
「わかっておる！」

レイ
「…無謀だな」

銃撃が続く中、波木は慎重に敵士官を探した。
土嚢に狙撃銃を置き、注意深く探す。
すると、後ろでサーベルを抜いて指揮する派手服の士官がいた。
波木は狙いを定めると、呼吸を整える。
そして……

パン！

この銃声がこの場の状況を決めた。

次号へ

131　銃撃戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

132　後方支援

指揮を執っていた士官が狙撃され死亡、指揮系統を失った敵は後退…いや、撤退した。
山城は深追いはせず、脅しの2・3発を撃つと、エルフ達の保護に向かった。

杉下
「これで、完全なる事実となりましたね」

ユリアヌス
「えぇ…しかも、事はかなり深刻だ」

大使と現地指揮官は事の重大性を再び認識していた。

ユリアヌス
「この陣地の拡充、部隊の増援も必要だな」

杉下
「えぇ、それにこれは早くエルフ族達との連絡をとった方がいい」

負傷したと思われる人達を横井が診る。
山城は直ぐに警戒態勢をとっていた。

結局、その後は何も無く、負傷したエルフ達を優先的にトラックに

乗せて後方に送った。
全員の輸送が完了し、再び演習場に戻ると……大事になっていた。
既に残りの自衛隊三個分隊は到着していた。
しかし……それよりも多くいた……

山城
「陸軍の衛生部隊…それに、工兵部隊！？」

……ここは災害現場か！？…と訊きたくなる程だ。

杉下
「思った程よりは早く来ましたね。さすがだ」

山城
「杉下さん…これはどうゆう…」

杉下
「戦闘関連部隊は一個小隊……だが、後方支援部隊は衛生二個中隊に工兵二個中隊です」

山城
「それは…自然災害時における陸軍の初動派遣数…まさか！？」

杉下
「野党…特に福島みずほの社民党が知りたかったのは派遣される『戦闘部隊』だ。だから、現地の自衛隊一個小隊と言ったら満足していた……その後で『緊急災害救助訓練』の名目で衛生部隊と工兵部隊を派遣させたのさ」

山城

「……それ、福本次官ですね…考えたの」

杉下
「そうだ」

……あの人はある意味曲者だな……と山城は思った。

杉下
「既に架設部隊が仮設橋を作る様ですね。演習場の拡張も…衛生部隊は先ほどの避難民の治療ですね」

すると、また1機の清空輸送機が着陸する。

杉下
「今度は主計科ですかね？　今日は美味しいお味噌汁が飲めるかな？」

山城は少し呆れた。
杉下にでは無く、ここまでの事を済ませてしまう、福本次官にだ。

到着した主計科……陸軍では補給科……は直ぐに搭載していた野外炊具を降ろし、早速調理を始めた。
僅か４５分間で２５０人分の味噌汁（他にも作れるが）を作ってしまう。
士官学校でも、野外演習で調理してもらった事もあり、山城も知っている。

シルヴィア

「……美味いな、このスープは！」

山城
「…なにしてるの？」

シルヴィア
「このスープの味見だ。先ほど、主計科に頼まれた」

山城
「……それ豚汁…あと、補給科…」

……今日は豚汁か……おこぼれ位は貰えるかな……ってなに考えてんだ？
エルフ達に配られている豚汁を見ながら、山城は思った。

遅い昼食をとった山城に杉下が近付いて来た。

杉下
「事態が緊迫しています。直ぐにでも出発しようと思いますが…」

山城
「それについては構いません。今直ぐにでも」

杉下
「…そう言うと思いました。先ほどシルヴィアさんに言いに行ったら、「あいつも準備は出来ている」と言ってました」

山城

「…まあ、以心伝心の仲ですから…パーティーは？」

杉下
「私と君、シルヴィア、レイ、波木二等兵の５人です」

山城
「なるほど」

杉下
「レイさんの話だと、約半日に行けるそうですよ」

山城
「…少し、強行軍ですね」

杉下
「事態が事態ですから」

山城
「わかってますよ…では、行きましょう」

次号へ

１３２　後方支援（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３３　夜間行動

ごそごそ…ごそごそ……

山城達は森の中を歩いていた。
レイの案内で、エルフ族の代表と会う為に歩いている。
しかしだ……既に日も暮れている為、視界は悪い…一応、懐中電灯は使っているが、念のために光は細くしている。

シルヴィア
「…しかし、この暗さでよく普通に歩けるな」

レイ
「それはここが私達の住み処ですから…庭みたいな物です。目隠しされても歩けますよ」

山城
「あはは…それは頼もしいや」

波木
「あの～…まさかこのまま夜間行軍ですか？」

杉下
「えぇ、そうですよ…と言いたいところですが、休憩があります」

波木
「…よかった～」

シルヴィア
「おいおい…」

呆れた様に呟くシルヴィアだった。

ユサユサ…ユサユサ…

シルヴィア
「ん？」

山城
「…気付いたか、シルヴィア？」

波木
「…何か居ますね」

直ぐに波木は自らの狙撃銃の初弾を装填する。

杉下
「敵……ですか？」

山城
「いえ…この状況下を考えれば敵の可能性よりもエルフ族の可能性があります」

何故かって？…自分達を包囲出来るのはこの森を知っている者位だ。

シルヴィア
「レイ…味方だったら頼むわ」

レイ
「え、えぇ」

まあ、念のためとは言え、敵の可能性を残さなければならないとゆうのはキツい。
その後、ジリジリと見えない相手とのにらみ合いが続く。
しかし、それは唐突に終わった。

「……レイ？」

レイ
「族長！！」

山城
「…へえ？」

いきなりの事にすっとんきょうな声をあげてしまった山城。

「レイ！　レイなのか！？」

レイ
「族長か！？　よかった～！　役目を果たして来たぞ！」

シルヴィア
「まあ…結果オーライ？」

杉下
「そうだね」

レイ
「紹介しよう。私が生まれた族の族長だ！」

「やれやれ…エルフ第１１族族長のバンクスじゃ。お主らが噂の日本人か？」

杉下
「はい、私は大日本帝国大使の杉下将です」

バンクス
「ふむ…言葉の意味は解らんが、とにかく来てくて助かった…」

レイ
「族長、姫様はどうした？　姫様にこの事を伝えねば！」

バンクス
「落ち着け…今、姫様はお休みになられておる。ここのところ奴等は夜でも動くから、誰も彼もろくに寝てもおらぬのだ」

これを聞いただけでも、山城は事態の深刻さが伺えた。
と、同時に敵が焦っているのだろうと感じた。
多分、自分達が介入する前に事を終わらせる為に……

バンクス
「しかし、今夜は何も起こらん。何故だろと思っておったら、５人

程の人間が警戒網の中に入ったと聞いたが…レイ達にで良かった」

本当に嬉しそうに言うと、族長らしい威厳ある声で…

バンクス
「見張りを残し、皆引き上げるぞ」

そう言うと案内するかの様に先頭に立って歩いた。
その間に山城は気配で気付いた。
この様子では下を見て２０人…もしかしたら３０~４０人程のエルフ達が自分達を囲んでいたのだろう。

翌朝……

レイ
「おはよう！」

山城
「おはよう」

その後、バンクス族長に案内され、彼の村（また、レイの故郷）へ案内され、寝床へと案内された山城一行。
念のため警戒しつつ眠っていたが、結局なにも起こらず、朝を迎えた。
そして、定時に目が覚め、外に出たところで、レイと会った。

レイ

「眠れた？」

山城
「寝首を切られない様に警戒はしてだけど…寝れた」

レイ
「皮肉？」

山城
「まあね…で、何か？」

レイ
「姫様が会って下さるそうだ、朝食の後、私がお連れする様に言われた」

山城
「それは良かった」

さて……対面といきますか……

次号へ

１３３　夜間行動（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３４　エルフ族との協議

４月１３日　大森林地帯

朝食を終わらせ、レイに案内されたのは比較的大きな建物……レイによると、集会場との事……に案内された。
中に入ると既に各部族の族長達が円形になって座って待っていた。
レイから聞いた話だとエルフ族は１５・６ほど存在しているそうだ。
そして、山城達と正対する位置にいる族長が各部族を纏める第１部族の座る場所なのだが……

山城
「……え？」

シルヴィア
「ほう、これは珍しい」

山城達が見たもの…それはファンタジー小説なら『ダークエルフ』と称していい少女……しかも、自分やレイと年は変わらないのではないか？…と思う程若い。

バンクス
「姫様、レイが命を果たして参りました」「そうか…急がせて済まないな、レイ」

レイ
「い、いえ！　我らエルフ族存亡の時ですから！」

……ここは戦国時代か？…と山城はツッコミたいが、こんな非常時に非常識なので止めておく。

「日本の方々、私が我らエルフ族の『纏め』の第一部族族長のルイーズです」

……なるほど、確かに『姫様』だ。
しかも、お飾りでも無く、堂々と有りながら低姿勢…自らの現状を充分にわかっている。
まあ、他の族長を見ればそれは一発で解るが。

その頃、波木二等兵は暇を持て余していた。
何せ、只の一兵卒に過ぎない波木は山城達と族長達の協議は参加する理由がない。
そこで、彼は手頃な気に登って暇を潰していた。
しかし、予め山城から聞いていたが、さすが『森の住人』、周りの木から自分より年下の子供がスルスルと上がって来る。
生まれた村では木登りには自信があった波木も、さすがに負けを認めざる終えなかった。
しかし、そんな暢気な時間は直ぐ終わった。
それはふと気付いた。
視界の隅に動く物影を見たからだ。
直ぐに首から掛けていた双眼鏡（山城から貰った）を使って見る。
双眼鏡から見えたのは……

波木
「…間違い無い、敵だ！」

直ぐに滑り降りると叫んだ。

波木
「敵襲！！！」

その頃……集会場では杉下大使と第1族長ルイーズを中心に協議が行われていた。
日本政府としては現在の一個小隊から規模を増やそうとすると、出来れば国会、あるいはそれに準ずる組織・団体からの要請であるが望ましい。
それならあの小うるさい社民党も黙らざる終えない。しかし、だからと言って、大森林地帯に一個師団も必要は無いとも考えていた。
それほど多数では逆に大森林地帯での小回りが効かないからだ。
福本次官の算出では日本の一個中隊とシリルティア側からの一・二個中隊で手を打ち、後はエルフ族に武器支援を行う事でどうにかする気だった。
こうなると、費用は？……となるのだが日本政府はある意味度外視していたし、また、日本政府はこの状態を維持し、抜ける事自体を考えていなかった。
これは現場の山城や杉下だけで無く、政府・軍の一部しか知らない事だった。
とにもかくにも、現段階での支援は惜しみ無くする気だった。

ルイーズ
「ですが、『国』として認定できますか？　我々に『王族』は居り

ませんよ？　この１６部族が集まった『部族会議』で取り仕切っていますから…」

確かに、微妙に１６・１７世紀辺りの『国家』としての常識ならそうだろう。
しかしだ……

杉下
「いえ、必要有りません。我々の『国家』としての認定条件は、領域・国民・主権…この３つだけです」

ルイーズ
「…本当にその３つでよろしいんですか？」

杉下
「はい。この条件を今のあなた方に照らし合わしますと、領域はこの大森林地帯。国民はエルフ族の皆さん。主権は…解釈にもよりますが、ここに集まっている族長にある…となりますね」

まあ、この状態を『間接民主制』と言っても間違いは無いと思うが。

波木
「た、大変です！」

その時、波木が飛び込んで来た。

山城
「どうした、波木！？」

波木

「あ、大変です、少佐殿！　敵部隊と思われる縦隊が接近して来ます！」

やっぱりか！…と山城は思った。
族長達の驚き様を見れば、ここがなぜ見付かったのか解らないのだろう。

山城
「シルヴィア、行くぞ！」

シルヴィア
「わかった！」

次号へ

１３４　エルフ族との協議（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３５　村の防衛戦　１

山城からしてみれば、レイを引き渡せと大使館で騒がれてからスパイが居る事は予想出来ていた。
そして、今回の襲撃はそれを再確認する事になった。レイの話ではこの周辺には見張りと罠が張り巡らされている。
しかし、敵はその罠に嵌まる事なく接近している。
と、言うことは……

山城
（やはり、スパイが居るな……口には出さんが）

シルヴィア
「どうだー、山城？」

山城
「ぶっちゃけ言ってしまえば、本格的侵攻部隊だね」

兵隊の数が多い…偵察中に見付けたにしては、規模が大きい。
かつ、何故か重装備だ。

山城
「…これは少しキツいな」

上手く木の陰に隠れる様なルートだから全体数は把握出来ないが、ゲリラ戦で耐えれるかとなると解らない。

レイ
「バカな、我らエルフの戦士を見くびっているのか！？」

山城
「違う、こちらにはハンデがあって、向こうには無いんだ」

登っていた木から降りた途端、レイが反論する。
しかし、山城が言う様にこちらは非戦闘員を抱えているが、向こうは容赦無しだとゆう事が敵との大きな違いだ。

山城
「波木、前回同様敵将校に的を絞れ」

波木
「はい」

山城
「あとは…参加するエルフと俺達でどこまで敵を削れるか…だな」

だいたい、山城・シルヴィアの６４式小銃と波木の狙撃銃では大勢は動かない。
残念ながら、今回は『数』が足りない……

ローエン
「おや、調度いい所で会いましたね」

シルヴィア
「ローエン大尉に…ユリア隊長!?　なぜ、ここに!?」

ユリア
「あなた方が森林地帯に入ったと聞いて、我々も後を追って来たんです」

山城
「ですが…誰が道案内を？」

ローエン
「あなた方が保護したエルフ達の１人が案内役をかって出てくれたんですよ」

あぁ、なるほど……

ローエン
「ですが、到着して早々これですから」

山城
「いえ、我々にはグットタイミングですよ」

そう言うと、直ぐに作戦会議を始める。

山城
「大部隊が村に入るとなると正面の拓けた場所しか有りません…８０数挺の銃でも一ヶ所に集中すれば勝てます」

ユリア
「よし…小隊、入り口を囲む様に左翼に展開するわよ」

ローエン
「なら、こちらは右翼に展開する」

山城
「レイ、ユリア隊長達の案内を頼む」

レイ
「わかった」

シルヴィア
「よし、我々も行くぞ！」

山城
「あぁ、行こう！」

そうこうしている内に戦闘は始まっていた。
既に配置に就いていたエルフの戦士達が弓を使い、敵に矢を放つ。
名人級…とはいかない者もいるが、次々と敵に当てていく。
何せ彼らは自分達の行動圏内で戦っているから、どこで敵を襲えるかわかっているからだ。
しかし、向こうは数を頼りに進んで行く。
つまり、それだけ応戦している人間が少ないのだろう。
しかし、まさか予想外の援軍が来て、罠が大口を開けて待っているとは……

レイ
『こちら、レイ。配置に就いた』

ヘッドセットからレイの声が聞こえた。
念のために渡しておいてよかった…

シルヴィア
「……どうも不利だな」

山城
「仕方ないさ。今はこちらで時間を稼ぐしかないよ」

既にローエン大尉率いる一個小隊は物陰に隠れる様に配置していた。

山城
「出来る限り敵を引き付けます。いいですね？」

ローエン
「えぇ」

十字砲火を形成するにあたって敵を引き付ける方が効果的だ。
だからといって、引き付け過ぎるのは危ないが…。

相も変わらず縦隊で進んで来た敵に山城は苦笑した。半分力押しでやるつもりか……ならば、それがどれほど危ういか教えてやろう。

山城
「射撃体勢で待機…特にレイさん…早まって矢を放たないで下さいよ」

レイ
『……』

まあ、気持ちは解らなくも無いが、１人の為に計画を台無しにする

訳にはいかない。

シルヴィア
「おい、山城…」

レイ
『言わなくていい…シルヴィア』

山城
「……済まない」

……こんな会話を交わしながら、敵の接近を待つ……

次号へ

１３５　村の防衛戦　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

136　村の防衛戦　2

ザクザクザクザク……

16～19世紀のヨーロッパ軍隊よろしく縦隊で進んで来た敵部隊。
どうやら数で押して来たらしく、一部欠けている部分もある。
だが、向こうは構わず進んで来る。
しかし、それも村に入るまでだった。

山城
「よし…撃て！！」

ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！……

ズダダダダダダダ！

山城の合図の下、それまでジリジリしながら待っていたローエン大尉・ユリア隊長指揮下の2個小隊は手持ちの小銃・軽機関銃の引き金を引いた。
障害物が無く、隠れる場所が無い所で縦隊で頭から突っ込めばどうなるか？
それは簡単……クロスファイヤの餌食になる……

……初戦は呆気なかった。確かに縦隊はまだ連発式小銃では無かっ

た（つまり、火縄銃・フリントロック式小銃）時ならば、小銃による火力を最大限に活かせるだろう。
しかし、こう言った森林地帯等での戦闘多発や、銃器の発達の前には縦隊は被害を増すだけなので、最近の軍隊では戦場で使う事は無い。
そんな余り使わない縦隊で十字砲火を食らって隊列を崩し、退却した。

山城
（だが…妙だな……これならエルフ達もこれ程苦戦はしない筈…）

そう思った時、ヘッドセットから波木の声が聞こえた。

波木
『少佐殿！　戦車が2台接近！』

山城
「はぁ、戦車！？」

どうして戦車が？…と言う疑問よりも、この森で戦車が使えるのか？…との疑問が湧いた。
確かに使えない事は無いだろうが、こんな森で使うとなると……

山城
「……不味いよな…」

シルヴィア
「おい、山城！　何か来るぞ！」

…さっき波木が言った『戦車』だろうな…と思いつつ、双眼鏡を覗くと……相手の正体に笑って良いのやら、呆れて良いのやら複雑な心境になった。

山城
「……なんでここにいるかな～…イタリアのタンケットが…」

それは日本軍欧州派遣軍では『弱すぎて使えないから救急車になった』として有名なＬ３／３３軽戦車である。軽戦車……と言っているが、初期型８ｍｍ機関銃×２、最終型は２０ｍｍ機関銃×１で、装甲は下手をしたらライフルで撃ち抜けた…なんて噂された『タンケット』である。
よく、ドイツの１号戦車、日本の９４式軽装甲車ＴＫ等と比較される事が多い。
しかし……イタリア参戦時に、全イタリア戦車保有数の七～八割を占めていた事は呆れるべきか、同情すべきか……

山城
（キャタピラーで走ってるから、戦車と思ってたんだな……それにいくら弱装甲でも、矢ぐらいは防げるよね…）

……だから、エルフ達もこんな状況になったのか？シルヴィア「勝手に納得をしとらんで、説明せんか！！」

バシーン！

……何故かハリセンで叩かれた。

山城

「…どこから出したの？」

シルヴィア
「別にどこからでもよかろう」

山城
「…そうか…あの軽装甲車なら重機関銃に徹甲銃弾を装填して撃ち込んだら抜ける」

ローエン
「…ありませんよ？」

山城
「……だから、困ってるんです」

まさかイタリアのタンケットが来るなんて予想はして無かった。
まあ、タイガー戦車やＴ３４とかが来るよりは遥かにマシなんだが……

山城
「さて…どうしたものかな……」

苦笑しながら考える山城だった。

次号へ

１３６　村の防衛戦　２（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

137　村の防衛戦　3

「撃て！　我らの技量を見せてやれ！」

Ｌ３／３３軽戦車をどうするか考慮している時、森の中から聞き慣れた声が聞こえた。
次の瞬間、多数の銃声に混じって砲声が聞こえた。

ドカーン！

……多分、上か横に命中した砲弾により、Ｌ３／３３軽戦車が一台炎上する。
その後から付いて来ていた歩兵部隊は驚く暇も無く、銃撃と砲撃の餌食になる。

シルヴィア
「うわ…」

山城
「まあ…戦車のアタックポイントに命中したから余計だな…」

しかも、軽戦車ならぬタンケットだからね…

ローエン
「だが…誰がこんな事を？」

山城
「ユリアヌス伯爵でしょう…この付近で山砲とボルトアクション式

小銃を持ってるのはユリアヌス伯爵ぐらいですから」

実際、あの声はユリアヌス伯爵の声だったし…。

シルヴィア
「話題を変えて済まないが、あの…タンケットとやらはどうする？」

山城
「どうするかな…」

隣で炎上している僚車が邪魔で曲がる事は不可能……後は前進か後退ぐらい…。では……敵は？

シルヴィア
「あ、逃げた」

失敬、第三の選択肢を忘れていた。
敵はＬ３／３３軽戦車を放棄して逃げてしまった。

山城
「よし…レイさん、あの拓けた所に落とし穴とかあります？」

ヘッドセットでレイに聴く。

レイ
『大丈夫だ。そんな事をすれば我々が怪我をする』

山城
「わかりました。前進しましょう。敵情も気になりますし」

炎上したＬ３／３３の為に敵は見えない。
山城達は前進した。

シルヴィア
「……凄い事になっておるな…」

山城
「まあ、大砲と小銃、弓矢の攻撃を受けたからな…」

敵が進軍して来た道には遺棄された死体と武器が散乱していた。
出来れば余り見たくない光景だが……。
しかし、すでに敵の姿は見えなくなっている。
その代わり、進撃して来たと思われる方向からは未だに銃声が鳴り響いている。どうやら追撃している様だ。

ユリアヌス
「おや、皆さんお揃いで」
山城
「やっぱり……どうして、ここに居るんですか?」

ユリアヌス
「森に放った偵察隊が先程の部隊を見付けてね……直ぐに来れる歩兵隊と砲兵隊を連れて駆け付けた訳さ」

山城
「…何時の間にやら、皆がここに集まってるよな～」

シルヴィア

「それは置いとくとして……あれをどうする？」

炎上するＬ３／３３軽戦車を指差す。

山城
「あ、誰か大量に水を持って来て下さーい！　このままだと延焼しますよー！」

杉下
「ユリアヌス伯爵も来ましたか」

山城
「はい…ですが、大丈夫ですかね？」

短時間で終わった筈なのに、もう太陽は真上を通り過ぎ、やや傾いた頃、後処理が終わった山城が杉下の所に来ていた。

杉下
「えぇ、どうせ、ユリアヌス候にはこちらに来て頂く予定でしたからね」

山城
「森の向こう側を納める首領としてですか？」

杉下
「兼シリルティア王国軍代表者の１人としてです」

山城
「…え？」

杉下
「既にアーネリア陛下からの通知は来ているそうですよ。それに頭もキレますから」

山城
「…なるほど。話は既に済んでいた…ですか」

杉下
「えぇ…ところで、例のＬ３／３３軽戦車をどうするつもりですか？」

山城
「牽引車にでも使おうかと思います。実戦に出して、殺られたらたまりませんから」

杉下
「お任せします……何かあるんでしたら、今の内に言っといて下さい」

山城
「はい？」

杉下
「例えば…スパイの可能性とか」

この時、山城は内心驚いた。
何故なら、スパイの話はシルヴィアにしか話していないからだ。

杉下

「あの場を見れば解りますよ。まあ、君に関しては前々から気付いていた様ですがね」

これを聞いて観念した山城は声を小さくして、思うところを話した。

杉下
「なるほど…言われてみれば、最初から変でしたからね」

山城
「えぇ…ですが、この事は内密に」

杉下
「わかっていますよ。無用な混乱を引き起こさないのも外交官としての腕の見せどころだからね」

山城
「では…」

杉下
「あ、それと、既にこちらに工兵隊と衛生隊が到着しますから、よろしく」

山城
「……わかりました」

……まったく、準備のいい事だ。

次号へ

１３７　村の防衛戦　３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１３８　昼がダメなら夜に来る（前書き）

新米士官
「海保の航海士は逮捕せず…だってさ」

山城
「任意捜査だってな。あと、処分はされるだろうが」

福本
「それは仕方ない…最も悪い政府の奴らは黙ってるがな」

新米士官
「ある意味情けないよな～、最も覚悟する政府の閣僚共に覚悟が全然無いし」

山城
「それよりも…作者が一番言いたいのは昨日のＮＨＫニュースで…」

新米士官
「そう！　海上自衛隊に新しい潜水艦が出来た事！！」

福本
「え～と、『蒼龍』型（あえて漢字）だな…一番艦『蒼龍』二番艦『雲龍』、三番艦が『白龍』だっけ？」

新米士官
「それで四番艦は『けんりゅう』だから……漢字だと『剣龍』？」

山城

「ついこの間、新型の『秋月』型５０００トン護衛艦『秋月』が出来たって作者は知ったのにね～（雑誌で）」

新米士官

「う、うるさい！」

１３８　昼がダメなら夜に来る

工兵隊と衛生隊が到着した後は別の意味で忙しかった。
衛生隊は怪我人や病人の診察・治療に専念し、工兵隊は簡易式の野外入浴機材を持って来ており、直ぐにこれを組み立てて大型軍隊用テントの中に入れた。
さすがの山城も、これを持って来た時は福本伊吹次官の用意周到ぶりに呆れていた。
この調子で行くと、次はどんな物を持って来てくるか解らない。
しかし、そんな山城の心中とは反対に、エルフの子供達は物珍しそうにこれを見ていた。
世の子供は純情と素直が売りだとは正にこの事だ。
そして、この野外入浴施設が出来上がると直ぐ様、エルフ達に開放された。
多分、衛生観念を考えての事だろうが、やる事が早い。
やる事が早いと言えば、既に演習場と休農地の整地を完了しており、四発輸送機なら2・3機を待機出来る場所を確保済みだとゆう。いくら自衛隊でも、ここまで事をやったら政権を揺るがす大事になっただろう。しかし、大日本帝国陸軍工兵隊には『現地感情を乱す恐れのある行為については現地領主との協議の上で行う事』とお達しが出ているそうだ。
まあ、元々風紀面に関しては世界中の軍隊が敵わないと賛美する程の事だから、余り心配する事は無いが。

シルヴィア
「風呂まで持ち出して…ここを宿にするつもりか？」

山城
「いや、衛生上の問題云々も有るから」

何せ戦病に対して日露戦争で陸軍は大変な目にあっている…まあ、原因の一端が小説家兼軍医だった森鴎外に有るのだが。

山城
「それに…日本人は風呂好きだ」

シルヴィア
「……納得できるな」

全てが終わった頃、既に日が暮れたいた。
そして、村の中心の広場になった所でエルフ達＋調査隊とユリアヌス伯爵が率いて来た部隊、工兵隊が飲み、食い、騒いでいる。
衛生隊は交代で、また、ユリア隊長の親衛隊は衛生隊の手伝いをしている（交代で）。
そんな光景を山城・シルヴィアは離れて見ていた。

シルヴィア
「…こんなに騒いで大丈夫なのか？」

山城
「なんで？」

シルヴィア
「昼間叩かれた敵が、油断する夜に逆襲してくるかもしれないであろう！？」

波木
「大丈夫ですよ。だって、夜襲は我が日本帝国陸軍の十八番ですから」

シルヴィア
「その割にはばか騒ぎし過ぎではないか？」

山城
「あ～、大丈夫大丈夫。その事なら既に対策済み」

そう言うと山城は近くにあったケースを引き寄せた。そして、カパッと開ける。

波木
「…何ですか、これ？」

そう言うだろと思って簡単に説明した…補則も加えてだが……

シルヴィア
「ほう…考えたな」

山城
「やったのは工兵隊だよ…まあ、温故知新ってやつだね」

……深夜

既に宴会並みだったばか騒ぎは終わっていた。

騒ぎ疲れた者は仲間に肩を貸されて寝床で寝ていた。そんな中、森の中でゴソゴソ動く影があった。
昼間に攻めて来た軍勢が夜になった事により、逆襲する為に夜襲を仕掛けて来たのだ。
まあ、このままだと大事だが……。
その時……

カランコロンカランコロン！！

彼らはその音に驚いた。
いきなり響き渡った音に、慌てた。
しかも、その音は鳴り止まず、その内の1人が転けて漸く気付いた。
なんと、自分達の足首かそれより少し高いぐらいの所に一筋の紐が掛かっていた。
この紐に木で作られた変な形の物が付けられており、一定間隔克つお互いが接触して音を出す様になっていた。
しかも……

パン！パン！パン！ダン！ダン！ダン！パン！ダン！……

追い打ちを掛けるがの如く発砲音が鳴り響いた。

無線
『こちら第三分隊、敵の夜襲を阻止しました』

ユリア
「了解…警戒を続けろ」

無線
『わかりました』

ローエン
「いつの間にこんな仕掛けを？」

山城
「工兵隊が野外入浴機材を組み立てている間に、森に入っていた工兵隊が仕掛けました」

山城達が寝床として使っている建物の中にはレイ、ユリア隊長、ローエン大尉、ユリアヌス伯爵、杉下大使が集まっていた。

山城
「事は実に簡単、日本の戦国時代の知恵と現在技術の組み合わせですから」

先程のケースには警備用レーザーポインター（よく映画に出てくるあれ。触れると警報が鳴る）を設置した場所と警戒線を簡単に表した画面がある。
そして、先程まで点いていた赤い光点は消えていた。

山城
「あとは人を置いて、暗視装置を渡せば撃退出来る…そいゆう寸法です」

シルヴィア
「これで敵は簡単に攻め込んで来ないとゆう訳だな」

ユリアヌス

「これなら敵も当分は警戒するだろう…昼夜共に失敗したんだからね」

山城
「えぇ…あとは打開策さえ有れば言う事無しなんですがね」

次号へ

１３８　昼がダメなら夜に来る（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしています。

１３９　悩める主席参謀

４月１４日　エルフの村

難しい話（外交云々）は杉下とユリアヌス伯爵に任せた山城は借りた建物で今後の策を考えていた。

山城
「さて……どうしたものか…」

今、山城が必要に感じていたのは情報だった。
今のところ、こちらが『守り』に徹しているが、『ただたんに守っている』（いくら最重要根拠地とは言え）に過ぎない。
戦史を知る者から言わせてみれば、『ただたんに守っている』では駄目だ、戦術・戦略的な事を考えて行動する事が求められる。
しかし、行動を起こすには情報がいる……例えメモの切れ端の様な情報でも……

山城
「……不味いな…」

シルヴィア
「何が不味いのだ？」

外に出ていたシルヴィアが入って来るなり訊いていた。

山城
「情報が無い事が」

シルヴィア
「なるほどな…エルフの料理は美味しいのにおかしな事を言っていると思ったぞ」

山城
「陰に隠れて料理が不味いなんて言わないよ……ところで、通信分隊は作業完了？」

今朝がた到着した陸軍の通信分隊がアンテナを張るために作業をしていた。

シルヴィア
「あぁ、もうすぐ配線を繋いで向こうと話すそうだ」

通信部隊の派遣となると、余りにも本格的だ。
いったい福本伊吹次官は陸軍とどこまで話をつけたんだ？

シルヴィア
「あぁ、それと、面白い話を聞いたな」

山城
「面白い？　どうな？」

シルヴィア
「どうやら、陸軍とは次官レベルで話はついてるそうだ」

山城
「陸軍次官か…」

誰だろうと考えてみれば、候補人数が多い。
それに人事異動などで変わっているかもしれない。

山城
「あの人は人脈有るからな……しかも、あっちこっちに」

何せ天下のコンビ『福本＆マリーダ元帥』の息子だ。それだけに人脈の幅は広い。
しかし、自分の利益の為に人脈は使わない人だ。
これは福本元帥の血を引き継いでいる。
実際、『共産主義者最後の武装抵抗』と言われた『浅間山荘事件』で冬季訓練の為、たまたま陸戦隊を率いて長野県に来ていた福本伊吹少尉（当時）は事態を知ると本部のある地元署に乗り込み、早期解決の為、陸戦隊を先頭にした強行突入を主張したのだ。
これに対し、警察も面子が有るから、激論を交わした結果、福本少尉が単独撃破（論破）して、２月２３日に山荘へ福本少尉を先頭に突入、犯人３名に重傷（命に別状なし）、１名に軽傷を負わせ、人質を無事に救助したが、陸戦隊はテレビに映る事無く引き上げた。
ちなみに強行突入他、この件に関しては国防省及び福本元帥も警察に対し圧力は加えていない。
それどころか、陸戦隊突入の事実を警察に隠す様に本人が言った程だ。
……って、話が無茶苦茶逸れてるし…。

山城
「今必要な物は?…と訊かれたら、まず偵察機と答えるな」

しかも、赤外線探知装置や写真撮影機能付きのレシプロ双発偵察機が……

シルヴィア
「そんな物が有るのか？」

山城
「……」

そう……問題はそこ。
確かに赤外線探知装置や写真撮影機能等々を搭載した物はある。
問題は……その搭載機がジェット機だと言う事。
ジェット機運用だと考えると、まず演習場の距離が足りない。
また、アスファルトかコンクリートで地面を固める必要がある。
しかし、そんな事をすれば後々面倒だ。
だいたい、ジェット機は空母以外の運用は考えていない。
つまり、ジェット機だと運用した後に制限が有る為、使えない。

山城
「う～ん……」

あり得るのは……空軍が試作で作ったホークアイの偵察用改造型か？

山城
「……難しいな～」

まあ、普通のレシプロ偵察機でもいいんだけど…。
贅沢を言えば欲しい……

山城
「まあ…望んで出てくるなら苦労はしないよな…」

次号へ

１３９　悩める主席参謀（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４０　神出鬼没の海軍次官

山城
「……はい？」

やっと繋がった通信機器（無線機）で出た人間の声を聞いて間の抜けた声を出す山城。

福本（伊吹）
『おいおい、海軍次官がわざわざ出たのに間の抜けた声を出すなあ？』

山城
「…いや、あの……福本次官、あなたは今どこにいらっしゃるんですか？　自分は確かシリルティア王国領内の調査隊仮設本部に繋いだ筈ですが……決して、国防省海軍次官室には繋いでおりませんよ？」

福本（伊）
『その君が言った仮設本部にいるんだが？』

この返答を聞いて山城は少し頭に手を宛てて考えた。そして、１０秒後に……

山城
「あの…担いでませんよね？　ふざけてませんよね？」

福本（伊）
『おいおい、大丈夫か、主席参謀？　悪い物でも食べたか？』

山城
「いえ、悪い物は食べてませんよ…それよりも……なんであなたがそこに居るんですか！？　仕事はどうしたんですか！？」

福本（伊）
『それは君、あれだよ、視察だよ』

山城
「嘘をつかないで下さい！　次官室から逃げて来たんでしょう！？」

福本（伊）
『はあ…君には上層部の苦労と言う物が解らない…』

山城
「人を勝手に主席参謀にした本人が言う口がどこに有るんですか！？」

福本（伊）
『はあ～ぁ…暫く見ない間に我が強くなったかね？』

山城
「えぇ、お陰様で…こっちは今からどうしようかと悩んでいるところです」

福本（伊）
『その様子だと、偵察機が必要か？　ホークアイの様な機体が？』

山城
「……よく解りましたね？」

福本（伊）
『当たり前だ。君よりは長く軍隊に居るんだ。それに森林地帯で敵を探すなら、空から見た方が早い』

山城
「えぇ…それも、レシプロ機です。出来ればホークアイぐらいの大きさの機体が欲しいところなんですけどね」

運用等を考えると、空母搭載を考えたサイズの方が使いやすい。
まあ、ジェット機に給油機を張り付けて派遣する方法も有るが、タイムラグは出来る限り出ない様にしたい。
リアルタイムと言うならこちらも考えやすい。

福本（伊）
『やはりか……出来れば空軍が余剰ホークアイを改造した『ホークアイ偵察型』が要るんじゃないか？』

山城
「贅沢を言えば……ですが、無理ですよ」

福本（伊）
『何故かね？』

山城
「出来れば今日中に回して欲しいんです。ですが、空軍も突然言ったら混乱するだろうし…」

福本（伊）
『山城少佐、私はこれでも、神出鬼没と言われた男だよ』

山城
「えぇ、知ってます。兵棋演習・野戦演習であっちこっちに部隊やあなたが現れて敵を大混乱にしたから付いたあだ名が『神出鬼没の伊吹』」

福本（伊）
『あっはっはっは！　あの時は楽しかったな～』

山城
「今もその神出鬼没はご健在ですね」

福本（伊）
『うむ……だが、最近は周りに顔が効くからな。この役職は嫌いじゃない』

山城
「……まさか、空軍から『ホークアイ偵察型』を借りたんですか！？」

福本（伊）
『あぁ、空軍は『実戦訓練』の名目だ。なに、福島辺りが騒ぐかもしれんが知ったこっちゃない。あいつは只の理想主義者兼無学者なんだし』

山城
「…本人が聞いたら、名誉棄損で訴えられますよ？」

福本（伊）
『なら、国防の一端を担う福島みずほ議員には1日陸戦隊体験をし

てもらおう。６４式小銃と装備を担いで弾幕射撃を潜り抜けてもらうか』

山城
「……あの…罰ゲームですか？」

福本（伊）
『ん？　そうかね？　まあ、そうゆう事だ』

……無理矢理終わらせてませんか？　福本伊吹海軍中将？

福本（伊）
『あぁ、それとだな』

山城
「なんですか？」

福本（伊）
『今からそちらに向かうぞ。よろしくな』

山城
「……はい？」

福本（伊）
『では、以上だ』

この言葉を最後に通信は終了した。

無線を元に戻し、頭を抱えながら杉下の所に向かった。
すると、小休止になっていたのか、たまたま外に出た所で会った。

杉下
「おや、どうしました？」

山城
「いえ…実は…」

……説明中……暫くお待ち下さい……

杉下
「ホークアイの事は自分の範囲外ですが…福本次官が来ますか…噂通りの神出鬼没ぶりですね」

山城
「えぇ…お陰で悩みの種が１つ消えました」

杉下
「ほう…よかったですね」

山城
「…その代わり、頭痛の種が増えそうです」

シルヴィア
「あ、ここに居たのか、山城」

山城

「ん、なんだ、シルヴィア？」

シルヴィア
「少しそこらをブラ～として来る。ルイーズ様と一緒だ」

山城
「そうか…気よ付けろよ。何せ…危険だからな」

スパンが居る…と言うのを避け、無難な言い方をする。

シルヴィア
「あぁ、わかっておる。ヘッドセットも着けていくぞ」

山城
「お好きどうぞ」

次号へ

１４０　神出鬼没の海軍次官（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４１　次官も来たれば危機も来る

福本（伊）
「よう！」

山城
「……軽装甲機動車で来たんですね」

福本（伊）
「もちろん、自分で運転してだ」

山城
「いえ、余計な捕捉付けなくていいですから」

やって来た福本伊吹海軍次官兼中将を内心頭を抱えながら出迎える山城。

福本（伊）
「それで、現状は？」

山城
「昨日昼間・夜間に敵襲を受けましたが、撃退致しました」

福本（伊）
「ふむ…敵襲に関しては？」

山城
「はい。Ｌ３／３３軽戦車を投入して来ましたが、１輌は破壊、１輌は鹵獲し、現在は牽引車の代わりに使用しています」

福本（伊）
「…それで、間諜の疑いは？」

山城
「……黒、あるいは黒に近い灰色です」

あえて『スパイ』では無く『間諜』と日本語に言い直して、周りに悟られない様に喋る。

山城
「ただ…ネズミは何処に居るやら解りません」

福本（伊）
「…だから、およがせているいるのか？」

山城
「無闇にやったらバレますので…向こうが尻尾を出すまで表向きには静かにしておきます」

福本（伊）
「わかった……そう言えば、居候先の『彼女』は何処だ？」

山城
「…散歩です」

福本（伊）
「どうだ？　関係は進んだか？」

山城

「…いくら上司でも、個人的な事に踏み込まないで下さい」

福本（伊）
「いや～、気になるからさ～」

山城
「気にしないで下さい。これ以上、頭痛の種を増やされたら後に影響しますので」

福本（伊）
「やれやれ」

シルヴィア
（山城は大丈夫かな～…あの次官殿は最近勘が良いからな～）

ルイーズ
「どうしました？　シルヴィアさん？」

シルヴィア
「あ、いや～、こちらの事です。ルイーズ様」

ルイーズ
「まあ、『ルイーズ様』なんて…今は2人だけですから、ルイーズで結構ですよ」

シルヴィア
「では、お言葉に甘えさせていただきます。（やはり、一民族を纏める立場とは言え、我らと同じ年頃のお人だな）」

妙に関心しつつ、同情もするシルヴィア。

ルイーズ
「ところでシルヴィアさん。お訊きしたいんですが…」

シルヴィア
「なにか？」

ルイーズ
「あの…山城さんでしたっけ…お付き合いしているんですか？」

ズルッ！

シルヴィア
「な、な、な、な、な、なぜそう思うのですか！？」

滑りながらも、必死に聞き返すシルヴィア。
だって、必死に隠していたのにバレてるし……

ルイーズ
「だって、御二人がいる所だけ空気が甘いですから」

シルヴィア
「あ、甘い？？」

ルイーズ
「えぇ。それに私も年頃の女の子ですよ？」

シルヴィア

（確かに…色恋事に興味を抱く歳だな……私なんか半年前まで興味が無かったのだがな）

ルイーズ
「それで…どうなのですか！？」

シルヴィア
「い、いや……」

さすがに目を輝かせて訊いてくる相手に、シルヴィアもたじたじの様子……

シルヴィア
【チラリ】

ルイーズ
【キラキラキラ】

シルヴィア
【…チラリ（￣＿￣；）】

ルイーズ
【キラキラキラ（＊＿＊）】

シルヴィア
「（う、う～ん…）……はい、認めます」

ルイーズ
「やっぱり！！」

シルヴィア
（はぁ～～）

何故かこれだけで今日1日分の精神力を使いきった気がしたシルヴィア。

ルイーズ
「けど、いいですね。あんなお方とお付き合いされてるなんて」

シルヴィア
「そうかのう…」

ただの海軍士官で、士官学校でも『男女（おとこおんな）』と言われていた自分と始めて気があった異性……と言う出発点から始まったこの関係だが…

ルイーズ
「そうですよ。だって、エルフ族の言い伝えでは……」

シルヴィア
「……え!?」

言い伝えを聞いて驚くシルヴィアだった。

シルヴィア
（……言い伝えのう…）

ルイーズから聞いた言い伝えを聞いて、考えるシルヴィア。
しかし、甘い考えに浸っていても、警戒心だけは働いた。

シルヴィア
（！殺気！？）

それに気付いた瞬間、殺気がある方向から矢が……

シルヴィア
「危ない！！」

慌てルイーズを押し倒し、間一髪で避ける。

ルイーズ
「シ、シルヴィアさん？？」

シルヴィア
「ルイーズ、逃げるぞ！」

右腕を掴み、一目散に逃げるシルヴィア……

シルヴィア
（やはり、スパイの手が回っていたか！）

次号へ

１４１　次官も来たれば危機も来る（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４２　逃げる者と助ける者

福本（伊吹）
「そう言えば山城。出来れば今の内に第１族長に会っておきたいんだが…」

山城
「残念ながら、シルヴィアと共に散歩中です」

福本（伊）
「彼女と一緒？」

山城
「はい」

福本（伊）
「……そうか」

何か言いたげだった様だが、そのまま何も言わず納得した。

山城
（ふう…しかし、シルヴィアは大丈夫かな？）

あいつの事だから、変なヘマはやらないだろうが……

その頃……

シルヴィア
（…1、2、3、4、5……く、待ち伏せされたか）

森の中ながら、殺気の数を数え、方向から自分の逃げる方向を予想され待ち伏せされている事を察知するシルヴィア。

シルヴィア
（自分1人ならどうにかなるが……これではな…）

そう思いながらチラリとルイーズの方を見た。
まあ、彼女もエルフだから、ある程度は単独でも戦えるだろうが……

シルヴィア
（…今の時点で自力では脱出は無理だな…となると…）

直ぐに頭のヘッドセットのスイッチを入れる。
しかし……繋がらない。

シルヴィア
「慌て逃げたから、奥に入ってしまったか……ならば、周波数を…」

通信兵
「山城少佐殿」

山城
「どうした?」

陸軍の通信隊の為、『殿』を付けて呼ぶ通信兵の呼び掛けに山城は直ぐに返事をした。

通信兵
「はい。シルヴィア海軍大尉殿より通信です」

山城
「シルヴィアから？」

迷った……訳は無いだろう…何せルイーズ様と一緒だし。
なら……はぐれたか？

山城
「こちら山城。どうし…」

シルヴィア
『大変だ、山城！　どうやら『ネズミ』が情報を流した様だ…いきなり襲われた！』

山城
「な…無事なのか！？」

シルヴィア
『なんとかな…しかし、慌て逃げたから、どこに居るのか…』

山城
「くそ！」

ゴン！

吐き捨て、無線機本体が載った簡易机を力任せに殴る。
ふと、そんな山城の手から無線機が奪われた。

福本（伊）
「こちら福本だ。現状は？」

シルヴィア
『殺気から多人数に追跡されています…しかも、極めて練度の高い連中です』

相手が解っているだけに直ぐに口調を変えたシルヴィア。

福本（伊）
「よし…山城！　行って来い！」

山城
「はぁ、しかし……」

福本（伊）
「ここは任せろ。それよりも、重要人物が危険にあっているのを忘れたのか！！」

山城
「は、はい！」

返事をすると慌て鉄帽を被り直すし出て行った。

福本（伊）
「ふむ……通信兵、仮設本部に通信を繋げ」

通信兵
「わかりました」

シルヴィア
「無線だと丸聞こえだな」

向こうでのやり取りをヘッドセットを通じ聞いたシルヴィア。
まったく……ねじ込んだ様な命令を出したな……

ルイーズ
「なぜ…なぜ、敵がここに？」

シルヴィア
「（さすがにスパイがいるとは言えないしな…）さあ……敵の偵察隊かもしれません」

下手な嘘を吐きつつ、周りを警戒する。
何せ、周りは敵だらけと考えた方がいいからだ。
しかも、大使館で山城とやり合った敵だと……

シルヴィア
「ルイーズ様、移動しましょう……一ヶ所に居ては包囲されますから」

ルイーズ
「はい」

……今思えば、土地勘が無い私が誘導していいのか？

レイ
「な、な…」

山城
「しぃ！　今叫べば大混乱になる！」

波木
「……でも、3人でですか？」

山城
「大人数で行ったらバレるだろう」

走りながら事の説明する山城。

レイ
「それで、ルイーズ様はどこに！？」

山城
「解らん！」

レイ
「なに！？」

山城
「シルヴィアが急いで逃げたから現在位置不明！」

レイ

「ええい！　日本人の技術でどうにかならないのか！？」

山城
「今んとこ無理！」

出来ない事も無いが……それを長々と話す気にはならない。

レイ
「あぁ、役立たず！！」

山城
「済まんな！」

波木
「あの…言い争うのは後にした方が…」

…はい、正論です。

福本（伊）
『こちら福本。居場所の問題だが、ホークアイは既にそちらに向かっている。周波数は今のままだ。以上』

山城
「了解。（さすがに早いわ…次官は）」

次号へ

１４２　逃げる者と助ける者（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４３　居場所は何処？

それは突然だった。
多分、木の上に居たのであろう、敵が逃げていたシルヴィア達の前に現れた。
どうやら、女2人と侮ったか…あるいは功を焦ったか…ともかく、その敵兵はシルヴィア達に嘗めて掛かった……それがいけなかった。
シルヴィアは自らのサーベルに手を伸ばし、抜刀からそのまま相手の首に剣撃を叩き込んだ。
予想外の一撃に敵は防御する間もなく、首に直撃した。
その時シルヴィアは首の骨が折れるグキリッとゆうおとを聞いた様な気がしたが、一刻も早く逃げる為、捨て置いた。

山城
「くそ…何処だ?」

無駄とは解りつつ、周りを見回しながら走る山城。
もちろん、シルヴィアとルイーズを探しての事だが。

レイ
「大声で呼んでみる?」

波木
「止めといた方がいいですよ」

敵の居るかもしれない森の中で人探しに大声を出す……敵を呼び寄せる様なものだ。

山城
「早く来てくれ～、ホークアイ！」

無線
『こちらホークアイ…無線符丁『隼』。応答願う』

山城
「こちら山城。隼、聞こえるぞ」

ヘッドセットから聞こえた声に、山城は直ぐに応答する。

無線
『こちら隼。貴官以下2名を確認。これより『姫君』を捜索する』

山城
「了解。姫君は2人一緒だ。それ以外は敵と認識せよ」

無線
『わかりました』

そこで通信は切れた。
しかし、通信を切った後でふと気になった。

山城
（……ちゃんと見分けれるかな…色々と）

シルヴィア

「しまったな…」

ルイーズ
「どうしました?」

シルヴィア
「勢いで殺ってしまったが…敵にあそこを通ったと教える様なものだ」

ルイーズ
「ですが…生きていては余計に危なかったのでは?」

シルヴィア
「…う～…」

今から戻って死体をどうこうしても…それは『飛んで火に入る夏の虫』……

シルヴィア
「……とにかく、一歩でも遠くに離れましょう」

山城
「ち…森だと感覚が掴めない」

レイ
「土地勘なら私の方が有るけど?」

波木

「多分、そっちの意味と違うと思いますよ」

確かに、波木の言っている方が当たっている。

まあ、簡単に言えば、空気が掴めない…と言うべきか？

山城

「やっぱり頼りはホークアイかな？」

走りながら呟く山城だった。

シルヴィア

「……一息つけそうだな」

森の中を走り回り、やっと殺気が消えたのを確認し、木にもたれ掛かる。

シルヴィア

（さ～て…どうしたものかの～）

とにかく無計画で逃げた為、自分の居場所すら把握出来ない…しかも、敵兵を殺ってしまったから…

ルイーズ

「あの…シルヴィアさん？」

シルヴィア

「あ、はい。なにか？」

ルイーズ
「…無理強いはしたくはありませんが……もしかして、我々の中にスパイがいるんですか？」シルヴィア
「！！」

さすがに隠していただけに、バレるとは思っていなかった。
しかし、同時に妙に納得出来た。

シルヴィア
「うーん……可能性としてですが…」

ルイーズ
「……そうですか」

シルヴィア
「…いつから？」

ルイーズ
「疑いは最初から…確信は最近に…」

シルヴィア
「…なるほど」

……ならば余計にここから無事に脱出しなければならない…シルヴィアはそう思った。

無線
『こちら、隼。聞こえますか？』

山城
「隼、よく聞こえる。どうした？」

無線
『姫様は未だですが…敵らしき単体の熱反応をキャッチ。それも複数』

山城
「そうか……最も近いのは？」

無線
『北８００m先の単体反応です』

山城
「誘導しながら捜索は出来るか？」

無線
『出来ます』

山城
「よし…では、誘導頼む」

無線
『了解』

山城
（……無事でいてくれよ、２人供！）

次号へ

１４３　居場所は何処？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしています。

１４４　合流と殲滅

その敵兵は部隊の一番左端にいた。
だからこそこそ…と言うべきか、あるいはシルヴィア・ルイーズを捕捉する事で頭を一杯にしていたのか……。
とにもかくにも、油断、あるいは慢心があった事は確かだ。
なぜなら…その敵兵は何処からか飛来した矢に首に受け絶命したからだ。

山城
「…凄い」

エルフ族だから、弓矢の扱いは上手いだろう…とはわかっていたが、上手いなんて問題じゃない、女性(おいおい)で一発必中！

レイ
「当たり前です。私は戦士の家の生まれですから」

山城
「…すみません」

謝りながら先程倒した敵兵に近付く。
すると、山城は死体を探る。

波木
「何しているんですか？」

山城
「いや…ちょっとな」

実は山城にはある思い当たる節があった。
それは前回、あの大使館の一件で検死を担当した横井中尉が話していた事……

山城
「……やっぱりか」

横井中尉曰く…大使館で自決した奴も殺され川へ遺棄された奴も…
当たり前だが…共通点がある事…。
それは左肩にバッテン印がある事。
それはこの敵兵にもあった……ここから考えれる事は１つ……

レイ
「どうしたの？　肩なんて見て？」

山城
「いや…別に」

そう言うと直ぐに元に戻し、再び移動した。

その頃……と言っても時間は経過しているが……シルヴィア・ルイーズは敵に囲まれていた。
一息ついた後、ルイーズの土地勘を信用して逃げ回っていたのだが、それを読まれたのか、敵兵１０人に囲まれた。
既にサーベル・剣を抜いて背中を合わせて対陣していた。

シルヴィア
「ふっ、こう敵が出て来てくれて、こちらが助かる」

ルイーズ
「えぇ、逃げるのにも飽きましたし」

人数の差も丸で関係無いと言わんばかりの物言い。
しかし、これが前回の様な盗賊ならまだしも、相手は手練れが１０人。
……ちと厳しい。

ジリジリ……ジリジリ……

双方にらみ合い、一方は襲うタイミングを、一方は襲うであろうタイミングを見計らっている。
そして、敵は仕掛けた。
１人で５人を相手にすると言う大変な事だが、勝てないまでも負けない戦いは出来る。
しかし、この２対１０の戦いは唐突に終わった。
何故なら……

ダーン！

一発の銃弾が全てを変えた。

数分前……

無線
『こちら、隼！　姫様を確認…ですが、囲まれたいます！』

山城
「なに！　ここからどれくらいだ！？」

無線
『およそ２７０ｍ先です！』

山城
「近い！　誘導頼む！」

無線
『了解』

山城
「波木、狙撃銃の用意はいいですね？」

波木
「えぇ。狙撃しますか？」

山城
「場合によってはそうします。レイはお好きに殺って下さい」

レイ
「なんか…適当じゃない？」

山城

「ぐずぐずしている暇は無いんでね！」

走りながら配置を決め、シルヴィア・ルイーズの所へと向かう。

さて……いきなりの銃声はルイーズに襲い掛かろうとした敵兵の頭を撃ち抜いた。

その瞬間、様相はガラリと変わった。

山城
「うりゃーーあ！！」

シルヴィア
「山城！！」

ルイーズ
「レイ！」

いきなりの山城達の乱入に初動の遅れた敵兵達は山城達の独壇場を作ってしまった。

波木の狙撃は敵兵を貫き、レイの弓は2本同時に放っても、まるで見えない糸に導かれるかの如く敵に当たる。

そして、2人の援護を受けた山城は包囲網に出来た穴から2人を連れ出す。

シルヴィア
「遅いではないか！」

山城

「済まん！」

山城が殿（しんがり）になり追撃を抑えている間に、シルヴィアがルイーズをレイの所まで連れていく。

レイ
「姫様！　シルヴィア！」

シルヴィア
「レイ、ルイーズ様を頼むぞ！」

そう言うと、シルヴィアは山城の元に引き返す。
既に5人までに討ち減らされた敵は山城を半円形で囲っていた。
しかし、ここにシルヴィアが合流する。

シルヴィア
「やはり、背中を預けれるのはお主しかおらぬ！」

山城
「お褒めに預り、嬉しい限りだよ！」

5人を相手にする割には余裕満々だった。

その夜……

福本（伊吹）
「それで…12名全員の左肩にバッテン印があったと？」

山城
「はい。残念ながら、死体は今頃、狼の腹の中かもしれませんがね」

杉下
「まあ、それは置いとくとしまして…どうやってスパイは朝の情報を敵に渡したか…ですよ？」

山城
「それが解らないところなんです。いくら考えても、敵はどの様に情報得たのかが…」

福本（伊吹）
「ふむ…しかし、これでスパイの範囲が狭くなったとも言える」

確かに、朝に言った事が敵に伝わった事を考えれば、極めてルイーズ様以下族長などの身近な人間となる。しかし…それでも多いのだが……

福本（伊）
「まあ、のんびりと見付けるのも、いいさ。下手に焦ると失敗するしな」

山城
「それが『浅間山荘の隠れた英雄』の言葉ですか？」

福本（伊）
「あの時はまだ若くて、親父程冷静じゃなかったの。それに、あの時は攻め手だったが、今は守り手だ」

次号へ

１４４　合流と殲滅（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４５　天変地異か？

４月２４日

あの襲撃から早くも１０日が経過した。
結局のところ、襲撃した敵兵の死体は狼に食われたか、回収出来たのはシルヴィアが最初に倒した一体だけだった。
それでも、遺体を見た横井中尉は左肩にバッテン印がある事を報告した。
しかし、目立った動きはそれだけで、それ以後は敵味方ともただ見えない相手を警戒しつつ、にらみ合いぐらいだった。
他にあるとすれば……

山城
「本日も動き無し…か」

無線により連絡がしやすくなった為、連日ホークアイ偵察型による偵察を行っているが、どうも反応は今ひとつ。
森の中だから、どこかに居るだろと探ってはいるが……

山城
「どうなってるんだ…いくらこっちが介入したからって……ここまで慎重になるか？」

向こうの情報が伝わってこないだけに、なにを考えているか解らない。

シルヴィア
「た、大変だ！！」

山城
「どうした、慌て？」

いきなり飛び込んで来たシルヴィアに冷静に訊く山城。

シルヴィア
「アンデュラス王国からの最新情報だ！　アンデュラス国王が数日後に大森林地帯の手前で狩猟大会を行うそうだ！」

山城
「……はぁ？」

これには山城も最初、自分の耳がおかしくなったか？…と思い間抜けな声を出してしまった？
しかし、シルヴィアの言葉を脳内で繰り返していく内に驚きに変わった。

山城
「はぁ！？　なんじゃそりゃ！？　こんな時に狩猟大会！？」

シルヴィア
「やはり、お主もそう思うか！？」

山城
「当たり前だ！　てか、その情報何処から！？」

シルヴィア
「王城のアーネリア陛下からの急使が報せに来たのだ！」

山城
「…じゃあ、向こうから報せて来たのか？」

シルヴィア
「わざわざ使者を出して報せて来たそうだぞ」

……やっぱり、向こうは一枚岩では無いのではないか？

ユリアヌス
「向こう…アンデュラス王国にも森林地帯はある」

簡単な地図を持って来てアンデュラス王国内の南方にある森林地帯を指差すユリアヌス。

ユリアヌス
「ただ、この大森林地帯とは繋がっては無い。この小川が大森林地帯との境目になっている」

確かに線かと思う様な小川が流れている。

杉下
「では、今回の狩猟大会は…」

ユリアヌス
「このアンデュラス王国内の森林地帯で行うのでしょう」

先程到着した急使の報せを元に急遽協議会が行われていた。

「では、相手は自領内で狩猟を行うと？」

派遣された自衛隊一個小隊を預かる田宮正志少佐（元一佐）が言った。

本来なら、一個小隊で少佐は付けない（だいたい、少尉か中尉）。

しかし、今後の増援の為に派遣されていた。

ローエン

「その可能性は高いですね」

シルヴィア

「だが、なぜ敵兵は消えたのだ？」

山城

「…これは個人的な見解ですが…アンデュラス王国が一枚岩では無いからだと思います」

ローエン

「と言うと？」

山城

「例えば今回の狩猟大会。ユリアヌス伯爵、アンデュラス王国は現国王での狩猟大会は今回が初めてでは？」

ユリアヌス

「…言われてみれば確かに。現在の国王になっては今回が初めてで

す」

山城
「つまり、当事者達にとっても突然だった…これから見える事は今のところ、国王と当事者には認識か何かの差があると思います」

何せ、狩猟と言えば日本も江戸時代末期までは軍事訓練の一環である。
これが大会……規模は解らないが……となると、それ相応の部隊規模を出す事になる。
あるいは……下手に悟られたく無いからか……どちらにしろ、狩猟大会の為に部隊を引き上げたのだろう。

山城
「それでシルヴィア。狩猟大会は何時？」

シルヴィア
「3日後だ」

山城
「そうか」

ニヤリと山城は笑った。

次号へ

１４５　天変地異か？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４６　敵前偵察

４月２７日

アンデュラス王国による狩猟大会は予告通りに行われていた。
朝も早くから宿泊用のテント張りが行われ、１０時頃にはだいたい終わっていた。どうやらちゃんと道がついている様だ。
そんな光景を眺めている内に、お昼になっていた。

シルヴィア
「……なあ、山城」

山城
「なに？」

軍隊用双眼鏡を覗きながら山城が返事をする。

シルヴィア
「……飽きた」

山城
「我慢しなさい」

小川の反対側…大森林地帯…から向こうの様子を探る山城とシルヴィア……

レイ
「シルヴィア～、山城、お茶ですよ」

……それとレイ。

シルヴィア
「だいたい、なぜ我々がここに来て直に見張らねばならんのだ！」

山城
「声のトーンは低くしてね」

レイが持って来たお茶を飲みながら言う。

シルヴィア
「ふん、話を逸らすな」

山城
「ごめんごめん…けどさ、俺はその国王陛下に興味があるんだ」

シルヴィア
「お主の個人的な興味に私を巻き込むでない」

山城
「だけど、君だって見なきゃいけないんじゃないの？」

シルヴィア
「…はぁ？　何を言って…」

山城
「だって、アーネリア陛下があの事を君に語ったって事は、君は現

アンデュラス国王の事を見なきゃいけないって事じゃないの？」

シルヴィア
「…うぅ…お主、反論しにくい事を…」

山城
「それにさ…飽きたって言ってる割には、顔が赤いよ？」

シルヴィア
「う、うるさい！」

そう言うとクルリと背を向ける。
実はシルヴィア、飽きた…と言っておきながら、逆に山城と2人っきりの為、ドキドキしてそれどころではなかったのだ。
まあ、ようやく恋人同士になったとは言え、まだまだ色恋事に弱いシルヴィアなのである。
そして、この2人を第三者の立場で見るレイは、この2人がただ単なる日本軍士官とシリルティア王国の士官では無く、もう一・二歩突っ込んだ関係では無いかと思っていた。

さて、なぜ山城達がこの様なスパイ紛いのやっているのかは上記の事＋敵情を探る為である。
では、どうやってここへ来たのか…と言う質問に簡単に答えると、２５式大型輸送ヘリで来た。
移動に際して難点とすれば、着陸場所の確保だったが……これはレイに訊いたところ、畑にする為に切り開いた場所がある事を聞き出した。
この為、山城は杉下大使を通じルイーズへ話を通し、バンクス族長

にレイを借りる事を通知した。
但し、バンクス族長には『遠距離偵察』として話を付け、真相を知る人間はエルフ族側でルイーズだけだった。
そして山城達はレイとユリア隊長率いる一個分隊と共にアンデュラス王国と大森林地帯との境目に進出して来たのであった。
後は小部隊用野外炊具と食材、多少の材料を持って現地に行けばいいだけであった。
そんな訳で山城達は安心してアンデュラス側を小川の向こうから見張っていた。

レイが来たので同世代の女の子同士で意気相合と談笑する（トーンは抑えて）シルヴィア。
その横で双眼鏡片手にメモ書きに徹する山城。

山城
（…しかし、何かおかしいな…）

双眼鏡から顔を離した山城が思った。

山城
（どうも、あの中で悪事考えてる悪者がいるな…しかも、とんでもなく高位の人間が…）

狩猟日和の青空…だが、宿営地の周りだけ、目に見えないどす黒い雲がある事に山城は気付いていた。

次号へ

１４６　敵前偵察（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４７　アンデュラス国王（前書き）

新米士官
「な～んか、決定打に欠てるな～」

山城
「今回の北朝鮮と韓国の砲撃戦か？」

新米士官
「日本政府の対応がね……今頃、舞鶴・佐世保から自衛隊の護衛艦が海上警備に出撃してもおかしくない。ペイトリオットミサイルを重要都市に派遣してたっておかしくない……なのに、２日目になっても何の反応も無し」

福本
「その代わり、首相がバカ発言して、非難集中……阪神大震災の村山首相と同じだよ……大丈夫か？」

１４７　アンデュラス国王

結局、見張りを続ける山城達が居るとは知らずに、狩猟大会は夕暮れ時に終了し、参加者は宿泊用のテントへ入った。
そして、その夜……

アンデュラス王国宿営地内国王専用テント

「リチャード様、お茶が入りましたよ」

御付きのメイドの声に読んでいた本から視線を上げるアンデュラス王国現国王リチャード３世。
メイドの持って来た紅茶にゆっくりと優雅に飲む。

リチャード
「うん、今日も良いのを作ってくれたね。ローニャ」

「いえいえ、何時もの事でございます」

控え目ながらも褒められ微笑むメイドことローニャ。そして、リチャードは再び本に視線を降ろす。

ローニャ
「なにをお読みなんですか？」

リチャード
「冒険物さ」

リチャード国王はどちらかと言うと、武道派では無く文道派である。だから、文学に詳しく、書物や音楽に興味があった。逆に現在の領土保持が主眼で領土欲は全く無かった。そして、何度か書いたがシリルティア王国アーネリア陛下とは血縁である。
そんな弱冠２４歳の文系国王だった。

リチャード
「あ、そうだ。夜空は綺麗かな？」

ローニャ
「はい、お城で見るよりもとても綺麗でしたよ」

リチャード
「そうか…なら、夜空を眺めるとするか」

ローニャ
「ええ！　外に出られるんですか？　メイド長に怒られちゃいますよ！？」

リチャード
「そのメイド長はお城に居て、ここに居ないよ？」

ローニャ
「……あ、そうでした」

舌をちょっと出して笑うローニャ。

その頃……

山城
「ん？　誰か出て来たな」

暗視機能付き双眼鏡で大きめのテントを見張っていた山城は直ぐに気が付いた。間髪入れずに隣で毛布にくるまっていたシルヴィアを起こす。

シルヴィア
「ん～……なんりゃ？」

山城
「誰か出て来た」

少し寝惚けめの恋人にそう言うと、双眼鏡を渡す。

シルヴィア
「……本当だな。しかも、1人は高貴な人間だ」

山城
「う～ん…予想からすると、イケメン貴族とメイドかな？」

そう言いながら双眼鏡の倍率を上げると……

山城
「……訂正、国王だ」

シルヴィア
「…あれが陛下の血縁者か…」

どう見ても、あの国王が今回の当事者とはどうも見えない。
反対に彼が慈善事業家と言うなら十中八九頷ける。

山城・シルヴィア
（（だけどな～…））

宿営地を見張っているのにあの2人を見ていると、何故か悪気がある様に思えてくる……

山城
（……ダメだ。視点を移そう）

双眼鏡を覗きながら少し視点を上へ変えた。
すると……

山城
「……シルヴィア、上げ2の左8」

シルヴィア
「うん？……ん、なんだ？　あの怪しい人影は？」

山城
「さあな…レイ、起きろ」

同じく毛布にくるまり熟睡していたレイを起こす。

レイ
「ん…山城か？」

山城
「レイ、今すぐ毛布を持って後退、ユリア隊長達と合流して応援を５人程連れて来てくれ…あとヘリも要請してくれ」

レイ
「わかった」

そう言うと直ぐに毛布を持って後退した。

山城
「さてと…」

近くにある６４式小銃に初弾を装填した。

山城は双眼鏡を眺めながらその時を待った。
そして、怪しい人影がテントから離れた瞬間、火の手が上がった。

山城
「やっぱりか……」

火を付けたのは国王のテントだった…これは逆算すると国王を直に狙ったものだ。
しかし、肝心の国王は外にいた。
放火犯は火を付けた後に気付いた様だ。
本当なら、放火に気付いて慌て出てくるところで、ボカリ（殴る）

かグサリ（刺す）とやる予定だったのだろう。
しかし、その宛てが外れた。
だが、宛ては外れたがこう少し予定が変わっただけだと、2人は剣を抜いた。
しかし……抜いた瞬間、彼らは頭を吹き飛ばされた。

次号へ

１４７　アンデュラス国王（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４８　真実への逃走

夜空をメイドのローニャと共に見ていたリチャード3世は、突然自分の後ろが明るくなって振り向いた。
すると、自分のテントが燃え、その近くに犯人と思われる人間が2人いる事に気付いた。

リチャード
「そこの兵隊達！　何をしている！？」

その答えは直ぐに返ってきた……相手は剣を抜いた。直ぐにリチャードは身構えた……が直ぐに終わった。次の瞬間、2人の兵隊はのぞけった…頭に銃弾を受けたからだ。
そして、後ろを振り向くと2人の人間がリチャードとローニャの手を引っ張り、大森林地帯へと走っていた。

山城
（……なにやってんだ、俺は！？）

最初は抜刀した2人を射殺して終わる筈だった……しかし、身体は勝手に行動していた。
元々、敵兵2人の行動を見ながら、当事者とは思えないアンデュラス国王をこのまま放置していいのだろうか…と考えていた。
多分、ここで第一打を防いでも、第二・第三打を打ってくるのは間違い無かった。
しかし、それは後で……と思っていたのに、結局は身体が動く……
エルフ達を救った時とは状況がかなり違うのに……

山城
（半分拉致だ……これは後でクビだな）
小川を飛び越えながら内心苦笑していた。

見張り所に使っていた場所まで来ると、毛布を抱えたレイが居た。
元々、直ぐに撤収出来る様に毛布ぐらいしか置いていなかった。

レイ
「おい、人数が増えて…」

山城
「その話は後。もうすぐ追っ手が来ますよ！」

実際、後ろで騒ぐ声が複数聞こえる……追っ手が出るのも時間の問題だ。
とにかく今は距離を取るのが第一。

山城
「とにかく、今は全速力で走って下さい。いいですね？」

レイ
「…わかった」

返事を聞くと山城は再び走り出した。

……その後、ユリア隊長率いる5人と合流すると、小休止をとった。
本来ならそのまま後退してもよかったのだが、ふと見るとメイドの方が息絶え絶えだったので休憩する事にした。

リチャード
「久々だな。こんなに走ったのは」

ローニャ
「あ、あなた達……い、いったい……な、何者なのよ……こ、このお方は…」

シルヴィア
「現アンデュラス王国リチャード3世陛下と言いたいのか？　それなら不要だ。我々軍人は近隣諸国の国王の名前ぐらいは憶えておる」

息絶え絶えで発言するメイドと、既に息を整え終わった軍人貴族…
…色んな意味で対照的だ。

シルヴィア
「それに、今日1日、あの近くで宿営地を見張っていたからな」

見ている内に「うそ!?」と内心で言っている顔になっていく。

リチャード
「なら、君達は従妹の者達かな？」

シルヴィア
「この者は違いますが」

そう言いながら山城の襟首を掴み、前に突き出す。

山城
「あのさ…もう少し、マシな紹介法は無いの？」

シルヴィア
「時間が無いのだ。別に構わんだろう」山城
「やれやれ…大日本帝国海軍戦艦天城艦長兼主席参謀…今回の日本側の指揮を執っております、山城正人少佐です」

リチャード
「…そう言えば…前回のチャイナー帝国海軍との戦いで大型戦艦を撃沈した日本の戦艦がいたと聞きましたが…」

山城
「ご想像にお任せいたします……それよりも、いったいお国で何が起こっているんですか？　あなたを見ていると、とても当事者に思えない」

ローニャ
「当たり前じゃない！　陛下は…」

リチャード
「ローニャ……さて、どこから話しましょうかね…」

ビシリ！

その時、近くの木に銃弾が命中した。
山城は内心で舌打ちしながら言った。

山城
「レイ、シルヴィア。御二人を例の場所まで後退させろ」

シルヴィア
「わかった」

レイ
「……わかった」

ユリア隊長
「ならば我々は差し詰、殿（しんがり）ですね」

山城
「えぇ…ですが、発砲時はバラバラに撃って下さい。こちらの数を把握出来ない様にします。あと、下がりながら撃って下さい」

……結局、殿（しんがり）の影響もあり、山城達も頃合いを見計らいヘリの着陸地点へと引き上げた。
それでも、嗅ぎ付けた敵兵が接近して来たが、２５式ヘリと増援の自衛隊一個分隊の援護もあり、全員無事に帰還出来た。

次号へ

１４８　真実への逃走（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４９　真実は見えども先は見えず

４月２８日

ユリアヌスの館

結局……２５式大型輸送ヘリで戻った来た山城は真っ先に杉下とユリアヌスに事の詳細（事情は既に無線で伝えていた）を報告した。
まあ、夜も遅い為、ユリアヌス伯爵が明日にしようと言うことでそうした。
そして……その翌日……

杉下
「大日本帝国大使の杉下です。さっそくでございますが、いったいお国では何が起きていらっしゃるのですか？」

単刀直入に聞きたい事に切り込んだ。

リチャード
「えぇ、私もそれが言いたくて彼に付いて来ましたが……さて、どこから話しましょうか…」

２人以外に山城とシルヴィア、ユリアヌス、ユリア隊長、ローエン大尉、田宮少佐……と幹部級の人間が集まっている。

山城
「ではまず…いったいどうなっているのか説明してもらえませんか

？　特にお国の事から」

リチャード
「うん、そっちを話すのが早いかも知れないね。実は……」

その後、リチャード3世から語られたのは以下の様なものだった。
彼がアンデュラス国王になった時、議論になったのは内政充実か軍事充実かの選択だった。
内政派はこれからの国内外情勢を見て、内政を充実しようと主張。
軍事派は同様の理由で軍事の強化をしようと主張。
双方主張が正しいだけに平行線を辿った。
結果、リチャードの決断に持っていかれた。
そこで、リチャードは内政充実をしつつ、余裕が出てきたら軍事も充実する……とゆう中間案を提示した。双方の主張を採り入れた中間案だけに双方の面目を保った形である。
しかし、これに納得しない人間がいた…軍事派の強硬派だ。
軍事派の中には穏健派・中間派・強硬派があり、穏健派・中間派はリチャードの案を支持、対し強硬派はこれに対し反発、当初は流血事件に発展したが、最近では内政充実により少しずつながらも、軍事予算が増えていた事により静かになっていた。
だが、そんな時にシリルティア王国での一連の戦いが伝わり、強硬派が再び息を吹き返した……と言う事だ。

リチャード
「彼らは『今すぐ軍事を充実しなければ、明日にでもシリルティア王国が攻めて来る！』と大合唱したよ。だが、従妹がそんな事をするわけないし…だいたい、商人達から聞いた話だと、どの戦いも必要に迫られての事だったからね」

山城は隣の恋人に視線を移した。
当然と言うべきか……同い年の君主を侵略者扱いされていた事に腹を立てていた。

シルヴィア
「ふん…そいつら全員の顔を見てみたいわ」

その後の事は……だいたい予想が付きそうで恐い。

リチャード
「これに…我が身の不徳と言うべきか…腹違いの弟がこれに加わりました」

杉下
「確かに。ややこしい事になりますね」

それはそうだ。
下手に王族や親類がこの類いの政争に関わると内乱に発展する可能性がある。

リチャード
「そうこうしている内に、強硬派の人間が消えていました。もちろん、行方は探しましたが…」

ユリアヌス
「見付からなかった…と？」

リチャード
「はい。しかも、周りも情報を遮断する様になりました…ですから、

私の唯一情報入手手段が…」

そう言うとリチャードは視線を移した。
移した先にはメイドのローニャが居た。

リチャード
「イザとなれば頼りになるメイドですから」

人の口には戸は立てられぬ…とは確かである。
多分、街で仕入れた情報を伝えていたのだろう。

山城
「…となると、当事者は腹違いの弟ですね」

これなら今までの『違い』の理由がわかった。

シルヴィア
「なら、簡単だ！　その弟をふん捕まえれば良い！」

山城
「あのね…そう簡単ならこんな事になってないよ」

真実は粗方見えた……しかし、決定打に欠ける。
いくら何でも、何の証拠も無しにではこっちも動けない。

山城
「う〜ん……」

参謀は考えるのが仕事とは言え……さて、どうしたものやら……

次号へ

１４９　真実は見えども先は見えず（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１５０　解決策はありや？

山城
「う～ん……」

リチャード3世の話を聞いた後、山城は椅子に座りながら考えていた。
現状打破の為にどうするか……問題はそれだけ。
それさえ解決出来れば後は楽なのだが……

シルヴィア
「なあ、山城？」

山城
「なに～、シルヴィア？」

シルヴィア
「いや、私も考えてみたのだが…ネズミの事を」

山城
「それで？」

シルヴィア
「私が思うに…ルイーズ様や族長付近にいるのではないか？」

山城
「あのね…それでも広すぎて見当がつかないよ？」

シルヴィア

「いや……女の勘と言うやつで見当をつけてみたのだが…」

山城
「……使うところを間違ってると思うけど？」

シルヴィア
「う、うるさい！……それで、レイが我々への使者として行く事が決まった時だが…皆に知らされたのが出発した2日後、決まったのが出発する1日前の夜中だ」

山城
「つまり、浸透するのに4～5日のタイムラグがあるね」

シルヴィア
「そこで気付いたのだ！　情報を早く、確実な物を手に入れるにはどこに居たらよいか…そして、行き着いたのが…」

山城
「族長会議か？」

シルヴィア
「そうだ！」

まあ、一般に伝わる所に居ると時間が掛かり過ぎる事を考えれば確かにそうだ。しかし……

山城
「だが、そうなると誰だ？　族長達では無いと思うぞ。彼らは姫さんを慕っているし」

それに、そうなると後々面倒臭い事になるし……

シルヴィア
「それは無いであろう。それよりもあと2つ考えなければならない事がある」

山城
「ん？」

シルヴィア
「その1、なぜ罠の場所がわかったのか？　その2、敵はどうやって私とルイーズ様が出掛ける事を早く手に入れたのか？」

山城
「なるほどな…それで？」

シルヴィア
「2つの共通点…やはり族長会議だ」

ズルッ

もっと凄い答えが出ると思ったのだが……戻るのか…

シルヴィア
「……期待を裏切ったか？」

山城
「…ある意味ね」

苦笑しながら言う。

シルヴィア
「レイに聞いたのだが、村への道に仕掛けた罠の設置と場所を決めたのは……」
山城
「族長会議……いや、待て。仕掛けたら誰だって…」

シルヴィア
「その罠は別々の時に別々の部族が仕掛けたのだ…つまり…」

山城
「…なるほど、それだと知ってる範囲は少ないな…しかし、なんでわざわざ別々に？」

シルヴィア
「手際の問題だろう」

山城
「ふ～ん…で、姫さんの場合は？」

シルヴィア
「族長会議の後にルイーズ様が誘って下さったからな…多分、族長達もそれほど聞いておるまい」

山城
「……先は遠いな」

シルヴィア
「う、そ、そうか…」

山城の顔を見て、自分の考えが今のところ役に立ちそうにない事にショボーンとする。

山城
「…もし、考える事を手伝ってくれるなら、手を貸して欲しいな」

シルヴィア
「ん、なんだ？」

直ぐにパッと喜びの表情に変わる。

山城
「なぜリチャード3世陛下の腹違いの弟がエルフ達を攻めたのか…だ」

シルヴィア
「それは…今流行りの業績作りではないか？」

山城
「流行り？」

シルヴィア
「某半島の北側独裁国家がやっておるではないか」

山城
「あぁ、あれね…バカやってるよ、本当に……だけど、本当にそれだけか？」

シルヴィア
「それだけ…？」

山城
「それだけなら……あそこまでする必要があるか？」

『あそこ』とは到着直後のあの銃撃戦前のエルフ達に対する執拗な追跡の事だ。

山城
「業績作りだか何だか知らないが、あそこまでやる必要は無いと思うんだがな…」

シルヴィア
「……」

何かを考える為か黙るシルヴィア。

山城
「…シルヴィア？」

シルヴィア
「当てになるかは解らないが……思い付くツテはある」

山城
「なんだって？」

シルヴィア
「これを言うのは腹が立つのだが…聞いてくれ」

その後、山城がシルヴィアから聞いた話は山城を憤慨させたが、同時に納得も出来た。

次号へ

１５０　解決策はありや？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１５１　双方共に対応す（前書き）

世の中、色々あるものです。
だけど、我が日本はおかしすぎ……昭和の方がまだマシ……
次号は『浅間山荘の隠れた英雄』と、現実世界で日米関係を無茶苦茶にした一端を担った某党女党首の対決です。

１５１　双方共に対応す

その頃……

宿営地

「これはエルフ達の仕業である」

そう言うは件のリチャード３世の弟である。
ちなみに、今は火事の後片付けとリチャード行方不明に対する対策会議中であった。

「ですが、果たしてそうでしょうか？　別段、我々が何かをした様な気は無いのですが」

出席していた貴族の１人が意見を述べる。

「このところ、エルフ達による挑発活動が活発になっていたのでな…まあ、向こうがいよいよ愚か事を始めたのであろう」

顔色１つ変えず、予め用意していた嘘話を語る。
もちろん、ここにいる貴族達が全員納得しているわけではない。
だいたい、死亡していた警備兵（警備側説明）の２人は小銃で頭を吹き飛ばされていた。
確か…エルフ達は弓矢中心ではなかったのか？

「では、陛下を助ける為、我らが軍を動かす事に、皆さん承認しますね？」

しかし…今のところはそれ以外に理由が無いのだが……

「くそ！」

自分のテントに戻ったリチャード3世の弟…アズラエル…が吐き捨てる。

彼としては兄があのまま死んでくれた方が良かったが……まあ、エルフ達に対して攻撃する理由は出来た。

しかし、暗殺役の兵士の頭が吹き飛んでいた事といい、追跡した兵士達が見た、敵が空飛ぶ怪物に乗って逃げた事……。

アズラエル

「……まあいい。敵は少数…数で押せばいい」

……彼は知らないだろう…例え少数でもよく訓練され、統制が取れ、近代兵器を持った軍隊の恐ろしさと頑強さを……。

数時間後……

山城
「……動いたか」

ホークアイ偵察型の偵察により、敵が動いた事はまる解りだ。

山城
「さて、こちらが出せるのは軽装甲機動車と装輪装甲車、あとはＬ３／３３軽戦車。シリルティア王国は山砲、軽機関銃ぐらいか…」

それでも配置によっては１門、１挺で敵を威圧・制圧できる。

山城
「さて…どうするか…」

ネズミ（スパイ）の見当ぐらいはつけたいのだが、何せ範囲が狭くはなったが広い。
特定に至るまでは時間が掛かるだろうし……

山城
「弱ったな…福本元帥が居られれば、相談出来たんだが…」

シルヴィア
「敵は動くし、ネズミは見付からんし…どうにもならんな」

山城
「そうだね……ブウー！！」

シルヴィア
「うお！　どうした！？」

山城
「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、服は！？　なんでバスタオル一枚！？」

確かに…今のシルヴィアはバスタオル一枚をまとっているだけ…。

シルヴィア
「あ～、先程まで隣の部屋で風呂に入っておったからな……ついつい…」

山城
「早く服を着てこ～～い！　あと、作者！　福本元帥みたいな事をするなー！　１８禁指定にする気か！？」

いいじゃん、ある種の読者サービスと言う事で…

山城
「よくない！」

コンコン

シルヴィア
「入るぞ～、山城」

山城
「あぁ、どうぞ」

今度はちゃんと服を着たシルヴィアが入って来た。

シルヴィア
「済まん、済まん。ついつい、家での癖をな」

山城
「…気よ付けてくれ。（下手したら襲いそう…ｍ（＿＿）ｍ）」

シルヴィア
「わかったわかった。（別に襲っても構わんのだが…大丈夫だし）」

……何かズレてる内心を抱えつつ、２人は今後の事を話す。

シルヴィア
「やっとバカな弟が動いた様だな」

山城
「あぁ…直接あの村を襲うつもりなら３日後…かな」

シルヴィア
「なら、大森林地帯内の他の村を襲うならどうだ？」

山城
「うーん…具合によるけど…５日…最低１週間かな。そうなって欲しくないけど」

シルヴィア
「…そうなった場合、他の村の民達を助ける事は出来るか？」

山城
「村の規模と着陸場所が有るかによるけど……２５式大型輸送ヘリ

『白鷹』（チヌーク）、４０式輸送ヘリ『黒鷹』（ブラックホーク）に３２式攻撃ヘリ『飛鷹』（ＡＨ１Ｓコブラ）の護衛・援護があれば可能だ」

シルヴィア
「……気のせいか？　またとんでも無い物の名前が出た様な気がするが…」

山城
「気のせいじゃない。今朝到着した陸軍の３２式攻撃ヘリ『飛鷹』…欧米ならＡＨ１Ｓコブラの名で採用されている対戦車攻撃ヘリだ」

シルヴィア
「ふーん…何故か張り切っておらぬか？」

山城
「…なんでかは知らないが…最近陸軍は張り切ってんだよな…」

福本次官……大丈夫かな？

次号へ

１５１　双方共に対応す（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１５２　水と油は相容れれず（前書き）

作中の実在の人物に関しましては、独自設定ですのであしからず。

しかし、あの某党党首と言い、仙石の番犬と言い、なんで弁護士が関わるとこんなおかしな事になるのやら……？

あれでよく日本の弁護士＆政治家が務まるね……。

１５２　水と油は相容れれず

その頃……日本では……

４月１８日　国会議事堂内衆議院

福本伊吹海軍中将兼次官はこの日、ある種の優越感を感じていた。日本で一番、自分が嫌いな政治家は？…と聞かれたら困りもせずに答えれる人間の出鼻を挫いたからだ。

福島党首
「こ、これはいったい…」

福本（伊吹）
「おや、福島みずほ社民党党首にはこれの意味が解らない様子ですね？」

わざと挑発する様な言い方をする福本次官に福島党首が噛み付いた。

福島党首
「こ、これは侵略ではないですか！？」

福本（伊）
「あのですね…我々はエルフ達からしっかりした要請もあって増援を送り込んだだけですよ？　侵略なんて言われるのは心外ですね」

福本次官は半分呆れながら発言した。

福島党首
「だからと言って、輸送ヘリのみならず、攻撃ヘリを出すとはどうゆう事ですか！？」

福本（伊）
「輸送ヘリは部隊の移動だけでは無くて、エルフ達の避難に必要なんです。そんなのは軍隊にいる全員が解っていますよ。それに攻撃ヘリを出したのは同様の理由です」

福島党首
「明らかにやり過ぎです。展開する部隊を引き上げるべきだわ。虐殺が起きる前に！」

福本（伊）
「無駄ですよ、既に向こうと話はついている。それに虐殺なんておきませんよ。だいたい、虐殺と言うなら向こうがエルフ達にやっている行為はどうなるんですか？　そっちの方が侵略であり虐殺だ」

軍隊同士の衝突は戦闘だ。しかし、軍隊と軍民関わらず無抵抗の人間に手を下せば虐殺である。
いくら何でも、無茶苦茶な混同をしている。

福島党首
「しかし、一般兵の統制が効かなく…」

福本（伊）
「あなたは日本の政治家であるのに、日本の国防を担う兵隊を信じられ無いとはどうゆう事ですか！？　いや、その前にあなたは軍隊の何を知っているのですか？　よくそれでこの場に居れたものだ」

半分喧嘩を売る気で発言する福本次官。

福島党首
「な、なんですって！」

福本（伊）
「出来る事なら、あなたを1日か1週間、軍隊体験入隊してもらいたいものだ！　浅間山荘の時に無責任な論争を述べていた弁護士のあなたに、軍のあれこれを虐殺や侵略と簡単に言われる事は現場に居た者として甚だ遺憾である！」

湯気が出るのでは無いかと思う程、顔が真っ赤になった福島みずほ社民党党首。そして、しれっとしている福本次官。
それもそうだろ…福島みずほ党首が弁護士時代に浅間山荘の立て籠り犯を擁護している頃、福本次官は現場に出て、立て籠り犯と撃ち合いのど真ん中にいたのだ。
その為か、福本次官と福島党首は水と油の如く交わる事は無い。

小泉首相
「やはり嫌いかね、福島党首は？」

福本（伊）
「えぇ、嫌いです。あんな偽物弁護士は大嫌いです」

参議院終了後、小泉首相に問われた質問に、憮然とした表情で答える福本次官。

福本（伊）

「だいたい『文民統制』とか言って、軍隊について何も知らない人間が口を出しくる事自体が許せません。出来れば、1日でいいから体験して言ってくれるならまだマシですが！」

小泉首相
「また、社民党の議員達から嫌われるな」

福本（伊）
「社民党員論争の相手なら何時でもお相手しますよ」

事務官
「福本次官。そろそろ」

福本（伊）
「おっと、では、めんどくさい書類仕事がありますので」

そう言うと福本次官は、小走りで去って行った。

その頃……エルフの村

山城
「…と言うわけでございまして、エルフの皆様には多大なご迷惑をお掛けする事になります」

今までの事を話した山城は深々と頭を謝った。
しかし、ルイーズはそれを制した。

ルイーズ
「いえ…どうなろうと、我々が危うき立場になる事に変わりはありませんから…」

シルヴィア
「良かったな、山城！」

山城
「あ、あぁ…」

…そう言えば、シルヴィアと一緒に謝りに来た筈なのに、なんで慰められているんだ？

ルイーズ
「それより…今回は大丈夫なのですか？」

山城
「ご心配無く。今回、敵は御大将自ら出て来た模様…一網打尽にしてやりますよ」

シルヴィア
「ルイーズ様、この者はイザとなった有言実行する者ですから」

山城
「……シルヴィア、なにかおかしくない？」

シルヴィア
「おかしくない、当然の事を言っているまでだ」

山城

「う～ん…まぁ、いっか…では、我々はこれより準備がありますので、これにて」

ルイーズ
「お願いいたします」

その言葉を聞いてから立ち上がり、外に出た瞬間、山城はふと、振り向いた。

ルイーズ
「どうか…しましたか？」

山城
「いえ、気のせいでした。では」

そう言うと普通のペースで歩き、物陰に入った。

山城
「…シルヴィア。レイと波木はこっちに居たよな？」

シルヴィア
「あぁ…それがどうした？」

山城
「…手伝ってもらう事になるな」

次号へ

１５２　水と油は相容れれず（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１５３　五分五分賭けの行方（前書き）

大学のレポートの為、更新が遅延します。
…何せ、後に回せば大変な事（色々と）になってしまうので…

１５３　五分五分賭けの行方

『スパイと言えばどんな人間を思い付くか？』

これを情報担当の教官から訊かれた時、００７の様なイケメン・強い・頭の回転が良い……との意見が多かった。

あるいは…一発で男を落とす美人女スパイか。

これに対する教官の答えは……ハニートラップは置いて置くとして……００７の様なスパイはスパイでは無いと否定された。

教官曰く、００７は小説だから成り立つのであって、本当のスパイとは地味で目立たず、周りに溶け込む様な人間がスパイに適任だと言っていたが……。

山城

（だからと言って…今回は特異過ぎだろうな）

あの情報教官の話が面白くて、授業時間が楽しみだったが……

山城

（あの教官…元気かな？　もし、異動してなかったらもっと話が聞けるんだけど…）

シルヴィア

「…なに別な事を考えておるのだ？」

そう良いながらシルヴィアが顔を覗き込んだ。

山城

「いや…士官学校の教官に面白い人が居たからさ…それを思いだし

たの」

宿舎代わりに使っている小屋で、椅子に座りながら山城は言った。

シルヴィア
「ふ～ん…それで、お主の言った事は本当になるのか？」

山城
「大丈夫。夜になれば解るよ」

その夜……

シルヴィア
「……今になって言う事では無いが…」

山城
「どうした？」

シルヴィア
「人をつけるのはどうも、気が引ける」

レイ
「…同じく」

波木
「左に同じです」

山城

「……まあ、わかるけどさ…」

…仕方ないですよ、これは…

シルヴィア
「それより、本当に間違い無いのだな？」

山城
「一瞬だからな…可能性は五分五分。だから、後を追ってるんだよ」

ジローーー……

山城
「…睨むなよ…」

その頃……

横井
「あれ？　山城君達は？」

杉下
「外出しましたよ」

事務仕事をしながら答える杉下大使。

横井
「しまったな～、せっかく後輩に注いでもらおうと思ったのに」

杉下
「なんなら、私が注ぎますよ？」

横井
「あら、大使に？　でも、お仕事は？」

杉下
「今終わりましたから…さてと」

そう言うと机から立ち上がり、横井が置いた一升瓶を持ち上げる。

杉下
「さ、どうぞ」

横井
「すみません、先輩」

神戸士官学校出身の軍医が同じく神戸士官学校出身の先輩・外交官に注いでもらっている。

横井
「そう言えば杉下さん、ご結婚は？」

杉下
「軍人思想ではありませんが…危険な場所に行く人間が嫁なんて貰ったら色々と面倒なんで……そうゆう横井さんは？」

横井
「『さん』なんて、付けなくていいですよ……いませ～ん、いい男

なんて簡単に見付からないから～」

杉下
「あはは、なるほど」

砕けた調子の言う横井に笑って応える杉下。

横井
「まあ、せいぜい、後輩の色恋沙汰をゆっくりと見物しますよ」

山城
（…へっくし！）

……出来る限り小さくしたのだが、やっぱり出た。

シルヴィア
（山城？）

山城
（大丈夫、大丈夫……ち、誰か知らないけど、変なタイミングで噂しないでほしいよ）

しかも、スパイ？の追跡中なのに……

波木
（しかし、彼はいったい何をしているんですかね？）

木の下に踞り、何をしているのやら……と思った時、件のスパイは

立ち上がると去っていた。
その後、5分間待って踞っていた木に向かった。

レイ
「掘った様な痕跡があるな」

山城
「まあ、昔ながらのやり方だ。波木、銃剣貸して」

波木から銃剣を借りて掘り、それほど深く無い所に缶があった。

シルヴィア
「なるほど、保湿性に優れ物に紙を入れておくのか」

山城
「人に会って説明する時間とリスクを考えればこっちがいいよ…ただし…」

入っていた紙を一読して、ニヤリと笑い、シルヴィアに渡しながら言う。

山城
「詰めが足りないな。本当は暗号化したらベストなんだけどね」

シルヴィア
「ふむふむ…我々の動きと、向こうの動きが我々に掴まれている事が書かれているな」

山城
「よし、元に戻して様子を見よう」

直ぐに埋め戻し、スパイを見張っていた場所で再び様子を見る。
すると、2人の男が現れ、木の下を掘り、あの缶から紙を出した。
そして、帰るかと思えば、そこまでいかず、近くでそこでごそごそし始めた。

山城
「…なるほど、シルヴィアとルイーズ様が襲われた時の情報伝達が早かった理由はこれか」

つまり、重要情報は紙で、緊急を要する場合は近くで常駐する人間が伝えると言う訳か…

シルヴィア
「これで、お主がルイーズ様の所で見付けたあの歩哨がスパイとなった訳だな」

山城
「偶然、左肩のバッテン印を見付けたからね…まあ、五分五分勝負はこっちの勝ちだ」

そう言いながら山城はニヤリと笑った。

次号へ

１５３　五分五分賭けの行方（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１５４　阻止任務（前書き）

新米士官
「しかし、民主党は泣きっ面に蜂状態が延々と続く様ですね」

山城
「あぁ、秋篠宮夫妻に対する民主党議員の野次ね」

福本
「今の日本ならこれぐらいで済むよ……昭和なら不敬罪で逮捕、あるいは国民の総バッシングで政治生命どころか日本国民として終わりだね…」

新米士官
「苦し紛れの反撃で、自民党の議員が携帯の着信音鳴らした事を言ってるけどさ……あれ、口頭注意で済む事だと思うけど？　レベルが違うと思いますけど？」

山城
「国民の代表たる議員が、あれを言っちゃあ不味いでしょう……色んな意味で」

１５４　阻止任務

４月２９日（現世界４月１９日）

シルヴィア
「…真っ直ぐ？」

山城
「あぁ、ホークアイの偵察の結果、真っ直ぐにこっちに向かって来ている」

シルヴィア
「敵の数は？」

山城
「下を見て１５００…上は３０００～５０００ぐらい」

シルヴィア
「もう少しはっきりと出来ぬのか？」

山城
「何せ森の中だからね…苦労するの」

シルヴィア
「そうか……状況を見る限り、敵は数を頼みにする気か？」

山城
「可能性は高いね…あるいは君とルイーズ様を襲った部隊に期待し

ているか…」

シルヴィア
「まあ、どちらにしても、敵はやる気満々と言う事に変わりは無いな」

山城
「元々、向こうが先に仕掛けてきたんだから、当たり前かも知れないけどね」

シルヴィア
「それで、どうブン殴るつもりだ？」

山城
「…もう少し言い方無いかな？」

シルヴィア
「結局一緒の意味になるのだ、別によかろう」

山城
「はぁ～……手は2つ。ここで迎え討つか、進撃中を迎え討つか」

シルヴィア
「どちらにしても、こちらに有利だな。敵は大軍だけに身動きが取りづらい」

山城
「あぁ。力押しするなら、その力が逸らされた時の反動を教えてやろうと思ってね」

ニヤリと笑う山城に、シルヴィアもつられて笑う。

シルヴィア
「今回は攻撃ヘリも投入するのか？」

山城
「状況によるな…大砲を出して来るなら真っ先にブッ潰すけどね」

シルヴィア
「そうか……しかし、今までの経験からすると、お主がこんなもので終わる気がするのだが…」

山城
「もちろん…情報漏洩を防ぐのも、敵を罠に嵌める手段だよ」

シルヴィア
「何時から始める？」

山城
「今夜からさ」

その夜……

山城
「…時間通りのご到着だな」

シルヴィア

「油断大敵と言う諺を知らん様だな…しかも、全て見抜かれておるとも知らずに」

山城
「まあ、安全なのは今夜までさ。こちら山城、波木聞こえるか？」

波木
『はい、良く聞こえます。しかし、この無線機、なんで小さいのに、こんなに良く聞こえるんですか？』

山城
「時代の流れですよ。では、目標は見えますね？」

波木
『はい。これより狙撃します』

そう言うと、波木は狙撃銃のスコープを覗く。
但し、波木が今回使っている狙撃銃はいつもの９９式歩兵銃の狙撃仕様では無く、消音機能付き４６式対人狙撃銃（Ｍ２４ＳＷＳ対人狙撃銃のライセンス生産品）だ。
夜間狙撃と言う事で出来る限り発砲炎が出ず、消音を必要としたため、山城が予め海軍陸戦隊から取り寄せた物だ。

山城
（慣れない銃だからな……大丈夫だろうか？）

心配しながら見ていると、直ぐにパス！…と独特の発砲音が聞こえてきた。
そして、間髪入れずにもう一度パス！…と聞こえた……

シルヴィア
「…で、待ち伏せ→狙撃→死体…はいいが、死体はどうする？」

山城
「そこら辺に放っておく気は無いよ」

ごそごそと陸自隊員が現れ、テキパキと敵兵2人の死体を運び込む。

山城
「さて…これで向こうが神隠しにあったか、エルフ達に捕まったと思うか……見ものだな」

シルヴィア
「……一体何を考えておる？」

山城
「その答えは敵が出してくれるよ」

翌３０日

アズラエル軍陣中

アズラエル
「……なに？　帰っていない？」

士官
「は、２人の内、どちらかが情報を持って帰る筈なのですが…」

アズラエル
「…敵に発見されたか？」

士官
「さあ…誰も何も聞いておりませんので…」

アズラエル
「……あと、何人だ？」

士官
「２０名程です」

アズラエル
「わかった…捜索しろ」

士官
「は」

返事をすると、その士官はテントから出て行った。

アズラエル
「やはり、エルフなぞ信用する物では無いな…」

次号へ

１５４　阻止任務（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１５５　頭脳戦（前書き）

新米士官
「『たかじんのそこまで言って委員会』で勝谷さんが言っておりましたが、本日、日米合同離島奪還訓練が行われるそうですよ」

山城
「本日の前書きネタはそれですか…」

新米士官
「空母ジョージ・ワシントンが出る事になってます。ついこの間に韓国海軍と臨時訓練やってました…乗員の皆さんお疲れ様です」

福本
「まあ、日米合同でやる事は置いといて……日本の政治家は見に来るの？」

新米士官
「さあ……左翼党（社民党）と売国奴党（民主党）の奴らは誰も見に来ないと思いますよ。だいたい、新聞を見ても『離島奪還訓練』の『離』の字もないし」

福本
「おいおい…」

新米士官
「『宇宙戦艦ヤマト』並みの意思と決意と根性あれば、今頃日本にも正規空母と原子力潜水艦があったんだけどな……」

155　頭脳戦

5月4日（現世界4月24日）

アズラエル
「……それは本当なのか！？」

士官
「は、はい！」

それは信じられ無い報告だった。
戻らなかった2人を1日掛けて捜して見付からず、その夜に送った2人も消息を絶ち、1日に送った2人も戻らなかった。
そこで2日の間を開け、今度は6人を送った……戻って来たのは2人だった。その2人の話だと、2人は頭を撃ち抜かれ、2人は解らないと言う…その2人が無理矢理前進した後の消息は解らないそうだ。
これを聞いたアズラエルは驚愕した。
自分が作った特殊部隊が壊滅したからだ。

アズラエル
（おかしい…シリルティア王国が後ろにいるとはいえ……こちらの事が全て読まれているではないか！）

……実はアズラエルの頭に『新興勢力』の大日本帝国の事はなかった。
だから、自分の配下がシリルティア王国でゴタゴタを起こしていた事は知っていても、まさか日本大使館でゴタゴタを起こしていたと

は知らなかった。
それでも……

アズラエル
（それ以前に……シリルティア王国に空飛ぶ怪物なんてあったか？）
……この疑問は持っていた。

その頃……

山城
「敵は進撃を停止したままか…情報が入手出来ないからな、当然か」
宿舎代わりに使っている小屋の中で、ホークアイの偵察結果を聞いていた。

シルヴィア
「しかし、まさか昨日は人数を増やして来るとは思わなかったな」

山城
「まあ、結果的に敵に何があったか知らしめる事になったし…結果オーライってとこかな」
狙撃で2人を倒し、接近して来た2人をそれぞれの得物で声を出さない様に倒したのだが。

シルヴィア
「それで、あの情報漏洩阻止を何時までやるのだ？」

山城
「あと数日程かな…向こうが情報に飢えるまで…こっちの準備整うまで」

シルヴィア
「敵の焦りを誘う気か…こちらの準備を整えつつ」

山城
「あぁ…さて、出来具合を見て来るとしますか」

そう言うと、近くに置いていた鉄帽を被り、シルヴィアと共に出て行った。

その頃……日本では……

国防省海軍次官室

福本（伊吹）
「ふむふむ……今度の一戦で決着をつけるか」

山城直筆の計画書を見て呟く福本次官。

福本（伊）
「やはり、第零艦隊に配備したままで良かったな……流石と言うべきかな…」

そう言うとその計画書を置き、横に退けてあった別の計画書を取る。
表紙には『第零艦隊増備案・人員編（機密）』と書かれていた。

福本（伊）
「これを見たらあいつはどう思うかな？　楽しみだ」

今年卒業の士官学校・海軍兵学校の生徒達から半数志願、半数密かに選抜して集めたひよっこ士官達だ。

福本（伊）
「僅か1年の違いとは言え…戦場を潜り抜け、指揮官を経験した者との違い…楽しみだな」

まるで何かの悪戯を思い付いた子供の様な笑みを浮かべる福本伊吹海軍次官であった。

その頃……

横井
「ふう…」

応診を済ませ一息吐く横井軍医中尉。
陸軍の衛生科と協力し、エルフ達を診察したところ、衛生環境・健康状態については良好との結果が出ていた。
さすが、ファンタジー小説で森の民と言われているだけあって、森林に適応した生活をしている。
あとは自分達が入って来た事による影響を心配しなければならない

が、今のところ影響は見られていない。

横井

「まあ、環境学者か人類学者か知らないけど、調査したら大変な事になりそうね」

こちらもこちらで楽しそうに笑った。

次号へ

１５５　頭脳戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１５６　大口の罠

５月７日（現世界４月２７日）

アズラエル軍……と言うよりも、アズラエルは意気揚々と進軍していた。
何故なら……昨夜、やっと敵の情報を手に入れる事が出来たからだ。
しかし……特殊部隊１０人全員の内、帰還したのは４人、内２人は重傷だった。
だが、情報によると敵は第一族長のいる村で我々を迎え討つと解ったからだ。
これを知ったアズラエルは全軍に進軍を命じたのであった。
だが……

山城
「全く…あの缶に入っていた紙の事をそのまま信じるとは……バカな奴だ」

森の中でアズラエル軍の進軍風景を見ながら呟いた。

シルヴィア
「まったく…リチャード３世陛下から何をしつこく訊いていたのかと思えば……恐ろしい奴だ」

山城
「敵将の性格を利用する…別に珍しい事じゃないよ」

リチャード3世から聞いたアズラエル候は自信家で自意識過剰なところがあり、軍事知識は陛下よりはあるそうだ。
それを聞いた山城が採った手段……

シルヴィア
「しかし、まさか部隊の半数を消耗して手に入れた情報がガセネタと解ったらどんな顔をするだろうな？」

山城
「さあ…捕虜にして訊いてみれば？」

敵は必死になって手に入れた情報が本当の事だと思うだろう……ところがどっこい、戦場の情報戦は騙し合いである。
どちらが狸になって化けるかの化け合い競争だ。
これについてはさんざん士官学校で学ばされた事である。
戦場とは騙し合いの場であり、我慢比べの場であり、知恵争いの場である…と。

山城
「さて……どうするかな？」

ニヤリと笑った。

その頃……

ユリアヌス

「いやはや…こんな事になるとはね」

山城達とは離れ、別の場所でアズラエル軍を見ているユリアヌス。
既に指揮下の部隊は山砲、迫撃砲、重軽機関銃を配置し、何時でも撃てる状況下にある。

ユリアヌス
「イザとなれば空からの攻撃も期待出来る……2年前と随分次元が違うな」

軍人故に自分達の持つ武器の威力を知りらなければならない。
自らが持つ小銃……９９式歩兵小銃を見る。

ユリアヌス
「我々にとって新式…だが彼らには旧式…か」

そんな事も知らずにこの場に踏み込んで来た敵は…哀れだな、とユリアヌスは思った。

それは突然だった。
一番前を進んでいた部隊が一斉に居なくなった……と言うよりも、落とし穴に嵌まった。
いや、『落とし穴』と言うより『落とし堀』と言うべきか？
とにかく嵌まった…しかも、急には止まれ無いから、後続も穴に落ちた。
後ろに居て、何が起こったのか解らないアズラエルは近くの部下に「何事だ!?」と訊くしか無かった。
しかし、質問に答える前に左右一斉射撃・砲撃が襲ってきた。

たちまち将兵は右往左往の大混乱に陥った。

アズラエル
「ど、どうなっている！？　な、何故ここで襲われた！」

ドサドサドサ！！

落とし穴に嵌まった音が聞こえた。
何せ工兵隊が計算能力を総動員して作った落とし穴だ。

山城
「撃て！！」

シルヴィア
「撃て！！」

山城はヘッドセット、シルヴィアは無線機に向かって叫ぶ。
既にトランシーバーや無線機は各部隊に配備済みである。
この為、１０秒後には全員が小銃の引き金を引いた。
何せ火打ち石式小銃（フリントロック小銃）に対し、ボルトアクション式小銃・自動小銃…発射速度にしろ、装填時間が違う。
フリントロック小銃はどうしても装填には立たなければならない。
対しボルトアクション式の９９式歩兵小銃にしろ、６４・８９式小銃にしろ、伏せて装填出来る。
これは大きかった。
銃撃戦時に露出面積が少ない事は防御面で大きい。
実際、アズラエル軍兵では装填中に被弾し、死傷している。
これに上から降ってくる山砲・迫撃砲が加わるのだから余計に傷口

が拡がっていた。

「三…少佐！　敵の大砲を確認！」

アズラエル軍の後部攻撃を担当する田宮少佐の部隊。

田宮
「そうか……こちら、信濃（部隊符丁）。天龍、どうぞ？」

無線
『こちら天龍。感度良好』

田宮
「敵の野砲を発見。これより発煙弾を撃つ。それより北２０メートルを掃射してくれ」

無線
『了解』

返事が返ってくると、直ぐに田宮は発煙弾を取り出し、上空へと発射した。
すると、たちまちバタバタと風切り音が聞こえてきた。

無線
『発煙弾確認、攻撃する！　伏せろ！』

田宮

「総員、伏せろー！」

叫ぶと田宮も慌て伏せる。その直後、シュッ！…と演習で何度か聞いた発射音が聞こえた。

バンバンバンバンバンバンバンバンバンバン！！

連続した爆発音が鳴り終わって顔を上げて見ると、攻撃された地点に太陽の光が照していた。

ロケット弾による3機一斉攻撃により邪魔な枝や何やらが吹き飛んだから当たり前だろう。

田宮

「前に使った進撃路を使ったのが運の尽きか」

ポツリと田宮は呟いた。

次号へ

１５６　大口の罠（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１５７　軍崩壊（前書き）

新米士官
「本日、『坂の上の雲』の第二弾が始まります！」

福本
「いよいよ、日露の対決だな」

山城
「…作品が作品だけに親近感がわきますよ」

新米士官
「いよいよ、超大国ロシアと激突する日本帝国！　大国相手に官民一体となって団結した真の日本をご覧あれ！」

山城
「いま、腰抜けですからね～」

福本
「世界が認める悪党に媚び売ってるからな…政治家が」

新米士官
「糞の左翼とバカな理想家が闊歩してるからね～（怒）」

福本・山城
（（だからって、無茶苦茶な事ゆわないでよ））

新米士官
「あ～、宇宙戦艦ヤマトで中国海軍潰したろか！！」

福本・山城
（（オーバーキルだから…））

157　軍崩壊

ドン！ドン！ドン！ドン！ポン！ポン！ポン！ポン！

ヒューウ……

ヒューウ……

ドワーン！ドワーン！ドワーン！ドワーン！ドワーン！

ドワーン！ドワーン！ドワーン！

山砲と迫撃砲の砲撃の着弾は地面を揺らす程では無い。

しかし、撃たれる方にとっては関係ない。

撃たれる砲弾は榴弾である。

着弾時に炸裂し、破片や爆風で人員を殺傷する。

また、シリルティア王国の９２式重機関銃・９９式軽機関銃、自衛隊のミニミ軽機関銃……これらの弾幕はアズラエル軍ではお話にならなかった……強力過ぎて。

この頃…１８世紀における小銃火力を最大限に引き出す方法は、有名な長篠の戦いの様に歩兵を縦隊一列、あるいは複数列に並ばせ、号令による一斉射撃である。しかし、小銃機構の発達により連射速度、装填速度等が向上し、これにガトリング砲を基礎にした機関銃の出現により、縦隊一斉射撃が無用になってしまった。しかも、ゲリラ戦となると縦隊は只の的にしかならない…まあ、現状下ではその縦隊も崩壊しているのだが……。

アズラエル

「い、い、いったい、どうなっている！？　何故前に進まない！」

馬から這いずり降りて伏せて訊く。
しかし、この周辺にいる人間に前の様子なんか解らない。
また、同様に後ろの様子も解っていないが。

兵士
「お、お知らせ致します！」

士官
「なんだ！？　早く言え！」

兵士
「は！　先鋒隊は巨大な落とし穴に嵌まり、後続は前進出来ません！」

アズラエル
「な、な、な、なんだと！？　あいつら、そんな穴をどうやって短時間に掘ったんだ！？」

答えは簡単……日本帝国陸軍工兵隊の機械力を総動員しただけの事だ。

士官
「どうしましょう、アズラエル候？」

アズラエル
「早く反撃しろ！　敵は少数、我々は３８００だ！　倒せない…」

ヒュン！

ドガーン！！

アズラエル
「うわー！！！！！」

近くに着弾した山砲砲弾の爆発に驚いたアズラエルは自分の馬に乗って逃げてしまった。

士官
「アズラエル候！？　どちらへ！？」

士官の問いの声も銃砲声の中に消えた。

無線
『こちら、隼。大和どうぞ？』

山城
「こちら、大和。なんだ？」

ヘッドセットに入ったホークアイ偵察型からの通信に、山城は射撃を一時中断して答える。

無線
『敵の中に馬を使い逃走する人間あり…敵将の可能性があります』

山城
「了解…愚将は戦場で死ねつーの」

シルヴィア
「逃げたのか、愚弟は？」

山城
「あぁ…こちら、山城。これより陛下の弟を追跡します。ユリアヌス伯爵、田宮少佐、あとをお願いします」

ユリアヌス
『わかった』

田宮
『わかりました』

走り出した福本・シルヴィアは大急ぎで走った。
しかし、アズラエルの逃げた方向ではなく、襲撃地点の後方へ…。

山城
「すっぱりとヘリを置いてる所って書けばいいだろう！」

シルヴィア
「口よりも足を動かせ！」

いや…充分走ってるし。
実は１００ｍ後方に丁度拓けた土地があり、ここに戦闘ヘリや輸送ヘリが待機している。
その内の一機、４０式『黒鷹』（ブラックホーク）の飛び乗ると、直ぐに発進した。

山城
「誘導はホークアイがする。そのまま最速で飛べ」

パイロット
「了解」

さて、見捨てられた軍は大変だった。
何せ命令系統どころか、命令伝達系統が機能していない時点で、軍とゆう物は成り立たない。
そこにいくら個人的、あるいは団体的武勇が存在していても、戦況に影響しない。
そう言った意味ではアズラエル軍は崩壊していた。
士気が高ければマシだったかもしれないが、銃砲撃の前に消え失せていた。

次号へ

１５７　軍崩壊（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

158　結末と終末（前書き）

山城
「ところで作者。昨日の『坂の上の雲』はどうだった？」

新米士官
「面白かったけど……小村寿太郎が悪役ぽくしてたのがやだ」

福本
「おいおい」

新米士官
「あと、もう少し義和団の変辺りに着色して欲しかったな…あんなスル～と解説されるよりはマシになると思う」

福本
「…無茶な事は言うなよ？」

福本
「しかし、あの『朝日』は良かったな」

158　結末と終末

アズラエル
（バカな…奴らはあの村に籠って戦う筈…何故あそこで襲われた！？）

必死に馬を走らせ逃げながら、脳内を総動員していたアズラエル。

アズラエル
（あの情報が嘘だったのか？……いや、そうだとしてもおかしい…シリルティア王国だけにしては……どうなっている！？）

馬にしがみつきながら、必死に逃げていた。

無線
『敵将は真っ直ぐに北に向け逃げています』

山城
「まあ……逃げる先は1つしか無いから…当たり前か」

シルヴィア
「それでどうする？　殺るか？　捕虜にするか？　それとも埋めるか？」

山城
「……最初と最後はどうかと思うけど…」

呆れながらも……けど、それも良いかもしんない……と、密かに考える。

波木
「……御二人共…恐ろしいですよ」

2人の会話を聞いた波木が少し退いた。
まあ…そりゃそうだよな……

山城
「急いでくれ。あの愚弟だと何をするか解らん」

パイロット
「はい」

ブラックホークの日本独自改良型である『黒鷹』のエンジンの回転数が上がっていく。

馬で逃げていた、アズラエル。
だが……

アズラエル
「うわ！！」

張られていたロープに馬が足をとられ、派手に落馬した。

アズラエル
「く……一体、どうなっている？」

リチャード
「日本軍から聞いて待っていたんだ…義弟よ」

アズラエル
「げ、あ、義兄上(あにうえ)！　な、なぜここに！？」

ここに居る筈の無い兄が居たのだから、そりゃあ驚くだろう。
しかも、メイドのローニャ他、十数名程の兵士がアズラエルを囲んでいた。

リチャード
「我が身の不徳と言うべきだな…宿営地で全て聞いた。エルフが私を拐ったと言ったそうだな」

アズラエル
「な…どうやって！？」

何せ、宿営地までは速くても3日はかかる……いったいどうやって短時間で往復したのだ？……何も知らないアズラエルにとっては疑問であった。

リチャード
「それだけでは無い…我が従妹の臣下から真実は全て聞いた……この大森林地帯に侵攻し、エルフ達を襲ったそうだな！？」

アズラエル
「な、な、な、な！」

リチャード

「聞きたい事は山程ある…後でゆっくりと話してもらおう」

普段は見せない義兄の威圧的な声にアズラエルはたじたじとなった。

バタバタバタバタ！

その時、空から独特の風切り音が響いてきた。
山城達が乗る黒鷹がリチャード達を見付けたのか、降り始めた。
その光景にアズラエルは唖然と見ていた。
しかし、次の瞬間に愚弟の邪悪な頭脳はある事を導き出した。
そして、黒鷹が着陸した時、アズラエルは行動に出た。

あんまりこんな事は言いたく無いが……神様は意地悪だ。
最後は『チャンチャン』で終わらせてくれ無い様だ。何故なら……

アズラエル
「動くな！　動いたらこのメイドを殺すぞ！！」

一瞬の隙を突いて、ローニャを人質に取った愚弟アズラエル。

アズラエル
「くそ…シリルティア王国が出て来たのは解るが…なぜ、何処にあるかも解らん日本とか言うが出て来た！？」

シルヴィア
「当たり前だ！　お前のアホ部下は、愚かにも我が国の日本大使館で騒ぎを起こしたのだからな！」

アズラエル
「な、なんだと…あ、今まで私を邪魔したのは日本だったのか！」

シルヴィア
「ようやく気付いたか、大馬鹿者！」

口に関してはシルヴィアが優位だが……人質がいるだけに手は出せない。
そんな中、山城はヘッドセットで話していた。

山城
（こちら山城。波木、聞こえるな？）

波木
『はい、聞こえます』

山城
（ヘリからあいつに狙撃出来るか？）

波木
『可能です。しかし、問題が』

山城
（なんだ？）

波木
『その1、丁度あなたが弾道上に居る事。その2、人質を盾にしている事』

山城

（1は大丈夫だ。狙撃の瞬間に退く。2は……頭ではなく、相手の露出面積の多い右肩だ）

波木
『なるほど……弾種は？』

山城
（強力弾だ……で、どうだ？）

波木
『……右肩が見える様にしてくれませんか？　あと、少し時間を下さい』

山城
（わかった…話をして時間を稼ぐよ）

山城
「さて…お前の質問に答えたんだから、次はこっちだ。なんで、こんな馬鹿な事をした？」

アズラエル
「ふん！　エルフは『西の民』と同様、世界を焼き、支配する！私はそれを防ごうとしたまでだ！」

シルヴィア
「やはりか！　お前はシグドー教の狂信者だったのだな！」

アズラエル

「狂信者？　いいや、断じて違う！　私は忠実なる僕（しもべ）である！　それに私の方が王たる資格がある」

福本
「（あるな…暴君たる資格はな）何故だ？　リチャード陛下に資格が無いとゆうのか？」

アズラエル
「当たり前だ！　その証拠はこの娘だ！　何故なら…」

そう言うと、空いている左手で乱暴にローニャの髪を捲り上げた。

アズラエル
「見てみろ！　この娘はエルフだ！　世界を闇に染める血を持った1人だ！」

まるで魔女裁判を見ている様な気がしてきた…と山城は思った。
しかし、これを聞いていた人間達は一様に『だから？』と反対に訊きたいぐらいだった。

シルヴィア
「馬鹿馬鹿しい！　あの様な宗教の教典を信じるなど、吐き気がするわ！」

この時、口を開くのはシルヴィアだ。
言い合いなら天城に鍛えられているから。（笑）

アズラエル
「うるさいわ！　エルフを近くに置いとくだけでも穢れる！　義兄上は既に穢れている！　ここに居る、私を除いた全員が地獄に落ち

るぞ！！」

山城
「駄目だこりゃ」

少しは人の心は有るかと思っていたが……駄目だ、処置も何も無い。

アズラエル
「そんな事は後でいい！　お前の乗って来たあれに乗せろ！」

そう言って山城とヘリを指差した。

波木
『少佐殿。いつでも』

山城
「…そうか、わかった」

シルヴィア
「山城！？」

シルヴィアの叫びを流し、スッと右に退いた山城。
しかし、次の瞬間にはアズラエルの顔は苦痛の表情だった。
何故なら、山城が右に退いた瞬間、波木は躊躇わず発砲した。
発射した銃弾は、下手に当たれば骨を砕く強力弾。
それが利き手の右肩に当たれば当然だ。
余りの痛さ故か、ローニャを突き飛ばした。
しかし、今度は山城達と一緒にいたレイが飛び出した。
その表情はいつも通り……だが、自分達をまるで悪魔の如く言われ

て怒り心頭に決まっている。
シルヴィア、山城がローニャを保護した時には全ては終わっていた。
アズラエルの首の動脈を正確に斬っていたからだ。

次号へ

１５８　結末と終末（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

159　2週間後……（前書き）

新米士官
「民主党はまた左翼党……もとい社民党と連立しようとしているとか……馬鹿だ…救い様の無い馬鹿だ」

山城
「前の鳩ポッポであんだけああなったのに？　馬鹿を越えている様な気が…」

福本
「それについてだがな…民主の中国忠犬官房長官と左翼党女党首は弁護士事務所か何かの先輩・後輩の関係だとか…」

山城
「…色んな意味で駄目だこりゃ」

新米士官
「来年は内閣総辞職で総選挙かな？」

１５９　２週間後……

５月１０日（異世界５月２１日）

帝都東京　国防省海軍次官室

福本（伊吹）
「まったく…ほとほと、人を使うと言う事を知らない奴だな」

山城
「年齢上、本来なら自分が使われていますから…どうも、人を使おうと言う気になれないんですよ」

福本（伊）
「まあ、どこぞの馬鹿よりはマシか……で、今回は疲れただろう？」

山城
「はい…報告書の多さに呆れました」

今回のエルフ族と国王の暗愚な義弟の間に起こった地域紛争は、大日本帝国より歩兵三個中隊（自衛隊）、工兵科一個大隊、衛生科一個大隊、輸送機（清空）８機、輸送ヘリ（黒鷹・白鷹）１６機、戦闘ヘリ（飛鷹）４機、ホークアイ試作偵察型２機とゆう、大量部隊派遣だった。
しかし、地域紛争であり、当事者はエルフ族とアンデュラス王国である。
そして、日本の立ち位置はシリルティア王国同様、支援役兼仲介者であり、例え賠償金が出ても弁護士の様に仲介料の様な物が入る訳

ではない。
しかし、そんな事は日本政府は気にしていなかった。それよりも新たな国交先が見付かった事により、そちらに対する関心が高く、シリルティア王国を通じてアンデュラス王国と接触しようと躍起である。
また、アンデュラス王国とエルフ族との賠償云々はシリルティア王国と日本の仲介もありなんとか決着がついていた。
いくら双方言いたい事が有ると言っても、若くても一国・一族を束ねる若者2人、元々領土欲は無く、非さえ認めてくれればよかったからだ。

山城
「まあ、残りは外交官の仕事だったので、書く時間は大量にありましたけど」

福本（伊）
「まったく…浅間山荘の時とは反対だな」

山城
「ですが、そのお陰で対テロ事態に陸海空が参加出来る様になったんですよ?」

福本（伊）
「まあ、確かにそうだな……ところで、それだけか?」

山城
「そうです……と、言いたいところですが、直に耳に入れたい事が…」

福本（伊）

「待て。それは向こう…異世界の事か？」

山城
「それ以外に何があるんですか？」

福本（伊）
「……無いな。ちょっと待て」

そう言うと机にあった電話を使い、何処かに電話を掛けた。
そして、5分後、にこやかに受話器を元に戻した。

福本（伊）
「よし、場所を変えるぞ」

山城
「えっ、どちらへ？」

福本（伊）
「首相官邸だ。次いでに小泉首相へ直に話して貰うぞ」

山城
「……はあ？」

後の祭り……後悔先に立たず……そんな言葉を脳内で並べながら歩いていた。
まさか、この歳で海軍次官の隣を歩く事になろうとは……

福本（伊）

「…口数が少ないな」

山城
「まさか、首相官邸に行く事になるとは思いませんでしたよ。まあ、シルヴィアには明日帰ると言ってありますので」

……何か嫌な予感がしたから。

福本（伊）
「それで、その彼女は？　関係は進んだか？」

山城
「……今日は王城に行ってます。アーネリア陛下に呼ばれたそうです。あと、個人的関係に上司が踏み込むのはどうかと思いますが？」

福本（伊）
「なに、多少なりとも部下を把握する為だ。ちっともおかしく無いぞ？」

山城
「…面白がってるでしょう…絶対」

…悪い人では無いが、こう言うところが珠に傷。

福本（伊）
「ところで、山城。走るの得意か？」

山城
「はぁ…まあ、普通に速い方だと思いますが…なにか？」

福本（伊）
「いやな…馬鹿な政治家に喧嘩売る様な有名人の辛いところなんだよ」

そう言った瞬間、いきなり走り始めた。
これには山城も驚いたが、とにかく走った……

山城
「…尾行されていたんですね……マスコミに」

福本（伊）
「最近は顔の知らない新入りに尾行させてるからな……まあ、何時もこうしてからかい次いでに巻いてる」

悪戯小僧の様に笑う海軍次官。

山城
「あの様子だと、首相官邸に張り付いているのはどうする気ですか？」

福本（伊）
「まあ、任せたまえ」

山城
（……不安だ）

次号へ

１５９　２週間後……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１６０　首相官邸にて　前編（前書き）

新米士官
「福島にはとんと呆れるよ…武器輸出は『日本が死の商人になるから』『日本の武器が世界の子供達を殺すから』とか……あんた、本当に政治家？」

福本
「日本を体制崩壊で格安で売れる様な旧ソ連や質は低いけど売れる中国の武器と一緒にしてるんじゃないの？　大体、日本が輸出するのは武器は高価格、ちゃんとした国同士間での取引。テロ組織が買おうとも思わないし、子供を容赦無く殺すなんて、中国・ロシア・独裁国・テロ組織ぐらいだ」

山城
「それにこの人、防衛大網で離島防衛も変えるな、て言ったそうですよ。尖閣諸島問題があるのに」

福本・新米士官
（（…本当に日本の政治家？　中国の犬の間違いじゃない？））

１６０　首相官邸にて　前編

首相官邸

小泉首相
「あっはっはっは…なるほど、よく考えたな」

福本（伊吹）
「なに、モーゼの十戒の如くですよ」

山城
「いや…海は割ってませんから」

予想通りと言うべきか、首相官邸の付近を張っていた新聞・雑誌記者達に対し、福本伊吹海軍次官が使った手は……

山城
「まさか、人数分の出前を取って、記者の目を反らすとは…しかも、代金は次官のポケットマネーで」

福本（伊）
「さすがに経費で回す訳にもいかんだろ？　下手をしたら福島辺りに何か言われるからな」

そう言いながら笑う福本伊吹海軍次官。

小泉首相
「しかし、いきなり電話してきたと思ったら、『官邸でお話出来ま

す？』だからな」

福本（伊）

「いえいえ、息子や父が推薦する奴ですから、首相にもお目通しするいい機会だと思いまして」

…なるほど、そうゆう事か。

そういえば、前々から小泉首相が現場指揮官の顔を見てみたい、と言っていたと福本次官から聞いた事がある。

まあ、頼むから政治のゴタゴタには付き合いたく無いが……

小泉首相

「そうだ。私以外にもう1人聞く人間がいるが、いいかね？」

福本（伊）

「誰ですか？」

小泉首相

「安倍君だよ」

福本（伊）

「あぁ、なるほど」

山城

「……あ、あの…先に確認しますが、まさか安倍晋三官房長官ですか？」

何せ似たような苗字は日本を探せばたくさん居る。

福本（伊）

「残念ながら、政府閣僚内で安倍と言ったら官房長官しか居ないぞ」

山城
「…ですよね…」

……なんで早々に政府のお偉いさん2人に会わなくてはならないのだろうか……

応接室に案内された山城。既に安倍晋三官房長官は椅子に座って待っていた。
先に福本次官が話をして、山城を紹介する。
今思えば海軍次官であるため、安倍官房長官とも顔見知りだ。
そして、全員がソファーに座った。

福本（伊）
「それで山城少佐。私に話そうとしていた事はなんだね？」

山城
「はい…お届けしました報告書にも記載していますが、シグドー教の事です」

こう言うと、小泉首相・安倍官房長官・福本次官は顔を見合わせた。

山城
「あ、あの…何か？」

小泉首相
「…実はその事について君に訊こうと思っていたんだ」

山城
「え？」

福本（伊）
「シグドー教の事は杉下君の報告書にも記載されていたんだが……何せ人を介した為に読み難くなっているんだ」

安倍官房長官
「だから、福本次官には君が現れたら、官邸に呼ぶように頼んでおいたんだ」

山城
「……なるほど」

偶然とは言え、話が早い。

小泉首相
「うむ…君は貴族のご令嬢と仲が良いと福本次官から聞いたのでね。それでシグドー教について教えてもらおうと思ったわけさ」

山城
「ですが、本官の知識も人並み程度ですが…」

福本（伊）
「構わん。我々としても向こうの世界に無知のままではいけないからね」

山城
「…わかりました」

小泉首相
「では、シグドー教について説明してくれ」

山城
「はい」

さて、ここで読者にもシグドー教について少し説明しておこう。
シグドー教を簡単に言えば差別思想の塊である。
教典の中に『『西の民』とエルフ族は世界を滅ぼす。『西の民』とエルフ族を滅ぼさない限り世界に平和は訪れず、滅ぼせば世界は楽園となる』と書かれていた。
もし、似た物を挙げるとすると共産思想であろう。
そして、なにを神に掲げているかと言うと……

小泉首相
「ヴァルキュリア？」

山城
「正確にはヴァルキュリア人とも言うそうですが…彼らが神として崇められております」

福本（伊）
「山城、ヴァルキュリア人云々については歴史的な事になるな？」

山城
「あ、はい」

福本（伊）

「なら、小休止しましょう。一気に喋るのも疲れますから」

次号へ

１６０　首相官邸にて　前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１６１　首相官邸にて　後編

小休止後……

小泉首相
「さて、続きなんだが…」

山城
「では、シグドー教が出来た要因から説明します…と言っても、話と伝承の組み合わせですが…」

福本（伊吹）
「構わんさ。どちらにしろ、現場の意見だからな」

山城
「では……喋りになると長いので、読者の皆さんには作者に書いてもらいます」

……余計な事を言わんでいい。
では、山城の話を文章化したものをどうぞ。

（現異世界の）今から１５００年前、シルヴィア達がいる大陸のほぼ真ん中で、西の地域を統一した通称『西の民』と東の地域を統一した通称『東の民』がいた。
ある時、肥沃な土地が多い『西の民』の地域を奪うべく『東の民』が侵攻したそうだ。

しかし、『西の民』は『空の民』と呼ばれる者達と親交を深めており、技術力が高かった為、たちまち『東の民』を撃退した。
しかし、『東の民』は『西の民』と親交している『空の民』と敵対する『空の民』と同盟を結び、東側の『空の民』は『西の民』に太陽多数落とし、また『ヴァルキュリア（人）』と呼ばれる者達を使い、青く光る槍を使い『東の民』を勝たせた……と言うのが、歴史的背景だ。

小泉首相
「では、シリルティア王国は…」

山城
「『西の民』の生き残りが数百年の流浪の旅の末に行き着いたのがあの半島。彼らの子孫です」

福本（伊）
「それじゃあ、なんでエルフが出てくるんだ?」

山城
「伝承によりますと、当時は未開森林地帯も多く、エルフ族も『西の民』と共に戦ったそうです」

安倍官房長官
「じゃあ、『東の民』はどうなったんだ?」

山城
「……伝承によると、直ぐ後に滅びたそうです」

小泉首相

「滅びた？　何故だね？」

山城
「……わかりません。何故か突然滅びたんです。それぐらいしか…」

福本（伊）
「ふむ…しかし、なんでシグドー教はアンデュラス王国に広まった？　今までの話を組み合わせると、『東の民』の生き残りが信仰するんじゃないのか？」

山城
「義弟のアズラエル候に関しましては、元々エルフ族に対し、『劣った民族』と思っていた節があります。だから、一般には余り浸透していない様子です。また、アズラエル候がシグドー教に接触出来たのは王族であるが故だと思われます」

小泉首相
「……山城少佐。君はこの先、この様な事態が起きると思うかね？」

山城
「それについては……福本次官と同意見です」

そう言いながら、山城は福本次官を見た。

福本（伊）
「今後、現地ではシグドー教による問題が発生する可能性は大きいです。そうなりますと、我が国はどういたしますか？」

これは非常に高度な問題である。
日本は八百万の神を基本とする神道信仰国家である。この為、仏教・

キリスト教・イスラム教などの宗教信仰に関してはフリーハンドであり、宗教対立などには程遠く、中立性が高い。
しかし、これは裏を返せば信仰の自由が有るわけで、シグドー教を認めるか否かの問題に繋がる。

小泉首相
「確かに、我が国には信仰の自由がある。だが…」

そう言い一度言葉を切る。しかし、直ぐに決意を示した。

小泉首相
「特定民族の迫害や他宗教を排除する宗教を我が国は容認しない」

安倍官房長官
「わかりました」

福本（伊）
「はい。山城、わかったな?」

山城
「は、はい!」

小泉首相
「さて、堅苦しい話はここ迄にしよう。もっと向こうの話を聞かせてくれないか?」

山城
「わかりました」

福本（伊）
「すっかり遅くなったな」

昼頃に首相官邸に来た筈が、いつの間にやら日が暮れていた。
安倍官房長官の公用車で国防省の近くまで送ってもらった。
そして、今は海軍次官室。

山城
「ところで、何ですか？　今夜の寝床を探さなきゃいけないんですけど？」

福本（伊）
「寝床なら当直室が空いてるから使え。それとこれ」

渡された物には辞令とファイル。

山城
「何ですか、これ？」

福本（伊）
「上の辞令は後でいいから、先ずは下のファイルを見ろ」

そう言われて山城が見ると、表紙に『第零艦隊増備案・人員編（機密）』の文字……

山城
「これは…次官！？」

福本（伊）

「今年卒業のひよっこ達を何人かそっちに送る事にした。緊張感がある世界だから、今後の為でもある。間があったら配備先とかを検討してくれ。配属日は追って知らせる」

山城
「はい。じゃあ、こっちの辞令は…」

福本（伊）
「1週間の休暇辞令だ」

山城
「……あの、日付が明後日ですよ？　それに仕事が…」

福本（伊）
「小澤長官から許可は採った。天城は明日から神戸のドックで長期点検。一度向こうに戻らないといけないだろう？　質問は？」

山城
「…ない…です」

……本当に…手を回すのが早いお人ですよ…あなたは…。

次号へ

１６１　首相官邸にて　後編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１６２　最果て休暇はどうするか？

５月２２日（現世界５月１１日）

早朝に横須賀の軍用飛行場から神戸軍用飛行場へと飛んだ山城。
先に神戸鎮守府に立ち寄り、天城のドック入りについて聞いてみると、既にドック入りし、今日から点検・修理に入る事を聞いた。
その後、シリルティア王国へ飛ぶ定期便に乗り込だ。そして、到着した山城は真っ直ぐ居候先のボニファス邸へと向かった。

ボニファス伯爵邸

山城
「ボニファス伯爵、おられますか？」

シルヴィア
「お祖父様なら執務中だぞ。山城」

山城
「やあ、おはよう、シルヴィア」

二階から答えたシルヴィアに山城は普段通り挨拶する。

シルヴィア
「残念だが、もう昼だ」

山城
「おっと、もうそんな時間か」

わざとらしく言うと、どちらともなく、お互いに笑う。

シルヴィア
「まったく、お主は彼女を1人にしておきながら、よく平気だな」

山城
「無茶言わないでくれよ。まあ、その埋め合わせは出来るけどさ」

シルヴィア
「ほう…どうやってだ？」

山城
「これさ」

そう言うと、降りて来ていたシルヴィアに休暇の辞令を見せる。

シルヴィア
「ほ～、偶然だな。私も休暇をもらった。それも同じく1週間」

シルヴィアも辞令（手書き）を懐から出して見せる。

山城
「……また何処かで話がついてたのかな？」

シルヴィア
「…らしいな」

山城
「そうか…なら、どうする？　この屋敷で過ごす？」

シルヴィア
「それを決めるのは早計だ。先ずはお主の部屋に行こう」

山城の部屋

シルヴィア
「なんだ、これは？」

ベッドに置いた荷物の中から『第零艦隊増備案・人員編（機密）』のファイルを見付けて訊いた。

山城
「ん、あぁ、それ？　今度配属される新米達のファイル」

それを聞いてパラパラとシルヴィアが捲ったが、中身が解ったので飽きたのか、ファイルをベッドへ放り投げた。

シルヴィア
「仕事の話は置いておこう。気が滅入る」

山城
「そうだな…さて、１週間の休暇をどうする？」

シルヴィア

「人目を忍んでイチャイチャする」

山城
「…もう少し現実的な意見は無い？」

シルヴィア
「……人目を忍んでイチャイチャデート」

山城
「……誰からデートなんて教わったの？」

シルヴィア
「横井中尉からだ」

山城
「……横井さん…」

年頃の娘に…受容範囲ですけど…何を教えてるんですか？

シルヴィア
「しかし、この国では忍んでイチャイチャデートは無理だな」

山城
「そりゃあそうでしょう」

第一、姿が目立ち過ぎる……シルヴィアは直ぐに身分がバレそうだし…。

シルヴィア
「そこでだ、お主の世界に行ってみようと思うのだ！」

山城
「向こうに？」

シルヴィア
「うむ、１週間の休暇だ。この前は回れなかった所を回ってみたい」

山城
「なるほどね……まあ、いいと思うけど…」

近場の観光地と言えば、姫路、大阪、京都、地元の神戸か？

シルヴィア
「よし！　決まりだ！」

ニコニコと笑いながら言う。

山城
「…一度、家に戻るか」

……その前に……

第零艦隊陸上司令部

小澤中将
「ほう、あっちで過ごすのか？」

山城
「はい。シルヴィアも向こうで過ごすと言っておりますので」

小澤長官
「その様子だと、今日中にここを発つのか？」

山城
「はい。善は急げですから…緊急時は国防省に電話して下さい。あと、念のために携帯と国防省の番号のメモを渡しておきます」

小澤中将
「わざわざ済まんな…しかし、それなら君に連絡すればいいんじゃないか？」

山城
「もしかしたら、電源を切ってる可能がありますので」

小澤中将
「そうか…まあ、休暇なんだからゆっくりと羽を延ばしてこい」

山城
「わかりました。失礼します」

そう言うと山城は退室した。

次号へ

１６２　最果て休暇はどうするか？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１６３　休暇観光　神戸編（前書き）

兵庫県出身なのに神戸を歩いて無いと言うのが、これ程痛いとは……。

兎に角、簡単ですがどうぞ。

１６３　休暇観光　神戸編

５月１２日（異世界５月２３日）

半年を既に経過していたのにも関わらず、久々に家のベッドで寝ると直ぐに寝入ってしまった。
しかし、哀しいかな軍人の性（さが）と言うべきか、時間に成ると目が覚めてしまう。
まあ、父親が船乗りだからもあるだろうが…。
そして、起きて下に降りると……

シルヴィア
「山城！　助けてくれ！」

山城
「どわ！？」

いきなりパジャマ姿のシルヴィアが現れた。

山城
「ど、どうしたの？」

シルヴィア
「そ、それはだな…」

山城（真希）
「シルヴィアちゃ～ん、逃げ無くてもいいのよ～」

シルヴィア
「っ！　お主の母上殿をどうにかしてくれ～！」

ドタバタドタバタドタバタ！！！！

朝も早くに母親と彼女（未だに秘密）の追いかけっこ……

山城
「……近所迷惑だろう」

そう呟くしか無かった。

なんとか2人を抑え込み、朝食を終えた山城は二階の自分の部屋に入り、着替えていた。
そして、下では……

山城（真）
「も～、あんなに逃げなくても良かったのに…」

シルヴィア
「御母上殿が余計な事をなさるからでしょう」

借りてきた猫の様に大人しく髪を研かれているシルヴィア。

シルヴィア
「まったく、朝起き降りて来てみれば、御母上殿がメイド服を持って現れたからこうなったのですよ」

山城（真）
「まあまあ、今日のデートに似合うかな～？と思っただけなのに」

シルヴィア
「…観光です。今日は神戸の方を回ります」

山城（真）
「そうなの…はい、終わったわ」

シルヴィア
「ありがとうございます」

山城（真）
「いいのよ、髪は女の子の身だしなみの1つなんだから…それより…」

そう言いながら立ち上がるとクローゼットを開けた。

山城（真）
「どれを着る？」

シルヴィア
「……」

山城
「おーい、シルヴィア…って母さん！　またそのクローゼットの中の服増やしたの！？」

絶句したシルヴィアに、間を空けず入って来た山城。クローゼットの中には、女の子用の様々な（本当に様々な）服が入っていた。

山城（真）
「だって、シルヴィアちゃんをまた連れて来そうだったから…それで、どれを着る？」

クローゼットから次々と服を出しながら訊く山城（母）。

山城
「か、覚醒しやがった…」

シルヴィア
「……覚醒したらどうなる？」

山城
「…某作品の翡翠並みに衣装を着せようとする」

シルヴィア
「……ヤバいな」

山城
「あぁ、ヤバいよ」

覚醒した山城（母）を見ながらどう止めたものかと考えていた。

結局、吸った揉んだの挙げ句、普通の服……スカートは長めのを着用…意外だった……に収まり、母親の満足した声を聞きながら家を出た。

山城
「……大丈夫か？」

シルヴィア
「…大丈夫だ。それより、何処へ行く！？」

山城
「う～んと…そうだね…」

神戸周辺には異人館、南京町、あとは……

シルヴィア
「え～い、行くぞ！　考えるより、先ず行動！」

山城
「…やれやれ」

異人館……神戸開港時に外国人住居として建てられた館（やかた）だ。
まあ、神戸開港に関しては４ヵ国艦隊（英・米・仏・蘭）が押し寄せて天皇・幕府に圧力を掛けた事は有名である。
そんな過去がある街は、今や国際港兼日本海軍基地としてある訳だが……。
さて、シルヴィアは「我が屋敷の方が大きい」と言っていた……当たり前です、貴族の屋敷は大体大きいんですから。
しかし、中身に関しては嬉しそうに見ていた。

南京町……神戸に住み着いた中国人の町である。
昼食もここで食べる予定だったから、少し早めに到着、先に昼食を食べてからそこら辺を回った。
ただ、昼食の時に食べた麻婆豆腐が効いたのか、少し舌が麻痺した様だ。
その代わり、食べ歩きに食べた中華マンはいたく気に入っていたが。

簡単ながらの神戸ぶらり観光……明日は姫路だ。

次号へ

１６３　休暇観光　神戸編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１６４　休暇観光　姫路編

５月１３日（異世界５月２３日）

今朝も母親とシルヴィアのドタバタ劇に巻き込まれ、着替えに際しては巫女服をクローゼットから取り出して来たので、無難な服を選ぶとそれを着て慌て家を出た。
後ろで満ち足りない声を出す母親を残して……。
その後、ＪＲの姫路行きに乗り込み姫路へと向かった……

ＪＲ姫路駅前

山城
「はい、我が日本が誇る姫路城…別名白鷺城さ」

シルヴィア
「ほう…あれが日本の城か」

ヨーロッパの城と日本の城は随分と外見が違う。
ヨーロッパは時代によるが、一般的にディズニーランドのシンデレラ城の様に優美か、あるいは武骨な要塞の様な城だ。
しかし、日本は堅牢な要塞で有りながら優美を兼ね備えた城が多い。
それが今や、観光の的である事は当然である。

山城

「城まで歩くけど、覚悟してよ？」

シルヴィア
「わかっておる」

姫路城前

シルヴィア
「堀？」

山城
「内堀だよ。本来なら外堀もあるけど、もうほとんど埋まってる」

シルヴィア
「そうか…しかし、ここまで来れば、本丸は落ちたも同然だな」

……多分、城攻めの時の話をしているのだろう……しかし……

山城
「……まあ、ヨーロッパ様式ならそうだけどね」

シルヴィア
「ん？　なら？」

山城
「まあ、入れば解るよ」

大手門から三の丸に入り、入場料を払い、中に入るとシルヴィアは

いち早く気付いた。

シルヴィア
「…坂の傾斜…キツくないか？」

山城
「日本は山が多い国だから」

シルヴィア
「絶対、それだけでは無いだろう」

いの門から二の丸に入り、ぬの門に向かう途中で、シルヴィアは周りを見て喋り掛けた。

シルヴィア
「山城、戦では高地を取った方が有利なのだな？」

山城
「戦術・戦略的にはそうだけど？」

シルヴィア
「…じゃあ、私達は何度死んでる？」

山城
「最低2回は死んでるね。櫓や鉄砲・矢狭間からの狙撃されてるから…」

シルヴィア
「…まさか、この城はこんなふうになってるのか？」

山城
「まあ、城を落としにくくしているからね…迷路にしたり、高低差をつけたりするのは当たり前だからね」

シルヴィア
「……徹底的な難攻策を施しているにしては美しい城だな」

りの門から備前門、備前丸を通り、水四門、水五門を抜け、内庭から大天守に入る。

シルヴィア
「階段が急傾斜だな～」

山城
「難攻策だから」

登ってから天守閣内を説明、壁に架かっている火縄銃や槍に手を伸ばすのを何度か阻止し、武者鎧に羨望の眼差しを向け、外の景色に興奮し……それらを繰り返し、内庭へ戻り、備前門からちの門、への門、ほの門、はの門を抜け、西の丸の渡櫓と化粧櫓を見学した。

シルヴィア
「昼だな」

山城
「あぁ、そうだな」

本日は姫路城大手門前のお食事処だ。

そこで昼食を食べてから、赤レンガが特徴の市立美術館、県立歴史博物館を見学した。
帰る時に山城が訊いたところ……

シルヴィア
「日本の城の本丸は近い様で遠かったな」

……と少し自虐的に言った。

山城の自宅

山城
「ただいま～」

シルヴィア
「ただいま帰りました～」

福本（勇気）
「あ、山城先輩」

ちょうどトイレから出て来た福本勇気と会った。

山城
「勇気か？　士官（学校）はどうした？」

福本（勇）
「外出許可を取って来ました。先輩…いえ、シルヴィアさんにお届け物です」

シルヴィア
「私に？　お届け物？」

山城（真希）
「あら、帰って来たのね。セルベリアちゃんも来てるわよ」

山城
「ふ～ん」

居間に行くと、確かにセルベリアが居た。

セルベリア
「お久し振りです、山城先輩」

山城
「やあ、セルベリア」

シルヴィア
「おぉ、セルベリアか」

福本（勇）
「エルフ戦では大分活躍したそうで」

山城
「おいおい、それは軍事機密じゃないのか？」

福本（勇）
「今や公然の秘密と成ってますよ。さて、お届け物ですが…」

シルヴィア
「勇気のお父様から今日速達便で届きました」

山城
「……携帯？」

速達便の箱を開けて出て来たのは普通の携帯電話…但し、錨のマーク付きだが。

セルベリア
「シルヴィアさんとの連絡用です。ＧＰＳ機能・有害サイト防止機能付きですよ」

山城
「……そこまで付けるか」

福本（勇）
「では、あとはお願いします」

セルベリア
「お邪魔しました～」

山城
「おいおい」

その夜、説明書片手のシルヴィアに色々とレクチャーする山城の姿があった。

次号へ

１６４　休暇観光　姫路編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１６５　休暇観光　大阪編（前書き）

新米士官
「え～、先に申し上げておきます…この作品はフィクションですので実在の人物・団体・店舗等とは何の関係もございません。悪しからず」

山城
「……わざわざ、言うか？」

新米士官
「念のために」

福本
「他に言うことは？」

新米士官
「あ、大学の課題の為、来週火曜日まで更新を一時停止します」

山城
「……なんじゃそりゃ？」

新米士官
「だって仕方ないじゃん！　来年と単位に関わる事だもん！　今の内に…」

士官
「元帥！　仮想共産中国軍の侵攻です！」

福本
「なんでこんな時に…」

新米士官
「…大日本帝国万歳！！」

山城
「あ、おい！　ちょっと…」

山城の止める声も聞かずに走り出した新米士官……色んな意味で大丈夫か？

１６５　休暇観光　大阪編

５月１４日（異世界５月２５日）

本日も山城（母）の覚醒から逃亡し、ＪＲで大阪駅に向かった。
朝のラッシュ時間を過ぎた電車に乗り、ＪＲ大阪駅で降りる。
しかし、さすがＪＲ大阪駅と言うべきか、多数の乗客が乗り降りする光景はシルヴィアも驚きの目で見ていた。
そして、本日一番目は……

山城
「ヨドバシカメラ梅田店、阪急梅田駅、ＪＲ大阪駅の目の前にある家電量販店さ」

シルヴィア
「か、カデン？」

山城
「まあ…一見は百聞にしかずさ」

店内に入った瞬間、シルヴィアも驚く。

シルヴィア
「な、な、な…なんだ、これは……お主の家で見た様な物がずらりと…」

その後、１０分程を使い家電の説明をした…既に基本的な事を知っていたから楽だったが…。

そして、エスカレーターを駆け上がり、玩具・ゲームの階へ。

山城
「さて…シルヴィアの気に入るゲームはあるかな？」

何故かゲームが気に入ってしまったシルヴィア……あるかな？

シルヴィア
「山城、早く～」

山城
「はいはい」

ゲームに関してはワイワイと話し合いながら決めた。しかし、意外な事に……

シルヴィア
「……」

山城
「シルヴィア？　お～い」

シルヴィア
「はっ！　ついつい看取れてしまった…」

山城
「看取れたって…あぁ」

去年は日露戦争から１００年の記念して作られた三笠の特別プラモデルと、第二次大戦を戦い抜いた大和・播磨の特別プラモデル。

確か、設定は同一目標に砲撃しようとする大和・播磨の勇姿の筈……

シルヴィア
「……欲しい」

プラモデルを見て目を輝かせる女の子…しかも、彼女……有りかも。

山城
「欲しい？」

シルヴィア
「このような戦艦があれば百人…いや万人力だからな～」

山城
「…なるほど」

なんとなく理由は分かる。しかし、そこまでの道のりは遠いですよ？

昼食を取った後、大阪交通博物館を見学した。
そして、近代交通の話しになると、メモ帳を取り出してメモを取っていた。
特に鉄道の事に関しては熱心だった。
彼女曰く、新しい陸上交通の手本するそうだ。
確かに、首都から地方都市への交通手段確立は官民軍にとっては有益である。

帰りに、阪急梅田駅の下にある紀伊国屋書店に立ち寄った。
少し大きめで、専門書や関係書が多いので、シルヴィアに役に立つかもしれないと思ったからだ。
そこで、何冊かの艦船関係書やミリタリー雑誌を購入した。
しかし、最後にシルヴィアが手に取ったのはちょっと別物。

山城
「シルヴィア～、シル…お」

シルヴィア用の書籍を持ちながらシルヴィアを探していると、ある区画で耳を赤くしながら眺めているシルヴィアが居た。

山城
「シルヴィア？」

シルヴィア
「ひゃわ！」

……呼び声も聞こえていなかった様だ。

シルヴィア
「な、なんだ…お主か」

山城
「な～に、見てたの？」

シルヴィア
「見てなどおらぬ」

そう言うとさっさとレジに行ってしまう。
山城はシルヴィアが眺めていた区画を見る。
区画は最近流行りのライトノベル系や恋愛系小説（電撃文庫みたいな）の置き場。

山城
（…なるほど…最近、微妙にエッチ物も入ってるけどな…）

しかし、そうなるとシルヴィアが何を見ていたのかが気になる。

シルヴィア
「山城、早く…」

山城
「シルヴィア、何を見てたの？」

シルヴィア
「え…？」

山城
「いや、どの本を見てたのって聞いたの」

シルヴィア
「……（それ）」

山城にしか聞こえない程度の声で言いながら指差す。山城はそれを取って購入する書籍の中に入れるとレジに向かった。
その後、家に帰るまでシルヴィアは無言だった……顔を真っ赤にして……。

次号へ

１６５　休暇観光　大阪編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。（代筆　山城）

１６６　休暇観光　自宅編（前書き）

すみません、随分と遅い更新再開となりました。
次号は京都編になります。

１６６　休暇観光　自宅編

５月１５日（異世界５月２６日）

山城とシルヴィアは山城の家に居た。
流石に３日連続で出掛けると言うのもあれなので、本日は家でゆっくりする事になったのだが……。

山城（真希）
「シルヴィアちゃ～ん、一緒に…」

山城
「はいはい、頼むから出ていってね」

山城（真）
「もう～、正人のいけず～！」

山城
「わかったわかった」

母親の抗議をさらりと受け流し、強制的に部屋から出て行ってもらった。

山城
「はあ…朝から疲れる」

シルヴィア

「お主の母上殿は飽きないのか？」

山城
「女の子に関して『飽きる』と言う事は無いよ」

何せ、親子だからそこら辺はよく解る。

シルヴィア
「まあ、嫌われていないだけ良いか」

山城
「逆に好かれているよ」

シルヴィア
「そうだな。さて、今日はプラモデルを作るぞ！」

……実は前号で寄ったヨドバシカメラでプラモデルを買っていた。

山城
「もちろん、手伝え、でしょう？」

シルヴィア
「当たり前だ。プラモデルなど、私の世界には無いのだぞ」

山城
「わかってるよ。言っておくけど、鷲井の手伝いくらいしかしてないよ？」

ちなみに物は薩摩型一番艦薩摩（１９４１年１２月時点版）。

シルヴィア
「天城型に似ていたからな」

山城
「似てて当たり前だよ。薩摩型の元は同じ八八艦隊計画の加賀型戦艦の発展型だからね」

何せ八八艦隊計画の戦艦・巡洋戦艦は形が似ている。あえて形を似せて、何れがどの艦か識別をはっきりさせない為の工夫だろう。
その加賀型戦艦の設計図を流用し、強化したのが別名『改加賀型薩摩級戦艦』である。

パチン　パチン　パチン

シルヴィア
「小さい部品が多い…」

山城
「そんな時は箱に入れる。その方が無くなりにくいから」

シルヴィア
「出来れば完成させたいのだが…」

山城
「持って帰る時に壊れるかも知れないから、部品だけは組み立てるだけだよ」

……完全に主導権を握った山城。
出来れば別の主導権も……

山城
「余計な事を言わんでいい…さて、こいつとこいつで…」

黙々と部品を組み立て、パーツ化させていく。

昼食後……

シルヴィア
「出来たー！」

山城
「パーツ化がね」

既に後は船体にパーツを嵌め込むだけ状態になっている。

山城
「さて、片付けるか」

シルヴィア
「うむ」

パーツを1つ1つ確認しながら袋に入れ、プラモデルの箱に入れる。
最後に輪ゴムを巻き付けて中身が出ない様に箱を固定する。

山城
「片付け終了」

シルヴィア
「案外早く済んだな」

山城
「そりゃあ、パーツを片付ける…わあ!?」

ボスン

シルヴィア
「だ、だ、だ、だ、大丈夫か!?　山城!?」

山城
「あ、あぁ、うん…大丈夫…」

いきなり倒れてきたシルヴィアにそのまま押される形で一緒にベッドへと倒れた。

シルヴィア
「す、済まぬ！　道具入れに足を取られた…」

山城
「そうか…それならいいけど」

ガチャ

山城（真）
「正人、シルヴィアちゃ～ん、おやつはどうする～?」

タイミング悪く……いや、良く?……部屋に入って来た山城（母・真希）。

そして、部屋の状況を見た一言は……

山城（真）
「あら～、もうお腹一杯か～♪」

……それかい。

シルヴィア
「違う違う違う違う違う違う違う違う！！！」

山城
「ってか、他に言う事無いの！？」

山城（真）
「あら…何があるかしら？　別に無いと思うけど…」

山城・シルヴィア
「「どれだけ、寛容なんだよ！」」

……あくまで寛容な山城の母親でございました。

次号へ

１６６　休暇観光　自宅編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１６７　休暇観光　京都編（前書き）

一応、観光編は終了です。次号はちょっと大事になります。

１６７　休暇観光　京都編

５月１６日（異世界５月２７日）

本日も毎朝恒例の山城の母親真希さんとシルヴィアの鬼ごっこから始まり、京都と聞いて着物を着せようとする真希さんから逃げる様にして家を出た。
その後、ＪＲ神戸駅から京都へ向かった。

ＪＲ京都駅

シルヴィア
「京都も大阪も、人は多いな～」

山城
「まあ、駅は都市の玄関だからね」

シルヴィア
「そうか…今日の予定は？」

山城
「先ずは二条城・京都御所を見学、太秦映画村に行って、帰りにお土産買って…」

シルヴィア

「まさか…また姫路城の様に歩くのか？」

山城
「いや、二条城はどちらかと言えば、館みたいな立ち位置だからね。それに見れる所も限られてるし…ちなみに、作者が通ってる某大学から２０~３０分程東に歩けば行けるんだってさ」

おいおいおい！　なに勝手に個人情報（一部だけど）をペラペラ喋ってるんだよ！

山城
「仕返し…前話の」

……マジかいな。

シルヴィア
「まあまあ…そう言った話は別の機会にしてもいいだろう？」

山城
「そうだね」

ふう…良かった……

バスで二条城に向かい見学、その後同じくバスで京都御所に移動、見学した。
二条城や京都御所に関して説明を入れると、シルヴィアは驚いていた。
その後、バスで太秦映画村に向かった。

映画村の飲食店で昼食をとってから回る事にした。ここで、シルヴィアは仮装が出来ると知って、山城の首根っこを掴んでそこに入って行った。

山城
「まあ、予想は出来てたよ……けどな～…」

…結局、侍にされた。
海軍士官…それも軍刀を普段から持ってるだけに、しっくりくるのがある意味怖い。

シルヴィア
「待たせたな」

山城
「あ、やっとお…わ…った…の？」

そこに立っていたのは、金髪である事を除けば、全く違和感無く姫様衣装が似合う彼女が立っていた。

山城
（…いや、金髪だから余計か？　こんちくしょう、誰が着物は日本人女性の黒髪しか似合わないって言った大馬鹿は！？　その発言、いっさいがっさい訂正させるぞ！）

シルヴィア
「……山城？」山城
「ん、あぁ、ごめんごめん。こっちの事」

シルヴィア
「そうか…それで、似合うか？　似合わぬか？　どちらだ」

山城
「似合ってるよ！　最高に似合ってます！」

シルヴィア
「そこまで力を入れて言わなくも良いと思うが…疲れるであろう？」

山城
「…そんなに力入ってた？」

シルヴィア
「入っておるぞ。さて、記念撮影だ」

そのまま、記念撮影……シルヴィア曰く、『母上殿にいい土産が出来たな』だった。

記念撮影が終わると映画村を歩いてみた。
しかし、直ぐにつかまった……観光客に……

山城
（まあ、あの金髪はある意味目立つからな～…）

……と思いながらこちらも相手をしているのだが……。

シルヴィア
「山城、そろそろ行くぞ」

山城
「あ、はいはい」

観光客の撮影攻勢が終わったのを見計らい、手を振りながらその場を離れる。
その後、あちこちを回った。

シルヴィア
「う～ん…今日も楽しかったな～」

山城
「それは良かった」

シルヴィア
「出来ればもっと回りたいが…まあ、今度の機会にしておくか」

山城
「さて、その機会が何時になるやら…」

今回は特別休暇だった訳だし……さすがに軍で1ヶ月の長期休暇を取る（何にも無い時期ならいざ知らず）のは無理だろう。

シルヴィア

「そうか…なら、楽しみにしておくか」

山城

「そうしておいて」

ちなみに……家に戻ったシルヴィアは記念撮影の写真を真希に渡したところ……妙にウキウキしていたのは別の話である。

次号へ

１６７　休暇観光　京都編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１６８　休暇観光　パーティー編１（前書き）

新米士官
「毎度毎度の事ですが、実在の人物とは全く関係ありませんので、あしからず」

山城
「いったい何回同じ事を言うんだ？」

新米士官
「念のためだ」

１６８　休暇観光　パーティー編１

５月１７日（異世界５月２８日）

事の始まりは山城の携帯に掛かってきた電話からだった……

山城の自宅

『さらば～♪　地球よ～♪　旅立～つ艦（ふね）は～♪　宇宙…』

プッ

山城
「はいはい、こちら山城。どなた？」

福本（勇気）
『あ、山城先輩ですか？』

山城
「『宇宙戦艦ヤマト』だから、お前だろうと思ったよ」

福本（勇）
『あ、じゃあ、お父さんは？』

山城
「水戸黄門の主題歌」

福本（勇）
『なら、私の父は？』

山城
「ガンダムの『嵐の中で輝いて』だな」

福本（勇）
『……なんでですか？』

山城
「適当だ。他には？」

福本（勇）
『じゃあ、首相からは？』

山城
「天皇陛下と首相は『君が代』だ」

福本（勇）
『……登録してあるんですね』

山城
「お前の父ちゃんが首相を勝手に登録したんだよ！　つーか、人の着信ソングを訊きに電話したのか！？」

福本（勇）
『もちろん、違いますよ。本題をすっぱりと言いますと…』

山城
「なに？」

福本（勇）
『パーティーに来て欲しいんです。しかも、今夜』

山城
「……はあ？？」

これが約5時間前の事だった。

そして……現在……

シルヴィア
「…それで、結局こうして行ってる訳だな？」

山城
「イエス…」

何時も通りの制帽、軍服、軍刀…の姿で歩く山城とシルヴィア。

シルヴィア
「それで、何のパーティーなのだ？」

山城
「白河財閥のパーティーだよ」

シルヴィア
「白河…財閥？」

山城
「あぁ、ごめんごめん。まず、そっちの説明だね」
第七艦隊を読んでいた読者ならお分かりになると思うが、白河財閥とは遠龍（旧エンタープライズ）の白河美鈴艦長の実家であり、富田隼人副長の雇われ元だ。その2人もめでたく結ばれ、その後、会社を継いだ。そして、現在は造船・貿易・海上運輸等で1・2を争う財閥である。

山城
「まあ、日本海軍も輸送船等の提供や海防艦建造で世話になったからね」

シルヴィア
「それで、なぜその財閥のパーティーに呼ばれたのだ？」

山城
「現総帥、白河信雄（のぶお）会長が異世界に興味津々で、政府も信頼が厚い白河財閥に当分の貿易体制の構築やら何やらをしてもらうとか……それに与党と野党の議員が来てる」

シルヴィア
「……お主、あまり政治に首を突っ込む事が嫌いでは無かったか？」

山城
「あはは…残念ながら、親父の居る船舶会社は白河財閥の傘下なんだよな～」

シルヴィア
「…お疲れ様だな」

山城
「まあ、拒否しても辞めさせられる事は無いと思うけどね…」

福本（勇）
「あ、山城先輩！」

山城
「よう、福本。来たぞ」

待っていた福本・セルベリアの2人と合流した。
2人も同じ格好…儀礼用の第一種軍装に軍刀の日本刀・サーベル。

福本（勇）
「すみませんね、無理言ってしまって」

山城
「よく言うよ…まあ、お前の親父さんが息子を使う無茶言いだってのは前から解ってたけどな」

福本（勇）
「お互い大変ですね～」

シルヴィアとセルベリアも話に花を咲かせ喋っている。

山城
「…ところで、議員は誰が来るんだ？」

福本（勇）
「多分、軍関係者なら名前ぐらいは聞いた事がある筈ですよ。自民党の中川昭一議員と野党の長島昭久議員です」

山城
「……おいおい、外交と防衛の大物だぜ？」

福本（勇）
「えぇ、石破議員も誘ったそうですが…」

山城
「『オタクの石破』？　つーか、誰が誘ったんだよ？」

福本（勇）
「……自分の父です」

山城
「無茶苦茶のやり手だな…お前の親父さんは」

福本（勇）
「はい…まあ、石破さんは予定の関係でボツですが」

山城
「首相の次は議員か……野党議員に教えていいのか？」

福本（勇）
「長島議員は野党一の軍事通ですから…福島議員よりはマシかと…」

山城

「そうか…まあ、福本次官の公認ならいいんだけどさ」

次号へ

１６８　休暇観光　パーティー編１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１６９　休暇観光　パーティー編２

会場のホテル

山城
「やっぱり……と言うのはあれかな？」

福本（勇気）
「さあ」

白河財閥はその仕事上、数ヵ国に一社は支店があると言われる国際会社。
この為、パーティー１つでも取引先の企業・会社の支店や、場合や国によっては大使が出席する。
今回は現総帥と夫人の結婚記念パーティーとかで大使クラスは来ていないが、有名企業の社長や幹部クラスはちらほら見える。

山城
「なあ、福本。いくら何でも、第一種軍装の軍人には似合わんパーティーだと思うぞ？」

福本（勇）
「仕方ありませんよ。パーティー用の服なんて誰も持ってませんよ？　この歳で」

山城
「まあ……確かにな」

しかし……この格好は目立ち過ぎるだろう……。
……なんて事を思っている間に……

受付の人
「招待状を拝見します」

山城・シルヴィア
（（えぇ！？））

……招待状？　聞いて無いよ！？

福本（勇）
「はい、どうぞ」

懐から四枚の招待状を取り出し、受付の人に見せる。

受付の人
「はい、どうぞ」

山城
「ありがとうございます」

礼を言うと会場に入る……その前に……

山城
「ふ～く～も～と～！」

シルヴィア
「お主……懺悔なら聞くぞ」

福本（勇）
「す、すみません！　お喋りに夢中で渡すのを忘れていました！」

山城・シルヴィア
「「先に渡せってーの！」」

セルベリア
「あの…人が見ていますよ？」

山城
「そうだね……行くとしましょう」

シルヴィア
「そうだな」

既にパーティーは始まっているらしく、大勢の人間が会場に居た。

山城・シルヴィア
（（……やっぱり、場違いだよな…））

ほとんどの人間がスーツだったりのパーティー風服装なのに、いくら招待されてるとは言え、軍服である。その光景の異様差と、２人の場違い感がミックスしていた。

山城
（俺……庶民なんだけどな…）

シルヴィア
（貴族だが……場と空気に馴染めない…）
そんな2人とは裏腹に、福本勇気とセルベリアは場馴れした様子で平然としている。

「あら、勇気君にセルベリアちゃん？　久し振りね～」
多分、軍服の2人に気付いた女性が4人に近付いて来る。
福本（勇）
「あ、摩耶さん！　お久し振りです」
どうやら、こちらも顔見知りの様だ。

「今回は次官の代理で？」
福本（勇）
「えぇ、父と母の代理です…あ、紹介しておきます。こちらは先輩の山城正人少佐とシルヴィアさん。先輩、こちらは白河総帥の長女の摩耶さんです」
山城
「あ、は、初めまして…山城正人です」
白河（摩耶）
「よろしく、正人さん」

シルヴィア
「シルヴィアです」

白河（摩）
「はい、よろしくね」

セルベリア
「摩耶さんは今をときめくファッションデザイナーなんですよ」

白河（摩）
「まあ、セルベリアちゃんたら、いやだわ～、やっとデザインした衣装が表舞台に出ただけなのに…」

福本（勇）
「摩耶さん。御父様はどちらに？」

白河（摩）
「うふふ、何かプレゼントでも持って来たの？　朝から上機嫌で待ってたわよ」

福本（勇）
「それは良かった」

会場を出た山城達は摩耶の案内である一室の前まで来ていた。

白河（摩）
「御父様、福本勇気さんが来ておりますよ？」

「おう、入ってもらえ」

福本（勇）
「失礼します」

先陣をきって入る。
それに続くと部屋には５０代程の男女がいた。

「おぉ、勇気君か。お父さんが来れなかったのは少し残念だな…」

福本（勇）
「それは父も同じです…こちらが、父が紹介しておりました、山城正人少佐とシルヴィア大尉です」

「初めまして、私が白河財閥総帥の白河信雄だ。そして、妻の彩（あや）だ」

「白河彩でございます」

山城
「存じております。そして、お久し振りでございます」

白河（信雄）
「ん？　君とは前にどこかで会ったかね？」

山城

「はい。十数年程前に傘下の船舶会社の客船で彩夫人の誕生日パーティーを行った時に船長に代わり挨拶を致しました一等航海士夫妻と子供を覚えておられますか？」

白河（信）
「…おぉ、あの時の息子さんが君か」

山城
「はい」

福本（勇）
「なんだ、先輩は一度お会いになっていたんですね」

シルヴィア
「…そうだったのか」

次号へ

１６９　休暇観光　パーティー編２（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１７０　休暇観光　パーティー編３

それぞれの紹介が終わったところで本題に入った。

白河（信雄）
「既に勇気君から聞いたと思うが…どうかね？」

山城
「出来ると思います。ただ、最初は一部工業製品と生産機材が主になりますが」

シルヴィア
「この者の言う通りです。実際、我が国は日本と触れる事に技術レベルの違いに驚かされる……一部技術は明治頃までは確立出来てはおりますが、後は江戸時代以下だと…」

白河（信）
「ほう…日本の歴史にお詳しい様で」

シルヴィア
「山城に随分と教えてもらいましたから」

白河（信）
「そうですか…では、品物の指定はあるものの、貿易は可能と」

山城
「はい。そこで下地を作り、状況に合わせた品物を加えていけばよろしいかと…」

白河（信）
「ふむふむ」

その後も、異世界について色々と話た。
その内……

白河（摩）
「御父様、時間ですよ」

白河（信）
「おぉ、そうか…楽しい時間はあっという間だな…パーティーは存分に楽しむといいよ」

そう声を掛けると出て言った。

山城
「楽しむと言っても……お堅いパーティーは苦手なんだけどな～」

シルヴィア
「…私も、あのパーティーはちょっとな…」

これは仕方ない……何せ生まれは違えど、今回のパーティーがゴリゴリに堅い。それに儀礼用とは言え第一種軍装…しかも、軍刀・サーベルは明らかに目立つ。福本（勇）
「まあ、とにかく行きましょう」

セルベリア
「そうですよ。せっかくなんですから」

山城・シルヴィア
（（元気だな～…お前ら…））

歳はそれほど変わらない筈の2人の後輩をツッコミを入れた。
そのまま、福本とセルベリアの後に付いて会場に向かった。
だが……

山城・シルヴィア
（（やっぱりな～…））

内心的居心地の悪さは相変わらずだった。

福本（勇）
「先輩、中川昭一議員と下島昭久議員です」

何処から見付け出して来たのか2人の議員を上手く誘導して連れて来た。

山城
「お初にお目に掛かります。日本海軍少佐の山城正人です」

「自民党の中川昭一議員だ」

「民主党の下島昭久議員だ」

中川議員

「首相や安倍さんから噂を聞いてるよ」

下島議員
「私は福本次官から聞いたよ」

山城
「そ、それはどうも。（小泉首相と安倍官房長官は置いとくとして、福本次官は要らん事を言って無いだろうな…？）」

……やっぱり、そこが気になる山城だった。

シルヴィア
「は～あ～…」

山城が中川議員・下島議員の相手をしている頃、シルヴィアはその後ろの壁でパーティーを眺めていた。
貴族のパーティーならこなせるのだが、時代と主催が違うから、どうも馴染め無い。

シルヴィア
（まあ、元々山城同様に堅苦しいパーティーは苦手なのだが…）

溜め息を吐きながら眺める。

セルベリア
「シルヴィアさん、退屈ですか？」

シルヴィア

「セルベリア」

セルベリア
「顔に書いてあります。だからわかりますよ」

シルヴィア
「…まあ、別段バレてもいいが…」

セルベリア
「クールですね」

シルヴィア
「…元々、パーティーなんぞ年に3～4回だけやれば良い…なのに家によっては月に10回以上もするバカもおる……だから、貴族のパーティーは好かん」

セルベリア
「あはは……ところでシルヴィアさん、最近山城先輩とどうです？」

シルヴィア
「……どう…とは？」

セルベリア
「当然、山城先輩とのお付き合いですよ？　あ、隠しても無駄ですよ、恋人同士なのは解ってますから」

シルヴィア
「……なんで？」

セルベリア

「それは…女の勘です」

シルヴィア
「……キスはした…デートはした……あとは…」

セルベリア
「仲が良い様で…結婚式にはちゃんと呼んで下さいね」

シルヴィア
「な、な、な、な、な、な、な！？」

山城
「…なに鳩が豆鉄砲を食らった顔をしているんだ？」

セルベリア
「あら、山城先輩。お話のほうは？」

福本（勇）
「終わったよ。さて、一足先に引き上げますか。先輩が駄々こねるし」

山城
「うるさい」

こうして、山城達は白河信雄総帥に一声掛けてからパーティー会場を出た。
そして、山城・シルヴィアは5月19日に異世界へと戻って行った。

次号へ

１７０　休暇観光　パーティー編３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

171　溜まった書類を終わらせて…（前書き）

新米士官
「さて…年末はどうしよう？」

山城
「特別編でもやるか？」

福本
「しかも、『異世界奮闘記』で？」

新米士官
「いいね～…でも、どうする？」

山城
「…どうしましょう？」

福本
「考えろよ。作者」

171　溜まった書類を終わらせて…

5月31日（異世界5月20日）

休暇から戻って来た山城・シルヴィア。
今まで貯まっていた仕事（と言っても、主に山城の主席参謀としての仕事だが）を片付け始めた。
しかし、1日を掛けた結果……

山城
「終わったぞ、この野郎!!」

机に載せられた書類のビルが右から左に移っていた。

シルヴィア
「山城～、終わったか？」

山城
「終わった!」

書類を係の兵士に預けながら言った。

シルヴィア
「昨日は殆どお主の姿を見なかったからな～」

山城
「まったく、無駄に書類が多いんだよな～」

そう言いながら窓の外を見る。
そこには待機線に並んだ２０機程の９３式中間練習機『赤トンボ』が並んでいる。

シルヴィア
「今やパイロット志願者が増えて教官達は大忙しだそうだ」

山城
「世の中怖いね～」

一部噂では、今度はソードフィッシュ雷撃機のコピーを提供してもらうなんて話が出ているそうだ。

山城
「その内、独自に空母を作ろうなんて話が出たりして…」

シルヴィア
「空母建造は難しいと言っていたではないか？」

山城
「練習的空母なら簡単だよ。ある程度長く船幅がある船に艦上構造物を出来る限り取っ払って、飛行甲板を載せるだけで済む。これが本格的正規空母になると、話は違うけどね」

それに……まだ複葉機レベルなら多少の事は大丈夫だと思うが……。

シルヴィア
「そうか…なら、飛龍が役に立つ…かな？」

山城

「多分ね」

「あら、シルヴィアさんに山城さん」

声を掛けられて振り向くと飛行服に身を包んだヴィクトリアがいた。

シルヴィア
「あら、ヴィクトリア。空に上がってたの？」

ヴィクトリア
「えぇ…ですが、最近のあなたは随分と山城さんと引っ付いてますね？」

体のラインがぴったり出ている飛行服…普通ならFカップの胸に目が行くが、山城は普段と同じく顔を見ている。

シルヴィア
「決まってるじゃない！　あんたと違って、付き合いは長く深いのよ！」

山城
「おいおい…（ー ー；）」

ヴィクトリア
「……なにか、ムカつきますわね」

シルヴィア

「うふふ、悔しかったら、そうなれる人間を探す事ね」
それを聞いたヴィクトリアは何も言わずに去って行った。

シルヴィア
「……いつもだったら、言い返すのに…珍しいわ」

山城
「頼むから、喧嘩しないでよ？　怪我されちゃあ困るし…」

シルヴィア
「わかってるわよ」

ヴィクトリア
「……」

シルヴィアと別れたヴィクトリアは無口だった。
普段なら言い返す彼女も、何故か今回は言い返せ無かった。

ヴィクトリア
（……不思議ですわ…いつもなら言い返すのに…）

どうも、シルヴィアの『そうなれる人間』と言う言葉にモヤモヤした物を感じていた。

ヴィクトリア
（なんでしょう…このモヤモヤは……全く解りませんわ…）

モヤモヤの正体が解らないまま、ヴィクトリアは自分の部屋へと向かった。

シルヴィア
「天城がいないのは、少し寂しいな」

山城
「そうだな……まあ、あと少しで点検も終わるからさ」

シルヴィア
「また、痴話喧嘩の日々だな」

山城
「慣れたよ」

実際、毎日あの痴話喧嘩を聞くと勝手に慣れてしまう。

シルヴィア
「そうか…なら、安心して痴話喧嘩が出来るわけだ」

山城
「おいおい…それは違うだろう」

それでも、あの日常が戻ってくると思うと嬉しい。
出来れば……そんな、和やかな日々が長く続いて欲しいのだが……

山城
（無理だろうな……この世界だと……）

…この予想は遠からず当たる事になる……まあ、当分は嬉しい事が続くのだが……。

次号へ

１７１　溜まった書類を終わらせて…（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１７２　又もや起きる転移騒動（前書き）

新米士官一行現状

マリーダ
「寒い！」

福本
「お日様が昇って来たからもう大丈夫だろう」

山城
「いや…その前に、ここどこですか？」

シルヴィア
「どこかの…神社の様だが…」

新米士官
「みんな～、おはよう」

海龍
「おはよう～…じゃあ無くて！」

マリーダ
「なんで小説世界からわざわざ現実世界に召喚したの！？」

シルヴィア
「その前に！　ここはどこだ！？」

新米士官
「平安神宮！」

5人
「「「「「へ、平安神宮！！？」」」」」

新米士官
「いや～、京都府立図書館が年末休みでさ～、その近くに平安神宮があったから、何かの機会だし、行って見ようかと…」

山城
「暇人だね～」

新米士官
「…うるさい」

海龍
「どうでも良いから帰りた～～い」

福本
「朝の準備かな？　巫女さんがちらほら…」

海龍
「巫女さん！！！」

マリーダ・シルヴィア
「「手は出すな！」」

新米士官
「写真を撮っておこう。（建物の方を）」

山城

「以上、平安神宮からの中継でした」

１７２　又もや起きる転移騒動

６月１０日（現世界５月３１日）

その出来事の始まりは一本の電文だった。

山城
「『大型艦２隻が漂流中。一隻は空母なり』……これが広瀬大佐から？」

シルヴィア
「あぁ。通信方向は送られて来た座標の周辺だったそうだ」

プレハブ司令部の通信室で広瀬大佐率いる駆逐隊から送られて来た電文を読んでいた。

山城
「う～ん…これは小澤中将に上げるか…ちょっと報告に行って来る」

シルヴィア
「わかった」

小澤中将
「…それは本当かね？」

山城

「はい、本当です」

歩きながら山城は小澤中将に報告する。

山城
「詳細は解っておりませ。念のため、艦隊から2隻を派遣しようと思いますが？」

小澤中将
「しかし、鳥海は機関掃除中だが？」

山城
「こんごう、あしがら2（ツー）を出してもらえれば大丈夫です」

小澤中将
「そうか…よし、許可しよう。君も行くんだろう？」

山城
「はい、現場を見ずに判断する事は出来ませんから」

小澤中将
「うむ、なら、行って来い。その代わり、報告書はちゃんと回せ」

山城
「はい！」

……と言う事で、正体を確める為、山城はイージス艦『こんごう』に乗り込んだ。

山城
「篠田大佐、僅かな間ですが、よろしくお願いします」

シルヴィア
「同じく、お願いします」

篠田大佐（階級名称変更）
「あぁ、別に構わないよ。ただし、部屋は狭くなってしまうのは我慢してくれ」

山城
「いえいえ、部屋を貸してもらえるだけでもありがたいです」

艦橋で挨拶した後、2人はあてがわれた部屋に向かった。
しかし、廊下である人物に声を掛けられた。

こんごう
「山城さん！」

山城
「やあ、こんごう。久し振り。元気だった？」

こんごう
「はい、向こうで何の騒ぎもなく休憩出来ました」

山城
「あはは、それは良かった」

…多分、幻想と理想である事が解らず、自虐史観に染まったバカな

奴らがやっていたデモ云々の事を言っているのだろう。
もし、帝国内でやれば必ず警察が飛んで来る…下手をしたら憲兵隊だ。

こんごう
「では、後で！」

山城
「あぁ、後でね」

シルヴィア
「や～ま～し～ろ～！？」

山城
「は、はい！？」

シルヴィア
「なにを勝手に話を終わらせておるか～！　私にも喋らせろ～！」

山城
「（…いきなり「浮気か！？」って言われるよりマシか）ごめんごめんごめん！」

……イージス艦こんごうでのヒトコマだった。

その頃……

マルコム少尉
「大佐、日本艦隊より、２隻の護衛艦を派遣したと通信がありました」

広瀬大佐
「そうか。なら、曳航するにしても大丈夫だな」

そう言うと、目の前にある2隻の大型艦を見る。
確かに、1隻は空母である。

マルコム少尉
「しかし、これはどこの艦でしょうか？」

広瀬大佐
「日本艦で無い事は確かだ」

マルコム少尉
「解るのですか？」

広瀬大佐
「感覚的な勘だ」

そう言うと、広瀬大佐はマグカップの紅茶を飲み干した。

最初に見付けたのは朝漁に出ていた漁師達だった。
季節外れの霧にあい、その内の1隻が空母に衝突して慌て報せに来たそうだ。
報せを聞いた広瀬大佐は全艦戦闘態勢、総員陸戦武装で現場に急行

……そして、今に至る。

……これが騒動の始まりになる訳だが……

次号へ

１７２　又もや起きる転移騒動（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

173　正体1

数時間後……

シルヴィア
「山城！　例の2隻が見えたぞ！」

艦橋で双眼鏡を使い見ていたシルヴィアが山城達に声を掛ける。
それを聞いた山城は首から掛ける双眼鏡で見た。

山城
「……篠田大佐、もし間違っていたら言って下さい。あれはアメリカの空母と重巡洋艦と思うのですが？」

篠田大佐
「さて、どうでしょうか。空母については艦橋の形から見て第二次大戦時の物と解りますが……巡洋艦になるとどうも…」

山城
「そうですか…誰か、第二次大戦時艦船の艦種判別に自信のある方はおりませか？」

この事は既に広まっていた。
この為、第二次大戦時艦船に詳しい少尉が確認した。

少尉
「間違いありません。アメリカの空母と重巡洋艦です。空母は多分ワスプ、重巡洋艦はポートランド型と思われます」

山城
「そうですか、ありがとうございます。ワスプなら、私の世界では珊瑚海海戦で撃沈しています」

篠田大佐
「私の元居た世界では伊１９の雷撃で撃沈されました」

シルヴィア
「あるいはまた別な世界か……どちらかだろうな」

兵士
「艦長、付近に駆逐艦が４隻います」

山城
「では、少し行って来ます」

篠田大佐
「えぇ、どうぞ、ごゆっくり」

カッターを降ろし、駆逐艦に近付く山城・シルヴィア。

広瀬大佐
「やあ、やはり、君たちか」

福本
「お久し振りです。広瀬大佐」

広瀬大佐
「君達も随分活躍している様だね。ついこの間は南の大森林地帯で活躍したと聞いたよ」

山城
「あはは…噂は広まってますね。乗り込みました？」

広瀬大佐
「いや、乗員が少ないし、下手に乗り込んで部下を危ない目に合わす訳にもいかんしな」

山城
「わかりました。シルヴィア、こんごうに連絡して」

シルヴィア
「わかった」

ワスプはあしがらに任せ、こんごうはポートランド型に接舷した。

シルヴィア
「……静かだな」

山城
「無人なんだろう。そうでなければ、広瀬さん達が攻撃を受けなかった事の説明が出来ないよ」

まあ、向こうから接触が無い理由の説明もつかないが…。

広瀬大佐
「転移前に何らかの放棄されたか…2隻共」

山城
「そうでしょう。多分、何らかの形で敵の攻撃を受け、総員退艦に陥ったのだと思われます」

誰も居ない甲板でそんな話をする3人。

マルコイ少尉
「大佐、乗り込み終わりました」

広瀬大佐
「よし、我々は下から捜索してくる」

山城
「わかりました。私達は艦長室を見てきます」

広瀬大佐
「場所は解るのかね？」

山城
「一艦の艦長ですから。それに我々の世界ではアメリカ重巡洋艦を鹵穫・使用していますから」

広瀬大佐
「そうか。では、後でな」

フィリピン攻略戦でマニラ軍港でアメリカ・アジア艦隊旗艦ヒューストンを鹵穫し、後に『箱根』として第七艦隊に編入・使用されている。
その為、アメリカ重巡洋艦の艦長室の位置はだいたい解っていた。

シルヴィア
「本当に着いてしまった」

山城
「さてと、家捜しならぬ部屋捜しといきますか」

シルヴィア
「艦長日誌か何かを捜すのか？」

山城
「そうゆう事」

山城・シルヴィアは部屋を探り始めた。

その頃……こんごう艦橋

通信兵
「艦長、あしがらの空母乗り込み班からです。空母は『ワスプ』で間違いないそうです」

篠田大佐
「そうか…乗員は？」

通信兵
「いえ…それどころか、艦上機も消えています」

篠田大佐
「…艦上機も？」

通信兵
「はい。下の格納甲板も捜索したそうですが、艦上機は一機も見当たらないそうです」

篠田大佐
「ふむ、そうか…」

次号へ

１７３　正体１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１７４　正体２（前書き）

明日、元日の更新は特別編です。
年始ですからね、異世界メンバー・第七艦隊メンバーと招待者を交えて初詣です。

174　正体2

ポートランド型重巡洋艦艦内艦長室

艦長室を部屋捜ししていた山城・シルヴィアは艦長日誌を捜しあてた。
まずは表紙を見る。

山城
「『ＩＮＤＡＮＰＲＳ』…インディアナポリスか…」

シルヴィア
「それで…何が書いてある？」

山城
「記述によると、テニアン島で輸送任務を終えて、フィリピン海を航行している事が書かれているから、日本海軍の潜水艦か何かに襲撃されたんだろう」

シルヴィア
「なんとまあ…不運と言おうか、なんと言おうか…」

山城
「……そうだね。（これが輸送部隊の護衛任務なら解るけど…重巡洋艦が輸送任務を務める事は少ない…余程の重要物か…怪しいな）」

福本元帥を含む先人の教え＋福本勇気に振り回された経験＋異世界に来て連日の頭脳戦＋自らの経験……で密かに山城は答えを導き出

した。

その後、広瀬大佐達と再び合流し、艦内に自分達以外の人間は居ない事を教えてくれた。
そして、山城・シルヴィアはこんごうに戻り、曳航を具申した。

篠田大佐
「…やれん事は無いが、少し時間が掛かるぞ？」

山城
「構いません。もし、足りなければ、ひゅうが、いせもお呼びしてもいいです」

篠田大佐
「わかった。準備させよう」

山城
「それと…『インディアナポリス』に関して何かご存知ありませんか？」

篠田大佐
「インディアナポリス…それが、あの艦の名前ですか？」

山城
「えぇ、そうです」

これを聞いた篠田大佐の顔付きが神妙になった。

篠田大佐
「2人共、こっちに…」

そう言うと、篠田艦長は2人を連れ艦橋を出た。

篠田大佐
「我々の日本の歴史を話した時に原爆の話をしましたね？」

山城
「えぇ、よく覚えてますよ」

篠田大佐
「実は…インディアナポリスは二発目の長崎原爆投下における部品輸送にあたっていた…」

シルヴィア
「艦長日誌には任務を終え、フィリピン海を航行していたと書かれているが？」

篠田大佐
「あぁ…帰還途中で伊５８潜水艦の雷撃を受けている」

山城
「なるほど、そう言う事ですか」

篠田大佐が神妙な顔付きになる筈である。

山城
「今は曳航しましょう。例え彼女…インディアナポリスが原爆部品を運んでいたとしてもね」

山城は微笑みながら言った。

シルヴィア
「…意外だな」

山城
「曳航決断？　直接被害を被った訳でもないし、インディアナポリス自身が悪い訳でも無いしね」

もちろん、これは福本元帥から学んだ事の1つだ。
何時までも敵だ、味方だと騒いでいては何にもならないのだ。

シルヴィア
「しかし、果たして天城達が受け入れるのか？」

山城
「…そうだね、もしかしたら、嫌われるかも知れないね」

シルヴィア
「そ、そんなつもりで私は言った訳では…」

山城
「気にして無いよ…でもね、指揮官が仲間を信用しないで、仲間が指揮官を信用してくれる事なんてないんだよ」

先程と同じく微笑みながら言った。
下手をすれば味方の信頼を失う事になるかも知れない…しかし、指

揮官は仲間を守る事も仕事の1つなのだ。

シルヴィア
「既に編入する気満々だな」

山城
「あはは…これは扱いの慣れた方が扱う物だからね」

しかし、山城は気付いていた。
アメリカ艦となると、下手な処置をすればアメリカが介入してくる可能性がある。
出来ればアメリカの介入は避けたい。
アメリカが介入すると……第二次大戦前よりはマシになったが、大統領やトップ集団にもよる……ロクな事が無い。

山城
（福本次官…情報提供しか現場では何も出来ませんが……後の事、お願いします）

空を見ながら、報告を待っているであろう福本次官を思い浮かべていた。

次号へ

１７４　正体２（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１７５Ｓ　年始特別編　『初詣だ！！』（前書き）

新米士官
「２０１１年…平成２３年、皇紀２６７１年です！」
福本
「では、皆さんご一緒に」
全員
「「「「「「「「「「「明けましておめでとうございます！！！」」」」」」」」」」」
山城
「今年も一年、異世界奮闘記、第七艦隊外伝をよろしくお願いします」
新米士官
「そして、今年中に民主党を打倒し、真の日本を取り戻しましょう！！」
福本
「作者…年明け早々物騒な事を言うな」
マリーダ
「そうよ。まあ、民主党なんて、ほっといても自滅するから」
シルヴィア
「とにかく！　今年も我が小説をよろしく！」

（もし、キャラ崩壊しておりましたら申し訳ありません！！）

175S　年始特別編　『初詣だ！！』

新米士官の世界……1月1日　平安神宮前

山城
「年明けだな～」

シルヴィア
「今年一年も色々あったな～」

ヴィクトリア
「……それで、なぜ私まで連れて来たのですか！？」

山城・シルヴィア
「「作者の指示だから」」

私服に身を包んだ（本当なら振り袖でも良かったが、山城真希が覚醒しかけた為、止めた）3人が話していた。

シルヴィア
「それで、私達は…」

山城
「とね先生の矢野三兄妹と時風さんがヘリで…」

バタバタバタバタ……

シルヴィア

「……来たな」

山城
「…本当にヘリで来たよ」

一応、着陸スペースを作っていたのを聞いていたのか、そこに着陸した。

山城
「やあ、大和くん」

シルヴィア
「シナノ、ヒュウガ、時風さん、久し振り～」

シナノ・ヒュウガ・時風
「「「お久し振りで～す」」」

大和
（あの、設定上どうなってます？）

山城
（一応、活動報告の『誕生日大戦』の後になってます）

シナノ
「ところで、シルヴィア。そこに居る人誰？」

シルヴィア
「あぁ、私の同期生で、我がシリルテア王国海軍ルーキーパイロットのヴィクトリアだ」

ヴィクトリア
「…ヴィクトリアよ。よろしく」

大和・シナノ・ヒュウガ・時風
（（（（胸、大きいな（（ね））～））））

ヴィクトリア
「……揃いも揃ってなぜ私を見ているんですか？」

山城
「（それを解って言ってんのかね～）さあ、こんな所で立ち話のなんですから、初詣に行きましょう」

その頃……京都地下鉄東西線東山駅出口

福本
「お久し振りです。椎名元帥」

椎名元帥
「久し振りやな～、福ちゃん。あと、『元帥』は無しやで」

福本
「はい」

翡翠
「久し振り～、マリーダ」

握手する為に右手を出す翡翠。
しかし、マリーダは右手を出さない。

マリーダ
「…危ないから、やだ」

海龍
「翡翠さ～ん、会いたかったです～♪」

変わりに海龍が握手をした。

椎名
（相変わらずやな）

福本
（翡翠さんが居るからちょっと不機嫌ですが、本当は俺と初詣に来れて嬉しいんですよ）

マリーダ
「ダイスケ！　行くわよ」

福本
「了解」

平安神宮内……

山城

「やっぱり…元旦だけに人が多い…」

大和
「いや、多すぎ！！」

時風
「はぐれちゃいます～～」

シナノ
「ヒュウガ～、ちゃんと付いて来てる～？」

ヒュウガ
「付いて来てるよ」

ヴィクトリア
「人が多すぎます！　どうにか出来ないのですか！？」

シルヴィア
「言っておくが、我々は軍人だが一般人だから、特別扱いは期待せぬ方がいいぞ」

人の波を掻き分け潜り抜け、ようやく、お賽銭箱に到着した。

シナノ
「ところで…お賽銭は？」

大和
「五円だろう？」

山城

「あ、ちょっと待って下さい。今から配りますから」

そう言いながら1人づつ渡していく。

山城
「では、いきます…」

大和・シナノ・ヒュウガ
「「「いや、待てよ（ちましょうよ）！！」」」

山城
「はい？」

大和
「賽銭が一万円って…大丈夫か！？」

山城
「ポケットマネーですから、大丈夫ですよ？」

ヒュウガ
「いや、そうじゃなくて！　お財布が大丈夫？って事ですよ！？」

山城
「いや～、１８で少佐になったもんですから、給料に余裕があるんですよね～。ちなみに、お金の管理は母がしています」

時風
（一万円……山城さん、どれだけお金持っているんですか！？）

シナノ

（シルヴィアさん、山城さんっていつもあぁですか？）

シルヴィア
（どうだろうな…いつも見ている山城は軍人としての顔が多いが…
…まあ、たまに見せるああゆうところが良いのだがな）

ヴィクトリア
「…さっさとしましょうよ」

山城
「おっと、そうだね。では…」

そう言って賽銭を投げる。

山城・シルヴィア
（（シルヴィア（山城）が無事に今年一年を過ごせます様に））

大和
（高校受験が成功出来ます様に）

シナノ
（何事も無く平和であります様に）

ヒュウガ
（料理術が上達します様に）

時風
（今年も皆仲良く出来ます様に）

ヴィクトリア

（……ブツブツブツブツブツブツ…様に）

福本
「…と、まあ、後輩の山城が色々と向こうでやっているお蔭で、作者さんのペースは止まりませんよ」

マリーダ
「まあ、私達は暇になっちゃたけどね～」

椎名
「うちの作者も相変わらずのペースや。まあ、しゃあないけど」

世間話をする3人の隣で周りで獲物…もとい、お互いの眼鏡に叶うコスプレ（を着せる）娘を探す翡翠と海龍。

椎名
「そんで、その後輩は？」

福本
「今日はちょっと別件で……多分、初詣に」

マリーダ
「結局、私達と一緒です」

山城
「さて…せっかくですから、何かお土産買います？　お饅頭ならこ

の近くに…」

ボフ

……誰かと衝突した。

シルヴィア
「大丈夫か…モンタナではないか！？」

モンタナ
「やあ、シルヴィアか！　とんだ所で会ったな」

山城
「時風さん、アメリカ戦艦モンタナの艦魂、モンタナさん。ちなみに、コスプレは着る方専門」

モンタナ
「あはは、私も有名になったものだ」

シナノ
「ふ～ん……モンタナ、携帯持ってる？」

山城
「え、携帯は…」

モンタナ
「もちろん、持っているぞ」

シルヴィア
「持っていたのか…」

そんなこんなで、シナノ・モンタナの世間話が始まった。

時風
「あの…海龍さんは…」

山城
「多分、別件で…「呼んだ～!?」…え!?」

いったいどこで声を聞いたのか、海龍が現れた。

シルヴィア
「海龍が現れたと言う事は…」

翡翠
「海龍！　何を見付けたの!!?」

椎名
「おい、翡翠!」

福本
「お、山城?」

マリーダ
「シルヴィアも?」

……双方メンバー合流。

翡翠

「シナノ！？　また、会えた！　これも神様のお導き！！」

福本
「…何の神様だよ？」

翡翠
「海龍！」

海龍
「はいな！」

…取り出したるは、海龍のコスプレ衣装……しかも巫女衣装各種。

翡翠
「これ着てー！！」

シナノ
「は～い♪」

モンタナ
「私も着るか♪」

大和
「それは兄と…」

翡翠・海龍
「「部外者は黙れ！」」

パパパパパパン！

いつの間に持っていたのか、２人の手には８９式小銃が……

山城
「や、大和くん！？」

海龍
「大丈夫！　弾は麻酔弾だし！」

福本
「良くないし！」

シルヴィア
「衛生兵！　衛生兵！」

マリーダ
「担架！　担架持って来て！」

時風
「や、大和さ～ん！」

ヒュウガ
「兄さーん！！！」

山城
（しかし、あの２人のお蔭で時風達が無事だったんだよな）

シナノ・モンタナ
「「どーお？」」

巫女服に着替えた２人…１人は普通の巫女さん、１人は金髪巫女さ

ん。

翡翠
「ブゥー！！（鼻血）」

海龍
「凄い凄い凄い凄い凄い凄い！！！」

鼻血をだらだら流しながら写真を撮りまくる海龍。
……よほどツボに嵌まったのだろう。

翡翠
「ヤバい…死ぬ、マジで死ぬ…別に良いけど」

海龍
「次！　シスター服を！」

シナノ・モンタナ
「「オッケー♪」」

椎名
「……やり過ぎやで」

呆れながら椎名元帥は見ていた。

巫女服→シスター服→メイド服→剣道着等をシナノ・モンタナに着せた海龍・翡翠。
その時……

ヴィクトリア
「もう！　いったい何をしているのですか！？」

……ヴィクトリア登場。

翡翠
「……誰？　あの子？」

海龍
「ヴィクトリアです。シルヴィアの同級生で、ルーキーパイロットですよ」

翡翠
「…そうなの…うふふ」

ヴィクトリア
「な、なんですの！？」

翡翠・海龍
「「うりゃあぁぁぁ！！」」

ヴィクトリアに飛び掛かる2人。

ヴィクトリア
「な、何を…ヒャア！」

翡翠
「これはFね！　Fカップね！」

胸を一触りした翡翠が叫ぶ。

翡翠
「この子に巫女服着せたら……ブフゥゥゥ！！（鼻血＋吐血）」

…どうやら、巫女服を着たヴィクトリアを妄想し、ツボに嵌まった様だ。

海龍
「駄目だよ～、ヴィクトリア。さ、これ着て～！」

そう言いながら巫女服を出す。

ヴィクトリア
「い、い、い、い、嫌ですわ～！！！（＜＿＜）」

椎名
「ひーすーい～！！！！！」

そこに、大和の容態を見に行っていた椎名＋福本・山城・シルヴィアが戻って来た。

椎名
「福本！　翡翠はこっちでなんとかする！　そっち頼むわ！」

福本
「了解！」

そして……

福本・山城
「「やり過ぎだっつーの、海龍！！」」

バキッ！！！

海龍
「プゲラ！！」

シルヴィア
「ヴィクトリア！　大丈夫！？」

ヴィクトリア
「し、し、シルヴィア…た、助かりましたわ…」

……こうして、一連の騒動は幕を閉じた。
ちなみに、翡翠は余りの血の出過ぎにより放心状態になっていたところを引き剥がされた。

椎名
「はあ～、正月早々、疲れたわ～」

福本
「本当ですね」

シナノ・モンタナ
「「楽しかった～♪」」

山城

「福本元帥。大和くん達を先に帰らせますね」

マリーダ
「わかったわ。それで、ヴィクトリアは？」

シルヴィア
「多分…大丈夫かと…」

椎名
「さて、俺らも初詣に行こか？」

翡翠
「そうね！」

マリーダ
「…復活した」

福本
「じゃあ、行きましょう。これ以上騒がれるのも面倒ですし」

シナノ
「じゃあ、モンタナ。またね～」

モンタナ
「あぁ、シナノ」

海龍
「え～ん…放して～」

マリーダ

「駄目。何するかわからないから」

椎名・翡翠＋福本・マリーダ・海龍はお詣りを済ましたあと、椎名・翡翠は帰っていった。

ちなみに、シナノ・モンタナのコスプレ写真とヴィクトリアの盗撮写真を翡翠に渡したのは別の話。

また、矢野三兄妹と時風は大和が起きた後、山城・シルヴィア・ヴィクトリアに見送られヘリで帰って行った。

次号へ

１７５Ｓ　年始特別編　『初詣だ！！』（後書き）

（とね先生・零戦先生、これで大丈夫でしょうか？）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１７６　入る米（べい）艦　出る天城

曳航されたインディアナポリス・ワスプ。
２隻はラバナスターのグローリアス士官学校の軍港に曳航され、緊急点検を受けた。
４日間の点検の結果、回航出来ると判断された。
ただし……攻撃を受けた箇所は何故か応急修理された形跡があったのだが……。
山城は１日を掛けて報告書を作成、小澤中将に提出した。
その際、インディアナポリスについて口頭で報告。
そして、山城は回航員として乗艦、シルヴィアも同行した。
山城は神戸の天城を受け取りに行くついでだった。

６月５日（異世界６月１６日）
神戸海軍鎮守府

山城
「入れ替わりだな」

天城が入渠するドックで、今から入渠するワスプとインディアナポリスを見ていた。

福本（伊吹）
「おう、流石に預かっただけに、気になるか？」

山城
「福本次官」

サッと敬礼する山城、返礼する福本次官。

福本（伊）
「報告は君の報告書と小澤中将の付属書で詳細は解っている」

山城
「なら、どうします？　アメリカの介入が予想されますが？」

それこそ、アメリカの軍艦だから、アメリカの物だと言われても文句は言えないし、下手をすれば介入の口実を作る。

福本（伊吹）
「大丈夫だ。いくら同じアメリカでも、この世界のアメリカに2隻の所有権は無い」

山城
「まあ…それはそうですけど…」

福本（伊）
「それに君の報告だと、2隻は別世界の我が帝国海軍潜水艦の雷撃で沈没したんだろう？　それにインディアナポリスは原爆の部品を輸送していたとなれば…」

山城
「…あ、そうか！　なるほど、そう言う事ですか…2隻の所有権を主張するなら、2隻の不名誉も背負い込む…それを盾にするんですね？」

福本（伊）

「特にインディアナポリスは原爆部品を輸送していた。つまり、アメリカは別世界のアメリカの原爆実戦使用と言う汚名を世界暴露する様なものだ…国としては避けたいだろう？」

現在、アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・ロシア・日本が核（兵器）保有『可能性』国である。
なぜ、『核保有可能性国』かと言うと、１９５１年の国際連合創立の会見で、日本帝国当時首相永田鉄山が日本の原爆不保有を発表した。しかし、この宣言にはちゃんと含みがあった。
宣言には『アメリカが我が国への原爆を使用しようとした過去ある為、もし、原爆保有を明確にした国が現れた場合、我が国は直ぐにこの宣言を撤回する』とも発表した。
これにより、世界は核を持ちにくくなった。
なぜなら、日本帝国の本気を３度も４度も見せ付けられてはおいそれとは対決姿勢を見せれない。
それに、日本が既に原子力機関の研究が進んでいるとなると、日本の本気が解るからだ。
何せ、今日の民事技術が昨日の軍事技術と言われれば頷ける人間も多いだろう。
だからこそ、世界は表上『核兵器は保有していない』のである。
もちろん……『表』だけだが。

福本（伊）
「まあ、こちら側は任せろ。そっちには出来る限り迷惑が来ない様にする」

山城
「わかりました」

福本（伊）

「それと…これが天城の点検箇所表だ」

山城
「はい」

見ると、以前から点検の必要ありと見られていた箇所が殆どだ。
しかし、最後のページを開いて転けかけた。

山城
「福本次官…高角砲の砲身と発射機構を変えましたね！？」

福本（伊）
「ん？　何の事だ？」

山城
「あのね…砲身は秋月型駆逐艦の９８式１０ｃｍ６５口径高角砲の改良型、発射機構は半自動装填装置！　Ｂ１７爆撃機でも相手にしろと！？」

福本（伊）
「他にもレーダーと艦橋の配線周り、艦橋内部、通信機・設備を弄ったそうだが…」

山城
「本当だ……点検の名を借りた改装ですね……只でさえ、オーバーキルなのに…」

福本（伊）
「それとだな……明日、戦艦扶桑・山城を加えた錬成艦隊が向こうに来航する」

山城
「どうせ、天城が先導しろ…でしょう?」

福本（伊）
「まあ…そう言う事だ」

山城
「はあ…事前に連絡して下さいよ…こっちだって準備があるんですから」

次号へ

１７６　入る米（べい）艦　出る天城（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１７７　錬成艦隊

６月６日（異世界６月１７日）
日が昇る前の早朝の海上

ドックから出た天城は沖で待機していた。
そして、天城の艦橋では山城が静かに待っていた。
同じくシルヴィアも。

通信長
「艦長、錬成艦隊より到着の通信です。どうやら、来たようです」

山城
「時間通りだな……挨拶に行くか。微速前進」

士官
「了解、機関微速ぜんし～ん」

兵士
「よ～そろ～」

天城が微速で前進する。
シルヴィアは双眼鏡片手にずっと外を見ている。
現れた錬成艦隊……艦隊と言っても僅か４隻だが……新造新型戦艦扶桑・山城、イージス重巡洋艦愛宕、軽空母龍驤の４隻。
特に扶桑・山城は大和型の艦橋、４１ｃｍ５０口径三連装３基の主砲、８万トンの船体……と正に威風堂々である。
それ故に、こんな早朝に出迎えねばならないのだが……

山城
（久し振りの新造戦艦だからな…余り、人目に晒したくないか…大和が完成した時みたいな状況だな…クーデターでお流れになったけど）

シルヴィア
「見えてきたな。視認距離だ」

双眼鏡で見ていたシルヴィアが呟く。

通信長
「艦長。旗艦扶桑より、映像通信です。スクリーンに映します」

言うやいなや、スクリーンに指揮官らしき人物が映った。
そのまま、自己紹介の筈だったが……

山城
「…山南（やまなみ）教官!?」

『…や、山城か!?』

山城
「やっぱり、山南教官ですね！　お久し振りです！」

通信長・シルヴィア
「「艦長（山城）、顔見知りなんですか（なのか）!?」」

山城

「山南慎三大佐を？　あぁ、シルヴィアは知らなかったけ？　山南大佐は俺が転移した時の学年主任教官だからな」

山南
『えらく偉そうな口を叩く様になったな、山城。そう言えば何時見付かった！？　よく生きていたな！　大澤の馬鹿や鷲井達も見付かったのか？　旅順に籠りぱっなしだったから良く知らんのだ』

山城
「…あの……何も知らなかったんですか、教官？」

そこから手短に今までの事（個人のあれこれは置いといて）を話した。

山南
『そうか……異世界云々は君達が発端か…』

山城
「はい…山南教官もお元気そうで良かったです」

山南
『ふっ、お前達が行方不明になった責任をとって辞表まで書いたがな』

山城
「…えぇぇ！！　じ、辞表を！？」

山南
『受理された筈なんだが……何故か旅順軍港新造艦総責任者に成ってしまってな…山城、何か知らんか？』

山城
「た、多分…福本海軍次官が辞表を破いたんじゃないですか？」

…一番有り得そうな可能性を言ってみた。

山南
『……あり得そうだな』

…まったくです。

山南
『まあ…積もる話も後にしよう。今は向こうに行くのが先だ』

山城
「そうですね。山南大佐」

山南
『…言い忘れていたが、扶桑・山城が完成した時点で少将に昇格した』

山城
「わかりました、山南少将。これより本艦が先導致します」

山南
『うむ。しっかりと頼む』

山城
「はい」

返事を聞いて、映像通信が切れた。

シルヴィア
「世の中とは恐ろしいものだ。お主の教官の１人が、有ろう事か錬成艦隊の指揮官とはな」

山城
「こっちは驚いてるよ。まったく、福本次官も人が悪すぎるよ」

一言言うと、直ぐに指示を出した。

山城
「両舷巡速、１８ノット！　規定コースに従い向こうに行くぞ！ちゃんとやらんと、山南教官からどやされるぞ！」

その言葉に艦橋の人間は苦笑いを浮かべていた。

一時間後……

シルヴィア
「山城、錬成艦隊もゲートを抜けたぞ」

山城
「よし、今のところは異常は無いな…映像通信開け」

通信長
「了解」

直ぐに山南少将の顔がスクリーンに出た。

山城
「改めまして、山南少将。シリルテア王国にようこそ」

山南少将
『国防省から報告は受けていたが…なるほど、ＧＰＳ類は沈黙したな』

山城
「昔ながらのやり方が一番ですよ。では、引き続き先導します」

山南少将
『うむ、我々には始めての航路だ。引き続き頼む…その後、そこの彼女の事を聞くとしよう』

山城
「はい！？」
そのまま映像が切れた。

シルヴィア
「…しっかりと見られていた様だな」

山城
「さて…どう話したものかな？」
頭を掻きながら苦笑する山城だった。

次号へ

177　錬成艦隊（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１７８　やり過ぎですよ、福本次官……

６月２１日（現世界６月１０日）

錬成艦隊来航から４日が経過した。
扶桑・山城・龍驤・愛宕の４隻を加え、戦艦３、空母４、巡洋艦２、イージス艦２、駆逐艦４、輸送艦２、潜水艦１……この世界ならば、国家予算の大部分を軍事予算に当てなければお目にかかる事の出来ない艦隊である。
しかも、この世界では自分達の駆逐艦、あるいはイージス艦１隻でオーバーキルと言っていい存在である。それに＋戦艦となれば……オーバーキルどころか、国の１つや２つを簡単に征服出来る。
しかし……それは結局、帝国主義の繰り返しであり、後々には共産主義を作り出すのである。
残念ながら、自分達が介入しなくても、帝国主義が栄える事になるだろうが……。
そんな事を考えつつ、山城は艦長兼主席参謀兼連絡役を努めていた。

戦艦天城艦長室

山城
「え～と…明日の予定はと…」

先程、通信室から届いた予定表を見ていた。
扶桑・山城が加わり、訓練漬けの日々だが、マル秘の最新艦を見れる数少ないチャンスと思えば悪くは無い。

実際、最新艦とあって2隻の高性能ぶりは見ているが、元教官の山南少将は不満らしく、散々しごかれる艦橋要員達を初日に見たばかりだ。
まあ、自動化が進み過ぎた等の理由で沈没した宇宙戦艦アンドロメダの様には山南少将もしたくは無いだろし……。

山城
「それに対して、さすがは愛宕だな～、1年2ヶ月早く完成した事はあるよ」

去年の勝戦観艦式に出たイージス重巡洋艦愛宕……1年の差は大きく、練度面では2隻を引き離している。

山城
「あれで本当に起工年月日が一緒なのかな……いやいや、戦艦と巡洋艦を比べるのが間違いか…」

シルヴィア
「おい、山城！　あのＶＴＯＬ機は凄いな！」

そう言いながら、シルヴィアが入って来た。

山城
「４１式『水風』垂直離陸戦闘機、別名『ハリアーＪ』の事？」

シルヴィア
「おぉ、それだそれだ！」

……しかし、福本次官もやり過ぎだろう……わざわざ、ＶＴＯＬ機を持って込んでもいいだろうに…。

シルヴィア
「航空科の連中は総出で龍驤に見学に言ったそうだぞ」

山城
「そうか…」

軽空母龍驤はＶＴＯＬ機２５機（＋予備７機）、ヘリ５機（予備３機）の計４０機を搭載している。
今回ＶＴＯＬ機は４１式『水風』３３型甲（戦闘機タイプ）を、ヘリについては対潜ヘリを搭載している。
まあ、どちらにしろ、やり過ぎ感たっぷりだが…。

シルヴィア
「しかし、お主も大変だな。小澤中将と山南少将との間を行ったり来たりだからな」

山城
「まあ、仕方ないさ。誰かが連絡役をやらなきゃいけないんだし…」

天城
「そんな艦長に来客だ」

いつの間にやらか、山城達の真上に天城が居た。

シルヴィア
「入るなら一声掛ければよかろう」

天城
「ふん、小娘に指図される覚えは無い」

シルヴィア
「なんだと！」

山城
「双方落ち着いてくれ…その前に天城さん、来客って誰ですか？
外から来客なんて来ない筈なんですが…」

天城
「ん、向こうはえらく知っていた様だが…まあ、会えば解るだろう」

そう言うと、天城は転移した。
しかし、次の瞬間にはまた転移して来た……但し、人と人数が変わっていた。

「お主が山城殿か？」

2人の内、大人ぽい女性が口を開いた。

山城
「（殿って…えらく古い言葉使いだな…）はい、本官が天城艦長の山城正人ですが…なにか？」

その女性は山城の質問に答える事はせず、上から下まで何かを見定めるかの様に山城を見ている。
山城も黙ったまま、その女性を観察した。
まず、腰の日本刀、しっかりと着られた軍服・軍帽。どっからどう見ても女侍……あれ？

山城
「ま、まさか…福本元帥が海軍随一と認めたサムライ士官の戦艦山城の艦魂、山城さん！！」

「あぁ、福本君、そこまで話してたんだ」

もう1人の少女がやっぱりと言う風に言った。
1人の正体が解ると、もう1人の正体も解った。

山城
「そうなると、あなたは山城さんの恋人、愛宕さんですね！」

「……（カア～～（＊＾＾＊））」

……完全に図星である。

「あっはっはっはっは！　福本殿はあなたに色々と話した様ですな！」

豪快に笑い出した女性は正に納得したとばかりだ。

「うむ、お主の言われた通り、私は山城。彼女が私の一番弟子兼恋人の愛宕だ」

「愛宕です。どうぞ、よろしく」

シルヴィア
「はあ…どうぞ、よろしく」

話が読めていないながらも、とりあえず頭を下げるシルヴィア。

山城（戦艦）
「山城殿、今日は挨拶をしに来ただけだ。邪魔をして済まなかった。では」

そう言うと、山城（戦艦）・愛宕は転移してしまった。

天城
「……大変な事になったのではありませんか、艦長？」

山城
「…私にも解りません」

シルヴィア
「まあ…嫌われている訳ては無いだろうな」

次号へ

１７８　やり過ぎですよ、福本次官……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１７９　山城同士の世間話（前書き）

山城（戦艦）
「やあ、読者の諸君。復活した『地獄の山城』の山城だ！」

新米士官
「史実の１０戦艦の復活一番手を担ってもらいました」

福本
「…これ、何かの副線？」

新米士官
「……ノーコメント」

１７９　山城同士の世間話

６月２３日（現世界６月１２日）
昼食後

山城は副長に指揮を預け、艦長室に居た。
今やすっかり自らの私物だらけになっている艦長室で山城は本を片手に読書中だった。
すると、誰かが転移して来た。

山城（戦艦）
「やあ、山城殿」

山城
「どうもです、山城さん」

戦艦山城の艦魂、山城だった。
その山城を山城が出迎える（ある意味ややこしい……）

山城（戦艦）
「…随分とややこしくなったな」

山城
「…そうですね」

お互い『山城』だから、普段から『山城』と呼んでいる（＋艦魂が見える）人間が呼べばお互い振り向く事は間違いない。
しかし、幸か不幸か、そんなセットの人間は極僅かだし、呼ぶ人間

のニアンスにさえ気よ付けていればいい話だ。
実際、シルヴィアが山城と呼べば人間の山城だし、愛宕が山城君と呼べば同じく人間の山城である。
逆にシルヴィアと愛宕が山城さんと呼べば艦魂の山城である。
まだ僅か1日なれども、それでどっちか解ってしまう。

山城（戦艦）
「まあ、いい。それで、何を読んでおりますのかな？」

山城
「あ、これですか？　これはですね…」

そう言うと開いていたページにしおりを挟んでから本を閉じ、表紙を見せた。

山城（戦艦）
「『福本大介元帥自伝』…ほう、福本殿は自伝を出したのですか？」

山城
「世界一有名な若き海軍元帥ですから…山城さんの事も書いてありますよ」

山城（戦艦）
「そうなのですか…６０年程現世に居なかったものですから…いま、福本殿は？」

山城
「さすがに既に引退されました…６０歳の時にマリーダ元帥と一緒に。今もお元気で、実家でひっそりと農業をしながら暮らしておられます」

山城（戦艦）
「…そうですな。子や孫は？」

山城
「お子さんは1人…男子で海軍中将、私の直接の上司です。お孫さんは男子が1人、同じく士官候補生で自分の後輩です」

山城（戦艦）
「ははは…あの2人の事だから、子供は作るだろうと思っていましたが…もう、孫までおりますか」

山城
「えぇ、しかも、遺伝ですかね？　親子共々冷静沈着、大胆不敵、勇猛果敢、初志貫徹、どんな絶体絶命でも諦めない…もう凄い物ですよ」

実際、福本勇気を止めようとする筈が、いつの間にか一緒に暴れていたなんてざらであった。
それなのに……何故か福本専門の先輩と言われるわ、福本の相手を頑張れと教官に言われるわ……まあ、振り回されまくったが……

山城（戦艦）
「あっはっはっは！　何を言われる、山城殿。あなたも若い時の福本殿にそっくりですぞ」

山城
「そうですかね？　全然自覚はありませんが…」

山城（戦艦）

「えぇ、特にこの若さで恋人を持っているところが特に」

山城
「……あれ、バレてる？」

シルヴィア
「何がバレたのだ？」

そこにシルヴィアが入って来た。

山城（戦艦）
「おやおや、噂をすればなんとやら…恋人の登場ですな」

シルヴィア
「……山城、バレたのか？」

山城
「あぁ、バレた…何でかは解らないけど」

山城（戦艦）
「まあ、同じく恋人を持つ者ですから…この事は内密にしておきます」

山城
「はあ…どうも」

勢いでは無いが……そう言うぐらいしか無い。

山城（戦艦）
「では、私はこれで…この後の戦闘訓練は頑張って下さい」

そう言うと山城（戦艦）は転移した。

山城
「さすが『地獄の山城』…釘を刺されたな…」

シルヴィア
「なんだ、それは？」

山城
「後で教えてあげるよ…で、用件は？」

シルヴィア
「そろそろ艦橋に戻る時間だ。山城さんが言っていた、午後からの抜き打ち戦闘訓練だからな」

山城
「わかった」

次号へ

１７９　山城同士の世間話（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１８０　困惑と再会と

６月２５日（現世界６月１４日）

錬成艦隊が来航してから８日が経過した。
この日は息抜きと言うことで、全艦寄港、両舷上陸を許可された。
まあ、今や艦魂達の集まり場となった戦艦天城艦長室は連日賑やかこの上なく、出掛け無くても別段良い状況（まあ、艦魂達が来るから、茶菓子の調達を頻繁にしなければならないが）であった。
そこに同じく見える横井軍医中尉がやって来るわけだが……別段問題はない。
そんなこんなで、山城・シルヴィア以外の人間は久し振りの安息日を満喫するのであった。
ただ……

空母飛龍士官室

ヴィクトリア
「……はぁーーあ…」

机に肘を付け、まるでやる気無しかの様な溜め息を吐くヴィクトリア。
実は最近、彼女はこの調子……無気力、無関心、無反応であった。
普段なら気付く筈の自分の事（に関する話）を聞き逃すどころか、普通に話し掛けられている事にすら気付かない程の重症。

正に身体は有りても魂が何処にか行っている様な状況である。
もし、このヴィクトリアをシルヴィアが見たら真っ先に医者に行け、と言っただろう。
しかし、戦艦と空母と言う他艦だから接触する機会も少ない。
まあ、周りが医者に行った方がいいんじゃないの？…と思い始めていたのだが…。

ヴィクトリア
（おかしいですわ……いつもならこんなに無気力にならない筈なのに……何故なのかしら？）

……多分、横井が診ればズバリと当てただろうが、未だ原因不明の事に1人で悩む間は解らないであろう……。

その頃……

宮里
「…なんだかな～」

1人歩きながら、戦艦天城砲術長宮里中尉（天城の点検終了と共に昇進）は呟いていた。
本来なら、『幹部』に属する砲術長も、今回は外出していた。
と、言うよりも、艦長の山城が「今日は1日いるから、出掛けて来れば？」と気を使ってくれての事だ。
しかし、ちょいちょい出掛ける山城と違い、天城に貼り付けの宮里は暇を持て余していた。

宮里
「あぁ～、どうするかな～」

行く宛が無いとここまで困るのか……山城なんかあっちこっち有りそうだし……

宮里
「……天城に戻るか」

……行く所無いし…。

「あら、宮里さん？」

宮里
「え？」

いきなりの後ろからの声に振り返ると、巫女さんが1人立っていた。

宮里
「あ！　風華さん！？　うわ～、偶然ですね！」

風華
「えぇ、そうね。もう、1年くらい前だったわね」

宮里
「はい…お元気でしたか？　やはり、旅を？」

風華

「はい…この国のあちこちを見ましたわ。ですが、最近はあなた方の噂を耳にする様になりましたわ」

宮里
「そうですか…こんな所で立ち話も何ですから、どうぞ」
そう言うと、日本軍借用区へと招きて入れた。

戦艦天城艦内砲術長室

宮里
「そう言えば…風華さんは何故旅を？」

世間話をしていた宮里が前々から気になっていた疑問を口にした。
いくら男に勝てるとは言え、巫女さん1人旅と言うのもおかしな話だ。

風華
「…それは…」

「確かにその話は気になるな…俺らも聞いていいか？」

いきなりの声に振り返ると、いつの間にやら、山城・シルヴィア・横井のメンバーが居た。

宮里
「お前ら…いつの間に！？」

シルヴィア
「さっきだ。それと、今度からはちゃんと兵の口を閉ざしておく事も忘れぬ方が良いぞ」

宮里
「あ…」

天城に戻る時に飛び乗った内火艇の乗員が話したのだろう…多分。

山城
「差し支えなければ…話して頂けますか？」

風華
「…はい、実は……」

彼女の話を纏めると、以下の通りだ。
異界で生まれた彼女は、幼い時に両親を殺されたそうだ。
それで彼女は親戚に頼み、両親の仇が逃げたこの世界に片道切符でやって来た…と言う。

宮里
「山城、どうにか出来んか？」

山城
「あのな…何処のどいつか解らないのに探せる訳無いだろう」

宮里

「なら、風華さんをここに置けないか？」

山城
「…そう言うのは福本の方が得意なんだが…」

宮里
「お前は艦長だろう！　それに主席参謀！」

山城
「あぁ、もう、わかったわかった…話してはみるよ。ただし、期待はするな」

次号へ

１８０　困惑と再会と（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

181　密航者

6月27日（現世界6月16日）

2日が経過した。
普段通りの天城艦橋に華が咲いた。（おいおい）

風華
「本日より、天城艦橋勤めになりました。風華です」

山城
「と、まあ、こう言う事だ。皆、色々と教えてやってくれ」

……結局、期待はしないでと言っておきながら、こうすんなりと旅巫女、風華の第零艦隊編入が決まった。
最初は大丈夫か？…と思いつつ話すと、小澤中将・山南少将共にあっさりと許可が出た。
拍子抜けしながら、直通ラインを使い福本海軍次官に訊いてみると笑いながら答えた。
曰く……これからの為の準備…と。

山城
（これから転移者がポツポツ出て来るかも知れないから、その前例作り…って、大丈夫かい？）

別段悪くは無いが……大丈夫かな？

シルヴィア

「…お～ま～え～ら～、死にたい様だな～！（怒）」

艦橋要員の普段との反応の違いに怒るシルヴィア……艦橋要員全員（女性を除く）が青ざめる。

シルヴィア
「お前達全員、海に叩き込んでくれるわ！！」

……ちなみに、この一方的乱闘劇は山城がシルヴィアを艦橋の外に連れ出すまで続いたとか……

シルヴィア
「まったく、朝からムカつく事だ！」

山城
「まあまあ、落ち着いて落ち着いて…」

艦橋の外から艦外へと出た2人はそのまま借用区画を歩いていた。
多分、あのままにしたら、それこそ流血騒ぎ以上の事になりそうな予感が……

シルヴィア
「何か言ったか！？」

山城
「作者だろう」

シルヴィア

「そうか」

……間違い無くおきますね。

シルヴィア
「…そう言えば、今日の錬成演習は？」

山城
「午後からに変更だよ。扶桑の射撃指揮装置に異常がおきたんだとさ」

シルヴィア
「予定は大丈夫なのか？」

山城
「大丈夫。セットでやるから」

シルヴィア
「…お疲れ様だな」

山城
「あはは…」

和やか～に苦笑いをする山城。
そうこうする内に飛行場区画内に入っていた。
普段は定期便と定期哨戒の準備・整備で忙しい飛行場区画……なのだが……

シルヴィア
「…なんだなんだ？」

山城
「何か起きたかな？」

格納庫周辺で右往左往する整備兵に話し掛けた。

山城
「おい、何かあったのか？」

整備兵
「あ、少佐！　大変です！　侵入者です！」

シルヴィア
「はあ？　侵入者？」

整備長
「まあ、正確に言うと密航者ですが」

山城・シルヴィアに気付いた整備長が捕捉した。

山城
「…どう言う事だ？」

整備長
「どうやら、定期便の荷物の中に入り込んでいた様です」

山城
「…なるほど、それで、上には？」

整備長

「いえ、まだですが…」

山城
「よし、皆はそのまま捜索を続けてくれ。俺が小澤中将と山南少将に伝えて来る」

整備長
「わかりました」

山城
「じゃあ、シルヴィア、済まないけど…」

シルヴィア
「わかっておる。行って来るがよい」

山城
「おう」

そう言うと走って行った。

シルヴィア
「さて、天城帰って読書の続きをするか」

そう言ってその場を離れた……筈だったのだが……

シルヴィア
「…ん？」

ごたごたと置かれた貨物箱の陰に見慣れない人影があった。
何故か目を回し気絶して倒れていたが……

シルヴィア
「なるほど、密航者とはこの者か……しかし、女とはある意味驚きだが…」

そう呟きつつ、シルヴィアは倒れていた女性を背負うと足早に天城へと向かった。
色々と考えながら……。

次号へ

181　密航者（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１８２　交換条件

午後……戦艦天城艦内医務室

「うみゅ～…あと５…１０分だけ～……あぁ！！」

熟睡していたところから一気に覚醒し、飛び起きる。

「ここはどこ!?　今は何時何分!?　私は……私だ!」

……飛び起きて早々騒がしい女性である。

西田
「あ、お目覚めですか？」

大澤・ヴィクトリアに拾われ、今は横井の助手兼見習い看護婦役をやっている西田結衣（ゆい）が飛び起きた女性に訊いた。

「あ、は、はい…ところで、ここ何処？」

西田
「戦艦天城の医務室ですけど…」

「あはは…軍艦の中なのね…」

横井
「あ、起きたの。調子は？」

今度は横井軍医が登場。

「あ、え、はい…少し頭痛が残ってる…かな？」

横井
「まあ、当たり前ね。素人で未経験者が何の準備無しにゲートに入れば、目を回して気絶するなんて事になるわ…ところでお名前は？」

「あはは…そうなんですか…え～と、私は鈴崎綾音（すずさきあやね）です……じゃあ、私はこれで…」

横井
「あのね、軍医の私がこのまま帰すわけ無いでしょう。山城、シルヴィア、出番よ」

そう言われて、入って来たのは山城・シルヴィア。

山城
「海軍少佐の山城です。密航とは…よくやった者ですね」

鈴崎
「お、お、お願いです～！　見逃して下さい～」

山城

「それは無理ですね、鈴崎綾音さん。現２２歳、読売新聞社に今年４月に入社した新米記者……まあ、密航の理由も大体解りますけど」

鈴崎
「な、なんで私の個人情報を知ってるんですか！？」

山城
「理由は２つ。１つ、あなたが今日、神戸軍用飛行場に入場申請をしていた事。もう１つは、許可を出す為に、本人には内緒で身辺調査をしたからですよ」

鈴崎
「…えー！！　じゃあ、私は軍に監視されてたんですか！？」

山城
「いえいえ、身辺調査は一時的です。それに監視なんて事は余りしませんよ」

……つーか、あんた新聞記者でしょう…軍がそれくらいしないと、一民間人に軍施設見せるわけねーだろ。

シルヴィア
「まあ、それは置いておくとしてだ…あなたこそ、ご自分の立場をご理解しておりますか？」

少しキツイめにシルヴィアが言う。

鈴崎
「…え？　どう言う事ですか？　このまま事情聴取で終わりでしょう？」

……多分、天然だからこんな事を言ってるのだろう…しかし、現実は甘くは無い。

山城
「これが普通の軍事施設ならそうでしょうが……あなたのしでかした事を見るとね…」

鈴崎
「え、え、え!?　わ、私のしでかした事!?」

山城
「えぇ、まず、あなたは輸送機の貨物に紛れてここに来たから、単純に見て不法入国ですね。次に無許可で基地に入った訳ですから、不法侵入。最後に、あなたは軍機密及び国家機密事項を見てしまったから……」

鈴崎
「み、見たから?」

山城
「まあ、良くて２０～３０年程の間、刑務所に入って頂く事になるかと…」

鈴崎
「……えぇぇぇぇぇ!!!!!　刑務所に!　３０年も!?」

山城
「まあ、これは良ければで、下手をすると一生入るか、スパイとなれば銃殺…」

鈴崎
「嫌ですー！！」

山城
「しかし、あなたの場合はそんな事にはならないかと……って聞いてないよな」

終身入所か銃殺と聞いて泣き続ける鈴崎さん……。
……私は悪役の悪代官か？

横井
「…ちょっとリアクション付け過ぎたんじゃないの？」

山城
「…全然付けてませんよ」

事実を淡々と述べたまでですが？

シルヴィア
「まあ、牢に入らん方法も有るには有るが」

鈴崎
「ほ、本当ですか！？」

山城
「えぇ、あなたの罪状取り消しと情報独占、自由行動が出来ます。
但し、海軍御用達記者となるのが条件ですが」

鈴崎

「えぇ～…」

露骨に嫌そ～～な顔をする鈴崎さん。

山城
「……まあ、ゆっくり考えて下さい。あ、あと、ここから逃げない方がいいですよ。今この艦は海上にいますから、海に飛び込んだらバラバラ死体になりますから」

そう言うと、山城・シルヴィアは出て行った。

鈴崎
「あ、あの…さっきの嘘ですよね？　ね？」

横井
「いえ、本当よ。ボート用の小さいスクリューでも人の腕ぐらい簡単に切断できるわね」

鈴崎
「……」

次号へ

１８２　交換条件（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

183　親善航海？

結局……鈴崎綾音さんは御用達記者（別な言い方をすれば従軍記者）になる事を承諾した。
そう言った次の瞬間には、また目を回して気絶した……横井曰く「ゲートを潜った時の頭痛と船の揺れが効いたのね」…だった。
つまり……ほっとけば治ると言う事だった。

7月1日（現世界6月20日）……福本次官の事前予告通り、今年4月に海軍兵学校・海軍士官学校卒業の新人20人（志願15人、選出5人）が配属された。
全員を天城に配属し、一応目に届く範囲に置いて置いた。
志願組はいいとして、選出組は確かエリート意識が強い参謀・国防省勤務希望だからな……。
果たして……大丈夫だろうか？

7月4日（現世界6月23日）

山城
「……え？」

杉下
「どうかしましたか？　山城少佐？」

ここはプレハブ兵舎の会議室。
大使館の杉下大使が来て、今回の状況を説明していた。

山城
「えーと…少し確認しますよ。まず、ネイラーン王国のアルスラーン国王とシリルティア王国のアーネリア女王が最近のゴタゴタで疎遠になっていた王室外交をする…との事ですよね？」

杉下
「えぇ、そうですよ」

山城
「それで、今回はその王室外交の第一回目として、我々日本海軍第零艦隊も同行する……間違い無いですね？」

杉下
「はい、間違い無いですよ」

山城
「では、天城、鳥海、飛龍、駆逐艦４隻なのは出し過ぎでは？　必要なら天城１隻でも良いのでは？」

杉下
「砲艦外交ならそうなりますね。ですが、今回は両国も同規模の艦隊を派遣する為、我々も失礼の無いようにする為です」

山城
「わかりました。天城にも新米が配属されたばかりですから、丁度いい機会だと思います」

杉下
「なら、お願いします」

ちなみに、この会議には小澤中将、山南少将以下艦隊幹部が参加していた。

戦艦天城会議室

山城
「…と言う事で、本艦も参加する事になった」

今度は艦幹部＋配属されたばかりの士官達の前で説明する。

宮里
「まあ、扶桑・山城が出れないのは仕方ないが、艦隊総出は悪くない」

横井
「最近、山城とシルヴィアの出番回数が多かったからね～」

天城
「私はドック入りだったからな」

山城
「普通に会話に入らないで下さいよ、天城さん」

山城が天城にツッコミを入れる。

実際、今のところ見えているのは山城・シルヴィア・横井の3人。
あと、あるいは見えてる……最低限気配は掴んでるかも知れないのは巫女である風華ぐらいしかいない。

シルヴィア
「私も随行員の1人にされた。しかし、役目は相変わらず日本艦隊との連絡係だがな」

山城
「まあ、今さら配置換えなんて事にはならないと思うけどね」

と言うか、配置換えしても配属される宛がたるかどうか……

シルヴィア
「ん？　何か言ったか？」

あ、お気にせずお話を進めて下さい。

山城
「あー、特に今度配属された士官達に言っとくが、現地で騒動を起こさないように…下手したら、そのまま置いておくからな、覚悟しろよ」

最後に、念のために釘を刺しておいた。

その後……天城艦長室

山城
「…ところで、なんで俺達まで？」

シルヴィア
「今度の事か？　実は色々とややこしいのだ」

今回の艦隊出撃はやはり、ややこしい様だ…。

シルヴィア
「今回行くウェスタデェア王国は密かな御家騒動中だ。主に山が国土の六割から七割を占める沿岸国家だが、それ故に良質の鉄、金、銀、銅、ダイヤモンド鉱石など、近代国家なら喉から手が出る程必要な資源を持つ国だから、余計なのだがな」

山城
「なるほどね…体よく、圧力に使う訳か…」

シルヴィア
「い、いや、そう言う訳では無いが…」

山城
「…と言っても、向こうだって商売しているから、お客さんを失う事はしたく無い筈だけどね」

山城はそう読んだ……しかし、その読みは現地で、しかも、意外な場面で外される事になるとは誰もが思っていなかった……

次号へ

１８３　親善航海？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１８４　順番待ち

７月１５日現世界（７月４日）

ウェスタデェア王国に向けて出港したのが６日、それから９日間をかけてウェスタデェア王国へと航行した。
本来なら、巡航速度で１６～１８ノットは余裕で出せる第零艦隊だが、日露戦級艦のネイラーン・シリルティア両王国艦艇には無理な話で、仕方なく両国艦艇に合わせて航行する事になった。まあ、山城達には今更のところだが、配属されたばかりのヒヨッコ士官２０人には遅すぎる程であったが……。
とにもかくにも何事も起こらず、艦隊は無事にウェスタデェア王国へと到着したのであった。

山城
「それはいいが……大丈夫なのか？」

天城艦橋で首から掛けている双眼鏡を覗く山城。
大型である第零艦隊は先にシリルティア・ネイラーン両王国艦隊を先に入港させていた。
なにせ、慣れて無い艦の誘導に失敗して事故ったあげく、入港遅延・他艦入港待ち…なんて起こしたら、泣くに泣けない……いや、それ以上か？

シルヴィア
「だから、先に入港してもらったのだろう？」

山城
「まあ、そうなんだけどね」

…この為、天城・飛龍・鳥海・磯波・浦波・綾波・敷波の7隻は待機状態である。

宮里
「まあ、デカイから仕方無いし…それに注目されてるし。砲艦外交だし」

山城
「最後のは余計だよ。それに、そんな事を言えば駆逐艦一隻で充分な威圧だよ」

何度も言うように、第二次大戦の日本海軍駆逐艦は、日露戦級艦艇にとっては一隻で充分なオーバー戦力である。
それに戦艦と巡洋艦、空母、航空機を入れたら……言うまでも無い。

杉下
「既に我々の存在もこの世界の国々にとっては無視出来ない存在になっていますからね」

山城
「まあ、日本だって付き合う国が多ければ利もありますし」

だからと言って……これはこれでやり過ぎの様な気もするが……

小澤中将
「まあ、事情が事情だけに、我々も行く事になったがな」

…突然ながらも、小澤中将登場。

宮里
「なんですか、その事情って？」

シルヴィア
「御家騒動だ。まあ、現国王が老衰し始めたからな…正妻の長男と、手を出したメイドが産んだ女子とのな」

横井
「それはまた、ドロドロな話ね～」

小澤中将
「何処にでもある話だがな」

山城
「福本元帥にそんな話はありませんでしたけど」

宮里
「逆にラブラブ話しかなかったよな」

杉下
「色々と伝説も作りましたからね。だから、『伝説の一期』と呼ばれたましたから」

シルヴィア
「…話が別の方向に流れておるぞ？」

山城

「本当だ……まあ、女子の方は担がれてと言う事もあるが、何より、現国王が長子よりそっちに王位継承権をやりたい様なんだとさ」

宮里
「なんで？」

シルヴィア
「長男は少しばかりおかしいのだ。どうおかしいかは解らぬがな」

横井
「それはそう思うのも無理ないわね」

宮里
「それで、日本…いや、３国はどちらに肩入れを？」

杉下
「それは、当人に会わないと解らない。外交は顔を見てやるものだからね」

山城
「まあ、そうですね」

とにもかくにも、最初は様子見になるだろう。
外交とはそんな物だ。

シルヴィア
「お、やっと順番が回ってきたか。入るぞ、山城」

山城
「了解。微速前進」

その頃……

「……お前の言った通りだな」

「はい、奴等は海軍国ですから、艦隊の1つや2つは簡単です」

「ふむ……あの艦隊が私と君の覇道を阻むか……種は先に摘むべきだな」

次号へ

１８４　順番待ち（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１８５　テロ＋クーデター＝戦争！？（前書き）

又も巻き込まれる恋人２人……シルヴィア大活躍？

１８５　テロ＋クーデター＝戦争！？

７月１６日（現世界７月５日）

……目の前で起きた事は、誰にとっても余りにも衝撃的だった。
寄港から一晩経過し、朝の１０時頃から国王への謁見となる。
その前に、先ずはお姿拝見……と、言う事でシルヴィアを伴い（と言うより連れ出され）、朝の国民へのバルコニー謁見に潜入した（？）。
そう……潜入したまでは良かった……国王が顔を見せた瞬間、バルコニーが爆発するまでは……

シルヴィア
「……う、嘘…であろう！？」

山城
「いや、違う。マジだ！」

突然の事にバルコニー前広場は騒然…いや、大混乱となった。
当たり前だ、国王が目の前で爆殺されたとなればだ。

「静まれ！　静まるのだ！」

騒がしい割りにはよく聞こえる制止の声が響いた。
しかし、何故か胡散臭い物を感じる。

「父は爆殺された！　これはルシリア派と手を結んだネイラーン・シリルティア王国・日本帝国による暗殺だ！」

…手が見え過ぎて、意図がバレバレである。
これには山城も内心苦笑するしかなかった。
しかも、彼らにとっての計算違いは……

シルヴィア
「貴様！！　シリルティア王国海軍軍人貴族の真ん前で宣戦布告とはいい度胸ではないか！」

……暗殺者にされてキレたのだろう、シルヴィアがこれでもかと叫んだ。
まあ…彼女の気持ちも解らんでも無いが。
と言うより、なんでシリルティア王国貴族がここに居るのかが不思議だろうが…。

シルヴィア
「だいたい、王子！　貴様こそ国王を殺したのではないか!?　陰険な巻き返しよりも、堂々と巻き返してみたらどうだ!!」

山城
「はあ～…」

下手したら戦争になるぞ……と言いたいところだが、もう先に向こうが言ってるから不可抗力…か？

「あの女を捕まえろ！！」

シルヴィア
「面白い！　図星のお前らに捕まるか！」

３人の衛兵が飛び掛かってきたのに、見る間に張り倒したシルヴィア。

山城
「シルヴィア、もう引き上げるよ」

シルヴィア
「なに！？　お主はあの王子を放置して置く気か！？」

山城
「出来る事ならしたくないけど、今は状況が悪い」

今のシルヴィアならあと１０人位なら余裕で張り飛ばすだろうが、ここには一般人が多い……下手に巻き込む訳にはいかない。

シルヴィア
「むう……仕方ない、引き上げるか」

その返事を聞くと山城はシルヴィアを連れ一目散に走って逃げる。

山城
「（まったく…念のためのヘッドセットが役に立つとはな…）こちら、山城。天城、聞こえるか？」

天城艦橋

全員
「「「「「「「「な、なにー！！！！？」」」」」」」」

山城
「本当ですよ。今頃、向こうはこちらに兵を向かわせていますよ」

杉下
「まさか、王子がそんな手を使うとは思いませんでしたね」

宮里
「それより、どうする？　戦闘配置にするか？」

山城
「小澤中将、どうされますか？」

小澤中将
「この状況では仕方あるまい。ただ、今はここから離脱する事が先決だ」

シルヴィア
「先程、両艦隊に確認したが、出港には時間が掛かるそうだ」

宮里
「石炭艦だから余計だな。うちの艦隊艦艇はエンジン装換したから直ぐに出れるけど（修理・点検・改装時に装換した）」

山城
「お陰で直ぐに砲塔回せるけどな…まあ、問題は…」

シルヴィア
「山城、その問題の敵だ。戦車２０輌前後…真っ直ぐこっちに向かって来ておる」

山城
「はぁ…言おうとした先にこれか…総員戦闘配置！」

後に……異世界初の対空戦と戦史上珍妙な戦いの幕開けだった……

次号へ

１８５　テロ＋クーデター＝戦争！？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１８６　戦車ＶＳ戦艦（前書き）

新米士官
「中国は自作のステルス戦闘機Ｊ（殲）２０を堂々と試験飛行させたそうだよ……」

福本
「…作者、今、核で全部吹っ飛んじまえ！…と思っただろ？」

新米士官
「知らな～～～い」

福本
（……色んな意味で大丈夫か？）

186　戦車ＶＳ戦艦

外国…しかも、敵対国になろうとする国で戦車を見る事になるとは山城も思わなかった。

宮里
「山城、車種解るか？」

山城
「ソ連のＴ２６歩兵戦車だ。確か最大装甲２５ｍｍ…９７式中戦車チハ初期型と一緒だ」

小澤中将
「主席参謀は戦車車種も知っているのか！？」

山城
「一般将校科はどの兵科に配属されても良いように、出来る限りの知識を叩き込まれます。何せ、イザとなれば陸戦指揮を執る場合も有りますから」

実際、その兵科を卒業した福本・マリーダ両元帥は陸戦隊と共に前線で戦ってもいる。

宮里
「あ～ぁ、たった２ｃｍ半の装甲じゃあ、副砲も使えないな」

山城
「元から使えないよ。奴ら、上手い事家を後ろにしてやがる」

シルヴィア
「砲を使えなくする腹か…ふん、忌々しい奴らめ！」

副砲が１４～１５，５ｃｍ砲となると、ドイツの８８ｍｍ高射砲同様に簡単に撃ち抜けるだろう……しかし、弾速から見て、そのまま車体を貫通、家に命中する可能性がある。
つまり、一発必中にして、確実に戦車のみを破壊しなければならない。
しかし、それは余りにも『砲』では難しい。

山城
「…宮里、機銃班も戦闘配置済みか？」

宮里
「あぁ、２５ｍｍ機銃にも４０ｍｍ機銃にも既に配置済みだ」

山城
「よし……このまま敵が更に近付くまで待とう…それしか無い」

宮里
「戦車相手に接近戦か…戦史上初の珍事として有名になるな」

山城
「あはは…もう少しマシな事で有名に成れないかな？」

宮里
「無理だろう」

こんな会話を交わしている最中にも、Ｔ２６戦車隊は進んで来る。

その内、威嚇目的か発砲し始めた。
だが、当たるのは船体に当たる…もちろん、貫通なんかしないが…。

シルヴィア
「…あいつらは馬鹿か？　あんな戦車の大砲で、数十センチの装甲を貫けると思っているのか？」

宮里
「隊長が馬鹿なんじゃないの？」

しかし、向こうも撃ってる内に解ったのか、砲撃は止んだ。
だが……相当近付いていた。

山城
「よし、今だ！　左舷全機銃座、撃ち方始め！！」

頃合いと見た山城が叫んだ。

ドダダダダダダダダ！
ドダダダダダダダダ！
ドダダダダダダダダ！
ダン！ダン！ダン！ダン！
ダン！ダン！ダン！

２５・４０ｍｍ機銃が一斉にその火力を敵のＴ２６歩兵戦車に集中させる。
しかも、狙いどころは戦車の弱点、真上の装甲だ。
２０～３５ｍｍ程度の機銃で撃ち抜ける程度の厚さしか無い装甲だから、４０ｍｍ機銃弾が命中した瞬間、確実に破壊出来る。

実際、爆発したり、そのまま沈黙する戦車が多くなった。
一方、向こうも主砲で反撃するが、船体に命中するばかりだ。
何せ戦車の主砲にだって上下可動に限界があり、駆逐艦主砲塔の様に７５度まで砲身は上げられ無い。
それに下から見上げて撃つのと、上から見下げて撃つのなら、上から撃つ方が有利であり、この場合は天城の機銃座が有利である。
この為、Ｔ２６戦車隊は不利であり、これに限定使用で高角砲が加わった為、ますます不利になった。
これには既に４輌に激減していた戦車隊は退散し始めた。

宮里
「案外、あっさりと引き上げたな」

山城
「まあ、あれで向こうも早々簡単に次を繰り出して来る事は無いだろうな。シルヴィア、両艦隊の様子を訊いてみてくれ」

シルヴィア
「わかった」

次号へ

１８６　戦車ＶＳ戦艦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

187　脱出戦1

戦艦天城艦橋

シルヴィア
「両艦隊はもう少しで出港出来るそうだ」

山城
「そうか…こっちは駆逐艦を先に出して先行警戒させてるよ。先ずは両国艦隊が出てもらった方がいいからね」

先に天城が出ては敵は大胆になるかも知れないが、天城が殿になった方が威圧が効く。

シルヴィア
「なら、あの王子の居る城に主砲を向けるか？」

山城
「いや…気持ちは解るけど、止めといたほうがいいよ」

…誤射したら後々面倒臭い……。

風華
「大変です、艦長さん！」

山城
「どうしました、風華さん？」

風華
「あ、あの…下に乗艦したいと人達が…」

シルヴィア
「この忙しい時に降伏の使者でも来たか？」

山城
「あの状況を見たら降伏を言いに来る奴はいないと思うけど」

そう言いながら、視線を左へ動かす……未だに戦車の残骸が置かれたままだ……。

宮里
「これ以上やったら、そのまま全面降伏になるぞ……向こうが」

山城
「…小澤中将、少し行って来ます」

とにもかくにも、話を聞かなければどうにもなりそうに無い。
艦橋を出た山城を追うかの様にシルヴィアも出て行った。

小澤中将
「やれやれ…あの2人の仲は良すぎだな」

宮里
「それがあの2人ですから。では、自分も配置に戻ります」

そう言うと宮里も持ち場に戻った。

上甲板まで降りた山城は直ぐに目的の人物達を見付けた。
既にタラップで上甲板へと上がって来ていた。
その対応をしているのは例の配属されたばかりのひよっこ士官である。
直ぐに彼を元の配置に戻らせ、交代した。

山城
「遅れて申し訳ありません。本艦艦長の山城です」

「カルロ・チェザーリです。貴艦乗艦の許可を願いたい」

多分、この年上の青年が名だけ名乗り、官職名を言わないのはそれ程有名だからだ。
しかし、山城はまだまだ他国の主要人物については疎い。

シルヴィア
（カルロ・チェザーリは元若手の有力商人だったが、爆殺された国王に気に入られてな…今は外交官をしておる）

側に寄ったシルヴィアが小言で呟いた。
山城にとっては助けになったが、相手が外交官としてなら、杉下大使の領分だ。

山城
「本艦への乗艦を希望されると言う事は亡命、あるいは国外退去の意思があると言う事ですね？」

チェザーリ

「…解釈は貴官の自由だ。しかし、私はルシリア様を守らねばならぬ」

確かに彼の後ろにフードを深々と被った少女が見える。
彼女が件の『ルシリア様』か…。

山城
「解りました、乗艦を許可します。シルヴィア、御二人を空き室に案内して」

シルヴィア
「わかっておる。さぁ、どうぞ」

案内をシルヴィアに任せ、山城は再び艦橋に上がると事の次第を小澤中将に報告した。
今更、厄介事が増えたところで、既に向こうが敵対行為をやっているから一向に構わないが、それでも報告は必要だ。
そして、そうやって走り回る内に天城は殿として港を出た。
既にあの出来事から４時間が経過していた。

山城
「やっとこさ、海に出れたが……いや～な予感が…」

オペレーター
「小澤中将！　艦長！　水上レーダーに艦影複数を探知！」

小澤中将
「予感的中だな。艦種は解るか？」

オペレーター
「弩級戦艦２、巡洋艦１、駆逐艦４……空母１！　また、対空レーダーにも反応、航空機２０機前後が接近！」

山城
「航空機は空母からでしょう。先ずは敵機迎撃に集中しましょう。敵攻撃隊を引き付けるため、進路を敵艦隊に回してよろしいでしょうか？」

小澤中将
「うむ、シリルティア・ネイラーンの艦艇を巻き込ませる訳にはいかんからな。全艦に通知、対空戦闘用意！　飛龍は迎撃機を展開！　艦隊は敵艦隊に進路を取れ！　両艦隊には現進路を維持する様に伝えろ！」

通信長
「了解！」

騒がしくなった艦橋内……しかし、山城・小澤中将はドンと構えている。

小澤中将
「そう言えば、君は艦魂が見えると言っていたな」

山城
「はい…それが何か？」

小澤中将
「酒が飲めるか聞いてくれ。この戦いが終わってからゆっくり飲みたい」

山城
「わかりました…では、本官は上に上がります」

次号へ

１８７　脱出戦１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

188　脱出戦2

戦艦天城防空指揮所

天城
「おぉ、艦長殿か。待っていたぞ」

防空指揮所に上がると天城が待っていた。
見ると、シルヴィアも既に上がって来ていた。

山城
「お待たせしました。これより対空戦闘の指揮を執ります」

シルヴィア
「やはり、お主がここに居らぬと安心出来ぬ」

天城
「私としては、艦長にベタベタと引っ付く大尉が居るのが危なっかしいと思うが」

シルヴィア
「あ～ま～ぎ～！」

山城
「2人供、戦闘前なんだから…」

通信長
『艦長、飛龍から今直ぐ上げれるのは3機しかありません！』

山城
「機種は？」

通信長
『烈風２機と紫電改１機！』

山城
「（大澤、岡田、ヴィクトリアの３人か…）よし、３機共、空母直衛に回そう」

シルヴィア
「良いのか？」

山城
「空母が着艦不能になったらヤバい。今は飛龍の防空だ」

通信長
『わかりました』

オペレーター
『艦隊、敵攻撃隊射程内に入りました！　また、敵機種は戦闘機Ｆ２バファロー、爆撃機デバステイターです！』

山城
「宮里、高角砲座の準備はいいか！？」

宮里
『既に完了だ。レーダー連動で敵攻撃隊に照準済み。装填も完了、さっさと撃とうぜ！』

山城
「わかった…操舵手、本艦は面舵を取れ。高角砲座は回頭後、各個に撃て！」

天城には両舷１２基の１０ｃｍ５０口径高角砲が装備されている。
その片方だけでも６基の高角砲が空を睨んでいる。
そして、天城が曲がりきった瞬間、待ってましたと高角砲が火を吹いた。

ドン！ドン！ドン！ドン！
ドン！ドン！ドン！ドン！
ドン！ドン！ドン！ドン！

ボン！ボン！ボン！ボン！
ボン！ボン！ボン！ボン！
ボン！ボン！ボン！ボン！

砲弾は敵機の鼻先で炸裂し、敵機をジュラルミンの残骸えと変えてゆく。
ギルバート諸島沖海戦から日本海軍によって使用され、第七艦隊防空最強伝説の立役者と言われたＶＴ信管が砲弾に装着されている。
結局、山城が射撃中止を出すまでに２４機飛来した敵機は８機に激減し、２５・４０ｍｍ機銃の射撃に絡め捕われたバファロー・デバステイターは次々に撃墜され、射撃が鳴り止んだ時にはバファロー・デバステイター各１機が逃げ帰って行く姿あった。

天城
「呆気無い終わりですな」

山城
「いえ、これで終わりな訳ありません。次が…」

オペレーター
『艦長！　第二次攻撃隊です！　数は３０…飛龍に向かっています！』

山城
「飛龍に警戒警報！　３機を誘導するんだ！」

飛龍艦橋

通信兵
「天城からです！　敵３０、本艦に向け接近！」

山口
「総員対空戦闘用意！　敵機１機、機銃弾１発たりとも近付かせるな！　勇艦飛龍の名を示せ！」

……と、勇まし宣言をする艦長の後ろで矢萩副長は天城からの情報をつぶさに確認していた。

矢萩
「御三方、聞こえていますか？　敵は飛龍に向かっています。全力

で迎撃して下さい」

大澤
『了解、副長。よし、行くぞ！』

岡田
『了解！』

ヴィクトリア
『了解ですわ！』

3人の返事を聞いた矢萩は受話器を返すと、今度は伝声管を使い砲術長と話す。

矢萩
「砲術長、対空戦闘用意は？」

砲術長
『用意は出来てますよ…ですが、戦闘機が3機で大丈夫ですか？』

矢萩
「大丈夫…あの3機には隠し玉があるから」

山口
「矢萩！　貴様も配置に就け！！」

砲術長
「…尻に敷かれてるな。副長」

矢萩
「あはは、副長だからね」

次号へ

１８８　脱出戦２（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

189　脱出戦3

飛龍～敵攻撃隊間上空

大澤
『まさか、異世界で空戦やるとはな！』

岡田
『仕方ないですよ。同じく転移兵器の様ですし』

ヴィクトリア
『何でも良いですから、さっさと敵を落としますわよ！』

大澤
『へいへい、初めての空戦でビビってチビるんじゃねーぞ』

ヴィクトリア
『な、なんですって！？』

岡田
『喧嘩なら地上に降りてからやって下さい。それと、今までの会話は全て録音されてますから』

大澤
『え、どう言う事？』

岡田
『山城先輩から、飛龍の変わりに録音装置を天城に搭載したそうで

す。だから、今までの会話は…』

大澤
『早く言えよ！』

山城
『何が早く言えって？』

大澤
『げぇ！　聞こえてたのかよ！？』

山城
『あぁ、まる聞こえだ。それと、楽しいお喋りも終わりだ。あと３０秒程で敵攻撃隊と接触する。以上だ』

確かに…３０秒どころか１５秒程で接触出来る位置に敵攻撃隊が見えた。

大澤
『よし、先ずはミサイルを先に使用してから銃撃だ。あと、俺と岡田は戦闘機に当たる。ヴィクトリアは敵爆撃機に当たれ』

ヴィクトリア
『ちょ、なんで…』

大澤
『爆撃機の狙いは飛龍だ！　それに烈風と紫電改だと性能が違うんだよ！　わかったなら指示に従え！』

ヴィクトリア

『…後で軍法会議に掛けてやりますからね！』

大澤
『…何の罪でだよ』

岡田
『はい、このお話はおしまい！　気付かれますよ！』

大澤
『よし、一斉発射！　てぇ！』

バシュウ！バシュウ！バシュウ！バシュウ！

1機に4発装着の51式対空ミサイルは干渉装置と熱感追尾システムを搭載している。
この為、発射後は敵の熱源を識別し、勝手に追尾する。
しかも、向こうにとっては奇襲だったらしく、そのままミサイルの直撃を受けて爆散する。

ようやく気付いたF2バファローが慌て大澤達の方に向かう。
その数9機…1発1機だった様だ。

大澤
『行くぞ、岡田！　バファローのオンボロめ！』

岡田
『了解』

スロットを叩き付けると猛スピードで敵のバファロー隊に突っ込む。
対しバファロー隊は烈風のスピードに慌てた。

それもそうだろう……Ｆ２バファローは９６艦戦と同世代だから、烈風は三世代後の機体だ。
スピード・性能・エンジン共にバファローを凌ぐ。
しかし、これは機体スペック上の話だから、使い方とパイロットの腕次第である。
しかし、ほぼ毎日烈風を飛ばしている２人には腕にも自信がある。
実際、２機の烈風に、バファローは数的優位を消され、逆に追い立てられる鼠と化していた。

その頃……烈風と別れたヴィクトリアの紫電改はデバステイター隊に向かった。こちらもやはり９機に減っていた。

ヴィクトリア
（落ち着いて…敵機には出来る限り近付き…引き金は瞬時に離す…）

呪文の様に呟きながら編隊後方斜め下方より近付く。

ヴィクトリア
「食らいなさい！」

ドダダダ！

短く一連射を加えると……

ドガーン！

１機のデバステイターが爆散した。
ようやく気付いた他機の旋回銃座が応射する。

しかし、スピードを活かして振り切る。

ヴィクトリア
「まだ時間は有りますね……何処までいけるかしら？」

１０分後……飛龍艦橋

レーダー員
「敵機５機、本艦に接近。高角砲射程内に入ります」

矢萩
「紫電改を退避させて下さい」

通信長
「了解」

山口
「高角砲、撃て！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

ドン！ドン！ドン！ドン！

飛龍に続き、鳥海の高角砲も火を吹く。
たちまち、ＶＴ信管の餌食になった。
ただ、１機のデバステイターが燃えながら飛龍に突っ込んで来たが、
駆け付けたヴィクトリアの紫電改が留めを刺した。

オペレーター
『敵第二次攻撃隊、バファロー3機を残し壊滅』

シルヴィア
「一難去ったな」

山城
「あぁ…小澤中将、本艦隊からも攻撃隊を出しましょう」

小澤中将
『同じ事を考えていたか…うむ、許可しよう』

山城
「ありがとうございます。通信長、飛龍に通信。攻撃隊用意」

通信長
『了解』

飛龍艦橋

山口
「なに、攻撃隊！？」

通信長
「はい。山城艦長、小澤長官からの指示です」

山口
「う～む…戦闘機の用意はしていたが…攻撃機の用意は……」

矢萩
「整備長！　流星隊の準備はいいですか！？」

整備長
『おう、紫電改は何時でも行ける。流星は魚雷装着機の最終調整中だ』

矢萩
「ありがとうございます！　艦長、攻撃隊は直ぐにでも編成出来ます」

山口
「……副長、貴様、無断で攻撃機の準備をしたな！？」

矢萩
「はい。山城主席参謀と小澤長官の性格から予想していましたから…それがなにか？」

山口
「……もう、いい……紫電改から前部エレベーターを使って上げろ！　攻撃だ！！」

次号へ

１８９　脱出戦３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１９０　脱出戦４

飛龍飛行甲板上

大澤
「えらく大騒ぎじゃないか？」

帰艦・着艦した飛龍の飛行甲板で烈風から降りた大澤が呟いた。

整備兵
「はい。天城から敵艦隊攻撃が指示されたそうです」

大澤
「だからか。さっきからエレベーターがチンチンうるさい訳だ」

確かにエレベーターからは準備の終わった紫電改が上がって来る。

岡田
「あ、自分達は出ない様ですよ」

大澤
「……なんで？」

岡田
「迎撃に出たからでしょう。矢萩副長の気遣いですよ」

大澤
「じゃあ、俺らは？」

岡田
「迎撃待機ですよ。つまり、スクランブル員」

大澤
「げえ～…嫌だな～」

そう話ながらヴィクトリアの紫電改の側を通る。

整備兵
「ヴィクトリアさーん、早く降りて下さーい」

大澤
「おい、ヴィクトリアがどうした？」

整備兵の呼び掛けに気付いた大澤が訊いた。

整備兵
「実は着艦してからずっとコックピットに籠ったまんまなんです」

大澤
「はあ？　何やってんだよ…どけ、俺が降ろす」

そう言うとコックピットに上がる。

大澤
「おーい、ヴィクトリア。さっさと降りろ。下に降ろせないだろ」

言いながら防風を開ける。

ヴィクトリア
「あ……」

大澤
「なんだ？　チビって出れないのか？」

ヴィクトリア
「ち、違いますわ！」

大澤
「じゃあ、どうしたんだよ？」

ヴィクトリア
「……あ、足に…その、力が入らない……のよ」

大澤
「まったく…世話の焼ける奴だな。機上戦死か気絶してるのかと思ったぞ。よいしょ…」

ヴィクトリア
「え？　え？　え……えぇぇ！！？」

ひょい…とはいかないが、ヴィクトリアをお姫様抱っこする大澤。

大澤
「岡田、俺はこのバカを医務室に届けて来るから、先に報告行っといてくれ」

岡田
「わかりました」

ヴィクトリア
「ちょ、は、離しなさい！　降ろしなさい！　あ、歩けます！」

大澤
「さっき足に力が入らないなんて言ったのは誰だ？　それと、歩けない女は背負うか、お姫様抱っこかのどっちかだ」

ヴィクトリア
「う、嘘を言わないで！　降ろしなさい！　バカ！　変態！　スケベ！　痴漢！　犯罪者！　巨乳好き～！」

……この一方的罵声は医務室まで続いたそうだ……。

既に甲板には紫電改が並んでいた。
制空部隊の１２機と爆撃部隊の１１機に分けられ、爆撃部隊は２５番（２５０ｋｇ）爆弾を装着している。
そして、紫電改隊が発艦すると、エレベーターが上げられ、次々に流星が飛行甲板に並ぶ。
流星隊も爆撃部隊１２機と雷撃部隊１１機の半々編成。
これが飛龍の出せる全力出撃である。
流星隊も爆撃部隊を先頭に次々と発艦した。

戦艦天城防空指揮所

オペレーター
『艦長、敵艦艦種の識別終わりました』
山城
「どうだ？」

オペレーター
『はい。戦艦は旧ソ連のガングート型、巡洋艦はマキシム・ゴーリキー型、空母はアメリカのレンジャーです』

山城
「おいおい…どれも日本海軍の餌食になった奴ばっかりだな……攻撃隊にも伝えてやれ」

オペレーター
『了解』

この情報が攻撃隊に届いた１０分後……攻撃隊は敵艦隊と接触した。
眼下にある艦艇の内、空母レンジャーには星条旗ではなくソ連の国旗が翻っていた。
既に山城主席参謀は来襲したＦ２バファローやデバステイターの星が『赤星』になっていたからわかっていたが……どうやらあのレンジャーと艦上機はソ連に丸ごと売られ、その後に転移した物だろう。
しかし、今やそんな事は関係無い。
『赤星』のバファローが紫電改隊に迫って来る。
制空部隊が増槽を捨てバファローに挑む。
爆撃部隊が緩降下で戦艦に向かう。
直衛隊のバファローが紫電改に一撃で殲滅され、紫電改が優々と飛ぶ。

爆撃部隊の接近に対空砲火が慌て放たれるが、見当違いの方向に飛んでしまう。そんな対空砲火を抜けた紫電改は爆弾を叩き付ける。いくら殴り合い専門の戦艦でも、どこもかしこも重厚な装甲に覆われている訳ではない。

実際、対空砲座や機関銃座の装甲は銃弾と砲弾片を防ぐぐらいしか出来ない。

これにより、幾つかの対空火器は沈黙した。

そして……遂に本星がやって来た。

次号へ

１９０　脱出戦４（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

191　脱出戦5（前書き）

新米士官
「本日は阪神・淡路大震災の日です。犠牲者のご冥福を願います」

福本
「作者は4歳だったんだって？」

新米士官
「あぁ、田舎だったから何にもなかったけど…そして、もう1つ。昨今巷を賑わしておりますタイガーマスクこと『伊達直人現象』」

マリーダ
「同じ直人なのに政治家の直人は頼り無いと言うか、なんと言うか…」

山城
「あれはダメですよ。今年一杯保つかどうか」

新米士官
「でも、『伊達直人現象』をニュースで聞くと、まだまだこの国も捨てたもんじゃないな～と思い、滅ぼしたくは無い！…と思うんですよ」

シルヴィア
「その滅ぼしたく無い国を滅ぼそうとするバカが国内に与党や社民党などに居るからな」

山城

「しかも、そこに過去に日本に苦杯を飲まされ国が暗躍するし…」

新米士官

「待っとれ中国政府・共産党！　今までの借りを百倍、千倍返しにしてやるからな！！」

191　脱出戦5

攻撃隊一番機

斎藤
「敵機無し…もう、紫電改隊は一仕事終わらせた様ね」

上空を優々と飛ぶ紫電改を見ながら斎藤隊長が呟く。あの様子なら、一撃で事が済んだのだろう。

斎藤
「爆撃隊は二手に分かれて爆撃せよ。雷撃隊は我に続け」

二手に分かれた流星隊は1隊はレンジャーに、1隊はガングート型…マラートに向かった。
もちろん、狙われた2隻は大慌てで回避行動をとった。
しかし、所詮は焼き付け刃のソ連海軍……あっさり未来位置を予測され、急降下爆撃隊に襲い掛かった。
付近の僚艦も必死に対空火器で援護するが、急降下爆撃体勢に入った爆撃機を阻止する方法は無い。
しかも、一度狙われると中々引き剥がせないのが急降下爆撃である。
そして……遂に捕まった。

ギューーン……

カチッ

ヒューーウ……

ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！

ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！

……当たり前の様に命中した。

何せ、マラートは２３ノット、レンジャーは２７ノット程度……しかも、操る人間の練度が低ければ簡単に捕捉されてしまう。

また、流星隊の抱えていた爆弾は５０番（５００ｋｇ）爆弾だから余計にダメージが大きかった。

マラートは衝撃により機関が故障、半速運転になってしまった。

そこに斎藤隊長率いる雷撃部隊が６機と５機に分かれて襲い掛かる。

レンジャーに５機、マラートに６機……第一次大戦レベルの艦艇なら魚雷一本で致命傷になりかねない。

しかし、半身不随のマラートと火災消火中のレンジャーには回避は不可能だった。

そして、それぞれが絶好の射点で魚雷を放った瞬間、全ての運命は決まってしまった。

ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！

ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！

ズシャーン！

斎藤隊長

「全機全弾命中ね。あれだと、戦艦もおしまいね」

急傾斜になる戦艦マラートと、既に舳先から沈んでいる空母レンジャーを見ながら斎藤は呟いた。

攻撃隊は２隻の沈没を確認すると意気揚々と引き上げた。

3時間後……天城防空指揮所

シルヴィア
「戦艦1、空母レンジャーの撃沈を確認か……期待通りか？」

山城
「期待通りだね。ただ、敵が来ている以外はね」

実は天城のレーダーは接近する敵艦隊を捉えていた。

小澤中将
『主席参謀、君は敵艦隊をどうする気だ？』

山城
「そうですね、本来ならここで引き上げますが……この後の事を考えて叩きましょうか？　長官のお望み通りに？」

小澤中将
『わかっているじゃないか。では、そうしよう』

天城
「小澤中将はやる気満々ですな」

山城
「後は陸軍に中将クラスの人間が入ってくれると助かるんですけどね」

まあ……無理な相談だが。

シルヴィア
「オンボロ相手か…チャイナー帝国の様に元首が乗っておらんかな？」

山城
「多分、その可能性は低いと思うけど…」

シルヴィア
「そうか…乗っていたら乗り込んで滅多刺しにして後悔させてやろうと思っていたのだが…」

天城
「…今日は一段と怖い様な気がするが？」

山城
「…まあ、自分の目の前で国を侮辱されたら、貴族としては許せんでしょうね」

目の前でやられたから物凄く気持ちは解るが……。

山城
「まあ……それは次の機会となりそうですから、今のところは抑えてもらうしか無いんですけど」

天城
「あっはっはっは、艦長殿。やはり、あなたは苦労する運命ですな」

山城

「主席参謀なんてのになってから、既に覚悟済みですよ…さて、作戦でも立てるか」

そう言うと手帳を広げて何かを書き始めた。
しかし、ふと、何かを思い出したのか顔を上げた。

山城
「そうそう、帰還したら艦魂の皆さんを集めれる様にして下さい。小澤中将が一緒に飲みたいそうですから」

天城
「ん、そうなのか？　なら、楽しみにしておこう」

接近するソ連艦隊に挑む日本艦隊。
どちらが勝つかは……まあ、見えやすい。

次号へ

１９１　脱出戦５（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１９２　脱出戦６

２時間後……天城防空指揮所

オペレーター
『艦長。敵艦隊捕捉しました』

山城
「わかった…宮里、そっちは？」

宮里
『データを射撃指揮装置に入力中だ。後少し待て』

山城
「了解……さて、どうなるかね？」

接近して来るガングート型戦艦以下マキシム・ゴーリキ型と駆逐艦の艦隊……戦力は同等、性能・練度はこちらが上と考えるなら余裕だが。

宮里
『主砲射撃準備完了。撃ち方よろしい』

オペレーター
『主砲有効圏内です』

天城搭載の４１ｃｍ５０口径砲は従来型の第二次大戦時よりも射程距離・貫通能力が向上している。

何せ、練習戦艦陸奥も同様の主砲を搭載しているからだ。

小澤中将
『山城艦長…砲戦始め』

伝声管から小澤中将の声が聞こえてきた。

山城
「全砲塔撃ち方始め！！」

ズドドーーン！！

天城の主砲弾がガングート型戦艦に向かって飛来する。
そんな天城の直ぐ横を鳥海・磯波・浦波・綾波・敷波が通過する。
敵快速艦艇に対抗する為に前に出た。
戦艦同士は天城が、快速艦艇は鳥海以下駆逐艦の仕事だろう。

戦闘は一方的だった。
ガングート型戦艦……実はガングート……は２３ノットで必死に接近したが、主砲が３０，５ｃｍ長砲身砲三連装４基１２門では勝負にならなかった。
実際、指揮を執った山城が「珊瑚海海戦のアメリカ戦艦部隊の再現だった」と後に語るくらいの展開になった。
アウトレンジで砲撃する天城の４１ｃｍ砲弾の着弾数が１２発目を数えた時には、昔の扶桑型の様だった艦橋は折れ、主砲塔も全て破壊されていた。
さすがの山城も、介錯するかを小澤中将に訊いた……結果、放置しても沈むので見送った。

駆逐艦は更に戦う気はなかったらしく、こちらの４隻が接近すると逃げた……当たり前か？
最後にマキシム・ゴーリキは鳥海と撃ち合った。
果敢にも最大射程で撃ったマキシム・ゴーリキだったが逆に射程を知られ、鳥海の２０，３ｃｍ主砲１０門のアウトレンジ射撃を見舞われる事になった。
何せ相手は格上の正真正銘の重巡洋艦……しかも、砲塔などを現在の日本海軍が採用している複合装甲主砲塔である。
ただ……マキシム・ゴーリキの運命を変えたのがこの砲戦だったのは皮肉である。
結局、マキシム・ゴーリキは打ち負けた。
ただ、総員退艦したマキシム・ゴーリキは船体下部に何の被害も無かった為、まだ浮いていた。

シルヴィア
「あの巡洋艦はまだ浮いているな…どうする？」

山城
「介錯するのは簡単だが……うん」

納得した様に頷いた山城は、伝声管で意見具申した。

山城
「小澤中将。マキシム・ゴーリキですが、このままも勿体無いので曳航してはどうでしょうか？」

小澤中将
『あのマキシム・ゴーリキをか？　大丈夫なのかね？』

山城

「駆逐艦は追撃しては来ないでしょう。また、今のところ、潜水艦はいません。どうでしょうか？」

小澤中将
『……わかった。鳥海に曳航する様に伝えよう』

山城
「ありがとうございます」

数時間後……マキシム・ゴーリキを曳航する鳥海に合わせながら、２０ノットで進む艦隊。
すっかり日も暮れた海を、ネイラーン・シリルティア両王国艦隊と合流する為に進む。

シルヴィア
「しかし、本当に今日1日でこれ程の事が起こったのだろうか？」

天城の艦橋でポツリと呟いたシルヴィアに山城が答える。

山城
「まあ、現実の事ではあるだろうな……余りにも急展開過ぎて付いて行けて無いんだろう」

そう言う山城も多少付いて行けて無い……まあ、それは内緒だ。

山城
「それよりも、これからの事が大変だよ。多分、この時点で交渉による打開は無理……そのまま、戦争に直行だな。準備期間はいるけ

ど」

シルヴィア
「……何故か我々が行く所行く所で騒動が起きてないか？」

山城
「作者のせいだ。さて、どうなるか……」

また野党（特に社民党）が騒ぎそうだ……福本次官は大丈夫かな？
（色んな意味で）

次号へ

１９２　脱出戦６（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

193　正にこれから

数時間掛けてネイラーン・シリルティア両王国艦隊と合流した。
既に両艦隊は本国との連絡を取っていた。
もちろん、日本艦隊も連絡を取っている。
そして、日本海軍及びネイラーン・シリルティア両王国海軍より届いた命令は簡単明瞭だった。
内容は……『ルシリア様を一刻も早く届けよ』……だった。

小澤中将
「当然と言えば当然の命令だな」

山城
「はい…多分、この次の催促は政府になるでしょうね」

送られてきた電文を見ながら、『主席参謀』の山城と小澤中将が見ながら話していた。

山城
「『一刻も』となると、どの艦か艦隊より別れて先行する事になりますが？」

小澤中将
「艦隊全艦だと、潜水艦が出た時に厄介だからな……で、君の意見は？」

山城
「杉下大使も含めて皆さん鳥海に移ってもらい、鳥海で送り届けるのがベストだと思います」

小澤中将
「ふむ…君もまだまだ青いな」

山城
「青い…ですか？」

小澤中将
「あぁ、今回は次善の策だ。天城に行ってもらう」

山城
「天城にですか？　確かに天城はこの前の点検時に機関を装換して一割増しは出ますけど…」

小澤中将
「一刻も早くならば、天城の方がいい。今から鳥海に人を移し、曳航しているマキシム・ゴーリキを鳥海から天城に代えている時間が惜しい。ここは司令部要員だけ移動しよう。それに…」

山城
「それに？」

小澤中将
「杉下君や君、彼女を先に帰らせた方が状況の説明がしやすいだろう？」

山城
「ですが、そうなりますと中将も鳥海に移る事になりますが？」

小澤中将
「なに、別に問題は無い。元々、鳥海に乗っていたのだからな。古

巣に戻る様なものだ」

山城
「……わかりました。そうしましょう。ヘリの用意を致します」

既に夜になっていたが、照明をフル使用して飛龍からのヘリを着艦させた。
小澤中将の鳥海乗艦確認後、天城は速度を上げた。

山城
「こちら、艦長の山城だ。これより本艦は上層部の指示に従い艦隊より先行する事となった。戦闘で疲れているとは思うが、これより厳重警戒態勢にて航行する。手空きの者は交代して休む様に。以上だ」

艦内放送マイクを元に戻すと、ドカリと椅子に座った。

山城
（さて…33ノットで航行するから、行くときの二倍以上だな。多分、1週間も掛からず……いや、3日程で到着できるかな…）

椅子に座り考える山城。
その先にはまたゴタゴタに巻き込まれるであろう自分の姿が浮かんだ。
しかしだ……そんな物はとうの昔に分かりきった事だった。

その頃……

「…逃がしたのか？」

「はい、敵の練度は高く、艦隊は壊滅しました」

この報告を聞いた男は慌てだした。

「どうするのだ！？　国民の目の前であんな事を言ったのだぞ！」

「落ち着きましょう殿下。今はまず、戴冠式の方を…」

「う、うむ……わかった」

頷くとその男は去って行った。

「……バカめ、私の言う事を素直に聞くとは…まあ、精々利用させてもらうか」

心の中で大笑いするこの男の正体……名はヨシフ・スターリン。

前居た世界で共産主義の名の下に破壊と混乱を巻き起こした男は、

相変わらずこの世界でも破壊と混乱を巻き起こすのだった。

次号へ

１９３　正にこれから（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１９４　賽は投げられる（前書き）

昨日更新出来なくて申し訳ありません。
レポートやら何やらで更新出来ませんでした。

１９４　賽は投げられる

７月２０日（現世界７月１１日）

山城の予測通り、天城は３３ノットのフルスピードでシリルティア王国に辿り着いた。
そして、到着早々に杉下大使とシルヴィアはルシリア様とチェザーリ卿（呼び捨ても何か嫌だから山城が勝手に決めた）に付いて行ってしまった……まあ、当然と言えば当然だが……。
しかし、山城は艦長の仕事がある為、乗員の休息の用意と機関整備等の後始末をしてから、やっと休息である。
しかし、そんな時間は山城に無い事は本人自身が解っていた。
何故なら……予測通り、あの人が杉下大使と共に天城へとやって来た。

福本（伊吹）
「よう、急がせて済まなかったな」

山城
「下手に勝機を逃すよるはマシですよ。まあ、あなたが出て来たから余計かも知れませんが」

福本（伊）
「そうかそうか、やっと私の偉大さが…」

杉下

「福本次官、そんな暢気な事を言っている暇は有りませんよ？」

山城では無く杉下にツッコミを入れられた福本次官。

福本（伊）
「…はあ～…さて、立ち話もなんだ、艦長室に行くか」

山城
「そうですね（あ、そう言えば、今頃は……）」

天城艦長室

山城
「失礼しま～す」

福本（伊）
「なんでお前の部屋なのに気を使う？」

山城
「色々あるんです」

天城達が居ない事を確認し、山城は隅に置いてある折り畳み机・椅子を拡げる。

福本（伊）
「準備いいな」

山城

「案外、人が来ますから」

福本（伊）
「あぁ、あのか…」

山城
「次官、それ以上言うと、寿命が縮まりますよ?」

福本（伊）
「……」

気のせいか、山城の背後から異様な威圧感が……

福本（伊）
「お前、その内何かに化けるんじゃないか?」

山城
「なににですか」

呆れながらインスタントのレモンティーを入れる山城。
この会話に話が先に進まないと見た杉下が口を開いた。

杉下
「状況と経過は私とシルヴィアさんが既に話しました」

山城
「なら、何故福本次官はこちらに?」

福本（伊）

「君はどう読んだのか気になったのさ」

山城
「只のトチ狂い王子による愚行……ですね」

福本（伊）
「果たしてそうかな？」

山城
「……と、言いますと？」

福本（伊）
「聞いた話だと、王子は精神的・肉体的に惰弱だそうだ。そんな人間が自分の父親を公衆面前で爆殺なんておかしいと思わないか？」

山城
「ですが、実際に起きてますよ？」

福本（伊）
「古今東西、御家騒動や後継者争いはあった。それこそ、暗殺、闇討ち、不可解な死…色々あるが、いきなり親父を爆殺なんて例は無い……耳元で囁いた人間がいる」

まるでお見通しとばかりに語る福本次官。
やれやれと思いながら口を開いた。

山城
「今回の戦闘で戦ったのは全て旧ソ連軍兵器、あるいは赤星の描かれた兵器でした。これらから推測するに敵はソ連軍です。そして、

彼等は何者かの命令を受けていた様で、それほどではありませんが統率されていました…これらから導き出した答えは1つです」

福本（伊）
「……なんだ？」

山城
「敵はスターリンです。そうでないと色々と説明出来ません」

福本（伊）
「根拠はあるのか？」

山城
「いえ、勘です」

……数刻の沈黙が部屋を支配した。
しかし、福本次官のニヤリとした顔が空気を変えた。

福本（伊）
「なるほど、良い読みだ。さすが、主席参謀！」

山城
「種明かしぐらいして下さいよ、次官」

杉下
「さっき、チェザーリ外交官と話をしている時にスターリンの写真を見せたんだ。先方はびっくりしていたがね」

なるほど…既に解っていらしたのね。

山城
「となりますと、どうします？」

福本（伊）
「君の…シルヴィアが言っていた通りだ。『侮辱されて黙ってられるか！』だな」

山城
「まあ、シルヴィアは今回の事に関しては、あの王子をたこ殴りにする気満々ですから…」

普通、自分の国が侮辱されて怒らない人間はいない（今の日本は知らないけど……）。

福本（伊）
「それにだ…奴らはアンデュラス王国にも喧嘩を吹っ掛けたらしい」

杉下
「外交点数は落第点ですよ。外交の場で敵を増やすのは愚策ですから」

山城
「……スターリンもバカだな」

完全にこの世界と周辺諸国を嘗めてますね。

福本（伊）
「この為、アンデュラス王国も参戦する。ネイラーン・シリルティア王国も準備があるから2ヶ月程の準備期間がいるな」

山城
「2ヶ月後…ですか…」

まさか……この2ヶ月の準備期間が山城達にとって幸運を呼ぶ事になるとは誰も気付いていなかった。

次号へ

１９４　賽は投げられる（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１９５　来客は吉

２ヶ月の準備期間……これは余りにも間延びしていて逆に敵の防備を固める時間を与えているのかと思われるが……実は違う。
相手がスターリン＋近代兵器を持つとなると、念入りな準備が必要となる。
今のところ確認されているのは戦車、航空機、艦船である。
この３つはある意味厄介である、特に海上戦力は潰したとは言え、海中戦力……潜水艦が確認されていないだけに厄介だ。
第一次大戦でＵボートの雷撃で戦艦が撃沈されている事から見ても、対水雷防御が低い両王国海軍戦艦には脅威だ。
まあ、幸いな事に８００トンクラス駆逐艦が完成し、爆雷も搭載された事から、やっとこさ対潜攻撃が可能になった事ひ嬉しいニュースだ。
また、両国海軍も新型戦艦を完成させ、今回の戦いに投入する腹である。
その駆逐艦・戦艦の錬成、及び編成に時間が掛かるのが原因の１つ。
また、大隅（輸送艦おおすみ）に乗っていた陸上自衛隊も総動員される事になり、その下地作りも忙しい。今回は戦車などの重装甲車両を動員し作戦を行う為、それらの準備も必要なのである。
それに艦船に関しても、曳航されたマキシム・ゴーリキーの修理・改装の具合と、神戸のドックに入渠中のワスプ・インディアナポリスの修理・改装のメドがたった為、参加させる事になり、その錬成と編成も必要となってきたからだ。
それと、参加する事になったアンデュラス王国も陸上部隊派遣が決定し、アンデュラス王国軍との擦り合わせも必要……理由を上げれば山が１つ簡単に出来てしまうだろう。
そんな事態に１つだけの問題……陸上自衛隊・日本陸軍達の上級指揮官がいなかった事だった……。

7月27日（現世界7月16日）

山城
「う～…頭が痛いな～」

シルヴィア
「陸軍の事で頭を悩ますとは…大変だの」

山城
「いっそのこと、福本元帥や山本元帥みたいに逆立ちを…」

山城（戦艦）
「それは…あの御二方の思考体形が特殊と言うかなんと言うか……まあ、違いますからな」

山城
「…ですよね～～」

山城の悩みを山城が聞いて……いや、（人間）・（戦艦）と付けるべきだ。ややこしくなる。

シルヴィア
「まあ、今回は本格的動員となるからな…悩むのは当たり前か」

山城
「くそ～～、どっかの世界から指揮官と輸送船と兵隊が転移してく

れれば楽なのに～～！！」

愛宕
「う～ん…それは高望みだと思うよ。山城君」

シルヴィア
「そんな上手い話は無いぞ。山城」

山城の恋人と山城の恋人がツッコミを入れる。

山城
「両方で入れなくても……」

風華
「大変です！　艦長さん！！」

慌てながら艦長室の入って来た風華に４人の視線が集まる。

山城
「どうしました、風華さん？」

風華
「はい。港の方からおかしな船が入港許可を求めていると連絡が…」

シルヴィア
「おかしな……船？　どう、おかしいのだ？」

風華
「どの船も入港予定に無いばかりか、船名登録されていないそうです」

山城
「船名は？」

風華
「確か『神州丸』『金華丸』『佐渡丸』『香椎丸』『ありぞな丸』と名乗っていますが…」

山城
「……待てよ……どっかで聞いた事がある様な……」

山城（戦艦）
「……はい、私も記憶にある名前ですな…」

山城
（……そう言えば、士官学校時代に陸軍特殊船舶の名前を調べると言う宿題が出て、調べた中にあったな……確か……）

そう思いながら、頭の中をひっくり返し……

山城・山城（戦艦）
「「あぁ！！！！」」

ようやく導き出した2人にに周りは疑問符を浮かべた3人。

山城
「風華さん！　今すぐ入港許可を出して下さい！　責任は私が取ります！　急いで！！」

風華

「は、はい！」

次号へ

１９５　来客は吉（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１９６　仁将にして名将（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。
しかし、いよいよ、陸軍部隊の指揮官が決定です。

１９６　仁将にして名将

５隻の出現を知った山城は駐屯地を飛び出し、馬に飛び乗ると全速力で駆けさせた。
その後ろから、事情は掴め無いながらも追い掛けるシルヴィア。

シルヴィア
「待て～～い！　先ずは事情を説明してからにしろ～！」

山城
「後でちゃんと説明するよ～」

……端から見るとなんとも暢気な光景だが、本人達は至って真面目である。
そのまま馬を走らせ、港に着くと、港湾事務所に入ると日本人担当者に話を付けてから交通艇に乗り込んだ。
そして、山城は神州丸の上甲板へとタラップを使い上がる。
直ぐに数名の陸軍士官（しかも明らかに歳上）が見えたが直ぐに山城は目的の上級将校を見つけ出した。
既に数名の人間を候補に思い浮かべていただけにその人物の顔は候補の１人であった。

山城
「今村均閣下とお見受け致しますが、お間違い無いでしょうか？」

そう……神州丸は陸軍船舶でも後に『強襲揚陸艦』の艦種を生み出すきっかけとなった艦だ。
つまり……軍団級指揮官が乗っていておかしくは無いのである。

参謀
「そんな事があるか！！」

……いったいこの言葉を何度……音量その他の違いはあるが……聞いただろう？
まあ、今や慣れたから右から左に受け流す…伊達にお偉いさんの間を往復はしていない。
そして、隣に居るシルヴィアも始めからずーと黙っている。
やっぱり……慣れたからかな？

参謀
「貴官は異世界と言うが、ちらほら日本人の顔が見受けられる！これはいったいどう説明する！」

山城
「それは、最近政府の許可もあり、特定の人間がここに出入りしているからです。お疑いなら、後で証拠をお見せしますが？」

実際、駐屯地に往復する時間さえあれば証拠はいくらでも持って来られる。

今村中将
「…政府の許可と言ったが、君達海軍はどこから命令を受けているのかね？」

今まで黙っていた今村均中将が口を開いた。
これを聞いた山城、さすが今村中将と思った。
なぜなら、先程の発言は海軍の内部事情に多少なりとも通じていな

いと言え無い事だ。

山城
「はい、我々は国防省海軍部から命令を受けてます。陸軍は陸軍部から命令を受けてますが、普段は国際法枠内のフリーです」

参謀
「な、こ、国防省だと?」

山城
「はい。戦後の４６年に首相に就任した山本五十六元帥以下、陸海空の超党派による改革で統合されました」

参謀
「馬鹿な…陸軍が海軍と手を結んだのか?」

山城
「いいえ、３９年の支那事変終結と日英独対ソ同盟、ノモンハン事変によるソ連との衝突、アメリカの強硬姿勢により、双方の対立は百害あって一利無しとなり、陸海軍が協力関係を構築したからです。国防省の設立は予算の安定確保とこの協力関係を崩さぬ為になされたのです」

山城はきっぱりと言い切った。
これには自信がある。
何故なら、その当事者である福本元帥に直接（笑い話も加えながら）聞いた事だからだ。

今村中将
「それで…戦争には勝ったのかね?」

山城
「４３年にアメリカと戦いましたが、半年で大勢を日本優位に決めました。４４年から４５年８月までソ連と戦い、モスクワに入っています。ですが、ここにいる現地駐留軍の構成員は我々の様に勝った世界からの転移、負けてから６０年後の世界からの転移、戦中からの転移……と形は様々です」

参謀
「馬鹿な…戦争に負けて、日本が残る筈が無い！」

山城
「事は至極簡単です。アメリカはソ連の恐ろしさを戦後になって漸く気付き、日本を基地化かしました。だから生き残りはしたが、牙は奪われた。今や、国防に金をかけると反対する共産思想家兼政治家が居るそうですから」

……嘘は言っていない。

今村中将
「国防に力を入れぬとは愚かだな……さて、そうなると、我々はどうなるのかな？　武装解除かね？」

山城
「いえ。それどころか、今村閣下、あなたには陸軍部隊の指揮官に成ってもらいたいのです」

今村中将
「…どう言う事かね？」

山城
「現在、ある国が日本及びその同盟国に対し喧嘩を吹っ掛けまして…緊張状態であります」

参謀
「それとこれと何の関係がある？」

シルヴィア
「その国の指導者の影にスターリンが居る」

漸くと言うべきか……シルヴィアが言った。

今村中将
「そうか…そう言う事か…」

山城
「はい。ですから、指揮官を引き受けて頂きたい」

今村中将
「…それについては即答は出来ない。考えさせてほしいのだが？」

山城
「わかりました。時間はまだまだあります。ただ、神州丸以下４隻は軍港の方に回航します」

今村中将
「わかった」

ちなみにこの1週間後、本人承認で今村中将が派遣軍指揮官に就任している。

次号へ

１９６　仁将にして名将（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１９７　潜水艦対策

８月５日（現世界７月２４日）

陸軍部隊指揮官に今村均中将が就任し、やっと陸軍派遣部隊の指揮系統が完成した矢先、前々から懸念されていた事態が発生した。
それは……

天城艦橋

山城・シルヴィア
「「なに、潜水艦の襲撃を受けただと！？」」

入ってきた報告に２人同時に叫ぶ。
報告に来た通信兵はこの叫びに圧倒された。
報告によると、襲撃されたのはシリルティア王国船籍の貨客船『タイヨウ（太陽）丸』、今年完成・初航海した新造船である。
ただ、今回の場合は船長が慎重な人間で、イザと言う事に備え見張りの数を多くしていたから、魚雷の発見が早く、回避後全速力で逃げたから難を逃れた様だ。

山城
「ドイツの群狼作戦じゃなかったから良いようなものの、遂に向こうも無制限攻撃に出たか」

シルヴィア
「通商路攻撃とはな……ふん、今度は心理戦できたか」

海図に襲撃地点を示す×印を付け、穴が空くかとばかりに睨む山城とシルヴィア。
この為か、余り近くに人が寄り付かない。
まあ、『潜水艦襲撃』の報告に騒がしくなったから暢気に近付くなんて無理だが…。

小澤中将
「真剣に成るのは良いが、近付き難い空気にするのはどうかと思うぞ、２人共」
報告を聞いて艦橋へと上がって来た小澤中将が２人に言った。

山城
「……そう成ってました？」

小澤中将
「あぁ、成っていたな。それで主席参謀、君はどうする？」山城
「海自の滝口少将に連絡して金剛、足柄ＩＩ（２）、日向、伊勢を出してもらって下さい。こちらからも磯波、浦波、綾波、敷波を出します」

小澤中将
「特型の４隻の対潜能力は大丈夫なのか？」

山城
「最新のソナーと対潜ロケットやヘッジホッグ等の対潜兵器を搭載しております。大丈夫ですよ」

それに日向・伊勢の対潜ヘリを使えば更に広範囲を探索できる。
そうすれば大抵の潜水艦は見付ける事が出来るだろう。

小澤中将
「わかった、そうしよう…山南少将には伝えなくていいのか？」

山城
「自分が伝えておきます。もしかしたら、愛宕と龍驤も参加するかもしれませんし」

シルヴィア
「それに比べれば、我が海軍は漸く爆雷とソナーを備えた８００トンクラスの駆逐艦が出来ただけか」

山城
「それでもまだいい方だと思うよ」

実際、爆雷やソナーが活躍し始めたのは第一次大戦のＵボートが暴れてからだ。そんな中、未だに潜水艦が出現していない時点で対抗出来る兵装を搭載しているのはある意味英断である。

山城
「さて、通信長。扶桑に回して」

……結局、愛宕・龍驤を加えた１０隻の対潜チームが出撃した。
しかし、これでは港湾防衛に影響があると考えた山城は直ぐに対策案を福本次官に上申した。
まあ、それでも多少時間は掛かるだろうが……。

翌日……

山城
「……だからって、これは出来すぎだろう！！」

昨日、上申案を出したら、翌日には来てると言うおかしな話……
…いやいや、待て待て、出来すぎだ。

シルヴィア
「……一体何を要請したのだ？」

山城
「８００トン海防（護衛）艦１０隻、駆潜艇１８隻、哨戒用航空機１８機……急いでとは言ったが、明日持ってこいなんて言ってねーぞ！」

壁に凭れながら叫び山城。その時、１人の通信兵が国防省からと通信文をシルヴィアに渡した。

シルヴィア
「何々…『やあ、シルヴィア。山城は上申した物が届いて驚いているだろうから、君に伝えておく。実は、こんな事もあろうかと潜水艦が出てきて良いように建造・完成・錬成していたのがあるから、送っておく。じゃあ、あと、よろしく！　海軍次官』……だ、そうだ」

山城
「……あの人は宇宙戦艦ヤマトの真田さん気取りかー！！？」

もう既にツッコミとかのレベルには無いがツッコミをかます山城だった。

次号へ

１９７　潜水艦対策（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１９８　謎の潜水艦（前書き）

今回は十二試艦上戦闘機さんの要望がネタ元です。
十二試艦上戦闘機さん、ありがとうございます。

１９８　謎の潜水艦

８月９日（現世界７月２９日）

海防艦・駆潜艇・対潜哨戒機『東海』の増援を受けて３日が経過した。

この間、日本海軍は全力で潜水艦にあたり、期待以上の成果を出した。

６日…つまり、増援が到着した日…の１０時に哨戒中の龍驤のヘリが潜水艦を確認、愛宕の潜龍対潜ミサイルにより撃沈、浮き上がった海図などを調べた結果、ソ連潜水艦とわかった。

その数時間後、今度は通商路哨戒中の金剛が潜水艦を発見、アスロックで撃沈。

そして、深夜に哨戒中の綾波が浮上中のソ連潜水艦を発見し、主砲・機銃を動員して仕留めた。

その他、伊勢の短魚雷、日向の対潜ヘリ、海防艦の爆雷などで計８隻の潜水艦を狩り上げた。

また、単独航行の民間船に海防艦や付近を哨戒中の艦艇の護衛が付く様になり、３日間で襲撃を受けたのは最初のタイヨウ丸、８日の貨物船ジンリュウ丸（浮上砲撃を受けるも通報を受けた足柄ＩＩが撃沈）、ネイラーン王国船籍の客船クイーン・メアリー（魚雷一本が命中するも、信管不良で爆発せず。襲撃艦は駆け付けた東海３機の爆雷で撃沈）の３隻に留まった。

また、別途報告で、７日にネイラーン王国海軍８００トン駆逐艦『ハント』が爆雷によりソ連潜水艦を撃沈したと証拠写真付きで報告された。

つまり、被害は客船一隻の被雷のみ、逆に損害は９隻……とソ連側には割に合わない事になった。

そんな中……

イージス艦足柄ＩＩ艦橋

ソナー員
「スクリュー音感知！」

佐々木大佐
「潜水艦か？」

ソナー員
「はい、ですが……」

佐々木大佐
「どうした？」

ソナー員
「アンノウン（正体不明潜）のパターンはアメリカのガトー級です」

佐々木大佐
「ガトー級！？　間違いないか？」

ソナー員
「システムもそう言ってます。日本海軍から提供されたソフトですから」

佐々木大佐
「うーん…なぜ、こんな海域にガトー級がいるんだ？」

ソ連潜水艦なら大いに解る……しかし、アメリカの潜水艦がなぜここに存在する？

副長
「艦長、どうします？」

佐々木大佐
「……暫く様子を見よう。我々の受けた命令はソ連潜水艦の排除だ。アメリカの潜水艦排除の命令は受けていない」

もちろん、敵対する素振りを見せれば容赦無しにやるつもりだが……。

ふと、佐々木大佐はある事を思い付く。

佐々木大佐
「天城の小澤中将とあの艦長に報告しておこう」

副長
「…大丈夫ですかね？」

佐々木大佐
「大丈夫だろう。まさか、アメリカ艦だからと言って、攻撃しろなんて言わんだろうし」

戦艦天城艦橋

山城

「足柄から？　アメリカのガトー級が？　なんじゃそりゃ？？？」

天城の艦橋で報告を受けた山城は、頭に疑問符を浮かべた。

向こうでアメリカにレンドリースされた？……いやいや、わざわざ持っている潜水艦をレンドリースする訳ない……ならば、こちらで入手した？……しかし、ソ連製とアメリカ製の部品違いはどうする？…逆に使いにくい……ならば……間違って転移したか？

シルヴィア

「どうする？　足柄は様子を見るそうだが？」

……後方での判断は危険だ。もし、他国海軍の持ち物であった場合がある。

山城

「…様子を見よう。俺は扶桑の小澤中将、山南少将の所に行って来る」

シルヴィア

「わかった。気を付けて行ってこい」

次号へ

１９８　謎の潜水艦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１９９　潜水艦の正体（前書き）

更新遅延、申し訳ありません。
本当は今号が２００話なのですが、次号に２００話記念をやります。
お楽しみに！　更新は……何時だろう……

１９９　潜水艦の正体

ガトー級のスクリュー音を感知した足柄ＩＩはそのまま追跡を続けていた。
と言っても堂々と後ろから追い掛けるのではなく、ソナーを使い、探知範囲外から出ない様にしているだけなのだが……。
しかし、それは唐突だった。

ソナー員
「艦長！　新たなスクリュー音を感知！　今度はソ連の潜水艦！」

佐々木大佐
「距離は？」

ソナー員
「本艦からは８０００、前のガトー級からは１３００！」

佐々木大佐
「アスロック用意！　間違えてガトー級に当てるな！」

副長
「了解！」

ソナー員
「か、艦長！　ガトー級から発射管注水音！」

佐々木大佐
「なに！？　やはり敵だったか！？」

ソナー員
「…いえ、注水したのは前部です！　あ、シュート！」

ガトー級から間髪入れずに発射された魚雷に、攻撃されたソ連潜水艦はようやく気付いて逃げようとしたが……魚雷は二本とも直撃したソ連潜水艦は沈んだ。

ソナー員
「敵潜水艦…圧壊しました」

佐々木大佐
「…ガトー級の正体を確かめるか…ピンを打て」

副長
「了解」

数時間後……天城艦橋

山城
「で、浮上したガトー級を調べてみたら、身内だったって訳ね」

先程、足柄ＩＩから届いた報告を聞いた山城が呟いた。
ピンとそのモールス信号を使い浮上したガトー級潜水艦は、艦はアメリカ製だったが、乗っていたのは日本人…しかも、海上自衛隊の人間だった。
潜水艦は旧ガトー級潜水艦ＳＳ２６１『ミンゴー』……今はＳＳ５

０１『くろしお』で、哨戒任務中にいつの間にか転移したらしい。

シルヴィア
「『くろしお』については足柄ＩＩに記録があったそうだ。記録によると１９５５年８月１５日にアメリカから貸与され、１９７０年８月１５日に返還されておるそうだ」

山城
「確か、潜水艦の耐用年数は２５年、２０年ぐらいになると検査され、訓練用に回されるって教官から聞いたけどな…」

まあ、今の潜水艦は知らないが…。

山城
「これで９隻目か……ふむ…」

そう呟きながら山城は壁に貼っている、『潜水艦関連海図』に新たに〇印を付けた。
ちなみに印分けは、襲撃が×、発見が△、撃沈〇がである。
今のところ、襲撃の×印が３つ、撃沈の〇印が８＋１つである。
そして、新たに☆印が書かれ、下には『くろしお・転移』と記した。

シルヴィア
「襲撃３回、撃沈９隻……割に合わぬ話だな」

山城
「１回襲撃する為に３隻が沈むんだ…割に合う・合わないを越えてるよ」

しかも、まだ１隻も沈めていないとなると余計に割が合わない。

シルヴィア
「この様子だと、通商破壊は失敗だな」

山城
「今のところはね。敵の潜水艦が３０隻なら戦力は約3分の1を失った訳だから…」

通信長
「艦長、座標Ａ３・Ｆ２の海域で浦波が敵潜水艦を撃沈しました！」

シルヴィア
「これで１０隻目だな…これは完全に失敗であろう」

山城
「４日間で１０隻は流石に失い過ぎだよ。まあ、海軍音痴のスターリンには解らないだろうけど」

苦笑しながら、海図に新たな○印を書いた。

シルヴィア
「しかし、お陰で８００トン型駆逐艦の追加建造がなされたのは皮肉と言うべきかな？」

山城
「と言っても、実際に戦力になるのは先になるんだけどな」

シルヴィア
「そうだな……しかし、これで敵も我々の部隊輸送を妨害する事が困難になったな」

古今東西、陸戦の勝敗、下手をすれば戦争の勝敗を決めるのは歩兵…つまり陸上部隊である。
そして、陸上部隊及び補給物資の海上輸送で一番脅威なのが、潜水艦と航空機だ。
特に潜水艦は第二次大戦頃まで『可潜艦』の域を出なかったが、姿を見せない襲撃が一番恐れられた要因だ。
そして、陸上部隊輸送に関して、最も問題になったのがこの事だった。

山城
「まあ、この様子だと心配は無さそうだが…油断は出来ないな」

次号へ

１９９　潜水艦の正体（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２０１話だけど２００話なので特別編（前書き）

更新が大幅に途絶え申し訳ありませんでした！
何せ、色々なって進行具合が……とにかく、どうぞ！

２０１話だけど２００話なので特別編

新米士官の世界の地球軌道上（日本上空）

宇宙戦艦天城艦橋

山城
「……なんでこうなるかな～～…」

現場に急行する天城の艦橋から現在の現状を考えながら、ポツリと呟いた。
事の発端はこうだ、特別編とゆう事で、作者の新米士官はビリューさん・ファナさん・要塞好きさんの３人をお誘いしたのだが、招待メッセージの『要塞さんは無事には済まないかも』とゆう一文をどう解釈したのか、いきなり蜂起してお祝い会場を襲撃した……とゆう事だ。
しかも、会場にはゲスト２人に、作者、福本、マリーダ、一足先に出迎えに行ったシルヴィア他、登場人物の殆ど居る始末……。

山城
「……大丈夫かな……要塞好きさん」

何せ……女性陣の殆どを敵に回したから……。

これより、一時間前……
地球（新米士官の世界）の日本軌道上宇宙宙域

要塞好き
「さて……変態連合突撃部隊長要塞好き……最早無事に帰れないのならば蜂起する！！」

宙域の宇宙艦隊……と言っても宇宙戦艦ヤマトのボラー連邦要塞『ゼスパーゼ』とゴルバ型要塞６隻（基？）の艦隊だが…。

要塞好き
「ふふふふふ…俺様を敵に回した恐怖をとくと味わうがいい…では、突撃！！！！！　窮鼠猫を噛むという言葉を身に染みさせてやる！！！！！　『お祝い会場』の南４０ｋｍ地点を砲撃！！　その後、降伏勧告！！　内容は『降伏するならマリーダ様＆シルヴィア様両名をバニースーツを着て写真を撮らせろ、これはまだ軽い方だ』以上！！！！！」

その頃……地上（日本）のお祝い会場

福本
「あ、雪だ」

新米士官
「お、じゃあ、あとで皆と雪合戦だな」

窓から外を眺めた福本が呟いた。
既に会場には到着したビリューさん・ファナさんの２人がマリーダ・

シルヴィア・作者などのメンバーと陽気に話している。
まあ、今や『引退組』…２５歳（第七艦隊終了時）…の人間が言う事では無いが…。

ファナ
「マリーダさん、シルヴィアさんは何か不機嫌そうですけど…大丈夫ですか？」

マリーダ
「あぁ、大丈夫よ。山城君が来たら、逆に上機嫌になるから」

ファナ
「…そうなんですか？」

マリーダ
「そうなのよ」

こんな会話の一方で……

ビリュー
「今回はミスター新米士官・ミスター福本にご招待頂きありがとうございます。そう言えば、ミスター山城は？」

福本
「山城は今頃、地球起動上で警戒中です。まあ、あと数時間で交代だから…」

新米士官
「と～に～か～く～、それほど遅くならない内に来るかと」

……何故か同じ様な会話がなされていた。
その時……

ドゴーン！！！

グラグラグラグラグラ！

新米士官
「うお！？」

福本
「なんだ！？　地震か？　火山噴火か？　敵襲か？」

福田
「元帥！　ここより４０キロ南方に砲撃命中！」

マリーダ
「砲撃？　作者、何処かに喧嘩売った？」

新米士官
「売ってもないし、買ってもないよ！」

福本
「被害はあるか！？」

福田
「いえ、ありません」

新米士官

「いや……人員的被害が出てるぞ！！」

新米士官の見ている方向を見た全員は慌てた。

ビリュー
「ファ、ファ、ファ、ファナー！！！！！！」

……さすが兄バカ……。

見ると、ファナさんはどうやら飲もうとしていたスープが先程の砲撃の着弾衝撃のせいでを頭から浴びた様だ……。

福本
「誰か！　雑巾とタオル持って来い！！」

シルヴィア
「着替えも持って来い！　私かマリーダ殿の物を！」

マリーダ
「拭いている間にお風呂の用意！　終わったら私とシルヴィアが洗うから！」

福田
「洗濯機は何処だー！？」

ビリュー
「ファナ～！　ファナ～！」

新米士官
「あぁ！　そっちは女風呂ですよ、ビリューさん！」

ビリュー
「は、離せ～、ファナ～！」

新米士官
「（駄目だこりゃ…兄バカも行き過ぎだよ。こりゃ、風呂の中まで入るぞ）ごめんなさい、ビリューさん。ボコられるよりマシなんで！」

バシッ！

ビリュー
「プゲラ！」

ファナはお風呂へ……ビリューは担架で運ばれ……会場全員がこの後始末に奔走していた。
この為……要塞好きの打電は自然的克つ偶然的に無視されていた。

要塞好き
「……無視された？」

ＡＩ
「はい。既に３０分が経過致しましたが、地上から何の音沙汰もありません」

要塞好き
「わかった、上陸部隊を出せ。そして、打電だ。『拒否したからに

は、女性陣全員を連れて行く！！』以上」

ＡＩ
「了解」

福田
「大変です！」

福本
「今度はなんだ？」

後始末が終わった会場に居た福本と新米士官に福田が報告に来た。

福田
「今回の仕掛け人は要塞好きさんでした！　それも事前布告まで…」

福本
「え～と…何々、降伏するならマリーダとシルヴィアをバニースーツ着せて写真撮らせろ？　いや、完全拒否だよ」

神谷
「再び報告！　要塞好きさん、今度は女性陣全員連れて行くそうです！！」

福本
「今度こそ、喧嘩売ったな」

新米士官

「あ～あ、知～らね」

福田
「それより…要塞好きさんはどうやって女性陣を連れて行くんでしょうか？」

福本
「そんな物、陸軍か陸戦隊を使うだろう？」

神谷
「発信源は宇宙からですよ？」

新米士官
「輸送艇か輸送船か…とにかく使えばいいだろう」

福本
「……なら、山城の出番だな」

こうして……冒頭に戻る。

その頃……会場の浴場

ファナ
「う～…誰かは知りませんが、酷い目に遭いました…」

マリーダ

「そうよね～、まあ、浴場があって良かったわ」

シルヴィア
「そうだな。それにしても、ここは広すぎであろう」

マリーダ
「仕方ないわよ。大人数用の女風呂なんだし…ファナ、頭洗うわよ」

ファナ
「あ、ありがとうございます」

シルヴィア
「……今思えば、こんな風に入るのは久し振りだな…」

マリーダ
「あら、なにが？」

シルヴィア
「こうして喋りながら風呂に入り、頭を洗ってもらうのがだ…私はよく母に洗ってもらった」

マリーダ
「私はお母さんと姉さん達ね。あとは艦隊の女性陣の皆ね」

ファナ
「いいですね～、私なんかお義兄ちゃんですから…」

シルヴィア
「あの要塞好きが妹キャラ1人で終わるとは思えんが…」

マリーダ
「私達が言っても無駄よ。シルヴィア、お湯お願い」

シルヴィア
「はい、ファナ、お湯を掛けるぞ。目を瞑れ」

ファナ
「は、はい」

……なんとも温な光景である。

海龍
「は～い、３人共、チーズ！」

パシャ！

マリーダ
「こら！　海龍！！」

シャッター音に気付いたマリーダが手近にあった手桶を掴み……

シュッ！

スコーン！！

海龍
「プベラ！？」

見事顔面クリーンヒット。

マリーダ
「海龍、あんたは一度、お仕置きが必要ね～～」

海龍
「こ、怖いですよ…マリーダさん…あ、それと…」

マリーダ
「……え？」

再び会場

プルルル…プルルル…

福本
「携帯電話か？」

新米士官
「いや、内線電話だ」

近くにいた福田が受話器を上げると、直ぐに福本に渡した。

福本
「もしもし？」

マリーダ
『ダイスケ！　海龍から聞いたけど、要塞好きが砲撃したあげぐ、

私とシルヴィアにバニースーツ着せて引き渡せって言ってきたって本当!?』

福本
「あ、あぁ、まあ、拒否する以前に無視されてたけど……ま、ゆっくり入ってて、じゃあ」

マリーダ
『わかった。じゃあ』

福本
「…さて、山城達が間に合うかね?」

宇宙　天城艦橋

山城
「ち、要塞好きは何処だ!?」

オペレーター
「レーダーに反応はありません」

山城
「…わかっている」

……考えてみれば、敵がそうノコノコと姿を現す訳……

オペレーター

「艦長！　レーダーに反応、揚陸艇クラス多数！」

山城
「本当か！？」

オペレーター
「はい…ですが、何も無いところから…あれ？　消えた…」

山城
「消えた！？」

オペレーター
「いえ、途中までは映っているんですが、幾らか進むとレーダー上から消えて…」

山城
「飛龍・日向・伊勢に連絡！　艦上機総動員！　発艦させろ！」

オペレーター
「え？」

山城
「地上に向かう揚陸艇だ！　衝突防止か何かの為に一時的にレーダーに映る様にしているとしか考えられん！」

オペレーター
「では、装備は…」

山城
「対空装備！」

飛龍・日向・伊勢からコスモタイガーⅡが対空装備で発進して行く。

大澤
『くそ、なんで敵とやりあわなきゃならないんだよ！』

岡田
『文句言っても意味が無いですよ』

ヴィクトリア
『そうそう、敵が何処かに行く訳では有りませんし』

大澤
『くそ～、敵を呪ってやる～！！』

フルスロットルで地上へと降下する輸送艇に襲い掛かるコスモタイガー隊。
因みにこの輸送艇には戦闘機並みの対空装備があったが、機動力が皆無なうえ、部隊輸送中とあっては脆い。
だが、半数が地上へと降下した。

要塞好き
「ふむ……敵の迎撃を受けたか」

ＡＩ

「はい。ですが、半数が地上へと降下致しました」

今回、要塞好きが投入した陸軍の構成は異能生存体モドキの熟練兵２０万。
その内、１０万が地上へと降下する予定であったが、迎撃により５万に半減している。
しかも、この部隊はボトムズのスコープドックやスタンディングトータスの重装備付きである。

要塞好き
「しかし、山城が宇宙に居たのは意外だったな。シルヴィア様と一緒に居ると思ってたんだがな」

ＡＩ
「どうします、マスター？」

要塞好き
「……殺るか」

ＡＩ
「了解」

その頃……地球

宇宙から連絡を受けた地上配備のコスモタイガー隊が迎撃に出た。
輸送艇も自衛火器で応戦するが、次々と爆散する。

しかし、回避の為、大幅に進路を変えた物……脅威度が低いので放置……もあり、全部を迎撃出来る訳ではなかった。
そして……地上では……

福本（勇気）
「いよいよ来たな……」

陸戦装備で空を眺める福本の孫、勇気。
と言っても、分厚い雲と雪で視界が効かないが。

セルベリア
「交代で守備を担当していたら、流れで陸戦と言うのも迷惑な話ね」

兵士
「隊長！　敵輸送艇来ます！！」

福本（勇）
「総員戦闘用意！」

その頃……地球軌道上

オペレーター
「変化感知！　出力変化！」

山城
「全艦回避！！」

艦上機を回収するべく航行していた艦隊に、姿の見えない敵が襲撃…交戦していた。

オペレーター
「敵はレーダーに映っていません！」

山城
「そんな解りきった報告はいい！　それよりも、敵の砲撃から位置を割り出せ！」

オペレーター
「は、はい！」

宮里
『山城、弾種は指示通りに装填したが…大丈夫なのか？』

山城
「俺だって訊きたいぐらいだよ…はあ～」

オペレーター
「艦長、敵砲の砲撃から推測するにゴルバ型要塞が複数、ボラー連邦要塞『ゼスパーゼ』と思われます…ですが、姿が…」

山城
「見付けようと思うなら、ビリューさんからレーダーを借りるしか無いよ……あとは…」

オペレーター
「あとは…？」

山城
「照明弾をありったけ使え！　在庫が無くなるぐらいばら蒔け！！」

要塞好き
「うわっはっはっは！！　どうだ、山城！　一方的に撃たれるのはな！」

スクリーンで山城達の様子を見ながら、笑う要塞好き。
その時、画面が急に明るくなった。

要塞好き
「照明弾を使ったか……お楽しみは終わりだ、ブラックホール砲用意」

ＡＩ
「出来ております、マスター」

要塞好き
「そうか…山城よ、シルヴィア様達は責任を持って預かりましょう」

そう言い、発射……

ＡＩ
「大変です、マスター！！」

要塞好き
「どうした？　いま、お楽しみ…」

AI
「陸上部隊、壊滅しました！！」

要塞好き
「え…え、えぇー！！！！」

少し前……地上……

タタタタン！

福本（勇）
「く、雪のせいで視界が限られる…」

アサルトライフルを乱射して応戦する福本（勇）。

兵士
「隊長！　敵の重火器です！！」

セルベリア
「ボトムズ投入ね…勇気！？」

福本（勇）
「総員後退！！　重火器が投入されたら、こっちが不利だ。スキーを履いて後退！」

「こんな事もあろうかと、駆け付けたぞ、息子よ！」

福本（勇）・セルベリア
「「え？？」」

ドパウ！

ドゴーン！

福本（伊吹）
「あっはっはっは！　冬季試験の為に、１２７ｍｍ電磁砲装備の７５式戦車を付近に展開させてよかったな！」

福本（勇）
「父さん……助けるなら、もっと早く来てよ」

福本（伊）
「済まん済まん。しかし、この様子だと後始末で終わりそうだな」

いったい何を見て言ったのかは解らないが、そう言った。
この直ぐ後に解った事だが……要塞好きは最後の詰めが甘かった。
それは……日本が冬であり、会場が雪が降る日本海側だった事。
いくら異能生存体モドキの彼らも、戦闘服一枚＋αの軽装備では環境が酷である。
この為、彼らに冬季装備を付属させていなかった事は、雪により彼らや重火器に多大な悪影響が生じたのだった。

天城艦橋

オペレーター
「『ゼスパーゼ』からエネルギー反応、ブラックホール砲です！」

山城
「やっと位置を掴んだのに…」

オペレーター
「あれ？　撃ってこない…？」

山城
「……今だ！　鳥海の波動砲はいいか！？」

オペレーター
「はい！　見付けて直ぐ撃てる様にしています！」

山城
「撃て！！！」

鳥海から放たれた波動砲は正確に『ゼスパーゼ』を貫き塵と化した。

山城
「次！　全艦主砲、波動カートリッジ弾撃て！！」

宮里
『漸く出番だ！　主砲撃て！！』

天城からの主砲発射を合図に次々と波動カートリッジ弾がゴルバ型要塞に突き刺さった。

ボン！ボン！ボン！ボン！ボン！ボン！ボン！ボン！ボン！ボン！
ボン！ボン！

ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴン！！！！！

宮里
『よっしゃあ！！』

オペレーター
「やった！！」

1隻のゴルバ要塞の爆発から連鎖誘爆により、ゴルバ型が大爆発した。

山城
「まだだ！　砲戦続行！！」

この指示に艦橋の全員が驚いた、しかし、爆発が少し下火になると、まだ1隻が損傷しながらも健在な姿に、直ぐに砲撃が再開された。

山城
「やっぱりな…ゼスパーゼに乗ってると思わせて、ゴルバ型に乗ってたか…しかも、自分の乗艦は防御向上型か…」

艦橋脇を飛龍から発進したコスモタイガーＩＩが通過するのを見ながら呟いた。

要塞好き

「チキショ～！　一瞬かよ！！」

陸上部隊壊滅の報に一瞬思考停止に陥ったのが災いし、波動砲でゼスパーゼ、波動カートリッジ弾でゴルバ型要塞が一気に５隻を失った。

ＡＩ

「マスター、先程、我が要塞に波動カートリッジミサイルが主砲より入り爆発しました。被害甚大です」

要塞好き

「うそ！！？」

異能生存体モドキ構成の兵士１０万が各要塞に分散配備していたが、今や何の役にも立つ様子は無い。

要塞好き

「ヤバイ…ヤバイ！！！！！　逃げるぞぉぉぉぉぉぉお！！！！！！」

そう言うと司令室を飛び出し、脱出用の『物凄く速い戦闘機』に乗って脱出したが……そこには……

ファナ

「要塞さん♪　どこいっくの♪」

要塞好き

「……ファナさん、なんでそんな笑顔で楽しそうな声なのに怖いのですか？」

ファナ

「それはね、要塞さんの最初の砲撃で、飲もとしてたスープが衝撃で飛んで頭から被って、お気に入りの服が台無しになったからだよ♪」

要塞好き
「……ごめんなｓ」

ファナ
「許さない♪」

……この時、何が起こったかは読者のご想像にお任せしようと思う。
ただ、ヒントらしい事を書けば、この時の事はファナ＋女性陣の怒りのパワーが要塞好きの回復能力を吹っ飛ばす程の事が起きた……
……と言う事だろう。

その後……

要塞好き
「う～～……は、ここはどこ!?」

ビリュー
「お、やっと起きた」

要塞好き
「お、ビリュー！　ここはどこだ?」

ビリュー
「……地上だ」
要塞好き
「…じゃあ、なんで俺は動けない？」
ビリュー
「それはだな…」
ビュッ
ベシャ！
要塞好き
「ぶべ！？」
顔面に命中したのは……雪玉。
新米士官
『え～、これより、雪合戦の予定を変更し、雪玉当て大会を開始します。ちなみに的は雪だるまになった要塞好きさん』
要塞好き
「……うそ？」
ビリュー
「本当だ。まあ、他人事だから高見で見物しよう」
要塞好き
「……助けてくれ」

ビリュー
「無理。ファナの服を台無しにした奴なんか助けない」
要塞好き
「…そん（ベシャ）ぶべ！」
マリーダ
「それ！　バニースーツ着せようとした罰だ！」
シルヴィア
「感想を書かなかった罰だ！」
大澤
「人の楽しみを延長させやがって！！」
綾波
「私達をブラックホール砲で撃とうとした仕返し」
全員
（（（（（（（（（（（（あ、綾波が喋った！！）））））））））））
新米士官
『え～、当てた人は申し出て下さ～い。各種賞品を用意しておりま～す』
要塞好き
「…誰か（ベシャ）だべげて［助けて］くれ～～～～～～」
虚しい叫びは雪玉を投げる者達の歓声などに掻き消された。

ちなみに、要塞好きが解放されたのは次の日の昼……それまでずーと雪だるまであった。

次号へ

２０１話だけど２００話なので特別編（後書き）

要塞好きさん……これで大丈夫ですか？
ご意見ご感想をお待ちしております。

２０１　旧知の仲

８月１０日（異世界７月３０日）

山城・シルヴィア達が潜水艦狩りに勤しんでいる頃……

ラバナスター近郊ボニファス伯爵邸

ボニファス
「おぉ、これは珍しいお客だな」

チェザーリ
「お久し振りです。ボニファス卿」

庭のテラスに居たボニファスに今や混沌の原因たるウェスタディア王国外交官チェザーリが訪れた。

ボニファス
「君と最後に会ったのは３年前だったかな？」

チェザーリ
「前国王陛下の葬式に、陛下の代理として参りましたのが最後です」

ボニファス
「僅か３年の筈が丸で１０年の様だ…特にこの２年間はな」

チェザーリ
「私はこの２週間程の事が夢の様に思えてなりません……姫様はそ

れ以上です」

ボニファス
「君の父上が亡くなって6年か……才を認めた父上が早世だったのは惜しまれるな」

チェザーリ
「……今と成ってはそれは良かったと感じる自分がいます」

ボニファス
「…昔話をしに来た訳では無かろう？」

チェザーリ
「はい……噂によると、ボニファス卿が日本に関して詳しいと…」

ボニファス
「別に詳しくは無い。ただ、日本に対して好意的な意見を言うから、皆までそう言うんじゃろうて」

チェザーリ
「構いません。あなたなら、冷静沈着なご意見が聞けると思い来ました」

ボニファス
「何が聞きたいのだ？」チェザーリ
「日本です。私がいくら最新の情報を集め分析しても、『大日本帝国』なんて国は無い…無いだけに彼らが何をするか解らない」

ゆっくり静かに語るチェザーリにボニファスは頷くと答えた。

ボニファス
「確かに、君の言う通り、この世界に日本は無い。しかし、別世界に日本は存在する」

チェザーリ
「…はあ？　別世界？」

『黒の貴公子』と呼ばれる彼がこんなすっとんきょうな声をあげる事は無い。
何故なら、彼は外交官であり、大抵の事には驚かない。
しかし、ボニファスの口から出た『別世界』の言葉の前には驚くしかなかった。

ボニファス
「その表情だと、驚いておるな？　しかし、事実は事実。儂は本当の事しか言っておらんぞ」

チェザーリ
「……」

ボニファス
「そうでなければ、話が合わない事があるじゃろう？」

チェザーリ
「確かに…あの艦船や飛行機は我々の技術では不可能な部分は多い…」

ボニファス
「しかも、彼らの世界は我々より約１００年先の未来……驚く事も無かろう？」

チェザーリ
「…確かに」

この時、彼の背中には嫌な汗が流れていた。
あれが１００年先の技術だと見せられては頷くしか無いが……

ボニファス
「その顔だと、日本が自分達を蹂躙するんでないかと考えておるのだろう？　なーに、心配する事は無い」

チェザーリ
「ですが、ボニファス卿。日本が信頼に値するかは…」

ボニファス
「いいかね、チェザーリ。彼らの１００年は只の１００では無い。その１００年間に二度の世界大戦、数度の戦争、無数の紛争・争乱があった。日本も決して楽な道は歩んでおらん。君はこれをどう思うかね？」

チェザーリ
「……今のところ、私にはなんとも…」

ボニファス
「まあ、時間はある。ゆっくり理解するのもいいじゃろう」

そう言いながら笑っていた。

その頃……戦艦天城

山城
「ご来艦歓迎します、広瀬大佐」

広瀬大佐
「ごたごたと忙しい時に済まないな」

山城
「いえいえ、広瀬大佐も新造艦艦長就任おめでとうございます」

広瀬大佐
「なに、成り行きだ。成り行き」

次号へ

２０１　旧知の仲（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２０２　軍神と新造艦

天城艦橋内

士官
「！　敬礼！！」

広瀬大佐
「よい、作業を続けよ」

士官
「は、はい！」

艦橋へと入った広瀬大佐に気付いた士官慌て言うと、広瀬大佐はそれを制した。作業に戻った士官だが、艦橋の空気は一変していた。まあ、『軍神』の突然の来艦と言う事が一番の原因だが。

広瀬大佐
「私は戦艦に関しては『朝日』にしか乗っておらんから、それ以降の艦はどうもな」

山城
「基本は一緒です。ただ、その発展なので、扱いに癖があると思います」

広瀬大佐
「若い君に言われると少し自分自信が心配だな…しかし、私が新造戦艦の艦長とはな」

山城
「多分、チャイナー帝国との海戦で大佐がご活躍されたからだと思いますよ」

広瀬大佐
「うーむ……それだけなのか？」

山城
「それ以上は上に聞かないと聞けないかと…」

さすがに山城も解らない。
何せ、どこぞの海軍次官の様な（まだいい方だが）職権乱用はしていない。（当たり前だ）

広瀬大佐
「まあ、聞いても答えてくれるかは別だな」

山城
「そうですね」

しかし、元とは言え、身内の新造戦艦艦長就任は素直に喜ぶべきだろう。

山城
「新造戦艦の艦名はたしか、イナバでしたよね？」

広瀬大佐
「あぁ…日本名だから、余計に愛着が沸くよ」

イナバ（漢字表記は『因幡』）はつい先月完成・現在錬成中のイナ

バ型戦艦一番艦である。
イナバはシリルティア王国海軍が完成させた次世代戦艦で、天城がモデルになっている。

イナバ（因幡）型戦艦

基準排水量　２万６２００トン
最大排水量　３万１２５０トン
全長　２１４，６ｍ
全幅　２５，７ｍ
速度　２６，８ノット
航続距離　１４ノット８０００海里
機関　重油機関

武装
３０，５ｃｍ（１２インチ）６０口径連装砲×５基（前部２基　後部３基）

１５，２ｃｍ５０口径単装砲×１６基（左舷８基　右舷８基）

８８ｍｍ６０口径単装高角砲×８基（左舷４基　右舷４基　シリルティア側では補助砲扱い）

４０ｍｍ単装機関砲×１０基

２５ｍｍ単装機関砲×１８基

（１２，７ｍｍ以上は機関砲）

追記

本来なら昨年に竣工・完成している予定であったが、バルジ（対水雷防御）の追加や、長砲身主砲への変更、主砲仰角増大（４５度）、大落角砲弾などに対する水平・垂直装甲防御の強化、石炭機関から重油機関への変更などにより（もちろん、これらには日本が関わっている）、完成は遅れたものの、現段階において『最強』の戦艦として完成した。

山城
「自分も、日本海軍同様に旧国名になると、愛着が生まれますね」

広瀬大佐
「そうか…まあ、明日には初任務となるがな」

山城
「そうでした、明日でしたね」

シルヴィア
「山城！　伊勢から連絡だぞ～！」

山城
「おっと、どうやら仕事が入った様なので、自分は失礼します」

広瀬大佐
「忙しい時に済まなかったな」

山城
「いえいえ、では」

そう言うと山城は配置場所に戻って行った。

広瀬大佐

「さて、後輩達の邪魔にならないよう、退散するとするか」

次号へ

２０２　軍神と新造艦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２０３　シリルティア王国観艦式でのヒトコマ

８月１１日（現世界８月１日）

日本でも8月になったこの日、シリルティア王国ラバナスター港では普段以上の賑わいであった。
今や国内に知らぬ者は居ないと言われる大日本帝国派遣軍・第零艦隊も参加した観艦式が行われていた。
マツシマ、イツクシマ、ハシダテと今までシリルティア王国海軍を支えていた3隻の主力艦が舳先を並べている。
そして、艦艇が並ぶ中をイナバは御召艦となり、ゆっくりと進む。
そして、同じく参加した第零艦隊は扶桑・山城・天城を中心に移動観艦式を決行、上空には今まで錬成に勤めたパイロット候補生が教官機を先頭に編隊飛行を行った。

その一時間後……天城艦橋

小澤中将
「本来なら、こんな状況下での観艦式になる予定では無かったのだがな…」

山城
「それは仕方ありません。何せ、あの国であんな事が起きるなんて、誰もが予想していませんでしたからね」

シルヴィア
「お陰で、新造戦艦の一般公開が軍事セレモニーの様な事になってしまったがな」

そう、この観艦式はあの事件が起きる前から計画されていた。
しかし、あの事件の為にこの緊張状態下での軍事セレモニー的公開になってしまった。

山城
「確かにな……」

福本（伊吹）
「まったりとしているところだが、みんなにお知らせがある」

全員
「「「「「「「「「「「「うわ！！？　びっくりした！！」」」」」」」」」」」」

福本（伊）
「……そんなにびっくりする事か？」

福本（勇気）
「だから、事前に連絡しましょう…と言ったではありませんか、父さん」

セルベリア
「すみません、皆さん。いきなり、来艦して」

福本親子＋息子のパートナー登場。（笑）

山城
「次官、確か今はアーネリア陛下主催の昼食会の時間では？」

福本（伊）
「いや～、こっちが重要だから、抜け出て来た」

山城・シルヴィア
「「いや、ダメじゃん！！」」

福本（勇）
「と、言うのは冗談で、昼食会まで多少空き時間があったんでこっちに来たんです」

やれやれ、と言いたそうな表情で息子が捕捉した。

山城
「まったく、外交問題なんて起こさないで下さいよ」

福本（伊）
「大丈夫だ、福島のバカみたいな事はしないよ」

セルベリア
「次官の場合、福島さんに対するバカ発言が多い様な気がしますが？」

福本（伊）
「一応、事実を言っているんだがな」

シルヴィア
「ところで…お知らせとはなんですか？」

埒が明かないと思ったシルヴィアが強硬に話を戻した。

福本（伊）
「そうだった、そうだった。まず1つ、今回の増援は『瑞穂』と駆逐艦4隻、搭載の40式戦闘ヘリ『隼鷹』2型（AH64アパッチ。2型はロングボウ火器管制レーダーを搭載。正式名称はAH－64Dアパッチ・ロングボウ）をフルに使える様にしておいた」

山城
「……出来る限り使わない様に努力します」

小澤中将
「『瑞穂』とは…水上機母艦のか？」

福本（勇）
「我々の世界では、昔はそうでしたが、今は強襲揚陸艦です」

シルヴィア
「その前に『瑞穂』って……」

セルベリア
「……名前が皮肉です」

……まったくだ。

福本（伊）
「それと、インディアナポリス・ワスプの修繕・改装が大方終了した。作戦前には錬成も終わり配備される筈だ」

山城
「…今度はどんな改装をしたんですか？」

福本（伊）
「別に、レーダーと主砲・主砲塔を換えて、対艦ミサイルを搭載し、速射砲と自動稼働機関銃を…」

山城
「もう良いです。インディアナポリスでそれなら、ワスプだってそれぐらい改装しているでしょうし」

小澤中将
「それはいいが…駆逐艦などの脇を固める艦艇の配備はどうなりますかな？　いくら主力艦が集まっても、脇を固める艦艇が無ければ…」

福本（伊）
「ご心配無く。既に手配済みです。あと、マキシム・ゴーリキの改装手配なども終わった」

山城
「…本当に手が早いですね」

福本（伊）
「まあな」

福本（勇）
「お陰で、第零艦隊が『第三の連合艦隊』なんて言われてますが」

シルヴィア

「連合艦隊、第七艦隊、そして、第零艦隊……なるほど、確かに三番目だ」

山城
「第七艦隊は解隊されただろう？」

セルベリア
「それでも、印象は強いんですよ」

福本（伊）
「と、時間だな。お知らせは以上だ。日時は追って連絡する」

そう言うと、福本親子とセルベリアは昼食会会場へと向かっていった。

次号へ

２０３　シリルティア王国観艦式でのヒトコマ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２０４　アンデュラス王国軍部隊

８月１３日（現世界８月３日）

アンデュラス王国からの部隊が到着した。
今回の騒動で風評被害の様な形で喧嘩を売られたアンデュラス王国は陸軍のみ（内陸国だから、当たり前だが）の参加で部隊を派遣する事となった。
そして、その部隊をラバナスターに集結させるべく、日本から輸送機を出したのだが……

山城
「……どんだけ～！？」

着陸した『晴空』輸送機から降ろされる物を見ながらツッコミを入れた。
何せ、出て来たのは２号戦車、３８（ｔ）戦車、３号戦車（初期型）、４号戦車（同）……全部、ドイツ軍の装備だ。

山城
「お～い、シルヴィア～、これ、どうゆう事？」

シルヴィア
「い、いや…私にも解らぬ…」

晴空から降りて来たのは２号戦車９輌、３８（ｔ）戦車９輌、３号

戦車１輌、４号戦車１輌の計２０輌。
小規模ながら、電撃戦がやれそうだ。

山城
「…ドイツ軍機甲部隊が丸ごと転移したか？　そうでも無いと説明がつかないぞ」

戦車１５台と敵地で戦った事が有るだけに、部隊レベルで無いとこの数はあり得ない。

シルヴィア
「次は歩兵部隊だな…次はどれくらい来るだろうかな？」

山城
「そんなに多くは来ないと思うけど…まだ解らないからな」

その前に…アンデュラス王国はドイツ軍、しかも第二次大戦初期の部隊が転移したのか？

山城
「……まあ、責任者が出て来れば解るか」

責任者とは指揮官の事である。
……あま、その指揮官自体が驚愕であったが…。

「済まないが、日本派遣軍司令部は何処かね？」

山城
「はい……ご案内します、どうぞ」

声を掛けて来た人物に、平常を保ちつつも、内心は驚きながら、山城はシルヴィアを伴って案内した。

日本軍司令部（プレハブ）

山城
「今村中将、アンデュラス王国軍指揮官がお着きになりました」

今村中将
「入ってもらいなさい」

山城
「はい…どうぞ」

司令部には小澤中将、山南少将、今村中将他第零艦隊・派遣軍な幹部が勢揃いしていた。
そんな中に入って来た人物は有名人であった。

「アンデュラス王国軍『黒の鉄騎隊』司令エルヴィン・ロンメル少将です。よろしく」

山城
（……やっぱり…ロンメル元帥だったんだ）

山城は内心呟いた。

既に第七艦隊でも複数回出てきたエルヴィン・ロンメル将軍。
史実ではヒトラー暗殺に関与したとして、服毒自殺。
山城達の世界では福本元帥・宮崎大将と共に戦い、戦後大統領に就任している。
まあ、どの世界でも有名な将軍である事は確かである。

山城
「でもな～」

まさか、アンデュラス王国にロンメル将軍が居たのは驚きだ。
もし、あの愚弟の部下だったらと考えると……あそこまで楽に勝てただろうか？

山城
「無理だな。絶対に無理だな」

シルヴィア
「ここに居ったのか…あの指揮官を知っておったのだな」

山城
「知ってはいたけど、自信は……七割五分しかなかった」

シルヴィア
「3分の2以上はあったのだな」

山城
「あはは……今回の戦はちょっとした事になりそうだな…」

名将が集まった＋装備は良好となれば勝てない戦では無い。
しかし……こんな簡単でいいのか？

「山城少佐…ですね」

後ろから呼ばれ、ハッと振り返ると、そこに居たのはロンメル少将。

ロンメル少将
「あなたの事は聞きました。若いのに大変だな」

山城
「あ、いえ…将軍に比べましたら、微々たる物かと…」

ロンメル少将
「うむ…これから1ヶ月半程、よろしく頼むよ」

山城
「は、はい」

次号へ

２０４　アンデュラス王国軍部隊（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２０５　神戸海軍鎮守府（前書き）

雪が降る2月に、夏の8月を扱う事になるとは……。
そして、今日は建国記念日です……大丈夫かな…この国は……この日にも、靖国神社に行く日べきなんだろうな……特に政治家は…。

205　神戸海軍鎮守府

8月6日（異世界8月16日）
神戸海軍鎮守府内

山城
「では、瑞穂と護衛の初春、子日（ねのひ）、若葉、初霜の4隻が支援として取り敢えず送られる訳ですね？」

「えぇ、そうよ。他にもインディアナポリス・ワスプの件に関しても随時連絡するそうよ。いい上司に恵まれたわね」

山城
「……否定はできませんね。井上中将」

いま、山城が話をしている相手は、神戸海軍鎮守府司令の井上政美（まさみ）中将。
井上成美（しげよし）大将（終戦時）の孫で、二児の母親ながらも海軍在籍で育て上げた『おっ母さん』提督。
既に福本次官同様50才代ながらも、余り変わらない美貌は『現日本海軍の七不思議』に認定される程だ。
しかし、それを除けば英語を巧みに使いこなし、外国大使館・領事館の駐在武官を勤める程だ。
また、艦艇・艦隊勤務も柔軟にこなしてきた。
但し、彼女は呉士官学校（旧呉海軍兵学校）卒業なのだが。
そうで有りながら、福本次官と対立する事等無く、普通に仲良くやっており、神戸鎮守府司令官を勤めている。

井上中将
「それで～、向こうにはロンメル将軍が居るんだって？」

山城
「はい…ただ、装備とロンメル少将の話から、ロンメル少将達はフランス侵攻作戦中に転移した様です」

井上中将
「ふ～ん、向こうも大変ね…まあ、それなら、あなたも大変よね。いつ何が起きてもおかしく無い世界なんだし」

山城
「はあ…確かにそうですね。まあ、慣れてしまえば普通になりますけど」

井上中将
「言うじゃな～い…あ、福本次官から聞いたけど、彼女がいるんだって？　仲はどうなの？」

山城
「…中将、なんで次官もあなたもそこを気にしますか？」

井上中将
「まあ、子供が居る身だからね～。あと、あなたの後輩の福本勇気とセルベリアもね……」

山城
「…あの2人がどうしたんですか？」

井上中将
「ん？　あ、別に、何も無いわよ～」

山城
「はあ…」

井上中将
「まあ、人は色々だから、自分なりやりなさい」

山城
「そうします。では」

井上中将
「玄関まで送るわよ」

山城
「仕事があるでしょう？」

井上中将
「私は真面目だから、仕事なんて無いよ～」

山城
「……ご自由に」

結局、鎮守府の玄関まで井上中将に送ってもらった（と言うより付いて来た）山城。
すると、玄関前には暇を持て余すシルヴィアが居た。

井上中将
「ふ～ん、あの子がシルヴィアね」

山城
「えぇ、どうやら、話が終わるまで待ってくれていた様です」

本人は司令官室まで付いて来る気だったのだが、変な勘繰りをされるのを避ける為に外で待ってもらっていたのだが…結局、無駄だった様だ。

井上中将
「……山城少佐、嫁修行なら引き受けるわよ？」

山城
「ご心配無く。既に予約が入っておりますので…では」

そう言うと、シルヴィアの下に向かう山城。

井上中将
「うふふ、あんまり仲が良いと、お姉さん嫉妬しちゃうぞ♪」

2人の姿を見て、密かに呟く井上政美中将だった。

シルヴィア
「暑いぞ～～」

山城
「だから、別の所で待っててていいって言ったのに…」

シルヴィア
「な～に～？」

山城
「…わかったわかった、確か、この近くに昔からやってる駄菓子屋さんがあったから…そこでかき氷を食べよう」

シルヴィア
「何でもいい～～、死ぬ～～」

山城
「オーバーだな～」

次号へ

２０５　神戸海軍鎮守府（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

206　それはそれで…有りなのか？

8月18日（現世界8月8日）
天城艦橋

「…以上、定期連絡からは異常は確認されておりません」

山城
「うむ、ご苦労様……（ニヤニヤ）」

「あの…なにか？」

山城
「ん、いや、配属直後に比べたら、随分馴れたな、と思っただけさ、佐野裕太郎（ひろたろう）少尉」

シルヴィア
「そうそう、最初の頃は舌を噛んでいたからな」

それを言われた本人は真面目な顔から、苦笑顔へなる。

佐野
「先輩…いえ、艦長、その事だけはご勘弁を…自分でも思い出したら、恥ずかしくなるんですから」

山城
「福本次官なら「その内、いい笑い話になる」って言いそうだがな」

さて、いま話の話題となっている佐野裕太郎少尉（１８）は７月１日（現世界６月２０日）の第一次第零艦隊増備により選抜された新人士官の志願組の１人である。
佐野は神戸海軍士官学校卒業で、山城の一期後輩。
幼い時に見た大和と乗り組む士官に憧れた佐野は、艦種・艦型識別が得意で、その識別能力と面接した福本次官の印象（本人曰く、お前…山城…と組むと面白そう）により、配属された。
山城も、その書き付けと印象から、彼を艦橋配備にしていた。
ただ、最初は小澤中将の前で騰がったりして、失敗した彼も、１ヶ月程すると普段の顔をする様になった。

佐野
「もお…とにかく、今はその話は終わりに…」

風華
「艦長さん！」
山城
「（その艦長さん、は気恥ずかしいんだけどな～）どうしました？」

風華
「レーダーに反応、航空機が単機で接近して来ます！」

山城
「（航空機が単機？　今日は哨戒任務の東海以外は出ていない……）総員臨戦態勢！　対空戦闘用意！」

佐野
「了解！！」

いくら軍港での待機中とは言え、通常作業中である天城は山城の指示の下、直ぐに戦闘配置に就いた。

水兵
「正体不明機、視認距離に近付きます！」

山城
「どれどれ」

視認距離に入ったとの報告に、山城・シルヴィア・佐野・風華は双眼鏡で覗く。

山城
「機種は…Ｆｗ１９０だな」

佐野
「ドイツ機ですね。様子を見ますか？」

山城
「まあ、爆弾載っけてる訳でも無さそうだし…」

シルヴィア
「気のせいか？　どうも飛び方がおかしくないか？」

風華
「確かに…怪我をした鳥みたいな飛び方です」

見ると……確かに飛び方は不安定である。

山城
「不時着水するぞ！　カッター用意！」

多分、迎撃機か対空砲火で被弾、操縦系統に支障が出たのだろう、と感じた山城は直ぐに命じた。
しかし、フォッケウルフは力尽きて着水した。

佐野
「艦長、離れます！」

そう言うと山城の返事も聞かずに上甲板へと降りて行った。

山城
「福本には負けるが、俺も無茶すると思ってたが、あいつも無茶するな～」

シルヴィア
「そんな事を言っている暇があるか…行くぞ」

シルヴィアに続き、山城・風華も上甲板へと降りて行った。

さて、山城が無茶と言った理由……それは上甲板甲板から海に飛び込む事。
まあ、停止中の船だから出来る事ではあるが、戦艦の側舷から飛び込むとなると、高い訳で……まあ、慣れの問題でもあるが。
そんな戦艦の側舷から海に飛び込んだ佐野は直ぐ近くに不時着水したフォッケウルフに辿り着いた。

佐野
「さすがに飛び込むのはキツいな～」

コックピットを開けると見えたのは……

佐野
「…女……の子!?（しかも、同い年ぐらい!?）」

しかし、ハッと気付く……確かこれ、陸上機……

佐野
「ヤバ、さっさと救助して脱出!」

気絶している女の子を引っ張り出し、水没するフォッケウルフより脱出、水没確認後、カッターに女の子と一緒に掬い上げられた。
但し、山城から苦笑混じりの注意は受けたが。

数時間後　天城医務室

山城
「横井先輩、話ってなんですか?」

シルヴィアを連れて医務室に来た山城。
もちろん、呼ばれたから。

横井

「あ、来たか。単刀直入に訊くけど、女体化世界なんて信じる？」

山城
「…はい？　女体化世界？　まあ……最近のゲームとかのネタから考えるに、あって不思議は無いかと思いますけど…」

横井
「それは良かったわ……彼女、つまり、さっき収容した女の子がかの有名なハンス・ウルリッヒ・ルーデルの女体化って言ったら信じる？」

山城
「は、は、は、はいぃぃぃ！！！？？？」

シルヴィア
「人物の話は置いておくとして……さすがにそれはどうかと…」

横井
「残念ながら、証拠は有りすぎ。血液型、所持品、過去のデータから考えて、彼女はルーデルなねよね～」

山城
「あの同い年風の女の子が……」

どう考えても結び付きにくい話に、山城も驚くしか無い。

横井
「あ、歳は正真正銘の１８歳だから」

山城・シルヴィア

「「……」」

次号へ

２０６　それはそれで…有りなのか？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２０７　勧誘？（前書き）

前号、今号、次号はひろたろうさんの感想意見がネタ元です。
ひろたろうさん、ありがとうございました！

207　勧誘？

その夜……艦長室

福本（伊吹）
『で、結局収容した女の子はハンス・ルーデルの女体化、しかも18歳だった訳だな』

山城
「はい、そうです」

国防省福本次官室との直通電話で山城は福本次官と話していた。

福本（伊）
『で、どうなった？』

山城
「その後、直ぐに目を覚ましまして…軽傷だったのを聞いて、医務室から出ようとするのを全員で止めました」

福本（伊）
『よく止められたな』

山城
「シルヴィアがクロロホルムを嗅がせまして…なんとか」

福本（伊）
『……お疲れ様』

山城
「はい…それで、ルーデルはどうしましょう？　ロンメル少将に相談したんですが、どうやらフランス戦当時は名前が知られていなかったようで……正直、こっちで預かった方が楽かと思いまして…」

福本（伊）
『成る程な…しかし、そうなると、乗る機体あるのか？　その前に、彼女が残れるか？』

山城
「問題はその2点です…生活に関しては大丈夫かと思いますけど…搭乗機は99式襲撃機が有りますが、あのルーデルと合う人間がいるか…何せ、本格的に話していませんから…」

福本（伊）
『ふむ…よし、その件は私に預からせてくれ。お前はルーデル嬢と話てみてくれ』

山城
「わかりました…と、言っても少し自信がありませんが」

福本（伊）
『ダメ元で話てみてくれ…あとは任せろ』

山城
「わかりました…では」

最後にそう言いと、受話器を置いた。

翌日…8月19日（現世界8月9日）

天城医務室

コンコン

山城
「失礼しま～す」

横井
「あら、ルーデルなら朝食中よ」

見ると、栄養を考えた海軍用（洋食版）朝食である。
ただ…その朝食が載るトレーには牛乳ビンが一本……

山城
（そう言えば、ルーデル大佐って牛乳よく飲んでたって自伝に書いてたよな…）

それが女体化しても同じだと、何故か納得出来てしまう。

「私に何か用か？」

西田がトレーを下げ、最後に残っていた牛乳瓶の蓋を開けながら言い放つ女の子……ルーデル大佐。
姐さん顔かと思ったが、普通の女の子顔だ。

ルーデル
「貴官の顔は昨日見たな…そこの軍医中尉の言動から察するに階級は上の様だが」

山城
「本官はこの戦艦天城艦長の山城少佐です。ルーデル大佐」

ルーデル
「ほう…東方の日本人が私を知っているのか…ここは何処だ？　日本軍がロシアに来たとは聞いた事がないぞ」

山城
「それはそうでしょう。ここはドイツでもロシアでもありません。いえ、あなたの世界ですらありません」

ルーデル
「なに！？」

驚くのも無理は無い。
そこからこの世界と経緯を手短に話した。

ルーデル
「ならば、私はどうしたものかな…ドイツが存在しないとなるとルフトヴァッフェも存在してはいないし…」

山城
「なら、日本空軍に来ませんか？　あなた程の腕なら日本空軍は歓迎しますよ？」

ルーデル
「……断る」

山城
「え？」

ルーデル
「だって、今のあなた方に私を満足させる物は無いでしょう？」

山城
（う～ん…やっぱり、そうきたか…予想していたとはいえな…）

佐野
「艦長、福本次官よりお電話です」

山城
「ん、次官から？　あと2分でするから、待ってもらって」

佐野
「わかりました」

ルーデル
「……なあ？」

山城
「なんですか？」

ルーデル
「あいつは誰だ？」

山城
「彼は自分の部下の佐野少尉です。それがなにか？」

ルーデル
「…別に、なんでもない」

山城
「そうですか。では」

そう言うと、山城は医務室から出て行った。

山城
（さて……話はしてはみたが…やっぱり、福本次官かな…）

次号へ

207　勧誘？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２０８　サンダーボルト＝雷龍

８月１０日（異世界８月２０日）

神戸軍用飛行場

夏真っ盛り…しかも、飛行場となるとエンジンの熱気も加わる為、暑いと言えば暑い。
しかし、それは慣れの話であり、既に経験済みの２人にはどうでもいい話だった。
ただ１人……今回の主役が項垂れていた。

ルーデル
「し、し、死ぬ…暑い…ドイツは…こんなに暑くない～」

山城・シルヴィア
「「……」」

……日本の夏は湿気や湿度の関係で蒸し暑いのが特徴だと聞いた事があるが……そんなに違う？

シルヴィア
「…大丈夫なのか？　このままだと、主役がバテるぞ？」

山城
「う～ん…もうそろそろなんだけどな～」

腕時計を見ながら呟く。

昨日の艦橋に掛かってきた福本次官の電話は、明日（つまり、今日）に神戸軍用飛行場の所定時間・位置にてルーデル嬢と一緒に待機していろとの事だった。
だからこそ、指定された格納庫の前に居るのだが…。

福本（伊吹）
「おう、朝から悪いな」

山城
「軽いノリは良いですから、もう少し早く来てくれませんか？　ルーデル大佐が倒れますよ！？」

シルヴィア
「いや、息絶え絶えだ」

既に１８歳のお嬢様大佐の見る影も無い。

福本（伊）
「すまんすまん、最後の最後に齟齬が出たんだよ。じゃあ、入るぞ」

そう行って山城達が前で待っていた格納庫に入る。
そして、山城達が入ってみると、そこには……

山城
「あ～…これはまさか…」

福本（伊）
「Ａ１０サンダーボルトＩＩ…日本空軍なら３７式対地襲撃機『雷龍』だ」

Ａ３０サンダーボルトＩＩ……日本でも有名なアメリカ軍の対地攻撃機である。
特徴は……機首下の３０ｍｍガトリング砲。

福本（伊）
「紹介が未だでしたね。日本海軍中将兼海軍次官の福本伊吹です、ルーデル大佐」

ルーデル
「……あれが上司なの？」

山城
「まあ、直属の上司ですが……悪い人でも無いんですよ」

苦笑しながら答える山城。

ルーデル
「そうなの…だけど、この攻撃機は…大口径の機関砲と言い…私好みの機体ね」

福本（伊）
「それはそうでしょう。何故なら、アメリカ軍がこの世界のあなたの話を聞いて制作した攻撃機ですから」

ルーデル
「ふーん…私がねぇ…もちろん、試乗してもいいんでしょ？」

福本（伊）
「もちろん、但し、先にレクチャーを受けて下さいね。装備が多少変わっていますから」

ルーデル
「わかったわ」

そう言うとルーデルは機体に近付いた。

山城
「福本次官…まさか、この事が『預かる』ですか？」

福本（伊）
「あぁ、そうだ」

シルヴィア
「本当に中将殿はやり手だな」

福本（伊）
「顔が広いと言ってくれ」

山城
「…その表現もどうかと…」

それはそれで当たっていない様な気が……

山城
「……そう言えば、あの雷龍…ちょっと変わってますね。主翼の折り畳み機能あるし、後ろに着艦フックがあるし……」

そこまで言って山城はある事を思い出した。

そう…在学中に鷲井から聞いたある話……。

山城
「…福本次官、あれって、海軍が強襲揚陸に備えて、空母に搭載出来る様に改造した、幻の３７式対地襲撃機『雷龍』Ｋ（艦上）型では？」

福本（伊）
「さすが、山城！　見込んだだけの事はあるな！」

山城
「ですが、あれは試験段階で必要性無しと判断されて、試験機は行方不明の筈…」

福本（伊）
「うむ、だから、空軍次官の田母神俊雄中将に問い合わせたら、１時間後には見付かった」

山城
「……凄いですね」

整備兵
「中将！　こいつを出しますので、退いて下さい！」

シルヴィア
「…まさか、これを飛ばすのか！？」

ルーデル
「当たり前じゃない！　機体特性を知るのはパイロットの基本よ！」

コックピットから声が響く。

山城
「飛ばすのはいいですけど、ガトリング砲は撃たないで下さいね。危ないですから」

福本（伊）
「あぁ、それなら大丈夫だ。海上に射的標的が浮かんでいる。慣れたら何時でも無線で言ってくれ。誘導する」

山城
「……まさか、最後の齟齬って…」

福本（伊）
「そう言う事だ」

ルーデル
「……中将、もしこれが気に入ったら、海軍でも空軍でも、入ってやるわ」

福本（伊）
「そうか、なら、キンキンに冷えた牛乳を準備しておくよ」

ルーデル
「オッケー♪」

次号へ

２０８　サンダーボルト＝雷龍（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２０９　海軍&空軍次官（前書き）

最速で書けたので、２話目投稿します！
しかし、本日東京では、『尖閣映像』を『公開』した元海上保安官が石原東京都知事の前で講演したそうです！
めちゃ聞きたい！（無理だけど……）

２０９　海軍&空軍次官

８月２５日（現世界８月１５日）

……結局、ルーデルは雷龍を乗り回し、標的を３０ｍｍガトリング砲で破壊しまくった挙げ句、正式に派遣軍所属となった。
雷龍とルーデルは翌日、神戸軍用飛行場からこちらの飛行場へと飛んで来た。
そして…終戦記念日になった……

午前中、派遣軍は終戦慰霊の準備に入り、正午にはテレビを引いて慰霊祭、その後、陸海空の指揮官による訓示を行い終了した。

ルーデル
「不思議なものね。私の戦いが過去と成っている世界なんて」

日本空軍の軍服…と言ってもパイロットスーツ…を着たルーデル…言っておきますが女の子…が艦橋に居た。

シルヴィア
「何故、空軍のルーデルが天城の艦橋に居る？」

山城
「色々とあるの…雷龍は空母搭載型、配備先は今のところ未定、決まってるのは搭乗機だけ」

シルヴィア
「…あえて深く訊かないでおこう」

佐野
「そうですよ。今はこうして、伝説のルーデル大佐がこうして居る事を喜びましょう」

……本当にまったりとした空気である。

ジリリリリン

佐野
「はい、こちら、艦橋……艦長、福本次官が来ています」

山城
「福本次官が？　お連れさんは居るかい？」

佐野
「はい……驚いた事に…空軍次官も一緒です」

山城
「わお…有名人は辛いね～」

シルヴィア
「なぜ、空軍次官が出てくる？」

山城
「ルーデルさんの事だよ…さて、シルヴィア、ルーデル嬢、同行して下さい」

天城会議室

福本（伊吹）
「仕事中に悪いな」

山城
「空軍次官を同行しているとなれば、ただ事では無いので」

福本（伊）
「あっはっはっは、そうかそうか…空軍次官の田母神俊雄中将だ」

田母神
「『三軍の三羽烏』の田母神だ。噂は聞いている」

山城
「こちらも、お噂は聞いております。田母神閣下」

シルヴィア
「『三軍の三羽烏』？？」

山城
「現日本軍で有名な3人の三軍の次官達を『三軍の三羽烏』って言うの」

福本（伊）
「その通り」

山城
「それより…田母神閣下を連れて、いったいなに用で?」

田母神
「念のため…と言っておくべきかな?」

福本（伊）
「大筋は決まっているんだが…これから先の事は現場が知っておく事だからね」

山城
「例えば、ルーデル大佐が空母ワスプに配属される…とか?」

福本（伊）
「…よくわかったな」

山城
「雷龍艦上型と配備機が決まっていないワスプを見れば解ります」

田母神
「ルーデル大佐は空軍から海軍への派遣と言う事になる。まあ、結局なにも変わらないと言うことだ」

シルヴィア
「それはいいが……空母搭乗員はプロで無いと出来ぬと筈だが」

福本（伊）
「それについては大丈夫だと思う。まあ、本人の腕次第だな」

ルーデル

「中将、私を誰だと思っているの？　空母だろうと何だろうと、降りてやろうじゃないの！」

田母神
「それは結構。山城少佐、あとは頼むよ」

山城
「了解…としか言えませんね」

その後、色々と打ち合わせを行った。

山城
「そう言えば福本次官、ワスプは何時配備される予定で？」

ルーデルが乗るとなると、出来る限り早期が望ましい。
先ずは感覚掴みからだ。

福本（伊）
「明日の早朝だ」

山城
「あ、明日！？」

天城の上甲板で山城はすっとんきょうな声を上げた。

福本（伊）
「あぁ、インディアナポリスは『蔵王』、ワスプは『征龍』と命名された。明日には…」

山城
「じ～か～ん～！　そう言う事は先に言えって言ってるでしょうがー！！」

……山城が怒鳴る理由、それは艦隊編成に問題があるからだ。
何度も言うように、現在の第零艦隊は……

戦艦３、空母４（＋１）、巡洋艦２（＋１）、イージス艦２、駆逐艦４、潜水艦１（＋１）

……とバランスを欠いた編成である。
脇を固める駆逐艦が少ない（イージス艦を足してもだ）のでは、艦隊行動に支障をきたす。
実際、巡洋艦を差し引いて計算すると、戦艦・空母１隻を１隻で守っている計算になる。
これに巡洋艦と『蔵王』『征龍』を入れるととんでも無い話になる。
しかし、これは単純な計算なので、対空・対潜装備がある扶桑型・日向型ヘリ空母、鳥海などの能力を鑑定しなければいけないが、そんな物は後回しだ。
とにかく、バランスが悪い…この一言で話の大部分が済む。

山城
「このままだと、マジでヤバいんですけど？　死ねって事ですか？
　そうですか？　そうなんですか！？」

福本（伊）
「お、お、お、落ち着け～～、く、く、首が締まる～～…」

山城

「ハッ、すみません！！」

慌て離す山城。

福本（伊）
「うぅ～、死ぬかと思った…それで相談だが、どんなタイプの駆逐艦が必要だ？」

山城
「う～ん…現在通常タイプ…でいいです…ただ、４隻の速射砲への装換が必要かと…」

福本（伊）
「よし、任せとけ！　出来る限りはしてみせるよ」

山城
「程々にして下さいよ…」

次号へ

２０９　海軍&空軍次官（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

210　賽を振り　駒を進め…

9月6日（現世界8月27日）

インディアナポリスこと『蔵王』、ワスプこと『征龍』が配備され、ルーデル大佐は連日、征龍の飛行甲板で発着艦の猛練習を行っていた。
そして、陸上自衛隊・帝国陸軍・ロンメル少将率いるドイツ陸軍は上陸戦訓練に明け暮れていた。

山城
「う～ん……やはり、艦隊は2つに分けるべきだな…」

天城の艦長室で艦隊編成を練る山城。
そこには『第一隊』・『第二隊』と書かれた編成表がある。

コンコン

佐野
「艦長～…と、主席参謀中でしたね」

シルヴィア
「そこは『主席参謀の仕事中』でよかろう」

山城
「どっちでもいいよ…佐野～、そこのインスタントのレモンティー

入れて～」佐野
「了解」

シルヴィア
「それで、何処まで進んだ？」

山城
「ここまで…かな」

編成表

第一隊　先鋒・進路警戒

戦艦天城　巡洋艦鳥海　空母飛龍　ヘリ空母日向・伊勢　イージス艦金剛・足柄ＩＩ　駆逐艦磯波・浦波・綾波・敷波

第二隊　輸送部隊護衛・上陸支援

戦艦扶桑・山城　巡洋艦愛宕・蔵王　空母龍驤・征龍　強襲揚陸艦瑞穂　駆逐艦初春・子日・若葉・初霜

輸送部隊
揚陸艦神州丸　輸送船金華丸・佐渡丸・香椎丸・ありぞな丸他

シルヴィア
「…まあ、艦艇のバランスはともかく、艦隊のバランスは良いのではないか？」

佐野
「上陸支援の第二隊に戦艦・巡洋艦・空母を多めにしましたね。まあ、必要だから仕方ありませんけど」

山城
「あとはこれが午後の会議で通るかどうかだよ…まあ、多分、大丈夫だと思うけど」

シルヴィア
「大変ね～…って、私も出るんだけどね」

佐野
「御二人共、お疲れ様です」

山城・シルヴィア
「「まあ、慣れちゃったけどな（ね）」」

……本当にこの2人は若いのにスゲ～～。（やっぱり、恋人パワー？）

その頃……

陸自隊員
「今井少尉！　今井氷河（ひょうが）少尉！」

「ん、なんだ？」

陸上自衛隊の１０式戦車の車長ハッチから顔を出した1人の少尉…
…彼が今井氷河少尉（２１）である。

陸自隊員
「整備長から、１０式の１２０ｍｍ砲弾が届いたそうですよ」

今井
「お、早いな！　やっぱり、日本陸軍は太っ腹だぜ！」

操縦士
「戦車長、それを言ったら野党が青筋浮かべて、与党は冷や汗が出ますよ？」

今井
「そんな奴らなんか、知らないね。あーだこーだって言って、予算は出さないし、行動は制限するし……こっちの世界がマシ、凄くマシ！」

操縦士
「まあ……車長の言う事も解るんですけどね」

今井
「それに、そんな奴ら、この世界に居ないから」

……もし、この発言を山城達の世界の福島みずほ議員が聞いたらなんと言っただろうか？
……もしかしたら、反対に叩きのめされたりして…。（向こうの世界の自分がどんな馬鹿事を仕出かしたか明らかになって…）

操縦士
「それはもういいとして……第二次大戦級装備の相手に９０式や１０式を持って行く必要があるんでしょうかね？」

今井
「上が持って行くって言ってるんだから、持って行くんだろう。まあ、今の時点で必要どうかなんてわかんないし」

操縦士
「まあ…そうですけど…」

今井
「それにだ、もし、スターリン戦車が出てきたら、2号戦車や3式戦車で撃退出来るか？」

操縦士
「…出来たら奇跡でしょうね」

今井
「だから、俺達が出るんじゃないの」

操縦士
「……なるほど」

次号へ

２１０　賽を振り　駒を進め…（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

211　潜入任務（前書き）

新米士官
「鳩ポッポ…あいつ何者？」

福本
「迷惑者、ＫＹ、（別の意味での）ブッ壊し屋」

マリーダ
「それで今回は『方便』発言……あいつはバカでしょう？」

新米士官
「元々、期待して無かったけど……あんなのが日本の首相だったんだよな……」

211　潜入任務

日本派遣軍・シリルティア王国・ネイラーン王国・アンデュラス王国が対スターリン戦の準備真っ最中の中……

9月11日（現世界8月31日）深夜　ウェスタディア王国のある海岸

クレマン
「はあ～…疲れた」

デュリオ
「潜入しているのに、そんな事を言うな」

クレマン
「しかも、待機期間長いし！」

デュリオ
「はぁ…」

相棒のマイペースぶりに呆れるデュリオ。

クレマン
「そう言えばお前、親父さんと和解したか？」

デュリオ
「…ふん」

クレマン
「やっぱりか…いくら何でも、そろそろ親父さんと話した方がいいじゃないか？」

デュリオ
「…する気は無い」

クレマン
「…そうか（これは教官に相談した方がいいな）」

さて、こんな暢気に喋っているが、ここは敵地である。
クレマン・デュリオの2人は卒業後、頻繁に山城達と接触していた為、第零艦隊に配属されていた。
そんな2人は今回の騒動で、一方の情報収集能力と、一方の軍人としての能力、そして、2人のコンビネーションの強さから敵地潜入の任務が出されのである。
但し、任務を提示した時に山城は「危ない任務だから、拒否も出来る。それに無茶はしなくていい」と言ったのだが、クレマンの「大丈夫ですよ」と陽気に言うので、山城は苦笑しながら認可した。
その後、2人は潜水艦どウェスタディア王国に潜入、今まで情報収集を行っていた。
そして……今夜は脱出する為に海岸に居る訳だが……

クレマン
「それで、潜水艦との会合時間は？」

デュリオ
「もうそろそろだ。敵に見付かっていなければな」

クレマン
「嫌な事を言うな～」

デュリオ
「有り得る事を言ったまでだ」

クレマン
「それはある意味不吉…」

「おい！　海岸に誰か居るぞ！」

「本当だ！　貴様ら、何をしている！？」

この声に2人は慌て左側の岩陰へと逃げ込んだ。

クレマン
「ちっ、なんで都合良く敵が居るんだよ！？」

デュリオ
「多分、擬装した監視所か何かが設置されてたんだ…迂闊だった」

2人共、隠し持っていたホルスターから零式拳銃を抜くと、マガジンを入れ、初弾を装填する。

デュリオ
「敵は通常装備だ…フリントロック式小銃なのは幸いだ」

クレマン

「幸いか？　これでソ連兵が来たらヤバいぞ？」

デュリオ
「…潜水艦が早く来てくれるのを期待するしかないな」

クレマン
「はぁ～…マジかよ」

「不審者に告ぐ！　武器を捨てて出てこい！」

クレマン
「嫌なこった！」

パン！

威嚇目的か、向こうが撃ってきた。

「もう一度、警告する！　武器を捨てて出てこい！」

デュリオ
「無駄だと言った筈だ」

バーン！

今度はデュリオがお返しとばかりに撃った。
そこからは、お互い銃を乱射する銃撃戦となった。

水兵
「艦長！　会合地点で発砲炎！！」

木梨
「くっ…主砲及び機銃、撃ち方用意！！　銃火が多い方に撃て！」

半潜航行で会合地点に向かっていた伊２９は、海岸で銃火を確認した。
木梨艦長の号令に、再び設置された１４ｃｍ砲と艦橋後部の４０ｍｍ機銃・２５ｍｍ機銃の防水カバーを取り払う。

水兵
「４０ｍｍ及び２５ｍｍ機銃準備完了！」

木梨
「撃て！」

ドドドドド！

タンタンタンタン！

独特の発射音を響かせ、海岸へと銃弾が飛んでいく。

下士官
「主砲用意よろし！」

木梨
「撃て！」

ドーン！！

ドオーン！

着弾と同時に一方からの銃火が止んだ。

水兵
「海岸より合図！」

木梨
「回収を急げ！！」

急いでゴムボートを出して2人を回収、急いでゴムボートを直し、主砲・機銃に防水カバーを掛け、急速潜航で離脱した。

木梨
「遅れてすまなかった。しかし、無事で良かった」

クレマン
「いえいえ、グッドタイミングでしたよ」

木梨
「そうか。まあ、行き同様、狭い艦内だがゆっくりしてくれ。それと、艦隊が本日出撃した」

デュリオ
「艦隊が出たんですね！？」

木梨
「あぁ…急いだ方が良いかね？」

デュリオ
「出来ればお願いします」

木梨
「よし、出来る限りなんとかしてみよう」

次号へ

２１１　潜入任務（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２１２　一抹の不安

９月１４日

天城艦内会議室

山城
「それは本当なのか？」

伊２９と会合し、クレマン・デュリオを会議室に最新情報を報告させる為に呼び寄せた。
そして、そこで報告されたのは余りにも衝撃な事実だった。
それは……敵に転移艦隊が存在する…と言う物だった。

クレマン
「間違いありません。港の労働者達から話を聞きまくりましたから」

デュリオ
「クレマンの話は事実です。港の一区画が一部を除き立ち入り禁止。港の労働者の噂のネタに成っています」

会議室の空気が刻々と暗いものに変わっていく。

シルヴィア
「それは解った！　規模と艦影はどんな風なのだ！？」

空気を吹き飛ばすか如く、シルヴィアが叫んだ。

デュリオ

「規模は１０隻以上。艦影は…そうですね、金剛や足柄に似てた様な…」

山南
「山城、これは少し不安材料だな」

山城
「えぇ……敵の艦隊規模と正体が解らないだけに余計ですね」

小澤中将
「やはり、艦隊を合流させるか？」

山南
「いえ、合流して裏をかかれては意味がありません。このままいきましょう」

山城
「他には無いか、２人共？」

デュリオ
「向こうは建物に工作していますね。住民を巻き込む可能性は大です」

山城
「やっぱり…か」

全員
「「「「「「「「「はぁーーぁ……」」」」」」」」」

スターリンの何時もの手口と言うべきか……一般人も平気で巻き込

もうとする奴のやり方に誰もが溜め息を吐く。
山城や山南少将も相手の正体が解っていたから予想も出来ていたが、
ほとほと懲りない奴だ……と思っていた。

山城
「はぁ…さて、どうした物かね…」

2人の報告終了後、内心頭を抱えながら山城・シルヴィアは艦橋に上がった。
それは山南少将・小澤中将も一緒だったのだが…。

佐野
「お帰りなさい。艦長、シルヴィアさん」

山城
「おう、ご苦労様」

宮里
「で、あの2人はなんて？」

山城
「まあ…手短に言うとだな…」

そこで手短に報告内容を話した。
それを聞いた人間は……

全員
「「「「「「あぁ、やっぱり…はぁーーぁ…」」」」」」

会議室同様の溜め息が艦橋でも……

風華
「でも、その艦隊は気になりますね」

山城
「今のところ、一番の懸案事項です」

相手の正体が見えないから余計なのだが…。

天城
「艦長も大変ですな」

そう言いながら、天城が転移してきた。

山城
「えぇ…大変なのは何時も通り…」

佐野
「艦長、その女(ひと)は誰ですか？」

宮里
「今まで艦内で見たこと無い女(ひと)だよな？」

山城・天城・シルヴィア
「「「……」」」

3人共、驚きながら顔を見合わせた。

山城
「お前ら…まさか見えてる?」

宮里
「何を言ってるんだ?」

佐野
「怖い事を言わないで下さいよ～、艦長～」

シルヴィア・天城
「「……」」

宮里
「…なあ、何で2人は黙ってる?」

佐野
「…あ、あの…喋って下さいよ…本当に背筋が冷たくなるじゃないですか…」

山城
「…お前ら……今から言うことをよ～～く聞いてくれよ」

……そこから、天城の艦橋では大騒ぎであった事は言うまでも無い。

佐野
「艦魂って…本当に居たんですね」

宮里

「俺としては見れるのが驚きだ」

風華
「私は気配は感じていましたけど…」

天城
「…何故だろうな？」

山城
「私に話を振らないで下さい」

シルヴィア
「これでやっと、痴話喧嘩が少なくなる」

天城
「…なんだと？」

全員
「「「「「喧嘩なら甲板でやって下さいよ」」」」」

天城・シルヴィア
「「総ツッコミ！」」

山城
「……当分、騒がしいな～」

次号へ

212　一抹の不安（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２１３　次元を越えた戦い（前書き）

いよいよ、敵艦隊の正体が明らかになります……大丈夫か！？（色んな意味で）

２１３　次元を越えた戦い

９月１６日

佐野
「艦長！　小澤中将！　水上レーダーに艦影探知！！」

小澤中将
「艦隊全艦戦闘配置に就け！」

山城
「総員戦闘配置！」

ウェスタディア王国領海進入直後に敵艦隊と接触した第零艦隊。
まあ、予想済みなのだが……

小澤
「さて、正体不明のまま敵艦隊と接触したな」

山城
「いきなり核を撃ってこない事を祈ります」

……これはマジです。

佐野
「艦長、ここは任せて、防空指揮所に上がって下さい」

山城

「ん、じゃあ、ここ頼むわ」

そう言うと山城は防空指揮所に上がった。

防空指揮所

シルヴィア
「やっと来たか」

山城
「ごめんごめん」

防空指揮所に上がるとシルヴィアが開口一番に言った。

天城
「シルヴィア、艦長を困らすな」

シルヴィア
「困らせてない」

山城
「戦闘前に痴話喧嘩は止めて下さいよ」

勃発前に釘を刺しておく。

佐野
『艦長！　艦種解析の結果ですが…』

伝声管から佐野の声が響いた。

山城
「お、どうだった？」

佐野
『本艦のデータにありませんでした。ですから、日向の滝口少将に渡してみました。そしたら…』

山城
「そしたら？」

佐野
『…韓国海軍艦艇だと言う事です』

山城
「……え？」

この時、山城は滝口少将達が転移して来た時の事を思い出した。

山城
（……確か彼らは対馬奪還の為に現場に向かっている途中に核ミサイルの爆発で……まさか、その時の韓国海軍艦艇が……あり得る話だが…）

……まさか、相手に無線で訊く訳にはいかないし……

佐野
『艦長、対空レーダーに飛翔体感知！　対艦ミサイル！』

この報告に山城は意識を現実に引き摺り戻された。

山城
「小澤中将！　今すぐ、滝口少将に連絡し、金剛、足柄、日向、伊勢、それに愛宕に迎撃命令を！！」

小澤中将
『…わかった』

さて、３話程前に今回の艦隊編成を見せたと思うが、一部変更があり、第２隊の愛宕が第１隊に移動していた。
これは山南少将の御厚意で第２隊の打撃隊から第１隊の先鋒隊へと配置転換していたからだ。

佐野
『ミサイルはアメリカのＲＧＭ－８４ハープーン、あるいはその改良型です。それが本艦隊に向け第一波１０数発、続いて第二波１０数発です』

山城
「標的はどれか解るか？」

佐野
『それについては何とも…ただ、向こうもレーダーに捉えている以上は本艦を指向していると思います』

山城

「合理的ではあるな……後はこちらの対ミサイル迎撃能力に賭けるしかないな」

流石の山城も、本格的なミサイルの撃ち合いは初めてである。
だからこそ、混成艦隊に等しい第零艦隊の初のミサイル戦は個々の能力に託すしかなかった。

その頃……韓国艦隊（セジョンデワン）旗艦世宗大王

士官
「司令、ミサイルは倭奴に向かって順調に飛んでいます」

士官の報告に艦隊司令のリ・ヨンハン中将は頷いた。滝口少将達の世界から、海上自衛隊同様に核ミサイルの爆発に巻き込まれ転移した韓国艦隊は辿り着いたウェスタディア王国でスターリンと接触、ウェスタディア王国と協力すると言う事で受け入れられた。
ちなみに、スターリンは彼等に「日本が前国王を爆殺した」と言ったりしている。

リ中将
「倭奴人共め…この世界でも他民族を苦しめるか…鉄槌を下してやろう」

……果たして、その認識（歴史・状況を含め）が正しいかどうかは別問題なのだが……。

天城艦橋

オペレーター
「第一波接近、迎撃開始します」

オペレーターの声が合図であったのか如く、レーダースクリーンに新たな光点が映った。
愛宕・金剛・足柄から発射された対空ミサイルだ。

佐野
（前は砲撃戦で、今回はミサイル戦か……なに、この様変わりは？）

レーダースクリーンを見ながら、人生で2度目の実戦がいきなりの近代戦とゆう事実を実感する佐野。

小澤
「……これが未来の戦いなのか？」

佐野
「はい、殆ど敵の姿を見ない内に終わります。もはや、人間だけの能力では何も出来ません」

小澤中将の質問に丁寧に答える。
実際、第二次大戦では砲撃戦で3万～4万、夜戦では2万～1万以下と言うレベルである。

佐野
（それで今度は１０万メートルから始まる訳か…）

オペレーター

「迎撃ミサイル群、第一波と接触します！」

この声にレーダースクリーンを見ると、対空ミサイルが対艦ミサイルに命中し、レーダーから消えていく。

オペレーター

「第一波迎撃成功！　続いて第二波迎撃…敵艦隊より、第三波・第四波発射！」

まだまだ長くなる…佐野はそう思った。

次号へ

２１３　次元を越えた戦い（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２１４　天城被弾（前書き）

新米士官
「大変だ、大変だ、大変だ！！」

福本
「…朝から騒がしいですね」

新米士官
「騒がずにいられるか！　あの中共野郎、今度は高性能対艦弾道ミサイルを配備するらしいぞ！」

マリーダ
「あの国も飽きないわね…まあ、『高性能』は眉唾物だけど」

新米士官
「反捕鯨団体と言い、中共野郎と言い…余程日本を虐めたい様で（怒）」

福本・マリーダ
（（また、殺っちまえ！…って言うぞ））

２１４　天城被弾

天城防空指揮所

佐野
『第二波迎撃成功しました。第三波来ます！』

山城
「…両舷銃座及び高角砲座要員は主要装甲区画に退避！」

既に第二波は近接迎撃範囲の一歩手前でミサイルにより迎撃された事から、山城が決断した。

シルヴィア
「まったく、予想外の戦いになったな」

山城
「相手が『韓国海軍』であった事以外は予想内だったけどね」

つーか…韓国って……大丈夫なのか？

佐野
『第三波、半数迎撃…半数近接迎撃範囲に接近！』

山城
「…了解」

報告されても、天城に速射砲や２５ｍｍ六銃身単装自動稼働機関銃

の様な迎撃火器は搭載していない為、ただ山城は返事をするしかない。
その間にも、愛宕・金剛・足柄・日向・伊勢の速射砲や自動稼働機関銃・シリウスがハープーンを迎撃する。

佐野
『第三波迎撃成功！　続いて第四波の迎撃は……』

山城
「どうした！？　報告せよ！」

佐野
『半数はミサイル、３発は速射砲迎撃成功…ですが３発本艦接近！』

山城
「（やっぱりか……下手に鳥海や飛龍に当たるよりマシか…）総員衝撃に備えろ！」

伝声管に叫ぶ山城。
その間にも、ハープーンは迫る。
金剛・伊勢のシリウスにより、２発が迎撃されたが、最後の１発が金剛の前をすり抜けた。

山城
「来るぞ！　踏ん張れー！」

ヒィーーン……

ガガーン！！！

少し前……金剛艦橋

オペレーター
「ハープーン接近！　ＣＩＷＳ迎撃に加わります！」

篠田大佐
「１発も抜かせるな！　撃ち落とせ！」

ブオオオオン！

ドンドンドンドンドン！

速射砲・ＣＩＷＳが唸り１発が、伊勢が１発を迎撃した。
しかし、最後の１発が嘲笑うかの様に金剛の前を通過した。

篠田大佐
「くそ、抜けられた！」

ヒィーーン……

ガガーン！！

こんごう
「天城司令！？」

叫んだこんごうは慌て天城に転移した。

シルヴィア
「……ん？」

ハープーン着弾時に慌て近くにある物を掴んだシルヴィアは、それが異様に暖かい事に気が付いた。恐る恐る目を開けると、そこには……山城の横顔があった。
そう……現在のシルヴィアは山城に抱き付いている格好になっている。

シルヴィア
「な、な、な、な、な、な！！」

山城
「あ、やっと気付いた？　いや～、服を掴まれたからとっさにしたけど、大丈夫みたいだね」

トマト並みに真っ赤になったシルヴィアにそう言いと、伝声管に叫んだ。

山城
「佐野！　被害報告！！」

佐野
『第二主砲塔付近の右舷船体命中！　命中した箇所の防水区に少量の漏水！　されど、戦闘・航行に影響無し！　被害微小！』

この報告に後ろにいる天城を見た。
そこにはケロリとして、驚くこんごうと話す天城が居た。

山城
「わかった…警戒を続けてくれ」

韓国艦隊旗艦世宗大王艦橋（セジョンデワン）

リ中将
「…命中したんだな？」

士官
「はい、命中しました。しかし、レーダーには映ったままです」

指揮下の１２隻から４回４８発のハープーンを発射したが、命中はたった1発だけだった。
しかも、レーダー上では『敵大型艦』は浮いている。

リ中将
「よし、標的を変更して、周りの艦艇を攻撃しよう」

士官
「わかりました」

……未だに正体を掴んでいない韓国艦隊であった。

その頃……伊２９

木梨大佐
「奴等め…全く海中を警戒していないのか？」

潜望鏡を覗きながら木梨艦長は呟いた。
木梨艦長率いる伊２９は韓国艦隊の近くにいた。
ちなみに、海には深度や海流、塩分濃度などの関係で音波を伝わり易くなったり、反対に伝わり難くなったりするのである。
実は木梨艦長はデュリオ・クレマンの２人を輸送する際、この一帯の海を観測していたのである。
ちなみに、木梨艦長にこの事を教えたのは神戸鎮守府の井上政美中将であったりする。
伊２９はこれに隠れて韓国艦隊に接近していたのである。

木梨艦長
「魚雷発射用意。奴等に叩き込む」

士官
「大丈夫でしょうか？　いくら向こうの雑音に紛れているとはいえ、金剛や足柄同様、近代艦艇ばかりですから…」

山城達の世界の帝国海軍士官が、木梨艦長に不安を述べる。

木梨艦長
「それなら、向こうは既に我々に気付いている。ここで見物なんて出来ん」

士官
「はあ…」

木梨艦長

「それにだ…向こうはこの海に不慣れだ。それが狙い目だ」

次号へ

２１４　天城被弾（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２１５　第二隊交戦ス

それは唐突だった。
新たな標的にミサイルの照準をしている時に密かに襲い掛かった。

ガガーン！ガガーン！ガガーン！

リ中将
「なんだ！　どうした！？」

士官
「大変です！　敵の襲撃です！」

リ中将
「なに！？」

慌て艦橋の窓から見ると、艦隊の一部が欠けていた。

士官
「蔚山（ウルサン）型の忠南（チュンナン）・馬山（マサン）と広開土大王（クァンゲトデワン）が被弾！　忠南・馬山轟沈、広開土大王が大傾斜…手がつけられません！！」

リ中将
「敵が近くに居るぞ！　探し出して撃沈しろ！　付近の艦艇は救助作業に入れ！」

その頃……第二隊旗艦扶桑艦橋

士官
「天城より打電。『我れ、被弾するも損傷微小。戦闘・航行に異常無し』」

山南
「そうか…（念のために愛宕を配備しておいたのは吉と出たか）」

山南少将は内心安心していた。
まあ、小澤中将はミサイルの撃ち合いに関しては時代が違うから対応出来ないかも知れないが、山城や佐野といった人間が居るから大丈夫だろうと思っていたが、実際そうなったので安心していた。

山南
「さて、問題は別動隊がいるがどうかだが…」

オペレーター
「水上レーダーに反応あり。3時の方向より艦艇9」

参謀
「お出ましですな」

山南
「うむ、全艦戦闘配置！　対ミサイル戦用意！　これは実戦である！　手を抜いた奴は帰ってからトラック50周だ！」

第二隊がレーダーに捉えたのは忠武公李舜臣（チュンムゴンイスンシン）型駆逐艦6隻、蔚山型フリゲート3隻の艦隊だった。

もちろん、９隻はリ中将の指示により、後方の輸送船団を撃滅すべく接近して来たのである。
９隻はレーダーに映った１０隻…第二隊…を護衛部隊と認識し、邪魔されない為にハープーンを発射した。
護衛部隊を先に叩いたのは別に問題は無かった……正体を知らなかった点を除けば。
何せ、扶桑・山城を除けば蔵王、征龍（インディアナポリス）、瑞穂、初春、子日、若葉、初霜は同レベル艦ばかりだ。
蔵王は船体後部の第３主砲塔を撤去し、対空・対艦・対潜ミサイルを設置し、機銃・対空砲を自動稼働機関銃・速射砲に装換している。
征龍はアメリカ独特の空母艦橋に速射砲・対空ミサイルを設置し、銃座に自動稼働機関銃を設置した。
つまり、２隻は対ミサイル戦に対応出来る状態であった。
瑞穂も自動稼働機関銃・垂直発射式対空ミサイルを装備しており、第二隊は全艦でハープーンに対抗した。

オペレーター
「ハープーン９発、本艦隊に接近！」

山南
「迎撃する。撃て」

艦長
「てぇー！」

バシュウ！

発射された『征空』対空ミサイルが迎撃目標に向かう。
そして、レーダーの光点がこちらに向かう光点とぶつかって消えた。

オペレーター
「ハープーン全弾迎撃！」

山南
「反撃する、各艦『桜花』発射！」

瑞穂・征龍以外の艦艇から『桜花』対艦ミサイルが発射された。
８発の桜花は忠武公李舜臣型駆逐艦の迎撃を受けながらも、２発が迎撃網を突破し蔚山型の釜山（プサン）・全州（チョンジュ）に命中した。
さすがに２隻は大破、僚艦の済州（チェジュ）が救助作業を行っている間に、残りの忠武公李舜臣、文武大王（ムンムデワン）、大祚栄（テジョヨン）、王建（ワンゴン）、姜邯賛（カンカムチャ）、崔瑩（チェヨン）の駆逐艦６隻はそのまま、ハープーンを発射しながら突撃し出した。

天城防空指揮所

佐野
『レーダーから判断して敵艦２隻が撃沈、１隻が大破した模様です』

山城
「わかった…木梨大佐も無茶をやるな。だが、お陰で韓国艦隊の目は一時的に反らせた訳だ」

駆逐艦で酸素魚雷を食らえば撃沈か大破……大破でも、ほぼ戦闘不能になる。
これにより、戦闘可能艦は９隻……。

山城

「……小澤中将。具申があります」

次号へ

２１５　第二隊交戦ス（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２１６　誤算（前書き）

新米士官
「防衛省が対ステルスレーダー網を構築するそうですよ。もちろん、お金は掛かるけど」

福本
「国防に金を掛けるのは当たり前だろう。つーか、金が掛かるのは当たり前」

山城
「国防に金を使わないで国を護れるなんてのは絵空事です」

新米士官
「なのに、この国は国防予算減らしてるし……」

マリーダ
「アジアがホットゾーンに成ってるのにね」

シルヴィア
「現実と小説の世界は大違い」

新米士官
「国産ステルス機！　空母（護衛空母でもいい）！　原子力潜水艦！　核装備！　今すぐ揃えろ！！」

４人
（（（（本当、この作者は朝から元気だ（ね））））

216　誤算

忠武公李舜臣型6隻となった別動隊は30ノットで第二隊へと迫った。
どうやら、この別動隊の指揮官は一度頭に血が昇ると暴走する指揮官だった様だ。
しかし、それが我が身を滅ぼす事になった…。

扶桑艦橋

オペレーター
「敵艦隊接近！」

山南
「駆逐艦のみで突っ込んで来るとはな……主砲戦用意」

艦長
「主砲戦用意！　弾種対艦榴弾！」

この対艦榴弾…正式名称『30式対軽装甲艦榴弾』…は戦艦残存を決めた日本海軍が開発した砲弾で、駆逐艦などやタンカー・貨物船などの『障子紙の様な船』に発砲する際に使用される砲弾である。
その為、過剰な装甲貫通能力は求められず、信管も触発信管並みの調整がされている。砲術長
『主砲弾装填完了。レーダーデータリンク良し。砲戦準備完了』

山南

「距離は？」

オペレーター
「４万５０００です」

山南
「お互い近付いたな……撃て」

艦長
「てぇー！！」

ズドドーーン！！

扶桑に続き山城の４１ｃｍ主砲９門が火を吹いた。
この１８発の主砲弾が飛来した時、別動隊は慌て対空ミサイルで迎撃した。
しかし、ミサイルで砲弾は止められず、迎撃は失敗、１８発がそのまま着弾した。

結局、５回の一斉射により、別動隊は救助にあたっていた済州（チェジュ）と崔瑩（チェヨン）のみが帰還…旗艦の文武大王（ムンムデワン）は最初に主砲弾が命中し撃沈された……。

天城防空指揮所

シルヴィア

「艦隊を２つ分けたのは解るが、僅か４隻で敵艦隊に殴り込みか」

山城
「まあ、護衛に金剛・足柄・愛宕を付けているから大丈夫さ」

天城
「愛宕は艦長と愛宕の志願だがな」

山城
「そうですね。残りは鳥海・飛龍を中心に第二隊と合流させますし」

佐野
「艦長。宮里砲術長達に確認しましたが、対艦榴弾の方は在庫無しです」

山城
「う～ん、やっぱりか…なら、通常徹甲弾を使うしかないか」

頭を掻きながら呟く山城。

佐野
「無い物ねだりしても仕方ないですからね」

山城
「そうだな…よし、行こう」

天城・愛宕・金剛・足柄ＩＩの４隻は韓国艦隊に向かって行った。

韓国艦隊旗艦世宗大王艦橋（セジョンデワン）

リ中将
「壊滅？　別動隊がか！？」

士官
「はい…残存艦の済州・崔瑩は現在撤退中です」

リ中将
「バカな…情報では倭奴艦隊は１０隻程度の筈だぞ？　あとは傀儡国の艦隊が守っている筈では無かったのか！？」

士官
「いえ…どうやら、ハープーンを迎撃された後、ミサイル攻撃を受け、巨砲の攻撃も…」

リ中将
「バカな…倭奴の海軍に巨砲搭載艦など無かった筈だ…」

実はこの時点で、お互いの認識が異なっていた。
スターリンからすれば、『日本海軍』は戦艦・空母を加えた世界三大海軍国の事であった。
しかし、リ中将ら韓国海軍からすれば、『日本海軍』とは同じ装備を保有する海上自衛隊の事である。
つまり、お互いの認識に誤差が有りすぎたのである。そして、彼らはその認識違いを嫌と言う程、思い知らされるのである。

オペレーター
「敵艦隊接近！」

リ中将
「なに！　数は！？」

オペレーター
「例の大型艦１、中型艦３！」

士官
「僅か４隻？　しかも、傷付いた艦を従えて？　倭奴は馬鹿ですな」

リ中将
「馬鹿者！　急いで戦闘態勢だ！」

佐野
『艦長、距離４万８０００に接近！』

山城
「うむ…面舵一杯！　砲戦用意。３艦にも連絡」

佐野
『了解』

天城
「１０門で旗艦級イージス艦３隻を砲撃すると言うのは驚きですな」

山城
「まあ、不可能では無いが難しい事は確かですからね」

次号へ

216　誤算（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２１７　韓国威信の最後

天城が面舵をきった頃には、主砲１０門は敵艦隊を指向していた。

下士官
「砲術長、砲戦よろしい」

宮里
「わかった。さて、大穴開けて沈めるか」

徹甲弾の特性を知る砲術科の宮里はそう呟くと照準器を覗いた。

防空指揮所

山城
「目標敵艦隊輪形陣中心セジョンデワン型主力イージス艦３隻！」

佐野
『よーろそ！』

宮里
『全主砲塔員、天城に被弾を１０倍返しだ！』

砲術員
『『『『『『『『『『了解！！』』』』』』』』』』

シルヴィア

「力み過ぎであろう」

山城
「まあ…理由は解るけどね」

主砲が仰角を調節する。
そして……

宮里
『砲術長より、砲戦用意よし』

山城
「…撃てぇぇ！！」

ズドドーーン！！

韓国艦隊旗艦世宗大王艦橋

オペレーター
「敵大型艦、ミサイル発射！」

士官
「なに！　数は！？」

オペレーター
「１０発…は、速い！　て、敵は超音速ミサイルを撃ってきたのでしょうか！？」

士官
「し、知るか！　司令！？」

リ中将
「急いでミサイルで迎撃しろ！」

バシュウ！

迎撃の対空ミサイルが慌て発射された。
しかし……

オペレーター
「…全弾外れました！」

士官
「なに！？」

……当たり前だ…砲弾でミサイルは迎撃出来ても、砲弾をミサイルで迎撃するのは困難なのだ。

オペレーター
「ちゃ、着弾します！」

ヒューーン……

ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！
ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！

リ中将
「な、なんだと！？」

命中はしなかった……その代わり、艦橋を余裕で越える水柱が１０本、周囲で現れた。

士官
「み、ミサイルでは無かったのか！？」

オペレーター
「自分に訊かれましても…」

水兵
「大変です、艦長！　先程の攻撃による水中爆発で、船体の一部に歪みが発生！　浸水しています！」

艦長
「なに！？」

……ここに『経験無き海軍』のボロが出た。
つまり、実戦と言う経験・歴史が無い為に、船体のどこをどうすればいいか解らない…とゆう『経験鉄則』が無い。
また、世宗大王型（セジョンデワン）は余りにも重装備の為（ミサイルの発射台が１２８もあるそうだ）、トップヘビーになっている。（また、嘘か本当か、艦の建造費が高額で、肝心のミサイルが買えないとかと言う噂があるそうだ）
そして、この水中爆発の浸水はトップヘビーの世宗大王型にジワジワとダメージを与えていた。
しかし……旗艦セジョンデワンはそれを余り経験する事は無かった。
何故なら、着弾から修正した天城の３斉射目が……

オペレーター
「次、きます！！」
艦長
「か、回避！！」

オペレーター
「だ、ダメです！　当たります！！」

ヒューーン……

ズボ

…装甲が無きに等しい為、この様な音になったが、それよりも、命中した箇所が悪過ぎた。
何せ、後に『どちらが先に爆発したのか？』と論議される事になる程だった。
それは……前部甲板ＶＬＳ……４１ｃｍ砲弾がミサイルの発射台に命中、爆発は砲弾が先か、ミサイルが先か…どちらにしろ連鎖誘爆により、一気に破壊力を出した。

リ中将
「う、ウワァァァァァ！！！！」

叫びと共に、艦橋が閃光に包まれた……

天城防空指揮所

佐野

「弾着…9！」

山城
「9…まさか！」

ズガガガガガガン！！

その時、韓国艦隊の方向から閃光と爆発音が響いた。
そして、黒煙が黒々と立ち上った。

シルヴィア
「爆沈…した様だな」

佐野
『艦長、3隻の内、真ん中にいた艦が爆沈しました。どうやら旗艦だったらしく、敵艦隊が混乱しています！』

山城
「今しかないな…金剛・足柄・愛宕に連絡」

佐野
『了解』

その後は一方的展開となった。
金剛・足柄の放った対艦ミサイルが同じ世宗大王型の票谷李珥（ユルゴクイイ）、権慄（クォンニュル）にハープーン・ＳＳＭ－１Ｂ（９０式艦対艦誘導弾）が襲い掛かった。

本来の能力を生かせば2隻はミサイルを迎撃出来ただろうが、旗艦爆沈の混乱、世宗大王爆沈の破片が両隣に居た2隻に襲い掛かり、イージス・レーダー・一部武装に損傷を与えていた。
この為、2隻はハープーン・ＳＳＭ－１Ｂの直撃を受けた。
愛宕は桜花により、重装備・トップヘビーの公開土大王型駆逐艦の己支文徳（ウルチムンドック）、楊万春（ヤンマンチャン）に命中させて撃沈している。
もちろん、韓国艦隊もハープーンで反撃するが、個々にバラバラで反撃するので、各個迎撃された。
そして、主力艦撃沈に残存艦艇は大慌てで救助を行い撤退した。

佐野
「残存艦艇はどうしましょうか？」

山城
「向こうに戦意は無い…追撃しなくてもいいだろう。それより、早く山南教官と合流しょうか」

佐野
「はい」

次号へ

２１７　韓国威信の最後（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

218　航空攻撃

その後、天城・愛宕・金剛・足柄ＩＩは無事に山南少将率いる第二隊と合流した。
被害は天城のハープーン一発のみで、作戦自体に別段影響は無い為、そのまま参加する事となった。

9月17日　天城艦橋

佐野
「艦長。対空レーダーに反応探知、偵察機です」

山城
「まあ、予想はしてたけどな…上空に直衛はいるか？」

佐野
「はい。龍驤の『水風』3機です」

シルヴィア
「それは元第二隊の指揮下であろう」

山城
「そうなんだけど…」

佐野
「艦長、山南少将からです。『教官からの問題。この場合、偵察機

をどうするか？』」

山城
「そうだな……迎撃するフリをして、偵察機を逃がし、敵を誘い出す」

佐野
「その理由は？」

山城
「1、敵航空隊の把握。2、敵航空隊の戦力撃破。3、制空権の確保…大まかには以上」

佐野
「わかりました」

扶桑艦橋

山南
「ふむ…現状にあった、あいつらしい答えだな」

参謀
「では？」

山南
「うむ、直衛には迎撃するフリをする様に伝えろ」

参謀

「わかりました」

命令を受けたハリアーＪこと水風３機は直ぐに偵察機を迎撃する『フリ』をした。
慌てたのは迎撃された偵察機の方で、偵察機はツポレフＳＢ－２爆撃機。
水風に終われながら、艦隊を確認すると、とにかく位置を打電し、さっさと逃走した。

山城
「佐野、宮里。対空戦用意」

佐野
「わかりました」

宮里
「了解」

小澤中将
「艦長、段々と主席参謀らしく成ってきたな」

山城
「こうなったら、勝手に慣れちゃいますよ」

苦笑しながら山城が答えた。

数時間後

佐野
「対空レーダーに反応有り！　敵攻撃編隊です！」

小澤中将
「前は空母。今度は陸上基地からか」

山城
「はい…佐野、異様に速いのは有りそうか？」

佐野
「…今のところはありません。水風隊、出ます！」

山城
「こちらも迎撃だ。飛龍に連絡」

艦隊上空

岡田
『先輩。飛龍から迎撃命令です』

大澤
『よし…行くぞ、２人共！』

ヴィクトリア

『はいはい』

迎撃の為に上空で待機していた飛龍戦闘機が前に出た。
そして、艦隊上空付近で空中戦が発生した。
護衛の戦闘機はポリカルポフＩ－１６、爆撃機はツポレフＳＢ－２・イリューシンＩＬ－４の２機種。
しかし……どちらにしろ、ハリアーＪ『水風』や烈風・紫電改に敵う訳がない。
実際、護衛のＩ－１６が半数になるまでそれほど時間は掛からなかったし、同様に、ＳＢ－２・ＩＬ－４も半数になるまでの時間も掛からなかった。

天城艦橋

小澤中将
「さすがに今回は上には上がらんか？」

山城
「えぇ…多分、大丈夫ですから…ですが、窮鼠猫を噛むと言う諺がありますから、油断は出来ませんが」

佐野
「艦長、その諺通りになりました。何機か突破した様です。輸送部隊に向かっています」

山城
「やっぱりか…どの艦が対応している？」

佐野
「初春・若葉が担当…あ、ミサイルで撃墜しました」

山城
「陸軍の防空船もいるし、ソ連軍がまともな対艦攻撃を行えるかは疑問だが……ハープーンでも来ない限りは大丈夫だと思う」

結局、ソ連軍の攻撃隊は戦闘機・爆撃機共に3分の2を失い、無惨に撤退していった。

その頃……王城

スターリン
「……航空部隊も壊滅だと…！？」

王城の一室で航空隊壊滅に驚くスターリン。
実際、前回よりも多数の航空を送り込んだのだが……

スターリン
「劣等のアジア人艦隊も役に立たなかったか…どいつもこいつも役に立たん！」

1人で吠えるスターリン……しかし、何も変わらないのである。

次号へ

２１８　航空攻撃（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２１９　陽動作戦（前書き）

新米士官
「…あんまり、今回の地震についてはあーだこーだ言わない気だったけど、さすがに言わせてもらいます……北沢、腹切れ」

福本
「あ～、政府専用機に家族同行させるって話がおじゃんになった事か」

新米士官
「『外務省から何の電話も無かった』…って、いざ戦争に成ったら、一心同体で戦う役所が平時の緊急事態に電話しないってバカか！？」

マリーダ
「エルトゥールル号の感動話をしてみる？　特に明治天皇が軍艦を出して送還する時の話を重点的に」

新米士官
「やってやれ！　だいたい、ニュージーランド政府の要請なんぞ待たんと、『日本人の生命を守る為、僭越ながら緊急救助隊を派遣する！』って言えば良かったんだ！」

福本・マリーダ
（（トーンは抑えようよ…））

219　陽動作戦

9月18日早朝

昨日の対空戦を難なく切り抜けた第零艦隊。
そして、第零艦隊は次の一手を打ち出した。

天城艦橋

佐野
「水風隊発進します」

山城
「よし、作戦通りだな」

軽空母龍驤から次々とハリアーJこと水風が飛び立って行く。
もちろん、任務だが。

佐野
「また、ルーデル嬢が騒ぎますね」

山城
「う～ん…今のところは我慢してもらうしかないな」

シルヴィア
「また通信室が占拠されたらどうするのだ？」

山城
「……痛たた…」

真相はこうだ。
昨日の対空迎撃戦後、あまりにも出番が無いルーデル大佐が征龍通信室に乗り込み、山城に『出番は未だか!?』と訴えた。
これに山城は『明後日には出番が有りますから!』等を言って何とか抑え、征龍艦長に何度も謝罪した。
まあ、その艦長が温和な性格で神戸士官学校の先輩だったから良かったが。

宮里
「それだと、山城は頭痛と腹痛のタネが増えるな」

風華
「それはそれで体に毒ですよ、艦長さん」

山城
「う～…心配されてもな～」

天城
「だが、あの様な我が手の内を曝すような事をやって作戦は成功しますかな?」

山城
「まあ、成る様にしか成りませんからね…どう転んでも、攻め手は我々ですから…それに、街に砲弾を撃ち込むのは出来る限りは避けたいので」

そんな夢見の悪い事は余りしたくない。

出来れば、スターリンだけをピンポイントで殺れればこれ程楽な話も無いが……。

シルヴィア
「私としては、あの王子を一発でいいから、直接ブン殴らせてくれれば、文句は無いぞ」

佐野
「あの…シルヴィアさん？　マリーダ参謀長が某変態にキレた時並みにどす黒オーラが後ろに見えるのは気のせいですか？」

佐野は冷や汗をかきながら指摘し、周り（山城を除く）も少し引いていた。

山城
「触らる神に祟り無し…だな」

本当に……女性の怨みは怖いです。

さて、天城との会話上に出てきた『手の内を曝すような事』とは、水風隊の任務と関係する事だった。
当初は飛龍の艦載機でも良かったのだが、韓国艦隊の出現で、念のためを考え水風隊に出撃要請が下った。
そして……その任務とは……

王城の一室

キィィィィン……

スターリン
「…なんだ？」

執務室で今後の事を考えていたスターリンに聞き慣れない音を聞いた。
その時、ソ連兵が飛び込んで来た。

ソ連兵
「大変です！　同志スターリン！」

スターリン
「なんだ、あの音は！？」

ソ連兵
「敵機です！　それも見たことも無い速さです！」

スターリン
「なに！？」

この報告にスターリンは大慌てで部屋を出ると、塔の一角に上がった。

ギュィィン！！

スターリン

「ぬお！？」

そして、ちょうど外に出た時にスターリンの頭上を水風……もちろん、スターリンは機種は知らない……を通過した。

スターリン
「ぐぬぬ…ヤポンスキーめ！　愚弄する気か！？」

……どう思うかはあんたの勝手だが、イエスかノーかと言えばイエスです。
それは置いといて、その間にもハリアーＪこと水風隊が王城と城下町を飛び回る。
そして、日本軍がワシントン等で散々やったビラをばら蒔きまくる。
そんな中でビラを拾ったスターリンはニヤリと笑っていた。

次号へ

２１９　陽動作戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

220　強襲上陸作戦

9月20日　上陸地点

ここにはソ連軍部隊……＋韓国軍部隊がいる…彼らも韓国艦隊同様転移した部隊……が展開していた。
もちろん、上陸するであろう日本軍・シリルティア王国軍・ネイラーン王国軍・アンデュラス王国軍を迎え撃つ為だ。
この上陸地点は割りと広くある程度切り開かれていた。
実は、ここに臨時の荷揚げ場を作る予定だったのだが、ゴタゴタの為に中止に成っていた。
それを聞いた山城はそこを『上陸地点』と決めた。
しかし、昨日のビラを見たスターリンがここに上陸すると書いていた為に、ここにほぼ全戦力（ソ連軍部隊＋韓国軍部隊）を投入したのである。
だが……彼らは知らない……日本軍の恐ろしさを……

海上　扶桑艦橋

士官
「司令、時間です」

山南
「うむ、全艦対地砲撃用意はいいか？」

士官

「はい。本艦を含めた第二隊全艦用意よしです」

通信長
「シリルティア王国艦隊旗艦イナバ、ネイラーン王国艦隊旗艦バッキンガムからも準備よしの連絡です」

山南
「わかった…全艦対地砲撃開始！！」

士官
「てぇー！！」

ズトドーーン！！

扶桑の砲撃を皮切りに主力戦艦郡及び艦隊が一斉に砲撃を開始した。
ハワイ戦時の鉄の嵐…とまではいかないが、この世界では初めての本格的戦艦が加わった艦砲射撃だった。
そして、龍驤・瑞穂・征龍から『水風』甲・乙（戦闘爆撃機）型、戦闘ヘリ『隼鷹』が飛び立つ。
そんな中、征龍の飛行甲板には1機の機体が発進しようとしていた。

征龍飛行甲板

ルーデル
「いよいよ、私の出番ね」

雷龍ことＡ１０サンダーボルトＩＩのコックピットに収まったルーデルが呟いた。

今はコックピットに収まっているからいいが、ついさっきまでスキップしていたりする……。

ルーデル
「整備員！　発進するわよ！」

整備兵
「あ、はい！」

雷龍の近くに居た整備兵達が慌て退避する。

ルーデル
「こちら、ルーデル。発進するわ」

航空管制員
『前方クリア。ルーデル機、どうぞ！』

ルーデル
「サンダーボルト、発進！」

バシューン！

意気揚々に雷龍は発進した。

さて、問題の上陸地点には多数の重火器と兵員が配置されていた。
簡単な塹壕とダックインした戦車壕……これらがあった。
しかし……艦砲射撃が開始されると、たちまち間に合わせでは防げ

ない事が判明した。
扶桑・山城は1回の射撃で重量1トンの砲弾が9×2＝18発…あっという間に航空攻撃隊1～2編成が出来上がる。
これに他艦艇と両王国艦隊を合わせれば、戦略爆撃機隊規模に成ってもおかしく無い。
その破壊力をそのまま受ける方にとっては災厄である。
飛来した砲弾が並べていた75mm野砲を吹き飛ばし、塹壕が次の瞬間にはクレーターに早変わりする。
ダックインしていたソ連軍戦車がひっくり返り、ソ連兵が持ち場を捨てる。
本来なら督戦隊が対応するのだが……最初の着弾で逃げている。

その頃……

ドンドンドン！

ソ連兵
「大変です！　同志大元帥！！」

スターリン
「どうした？　日本軍でもやって来たか？」

…彼としてはあり得ないだろうと言ったのだが……

ソ連兵
「その通りです！！」

スターリン
「なに！！　バカな！　奴らは上陸地点をそんなに早く制圧したのか！？」

ソ連兵
「違います！　奴らは…直接港から乗り込んで来ました！！」
スターリン
「な、な、な、なに！？」

同じ頃……港

山城
「陸戦隊は陸軍と共に付近の確保を急げ！　少数とは言え、敵の留守部隊が来るぞ！」

陸戦装備の山城が叫ぶと同じく陸戦装備の水兵達が６４式小銃を持って走って行く。
既に強行接岸した天城、援護の鳥海以下駆逐艦、艦載機展開中の飛龍、第一号輸送艦からは３式中戦車を載せた大発（大型発動機艇）を発進させ、大隅（おおすみ）からはエアクッション艇が出ている。
そう……これが日本軍の考えた手だった。

次号へ

２２０　強襲上陸作戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２２１　徹底的なる猛攻撃

日本軍……と言うよりも、山城の考えた作戦……は簡単だった。
あのビラに書いていた事を多少省略して書くと『ここ（上陸地点）に上陸するから、城下町の人間は逃げろ』と一般人向けに書いていた。
あとは、これ読んだスターリンが上陸地点で迎え撃つか、反対に守りを固めるか、どちらに転ぶかの問題だった。
そして、スターリンは前者に転んだ訳だ。
しかし、どちらに転んでも、４ヵ国軍は作戦通りに上陸地点に上陸し、また、王城のある城下町の港に乗り込んでいたのである。
その為、結果は……

上陸地点

ヒューーン……

ゴゴーン！ゴゴーン！ゴゴーン！ゴゴーン！ゴゴーン！ゴゴーン！
ゴゴーン！ゴゴーン！ゴゴーン！ゴゴーン！ゴゴーン！ゴゴーン！
……

着弾する度に地震の如く地面が揺れ、ソ連軍・韓国軍共に精神面でジワジワと消耗していく。
何せ、降ってくる砲弾は陸軍規格の重砲レベルを越える物であり、駆逐艦・イージス艦が１２，７ｃｍ、巡洋艦で１５，２～２０，３ｃｍ、戦艦で３０，５～４１ｃｍと単純に見ても、ソ連軍の砲兵軍

団並みの砲力が海上からされている。
そして、定期的に停止すると、次の瞬間には『水風』甲・乙型、隼鷹、ルーデルの乗る雷龍が襲い掛かる。

ルーデル
「食らいなさい！」

雷龍から放たれたヘルファイアミサイルがＴ２６軽歩兵戦車を鉄屑に変える。

ルーデル
「まだまだ、お次はこちらよ！」

機首の３０ｍｍガトリング砲が唸り、韓国軍のＫ２戦車を爆発させた。
……正に彼女の独壇場…水を得た魚の如しである。

一方……港では……

佐野
「艦長、橋頭堡の確保完了しました！」

戦闘帽にボディアーマー、迷彩服に６４式小銃の佐野が山城に報告した。

山城
「よし、３式チヌの田中少尉と佐田軍曹達はオッケーと…韓国艦艇の方は？」

シルヴィア
「さっきローエン大尉達から連絡があったが、艦艇は不気味な程静かだそうだ」

山城
「念のために人を増やすか…あとは後続のドイツ軍が無事に上陸してくれれば一安心なんだが…」

そう呟いて空を見た瞬間、山城は飛んでいる機体を見た。

シルヴィア
「…あれは…」

佐野
「ロンメル少将のフィーゼラーＦ.ｉ１５６Ｃ連絡機『シュトルヒ』ですね。大隅から発進したんでしょうか？」

山城
「多分な…よし、周辺の確保を急ごう」

佐野
「了解」

その頃……上陸地点

数回の艦砲射撃と空爆の後、漸く日本軍は上陸を開始した。

揚陸艦瑞穂よりエアクッション艇が陸自の今井少尉搭乗の１０式戦車と随伴歩兵を載せて砂浜に向かう。
これを迎撃する筈のソ連軍は、先程の艦砲射撃と空爆の重火器、特に火砲類を失っていた。
あとは対戦車ライフルぐらい……もちろん、１０式戦車の前には無力だ。
そこで、面前に出て来たのが……

今井
「韓国軍のＫ２か…韓国軍が加わっていると聞いたから、まさかとは思っていたが…こんな所で殴り合うとはな」

操縦士
「どうします？　スペック上は同等…僚車がいたら少しは有利かも知れませんが…」

今井
「ここで逃げてたら後ろがつかえる。こうなれば殴り合うさ」

砲手
「なら、地獄までお付き合いしましょうか？」

今井
「まだまだ死ぬ気は無いさ…撃て！」

ドパーン！

１０式戦車の１２０ｍｍ４４口径滑腔砲がＡＰＦＳＤＳ弾（離脱装弾筒付翼安定徹甲弾）を発射する。

ドガーン！！

直撃を受けたＫ２が砲塔を宙高く吹き飛ばす。

今井
「よし、次！」

砲塔が旋回し、次のＫ２に狙いを定める。
今井少尉が奮闘する間に、エアクッション艇が２輌目の１０式戦車と１輌目の９０式戦車を揚陸させる。
また、上陸部隊を援護する為、『隼鷹』戦闘ヘリと水風、雷龍が上空を固める。
そして、隼鷹のヘルファイアミサイルがＫ２を鉄屑に変え、水風の５００キロ爆弾が韓国兵に襲い掛かる。
もちろん、韓国軍にもスティンガー等の携帯対空ミサイルは有るが、今や完全に制空権を握られ、携帯対空ミサイルでは限界がある。
この時、漸くソ連軍に王城付近に敵が侵入した事が伝わった。
しかし……既に応援に行ける状態では無かった。

その頃……港では

山城
「撃てぇぇ！！」

パパパパパパ！

反撃に出たソ連軍部隊に対し、山城以下陸戦隊が応戦する。
と、言っても小部隊だが。

佐野
「艦長、ドイツ軍2号戦車・３８（ｔ）戦車が上陸しました！」

山城
「よし、あとはチヌと共に王城に攻めるぞ！」

佐野
「了解！」

次号へ

２２１　徹底的なる猛攻撃（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２２２　大勢

上陸地点での大勢は決していた。
制空権を取られ、常に上空支援が出来る状態にあっては、装備的にソ連軍は対処しようが無かった。
韓国軍はＫ２戦車で必死に対抗したが、そのシルエットからルーデルの乗る雷龍に目敏く狙われ、次々にスコアへと加えられていった。
それは地上でも同様で、今井少尉の１０式戦車により、狙われたＫ２は残骸へと変化していった。
そうこうしている内に、神州丸を中心に歩兵を満載した大発が海岸へと殺到した。
既に自衛隊により確保した安全な上陸場所で徐々に橋頭堡を確保していく。
もうこうなれば上陸部隊を撃退する等無理である。
只でさえ、制空権を取られてはアドバンテージが高いのに、更に海上の艦隊の主砲が雁首揃えているのだから、対抗のしようが無い。
そして……遂に崩れた。
１０式戦車がＫ２戦車を相手にしている間に、９０式戦車が日本陸軍部隊の前に出た。
ソ連軍も直ぐに意図に気付いた、だからこそ僅かな生き残りのＴ２６戦車が発砲した。
しかし、複合装甲の戦車に只の４５ｍｍ砲ではペンキを剥がすかどうかだ。
これに反応した９０式の主砲は強烈だった。
装填したのはＨＥＡＴ－ＭＰ弾（多目的対戦車榴弾）……もちろん、僅か２ｃｍ半の装甲など紙の如く撃ち抜いた。
こうなるとソ連軍は無力だった。
しかも、戦車の後ろからは自分達が一番厄介視する日本軍が次々に上陸している。

その上、水風が再び爆弾を抱えて再び空爆を開始した。
正に泣きっ面に蜂であった。

その頃……港周辺

小澤中将
「主席参謀は、艦長か？　それとも、陸戦隊指揮官かな？」

山城
「小澤中将！　いけません！　艦内か物陰に隠れて下さい！」

陸戦指揮を執る山城の所に小澤中将が来た。

小澤中将
「敵のソ連兵は既に近くに居ないのだろう？」

山城
「ソ連軍は狙撃兵を忍ばせておくのが得意なんです。中将が撃たれたら大変なんですから」

実際、福本元帥は3回以上は狙撃されている。
まあ、当たらなかったらしいけど。
しかし、そんな奇跡的人間はそうそう居ない。

山城
「ですから、危ないので余り前に出ないで下さい」

小澤中将
「まあ、海の上が専門だから仕方ないか…で、作戦は順調かね？」

山城
「はい、ドイツ軍の揚陸は完了、既に戦車を前に出して、進撃の準備をしています」

佐野
「特にシルヴィアさんはやる気満々で、放っておいたら、単身でも王城に飛び込みそうですよ」

苦情しながら佐野が言った。

山城
「本官もそろそろ、ここを離れます。どうもこうなると、自分の目で確認しておかないと済みませんので」

小澤中将
「気を付けたまえよ、君が死んだら、天城の艦長職と主席参謀職がぽっかりと空いてしまうからな」

山城
「そうそう簡単に死にませんよ」

そう言いながらニヤリと笑った。

その頃……王城

スターリン
「敵はどれぐらいだ！？」

ソ連兵
「既に戦車１０輌以上！　兵員は不明です！」

スターリン
「撃退は出来そうなのか！？」

ソ連軍士官
「無理です！　対戦車砲・重機関銃を含めた重火器を上陸地点に持って行った為、絶対的に少ないのです！」

スターリン
「えぇーい、バリケードを築いてでも止めろ！　日本軍に踏み込まれたら、我々は終わりだ！」

ソ連軍士官
「了解！」

回りで右往左往するソ連軍将兵。
この時点で、既にソ連軍に反撃出来るかも怪しい。

スターリン
（…イザとなれば、こいつらを盾に姿を眩ませるか）

次号へ

222　大勢（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

223　城内へ

キュラキュラキュラキュラキュラキュラ……

2号戦車・38（t）戦車を先頭にドイツ軍戦車隊が王城に向かう。
その後ろからは、ドイツ軍歩兵部隊が続く。
本来なら艦砲射撃で援護したいところであるが、街中に向けての艦砲射撃は無茶苦茶以上に無関係な一般人を巻き込むので御法度だ。
と言うことで、山城達一向は……

シルヴィア
「王城に殴り込むとは聞いたが、何故ドイツ軍とは別ルートなんだ？」

山城
「まあ、数的に敵の目を惹いてしまうからね…でも、あのバルコニーの所から殴り込むとなると、結局二手に成っちゃうんだよね」

3式中戦車チヌと1式砲戦車ホニ1、97式軽装甲車ケテ、イタリア製L3／33軽戦車、トラックに搭乗した歩兵部隊・陸戦隊を連れて王城へと向かっていた。
何せ、パリの様に一直線に作られた通りの為、まず迷う事は無い。
そして、所々に急造のバリケードがあったが、チヌがドーザで進路を確保する。
余りにも単調過ぎて……ドイツ軍も同じだったりする……拍子抜けしてしまう。
そうこうしている内に王城に到着した。

山城
「正門のドイツ軍に集中しているのか……門が閉まっているだけか？」

シルヴィア
「さあな……さて、門を吹き飛ばすぞ！」

佐野
「（平然と言うのが恐ろしいよな～）田中少尉、大倉中尉、やって下さい」

ドン！ドン！ドン！

チヌ、ホニ1、テケの3輌が一斉に発砲した。
この発砲に漸く気付いた城内のソ連兵が応戦、対し、山城以下陸戦隊、佐田軍曹の一個分隊、ローエン大尉・ユリア隊長・クロイツ隊長の一個小隊が応戦する。
しかし、所詮は少数・重火器無しのソ連兵、門をぶち壊した日本軍を止める事など不可能だった。

ドガーン！！！

山城
「今だ！　城門が破られたぞ！　突っ込めー！！」

そして、門の破壊を確認した山城は突入を命令した。
城門が破られた城がどうなる事か……。

王城内

スターリン
「なに！　日本軍が南門から侵入しただと！？」
ソ連軍士官
「はい！　城内に突入した日本兵は次々と城内を…」

ソ連兵
「大変です！　西の門が破壊されました！　敵はドイツ兵です！」

スターリン
「ええい！　なんとしてでも防げ！　どんな手段を使っても構わん！」

ソ連軍士官
「わかりました！」

報告に来た士官と兵士が出ていった。

スターリン
（予想以上に早いが…まだ多少は時間がある…その間に……）

タン！タンタン！タン！パン！パンパン！パン！パン！

城内の各地で日本・ドイツ・シリルティア王国軍と守備のソ連軍が撃ち合っていた。

そして、屋内の戦いになると、マシンガンやアサルトライフル等が幅を効かせる様になる。
そんな中、ローエン大尉の小隊には鷲井が考え出した新装備…屋内での戦闘の可能性が高くなり装備させたのが、ベルギーのＦＮ・ブローニングが開発した自動式散弾銃『ブローニングＡＵＴＯ－５』を元（と言うよりそのまま）に開発したＳＧ－１（この頃は名称決まっていなかった為、略称に採用番号だけだった）を装備していた。
どうもローエン大尉の部隊は実験部隊的な側面を持つ様に成ってしまっている。

ローエン大尉
「よし、撃て！」

ドバウ！

散弾による制圧力は屋内戦だとかなり高くなる。
また、第一次大戦時にドイツで採用されたＭＰ１８短機関銃を元にしたＴＫ－１もローエン大尉の指揮下の部隊に優先的に配備されていた。
もちろん、ソ連兵も『マンドリン』ことＰＰｓｈ系マシンガンで応戦するも、場馴れしたローエン大尉は散弾銃とマシンガン・歩兵銃、最終的に手榴弾を組み合わせた制圧法で徐々に制圧していた。

次号へ

223　城内へ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

224　城内戦

さて、王城内でドンパチが行われている中、上陸地点の戦いはほぼ結していた。
韓国軍のK2戦車の大半が10式と上空援護により残骸となった頃、ソ連軍も最終防衛線を90式戦車と日本軍に蹂躙されたところだった。
そして、ここまで必死に抵抗していた韓国軍も、その後の数度の空爆により、遂に白旗を掲げるしかなかった。

山城
「佐野、制圧状況は？」

佐野
「はい、現代のところ…」

城内に突入した山城達は徐々に制圧範囲を拡げていた。
さすがにドイツ軍と戦いながら日本軍と戦うのは二正面戦としては甚だ厄介な話である。
何せ、どちらにしろ相手が戦うと厄介で、指揮官がこれまた厄介な人間であればソ連軍のボンクラや凡庸な士官では起死回生など望むべき事自体が不可能だ。
だからと言うべきかは別にして、持ち場を放棄したソ連兵の一部は城内を物色し、金目の物を持ち出そうとする輩が出て来た。
しかし、そんな輩は逃げる途中で見付かって捕まるか、抵抗して死傷するのがオチだったが……。

佐野
「…の制圧はほぼ完了しました。ドイツ軍も広場とバルコニー周辺を制圧したそうです」

山城
「ん、そうか…スターリンは見付かったか？」

佐野
「今のところはまだです…と言っても、この城広いですから、何処かに逃げてるかも知れませんよ？」

山城
「それはあり得そうだが……もう少し探してみろ、あいつが1人で脱出するなんてのは考えにくい」

佐野
「護衛を付けてるって事ですか？　まあ、我々の世界のスターリンが列車で逃げた事を考えたらあり得ますね」

山城
「そう言う事だ…ところで、シルヴィアを知らないか？　さっきから探して…」

シルヴィア
「あぁー！　あいつは何処に居る！　誰かあのボンクラ王子を見た人間は居らんのか！？」

佐野
「…噂をすれば向こうから来ましたね」

山城
「来たな…シルヴィア、スターリンを見なかったか？」

シルヴィア
「見ておらん！　それより、あの喧嘩を売りおった王子を知らんか！？」

佐野
「こちらも、誰も見ていないそうです」

山城
「スターリンと一緒で行方不明か…最果て、地中に潜った……訳無いか」

頭を掻きながら呟く山城。

シルヴィア
「あの王子の場合、地中に潜った瞬間、泣きわめいて何処からか出てきそうだがな」

佐野
「シルヴィアさん……マンガじゃあ無いんですから…」

苦笑しながらツッコミを入れる佐野。

シルヴィア
「何でもいい、見付けたら私の所に連れて来い！　いいな！」

佐野
「あの…何処に行くんですか！？」

シルヴィア
「もう一度中を探してくる！」

山城
「お～い、あんまり行くと…」

ローエン大尉
『こちらローエン！　敵の抵抗が激しい箇所がある…敵大将が居るようだ。増援を要請する！』

置いていた無線機から急を告げるローエン大尉の声が響いた。

山城
「シルヴィア！　佐野！」

シルヴィア
「わかっておる！」

佐野
「了解！」

ローエン大尉
「今だ、撃て！」

バカン！

兵士の１人がＳＧ－１を発射した。

直後、応戦していたソ連兵の1人がのぞけった。
しかし、お返しとばかりにソ連兵が撃ち返す。

ローエン大尉
「ち、本当に激しく抵抗するな」

ついついぼやいてしまう。

ユリア
「ローエン大尉！」

ローエン
「ユリア隊長、大丈夫だった？」

ユリア
「えぇ、それより、この抵抗はなんなの？」

ローエン
「さあね、それだけ大物がいるんだろう」

ユリア
「そう…ＧＲ－１用意！」

ＧＲ－１こと、グレネードランチャー…日本軍の８９式重擲弾筒か元…を持った隊員数名がユリア隊長率いる親衛隊から出て来た。
女性1人でも持ち歩け、操作も簡単な重擲弾筒は『最小の火砲』と言われ、日本軍小隊火力が高い理由とも言われた程だ。
そして、擲弾筒を斜め２５度に構えて発射、抵抗線を制圧した。

次号へ

２２４　城内戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

225　トカゲの尻尾切り

城内の一室

スターリンが執務室として使っている部屋には、今や本人と数名のソ連兵が居た。
それと、付け加えるならシルヴィアが目の敵にするあの『ボンクラ王子』も居た。

王子
「お、おい、スターリン！　だ、だ、大丈夫なのだろうな！？」

ガタガタと震えながら訊いてくる王子に、内心スターリンは「うざい」と思っていた。
元々、ここを拠点に新たなる『共産主義国家』を作ろうと思って利用していただけだから、ここに至っては利用価値の『り』の字も無い。

ソ連兵
「大変です！　第一防衛線を突破されました！」

伝令役のソ連兵が大慌てで入って来た。

ソ連軍士官
「とにかく、防衛に努めよ！」

ソ連兵
「了解！」

そう返事をすると、戻って行った。

王子
「おい！　本当に大丈夫なのか！？」

スターリン
「……やれ」

スターリンの指示を聞いた士官の1人が突如トカレフを抜き、王子の頭に狙いを定めた。

王子
「な、何をする！？」

スターリン
「いえ、あなたの利用価値が無くなったので『処分』するだけだ」

王子
「な…まさか、貴様、最初からそのつもりで！？」

スターリン
「おや、今頃気付きましたか…さすが愚鈍な王子ですな」

王子
「な、なんだ…」

パン！

至近距離、しかも頭だから完全なる即死である。

スターリン
（さて、そろそろ…）

山城
「そこまでだ、スターリン！！」

扉から飛び込んで来た山城が叫んだ。
後ろにはシルヴィア・佐野達が居た。

さて、何故山城達がここに居るのかと言うと、少し時系列を戻すと解る。

ユリア隊長
「また、頑強に抵抗しるわね！」

ローエン大尉
「あぁ、まったくだ」

ローエン大尉・ユリア隊長と合流した山城・シルヴィア・佐野。
そして、またソ連軍と銃撃戦を繰り広げていた。

山城
「誰か、音響閃光弾を持ってないか！？」

シルヴィア
「ふっ、こんな事も有ろうかと、天城の武器庫から音響閃光弾を2

個拝借しておいたぞ！」

佐野
「あの…拝借って…」

山城
「…話は後だ。３で投げます、目と耳を塞いでおいて下さい！」

１個を受け取った山城が叫ぶ。
そして、２人が投げ込んだ音響閃光弾は見事に無防備だったソ連兵達を戦闘不能に陥らせた。
後は戦闘不能になったソ連兵達を捕まえて……前場面に至ったと言う訳だ。

まあ、乗り込んだまでは良かったとして……問題はその後。
スターリンの護衛が撃ってきた。
この為、扉を境に銃撃戦になった。
しかし、多勢に無勢＋武器が違う（何せ、山城達は６４式小銃・シヨットガンを所持）から直ぐにケリはついた。
だが……

佐野
「スターリンいません！」

ローエン大尉
「有るのは死体と負傷者だけだ」

シルヴィア

「く、あの愚鈍王子も殺されておる！」

再び踏み込んだスターリンの執務室には肝心のスターリンの姿は無かった。

ユリア隊長
「生きてる負傷者に訊いてみる？」

山城
「無駄でしょう。ですが…」

そう言いながら手近な壁を調べ始めた。

ローエン大尉
「そうか、脱出路か仕掛けが有る筈だ。探せ！」

この言葉に手空きの人間が壁や本棚を調べ始めた。

シルヴィア
「お！　山城！」

そして、シルヴィアが本棚の後ろから見付けたのは螺旋階段。

山城
「ローエン大尉！　ユリア隊長！　怪しい所を探して下さい！　シルヴィア・佐野、行くぞ」

そう言うと、２人を連れて螺旋階段を降りて行った。

次号へ

２２５　トカゲの尻尾切り（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

226　結局悪党はあの世逝き

山城の指示を聞いたローエン大尉・ユリア隊長は大急ぎで階段を駆け降りていた。

ユリア
「でも、この城に怪しい所なんて、多いわよ？」

ローエン
「それでも探すしかない。後々、禍根を残さないようにね」

ユリア
「そうね……ところで、クロイツ隊長は？」

ローエン
「…そう言えば、突入してから見てないな」

今頃？…とも思いそうだが、ここは気にしないでおこう。

クロイツ
「おや、お二方、お揃いで」

ローエン
「クロイツ君か！　今まで何処に居たんだ？」

クロイツ
「地下の牢獄の方に…山城少佐は何処に？」

ユリア

「先程、スターリンを追って隠し通路に入った」

クロイツ
「（…入れ違いか）わかりました。今は先ず、スターリンを探しましょう」

山城・シルヴィア・佐野は６４式小銃装着のライトで螺旋階段の先の通路を照らしながら進んでいた。

シルヴィア
「中々見付からんな…そもそも、本当にこの隠し通路を通ったのか？」

山城
「スターリンの…と言うより、独裁者の性格上、逃げ道位は確保する。それに、スターリンがそれほど持久力があるとは思えない」

佐野
「あの部屋に居たとしても、我々が出て行くまで耐えれたか怪しいですからね」

山城
「それに、この通路の行き先はスターリンの方に一日の長があるからな……向こうが先に行っていてもおかしくは無い」

とにもかくにも、山城達は先に進む……走って。
幾度か別の部屋からの合流点があったが、一切無視して道を進んだ。

そして……

山城
「やっと見付けたぞ、スターリン！」

漸く追い付き、ライトに写ったスターリンに向かって叫ぶ。

シルヴィア
「止まれ！　止まらんと撃つぞ！」

佐野
「余計に止まりませんよ～」

まあ、止まれと言われて止まる馬鹿もいないが…。

シルヴィア
「あの愚鈍王子の代わりに、あいつを殺らせろー！！」

佐野
「先輩、シルヴィアさんを止めて下さ～い！」

山城
「止めても止まらないぞ～」

……スターリンを追い掛けるのか、日常会話を繰り広げるか、どちらか1つにしにならないか？

山城
「って、言ってる間に出口だぞ！」

シルヴィア
「スピードを上げろ！　外に出られては追うのは難しくなる！」

しかし、出口から１０メートル程のスターリンを、更に６０メートル程の地点から人間が加速しても追い付けない（多分）し、向こうが先に外へ出てしまう。
しかし……

ギュィィィン！！！

その外から航空機…しかも、ジェットエンジンを搭載した機体の通過音が聞こえた。

佐野
「いったい誰が！？」

山城
「とにかく急げ！」

出口から出ると、目の前に海が見えた。
どうやら、王城近くの海岸に繋がっていた様だ。
そして、肝心のスターリンはボーゼンと立っていた。
そこにタックルを食らわせたのはシルヴィアだった。
ただ、倒されたスターリンも懐からトカレフを構えた。
しかし、一度勢いがついたら、人間は止まらない。
僅か数刻後……決着はついた。
何故なら…スターリンの人体急所をシルヴィアのサーベルは正確に突いていた……。

戦艦天城艦橋

士官
「王城から報告！　王城陥落、王子はソ連兵により射殺され、スターリンは死亡！」

この報告はあっという間に天城や付近に展開する艦艇に伝わった。
そんな中、杉下大使とウェスタディア王国外交官チェザーリ卿は大詰めの話をしていた。

チェザーリ
「まさか…あの艦長の言う通りに城を1日で陥落させるとは…」

杉下
「彼は作戦中は出来る事しか言いませんから…さて、こちらの条件ですが…」

そう言うと、彼は講和条件を記入した紙を渡した。

チェザーリ
「……まさか、こんな条件でよろしいのか？」

杉下
「もっと呑めない条件だと思われましたか？」

ちなみに条件は……

4ヵ国合同条件

1　治安維持の為、1ヶ月駐留の許可。（費用はこちらが負担）

2　早期各国との国交回復

3　賠償金の確認（日本を除く。金額・期限は協議の上）

日本のみ

1　国交樹立機関の早期立ち上げ

2　早期国防・通商条約の協議（希望条項）

チェザーリ
「これ程軽い物は聞いた事が無い……私としては領土の割譲ぐらいは覚悟していたが…」

杉下
「伊達に１００年も歴史を先行していません。領土を割譲されても、リスクが多すぎてやってられませんよ。それよりは地元の人間に任せた方が利点が多いんですよ」

チェザーリ
「……」

次号へ

２２６　結局悪党はあの世逝き（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２２７　三大問題（前書き）

面倒な奴らとの戦いの後は面倒な問題です……捕虜はどうしたものか？　ｂｙ山城

227　三大問題

9月27日

呆気ない……と言うべきかどうかは個人によるが……ウェスタディア王国戦役の終結から1週間。
主に日本軍（陸軍＋陸上自衛隊）を中心に治安維持任務が始まっていた。
そんな中、戦艦天城艦長（兼主席参謀）室で山城は困り果てていた。
今回一番の問題……ソ連兵・韓国兵捕虜の扱いだ。
ウェスタディア王国は受け入れる気は無い（ソ連兵はいざ知らず、韓国兵の受け入れは向こうも拒否反応を出しまくっていた）。
だからと言って、スターリンのアホタレみたいに虐殺は……色んな意味でやりたく無い。

山城
「……次官に相談しよう…そうしよう…」

頭を掻きながら呟く。
これ以上、1人で悩んで答えが出ない（しかも、かなり高度な問題）をイジイジ悩んでも仕方ない。

山城
「さて、次の問題だ」

そう呟きながら、次の書類を手に取った。
次の書類には鹵獲した艦艇が書いていた。
韓国海軍駆逐艦崔瑩、同海軍フリゲート蔚山（ウルサン）・京城（ソウル）・慶北（キョンブク）・全南（チョンナム）・

済州（チェジュ）、強襲揚陸艦独島（ドクト）の計7隻。
これにソ連海軍駆逐艦4隻……そして……

山城
「最大の問題はあれだな」

そう呟きながら視線を舷窓に向ける。
天城の10メートル向こうにある大型艦……船体半分が飛行甲板がある。

山城
「『キエフ型航空巡洋艦』か……航空戦艦伊勢・日向と良い勝負か…」

調べたところ、韓国艦隊の後に転移してきたらしい。
あれを使われた時には……使えるかどうかは別として……多分、あんな風にはいかなかっただろうが……。

山城
「さて、ソ連海軍の駆逐艦は置いとくとして…やっぱり小改装やバラスト改善が必要だな」

結局、ドック入りは間違い無し…直ぐには配備されないだろう。

山城
「幸か不幸か、扱えないからって明け渡して貰えそうだしな」

この問題も関係部署との協議が必要だから、置いておくとして……
…最後の問題は……

山城
「……直接話すに限るな」
そう呟くと立ち上がり、部屋を出て行った。

天城医務室

山城
「横井先輩、失礼しまーす」

横井
「あら、目的の伍長はベッドよ」
まあ、この人の事だから、直ぐに用件が解ったのだろう。
そして、目的の人物は確かに居た。

山城
「随分元気になりましたね。大西伍長」
山城が声を掛けた本人は直ぐに敬礼で応えた。
彼、大西俊也（おおにしとしや）『日本国海兵隊特別強襲部隊』伍長（１８）……山城達同様転移してきた人間である。
彼の供述によると、陸自の工科学校を卒業、対馬をめぐる『日韓戦争』に参加、終結後に海兵隊特別強襲部隊へ配属され、直後の尖閣諸島魚釣島を占拠した中国軍を追い出す為に揚陸艦で向かっている途中、ミサイル攻撃を受けたそうである。
この後はクロイツ隊長達が地下の牢獄で発見されるまでは解らないと言う。

まあ、今更解っても、転移した事実は変わらないのだが……。

山城
「まだベッドの上ですが、どうですか？　慣れましたか？」

大西
「はい、お陰さまで…そう言えば、自分の装備は…？」

山城
「それなら大丈夫ですよ。本官がちゃんと管理・保管していますから」

次号へ

227　三大問題（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

228　欲求不満な貴族嬢

山城が仕事に専念している頃……天城艦橋

シルヴィア
「佐野～～」

佐野
「なんですか？」

窓に肘を付けて暇そうなシルヴィアと対象的に、佐野は忙しく動きまわっている。

シルヴィア
「まだ山城の仕事は終わらないの～？」

佐野
「仕方ないですよ。艦長は主席参謀兼務、捕虜や鹵獲艦などの事で頭は常時回転状態ですから」

ちなみに、佐野が忙しいのは艦橋担当だからだ。

シルヴィア
「む～～、せっかく1ヶ月も駐留するのだから、街を一緒に歩こうと思ったのに～～！」

佐野
「欲求不満なんですね」

苦笑しながら佐野が応える。

シルヴィア
「お主に解る訳ないわ」

佐野
「はいはい」

この会話と山城が居ない事以外は天城艦橋は普段通りと言っていい。

宮里
「欲求不満はいいが、頼むから別の事で晴らしてほしいな」

佐野
「あ、砲術長。なにか？」

宮里
「いや、上は暇なんだよ。日課が終わると、寄港時は大抵暇なんだよな～」

佐野
「まだぼやけるだけマシだと思いますよ。下にはぼやいても解決しない問題を抱えた艦長がいますから」

宮里
「まあ、確かにな…って、あいつは兼務だから逆に抱え過ぎなんだよ」

シルヴィア

「おまえら～～！！　私に喧嘩を売っておるのかー！？」

佐野
「なんでそうなるんですか！？」

……どうやら、欲求不満がここで爆発した様だ。

シルヴィア
「ええい、ここに居ても意味は無い！　下に行くぞ！」

そう言うと、シルヴィアは艦橋を出て行った。

宮里
「一瞬、嵐が巻き起こるかと思ったよ」

佐野
「えぇ、そうですね」

シルヴィアが出て行った艦橋で2人は苦笑していた。
そこへ……

風華
「宮里さん、シルヴィアさんはどうしたのですか？」

ルーデル
「なんだか怒ってたみたいだけど？」

風華・ルーデルの2人が艦橋に入って来た。

宮里

「う～ん……まあ、欲求不満が我慢出来なかった…ってとこかな？」

佐野
「そう…ですね」

この２人の答えに風華は頭に疑問符を浮かべていたが、ルーデルはどうやら解ったらしく、１人で頷いていた。

ルーデル
「あの大尉は何デレだ？　ツンではないし、ヤンでもないし…」

佐野
「…ルーデル大佐……なんでそんな現代語を知っているんですか！？」

ルーデル
「ん、空母に置いてある雑誌に載っているが？」

宮里
「…誰が置いているんだ…そんな雑誌…」

……ある意味衝撃的事実だ。

山城
（さて…そろそろ時間を作ってシルヴィアの相手をしないと、艦橋の皆に迷惑をかけてしまうな…）

大西伍長との話を終えた山城が艦長室へと向かっていた。

まあ、既に艦橋でそう成っていたりするが……。

山城
（どうしようかな～…視察って言って街を歩くか…それとも、彼女に付きっきりで居るか？）

最果てどうしたものか？…と三大問題に比べればダウンはするが、重要な問題を検討していた。

ゴチン！

山城
「！つぅ」

シルヴィア
「馬鹿者！　気を付けぬ…か…！」

……曲がり角で恋人と衝突した。（ラブコメか（笑））

山城
「やあ、シルヴィア。久し振り」

シルヴィア
「ば、バカ…何を考えてよそ見を……」

山城
「う～ん…この後、君とどう過ごそうかな～、と…」

シルヴィア
「…う～、馬鹿者、馬鹿者、馬鹿者、馬鹿者～～～！」

ポカポカポカポカポカポカ……

多分、照れ隠しなのだろう……山城の背中をポカポカ叩く。

山城
「おいおい……とにかく、部屋に行こっか？」

天城
「…なんて事があった」

宮里
「熱々だな～」

ルーデル
「ラブラブね～」

今や、山城・シルヴィアの恋人関係と状況は天城により筒抜け状態である。

佐野
「なんだか、盗聴しているみたいで、悪い気がしますけどね」

風華
「そうですよね」

宮里
「大丈夫大丈夫、バレてないから」

佐野
「そう言う問題でも無いかと…」

次号へ

２２８　欲求不満な貴族嬢（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

229　やっぱり来ます海軍次官

9月29日　天城

福本（伊吹）
「…と言うわけで、来てやったぞ」

山城
「…はあ？」

戦役終結から9日目、突然（予想は出来ていたが）ながら福本次官がやって来た。
しかも、飛行艇で。

福本（伊）
「おいおい、せっかく足を運んで来たのに、『はあ？』は無いだろう？」

佐野
「多分、変なと言うか…中途半端な始め方になったからだと思うのですが…」

福本（伊）
「ん、そうなのか？」

山城
「まあ、そう思っていただいてもいいですが…」

シルヴィア
「誰も話していないのに『と言うわけで』は無いと思うが…」

佐野
「あの～、このままだと埒が明かないので本題に入った方が良いのでは？」

山城
「そうだな」

シルヴィア
「言えているな」

福本（伊）
「確かにそうだ…で、困った事は無いか？」

山城
「問題は3つ。1、捕虜の処遇。2、鹵獲艦艇の今後。3、転移者の今後。以上です」

福本（伊）
「ふむ、転移者の方は軍人だから…もし、居残るなら、受け入れるスペースはかなりあるな」

宮里
「何処にですか？」

福本（伊）
「第零艦隊及び派遣部隊の方だ」

佐野
「あぁ、確かに」

実際、第零艦隊・陸軍派遣部隊・空軍派遣部隊はかなりの組織になる様だ。
艦艇の増配・鹵獲も有り、人員の増員は必要だ。
また、陸軍・空軍も教官の配属が増える予定だそうだ。

福本（伊）
「鹵獲艦艇の方はどうだ？　改装とか必要か？」

佐野
「必要も必要ですよ。韓国海軍の蔚山（ウルサン）型フリゲートは波の荒い日本海・太平洋などの外洋では安定性が悪いそうです」

宮里
「それに、船体強度に不安が有るそうで…まあ、たった１０・２０年で作った海軍が出しそうなボロですね」

福本（伊）
「バラスト改善が必要か…結局はドックに入れて改装するしかないな…キエフ型航空巡洋艦は？」

山城
「別に悪いところは…但し、イージスシステムと主砲の装換をお願いします。後は対潜用ヘリ母艦的な扱いをすればいいかと」

福本（伊）
「今のところは全て何とか出来そうだが……一番の問題は捕虜か」

シルヴィア
「…そうだな」

全員
「「「「「はぁ～～……」」」」」

……何故か一気に全員が溜め息を吐く。
まあ、理由が理由ですからね……。

福本（伊）
「そんなに悪いのか？　韓国兵の方も？」

佐野
「ある人は『ソ連兵と同じ位、質が悪いから、あんな奴らをとっとと連れて行ってくれ！』と、言った人がいるとか」

宮里
「一部人間を除くと、後は苦情・文句・バッシング…てな感じです」

福本（伊）
「世界が違うと、ここまで違うものか？」

山城
「いえ、どうやら優国思想＋歴史無知＋被害者思想とかが混ざりあっている様です…自衛隊から聞いた話ですけど」

福本（伊）
「…わかった。関係所と色々協議してみるか…あ、皆に通知ね、これ」

そう言うと、福本次官は懐から通知書を出した。

山城
「……え～と、次官、これは計画性が有りまくりでは？」

福本（伊）
「ん、そうか？　まあ、一階級昇進なんだから文句は無い……よな？」

山城
「まあ…無いと思いますけど…」

昇進の通知書はあっという間に艦橋中に回された。

福本（伊）
「山城、何かあるか？」

上甲板に降りた福本次官・山城・シルヴィアの３人。

山城
「…天城を小改装出来ますか？」

福本（伊）
「規模によるが…どんな風に？」

山城
「自動稼働機関銃とチャフ散布装置の設置をお願いします」

福本（伊）
「それなら大丈夫だ。実は技術部でも、『初ミサイル被弾艦』の被害状況を見たくてウズウズしてら」

山城
「あはは…」

福本（伊）
「あ、シルヴィア。お前さんに王国海軍本部からお預かり物だ」

シルヴィア
「はい？」

訝しげながらシルヴィアは何かの通知書を受け取った。

シルヴィア
「……」

山城
「…福本次官、シルヴィアの昇進って…」

福本（伊）
「俺は何にも知らないぞ。問い合わせは王国海軍にしてくれ」

次号へ

２２９　やっぱり来ます海軍次官（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２３０　閣僚会議（前書き）

『三軍の三羽烏』が総結集です。
ちなみに、作中の実在の人物は作者の独自設定です。

230　閣僚会議

9月20日（異世界9月30日）

さて、異世界から神戸へ帰って来た福本次官は神戸から東京に帰る専用機機内で直ぐに携帯電話をフル回転させあちこちに連絡した。
そして……

帝都　国会議事堂内会議室

この会議室には福本次官が連絡した関係各所の閣僚と首相が集まっていた。
もちろん、マスコミは完全シャットアウトである。
主な人間を挙げると…

首相　安倍晋三

空軍次官　田母神俊雄中将

陸軍次官　山県定義（やまがたさだよし）中将

国防大臣　（ミリオタこと）石破（いしば）　茂（しげる）

外務大臣　中川昭一

以下多数（略）

安倍首相は小泉前首相の指名を受けて後任として首相に就任した。
陸軍次官の山県定義中将は、あの山県有朋の遠縁の子孫である。
二男一女の父親で、末っ子の女児が陸軍に所属（息子は普通の会社員・大学院生）している。
石破大臣は『リミタリーオタク』で有名なのはお馴染みだ。

安倍首相
「福本次官、現場の方はどうですか？」

福本（伊吹）
「現在、日本陸海軍・シリルティア王国らの協力もあり、現地の治安は徐々に回復しています」

山県
「本来なら私も行きたかったのですが…残念ながら福本次官の様にはいきません」

ちなみにこれは皮肉っているのでは無く、実際そうなのである。
山県中将は愛妻家・家族好きであり、普段は出来る限り家に帰る事にしている。
だから、余り唐突な予定を立てたりしないのだ。

安倍首相
「それで…今一番の問題は？」

福本（伊）
「現地のソ連兵及び韓国兵捕虜です。今までと違い、彼らも転移者、居場所が有りません」

山県中将
「今までは現地人と戦っていたからな…転移者、しかも集団となると問題にもなるな」

福本（伊）
「しかも、双方共に素行に問題がね…韓国兵に至っては歴史無知＋被害者思想＋優国思想がある為、我々の言うことを聞き難いと言うのも有りまして…」

田母神中将
「歴史が絡むとまた面倒ですな」

石破防相
「だからと言って、彼らを放置する訳にもいかないね」

中川外相
「いくら世界が違うとは言え、対応を間違えるとロシアや朝鮮民国の反発がおきる可能性があります」

安倍首相
「国連常任理事国として…と言うよりも、日本帝国として、それは避けたいが……福本次官、どうなのかね？」

福本（伊）
「本官も色々と考えておりますが…いかせん、相手にこちらの常識が通じるかどうか…」

山県中将
「歴史が変わっている以上、通じるかは怪しいな…まあ、日本が負けた世界なら、『日本は悪者』と教わっているかもな」

……実際そうだったりする。

田母神中将
「私が直々に出て歴史講義をしようか？」

福本（伊）
「それは止めておいた方がいいよ。多分、キレて何をしてくるか…」
まあ、その時点で、その『何か』をした人間も終わりだろうが…。

安倍首相
「ふむ…皆にはこの対応策を考えてもらいたい」

中川外相
「わかりました」

閣僚を代表して中川外相が返事をした。

福本（伊）
「では、次に鹵獲艦の改装、第零艦隊配備についてですが……」

一時間後……会議終了後

福本（伊）
「どうですか、お二方？　私の家で家族一緒に食事なんて？」

田母神中将

「私はかまいませんよ」

山県中将
「妻に予定を確認しないと解らないが…私も大丈夫だ」

福本（伊）
「では、待ってますよ」

そう言って陸軍・空軍次官と分かれた。
この仲の良さが『三軍の三羽烏』の言われる由縁の1つである。

石破防相
「福本次官」

福本（伊）
「防相、何か？」

石破防相
「うむ、実は向こうにだ…行けないかな？」

福本（伊）
「はあ…天城を見るためですか？　飛龍を見るためですか？」

石破防相
「もちろん、視察だよ」

福本（伊）
「…わかりました、こちらでも色々と調整してみましょう」

次号へ

２３０　閣僚会議（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２３１　巨乳貴族嬢の戸惑い

１０月１日（現世界９月２１日）

天城艦内艦長（兼主席参謀）室

シルヴィア
「♪～♪～♪～♪～」

山城
「シルヴィア～、何処行く？」

シルヴィア
「ん？　何か言ったか？」

山城
「いや、何処に行くって聞いたんだけど？」

シルヴィア
「……済まぬ済まぬ済まぬ～！　全く聞いておらなんだ～！！」

山城
「落ち着いて、落ち着いて…そんなに慌てなくても…」

……この様な超激甘なやり取りが艦長室で行われていた。

天城艦橋

天城
「…と言うことが艦長室であった」

佐野
「ラブラブですね～」

宮里
「まあ、俺も風華さんを連れて…」

佐野
「デートですか？」

宮里
「いや、例の仇探し」

天城
「どうやって探す気だ？　探すだけでも、百年掛かりそうだが？」

佐野
「チェザーリ卿の商会に協力を頼んだそうです。商会には情報が集まりますから」

天城
「ほう…そうなのか？」

佐野
「昔から情報が集まる所は決まっていますからね」

本来なら日本軍諜報部が探した方がいいのだが（福本次官なら権限的にやれない事はない）、いかせん異世界になると話は大いに別である。
だから、商会などと言った『情報通』な所に頼るしか無いのだ。

佐野
「まあ、今回のお礼と言うことで受けてもらえるそうですけど」

天城
「…まあ、私には関係無いか」

その頃……天城医務室

コンコン

横井
「はいは～い、開いてるわよ～」

ヴィクトリア
「…失礼するわ」

普段通りにお茶を啜っていた横井の医務室に入って来たのは飛龍のヴィクトリアだった。

横井
「あら、珍しいわね、ヴィクトリア…どうしたの？」

ヴィクトリア
「じ、実は……病気かも知れないかと…思いまして…」

横井
「ふ～ん、健康そうなあなたが病気ね～」

そのFカップの巨乳が病気じゃないの？……とツッコミをかましたいが、本人は真剣そうなので止めておく。

横井
「まあ、先ず心当たりは？　あるんでしょう？」

ヴィクトリア
「え～と、先ずは…時々、自分の名前さえ呼ばれているのに気付かない程、ボーとする事がありますわ」

横井
「ボーとね…他には？」

ヴィクトリア
「他には…何故かモヤモヤしたり…時にドキドキしたり…」

横井
「モヤモヤ、一時ドキドキね…今回が初めて？」

ヴィクトリア
「いえ、親善航海前にも……その後からは忙しかったので気づきませんでしたが…最近になって再びですわ」

横井

「最近に成ってね～…ふ～ん…」

……実際のところ、最初の『ボーとする』の時点で横井は全てを悟っていたが、面白そうだから最後まで聞いてみたりしている。
そこで、その真実をどう伝えるか頭を巡らす。
しかし、中々何も言わない横井にヴィクトリアが段々不安な顔に成っていた。
それを見た横井はあっけらかん言った。

横井
「大丈夫、大丈夫。あなたが考えてる程、重要な病気じゃないわよ～。まあ、風邪みたいな病(もの)だから」

ヴィクトリア
「はあ…それで、その病は？」

横井
「そうね…一言で言うと『恋の病』ね」

ヴィクトリア
「……え？」

ポク　ポク　ポク　ポク
チーン

ヴィクトリア
「…はいぃぃぃぃ！！？　貴族の私が恋！？」

横井
「…そんなに大声出す事？」

ヴィクトリア
「私は貴族ですわよ！？」

横井
「いや～、関係ないわよ～。そんな事言っちゃったら、シルヴィアはどうなるのよ？」

ヴィクトリア
「彼女は開放的な野生児ですわ」

横井
「その表現もどうかと思うけど…」

ヴィクトリア
「だいたい…貴、貴族があんなバカと……ブツブツブツブツ…」

……どうやら、相手のアテは有るようだ。（当たり前か…）

横井
「う～ん…艦長の後輩曰くだけど…」

ヴィクトリア
「はい？」

横井
「『人間誰かに恋をするもの。あとは何かの違いだけ』ってね」

ヴィクトリア
「はあ……」

次号へ

２３１　巨乳貴族嬢の戸惑い（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

232　それぞれの過ごし方

シルヴィア
「や～ま～し～ろ～、早くしろ～」

山城
「はいはい」

シルヴィアに呼ばれ、返事をしながら歩く山城。
見知らぬ人間から見ればお転婆貴族娘に振り回される従僕…の主従（主＝シルヴィア・従＝山城）に見えるだろう。
一方、見知った人間からすれば案外頷ける仲にも見えるのだが……。

ローエン
「おや、御二方ではありませんか？」

山城
「ローエン大尉、ユリア隊長。見回りですか？」

ユリア
「あぁ…いくら治安が回復しても、バカをやる奴は何処にでもいるからな」

シルヴィア
「それは言えておるな」

ローエン
「じゃあ、２人はデート？」

山城
「いえ、この前出来なかった観光です」
…否定出来ているのかどうかは置いといて、一応言っておく。

ユリア
「まあ、御二人なら何かあっても大丈夫ですね」

シルヴィア
「当たり前だ。山城が居るしな」

山城
「おいおい…では、また後で」

ローエン
「えぇ、では」

その頃……天城艦橋

佐野
「今頃、宮里砲術長と風華さんは商会、艦長とシルヴィアは観光と……」
右手でボールペンをクルクル回しながら佐野が呟く。
因みに佐野は今、郷里の母に手紙を書いているところだ。

佐野
「え～と、『こちらは一足早い秋と成っておりますが、御体調お変

わりありませんでしょうか』…と」

横井
「ふ～ん、彼女に手紙？」

佐野
「いえ、郷里の母に…って、うわ！　医務長！？」

横井
「そこまで驚く？　しかし、本当にガラガラね～」

実際、佐野を除けば誰もいない、天城艦橋。

佐野
「仕方ありませんよ、今は皆、天城の部屋で休んでいますから」

横井
「それはいいけど…これで大丈夫なの？」

佐野
「多分、大丈夫だと思いますけど…医務長こそ、どうして艦橋に？」

横井
「あぁ、それは…」

天城
「横井～、艦橋で酒は飲めそうか～？」

佐野
「あぁ、そう言う事ですか」

横井
「あ、あはは…あはは…」

その頃……山城・シルヴィアは……

シルヴィア
「やはり、ダイヤモンドなどが採れる国は安いな…」

山城
「まあ、当たり前と言えば当たり前だね」

……市場を散策していたりする。

シルヴィア
「まあ、豪華なドレスに金だ、宝石だ、指輪だ、などと言って着飾る趣味は私には無いがな」

山城
「あはは、確かにね～」

まあ、1年も隣に居ればもう性格ぐらいは把握してしまうのだが。

山城
「…多分、君がそんな風だったら、こんな関係に成ってなかったかもね」

シルヴィア

「確かにな…それに、お主が初めてだ。家族以外で私に意見を言ってくれた人間は」

山城
「お褒めに預かり、光栄だな」

市場の喧騒の中、お互いにしか聞こえない程度の音量での会話……。

シルヴィア
「…こんな会話をしている場合では無かったな。さて、もう少し見て回ろうではないか？」

山城
「あぁ、そうだね」

所変わり……現世界帝都

国防省海軍次官室

福本（伊吹）
「さてと…こんなものかな？」

そう呟きながら、出来上がったばかりの計画書をパラパラ捲る。
表紙には『第二回　第零艦隊増備案・人員編（機密）』と『第零艦隊増備案・艦艇編（機密）』の文字が二冊に書かれている。

福本（伊）
「石破防相に見せたらなんて言うかな～…模型造れって言ったりし

て…いや、むしろ、山城の方がえらく言いそうだな」

笑いながら呟く福本次官だった。

シルヴィア
「ん？　山城？　何処だ～？」

山城
「あ、ごめんごめん…はい、プレゼント」

シルヴィア
「え！？」

渡されたのは首飾り。

山城
「着飾るのは趣味じゃないだろうけど、プレゼントは良いだろう？」

シルヴィア
「……あ、あ、ありがとう…」

山城
「いえいえ」

次号へ

232　それぞれの過ごし方（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２３３　防相視察

１０月４日（現世界９月２４日）

山城
（まあ、予想はなんとなく出来てたけど、まさか本当に来るかね～…）

到着予定の桟橋で佐野を連れて待つ山城。

佐野
「…艦長、石破防相ってミリタリーオタクで有名ですよね？」

山城
「あぁ…俺は福本次官の息子の勇気と仲が良かったから、ある程度は知ってたが……噂だと、７００／１サイズの播磨と大和を居間に飾ってるらしい」

佐野
「うわ～…じゃあ、コンビニで売ってる兵器模型買ってるって噂も…」

山城
「本当かもな…まあ、悪い人でも無いし、ある程度、そこら辺の知識が有るって言うのも悪くはないけどね」

佐野
「まあ…それはいいですけど……大丈夫ですかね～」

山城
「……福本次官も来るから大丈夫だと思う」
それぐらいしか言え無かった。

戦艦１３（＋２）隻、正規空母６隻、軽空母６隻、重巡洋艦１４隻、軽巡洋艦１４隻、駆逐艦８６隻、強襲揚陸艦４隻、潜水母艦５隻、潜水艦３０隻、掃海母艦４隻、掃海艦８隻、掃海艇２４隻、練習戦艦１隻、練習艦３隻、ミサイル艇１６隻、輸送艦３０隻、補給艦８隻……これが現日本帝国海軍が保有する全戦力だ。
その海軍艦隊（つまり現場）を統括するの連合艦隊司令長官で、空軍では空軍総司令長官、陸軍は陸軍総司令長官である。
国防省は簡単に言えば政治サイド・及び三軍の調整が主な役割である。そして、三軍の次官は防相のサポート役である。

山城
「作者、関係有るかどうか微妙な話をしている内に、飛行艇が来たぞ」

あ、本当だ……しかも、着水したね……。

佐野
「…話を進めましょう」

そうだね。

先ず先に降りて来たのは福本次官だった。

福本（伊吹）
「出迎えご苦労様」

山城
「次官、国防大臣が来るのに出迎えないといけないでしょう」

福本（伊）
「そうだな～、俺なんか、あの糞ババアを出迎えた事も無いけどな」

山城・佐野
「「いや、それは違うでしょう」」

福本（伊）
「ダブルでツッコミを入れてきたか…さて、出て来るぞ」

そう言われ前を見ると、スーツ姿の石破防相が飛行艇から現れた。

福本（伊）
「防相、彼がこの第零艦隊の中心である山城です」

山城
「初めてお目にかかります。天城艦長兼主席参謀の山城です」

石破防相
「君が山城君か。福本次官から噂は聞いているよ。福本元帥に会ったそうだね？」

山城
「あ、はい…（そうか、元帥の居場所は超軍機密なんだったよな）」

福本（伊）
「では、石破防相。視察を始めましょうか？」

石破防相
「うん、そうだね」

山城
「あちらが、韓国艦隊です。そして、全通甲板のある艦が揚陸艦『独島』…我が国の『竹島』です」

石破防相
「ふむ…韓国の反日ぶりは聞いた以上だな」

佐野
「海自隊員からの話では『安重根（アンジュウコン）』と言う名の潜水艦も存在しているそうです」

石破防相
「…確か、伊藤博文暗殺はロシアがやったって説が出たよね？」

福本（伊）
「えぇ、暗殺に使われた銃弾がロシア製だったとかで、ロシア介入説が出ましたね」

石破防相

「やれやれ…彼らが自分達の情けなさを知ったらどう思うかな？」

3人

「「「……」」」

多分……大変な事になるのは確実だろう。

石破防相

「それで、あれがキエフ型航空巡洋艦だね？」

山城

「はい。今のままでは使えないので、神戸で改装する予定です」

福本（伊）

「では、石破防相。天城へ行きましょうか」

次号へ

233　防相視察（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２３４　サプライズの筈が……

天城艦橋

普段は艦橋へ上がるエレベーターには乗らない山城（１９で艦橋へ上がるのにエレベーターを使うのは気が引ける。だから階段を使用）だが、石破防相の視察と言う事で乗っていた。

チン

佐野
「石破防相、入られます」

自動扉が開くと、佐野が先に出て告知、石破防相が入ると待っていた小澤中将以下艦橋職員は全員敬礼した。
そして、案内を小澤中将にバトンタッチし、山城は艦長職に戻る。

シルヴィア
「お帰り、艦長」

山城
「ただいま…さて、機関室、機関始動、低速維持」

機関長
『よーそろ』

今回の視察は低速～巡航速での付近一周を予定している。
まあ、機関の調子見程度の事だが。

山城
「これより港を出ます。短い航海ですが、石破防相、お楽しみ下さい」

……と、港を出てから数キロは何の問題も無く進んでいた。
しかし、数キロを進んだ直後に問題が発生した。

佐野
「？　艦長、大変です」

山城
「どうした？」

佐野
「レーダー画面が…ほら」

山城
「ん…乱れているな…前からか？」

佐野
「いえ、突然です…さっき迄は調子は良かったんですが…」

シルヴィア
「故障…ではないのか？」

佐野
「いえ…いくらデリケートなレーダーでも、唐突には…」

ちなみにこの会話は小声である。

山城
「…こちら艦長、通信室、異常は無いか？」

通信長
『あ、艦長。いま連絡しようと思ったのですが、通信機器の一部にノイズが発生しました』

山城
「……不味いな」

顎に手を宛てて考える山城。
普通、こう言った前触れはお決まりのパターンだから……。

シルヴィア
「…おい、山城…なんだか空模様がおかしいのだが…」

ついさっきまで晴れていたのに、何故か不気味な分厚い黒い雲。

山城
「……総員！　衝撃に備え！！！」

ちなみに、艦長とは呼んで字の如く、艦船の責任者である。
つまり、例え提督が乗ろうが、次官が乗ろうが、はたまた国防大臣が乗ろうが、艦船を指揮する権限は（人によっては色々あるが）艦長に存在する。
だから、単艦行動時の艦長の責任は何時に増して重い。

福本（伊吹）
「どうした、山城！？」

山城
「すみません！　説明は後に…」

バチバチハチ！

この時、山城、福本次官だけで無く、艦橋に居た全員がまるで電気がショートした様な音を聞いた。

ドカーーン！！！！

その次の瞬間には、爆発音とも落雷音とも取れる音が響き渡った。
と同時に襲ってきた衝撃波は４万トンの天城を大波に遭遇した小舟の如く揺らした。

山城
「くっ…シルヴィア、佐野、無事か？」

シルヴィア
「あ、あぁ」

佐野
「はい…まるで、核爆発の様な衝撃波でしたね」

山城に掴まっていたシルヴィアと、よろよろと立ち上がる佐野の無事を確認する。

山城
「小澤中将、福本次官、石破防相…ご無事ですか！？」

小澤中将
「あぁ…怪我は無い」

福本（伊）
「こっちもな…大臣、大丈夫ですか？」

石破防相
「大丈夫だ…艦長、なにがあった？」

山城
「それについてはなんとも……みんな、無事か？」

次々に無事を示す返事が返ってくる。

機関長
『機関室、全員無事』

通信長
『こちらも全員無事、機器チェック中』

宮里
『射撃指揮所他、戦闘班に異常無し……どうなってんだ？』

山城
「さあ…佐野、艦橋機器はどうだ？」

佐野
「いまチェック中です。パッと見で解るのはレーダー画面がアウトしている位ですね」

横井
『こちら医務室。異常無し。怪我人は居そう？』

山城
「今のところは…でも、念のために準備はして下さい」

横井
『了解』

通信長
『こちら通信室。扶桑の山南少将から無事かと問い合わせがきています』

山城
「無事だと伝えてくれ（どうやら、こっちが転移した…って事じゃないな…）」

何せ、自分が雷で転移したからね。

小澤中将
「なんとかなりそうかね？」

山城
「はい、幸い、機器の異常は今のところ報告されていませんし、人員の被害もありませんから…」

佐野
「あ、艦長。レーダー画面が回復しま…し…た……ん？」

シルヴィア
「どうした……山城！？」

山城
「ちょい待ち…光点複数……水上レーダーだな？」

佐野
「はい」

山城
「通信室、ＳＯＳ信号は来てるか？」

通信長
『…いえ、来てません』

山城
「……防相、予定を大幅に変更しますが、よろしいですね？」

石破防相
「あぁ、珍しい体験が出来ると思えば予定変更も仕方ないだろうね…それに私は只の押し掛けだ」

山城
「ありがとうございます…これよりレーダー画面の光点の正体を確認する。総員、警戒体勢に入れ！」

次号へ

２３４　サプライズの筈が……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

235　正体3（前書き）

福本
「昨日の昼間から大変だな。作者」

新米士官
「えぇ…とにかく今は犠牲者が1人でも少ない事を祈るのみです」

マリーダ
「今頃、自衛隊も、警察も、消防も大忙しでしょうね」

新米士官
「今回は阪神・淡路大震災並みの被害ですから、あーだこーだとうるさい人間も文句は無いでしょう」

山城
「こんな時に文句言う人は、人間として品位を問われますね」

新米士官
「まったくだ」

235　正体3

あの不審な落雷から2時間が経過した。
レーダーに現れた複数の反応に、天城はその正体を確める為に躍進していた。

佐野
「艦長、正体はなんですかね？」

山城
「それは解らないが…少なくとも、艦船で有ることは間違い無いだろう…そうで無いと水上レーダーに映る筈が無い」

シルヴィア
「確かにな」

そんな会話が交わされている間も、天城は３０ノットで突き進む。

山城
「さて、位置的にはこの辺なんだけどな…」

呟きながら首の双眼鏡で周囲を見る。
続いて、シルヴィア・佐野、手空きの艦橋員も双眼鏡や備え付けの望遠鏡で周囲を探る。

佐野
「…艦長！　右舷、２時の方向に艦艇！」

山城
「ん……本当だな。通信長、発灯及びモールス信号で問い合わせろ」

通信長
『了解』

直ぐに両方を使い問い合わせるが、反応は無い。

山城
「念のために戦闘態勢。但し、指示が有るまで射つな」

佐野
「はい」

巡航速に落としながらゆっくり近付く天城。
近付くにつれて、艦形がはっきりしてきた。

山城
「…戦艦と空母か……佐野、戦艦も空母も見知ってると思うのは気のせいか？」

佐野
「……艦長、間違いなければ、戦艦は八八艦隊の１３号艦、空母は船体が大和型に似ています」

山城
「１３号艦か……断定出来ないのが少し残念なところだな」

石破防相
「いや、あれは１３号艦だ」

山城
「うおっ！　石破防相!?　って、解るんですか?」

石破防相
「最近、八八艦隊のプラモデルが出たからね。１３号艦を最初に作ったから自信はある」

山城・佐野
（（作ったのかよ!?））

石破防相
「それに、あれは大和型戦艦を空母に改造したか、設計変更した物だね」

佐野
「解るのですか?」

石破防相
「プラモデルの信濃を空母に魔改造した事があるんだ。昔、しなかったかね?」

山城
「同級生の手伝いで小改造した事はありますが…（つーか、魔改造って…）」

何故かオタク防相の話が場を作ってしまっている。

シルヴィア
「お、漸く返事がきたぞ。山城、佐野、返事だぞ」

山城
「おっと、何々……佐野、信じるか？」

佐野
「…はい、この世界では半分何でも有りみたいなもんですから」

石破防相
「どうしたのかね？　何か不味いのか？」

福本（伊吹）
「…発灯信号を訳しますと『我れ大和帝国海軍戦艦『駿河』。本艦及び空母『富士』は航法装置に異常あり、貴艦の誘導を求む』…です」

この訳文を聞いた石破防相も事態が大体飲み込めた。

石破防相
「確かに、何でも有りだね…しかし、山城艦長。シーマンシップと成れば仕方ないな？」

山城
「はい。佐野、返信だ。『我れ大日本帝国海軍戦艦『天城』。誘導の為、貴艦への接舷を許可されたし』」

佐野
「了解。通信長、返信します。内容は……」

福本（伊）
「山城、お前は何かに見初められた様だな」

山城
「なんでそうなるんですか……見初められるのはシルヴィア1人で充分です」

シルヴィア
「何か言ったか？」

山城
「別に」

佐野
「艦長、先方から許可が降りました」

山城
「よし、巡航速で近付き、微速で接舷する」

佐野
「はい」

次号へ

235　正体3（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

236　コンタクト（前書き）

新米士官
「日に日に被害の凄さを様々と見せ付けられています」

福本
「衝撃度では阪神・淡路大震災並みだな、作者」

新米士官
「津波の襲った場所がほぼ更地化…父は広島の原爆後の写真を見ているみたいだと言っていましたね」

マリーダ
「今は一刻も早く避難者の救助・救済と行方不明者の捜索が第一ね」

新米士官
「今は政府批判は置いておくしかありませんよ。緊急事態ですからね。とにかく、今は精一杯の対応を期待しましょう」

236　コンタクト

１３号艦……山城達の世界では『大和・播磨型の前身』で有名な艦である。
石破防相が言った通り、かの有名な八八艦隊計画で一番最後に設計された戦艦である。
１３号艦はアメリカの３年艦隊計画のサウスダコタ型戦艦（史実のサウスダコタ型戦艦に非ず。４０，６ｃｍ三連装砲×４基の戦艦）を意識して設計された戦艦である。
このサウスダコタ型に対抗するため４５，７ｃｍ連装砲×４基を搭載する設計（諸説あり）の戦艦だったが……軍縮会議でお流れになったのは周知の事実だ。
しかし、この４５，７ｃｍ砲や船体設計のデータが大和型に生かされた事は事実であろう。
その『幻の戦艦』に山城は天城を接舷したのであった。

山城
（そこまではいいんだよ、そこまでは……なんだよ、これ？）

接舷後、直ぐにシルヴィア・佐野と共に乗り移った山城は直ぐに出迎えを受けた……歩兵銃を構えた水兵達の。

佐野
「…先輩、今までの経験からの助言をお願いします」

山城
「あったらこんな事になってるか」

シルヴィア
「まあ…先ずは取り敢えず、黙って手を上げろ」

下手に敵に回せば一個中隊を簡単に壊滅出来そうな２（＋１）人が両手を挙げていると言う間抜けな光景。
そのまま歩兵銃を突き付ける水兵達に囲まれながら尉官クラスの士官に誘導され３人は歩く。

佐野
（…あの、やっぱりこの船、ちょっとおかしくありませんか？）

山城
（何処が？）

佐野
（だって…今まで見ている限りは僕達と同い年位の女の子達ばかりですよ？）

山城
（……それ、畝傍艦の前で言えるか？）

佐野
（死亡フラグじゃないですか！？）

山城
（だから、止めろ）

佐野
「はい…」

シルヴィア
（…あちこち被弾していないか？　機銃弾の様だが…）

山城
（……）

……とボソボソ喋りながら歩く。
そして、ある部屋の前まで来ると入るように促された。
山城を先頭に入ると、会議室の様で会議用の長机と複数の椅子が置かれていた。
その机のちょうど『上座』の位置の辺りに目的の……と言うより連れて来させた張本人が居た。

「手荒な真似をして済まない。大和帝国艦隊『大和撫子艦隊』司令の桃園宮那子（とうえんのみやなこ）、階級は少将だ」

「参謀長の高城夕輝（たかしろゆうき）。階級は大佐。言っておくけど男だ」

自己紹介をした人物はこれまた山城・シルヴィア・佐野達と年も変わらない少女だった。

山城
「（『宮』て事は皇族だな…つーか、参謀長、言わんでも解る…の前に…）あの…まさか二隻は…」

高城
「う〜ん…自分以外は女子ばかりなんだよね〜」

3人
（（（マジかよ…））））

密かにツッコミをかます3人。

桃園宮
「さて…手荒な真似をしたのは理由がある…あなた方は何者ですか？　大日本帝国と言う似通った名前の国は私の記憶にはありませんが…」

山城
（さて……慣れはしたけど……大丈夫かな～…）

これからの事を考えると心配しか出てこない山城だった。

桃園宮
「……馬鹿な…我々は異世界に転移してしまったなどと…」

山城
「残念ながら事実です……また、現在のところ、我々以外は帰れるかどうかは…」

桃園宮
「つっ……」

いきなり立ち上がった桃園宮少将は会議室がら飛び出して行った。

高城
「…姫様の気持ちも解るけど……今はしっかりして欲しいんだけどな」

残った参謀長の高城大佐が呟いた。

佐野
「えーと…あなた方の世界はどの様な状況だったのですか？」

高城
「あぁ、そこからだったね。少し長くなるけど付き合ってもらえるかな？」

山城
「えぇ、構いませんよ」

次号へ

236　コンタクト（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２３７　亡国の姫君（前書き）

時間が経過するごとに被害状況が明らかに成っています。
読売新聞では『ちょうかい』の写真と共に生存者救出の一報がある左隣で、遺体を搬送する陸自の写真が掲載されています。
国防を担う自衛隊……しかし、見付かるのは遺体ばかりの状況……現場の自衛隊員や救出作業に加わる警察・消防官は悔しい思いで一杯だと思います。
しかし、挫けてばかりはいられません。
イギリスの新聞では『日本は災害と必死に戦っている』との報道がなされています。
既に世界の８８の国・地域が支援を日本政府に申し出ているそうです。
これは世界の注目が高いと共に日本が試されていると思います。
既に『災害』ではなく『国難』と言っていいでしょう。
この国難に立ち向かい、また、乗り越える事が犠牲者に対する最大の供養と思われます。
一部地域は戦後の焼け野原の様な状況ですが、日本中全てが焼け野原になったところから這い上がった大和魂が有れば復興は不可能では無いと思います。
長くなりましたが、今は一刻も早い現状打開と、行方不明者の１人でも多い無事救出を祈りたいと思います。

237　亡国の姫君

弩級戦艦『駿河』会議室

高城
「第一次世界大戦までの歴史は大筋であなた方と同様ですね…」

山城
「では、変化は第一次大戦後に？」

高城
「正確には大戦末期だな。参戦したアメリカが疲弊していたイギリス・フランスを尻目にドイツ帝国首都・ベルリンを占領した」

山城・佐野
「「な、なんだって！？」」

アメリカがドイツを占領…？
しかも、第一次大戦で！？

高城
「その後から、アメリカが暴走し始めたんだ」

山城
「暴走…と言うと？」

高城
「イギリスからの軍縮条約を一方的に放棄したんだ。まあ、２０年

頃からアメリカは科学技術分野が急速に発展していたから、予想は出来ていたんだが…その後は同じ軍人だから解るだろう？」

シルヴィア
「なるほど…対立から戦争か」

高城
「あぁ、３９年にドイツ駐留軍がヨーロッパに侵攻、４１年１２月に我が大和帝国に宣戦布告してきたんだ」

佐野
「ちょっと待って下さい！　それだと、アメリカは一国で世界を相手にしたって事でしょう？　いくら大国でもそれは…」

大国でも二正面で戦うのは愚行とされている。
また、いくら大国でも陸海両軍を世界最強にする事は不可能なのである。

高城
「その大国が目の前で艦隊を叩き潰してもそれが言えるかい？」

佐野
「……」

山城
「じゃあ、あなた方は…」

高城
「…姫様を守る為の『大和撫子艦隊』だからね…富士と一緒に退却さ」

軽く言う高城大佐…しかし、唇を噛んでいる。

シルヴィア
「1つ訊くが、皆が我々と同い年だと言うのは?」

高城
「あぁ、それは緊急召集で編成されたからさ。あと、女子が多いのは、一時期男児出生率が低くなったからさ」

シルヴィア
「ふ~ん…そう言えば、司令はどこに行ったのか、戻ってこぬな?」

山城
「……高城大佐、桃園宮少将は短刀か懐剣をお持ちですか?」

高城
「高城でいいよ…確か、将校用の短剣は持ってたと思うけど…」

ここまで言った瞬間、高城の顔が「まさか」と言いたそうな顔になった。

山城
「行きましょう、手遅れになる前に!」

男3人、女1人が艦内を走っていた。
4人とも血相を変えている。
そして、司令官室の前まで来た。

高城
「陛下！　開けて下さい！　陛下！」

ドアをガンガン叩く高城。
しかし、室内からは何の反応も無い。

高城
「陛下！　ふざけるのは止めて下さい！　陛下！」

山城
「退いて下さい！」

埒が明かないと見た山城が高城を退けると、零式拳銃の銃弾をドアの鍵に撃ち込んだ。

高城
「陛下！」

最初に飛び込んだ高城が見たのは、将校用短剣を自らの首に突き付ける桃園宮少将の姿。

高城
「陛下！　何をなさっているのですか！？」

桃園宮
「離せ参謀長！　もう私は生きていても価値は無い！」

山城
「理由は見当付くが、とにかく止めなさい！」

佐野
「死んで良いことなんてありませんよ！」

桃園宮
「ええい、離せ！　皇族らしく綺麗に死なせて！」

…普段なら男3人なら簡単に取り抑えられるのだが、こう言う時程、女性の抵抗は頑強だったりする。

桃園宮
「祖国の為におめおめと生きておきながら、異世界に飛ばされたとなれば、私が生きていても…」

パチン！！

スッキリする程の音が響き渡る。
そこには唖然とする男3人と叩かれた頬を抑える桃園宮少将、そして、叩いたシルヴィア。

シルヴィア
「何を言っておる！　この様な時に指揮官がしっかりせねばならぬに、何を屁理屈を付けて死に逃げようとしておるか！！」

胸ぐらを掴み、まるで説教の様に言い張るシルヴィアに、山城も止める気はおきなかった。

シルヴィア
「そんな所に逃げるより、周りの人間を頼れ！　そうゆう時の組織であろう！」

桃園宮

「…うぅ…ひっぐ…う、ぐ、ひぐ…う、うわ～ん～」

経験の差と言うべきか……何かの差を様々と見せ付けていた。

次号へ

237　亡国の姫君（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２３８　行動あるのみ（前書き）

被災地は多大な被害が伝えられています。
特に水没地域に対する救済が遅れています。
本来なら移動・輸送手段がある自衛隊も手をこまねいている状況です。

『専守防衛』の名の下に『侵略兵器』は持たないと言う愚策をとったが為に、水陸両用装甲車両を製造・配備していなかった事が仇となりました。
まあ、今回の地震が想定外でありましたから何とも言えませんが、水陸両用装甲車両の配備も検討する必要が有るかもしれません。

238　行動あるのみ

戦艦天城艦橋

佐野
「…と言う事で『駿河』及び『富士』は本艦に随伴する事に成りました」

福本（伊吹）
「皇族が乗っていたのか……行けば良かったかな？」

佐野
「あ～…今は止めといた方がいいですよ…ゴタゴタとしてますから」

福本（伊）
「ゴタゴタねぇ…まあ、どんなゴタゴタかは訊かないけど…で、山城とシルヴィアは？」

佐野
「御二人共、両艦艦長と打ち合わせ中です。ですから、艦長の命令で自分は先に戻って来ました」

福本（伊）
「『海軍次官に現状説明をして来い』ってか？」

佐野
「冒頭に『石破防相と小澤長官』が付きますがね」

福本（伊）
「そうか…ご苦労様」

佐野
「はい。失礼します」

敬礼すると佐野は下がった。

福本（伊）
「さて…あんまり言いたく無いが、厄介な事になったぞ…こりゃ…まあ、相手の皇族が傲慢な人間でない事を祈るまでだ……石破防相に報せてくるか」

そう呟くと福本次官は防相のいる士官食堂へと向かって行った。

山城
「ふう…ようやく、何とかなったな」

シルヴィア
「あの参謀長には感謝しなければならないがな」

打ち合わせを終えた2人が駿河から天城に乗り移って来ていた。
あの後、代わりに指揮を執った高城大佐のお陰で打ち合わせはスムーズに済んだ。

山城
「それよりも、こっちとしては君が皇族を説教する光景を見るとは思わなかったよ」

シルヴィア
「う……ついつい手が出てしまってな…」

山城が知る限り、彼女が『説教』をした事はあっただろうか?…とついつい記憶を手繰り寄せたが、残念ながらなかった。
しかも、身分上では上の皇族に対して説教とは……あの時、何故自分が冷静に成っていたか訊きたい程だ。

山城
「さて…帰ったら大変だな～…」

……また厄介事に巻き込まれそうで…。

その後、天城は駿河・富士を誘導し、帰還した。
無論、大騒ぎになったのは当然と言えば当然だったが……。

2日後……

天城艦内艦長（兼主席参謀）室

山城
「帰還命令…ですか?」

福本（伊）

『あぁ…と言ってももしかしたら…ってレベルだからな』

山城
「しかし、あり得ない訳では無いでしょう？」

福本（伊）
『うむ、だから、準備はしといてくれ。後の指揮は山南少将に執ってもらえ』

山城
「そんな簡単に…」

シルヴィア
「や～ま～し～ろ～、何時になったら話は終わる～？」

福本（伊）
『……済まん、おとりこみ中だったか？』

山城
「……次官、今度会ったらあなたを黙らせていいですか？」

福本（伊）
「あは…あははは…（怖いぞ、山城！　最近、怖くなっているぞ！）」

山城
「…んな訳無いでしょう。だいたい、自分はそんな淫らな人間ではありません」

福本（伊）

『（それでも怖いぞ…）ま、まあ…とにかく準備はしといてくれ。あと、息子達を送るから』

山城
「勇気をですか？　そんなに人員不足じゃあ、無いでしょう？」

福本（伊）
『セルベリアもだ。空いてる人間が息子しか居なかったんだよ』

山城
「予備人員くらい、確保しておきましょうよ」

福本（伊）
『色々と大変なんだよ。じゃあ、よろしく』

そう言うと電話は切れた。

山城
「ふう…さて、続き続き」

山城（戦艦）
「何々…『海軍士官学校に入学。１０万円を払え』…だと！　高いぞ！？」

愛宕
「足りてますか、お金？」

こんごう
「足りなかったら、銀行から借りる事になります」

山城（戦艦）、愛宕、シルヴィア、天城、こんごう、佐野らが人生

ゲームをしていた。

シルヴィア
「ほら、お主の番だ」

山城
「はいはい…ほらよ」

コロコロ…コロン

天城
「3…だな」

山城
「え～と、1、2、3…と」

佐野
「『宇宙人から新技術を貰う。2マス進む』」

山城
「…なんじゃそりゃ？」

次号へ

238　行動あるのみ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２３９　摩訶不思議な洞穴（前書き）

今度は静岡周辺で震度６強を観測したそうです。
石原知事の『天罰』発言が実は当たってるのではないかと思えてきました。
次は近畿では？……と考えてしまいます。

そして、マスコミ……特に原子炉に焦点を当てて報道しておりますが、『知る権利』と言うのは時として、余計な混乱を招く場合が有ると考えるべきでは…と思います。

239　摩訶不思議な洞穴

10月7日（現世界9月27日）

福本（勇気）
「と言う訳で参りました」

山城
「お疲れ様」

予告通りに、後輩の福本勇気・セルベリアの2人が天城に来た。

山城
「しかし…お前の親父さん、人使い荒くないか？」

福本（勇）
「あはは…残念ながら慣れました」

苦笑しなから言う勇気。

山城
「さて、息子のお前を出して来てまでやる『用事』があるのか？」

福本（勇）
「はい。先ずマキシム・ゴーリキの事ですが改装が完了し、『銀河』と命名され、現在は熟練中です」

山城

「銀河って…誰が考えたんだ？」

福本（勇）
「さあ…あと、韓国艦艇及びキエフ型航空巡洋艦の回航要員の編成が終わり、本日中にでも一部が到着する予定です」

山城
「ふ～ん…まあ、連日物資輸送が来てるから大丈夫か…他には？」

福本（勇）
「いる物がないかと聞いて来いと」

山城
「何時ものパターンだな」

福本（勇）
「何時ものパターンです」

お互い自分の上司と父親の顔を浮かべて苦笑する2人。

山城
「1日程考えさせてくれ…今日中に帰るのか？」

福本（勇）
「いえ、一晩泊まります」

山城
「なら、天城の空き部屋を使え、皆には言っておく」

福本（勇）

「はい…で、先輩はどこへ？」

山城
「ん、まあ、現場確認にな」

福本（勇）
「現場確認？　何かあったんですか？」

山城
「まあ…あったと言えばあったんだが……少し奇妙なんだよな～」

福本（勇）
「奇妙？？」

山城
「あぁ、実は…」

街外れのとある所

シルヴィア
「確かに、只の洞穴では無いな」

セルベリア
「そうですね。人の手が加えられていますから」

山城達が居るのは街外れの狭い山道に突如現れた横穴だった。

山城
「たまたまここを通った行商人が報せてくれたんだ。まあ、念のための調査だよ」

福本（勇）
「なるほど」

喋りながら４人は洞穴に入る。

福本（勇）
「上下左右共に石壁でしっかり補強されていますね…密教の集会所でしょうかね？」

山城
「残念ながら、断言は出来ないな。何時できたか解らないし、地形も変わっているだろうからな」

４つの懐中電灯を持った４人が奥へと進む。
しかし、直ぐに足が止まった。

セルベリア
「行き止まり…ですね」

山城
「倉庫代わりにでも使ってたのかな？　それとも王城の脱出路にする予定だったのか」

福本（勇）
「この様子では、調査しても意味は無いでしょうね」

４人の懐中電灯は思い思いの所に向け、光が周りを照らす。
シルヴィアは行き止まりの壁を適当に触った。
その瞬間……

パカ

シルヴィア
「ん、うわ！？」

ドシーン！！

……下に落ちた…尻餅をついて。

山城
「ん…シルヴィア？　何処にいるんだ？」

シルヴィア
「ここだ！」

福本（勇）
「はて？　声はすれども、姿は見えず」

シルヴィア
「下だ！　床を照らせ！」

セルベリア
「床ですか？」

セルベリアが懐中電灯を床に向けると……行き止まりの壁の床がぽっかりと空いている。

山城
「シルヴィア！　大丈夫か!?」

シルヴィア
「大丈夫だ！　それより、そこまでどれくらい有りそうだ?」

福本（勇）
「2メートル弱…と言ったところですね。ですが、登れる様には成ってません…ロープ探して来ます」

山城
「佐野が近くにいた筈だ。行って来い」

福本（勇）
「はい」

山城
「しかし、いったいどうなってるんだ、この洞穴は?」

ロープにより下に降りた山城が懐中電灯で周りを照らしながら呟いた。

福本（勇）
「本来はこうやって、梯子かロープで降りる様にしていたんでしょう…よっと」

ロープで降りながら福本が喋った。

シルヴィア
「この先もかなり有りそうだな…楽しくなってきたぞ」

山城
「それはいいが…頼むから、いきなり消えたりしないでくれ」

シルヴィア
「う…」

セルベリア
「よいしょっと…山城先輩、あとは佐野先輩だけです」

山城
「ありがとう。佐野、行けそうか？」

佐野
「はい、少し待っていただければ…」

山城
「わかった。じゃあ、佐野が降りて来たら、出発するか」

次号へ

239　摩訶不思議な洞穴（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２４０　未来への地下室（前編）

５人は更に奥へと進んでいた。
ちなみに、念の為に佐野が目印代わりに糸を延ばしている。

山城
「深いと言おうか…広いと言おうか…結構あるな」

福本（勇）
「えぇ…余程の理由で作ったのでしょう」

そのまま奥へ奥へと先に進んで行く。
しかし、また行き止まりにぶつかった。

山城
「さて…さっきのから見て、何か仕掛けがあってもおかしく無いな」

佐野
「そうですね……壁を探してみましょう」

懐中電灯で壁の周りを照らす山城達。
そして、福本がそれを見付けた。

福本（勇）
「どうやら、鍵の代わりに、何かを嵌め込む様にしていますね」

セルベリア
「そうね…でもなにを？」

佐野
「形からして、首飾りかなにかだと思いますけど…」
そう言いながら3人は行き止まりの壁の真ん中にある窪みを見る。

山城
「待てよ……シルヴィア、この前、君にあげた首飾りは？」

シルヴィア
「ここにあるが…それがどうした？」

言いながらシルヴィアは首から掛けていた首飾りを見せる。

山城
「その形だから…もしかしたら…これかも…」

そう呟きながら、山城は窪みに首飾りを嵌め込む。
すると、その壁が光だした。

シルヴィア
「バカな…ヒビが入って…割れる！？」

セルベリア
「いえ…これはコンピューターの接続ケーブルです！」

山城
「セルベリア？」

セルベリアの声は何故か震えていた…語尾は悲鳴に近い。
そして、壁は両開きの門の様な形で開いた。

福本（勇）
「先輩…あれ、どこで買ったんですか？」

山城
「市場の一角……だけど、そのお店はもう無い」

佐野
「永遠の謎になりましたね」

そんな事を話している間に、シルヴィアは中に入った。
その『部屋』の中は今までの通路とは反対に広い空間になっている。

シルヴィア
「いったい、ここはどうなっておるんだ？　何があるのか…ひゃっ！？」

山城
「どうした、シルヴィア？」

福本（勇）
「あぁ、白骨化した人間ですね」

懐中電灯で確認した福本が素っ気無く言う。

シルヴィア
「…なぜ、そんなに余裕に構えていられる？」

福本（勇）
「元帥の孫ですから」

山城
「いや、関係無いだろう」

福本（勇）
「そうですか？　まあ、化けて夢枕には出てこないでしょうけど」

普通に喋りながら、白骨化した遺体と周辺を調べる福本。
その時、部屋が突如として明るくなった。

山城
「なんだ、電気があったのか？」

セルベリア
「私達が扉を開けたので、自動発電装置のロックが解除されていました。あとはコンピューターで照明ロックを解除しました」

佐野
「…詳しいですね。専攻なんですか？」

セルベリア
「いえ……偶々です」

明るくなった部屋で、山城達は部屋を眺める。

山城
「まるで大和型や扶桑型戦艦の艦橋だな…コンピューターやスクリーンばっかりだ」

シルヴィア
「それで…その遺体が大事そうに寄り添っているのはなんだ？」

福本（勇）
「どうやら、何かの物入れの様ですね。開けてみます」

今度は扉の様な仕掛けは無く、簡単に開いた。

山城
「コンピューターのメモリーに、ＤＶＤソフト、あとは細々とした物だが……えらく時代に似合わない物ばかりだな」

佐野
「メモリーとＤＶＤの中身が気になります…見てみましょう」

福本（勇）
「…セルベリア、再生出来そう？」

セルベリア
「…えぇ、出来るわ」

次号へ

２４０　未来への地下室（前編）（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２４１　未来への地下室（後編）（前書き）

一発で纏めようと思い書いたら、結構長くなりました。
ちなみに今回は色々…うわー！！　ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！（いきなり攻撃を受けました）

山城・シルヴィア
（（余計な事は言うなって事だな…））

２４１　未来への地下室（後編）

セルベリア
「メモリーを再生します……どうぞ」

慣れた手つきでキーボードを操作し、あっという間にメモリーを再生してしまった。

そして、手元のスクリーンに映像が映し出された。

『…これを見ている方は、この世界でこれまでの試練を潜り抜けた者達でしょう』

映像にはこの部屋と録画したと思われる女性が映っていた。

シルヴィア
「まさか…この女性は…」

山城
「背景から見て……間違い無いだろう」

ちらりと白骨化した遺体を見た。

佐野
「…けど、誰かに似てませんか？」

福本（勇気）
「え？　そうですか？」

今度は福本の端切れも悪くなった……山城はあえて気にしないが。

『私の予知が当たっているのなら、あなた方は亡国の王子と姫君が納める国を救い、更には西の大陸の大国を破り、エルフを狂者の愚行から救い、異界の独裁者を討ったでしょう』

シルヴィア
「バ、バカな…」

佐野
「そんな…全て言った事が…」

山城
「当たっているな、完全に」

驚愕する2人に対して、山城はさらりと言った。
何せ、雷でこっちに転移したし、その後の事も『この世界だから、あってもおかしく無い』と平然に構えている余裕が出来てしまったからだ。
だから、『未来予知が出来る人間が居てもおかしく無い』と簡単に結論付けていた。

『そんなあなた方なら、私の警告を真摯に受け止めてくれるでしょう。「滅びし異界の大国、その強大なる力を振るい、この世界を奪わんが為に至る」』

シルヴィア

「また異世界から厄介なのが来る…と言う訳か」

佐野
「信じるかは置いといて……受け止めてしかないんですね」

山城
「また忙しくなるな…」

『もし、『西の民』やエルフの子孫が居ましたら……我らの為に多大な迷惑をお掛けして申し訳ございませんでした……また、あなた方の中に我らの一族がいたら伝えて下さい…馬鹿な娘でごめんなさいと』

そう言って映像が切れた。

シルヴィア
「最後のはいったい何だったんだ?」

佐野
「…さあ?」

山城
「まあ、人には色々と事情があるって事さ」

…綺麗に山城が纏めた。

山城
「まあ、こっちとしてはこのＤＶＤソフトの中身が気になるところだがな」

ガタッ！

いきなりセルベリアが立ち上がった。

セルベリア
「ちょ、ちょっと…お手洗いに……」

そう言うとまるで何かから逃れるかの如く出て言ってしまった。

山城
「…行ってやれ、福本」

福本（勇）
「え？」

山城
「そんな事が解らん程、馬鹿じゃないぞ。ＤＶＤの再生くらいは出来るから、早くセルベリアの所に行って来い」

福本（勇）
「…ありがとうございます」

そう言うと福本も出て行った。

佐野
「……あれも事情の１つですかね？」

山城
「だろうな…さてと」

そう言うとマウスを手早く動かしてＤＶＤを再生させた。

数時間後……天城医務室

山城
「落ち着いたか？」

福本（勇）
「えぇ…お陰様で」

横井
「大丈夫大丈夫。只の失神よ」

ＤＶＤを一通り見た山城はそれをケースに戻し、佐野に持たせて部屋を出た。
途中、福本と合流したが、セルベリアの意識が無いと言われ急いで天城の医務室へと担ぎ込んだのである。

山城
「さて、一段落したところでだ……福本、訊きたい事がある」

福本（勇）
「……なんですか？」

山城
「惚けるな。セルベリアの正体を教えろ」

福本（勇）
「なにを言ってるんですか先輩？　セルベリアは…」シルヴィア
「『只の貴族の娘』と言う訳にはいかんぞ。先程の地下施設での振る舞いは怪しい」

佐野
「それに、余りにも内部を知り過ぎです。あの扉の事だって直ぐに解りましたし」

ちなみに、あの時の首飾りはシルヴィアの首に戻っている。

福本（勇）
「……わかりました。どうせ公然の秘密ですし…ただし、余り公言しないで下さいよ」

山城
「わかった…で？」

福本（勇）
「先輩、１０…いえ、１１年前の８月９日を憶えていますか？」

山城
「あれを忘れろと言うのが無理な話だな。阪神大震災の年のだからな」

佐野
「『８月９日の邂逅』…だったけ？　宇宙人がその３日前から接触してきて、世界が大騒ぎしたっけ」

福本（勇）

「えぇ、ミサイルを撃とうとする欧米諸国を宥め、唯一接触した日本政府が協議したのが8月9日……結局、15日早朝には彼らは地球軌道から離れてしまいましたが、彼らと日本政府が密約を結んだのは語り種になってます」

横井
「確か『技術譲渡』が主にって聞いたけど…」

福本（勇）
「えぇ、ですが、それでは向こうに利は有りません……もう1つの密約、『アーヴ人の地球への移住』です」

山城
「あれ？　でも、帰った筈なのに？」

福本（勇）
「宇宙…アーヴ人は何億年も前に星間戦争により、母星を失い、その後、移住可能な星を探していました。接触したのは大型探査艇なんですよ。だから、日本政府は10年間の準備期間を設けたんです」

シルヴィア
「なるほど、移住を認める代わりの…と言う訳か」

横井
「長々と説明はいいけど……本筋を忘れて無い？」

福本（勇）
「すみません…彼女、つまり、セルベリアはその第一陣である1人、アーヴ皇族唯一の皇位継承者なんです」

4人
「「「「……な、な、な、なんだって!!!?」」」」

福本（勇）
「……だから、あんまり喋りたくないんですよね」

セルベリア
「世の中とはまったくもって恐ろしいものだ」

佐野
「さすが、帝国元帥の孫」

横井
「世界に敵無しのコンビね」

山城
「まあ、そうで無いと釣り合わないよな……で、なんでセルベリアはあんなにおかしかったんだ？」

セルベリア
「それは…『西の民』と接触した『空の民』とは我々アーヴ人の事……そして、さっきのは私の大おば様にあたる方だからです」

福本（勇）
「セルベリア…大丈夫か？」

セルベリア
「えぇ……それとシルヴィアさん」

シルヴィア

「ん、私？」

セルベリア
「先人達に代わり、あなた方の祖先を苦しめた事に謝罪します」

そう言いながら土下座した。

シルヴィア
「な、謝罪されても…困る。確かに先人が苦行を味わった事は確かだが、そちらが悪い訳でも無し…それに元は向こうがやり過ぎたのが原因だから…」

困惑しながら話すシルヴィアも、何かにハッと気付いた。

シルヴィア
「それにお陰で山城とも会えた訳だしな！」

山城
「俺の話になるのかよ」

横井
「そっちに回すのね」

佐野
「そうなるんですね」

福本（勇）
「まあ…とにかく気にしてないってさ、セルベリア」

セルベリア

「……えぇ、良かった…」

その夜……天城上甲板

福本（勇）
「山城先輩」

山城
「ん、福本か。眠れないか？」

福本（勇）
「いえ、ちょっと先輩にお話が…」

山城
「昼間の事だな。あれは考古学者達を呼ばなきゃならないな…あと、遺骨もちゃんとしなきゃならないし」

福本（勇）
「そうですね……先輩、実は先輩にだけ聞いて欲しい秘密があるんです」

山城
「俺だけ？　なんだ？」

福本（勇）
「実は彼女、許嫁なんです」

山城

「……ベタでお似合いな話だ」

笑いながら言った。

福本（勇）
「もう、驚かないんですね」

山城
「お陰で1年分の驚いきが今日で消費されたよ。それはいいとして、いいのか？　同じく11年前の初恋の相手は？」

福本（勇）
「…大丈夫です。彼女が初恋の相手ですから」

山城
「……ベタで、お似合いで、いいカップルだな」

福本（勇）
「あはは……先輩、今度の戦い…死なないで下さいよ」

山城
「ふっ、ここまで聞いたら死ねる訳無いだろう。絶対、お前ら2人の結婚式を見てやるよ」

福本（勇）
「なら、自分は先輩とシルヴィアさんの結婚式に招待して下さいよ」

山城
「まったく……約束だ」

福本（勇）
「えぇ…約束です」
密かに交わした男同士の約束だった。

次号へ

２４１　未来への地下室（後編）（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２４２　若き君主達のお忍び計画（前書き）

今朝の新聞を見ますと、大津波は２３メートルだったとか……洋映画を見ていた自分としては……まさか、映画の様な事が…と思っています。

また、松島基地は隊員一名が死亡した他、Ｆ２戦闘機１８機など２３００億円になるとか……只でさえ少ないのに…。

とにかく、今は１日でも早い復興を祈ります。

２４２　若き君主達のお忍び計画

１０月９日（現世界９月２９日）に、戦艦天城に対して緊急帰還命令が届いた。
既に覚悟をしていた山城は天城・征龍・鹵獲艦艇を連れてラバナスター経由で神戸へと帰還する予定だった。
しかし、ラバナスター寄港時にシルヴィア経由で王都ユニオンに来て欲しいとの要請が有り、山城はヘリで王都に向かった。

王都ユニオン　王城内

グロワール男爵
「おぉ…待っていたよ、山城中佐～」

山城
「…どうしたんですか、グロワール宰相閣下？」

シルヴィア
「そんなにげっそりと…どうなさいましたか？」

確か、出発前に見た時より大分やつれて、弱々しくなっているのは気のせいでしょうか？

グロワール男爵
「中佐～、姫様とアルスラーン王子を止めてくれ～…儂は心配で心配で夜も寝られず、食も細くなっておるのだ～」

山城
「あ、あの…状況説明をしていただかないと、対応のしようが…」

グロワール男爵
「状況は侍従長から頼む…後は頼んだ…ガクッ」

山城
「ガクッ…って、医者！　医者を呼べー！」

シルヴィア
「衛生兵！　担架を持って来い！　衛生兵！！」

……一時、騒然となったのは当たり前である。

山城
「状況は把握出来ました。ありがとうございます」

グロワール男爵が担架で運ばれた後、山城とシルヴィアは侍従長から状況の説明を受けた。
侍従長の話によると、どうやら2人は日本に（お忍びで）行きたいらしい。
まあ、これが王都だったらグロワール男爵も安心出来ただろうが、日本となると目が届か無いだけに心配して、何度か説得したが聞いてくれないので……ああゆう事になったのだと言う。

シルヴィア
「まあ、ある意味解らなくも無い。グロワール男爵はアーネリア陛

下の教育係でもあったからな……ある種の親バカだな」

山城
「まあ…あり得無い事では無いけどね…」

噂では、アーネリア陛下への縁談話はアルスラーン王子以外握り潰したらしい…。
完全なる親バカだ。

山城
「…行ってみるか」

シルヴィア
「そうだな」

山城
「アーネリア陛下、失礼します」

アルスラーン
「おや、御二人でしたか」

シルヴィア
「アルスラーン陛下…アーネリア陛下は？」

アルスラーン
「グロワール男爵が倒れたと聞いて、そっちに行ったよ」

山城

「そうですか…さて、どうしたものでしょうかね？」

アルスラーン
「グロワール男爵の心配も解るけど、やはり、見えない部分も見たいからね」

山城
「なるほど…う～ん……」

さすがに長期間、王都に留まる事は出来ない……出来れば今日中に解決したい。

山城
「……とにかく、天城に来ますか？」

シルヴィア
「おいおい…」

アルスラーン
「それはいいかもね」

シルヴィア
「待てい！！」

山城
「いや、陛下も良いって言ってるし…」

シルヴィア
「もう一方の意見を無視して…」

アーネリア
「私もその案に賛成しますわ♪」

山城
「どこで聞いてたかは置いといて、姫様も良いって言ったよ」

シルヴィア
「……なんだ、これは…」

シルヴィアは処置無しと言いたそうな顔だった。

グロワール男爵
「…行ってしまったか？」

侍従長
「はい」

グロワール
「…そうか」

彼の部屋からは天城へと向かうヘリが見えていた。

グロワール
「姫様達には新しい物を見てもらいたい……この国が長く栄えるには、日本の様な国を若い内に見てもらいたいからのお…」

…実はしっかり理解してたりする男爵。

侍従長
「しかし…本当に大丈夫でしょうか？」

グロワール
「ほっほっほ…あの2人がいるなら安心じゃよ…あの2人なら、姫様達を任せてな」

ヘリ内部

山城
「……もしかしたらだけど…」

シルヴィア
「ん、なんだ？」

山城
「うん…グロワール男爵に一杯食わされたかもな」

シルヴィア
「…はあ？」

山城
「いや…もしかしたら、俺とシルヴィアが呼ばれたのは説得させる為じゃなくて、連れ出す事を期待していたのかも…と思って」

シルヴィア
「……まあ、良いでは無いか。帰ってから訊けばいい」

山城
「……そうだね」

次号へ

２４２　若き君主達のお忍び計画（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２４３　先ずは司令にご報告（前書き）

本日、出来たら『新第七独立機動艦隊奮戦記』を更新します。
お楽しみに。

２４３　先ずは司令にご報告

１０月５日（異世界１０月１５日）

神戸鎮守府内司令室

山城
「…と言う訳で、念のために井上司令に報告しておきます」

井上中将
「まったく、下手したら首が飛ぶ様な事を堂々と報告しに来るわね」

山城
「もう既に自分の首は一度飛びかけてますよ…チャイナー帝国との時に」

井上中将
「あなたね……それはいいとして、陛下２人をどうするつもり？まさか、ほっとく訳にはいかないでしょう？」

山城
「さすがにホテルと言うのはいざと言う時に難があるので、実家に泊めようかと」

井上中将
「実家って……大丈夫なの？　あなたのお母さんの噂は色々と聞いてるんだけど…」

山城

「……多分、大丈夫かと……さすがに、直訴と言う名の恐喝をした某人物程では無いので…」

……多分ね。

井上中将
「……まあ、あなたを信用するしか無いけどね…福本次官には私から伝えておくわ」

山城
「ありがとうございます」

井上中将
「それより、もうドックの天城が修理に入ったって本当？」

山城
「えぇ…技官達は『ミサイル命中箇所の被害を調べるぞ！！』と叫んでいましたが…」

井上中将
「……余程、天城にハープーンミサイルが命中した事が嬉しいみたいね…」

山城
「…みたいですね」

あの嬉々とした目と顔を思い出すと……もう、何も言うまい。

山城
「では、本官は失礼します」井上中将

「えぇ…あとの事はお願いよ」

山城
「わかってますよ」

鎮守府を出た山城は自宅へと向かった。
メンバーは山城・シルヴィア・アルスラーン陛下・アーネリア陛下…で行くつもりだったのが、佐野・ルーデル・大澤・ヴィクトリアと遭遇してしまい、結局、総勢８人で山城の実家に向かった。
それで今……山城達は山城宅の前に居る。

山城
「…さて、問題はこれからだ」

シルヴィア
「…そうだな」

佐野
「…あの…差し出がましいですが…なんで入らないんですか?」

大澤
「…色々とあるんだよ」

山城・シルヴィアを除き唯一事情を知る大澤が佐野に向かって呟いた。
そして、覚悟を決めた山城が扉を開けた。

山城

「ただいま～～…」

ガタッ！

バタバタバタバタバタバタ！！

山城（真希）
「お帰り～、正人！！」

ギュウ～…

シルヴィア
「あの…母上殿…何時もの事ながら、正人は隣ですが？」

山城（真）
「あら～、また、間違えちゃった～、てへ♪」

山城
「母さん…公共面前で止めてくれ」

5人
「「「「「……」」」」」

大澤
「だから言ったんだよ…色々あるんだって」

……そう呟くしかなかった。

山城（真）
「まあまあ、向こうで正人にお世話になった？　で、そちらが部下の方？」

一向を家に上げた真希が色々と訊いていた。

佐野
「は、はぁ、そうですが…」

山城（真）
「じゃあ、正人は普段どうなの？　シルヴィアちゃんは？」

佐野
「え、え～と…普通だと思うのですが…」

さすがに佐野は納得していたりする……この母親だから、艦長はあんなにしっかりしているのではないだろうか…と。

山城（真）
「さ～てと、こんなに大勢だと、今日はご馳走ね♪　買い物に行って来ようかしら？」

シルヴィア
「あ、それなら私も」

ヴィクトリア
「なら、私も同行しますわ」

アーネリア
「じゃあ、私も」

そう言って買い物係（女性陣）は買い物に出掛けた。

山城
「…はあ～…何もして無いのに神経が磨り減る…」

ルーデル
「艦長…まさか、あの母親は…」

佐野
「多分…何も言わない方がいいかと…家族が解っている事ですし…」

まあ、佐野がどれくらい理解しているかは別として……問題は朝だったりするのだが……。

次号へ

２４３　先ずは司令にご報告（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２４４　これが普通か？　山城家

山城の自宅

山城（真希）
「ただいま～♪」

山城
「お帰り…な…さ…い？」

普通に帰って来た買い物組を出迎えた山城……の筈が、一番に入ってきた母親の後ろから見えたのは風華・宮里ペアだった。

山城
「えっと…母さん？　なんで宮里がここに…」

山城（真）
「たまたま会ったのよ～、２人で夕飯の買い物してたしね～」

山城
「…そうですか」

宮里の方を見ると苦笑していた…多分、躊躇いがちに付いて来たのだろう。

山城（真）
「さて、今日はすき焼きよ～♪」

まあ、鍋物は大人数でも材料を放り込めば簡単に出来てしまう（もちろん、物によっては下準備はいるが）から、楽と言えば楽だが。

山城
「そう言えば父さんは？　また航海？」

山城（真）
「うふふ～、実は最近、陸（おか）に上がりっぱなしなのよね～」

山城
「……どうゆう事？」

山城（真）
「う～ん、人事異動で異動したんだけど……とにかく、今は陸で待機しているみたいなの」

山城
「ふ～ん…まあ、一回電話してみるか…（ピッ、ピッピッ）…もしもし、父さん？」

山城（広樹）
『お、正人か？　どこから掛けてるんだ？』

山城
「え～と…友達や部下を連れて自宅に……」

山城（広）
『……帰って来ているのか！？』

山城

「え、あ、うん…で、今日は大人数だから、すき焼きにするって…だから、今日は早く帰れるか…」

山城（広）
『帰る！　今からでも帰れるぞ！　いや、今から帰る！（ドタバタドタバタ！！）』

山城
「あ、わかった…じゃあ（ピッ）」

山城（真）
「で、どうなの？」

山城
「……今から帰るって」

山城（真）
「そう♪　ところで、シルヴィアちゃんはいいけど、アーネリアちゃんやルーデルちゃん、ヴィクトリアちゃん、風華ちゃんにアルスラーン君の着替えってあるの？」

山城・シルヴィア
「「あ……」」

確かに、アーネリアもアルスラーンは王族、ヴィクトリアは貴族だから、こちらの世界の私服なんて無い。
また、風華・ルーデルは今まで軍服で殆ど過ごしていたから、私服自体が存在していない。

山城（真）

「う～ん…アルスラーン君は正人か広樹さんの服で間に合うとして…問題は女の子のよね～♪」

山城
「…母さん、まさか…」

山城（真）
「うふふ～♪　私のコレクションの出番よ～♪」

シルヴィア
「…覚醒したか？」

山城
「…多分、したな…母さん！　無難な服にしてくれよ！　頼むから！」

山城（真）
「大丈夫よ～♪　じゃあ、皆さん。こちらに来てくださ～い」

山城
「……大丈夫かな…？」

全然安心出来ない山城だった。

バタバタバタバタ！

山城（広）
「帰ったぞー！！！」

山城
「お帰りー…そんなに慌て帰って来なくても…」

山城（広）
「息子が帰って来たんだ、向こうの事を色々と聞きたいからな」

山城
「…母さんから聞いたけど、人事異動で異動になったんだって？」

山城（広）
「う～ん、もう聞いていたのか……実は、今度ある貨客船の船長に内定したんだ。まあ、お前と同じぐらいになったのさ」

山城
「貨客船……あ、まさか！？」

山城（広）
「察しがいいな。さすが海軍軍人だ」

…多分、近々にでも貿易体勢構築の為の第一便を出すのだろう。
それなら、現段階で身内が現地入りしている人間に船を預ければある程度の融通が効くと判断したのだろう。
もちろん、ある程度の情報収集も必要だが。

山城（広）
「まあ、その話はまた今度だ。今日は色々と向こうの話も聞きたいしな」

山城

「…ええ、いいですよ」

次号へ

２４４　これが普通か？　山城家（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

２４５　緊急会議（前編）

１０月６日　帝都国防省

山城
「まあ、予想はしていたが……こんなに早くお呼びがかかるとはな」

シルヴィア
「しかも、電話が夕食中に掛かってきたからな」

佐野
「う～…緊張します…」

昨日の夕食に掛かってきた山城の携帯電話への着信は福本次官からの『明日、帝都の国防省に来い』であった。
そこでアーネリア達女性陣の私服を買いに行くと言う母親山城真希にメンバーを任せ、福本・シルヴィア・佐野の３人は帝都へと向かった。

福本（伊吹）
「お、来たな。これで漸く主役が揃い、舞台が整った」

山城
「…福本次官、何か企んでいませんか？」

福本（伊）
「企んでいないよ。まあ、色々と準備したのは認めるよ」

シルヴィア
「それを『企む』と言うのであろう」

福本（伊）
「ツッコミが鋭くなったのは気のせいか？」

山城
「…そんな事は置いといて、なんで呼ばれたのか説明して下さい」

鷲井
「今回の事で福本次官が緊急会議を開いたのさ」

山城
「鷲井！？　お前、異世界に居たんじゃ…」

鷲井
「昨日の早朝に福本次官から呼ばれたんだ…人を電話で叩き起こして」

山城・シルヴィア・佐野
（（（……御愁傷様です）））

鷲井
「まあ、元々勇気に頼まれてた件だったからいいけどさ…いや、山城のと言うべきか？」

山城
「どっちでもいい…緊急会議って、何処までです？」

福本（伊）

「まず、石破大臣、陸空軍次官だろう…あとは連合艦隊司令長官、陸軍総司令長官、空軍総司令長官にその参謀達、諜報部に…」

山城
「…国防省会議並みじゃないですか！？」

福本（伊）
「ん、だって、今回は下手したらこの国にも影響を与える話だ。この後に内密で緊急閣僚会議も…」

山城
「まさか…それに出ろって言うんじゃ…」

福本（伊）
「おぉ、察しがいいな。その通り、シルヴィアも一緒にな」

山城・シルヴィア
「「……」」

佐野
「あの～、福本次官…そう言うのは昨日の電話の時点で言った方がいいような気が…」

福本（伊）
「だから、いま言った……おまえら～、な～に、零式とワルサーＰ３８を抜いて…初弾を装填しているんだ～？（汗）」

山城
「いえ…ちょっとね」

シルヴィア
「あぁ…ちょっとな」

佐野
「あ、あの～、御二方…や、止めておいた方が…」

鷲井
「そ、そうだぞ、おまえら！　それこそ、日本海軍だけの問題だけじゃなくなるぞ！」

山城
「……ちっ」

シルヴィア
「……ふん」

福本（伊）
「おまえら…会う度に怖さ増してるな…」

佐野・鷲井
「「あなたが悪いんでしょうが…」」

そのまま5人は大会議室に向かった。
既に大会議室には出席者が自分の席で待っていた。
そして、山城達は自分達に宛がわれた席に座った。

福本（伊）
「では、これより緊急会議を行いたいと思います。議題はつい先日

発見された、異世界の地下施設と資料、及び『予言』についてです」

ザワザワザワ

周りが騒がしくなる。
まあ、当然と言えば当然だが。

福本（伊）
「現在、地下施設は調査中ですが…回収しましたＤＶＤとメモリーの解析は済んでおります。その報告を鷲井技術大尉にしてもらいましょう」

鷲井
「では、先ずそのＤＶＤから見てもらいましょう」

そう言うと大型スクリーンに山城達が見た映像が映し出された。
最初の映像は１都市上空の映像。
最初は何も無い空に何かが映り、数秒後上空で爆発し、都市を壊滅させた。
そして、次の映像はこれまた１都市の映像。
しかし、次の瞬間には都市が大爆発を起こした。
これに参加者も再び騒がしくなった。

鷲井
「この映像を分析した結果、２つの映像共に原爆或いは核兵器と思われます」

空軍参謀
「つまり、異世界にそれを製造・使用する技術があると言う事か？」

参加者の1人が鷲井に質問した。

鷲井
「いえ、これの疑問に答えるにはシグドー教教典とシリルティア王国が伝えてきた伝承です。双方の事は配布した資料を見て下さい」

福本（伊）
「では大尉。結果を簡潔に述べてくれ」

鷲井
「はい…教典・伝承にある『太陽を多数落とした』とあります…これが最初の映像です。そして、『東の民』は『西の民』と友好のあった『空の民』と敵対する『空の民』と同盟を結んだとありますから…核兵器はこの『空の民』だと思われます」

山県次官
「では、次の映像の爆発は何だね？」

鷲井
「これは想像ですが…『東の民』は操作を誤り、贈られた核兵器を誤作動させたのではないかと…」

田母神次官
「ふむ…だから『東の民』も滅びた…か」

福本（伊）
「では、数百…下手をすれば千年前の核使用により、あんな技術誤差が大きい世界になった…と言う事か？」

鷲井

「はい…自分はそう思います」

次号へ

２４５　緊急会議（前編）（後書き）

ご意見ご感想をお待ちして下さい。

246　緊急会議（中編）

国防省大会議室

福本（伊吹）
「うむ…では次に、メモリーの映像だが…鷲井、再生を頼む」

鷲井
「はい」

そして、山城達が見た映像を再生された。

福本（伊）
「…と言うふうな予知…いや、予言と言うべきでしょう…が有りました。これを現地で指揮を執る山城中佐に意見を聞きたいが…どうかね？」

いきなりの指名に内心戸惑いつつも、顔は普段通りの冷静顔にしておく。

山城
「本来、自分はあまりそう言った系統の物は信用しませんが…今回に限っては別だと断言します」

福本（伊）
「根拠は？」

山城

「勘…と言ってしまえば簡単ですが…今までの事がある程度ピタリと当たっている事、そして、現地ではあり得る可能性が高いからです」

ザワザワザワ

……そりゃそうだ。まだ19歳で中佐と言う、ただ運に恵まれていて昇進した人間の言葉を早々に……

「…本官は彼を信じる」

……居ました、しかも、意外な人物。

山城
「あ…ひ、土方校長!?」

…山城の母校、神戸海軍士官学校校長にして、策略家の土方劉(ひじかたりゅう)少将
……詳しくは『新第七艦隊奮戦記』をお読み下さい。（おいおい）

土方少将
「山城中佐は私の講義をしっかり聞いていた。放課後にこの『鬼方』へ質問しに来る人間はそうそう居なかったがな」

決して笑っておらず、厳つい顔のままな土方少将だが、実際は思い出話に浸っている感があるのは気のせいであろうか？

土方少将
「それにだ、彼は先輩連中の中では唯一、福本勇気三士生を止める人間だ」

こう言った瞬間、何故か海軍だけで無く、陸空軍他会議参加者が一斉納得した。
本当に……福本一族って（良い意味で）恐ろしいわ…。

福本（伊）
「…まあ、軍事の世界ではある意味何でも有りな事は今さら言う必要も無いだろうと思います…この事から、異世界…シリルティア王国に対する在留軍及び第零艦隊の戦力増強を提案したいのですが…反対意見はありますか？」

……反応無し。

福本（伊）
「では、各軍は増強規模を早期に提出して下さい…解散」

……こうして、緊急会議は終了した。

シルヴィア
「案外、すんなりと会議は終わったな」

山城
「本当…福本一族って凄いわ」

福本（伊）
「父が聞いたら何と言うか……さて、時間も有るし、下町の美味い鰻屋で鰻重でも食べるか？」

鷲井・佐野
「「食べます！！」」

山城
「反応早～」

土方少将
「久しぶりだな。みんな」

佐野
「土方校長！」

慌て敬礼する４人。

土方少将
「いきなり行方不明になったから心配はしていたが…元気そうで良かった」

山城
「土方校長…いえ、土方少将もお元気そうで何よりです」

土方少将
「早々簡単に朽ちる程では無い…まあ、お前の事は福本から聞いていたがな」

山城
「…やっぱり」

土方少将
「まあ、後進がここまで活躍するのは嬉しい限りだがな……くれぐ

れも油断だけはするなよ」

そう言うと土方少将は大会議室から出て行った。

山城
「福本次官、土方少将の次期第一艦隊司令の噂は本当ですか？」

福本（伊）
「うん…まあ、確かに前から噂はあったが…まあ、有り得ない話では無いとしか言い様がないな」

佐野
「微妙な答えですね」

福本（伊）
「仕方ないだろう…さあ、飯に行くぞ」

次号へ

２４６　緊急会議（中編）（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２４７　緊急会議（後編）（前書き）

アフガニスタン・ハイチ・チュニジア……国内に日本以上に問題等を抱えながら、今回の災害に対し援助を申し出ているそうです。果たして…これがアメリカなら同じ事になったかは解りませんが…

……これこそ、日本が国際的に信用されている証拠ではないかと思います。

２４７　緊急会議（後編）

その日の夜　帝都内

山城・シルヴィアは福本次官に連れられ、ある料亭に来ていた。
ちなみに佐野・鷲井は先に神戸に帰っている。（と言うより帰った…帰らせた）

山城
「ところで、なんで緊急会議の場所が料亭なんですか？」

福本（伊）
「国会議事堂の中でだと、後々うるさいんだよ。特に特ダネ狙いの新聞記者やテレビがな…それなら、こう言った所がいいんだよ」

山城
「それでも、張り付く記者がいますよ？」

福本（伊）
「それをどうにかするのが、海軍次官だ」

シルヴィア
「……変な事はしておらんだろうな？」

福本（伊）
「なーに、時としては向こうにも黙っている事も必要なんだよ」

山城・シルヴィア

（（物凄ーく、不安だ））

そう思いながら2人は料亭の中に入って行った。

ある一室に案内され、福本次官と山城・シルヴィア。
そこには既に安倍首相、石破防相、中川外相等の閣僚達と山県陸軍次官・田母神空軍次官の2人が来ていた。

福本（伊）
「遅くなって申し訳ありませんでした」

安倍首相
「いや、集合時間6分前だ」

石破防相
「既に今日の緊急会議の事を大筋づ話しておいたよ」

福本（伊）
「ありがとうございます。おっと、初見の方もおりますので、ご紹介させていただきます。第零艦隊主席参謀の山城正人中佐、その恋人、シリルティア海軍のシルヴィア少佐です」

山城・シルヴィア
「「福本次官！！！」」

福本（伊）
「おっと、口が…」

山城・シルヴィア
「「滑ったは無しだ！！」」

部屋の中が笑いに包まれる。
この上官のボケに部下2人のツッコミは緊張感のあった部屋の空気が幾分か軟らかくなった。

安倍首相
「ふむ……異世界ではそんな事があったのか…」

福本（伊）
「と言っても、これは我々の勝手な想像です。これを探るのは考古学者の仕事でありますから…我々は畑違いです」

石破防相
「確かに、今のところは出番は無いですね。但し、予言の事に関しては別ですが」

中川外相
「杉下大使と福本次官の報告から私が直にアーヴ皇帝に確認致しましたが……結果、映像から見て皇族に間違い無いと返答がきました」

安倍首相
「では、『西の民』と懇意があった『空の民』と言うのは…アーヴ人の事か？」

山城
「先程までの話を繋げるなら、結論としてはそうなります」

安倍首相
「…3次官に聞きたい……もし、この『予言』が当たると仮定するなら…何れだけの時間があると思われるかね？」

山県次官
「それは何とも…明日かもしれませんし、１００年先かもしれません」

田母神次官
「とにかく、直ぐに準備をした方が遅れをとる事を考えるとマシでしょう」

福本（伊）
「既に海軍は鹵獲艦を中心に改装後の第零艦隊配備を決定しています。また、天城と大和帝国海軍戦艦駿河及び空母富士の改装を予定しております」

安倍首相
「そう言えば、駿河に乗っていた大和帝国皇族の桃園宮那子少将はどうなるのかね？」

福本（伊）
「今は日本海軍で預かっています……ただ、心のケアが必要かと」

安倍首相
「そうか…宮内相を通じて、天皇陛下に色々と伝えておこう」

福本（伊）
「ありがとうございます」

ブーウ…ブーウ…ブーウ…

山城
「福本次官、携帯に着信ですよ？」

福本（伊）
「ん、本当だ。（ピ）こちら、福本だ。いったいどうした？」

電話に出た福本はしばらく普通に話していたが、途中から驚いた顔になり、慌て話を終わらせた。

石破防相
「どうしたんだ、福本次官？」

福本（伊）
「神戸鎮守府より緊急連絡がありました。つい先程『空のゲイト』を抜けてメッサーシュミットＢｆ１０９とＭｅ２６２各1機が進入。スクランブルしたうちの戦闘機が誘導着陸させたそうです。この為、本官と山城中佐、シルヴィア少佐は退席させていただきます」

安倍首相
「あぁ、いいよ。石破君、念のために陸軍・空軍次官も待機させた方がいいんじゃないかな？」

石破防相
「わかりました」

次号へ

２４７　緊急会議（後編）（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２４８　気持ちは解るが今は寝ろ

山城
「本当なんですか？　メッサーシュミットＢｆ１０９とＭｅ２６２と言うのは？」

横須賀に向かう車中で山城は福本次官に尋ねた。

福本（伊吹）
「あぁ、異世界の方で現れて、警告が神戸飛行場の管制塔に報せたんだ。それでスクランブル掛けたら…と言う訳だ。有馬少将達の陸攻隊とは逆パターンだな」

山城
「なるほど…はぁ…」

シルヴィア
「いったいどうした？　転移など何時もの事であろう？」

山城
「別れ際に石破防相から『生写真撮っといて』ってお願いされた」

福本（伊）
「おいおい…それこそこっちに頼んだらいいのに…」

山城
「あなたに言う暇が無かったからでしょう……それより、大丈夫なんですか？　またマスコミが騒ぎますよ？」

福本（伊）
「大丈夫だ。夜間飛行訓練だと言って押し通す。別に夜飛んではならないと言う法律は無い」

山城
「まあ、そりゃそうですけど…」

福本（伊）
「それにだ、今から異世界で騒がれるのは後々で余計な風評被害を出しかねん…こちらとしてもはた迷惑な話だ」

シルヴィア
「それはそうだが…それで黙ってくれるかどうか…」

福本（伊）
「イザとなったら、朝日新聞の極一部幹部と超弱小政党社民党の密会と密談内容を日本中にさらけ出してやるよ」

山城
「……そんな事があったんですね」

福本（伊）
「公安と諜報部のお陰だよ…危ない奴はちゃんと見張っていないと、作者の世界みたいに沖縄が中国に洗脳されてる様な事になってしまうからな」

……まったくもってその通り。

福本（伊）
「それより、2人は寝とけ。多分、神戸に着いたら忙しくなると思

うから…まあ、飛行場に着いても、航空機に乗ったら寝ろって言うけどさ。それに神戸に付くのは朝方だろう」

山城
「ですが、次官。いくら朝方になるとは言え、何があるか解りませんから起きて……ん？」

シルヴィア
「…スー…スー…スー…」

福本（伊）
「…恋人もお疲れ気味の様だな……痩せ我慢しないでいいから、とっとと寝ろ、これ、命令」

山城
「……了解」

山城は渋々従う事にした。

……数時間後……

山城
「……ここどこですか？　福本次官？」

福本（伊）
「あ、おはよう。よく眠れたか？　ちなみに今は高度３０００メートル上空だ」

平然と読書を続ける福本次官。
座席で寝ていた山城は徐々に意識を鮮明にしていった。

山城
「……いつの間に搭乗したんですか？」

福本（伊）
「いや、2人共よく寝ていたから、寝かせたまま2人を機内に運んで…」

山城
「いや、起こせよ」

空かさずツッコミを入れた。

山城
「それで…これって海軍次官の連絡用小型ジェット機ですか？」

福本（伊）
「おぉ、よく知ってるな…と、勇気に訊いたんだな。中島のビジネス機を元にした特注機だからな。乗り心地は抜群だ。時間があるから、もう少し寝てろ」

山城
「……そうします」

そう言うと山城はまた眠る事にした。

その頃……神戸軍用飛行場

井上中将
「あんた達…大丈夫？」

昨夜の一件で厳戒態勢に入った飛行場に様子見に来た井上政美中将が見たのは、徹夜明けで屍と化した基地要員達と『収容所』と成っている休憩室であった。

佐野
「殆どの方がこれですから…大丈夫な人間はほぼいないかと…」

井上中将
「その割にはあなたやそこの技術士官は元気っぽいけど？」

そう言いながら鷲井を指差す。

佐野
「自分は天城で鍛えられましたから…鷲井大尉は徹夜に関しては何時もの事ですから」

井上中将
「ふーん…さあ、あんた達！　こっちに注目！」

屍になっていた基地要員達が井上中将の方を見た。

井上中将
「昨夜はご苦労様。これは餞別よ。いっぱい有るからゆっくり食べなさい」

そう言うと数段重ねの重箱を置いた。
中身は……大量のおにぎり。
これに飛び付かない人間は……いない。

井上中将
「……元気じゃない？」

佐野
「食い物の前には元気になりますよ」

次号へ

２４８　気持ちは解るが今は寝ろ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２４９　エースパイロット（前書き）

天地銀河さんからの意見も採り入れてみました！
まあ、先ずは中身をどうぞ！

249　エースパイロット

10月7日　神戸軍用飛行場

佐野
「あ、来ましたね」

上空に視線を注いでいた佐野の目に福本次官の乗る連絡機が見えた。
そして、連絡機は徐々に高度を下げていく。

鷲井
「三軍の次官が中島製ビジネス機の特注改造機って噂は本当だったんだな…海軍に関しては」

井上中将
「よく知ってるわね？　横の繋がりでもあるの？」

鷲井
「技術士官の間では公然の秘密ですから。噂では空母に着艦出来るとか、チャフやデコイとかを装備しているとか」

井上中将
「……本当なら凄い防御兵装ね」

こんな会話が三者で交わされている間に連絡機は滑走路に着陸した。

井上中将

「待ってたわよ、福本君」

福本（伊吹）
「ご連絡ありがとう、政美さん」

タラップを降りて早々に挨拶を交わす2人。
続いて降りて来たのは山城・シルヴィアの2人。

山城
「おはよう、2人共……巻き込まれたのか？」

佐野
「あはは…ルーデルと一緒に居ましたら…」

鷲井
「いい案が浮かぶかと思って付いて行ったら…巻き込まれた」

……どうやら、何かしら騒動に巻き込まれる星の下に引きずり込まれたらしい。

シルヴィア
「それで……そのルーデルは何処に行った？」

佐野
「…まあ、ちょっと用事が…ね」

シルヴィア
「？？？」

山城

「まあ、いいか…福本次官、何時までここで話をしているわけですか？」

話を切り上げ、福本次官に話を向ける。

福本（伊）
「ん、そうだな…邪魔にもなるし…行くか」

そう言うと施設の方に向かって歩き始めた。

福本（伊）
「それで、政美。１０９と２６２のパイロットと話は出来るのか？」

井上中将
「出来ない事は無いわ。但し、相手は２人共、女性。しかも、内１人は将官よ？」

山城
「女性で将官…ですか」

井上中将
「えぇ、ただ…」

バン！

その時、前の部屋のドアが開いた。
そして、顔を出したのはルーデルだった。

ルーデル
「あ、中将達も来たのね。話は済ませといたから」

そう言うとどっかに行ってしまった。

井上中将
「…どうせ勧誘すると思って、ルーデル使って全部話しておいたわ」

シルヴィア
「…先手を取ったのか」

井上中将
「どうせ、同じ話をしなくちゃならないんだから、先にしておいただけよ…それに、正体知ったら、あんた達も同じ事をするわ」

山城
「あの…勿体振らずに正体教えていただけませんか？　なんだか物凄く大物な予感がしてきたもんですから…」

井上中将
「正体は自分で確認しなさい。今から会わせてあげるから…もしかしたら、天からの恵みかもしれないわ」

「初めまして。僕の名前はエーリッヒ・ハルトマン。階級は少佐、よろしくね」

「ＪＶ４４部隊司令のアドルフ・ガーラント中将よ。事情はルーデ

ル大佐から聞いたわ。以後よろしく」

山城
「……」

福本（伊）
「ヒュー…これは凄いな」

危うく顎が外れるぐらい驚き絶句する山城と、口笛を吹く福本次官。
いや……だって、ハルトマンとガーラントって有名なエースパイロットだぞ!?
しかも、ルーデルと同じ女体化て……マジですか!?（上下２つは山城脳内の呟き）

福本（伊）
「いや～、身内が居るってこう言う時に小回り効くよな～」

山城
「そう言う話じゃあ無いでしょう」

ボクっ子娘のエーリッヒ・ハルトマン（１８）、正に大人の姉さんアドルフ・ガーラント（２０）……この２人の出現は果たしてどの様な影響を及ぼすのやら……。

次号へ

２４９　エースパイロット（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２５０　先ずは準備に集中だ（前書き）

ＦＸとの関連も有り、ちょっとやってみました。
しかし、日の丸Ｆｗ１９０があんなにしっくりきて、飛燕を採用したんだから……え？　運用や設備は？……そこは大和魂と日本人気質で…。（以下略）

山城

「…作者は置いといて、歴史が変わった為、また、元帥の教えを守る世代が居る列強国日本の現代戦闘機の一部をどうぞ」

２５０　先ずは準備に集中だ

１１月７日（異世界１１月１８日）

女体化（この表現もどうかと思うが）したエーリッヒ・ハルトマン、アドルフ・ガーラントの出現から１ヶ月が経過した。
天城、征龍（ワスプ）は神戸のドックで改装作業中である。
征龍は現在『第零艦隊増備案』の下、飛行甲板をアングルドデッキにする為の改装である。
また、旅順軍港では鹵獲艦及び駿河・富士の改装も行っており、富士は既に飛行甲板がアングルドデッキであったから、現在は着艦装置などの装換作業が主になっていた。
また、キエフ型航空巡洋艦は早期艦隊編入が可能との回答から、作業が急がれていた。
そんな中の神戸鎮守府に何時もの２人（山城・シルヴィア）と意外な２人（桃園宮少将・高城大佐）が居た。

山城
「長い前置きと失礼な言葉ありがとう、作者」

……すみません。

シルヴィア
「わかったなら、解説はしっかり頼むぞ」

了解です。
あの後、桃園宮少将は井上政美中将が預かっていた。
やはり、現役で子供を育てた井上中将の方がこう言った時に対処が

出来る。
但し、いったい何処から話を聞いたのか、山城の母、真希が服を着せようとしたりしたのは別の話。

高城
「その話じゃあ無いよ。まあ、事実ではあるけど」

まあ、現在の状況を簡単に言えば、艦隊中心者の雑談＋散歩中。

高城
「…長くなりましたが、こちらで富士のパイロット達がお世話になっているそうですね？」

山城
「えぇ、１ヶ月もジェット機漬けにした為、今や誰もが乗り回していますがね」

富士は最大１５０機搭載出来るのだが、載っていたのは零戦が５０機…しかも、予備機を足して…しかなかった。
そこで、せっかくのアングルドデッキを生かすべく、零戦を降ろし、富士のパイロット（もちろん、全員女子）を全員ジェット機に乗せる事になった。
もちろん、いきなりジェット機は危険だから、シミュレーションシステムとＴ４練習機で徹底的に慣れさせたのだが。

山城
「今は我が海軍の６０式『雷風』艦上戦闘・爆撃機に乗って猛訓練中…」

キィィィン！！

噂をすればなんとやら…で上空を洋上迷彩の『雷風』が通過した。

山城
「さあ、行きましょう。ここでボーとしている訳には行きませんから」

神戸軍用飛行場

シルヴィア
「ほお…凄いな」

滑走路に並ぶ６０式艦上戦闘・爆撃機『雷風』……航空自衛隊のＦ２戦闘機のグレードアップバージョン、外見は一緒……を見て呟く。
４人が滑走路に近付くとある人物が近付いて来た。

ガーラント
「あら、山城中佐。あの子達の視察？」

山城
「えぇ、どうですか？　あの子達は？」

ガーラント
「気質は同じだから、素直で真面目、覚えも早くて助かるわ。ただ、零戦の癖が少し抜けて無いのがね…」

山城

「大丈夫ですよ。実戦訓練を続けていれば慣れてきますから」

富士のパイロット達の教官を山城はガーラントに任せたのには理由がある。

先ず一番に目を牽くのは経歴で、部隊指揮官、戦闘機隊総監などに就任している古参パイロットである事。

また、１０４機を撃墜したエースであり、第一世代とは言えジェット戦闘機に乗った経験もあるから適任と言える。

それに女性であるから、同じ富士のパイロット達とも接しやすいと考えたからだ。

ガーラント

「そうね…まあ、ハルトマンのお陰で一撃離脱攻撃にも慣れてきたみたいだし……次の戦いではある程度は戦えるわね」

山城

「いえ、『ある程度』ではダメです。徹底的に教育して下さい」

ガーラントの予想に反して……彼女は『次の戦い』で反応する事を望んでいたから……山城から注文が出た。

山城

「次の戦いでは敵の正体もわかっていません…どんな勢力のどんな装備かも…敵が来る事しか解っていません。そんな中で中途半端に放り出して死んでもらっては自分の夢見が悪くなります…ですから、あなたの経験と生存術を彼女達に叩き込んで下さい」

ガーラントに語る山城の目は真剣そのものだった。

これに対してガーラントは微笑む。

ガーラント
「わかってるわ。私も時間が有る限り、彼女達を教育するつもりよ…それにしても、今のあなたなら睨んで人を殺せそうね」

そう言われて山城は漸く自分の表情に気付いた。

山城
「すみません、所属が違うのに変な事を言ってしまって…」

ガーラント
「まあ、上位に立つ人間ならそう思うでしょうから…それにしても、あなたって指揮官に向いてるんじゃない？」

そう言いながら葉巻…では無く葉巻型のチョコレートを銜(くわ)える。

山城
「やめて下さい。只でさえ、艦長兼主席参謀で大変なんですから…それに指揮官なら後輩にお似合いな人間がいますよ。まあ、大提督の孫ですから当たり前かもしれませんけど」

シルヴィア
「山城、何時まで話をしておる？」

ハルトマンと話していたシルヴィアが山城に声を掛けた。

山城
「おっと…では、この辺で」

そう言うと山城はシルヴィアに近付いた。

ハルトマン
「お、山城君、おっはよ～」

山城
「おはようございます。ハルトマン少佐」

ハルトマン
「も～、僕の事は『ハルトマン』でいいって～」

……果たして、このザバサバと言うか、気さくと言うか…こんな人懐っこいボクっ子娘が前人未到の３５２機を撃墜した『エースの中のエース』だろうと誰が思うだろう？

山城
「そう言えば…ルーデルは何処に？」

ハルトマン
「あぁ、ルーデルならシミュレーションシステムにはいってる」

シルヴィア
「何故だ？」

ハルトマン
「あのＡ１０だっけ？　あれで敵艦を沈めるって息巻いてたよ」

山城・シルヴィア
「「うわ～（本当にやりそうで怖～）」」

……確かに…やりそうで怖い。

ハルトマン
「そう言えば、あの機体は凄く素直で良いよね～。あれなら、撃墜数を更新出来るよ」

山城
「それもそうでしょう。何せお国のドイツが開発に関わりましたからね」

ガーラントとハルトマンの乗る機体……それは日本海空軍が購入費用を分担して購入した『ユーロファイター　タイフーン』である。
２人の機体は艦上機仕様（特注品）で、海空軍の愛称は『台風』（そのまま）かイギリスと同じ『タイフーン』。
やはり、ドイツ人にはドイツ機がしっくりくるようだ。

山城
（しかし…福本次官は毎度の事ながら…田母神次官も凄いよな～）

タイフーンの購入には色々と問題があったらしいが、『三軍の三羽烏』の前には露と消えたとか……。

次号へ

２５０　先ずは準備に集中だ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２５１　主席参謀同士

１１月８日　神戸鎮守府

山城
「今回は随分大規模に改装していんですね」

技官
「えぇ、艦長の提案通り自動稼働機関銃とチャフ散布装置を装備しますが…攻・防・速の面で改装要求がなされましたからね」

若い…と言っても山城よりは歳上…の技官と山城は話していた。
ここは神戸鎮守府の艦船ドック。
何時ものメンバー…では無く、今回は山城と高城大佐が来ていた。

高城
「その噴…ミサイルと言い物はそれほど破壊力があるのですか？」

技官
「いいえ。被害だけなら天城は一発の被弾で少量の漏水のみです」

高城
「では、何故それほどの要求が上から？」

技官
「簡単ですよ。６０年後の同口径艦砲の貫通力が一緒だと思いますか？」

高城
「…なるほど、そう言う訳ですか」

技官
「そう言う訳です」

なんとも解り安いような解り難いような会話だが、山城には解る話だ。
簡単な例が第二次大戦から６０年前に誰が核兵器など想像しただろうか…。

技官
「ですから、増加装甲により多少艦景が変わるかもしれません」

山城
「…まあ、やむを得ないかもな…」

高城
「それで、『速』に関してはどうですか？」

技官
「上からは３３ノット…つまり現状維持です。ですが、福本次官に答えたのは３６ノットです」

ニヤリと笑いながら語る技官に山城は驚く。

山城
「えっと…それは通常機関でですか？」

技官

「はい、原子力機関にするには、余りにも時間が掛かり過ぎますからね」

高城
「あの…その前にそんな事が可能なんですか！？」

技官
「えぇ、我々も原子力だけで無く、通常機関の開発にも力を注いできた訳ですから…その代わり、旋回性が多少落ちますので、バウスラスターを装備させました」

山城
「…まったく、福本次官は凄い事をやらせるな」

技官
「いえいえ、我々技術者にしてみれば次官の要求は技術的に可能な事です。問題は実現出来るかどうかです」

高城
「つまり、遣り甲斐がある？」

技官
「えぇ」

山城
（本当に…福本一族って凄いよな～…しかも、親子3代揃って）

山城

「すみません、付き合わせてしまって」

高城
「いえ、どうせ、自分も参謀長として聞く事になりますから」

天城の現状を聞いた山城は高城と共に鎮守府内を歩いていた。

高城
「駿河もあの様な改装をされているのかな？」

山城
「多分、天城ほどの極端な改装はされないと思いますが…機関の装換は行われていますよ」

高城
「そうですか……」

山城
「……」

……少し気まずい。

山城
「高城大佐、ご家族は？」

高城
「んー…13の時に事故で唯一の肉親の母親がね…」

山城
「…え？（しまった！）」

地雷を踏んだと一瞬で察知した。

高城
「あはは、別に良いんですよ。そしたら、いきなりお迎えが来たんですよ…なんと父は華族、母は妾だったんだですよ」

山城
「……（うわ…しまった…）」

高城
「まあ、その父も流行り病でぽっくりと…ですが、どうも馴染めなくて、自棄で海軍士官学校にね」

あっけらかんに語る高城大佐。

山城
「じゃあ、桃園宮少将とはその時に？」

少しでも暗い話題を避ける為、微妙に話を変えた。

高城
「えぇ、今は思え無いでしょうが、その時の桃園宮少将は結構なじゃじゃ馬でしたよ」

山城
「…シルヴィアと一緒だな～」

高城
「確かにそうですね。いや、やっぱり、世界にはじゃじゃ馬やお転

婆娘は何処の世界にも居るんもんだ」

山城
「…本当に」

同意します…本当に。

高城
「その後はどう言う訳だか腐れ縁みたいなもので……結局は後ろから付いて行く形ですよ」

山城
「ふーん、じゃあ自分は……どっちだ？　あ、いや、待てよ…相互交代か？」

高城
「…良い仲ですね」

……こんな会話を交わしながら、２人は鎮守府内を歩いていた。

次号へ

251　主席参謀同士（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

2025

252　女性同士

その頃……例の2人は……

シルヴィア・桃園宮
「「クッシュン！！」」

シルヴィアと桃園宮少将は2人同時にくしゃみをした。
ちなみに2人が居るのは梅田の阪急百貨店内。
山城正人の母、真希が冬物服を探しに行くと言い、女性陣全員を引っ張り出して阪急百貨店に来ていた。

シルヴィア
「む…誰かに噂された様だな」

桃園宮
「私も誰かにされた様ですね」

シルヴィア
「…誰か宛てはあるか？」

桃園宮
「多分、腐れ縁の主席参謀ね…そちらは？」

シルヴィア
「戦友の艦長だ…確か2人は鎮守府のドックに行った筈…」

桃園宮

「なら…あの2人ね。お互いの噂でもしてるんでしょう」

シルヴィア
「あぁ、確かにあり得るな」

……こちらは同性と女性の気質のせいか割りとスムーズに話が進んでいる。

シルヴィア
「腐れ縁と申されたが、何年程だ？」

桃園宮
「士官学校からだから3年程ね。シルヴィアさんは？」

シルヴィア
「あの艦長とは約一年半程…何時の間にやら、常に隣にいる状態に成ったがな」

本当のところは隠しつつ、トントンと語るシルヴィア。

桃園宮
「ふーん…うちの主席参謀は一風変わったところはあるけど…まあ、頼りにはなるわね」

頼りになるが故に身近な所に置きたくて色々と工作した……なんて事実は口に出さない。

シルヴィア
「お互い、良い相棒を持ったな」

桃園宮
「えぇ、持ちましたね」

……買い物が終わる（自分達のは終わっている）のを待つ2人の会話だった。

その頃……

ヴィクトリア
「う～ん…迷いますわ…」

ルーデル
「な～にが迷うの？」

ヴィクトリア
「ひゃわっ！！」

いきなり声を掛けたルーデルにヴィクトリアはかなり驚いた。

ルーデル
「そ、そんなに驚く事ないでしょう…こっちが逆に驚くわよ」

ヴィクトリア
「お、驚きますわ！　も、もっと普通に声を掛けて欲しいものですわ」

……誰もが思う…ルーデルは普通に声を掛けただけだぞ？

ルーデル
「それより…随分熱心に服を選んでいるわね」

ヴィクトリア
「う、うるさいですわ」
実際、今回のメンバー……シルヴィア・桃園宮・ルーデル・風華・ヴィクトリアの5人……の内、ヴィクトリアを除く4人はお洒落や服装に無頓着（つーか、興味の欠片も無い）であった。
だから、山城真希の持って来る服を着て、どれか選ぶ（私服が無い場合は全部買う）事が大半であった。
しかし、ヴィクトリアは異常に気にした……だからこそと言うべきか、真希が覚醒して余計に時間が掛かっていた。
その真希は別の所に行ってヴィクトリアに似合いそうな服を探している。

ルーデル
「服なんてどれも一緒だと思うけどね～」

ヴィクトリア
「貴族の事情なんて、大佐には解りませんわ」

ルーデル
「あの巨乳大好きパイロットが貴族の事情？」

ヴィクトリア
「えぇ、そ……なんで知ってるんですか！？」

ルーデル
「はいは～い、公共面前ではお静かにね～」

あっけらかんと言うルーデル。

ルーデル
「まあ、頑張りなさい。私も狙った獲物は逃さないけどね～」

ヴィクトリア
「……」

驚愕と疑問がヴィクトリアには残った。

252　女性同士（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

253　旅順軍港へ

11月20日　旅順軍港

山城
「……」

シルヴィア
「……」

福本（伊吹）
「お前ら～、何でもいいから喋れ～」

山城
「……いきなり旅順から始めるのはどうかと…」

福本（伊）
「そこかよ…」

……さて、いきなり旅順から始まりましたので回想で説明しましょう。

……回想……

11月19日　山城自宅

『嵐の中で…（ピッ）』

山城
「もしもし、山城です。福本次官ですか？」

福本（伊）
『よく解ったな…突然で悪いが明日、旅順に行く。神戸軍用飛行場に集合な』

山城
「……は？　何故、旅順に？」

福本（伊）
『駿河・富士と鹵獲艦改装具合の視察だ。シルヴィアも連れて来いよ。以上だ』

山城
「……マジかよ」

……回想終了……

山城
「そう言って連れて来たのは天下の旅順軍港ですよ……軍事機密を僅か１８・９の士官に見せて良いんですか？」

福本（伊）
「民間人に見せるならともかく、士官なら大丈夫だ。しかも、お前

は既に超国家機密兼超軍事機密に触れてるから不可抗力だ」

シルヴィア
「なんだ？　超国家機密兼超軍事機密とは？」

山城
「今度教えてあげるよ……まあ、聞いたら驚くと思うけど」

シルヴィア
「…ふむ、楽しみにしておこう」

福本（伊）
「お前ら～、行くぞ～」

さすがに視察と言っていただけに、待合室で待っていると直ぐに案内の技術士官が出て来た。

技術士官
「現在、元韓国艦の改装は急ピッチに進めております。また、駿河と富士の改装は八割程終わっております」

福本（伊）
「では、キエフ型の改装はどうだ？」

技術士官
「はい、キエフ型…イージス航空巡洋艦『天河』は既に改装を終了し、錬成中です。確か今日も訓練中かと」

福本（伊）
「早いな…確かに近日中には錬成を開始すると報告されたが…うむ、大丈夫そうだな」

技術士官
「はい。既に『天河』乗員の士気も高く、上から下までウズウズしています」

福本（伊）
「ん、乗員の誰かに知り合いでも居るのか？」

技術士官
「えぇ、副長が同郷の先輩なんです」

福本（伊）
「そうか…では、全体の進捗状況は…」

技術士官
「だいたい５０％…多くて５５％と言ったところですね」

福本（伊）
「やはり…時間が掛かるか」

技術士官
「やはり、韓国艦の改装が足を引っ張ってますね…もう少しどうにかならなかったのか…」

山城
「えっと…それで、あとどれくらい掛かるか解りますか？」

技術士官
「そうですね…改装があと半月…錬成も入れて1ヶ月は確実に必要ですね」

福本（伊）
「まあ、慌てても意味が無いと言う事だな」

上手～く纏めた福本次官でした。

山城
「…ところで、次官。なんで自分達を旅順へ？」

福本次官
「う～ん…実はね、君達にはもう1つの超軍事機密を見せようと思ってね」

シルヴィア
「あ、なら、私はここで…」

福本（伊）
「ダメだよ、シルヴィア少佐。君は知らなかったとは言え、超軍事機密兼超国家機密に触れてしまったのだからね」

シルヴィア
「な、なに!?　山城、どう言う事だ!!??」

山城
「…よく聞いてくれ、シルヴィア…次官のご両親、つまり、福本・

マリーダ元帥の生死及び居場所は家族・親族・一部の人間以外には超機密なんだ」

シルヴィア
「……な、な、な、な、な、なんだと!!?　い、いくらなんでも、それは…」

山城
「考えてみなよ…もし、バカな国が2人を誘拐したら?　まあ、先ずは無いけど」

シルヴィア
「……あぁ、なるほど」

福本（伊）
「納得してもらえたところで…行こうか」

次号へ

２５３　旅順軍港へ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２５４　超機密（前書き）

読売新聞の国際面に書いてあった事ですが、ケニアのある寒村では食糧難なのにラジオで震災を聞いて数少ない豆を送れないか…と住民が支援している日本人に声を掛けたり、カイロではトルコ人とイラク人の通信員が報酬の寄付を申し入れ、ニューヨークのある小学校のバザーで２ドルのいなり寿司に２０ドルを出して『お釣り日本で困っている人のために』と言ったアメリカ人女性が居たり、マニラの日本大使館前で被災者支援の集会があったり……と書いてありました。

さて、その右隣に視線を移しますと……韓国が日本の中学校教科書に『竹島』が日本領の記述を入れたから抗議した…と言う記事。まあ、それとこれとは話は別と言えばそれまでですが…こんな時に非常識と言おうか、空気読めと言おうか……だから、韓国は一等国じゃないなんて言われるのでしょうが……呆れるしかないです。まあ、そもそも、あの国も中国も日本を敵視しないと国が保たないと言う皮肉な事情があるんですが……ちゃんとした公平な歴史を知れ…と言うのは酷な話かな？

254　超機密

山城・シルヴィアは福本次官に連れられ、休憩所に擬装された出入口から階段で下に降りていた。

山城
「随分深いですね……地下ドックですか？」

福本（伊吹）
「まあ、そんなところだ」

まるで勝手知ったる…と言わんばかりに下へと降りて行く福本次官。
しかしだ……いったい地下にどんな超軍事機密があると言うのだろうか？

山城
（まあ、超軍事機密と言う事は知っている人間は極一部だと言う事だな…ある意味楽しみだな）

……場違いかはともかく、ついつい人間としての好奇心が強くなる山城。
それは後ろにいるシルヴィアも同じだったりする。
そして、福本次官に連れられた2人は遂に広い場所へと出た。
そこで目にしたのは……

シルヴィア
「……凄い…大きい…艦（ふね）だ」

そこにあったのは、巨大な船体、載せられ3基の砲塔、新たに造ら

れ設置された艦橋……他にも細かく見ていけば色々と有りそうな『艦艇』があった。
だが……

山城
「そんな…これが…あの伝説の…播磨」

福本（伊）
「やっぱり、お前には解ったな。そう、これは俺の親父が乗った戦艦『播磨』だ」

既に何度も書いた通り、日本帝国海軍には１３隻（扶桑・山城を加えれば１５隻、練習戦艦陸奥を除く）の戦艦が在籍している。
しかし、その内稼働しているのは３隻（扶桑・山城を加えれば５隻）で、大和型戦艦の大和・武蔵・信濃である。
気付いた読者も居られるだろう、残りの１０隻は元第七艦隊を構成していた播磨・河内・和泉・近江の播磨型戦艦、薩摩・土佐の薩摩型戦艦、伊豆・伊賀・春日・日進の伊賀型戦艦であった。
この稼働せず、また姿を見せない『第七艦隊の戦艦群』は各国、特にアメリカ・イギリス・ドイツ・フランスといった列強国の軍・政府はこの戦艦群の居場所密かな感心事であり、尻尾を掴もうと諜報部は血眼に成って探っていた。
いくら第七艦隊が解隊されたとは言え、第七艦隊の実力は確かな物であり、艦隊を散々叩きのめされたアメリカ、全海軍戦力が全力で戦っても勝てないと言われたイギリスは特に気にしていた。
一部では密かに解体され、ビルの鉄骨にされたのでは……と言う話もあったが、播磨型戦艦４隻まるごと解体する訳が無い……と言うのが各国海軍の意見だったりする。

山城
「まさか…旅順軍港の秘密地下ドックにあったんですね…播磨は」

福本（伊）
「あっはっはっは、播磨だけでは無いぞ。残りの播磨型と薩摩型２隻は旅順。伊豆型４隻は室蘭の秘密地下ドックだ」

山城
「え…まさか、室蘭の港湾施設が拡張されたのは…」

福本（伊）
「その土を使ったのさ。あ、潜水戦艦などには改装しないからな」

シルヴィア
「何のネタだそれは？」

山城
「作者に訊いてくれ…しかし、次官、この播磨をどうやって上の軍港に？」

福本（伊）
「簡単だ、パナマ運河みたいに水を満たして水位を同じくし、播磨を上げるんだ」

山城
「ですが……上は開放されていませんが？」

福本（伊）
「播磨が出る時は開放される。しかも、直ぐそこまで別のドックが

きてるから、ここと上のドックに水を入れて、天井を開放すれば、そのまま播磨は旅順から出港出来る」

シルヴィア
「……とにかく、仕掛けが凄い事は解った」

山城
「あぁ、まったくだ…で、なんでこんな事を？　アメリカとまた戦争でもやらかす気ですか？」

福本（伊）
「物騒な事を言うな……さすがにこれはここで言うべき事では無い…まあ、何年かすれば解るさ。生き残ったらな」

山城
「不吉な事を言わないで下さいよ」

……この数年後、山城は後輩福本勇気&セルベリアの巻き起こす『騒動』の中心人物の1人として関わり、この意味を悟る事になるのだが……。

次号へ

２５４　超機密（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２５５　書類処理は大変だ～～！

１２月１０日　神戸鎮守府

遂に…と言うかなんと言うか…１２月に入った。
今のところは何も無く…もちろん、異世界でも一緒だが…今のところは『嵐の前の静かさ』と言ったところだ。
そんな中で……

山城
「……何なんだよ、この書類の量は！？」

……この１ヶ月、砲弾一発、銃弾一発たりとも（実弾では）撃っていないのに……何故か与えられた執務室が埋まると思う程、書類の山が山城の所にやって来る。

山城
「ちくしょ～…何か間違ってるぞ～、昨日より量が増えてる～～」

……毎日、送られて来る枚数はその日の内に処理しているのだが…
…何故か雪だるま式に増えていたりする。

井上中将
「…本当に大丈夫？」

山城
「えぇ、大丈夫です！」

様子を見に来た井上中将の質問に、返事をしながら手を動かし続ける山城。

井上中将
「…まさか、私の書類が混じってる…なんて事無い？」

山城
「それは無いですよ。だって、名前は自分のだし、書面も関係する物ばかりですから」

井上中将
「ふーん…（よくその速さで読み取れるわね）」

何せ、今の山城の処理速度はコピー機並み…次々に処理していく。

井上中将
「…まあ、頑張って」

山城
「はい！」

井上中将
「ふぅ…」

山城の執務室から出た井上中将は１つ溜め息を吐いた。

井上中将

（いつの間にあんなに多くなったのかな～？）

まあ、その理由に見当が付かない訳では無い。
ハルトマンやガーラントの２人が現れたり、本格的に富士のパイロットの訓練を始めたり、艦艇の大幅な改装を行ったり……と上げればキリが無い。
しかし、あれはあれで少し異常だが…。

井上中将
（まあ、本人は大丈夫って言ってるし…念のために探りは入れるか）

そう心中で決めた時、前から来る同性の存在に気が付いた。

井上中将
「あら、ガーラント中将。山城中佐に何か御用？」

ガーラント
「まあ、用事と言えば用事なんだけど……まさか書類処理中？」

井上中将
「えぇ、あの様子だと、お昼過ぎでないと出て来ないわね」

ガーラント
「そう…ハルトマン達が母艦の様子を聞きたいって言ってたけど…今は無理そうね。また、今度にするわ」

そう言うと踵を返した。

井上中将
（……まさかと思うけど…あの書類の量は大和撫子艦隊とガーラン

ト・ハルトマンが編入された事を知って嫉妬した男共の仕業とか？）

有り得なさそうで有り得る話に、井上中将は内心苦笑した。

何故なら……そんな彼等が抱く幻想ほど、第零艦隊もあの世界も楽では無いのだ。

井上中将

「…と言う事なの。何か知らない？」

福本（伊）

『う～ん…一部は宛ては有るが…そんなに出していない筈だが…』

神戸海軍鎮守府の鎮守府司令官室で福本次官に電話していた。

福本（伊）

『わかった。こちらからも探ってみよう。で、山城に伝言を頼みたいんだが…』

井上中将

「別にいいけど…なに？」

福本（伊）

『爺さん婆さんが会いたいってさ。今度、大所帯で良いから来いって…そう言ってたってな』

井上中将

「誰かは訊かないでおくわ…オッケー、じゃあ、頼んだわよ」

福本（伊）
『当たり前だ、あいつがぶっ倒れたら代理人事が大変だからな。それに、一番実戦経験のある若手だからな。じゃあ』

そう言うと電話は切れた。

井上中将
「これで、あっちは大丈夫ね…様子でも見て来るか」

再び山城の執務室に足を運んだ井上中将。
すると、ちょうど部屋から出て来た佐野と出くわした。

井上中将
「どお？　中の様子は？」

佐野
「艦長なら、書類の半分を終わらせて、ただいま一息吐いていました」

井上中将
「そ、そう（本当…早いわね）」

佐野
「大丈夫ですよ。艦長はあっちで書類処理には慣れてますし」

井上中将
「……そうね（…心配するのは杞憂だったかな？）」

次号へ

２５５　書類処理は大変だ～～！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２５６　技術大尉奮闘ス　１

１２月２２日（現世界１２月１２日）

ラバナスター～～ユニオン間の森の中

もちろんの事だが……シリルティア王国でも冬はある。
しかし、日本の冬の様に…双方の地域の差も有るが…それ程雪が降り積もる事は無い。
それと、意外に聞こえるかも知れないが、日本は世界有数の豪雪国で、雪質も他の国と異なっているそうだ。
さて、そんな余り雪は降ってはいないが、冬であるシリルティア王国の森の道を一輌の１０式戦車と二輌のトラックが進んでいた。

鷲井
「なんで自分も駆り出されるかな～？」

１０式戦車の砲塔に座る鷲井は当然と言えば当然の疑問を口にした。

今井
「それは兵器開発に関わってるからだろう」

大西
「しかも、ノーパソにデータ入れてる程のマニア」

鷲井
「グッ…そうです」

車長用ハッチから上半身を出す今井中尉（昇進した）と同様に砲塔に座る大西伍長の両方からツッコミを入れられた。

さて、何故この3人が森の中にいるのか…と疑問に思うだろう。
実はこれには訳（当然だが）ある。
アーネリア陛下がお忍びから帰った後、鉄道普及が推進されていた。
理由は簡単で、お忍びから帰ったアーネリア陛下が鉄道を推進し始めたからだ。
どうやら、阪急・ＪＲの駅と貨物列車を見て好奇心を擽られた様だ。
まあ、速く目的地に到着出来て、多量の荷物を船以外で運べるのは魅力と言えば魅力である。
また、軍内部でもだらだらと歩かせるよりも速く大量の兵員・物資・武器・弾薬を運べる鉄道は軍事的利点の多い話だ。
それらを考えた軍部や内政部等々…財務部は渋い顔をしていたが…により鉄道普及は国家プロジェクトとして進められていた。
しかし、王国陸軍の工兵隊が現場の森を測量中に正体不明……彼等曰く『鉄の化け物』……と遭遇したそうだ。
但し、彼等の話は人によってごちゃごちゃで、『猛スピードで襲い掛かってきた』・『火を噴いた』・『巨大だった』など…内容はちぐはぐで、何の手掛かりにもならなかった。
しかし、とにかく正体不明な物が有る事は事実で、これをどうにかしなければ鉄道敷設工事は進まない。
その為、ラバナスターで待機している日本陸軍派遣軍司令部に要請し、今井中尉らを派遣してもらった…と言ったところだ。

今井
「ところで、この『鉄の化け物』と言うのは何だと思います?」

大西
「表現からして、戦車でしょう」

鷲井
「問題は車種なんだけどな」

これが1号戦車の様な豆タンクや軽戦車なら歩兵でも安心だが……
もし、レオパルド2の様な主力戦車だと……。

今井
「…森林だとレオパルド2は使いにくいと思うが…」

…砲身が長いからね…レオパルド2は…。

鷲井
「とにかく…正体を確認しないと、何の手も打て無いって事だ」

……技術士官でありながら、階級が大尉と言う事で、指揮官の『真似』をしている鷲井。
本来、指揮を執るべき最高の候補である友が現世界に居る事を呪っている鷲井だった。

大西
「地図からすると…だいたいこの辺なんですが…」

測量隊の地図をコピーした物で見当を付ける大西。

今井
「こんな森の中だからな。歩兵にとっても、戦車にとっても厄介な場所だよ」

鷲井
「どうせの事なら、平野に現れてくれたらよかったのに…」

大西
「見付けた瞬間、撃ち合いですね」

今井
「１０（いちまる）は良いが、後ろのトラックはどうするんだ？装甲なんて無いぞ？」

鷲井
「……（なんか、ツッコミ、キツくない？）」

そう思いながら、検索を始めるのであった。

次号へ

２５６　技術大尉奮闘ス　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

256　技術大尉奮闘ス　2

それは突然だった。
低いとは言え、ガソリンエンジンの動く音…しかも、かなりの微速。

鷲井
（まあ、森の中だから高速で動く訳無いよな……けど、確かこのエンジン音は聞いた事が有るぞ……確か……）

徐々に近付きつつある中、鷲井は必死に記憶から探り出す。

鷲井
（…あぁ、思い出した、マイバッハだ！　ドイツのマイバッハエンジンだ！）

第二次大戦中にドイツ戦車を中心に使われていたエンジンである。

鷲井
「…待てよ。マイバッハで、ドイツと言う事は……」

バキバキパキ！

樹木を押し倒して現れたのはタイガー戦車に並ぶドイツ戦車の代名詞、『パンター』中戦車。

大西
「…嘘だろう？」

今井

「…パンターかよ」

2人も唖然として見ていた。
しかし、そんな時間は直ぐに終わり、パンターの砲塔が10式戦車の方を向いた。

今井
「っ！　歩兵は離れろ！　総員対ショック！」

パウン！！

ガギーン！！

言うやいなや、パンターの75mm70口径砲が火を吹いた。
しかし、さすが第4世代MBTの10式戦車…装甲はパンターの砲弾を弾いて、耐え抜いた。
これを見た…からか、あるいは最初から決めていたのか、パンターは全速で後退し、森の奥へと消えた。
ちなみに、この間僅か3分程の出来事だった。

大西
「さて…『鉄の化け物』の正体がパンターと解りました…で、どうします？」

鷲井
「どうしますって…今井中尉、戦車の方は？」

今井

「乗員も機器も無事だ。まあ、衝撃は距離だけにキツかったけどな」

そりゃそうだ…１０メートルあったかどうかの距離で撃たれたのだから衝撃はあっただろう。

鷲井
「しかし…なぜパンターは我々を撃ったんだ？」

大西
「敵と勘違いしたか…工兵隊の件で警戒されたんでしょうか…とにかく、いい話では無さそうですね」

今井
「それで大尉、後を追って進みますか？　それとも下がりますか？」

鷲井
「……やっぱり、俺が決めなくちゃあダメ？」

今井
「えぇ、あなたが指揮官ですから」

鷲井
（ちきしょ～…山城の奴め～…末代まで呪ってやる～～）

大西
「山城中佐を呪うよりも、早く決断して下さい」

鷲井
「うげっ！　聞こえてたのかよ！？」

今井
「口に出てましたよ。それははっきりと…で、進みます？　引きます？」

鷲井
「……進もう。ここで引き返しても、意味は無いしな」

今井
「わかりました…ほっ、ようやく命令が出たよ」

鷲井
（…ちきしょ～、絶対なにかの悪運だ～。だいたい、何で俺なんだよ～、明らかな人選ミスだろ～！）

……鷲井は心の中で誰にも聞こえない声で有らん限り叫んでいた……。

その頃……神戸鎮守府内

山城
「……はあ！？　鷲井に現場の指揮を！？」
執務室で何時もの様に執務をしていた山城に、福本次官から掛かってきた電話で叫んだ。

山城
「次官…解っていると思いますが、鷲井は技術士官ですよ？　いくら何でも無茶苦茶だと…」

福本（伊吹）
『いや～、お前はそっちだし、わざわざ戻す時間も惜しいし、それの方が面白そうだったから…』

山城
「…あのね…そんな遊び感覚は止めて下さい」

呆れながら言う山城。

福本（伊）
『冗談だ、冗談。あいつにも、いつか現場を指揮する時があるからな、予行練習みたいなもんさ』

山城
「『現場』違いだと思うのは気のせいでしょうか？」

福本（伊）
『まあ、何事も経験だよ、経験。あっはっはっは…』

山城
（…無理してないよな？　福本次官は…）

次号へ

２５６　技術大尉奮闘ス　２（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

258　技術大尉奮闘ス　3

鷲井
「クシュッン！」

大西
「…風邪ですか？」

鷲井
「…いや、誰かが噂したんだろ…」

再び前進…パンターの通った後を進んでいる…を開始した検索隊。
かなり速度を抑えての前進ではあるが…。

今井
「森の中だから、そんなに速度が出せないのは当たり前です」

大西
「それに、いくら第４世代とは言え、戦車の弱点は一緒なんですよ？　パンターが隠れてて、エンジン撃たれたらどうするんです？」

……ごもっともなご意見です。

鷲井
「誰にツッコミを入れたんだ？」

今井・大西
「「作者に入れた」」

鷲井
「さよか」

自分で無い事にホッとしつつ、今後の事を黙って考える鷲井だった。

……その頃……

「どうだ、燃料は？」

「出来る限りは抑えましたが…もうそろそろ考えた方がいいかと」

「む…そうか」

「少尉、やはり我々は…」

「うむ……そう言う事になるな」

少尉と呼ばれた人物を中心に、パンター戦車に乗っていた乗員達がボソボソと話す。

「だから～、言ったじゃないですか～…ここはあなた達の世界じゃないって…ほどいてよ～」

……この何とも間の抜けたと言おうか…声にパンターの乗員はお互いの顔み見合う。

「あー、わかったわかった。今から弛めてやる」

「ほどいてくれないの！？」

「…殺さないだけまだ良い方だ」

……始めから殺すつもりは無かったが。

「…さて、あの戦車はなんだ？　パンターの主砲で貫けないと…一体どこの戦車だ？」

「少なくともアメリカの物ではありません…どちらかと言うと未来的な姿の戦車でした」

「そんな物は見れば解る……問題はこれからどうするかだ」

「……そうだな…どうするか…だな」

ビルマ方面で今まで戦ってきたが……現状下ではその経験は何の意味も無さそうだった。

その頃……

大西
「……随分、奥に後退しましたね、パンターは」

今井
「そうだな…何でかは、解らなくも無いがな」

一時停止した検索隊、パンターのキャタピラー跡を見ながら今井と大西は喋っていた。

大西
「本来なら、後ろの歩兵をもっと先行させたら検索も楽なんですが…いきなり現れて、ドンパチになったら危険ですからね」

今井
「あぁ、いきなりパンターが現れて…は出来る限りは避けたいな」

いくら対戦車用に無反動砲を持ち込んだからと言って、いきなり現れた戦車と対峙するのは……いくら何でも避けたいだろう。

今井
「ベトナムが地獄だったって言うアメリカ兵の気持ちが良く解るよ」

大西
「まあ、ちょっと状況は違いますけどね」

そんな2人の会話の後ろで、鷲井は1人でブツブツ言いながら必死

に考えていた。

大西
「…やっぱり、命令書の『戦闘時の指揮は今井中尉に任す』って、この事を予測していたんでしょうね」

今井
「だろうな…でなければ、わざわざ陸軍と海軍次官の判子があった理由が解らなくなるな」

大西
「ですが、陸軍次官は解るとして、何で海軍次官の判子まであったんですかね？」

今井
「あの技術士官の所属は海軍なんだと。まあ、あっちの世界は海軍陸戦隊が存命しているそうだ」

大西
「おっと…出来れば本家本元の海軍特別陸戦隊とは戦いたく無いですね…ペペリュー島の事もありますから」

今井
「あっはっはっは、確かにそれは言えてるな。そんな陸戦隊が近代兵器所持だと……お～怖い怖い」

次号へ

２５８　技術大尉奮闘ス　３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２５９　技術大尉奮闘ス　４

パン！

カーン！

今井・大西
「「なっ！！」」

パンター戦車のキャタピラー跡を辿って進んでいた時、いきなり発砲された。
しかし、今回は１０式戦車の前面装甲に銃弾が当たっただけだったが…。

「動くな！　既に周囲は我々が包囲した！　下手な真似をすると、総攻撃する！」

何処からともなく…多分、近くだろうが…、警告を告げる声が響く。

今井
「日本語と言う事は…パンターを動かしていたのは日本人か」

大西
「しかも、声質から見て女性ですね。こんな状況で無かったら、安心出来たんですが」

今井
「確かにな」

まるで軽口の様に話す2人…しかし、実際にはこの状況をどう打開するか考えていた。
奇襲を受けた訳だから、向こうが有利だ…しかも、相手は見えないし、こちらは充分な態勢では無い。
それこそ、後ろの2台のトラックから歩兵を降ろしていれば少しは楽だっただろうが、今から降ろせば只の的(まと)だ。
いや、トラックから降ろそうとした時点で装甲の無いトラックは良い目標だ…上手くガソリンタンクに当てれば、あっという間に爆弾化してしまう……歩兵を巻き込んで最悪な結果になる。

今井
「確かに下手には動けないな」

大西
「では、ここは向こうの言う事に従って、様子を見る……」

そう言っている時に突如、鷲井は立ち上がり、言い放った。

鷲井
「騙したって無駄ですよ～。あなた方の人数は把握しています。この周囲…いえ、前方にパンターの乗員5人しか居ないんでしょう？
あなた方には解らないでしょうが我々には手に取る様に解っちゃうんですから」

言い返した……訳では無く、あくまで『騙しても無駄ですよ』と言っただけの鷲井。
しかし、次の瞬間……

今井・大西

「「おんどりゃ、何してるんじゃ、ボケ！！！」」

スパパーーン！！！

……2人の強烈ハリセン攻撃を鷲井は後頭部に受けた。

鷲井

「〆×≠％＄＊※¥◎☆…痛いわ～！！　何すんねん！？」

今井

「当たり前じゃあ！　なに手の内さらす様な真似をしてんねん！？」

大西

「人様の計画を台無しにするどころか、接触機会を潰す気か、我は！！」

鷲井

「正しい事を言った迄だ！！」

今井・大西

「「だからって、向こうに教える必要なかろうが！！　つーか、どうやって相手の数を把握したんや！？」」

鷲井

「そんなもん、このサーモグラフィ付き双眼鏡が有れば…」

今井・大西

「「んな便利な物（もん）持ってるんやったら、さっさと言わんかいボケ！！」」

鷲井
「何も訊かなかっただろうが！！」

今井・大西
「「それでも言え！！」」

……突然始まったボケ（？）とツッコミの漫才……完全に空気が変わっている。
これには双方共に唖然としている。

「…お前ら！！　こっちを無視するな！！」

そして、そんな漫才劇を止めたのもツッコミだった。（笑）

「とにかく！　そちらの代表者と話したい…それだけだ」

鷲井
「じゃあ…」

今井・大西
「「お前はここに居ろ。邪魔になる」」

鷲井
「…はい」

空かさず同行を拒否された鷲井。
そりゃ…これ以上余計な事された迷惑だな。

次号へ

２５９　技術大尉奮闘ス　４（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２６０　中尉・伍長が奮闘ス（前書き）

今回は短め、次号では山城達は田舎に行きます。

話は変わりまして今回の大震災により、被災地域の消防・消防団・警察・自治体職員が多数犠牲・行方不明に成っているそうです。
ある消防団では火の見櫓に掛け登り、鐘を鳴らして行方不明になった消防団員がおり、また、市の防災庁舎で直前まで冷静沈着に避難放送を行い同様に行方不明になった女性職員がいるそうです。
そんな彼らの多くは逃げれたにも関わらず、『私』の安全よりも『公』の安全を考え、行動し、亡くなった・行方不明になった方々を『英雄』と称するのは言い過ぎでしょうか？
そんな彼らと、政府閣僚・東電上層部の違いは『私』を捨て『公』を優先出来るか……石原都知事の『天罰』発言に繋がる物があると自分は思います。

２６０　中尉・伍長が奮闘ス

今井
「陸上…日本陸軍の今井中尉です」

大西
「同じく日本海兵隊…陸戦隊の大西伍長です」

「第１４戦車連隊特別戦車小隊の坂本流華少尉だ」

「同じく第１４戦車連隊特別戦車小隊の近藤春香准尉だ」

今井・大西
（（うわ～、パンターの乗員全員が女子だったんだ…））

……既に何でも有りな様な世界だから、もう２人共ツッコミを入れない事にする。

今井
「えーと…第１４戦車連隊となりますと、所在地はビルマ方面ですよね？」

坂本
「む、知っているのか？」

今井
「え、えぇ、それなりには…」

…まあ、今井達にとっては過去の事なのだが…。

大西
「ですが、何故ビルマ方面にドイツのパンター戦車が？　しかも、日本陸軍に？」

坂本
「あぁ、それについては簡単だ。陸軍がドイツよりパンターを2台購入したんだ。その2台を強行突破船に分解し、シンガポールまで送ってもらった」

大西
「つまり…何時ものパターン？」

近藤
「…そう言う事だな」

まあ、細々とは言え、仮装巡洋艦や武装客船が第二次大戦中にも存在していたから、あり得ない話では無いが……。

今井・大西
（（しかし…性別的には女の子だけど…全然見えないよな～））

いくら軍服を着ているとは言え…身体のラインまでは隠せない。
しかし、口調は男の様で……よほどと言うべきか…自粛していて、どうも女らしさが出ていな。

坂本
「…何か？」

今井・大西
「「いいえ、なにも」」

坂本
「そうか…」

近藤
「そうだ、忘れていた。実はそちらに預かってほしい人間がいる」

今井
「預かってほしい？　誰ですか？」

近藤
「うむ、旅の者だ。近くの町に向かっていたのだが……我々が情報採取の為に拘束した」

大西
「…拘束したらダメでしょう」

近藤
「う…そ、それはそうなのだが…」

今井
「まあ、わかりました。お預かりしましょう。で、そのお人は？」

近藤
「そこに居る」

そう言って指差した。

鷲井
「…で、その女の子を終わるまで見てろって？」

大西
「えぇ、その方がいいでしょう…と今井中尉が。あ、変な事はしないで下さいね」

鷲井
「するか！」

鷲井
「冗談ですよ。では、お願いします。ユーディーさん、どうぞ」

「ユーディーです。よろしくお願いします」

鷲井
「あぁ、よろしく（部隊の指揮執るよりマシか）」

密かにそう思う鷲井。
まあ……これが後々とんだ伏線に繋がる訳だが……。

次号へ

２６０　中尉・伍長が奮闘ス（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

261　田舎に泊まろう　1

12月26日　9時30分頃

『4号線発車の電車は、急行宝塚行きです。乗車のお客様は御早めに…』

山城・福本（勇気）
「「よし、間に合った！」」

…発車時刻にはあと少し有るのだが、ホッと安心する山城・福本勇気。
その後ろには、シルヴィア、セルベリア、大澤、ヴィクトリア、宮里、風華、佐野、ルーデル、ガーラント、ハルトマンの第零艦隊メンバー＋αの団体だった。そこに……

「…そんなに急ぐ程ギリギリに出たですか？」

「私としては、何故だか聞きたいところだがな」

山城
「よう、遠地にセイバー。スリーイーグルス…いや、フォーイーグルスも全員参加か？」

福本勇気・セルベリアの同級生の遠地・セイバー…詳細は『新第七艦隊』で。

遠地
「えぇ…って、先輩は知らなかったんですか？」

山城
「いや、予想はしていた。で、セイバー、一体何人抜いたんだ？」

セイバー
「既に３００人を抜きました。今度、乗馬に付き合って下さい」

山城
「お、いいぞ。但し、予定が空いててたらな。シルヴィアも連れて行くから」

セイバー
「どうぞご勝手に」

福本（勇）
「長話も後にして、乗りましょうか」

さて、読者の皆様には既にお分かりだと思うが、『爺さん婆さんが顔見たい』のお言葉に従い、一部人間しか知らない福本・マリーダ元帥の元に行く事に成った山城達。年末と言う微妙な時期では有るが、何とか仕事を全て終わらせて、山城達は向かった。経路は神戸から梅田で乗り換え、梅田から川西能勢口乗り換えで日生中央……この間、全員電車内では立っていたりする。
そこからバスで３０分後……

バス停

ハルトマン
「…本当に何もないね」

ガーラント
「田舎と聞いていたけど、本当に田舎ね」

ルーデル
「まあ、のんびりするには最適ね」

佐野
「のんびりとするのは後だよ」

風華
「故郷を思い出しますね」

宮里
「大掃除か…まあ、何もしないよりマシか」

ヴィクトリア
「…本当の本当に田舎ですわね」

大澤
「で、お前の知り合いはこんな田舎でどう生活しているんだ?」

山城
「どうって…普通に農業しながら、要る物は日生中央まで行くだけ

だが？」

……ちなみに、他のメンバー（福本達とシルヴィアを除く）には『（山城の）知り合いの老夫婦が顔を見たいから来ないかって言ってきた』と説明している…但し、年末なのだから、大掃除を手伝う条件付き。

……まあ、嘘はついていませんよ？

シルヴィア
「まあ、何でも良かろう」

セルベリア
「そうですよ」

福本（勇）
「ほら、行きましょう」

遠地・セイバー
「「おぉー」」

鷲井
「…なんで元気なんだよ？」

１０分後

福本・遠地・セルベリア
「「「着いた！！」」」

大澤
「いや、だからなんでお前らが元気なんだよ」
何も知らない大澤がツッコミを入れ……その後ろから、どす黒『黙れ』オーラのセイバーが立っている。
……余程、ウザいのだろう。

山城・シルヴィア
（（…御愁傷様で））

「あら～、珍しいお客様が来たわね。しかも大勢で」

山城
「あ、その声は…」

福本（勇）
「御約束通り参りました。おばあちゃん」

大澤・宮里・佐野
「「「おばあちゃん……！！？」」」

ヴィクトリア・風華・ルーデル・ハルトマン・ガーラント
「「「「「？？？？？」」」」」

驚く男性陣、それを見て驚くのを不思議がる女性陣……まあ、仕方ないんですけどね。

大澤

「お、お、おい、山城…お前、知り合いの老夫婦って…」

山城
「嘘は付いて無いぞ」

大澤
「嘘とかそう言う問題じゃねえ！　なんであの『元帥』と知り合いなん…」

宮里
「いや、解るだろう」

佐野
「上司が福本次官、後輩は福本勇気…完全なる知り合いですけど？」

大澤
「な、なんでお前らは簡単に解るんだよ！？」

山城・シルヴィア・宮里・佐野
「「「「おめー（あなた）が鈍感なだけだろう」」」」

大澤
「な、なんで、そう…」

セイバー
「もうそろそろ黙れ…黙らなければ、一生黙らせてやるが？」

大澤
「ひわっ！！」

そう言いながらいつの間に抜いたのか、細い刀身のサーベルを大澤の首に突き付けるセイバー。

山城
「あ～あ…大澤、お前は大人しくしとけよ？」

大澤
「お、お、おう」

マリーダ
「うふふ、皆若いわね～。まあ、私も負けて無いけどね～」

そう言いながら微笑むマリーダ元帥…いや、あんたは充分負けてないから。

「お、来たか。久し振りだな、山城。相変わらず、息子に振り回されてないか？」

そう言いながら鍬を担いで会話の中に入ってきたのは…言わずもながらの福本大介元帥（８７）。

山城
「あ、はい…まあ、ぼちぼちと…」

佐野
「りょ、両元帥に敬礼！！」

…いきなりの展開に、取るも取りあえず敬礼する佐野。
あとは良く知っている男性陣と、空気から読み取った女性陣も敬礼

する。

福本（大介）
「あっはっは、止めろ止めろ。こんな引退爺に敬礼したら、面倒臭いだろう」

…この気さくなお爺さんがあの『伝説の元帥』か…と訊くだろうが…そうなのである。

福本（大）
「じゃあ、先ずはお昼ご飯でも食べるかな？」

マリーダ
「うふふ、そうね」

次号へ

２６１　田舎に泊まろう　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２６２　田舎に泊まろう　２

海軍史の世界で有名な提督は４人居る。
１人はイギリスのネルソン、１人は東郷元帥、１人は山本元帥…最後に福本元帥だ。
特に福本元帥に関しては若干２３歳にして元帥となり、欧州戦で活躍、戦後直後のマリーダ元帥との結婚式は歴史の教科書に功績と共に載る程だ。
そんな福本元帥も６０歳にマリーダ元帥と共に引退……その後については家族や友人等以外は謎のままだった……。

山城
「…まあ、ここまでは何時もの通りだが……そんな人物がね～」

福本（勇気）
「どうしました、先輩？」

山城
「ん、いや、世の中意外だな～と思っただけだ」

そう言いながら、山城は長ネギを抜いた。
ここは福本元帥の畑…そう、野菜の収穫中だ。

福本（勇）
「祖父が世捨て人の様な生活をしているからですか？」

山城
「いや、普通に農家やって暮らしている事が」

福本（大介）
「忘れたか？　私の両親は農家だぞ？」

山城
「え、いえ、忘れていませんが…」

福本（大）
「なーに、いいんだいいんだ…既に隠居した物好きな爺さ」

山城
（その割には口調や身体はしっかりしている…元老や恩賞を一切断り、時代を駆け抜けただけはあるな…農業しているからかも）

福本元帥を見ながら、山城は思った。

シルヴィア
（…さすがと言うべきか…元気だ）

廊下の雑巾掛けをしていたマリーダを見ながらシルヴィアは思った。
何せ、既に８０代後半の『お婆ちゃん』のマリーダが、現役バリバリとばかりに『指揮』を執っていた。

マリーダ
「和馬と宮里君、佐野君、大澤君はそのテーブルとかを外に出して。次にセルベリアとルーデルは掃除機で掃いく…ハルトマンとガーラントは外に出した物を拭いてね」

……本当に現役バリバリです。

風華
「シルヴィアさん、お先に失礼します」

セイバー
「同じく、お先に行きます」

シルヴィア
「ぬお、しまった!?」

余所見していたシルヴィアの横を風華とセイバーがすり抜けた……
慣れ過ぎである。

シルヴィア
「なんで2人は速いんだー!?」

風華
「家が神社でしたから」

セイバー
「学校で慣れた」

シルヴィア
「くぅ…負けるかー!!」

……廊下の雑巾掛けが何故かヒートアップしていた。

山城
「で、なんでこうなったんですか?」

畑から帰った山城が見たのは、息絶え絶えで大の字になって寝転ぶシルヴィア・風華・セイバーの3人。

ハルトマン
「う～ん……なんて言えば良いのかな～？」

ガーラント
「対抗意識に火が付いた結果…と言うべきね」

山城
「…あぁ、なるほど」

だいたい理解は出来た…長い付き合いだから。

マリーダ
「お疲れさま～。何時もは2人で大抵終わらせてたんだけど…特に雑巾部隊はお陰で何時も以上に綺麗にしてくれたわね。ありがとう」

シルヴィア・風華・セイバー
「「「は～～～～い…」」」

マリーダ
「…どうかしたの、あの子達は？」

山城
「張り切り疲れ…と申しましょうかね」

マリーダ
「あら～、そうなの。うふふ」

何かを懐かしむかの様に微笑んだマリーダ。

マリーダ
「さて、夕食の支度を手伝う人はいる？」

シルヴィア・風華・セイバー
「「「はい！」」」

対抗意識でもあるのか、３人が直ぐに手を挙げた。
続いて、苦笑しながら福本・セルベリアも手を挙げる。

マリーダ
「あらあら、元気な子達ね…じゃあ、台所に来てちょうだいね」

ぞろぞろと台所に向かうシルヴィア達……その日の夕食が鍋だったのは別の話だった。

次号へ

２６２　田舎に泊まろう　２（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２６３　田舎に泊まろう　３

１２月２９日　福本・マリーダ元帥宅

大澤
「つ、疲れた～～」

宮里
「なんでお前が一番疲れてるんだよ？」

佐野
「あなただけ、軽い物で済ませていたのに」

大澤
「仕方ないだろう！　マリーダ元帥に見付かって、重い物ばっかり押し付けられたんだぞ！！」

セイバー
「…それがどうしました？」

大澤
「どわっ！！」

修羅か？…とツッコミたくなるほど静かに…克つ恐ろしくサーベルを首筋に当てるセイバー……怖いね～。

シルヴィア
「…なんでセイバーは大澤に対してああなのだ？」

山城
「あはは…3年前にスキンシップで胸揉んだら……ブチキレて半殺しにされたんだ」

福本（勇気）
「あの時は本当に大変でしたよね…自分と先輩と遠地で漸く鎮めたんですよね」

遠地
「その後、『セイバー』ファンクラブ総メンバーから散々殴られたからな～」

大澤
「…なんであの時、助けてくれなかったんだよ!?」

宮里
「自分で蒔いた種は自分で枯らすって言う諺があるだろう?」

大澤
「くっ…裏切り者～」

……誰も靡(なび)く事は無かった。

マリーダ
「はいは～い、お疲れさま～～、お汁粉食べる～?」

風華
「甘くて美味しいお汁粉ですよ?」

ヴィクトリア・ルーデル・ハルトマン・ガーラント
「「「「は～～い♪」」」」

福本（大介）
「あっはっはっは、みんな元気だな～」

……そう呟いた時だ…。

ドドドドドドド……

福本（大）
「ん、なんだ？」

マリーダ
「地鳴り…じゃあ無いわね」

山城
「……まさか…」

福本（勇）
「…えぇ、あり得そうですね…」

スパーーーン！！！

高城
「すみません！！　遅れましたぁぁぁぁ！！」

山城
「高城参謀長……どんだけ急いで来たんですか？」

いきなり障子を開けて現れた高城に山城は冷静にツッコミを入れた。

桃園宮
「…だから言ったでしょう…いくらあなたが急いでも、物事は簡単にいかないって…」

高城
「それでも、予定より早く現地に到着したけどね」

桃園宮
「…そう言う問題？」

山城
「あ～、お話中に水を注しますが…大掃除なら先程完了しましたが？」

高城
「…間に合わなかった～」

シルヴィア
「いや、もう良いだろう」

……ちなみに、高城と桃園宮は本当なら一緒に来る筈だったのだが、帝都からの通知で呼ばれて、後で現地合流と言う事にしておいた。

マリーダ
「まあまあ…とりあえず、お汁粉でもどう？」

高城
「食べまーす！」

桃園宮
「…食べる」

大澤
「てっ、お前らは何も…」
山城
「2人は自分の身の上問題を片付けてたんだ。お前が口を挟む隙間は無い」

…一発で発言を封じた。

福本（大）
「さて、役者が揃い、一息ついたところで、話をしようか」

そう言ったは高城・桃園宮が来た30分後の事だった。

福本（大）
「これから言うことは…只の物好きな隠居爺が言う戯言程度…と思って聞いてくれ」

山城
「は、はあ…」

そんなの無理だ……と思いつつ、山城は曖昧な返事で応えた。

福本（大）
「うむ…まあ、ある程度の状況と情報と話の流れは掴んでいる…見

えない敵とは厄介だな、山城？」

山城
「はい。潜水艦並み…それ以上の厄介な話です」

福本（大）
「だろうな…そこで考えた訳だが…異世界のアメリカでは無いかと思う」

この瞬間、誰もが（フォーイーグルスを除いて）息を呑んだ。
当たり前だ…見当さえついていない敵を言われたら驚きもする。

佐野
「で、ですが…何故そう思われるのですか？」

若干声を震わせながら佐野が質問した。

マリーダ
「簡単よ。桃園宮ちゃんや高城君の話を私達で推移してみた結果よ」

山城
「……なるほど、確かに無いとは言えない」

終戦から約６０年が経過した現在、世界各国の第二次大戦当時の機密文章が公開されつつある。
そんな中でも、ルーズベルト大統領の研究が一部で盛んなのだそうだ。
そして、明らかになったのが、どうやらルーズベルトは３８年までの世界構図のままであれば、アメリカ、ソ連、イギリス、フランスの『４人の警察官』で世界を纏め様としていた事だった。

無論、纏め役はアメリカだった……その構図が３９年に崩れた為、それが実現する事は無かったが。

マリーダ
「アメリカが原子爆弾を製造した事から見ても、余り大げさな話でも無いでしょう？」

山城
「…はい」

否定は出来ない……異世界なら尚更高い可能性だ。

福本（大）
「まだ皆若い…山城や孫達には散々言ってきた事だし、前線に立った者なら解るだろうが…指揮官はどんな時でも挫けてはいかん。挫けては勝てる戦にも勝てんし、最後の可能性さえ失う元となる。それと指揮官は容易に死んではならん。最後の最後まで粘り、一筋の可能性に掛けて、兵と民を護り通せ。即決な死は逃げる事と考えよ。まあ、だからと言って皆は死んではならんぞ」

この言葉に、その場に居た全員が頷いた。

次号へ

２６３　田舎に泊まろう　３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２６４　主要将官のその後と勇気との出会い

１２月３１日

高城・桃園宮ペア到着の翌日３０日に福本勇気の両親である福本伊吹次官と福本麻希大佐が到着した。
これにより、福本一族が集結した事になる。

山城
（しかし……揃いも揃ってチートと言うか、なんと言うか…）

祖父母は『伝説の元帥』、息子夫婦は現役の海軍次官と陸戦隊教育部長…孫は名を知らない者もいない『海軍期待の星』、その許嫁はアーヴ皇族皇女……こんな一族を探したって出てくるかどうか……。

高城
「まず、出てきませんね」

山城
「えぇ、確かに…どうですか、伝説の御二人は？」

高城
「聞いていた印象と大分違いましたね…御二人共に気さくな方々で」

山城
「あはは、自分も最初会った時はそう思いましたよ」

正に聞くと見るとでは大違いだ。

高城
「ですが、そんなお人が田舎で農業している…と言うのも変わったお話ですね」

山城
「政界入りも一時期は取り沙汰られていましたが…元々、元帥は政治家になる気は無かったそうですから」

実際、第二次大戦を戦い抜いた日本軍人の中でも異例なのは事実だろう。
山本五十六元帥は海軍を引退する予定だったが、４６年の１月に組閣の勅命が下り、４６～５０年まで首相に着任、その後、平凡な引退生活を送る予定だったが、５１年に大阪に完成した国営国際カジノの特別理事長と成り、亡くなる数日前まで、外国人相手のギャンブルに勝ってお金を巻き上げていた…その後、そのカジノは『山本カジノ』と命名されている。
（この世界の）小澤治三郎は連合艦隊司令長官の後に最後の軍令部総長となり、国防省設立の際は周辺の説得にあたっている。
引退後は平凡に暮らしていたそうだが、陸軍の今村大将と親しく付き合い、また、全国の子供達と手紙でやり取りしていた。
第二機動部隊司令官だった角田覚治は小澤司令長官の後任として連合艦隊司令長官に就任、但し本人は長くいるつもりは無かったらしく、数年後、直ぐに後輩の山口多聞に後を譲って後進指導にあたり引退、仏門に入った。
山口多聞は角田覚治の後任として連合艦隊司令長官に就任、戦後としては珍しく長期就任となり、その間には日蘭紛争（戦争）が勃発、指揮をとっている。
引退後は愛妻孝子（たかこ）と共に優雅に暮らしている。
井上政美中将の祖父、井上成美は戦後、海軍次官、海軍教育総監、

諜報部総監に就任、軍改革の中枢を担い引退している。
木村昌福は大将任官の話があったが、『自分は現場が良い』と断り続け、現場に出続け、最後は神戸士官学校校長として、後進指導にあたった。
また、どうやら家庭内では仕事の話はしていなかったらしく、葬式に出席した福本・マリーダ達から聞いて漸く教官だった事実を知った程だった。
市丸利之助は空軍設立後、空軍中将として移籍、教育総監に就任し、空軍総司令・空軍大将で引退、引退後は文人として活躍している。
……これら、福本・マリーダに関係のある一部海軍将官のみの後歴を記してみた。
この他の将官達は又の機会としたい。

山城
「まあ、平凡な引退生活ではあるけど…生存や居場所を超国家機密・超軍事機密にしている事だしね」

高城
「そんな人間を探してもそう出てこないでしょうね。まあ、約３０年間も元帥として任官していたからでしょうけど」

山城
「…そうですね。まあ、福本元帥は悪い人では無い。伊吹さんも、そして、勇気も…特に勇気には不思議なオーラがあるよ」

高城
「ふーん…オーラか」

そう呟くと勇気の方を見た。
勇気はルーデル、ハルトマン、ガーランドと一緒に話していた。

山城
「なんて言うのかな…簡単に他人を顔見知りにしちゃうと言うか…人が直ぐに集まると言うか…まあ、人好きな奴ですよ」

そう言うと微笑む。

高城
「そう言えば、あなたと彼はどの様にして出会ったんですか？」

山城
「ん、あぁ、シルヴィアにも同じ質問をされましたよ。確か…あれは3年前かな？　いや、4年…いやいや、3年前だ。学校見学で案内したのがそもそもの始まりだな」

高城
「学校見学…ですか？」

山城
「まあ、時代が違うからね…その時は何処の誰なんて事前に知らされなかったから、普通に喋って案内しただけ…ただ、話やすい未来の後輩だな、と思った程度だよ。終わったあとに正体聞かされて驚いたけど」

桃園宮
「…知らなかったの？」

…いきなり桃園宮少将が入ってきました。

山城

「名前だけは知っていましたよ。でも、写真なんて見た事も有りませんでしたから…まあ、お陰で免疫されて、勇気にも懐かれて、今に至りますが」

…在学中にかなり騒動に巻き込まれたが……よくこうして士官として在籍しているものだ。

山城

（いや、待てよ…勇気と付き合ってるから、今があるのか？　福本次官がいるし…）

そう勘ぐりする山城だった。

次号へ

２６４　主要将官のその後と勇気との出会い（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

265　田舎に泊まろう　4

パチッ

福本（大介）
「これはどうだ？」

山城
「むむ、そうきましたか」

高城
「飛車、角行…桂馬を使った攻めですか」

福本元帥と山城、高城は将棋をしていた。
もちろん、対戦者は山城・福本元帥、見学者は高城だ。

山城
「ならば、自分は…」

パチッ

直ぐに金将を展開し、角行を討ち取る。

福本（大）
「ふむふむ…しかし、少し甘かったな」

パチリ

高城

「…あ！」

山城
「っ！　しまった…元帥お得意の王将取りだ…」

…いつの間に居たのか、間近に侵入していた福本の王将が山城の王将を討ち取った。

福本（大）
「あっはっはっは、なに、お前も筋は良くなってるよ。まあ、実戦を経験した事もあるからだろうな」

山城
「いや～、やっぱり元帥の『王将取り』は敵いませんよ…まるでステルス機みたいに侵入して、王将で王将を取るんですから」

福本（大）
「そこが『みそ』なんだがな。まあ、山本元帥とは何度も勝負したが、負けに負けたな…あの人の事だから、あの世で勝負しても負けるだろうな」

そう言いながら笑う。

山城
「片付けますか？」

福本（大）
「ん、高城君、どうだね、一勝負？」

高城

「いえ、多分相手になりません…また別の機会に」

福本（大）
「そうかそうか、山城、片付けていいぞ」

山城
「はい」

返事をすると、山城は歩兵の駒から1つづつ箱の中に入れていく。
そして、金将と王将を箱に入れようとした時、福本元帥がそれを制した。
福本元帥は将棋盤に王将を1つ置くと、対極する位置に残りの王将と金将4つを置いた。

福本（大）
「2人共、何が見える？」

山城
「…これ、単純に1対5の構図ですよね？」

福本（大）
「あぁ、そうだ」

高城
「…まさか、自分の世界の構図では…」

福本（大）
「さすがだな。その通り、高城君の世界構図だ」

山城

「では、王将がイギリス、金将は大和帝国、フランス、イタリア、ロシア…と言ったところでしょうね」

1つの道筋が付けば後はポンポンと意見が出てくる。

福本（大）
「山城、一国で2正面戦線を形成するのは？」

そう言いながら、王将と金将3つを対極する王将の後ろに移す。

山城
「完全に軍略上はやってはならない事です。それをやったと言う事は…よほどの自信があるのかと」

福本（大）
「確かにな…しかし、何度考えてもその理由がはっきりしない」

山城
「元帥もですか？　実は自分もです」

高城
「…どうゆう事ですか？」

福本（大）
「つまりだ…いくらドイツを占領したと言っても、そこまでアメリカの国力が向上する訳では無いと言うことだよ」

山城
「2方面で戦うとなると、それなりの戦力が必要です。ドイツを占領し、技術者や科学者、工業地域をかき集めても無理でしょうね」

高城
「…つまり、もっと強力な…力の様な物が働いたと？」

福本（大）
「でなければ説明がつかないのだよ…色々とな」

福本（伊吹）
「おやおや、現場と上層部が中間を挟まずに作戦会議ですか？」

そう言いながら、福本次官が入って来た。

福本（大）
「何を言っている。お前だって立派な『上層部』だろうが」

福本（伊）
「あはは、参ったな～」

山城
「…そう言えば、前々から聞こうと思っていたんですが…」

福本（伊）
「ん、なんだ？」

山城
「はい、浅間山荘の件で…なぜ福本元帥は当時中尉だった次官を応援しなかったのですか？」

確かに浅間山荘は3日後の突入で片付いた……しかし、初日に福本次官が本部のあった地元署に入っているのに、福本元帥は何もしな

かった……なぜ？

福本（大）
「あぁ、下手に出て来たら後々禍根を残しそうだったからな…それと、息子を試す為でもあったからな」

福本（伊）
「まあ、親父の助けは無いと思ってたからな。それどころか、帰って来い！…と言われるかと思ったが、意外に『何にも知らん』と言われたから勝手にやった」

山城・高城
（（勝手にやったって…））

……本当に凄いよ…この親子。

次号へ

２６６　田舎に泊まろう　５（前書き）

明日より、『士官候補生異世界奮闘記』を一時休止し（予定変更あり）、『外伝』の方を更新いたします。
決してネタ不足だから……ではありませんよ。

266　田舎に泊まろう　5

２００７（平成１９）年１月１日

トン！　トン！　トン！

山城
「…やっぱり餅は人の手でつくのが一番だ」

シルヴィア
「うみゅ、しょうだにゃ（うむ、そうだな）」

つきたての餅を食べる山城とシルヴィア。
その周りでも、福本勇気達や近所の人まで加わり食べている。

福本（勇気）
「先輩、ついてみます？」

山城
「お、じゃあ、ちょっとだけ」

そう言うとつき始めた。

シルヴィア
「しかし、福本元帥の生存は国家機密では無かったか？」

福本（勇）
「あぁ、それなら大丈夫ですよ。ここは祖父の生まれ故郷でこの付

近の住民は福本元帥の事を知っている人達ですから」

シルヴィア
「公然の機密…と言う訳か」

そう呟くシルヴィア……だいたい、空気が余りにも違い過ぎる…まるで普通の正月風景だ。

福本（勇）
「何度か言ったかも知れませんが、祖父はそう言うのは嫌いですから…いくら『伝説の提督』や『軍神』と呼ばれても、やはり祖父も人ですから」

シルヴィア
「…確かにな」

福本（勇）
「それに、祖父は良きパートナーに良き仲間達が居ましたからね…だから、祖父は『伝説』になったんですから…その点は山城先輩も一緒ですよ」

シルヴィア
「ん？　どう言う事だ？」

福本（勇）
「そうじゃないですか、シルヴィアさんがいて、宮里先輩がいて、佐野先輩がいる…正にそうですよ？」シルヴィア
「む、確かにそうだ」

シルヴィアは納得するしか無かった。

山城
「ふう～、今年もついたな～」

つき終わった山城が呟いた。

山城
「宮里、佐野、高城、遠地。つき終わったか？」

宮里
「あぁ、佐野の前にやった」

佐野
「高城さんの前に終わらせました」

高城
「遠地君の前につかせてもらったよ」

遠地
「勇気の前にやりました」

山城
「じゃあ、あとはメインの福本次官と福本元帥…大澤は…やらないか」

つまり、軍隊組はほぼ終了と言う事に……

ハルトマン

「山城く～ん、僕にもつかせて～」

山城
「え、あ、はい。わかりました…ですが、大丈夫ですか？」

別に女の子だから……と言う訳では無いが……。

ハルトマン
「いひひ、大丈夫だよ～」

山城
「では、どうぞ」

そう言いながら木槌をハルトマンに渡した。

ハルトマン
「じゃあ、いっくよ～！？」

山城
「…まあ、大丈夫か」

セルベリア
「山城先輩」

山城
「ん、セルベリアか。まず、明けましておめでとう」

セルベリア
「おめでとうございます…先輩は私の事はどう思いましたか？」

山城
「あぁ、この前のね…別に。アーヴ皇女でも女王でも、女帝でも気にしないよ」

セルベリア
「ですが…！」

発言しようとするセルベリアの口に人差し指をあてた。

山城
「そうやって自分を追い詰めたら駄目だよ～、もう過去の事、結果論だと思うしかないよ」

……どっかの国みたいに自虐になったら面倒臭いからね～。

山城
「それに、皇女がそうだと、アーヴ国民が心配するでしょう？」

セルベリア
「……はい、そうですね」

山城
「それより…神戸の海と空の『ゲート』の事だけど、あれはいったい…」

セルベリア
「あれは…父や資料を調べたんですが…どうやら、次元接続装置が作動しているのだと…」

山城

「次元接続装置って…ドラえもんの『どこでもドア』みたいな？」

セルベリア
「そう考えていただいていいかと…まあ、実際は任意の場所に次元間をつなぐ物です。私達は物質や人員を輸送するのに使用していました」

山城
「ふーん…で、その装置が作動したままだったか、作動したかで、神戸の『ゲート』って事？」

セルベリア
「はい…もしかしたら、我々がこの地球に接近したので、作動したのかもしれません」

山城
「ふむ…世の中は解んないよな」

次号へ

２６６　田舎に泊まろう　５（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２６７　天城の全力公試

２００７（平成１９）年　１月１５日　紀伊水道（太平洋側）

遂に…と言うべき、日本海軍第零艦隊旗艦『天城』の改装が完了した。
そして、この日は改装後の全力公試が行われた。

天城艦橋

福本（伊吹）
「今回は時間が取れて良かったよ」

山城
「…石破防相と一緒に来て、よく言えますね」

…この人の事だ、天城の改装完了を聞いて、仕事を適当なところで終わらせ（あるいは放り出して）、石破防相に改装完了を伝えて予定に組み込んだに違いない。
しかし、流石にこんな場で文句をブチブチ言っても仕方ないのではあるが…。

佐野
「艦長、準備終わりました」

山城
「うむ…これより、全力公試を開始する。機関出力一杯、全速前進！」

佐野
「了解。機関出力全開、全速前進！」

元々、速度重視の『巡洋戦艦』である天城。
スペックでは３６ノットは出せると聞いてはいるが……

佐野
「速度３０ノット…３０，５、３１、３１，５…」

既に見た速度で有るため冷静にカウントしていく佐野……しかし、
徐々に興奮気味な声に変わっていく。

佐野
「速度３３，５ノット！　更に上昇します！　３４…３４，５！」

改装前以上の速度に佐野は興奮していた。
まあ、解らんでも無いが。

佐野
「３６…３６，５……出ました！　最高速３７，２ノットです！」

山城
（ふむ…予定より１ノット速いな…まあ、悪くは無いが）

福本（伊）
「技官達にはお礼の日本酒を出さないとな」

山城
「まったくです」

石破防相
「次官、天城の機関は通常動力なんだね？」

福本（伊）
「はい。残念ながら、天城はスペースの関係上、原子力機関の搭載は断念しました。ですが、通常動力での高速化は可能と言う結果が出ました」

石破防相
「あぁ、そうだね」

山城
「（……何か考えてるな、この2人…まあ、世界征服なんてのは考えてないだろうが…）宮里、全主砲塔右舷に旋回」

宮里
『了解、全砲塔右舷へ旋回』

全速下で全主砲塔を回せば空気抵抗で若干速度に影響は出るだろう。だが、普段より砲塔の旋回が速い様な気がするが…？

山城
「……次官、まさか砲塔周りを弄りました？」

福本（伊）
「ん、主砲塔の旋回モーターを弄る様に指示した覚えは…」

山城
「…ちゃんと言うか、改装書に記載してくれませんか？」

福本（伊）
「あはは……」

山城
「笑って誤魔化さないで下さい」

もう…いったい何でこうなる？

山城
「佐野、速度はどうだ？」

佐野
「それほど変わりはありません。このまま砲戦をやっても大丈夫ですよ」

宮里
『まったく同意見だ』

…まあ、これからの事を考えるとやれる方がありがたい。

山城
「さて…主砲戻せ。速度巡航」

佐野・宮里
「『了解』」

これ以上、下手に高速を続けて機関を初っぱなから壊す訳にもいくまい。

福本（伊）
「ところで山城。あの彼女と…」

スコーン！！

余計な事を言う前に山城は机にあった文庫本『指揮官の品格　～福本大介元帥編～』（著　石原慎太郎）を福本次官の額に縦に叩き付けた。
無論、クリーンヒットだったが……。

山城
「……ああぁぁぁ！！　まだ読みかけ～！」

石破防相
「……いつも、次官が来るとこうなのかね？」

佐野
「う～ん…本を投げたのは初めてですが…概ねこんな感じですね」

石破防相の質問に佐野は控え目に答えた。

シルヴィア
「…いったい何が起こった？」

艦橋に上がって来たシルヴィアが福本次官と山城がお互い謝ってい

るのを見て、佐野に聞いた。

佐野
「えっと…なんと言えばいいんでしょうかね……まあ、おふざけが過ぎた…と言うところでしょうね」

シルヴィア
「ふ～ん、そうなの」

…特に気にしていないご様子。
原因を聞いたら何と言うだろか？

山城
「さて…シルヴィア、どうした？」

シルヴィア
「ん、別に。何時までも下に降りて来ないから気になっただけだ」

山城
「…そうか、もうお昼だったか…今日はなんだろう？」

シルヴィア
「今日は五目飯のおにぎりだそうだ」

山城
「う～ん、それは美味しそうだ…佐野、先に食べて来い。御二方を案内してな」

佐野
「わかりました～♪」

返事をすると佐野は福本次官と石破防相を連れ、下に降りた。

山城
「…さて、シルヴィア。後ろのビニール袋の中身はなんだ？」

シルヴィア
「……バレていたのか…私とお主の分だ。まったく、防空指揮所で食べようと思ったのに…」

山城
「やっぱり…まあ、良いか。ここで食べよう」

シルヴィア
「……そうだな。下手に置いたら腐るからな」

山城
「いや、腐らない腐らない」

……ちなみに、この食事シーンはきっちりと天城に目撃され、その日の内に知れ渡ったのは言うまでも無い。

次号へ

２６７　天城の全力公試（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

268　ロシア娘

1月18日　神戸鎮守府

天城の全力公試から3日後、神戸鎮守府に2隻の巡洋艦が配備された。
1隻は軽巡洋艦『銀河』、もう1隻は航空巡洋艦『天河』…元『マキシム・ゴーリキ』と元『キエフ』だ。
砲戦で鳥海にたこ殴りにされた『銀河』はあちゃっこちゃ改装したそうだが、『天河』は装備と機関の変更だけであったから案外外見は変わっていない。
そんな2隻を加え、第零艦隊は密かなる準備に入っていた。
そして……その夜……

山城
「う～、疲れた～～」

普段はキッチリ着る軍服に皺が出来、襟は開襟し、制帽を小脇に挟み、山城は廊下を歩いていた。
新たな艦艇の新たな艦幹部（艦長や副長、指揮継承者）と顔合わせ（何故か神戸士官学校卒の若手先輩）を行い、揉みくちゃにされて漸く解放された。

山城
「ふう……さて、今夜は早めに休もう」

只でさえ、明日からは忙しくなりそうだし…しかも、今は夜の7時

４５分…今から寝れば充分過ぎる程休める。

山城
（シャワーを浴びて寝てしまおう）

ちなみに真水に関しては技術進歩で航海中の艦艇でも普通に使える様になった。
そう思いつつ、艦長（兼主席参謀長）室のドアを開けると……

「……」

「……」

山城
「……」

……

パタン

山城
「……？？？？」

……部屋の主は自分だから、普段は人はいない。
しかし……開けてみれば人が居た…しかも女の子が２人。

だが、天城にあんな子は居たかな？
……いや、居なかった…つーか、２人共、東欧系だった様な……。

シルヴィア
「…なに自分の部屋の前で自問自答をしておる？」

呆れた様にシルヴィアが言った。

山城
「…なあ、シルヴィア。ここ、俺の部屋だよな？」

シルヴィア
「……はあ？　おかしな物でも食べたか？　あるいは頭でも打ったか？」

山城
「いや…それなら大丈夫……何故か、俺の部屋に女の子が２人も居るんだよね」

シルヴィア
「……浮気相手か？」

山城
「どうやって浮気するの？」

シルヴィア
「む、そうだったな……もう一度、確認するか？」

山城

「うん」

キィィィィ……

「……」

「……」

山城

「……」

シルヴィア

「……」

……

ススススーー……

「「いやいやいや、待って下さいよ～～！！」」

ゆっくり開けたドアをゆっくりと閉めて出ようとする山城・シルヴィアにツッコミをかました。

山城

「いや～、そう言われてもね……で、君達は誰？　うちの艦の乗員じゃあないよね？」

「『銀河』です！　よろしくお願いしま～す♪」

「元『キエフ』の『天河』です」

ロングヘアーの『銀河』とポニーテールの『天河』。

山城
「あぁ、2隻の艦魂か…もう、驚かせないでよ～」

山城は気付いていたが、シルヴィアからは黒いオーラが2人に向けられていた…当の本人達は気付いてないが……。

シャワーを浴びた後、覗いて見ると、酒宴をやっていた……ウォッカで…シルヴィアも加わって……。

銀河
「『マキシム・ゴーリキ』なんて名前は嫌いだ～！　全然、女の子ぽくなってないよ～！」

……酔って愚痴を言い出した様だ。

シルヴィア
「そうよね～、そんな名前だと女の子は誰も嫌になるわよね～（＊＾＾＊）」

天河
「それに～、ペンキは塗り直してくれないし、整備はロクにしないし～…日本は天国だ～～♪」

……酔ってますね、完全に。

山城
「……寝よ」

そうしてベッドに潜り…

天河
「あれ～、寝ちゃうんですか？」

シルヴィア
「あぁ、あいつはつい1時間前まで揉みくちゃな目にあったからな～、今夜は休むそうだ」

……座っているからいいものの、顔の色具合からして酔っているシルヴィアが答える。

天河
「じゃあ、マッサージしてあげますね～♪」

そう言うと背中に馬乗りになる天河。

山城
「へ、マッサー…」

天河

「はい♪　ここを曲げると♪」

グキキキ！

山城
「っ痛いたたたたたた！！！！！」

天河
「そんな大げさに叫ばないで下さいよ～♪」

メキキキ！

山城
「い、お、お、大げさじゃゃゃゃあ～～～！！！」

……この後、何故か意識が遠退いた山城だった。

次号へ

２６８　ロシア娘（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

269　着艦訓練

1月19日

『♪～♪～♪～♪～（ピッ）』

ケータイの目覚ましが鳴り、ベッドから手を伸ばして止めた。
そして、もぞもぞと動いて山城が起きた。

山城
「うぅ…天河にあっちこっち捻られたのは憶えてるが…そこから先の記憶が無いな…」

そう呟きながら周りを見ると、銀河、天河、シルヴィアが床で毛布を被って寝ていた。
どうやら、人を気絶させた後、そのまま酒宴を続け、毛布を出して寝たのだろう。

山城
「…放っておこう…さてと」

呟きながら起き上がり、ハンガーに掛けた軍服を着て部屋を出て行った。

天城艦橋

佐野
「おはようございます、艦長」

山城
「おはよう、佐野。何かあったか？」

佐野
「いえ、なにも。何かあったらたたき起こしに来ますから」

山城
「あはは、そうだったな」

佐野
「それよりも艦長、昨日は眠れましたか？　艦長の悲鳴が聞こえたと聞きましたが…シルヴィアさんと寝技でもやってたんですか？」

山城
「……そんなに響いた？」

佐野
「えぇ、数名の乗員から…それに、随分遅くまで騒いでいた様ですが…」

山城
「……何時まで？」

佐野
「０時を過ぎてからは静かになったそうですよ。何かありました？」

山城
「う～～ん……実はだな…」

昨夜の事（気絶するまで）を詳細に語ると、佐野は苦笑を浮かべた。

佐野
「それは大変でしたね」

山城
「まあな…お陰でゆっくり寝れて、マッサージのせいか案外疲れて無いし……ところで、今日の予定は？」

佐野
「はい、今日の予定はですね……」

午前１０時頃……

海上には天城、征龍、銀河、天河の４隻がいた。
アングルドデッキへの改装が終わった征龍は富士配属の大和撫子隊の着艦訓練に出て来たのである。
既に天河からの対潜ヘリが周囲を警戒、４隻も警戒態勢である。
まあ、日本に喧嘩を売る『国』はいないだろうが。

佐野
「ここまでする必要はありますかね～？」

山城
「まあ、仕方ないさ。最悪の事態を想定するのは軍人の仕事だからね」

佐野
「それはそうですけど…周辺警戒にミサイル艇を投入する必要は無いかと…」

実は４隻の四方にはミサイル艇が４隻が『周辺警戒』の名目で展開している。

山城
「あぁ…実はな、福本次官から聞いたんだが…」

佐野
「福本次官から？　何です？」

山城
「一部の噂だが…シーシェパードが動き出した…らしい」

佐野
「うわ…あの海賊兼反日団体共ですか…なんでです？」

山城
「どこでそんなデマを聞いたか知らんが…『日本が異世界で愚かな捕鯨をしようとしている』…だ、そうだ」

佐野
「はぁ…まだ海洋調査すらもしていないのに…まあ、情報公開して無いのが原因かも知れませんが」

山城
「当分は無理だな…まだ調整作業が完了していない。病原菌もある…下手に入れて問題も出したくない…それ以上に『あの』問題があるからな」

佐野
「…ですね」

…今回はメインで無いので、シーシェパードについてはまた別の機会に。

風華
「後方より味方機接近します」

佐野
「来ましたね。第一陣はガーラント少将指揮ですね」

山城
「あぁ…まあ、実戦経験とパイロット実績はあるから大丈夫さ」

実際、ガーラント機は正に手本とばかりの見事な着艦であった。
しかし、富士のパイロットは機体性能の違いか…あるいは練度の違いで少々危なっかしい着艦になってしまった。

山城
「まあ、慣れの問題だな」
佐野

「結論的にはそうですね」
お互い解っている事を呟いた。

2時間後……

風華
「後方より第二陣です」

山城
「ガーラント隊発艦から1時間後って言う予定だから、間違ってはないよな」

佐野
「それどころか予定より若干早いですね…あ、艦長。3番にコールです。繋ぎますね」

山城
「ん…はい、こちら山城。もしもし？」

ハルトマン
『おぉ、やっぱり山城君か～、おっはよう～！　ボクだよ、ボク！』

山城
「ハルトマンですね…もう『おはよう』の時間では無いと思いますが…」

ハルトマン

『あはは、そ～だね～…ところでシルヴィアは？』

山城
「……あ～、ちょっと二日酔いでして…まあ、放って置けば治りますよ」

ハルトマン
『それは大変だね…あ、ボクは最後に降りるから、後でね～♪』

佐野
「…何時もの伸びやか調子ですね。本当に世界最強のエースですか？」

山城
「人間とはそう言う者だ。福本元帥を見れば解るだろう？」

佐野
「……あぁ、確かに」

案外素直に納得した。

ハルトマンは宣告通り、先に富士隊を先に着艦させ、最後に見事な着艦を見せ付けたのであった。

次号へ

269　着艦訓練（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２７０　韓国娘達（前書き）

今回は鹵獲した韓国艦の話です。
……まあ、後々に回すよりは初回にスパッと言わせましたが……多分、有り得るでしょう。
あと……山城のキャラが変わっております……色んな意味でお気を付けを……。

270　韓国娘達

1月23日　神戸鎮守府

この日、元『韓国』艦艇が改装を終えて神戸鎮守府に回航された。
強襲揚陸艦『竹島』、防空駆逐艦『鶴月』、フリーゲイト『白神（しろかみ）』・『大間（おおま）』・『珠洲（すず）』・『日御（ひのみ）』・『佐多（さた）』（艦名は岬名）と命名され配属された。
7隻の艦幹部との挨拶を早めに終わらせ、山城・シルヴィア・佐野の3人は天城の会議室に入った。

山城
「（天城さんの話だと…）揃って……ますね」

山城が入った瞬間、まるで親の仇を見るかの様な顔になる（1人を除く）韓国艦の艦魂。

（倭奴（ウェノム）だ）

（下劣民族）

（チョッパリ（豚足）だ。チョッパリが出た）

（地獄に落ちろ）

山城
（聞こえて無いと思っているのか、あるいはわざとか……どちらにしても聞こえてるよ）

ボソボソと喋る声の殆どは侮蔑と差別語しか聞こえなかった。
これは天城も苦労しただろう。

山城
（さて…どこから話した…）

「ちょっと、そこの倭奴。私を誰だと思っているの？」

山城
「……はあ？」

いきなり出て来て何ですか？

「……まさか、あなた方倭奴共が不法に領土と主張する我が韓国領土の独島を知らないの！？」

山城
（なるほど…この子が独島か……はぁ…）

艦名ゆえに、どんな洗脳教育を受けたのかは知らないが……どうやら、悲しい事（別の意味で）には違い無い。

独島

「ま、まあ、いいでしょう…とにかく、倭奴共は早期に独島から手を引きなさい！　さもないと、痛い目を見るわよ！」

パチパチパチパチパチパチパチパチ！！！

この独島の宣言（？）に一名を除いて賛辞の拍手がおこった……まさか、英雄の誕生！…なんて思ってるのか？

山城
（うわ～…空気読んでないや…）

ちなみに、シルヴィアは言葉の意味は解らなかったが、言ってる事がおかしい事は解っているので、『こいつは大丈夫か？』と哀れむ目で見ていた。
佐野は余計に事情が解るから呆れていた……こんな場違いで馬鹿な事を言える事に。

「そうだそうだ！　倭奴共は我々に従えばいいんだ！」

「祖国を無理矢理併合し、荒らした人でなし！」

「その上、我ら民族を分断したくせに！」

「謝罪しろ！　この下劣民族！」

……正に水を得た魚の如く好き勝手言い始めた。
半分聞き流していた山城は脳内でどうやって収めようかと考えていた時……

「だいたい、倭奴達が我ら優秀なる朝鮮民族を支配する事自体が天が許さぬ事だったのや！　だから、無残にも戦争に負けたのよ！　ざまあ見なさい！　天皇もあの時に戦犯として処刑されれば良かったのよ！」

……誰が言ったかは知らないが、これがいけなかった。
この瞬間、山城はカチンときた…無論、慌てつつも佐野は恐る恐る山城を見た……危うく悲鳴を上げかけたが……。

山城
「……じゃかしいんじゃ！！！！！　お前ら！！！！」

この怒声に罵声を浴びせていた韓国艦の艦魂達が一斉に黙った……しかも、殺気に圧されたのか顔が引き吊り、恐怖に震えている。
完全に地雷…しかも、大型の対戦車地雷を踏んでしまったのだ……。

山城
「さっきから黙って聞いてりゃ～、好き勝手な事をボコボコ言いやがって！　しかも、歴史に無知ときたら、お前ら救い様無いわい！！」

バン！！

力任せに手近の机へ拳を叩きつける。

山城
「だいたい！　歴史調べたら、アメリカに亡命してた肝っ玉ちっちゃいアメリカの飼い犬が大統領になって独立しただけやんけ！　併合前は官僚腐敗で超貧困国、国民かえりみないで朝鮮王族は権力争いやって、清に頭下げるしか脳ミソ無かったくせに、よう言うわい！！」

佐野
「あ、あの…艦長？」

シルヴィア
「あ～、今は何を言っても無理ね」

余りの普段からの変容ぶりに驚く佐野……さも当然とばかりのシルヴィア。

山城
「それで天皇陛下を戦犯で処刑？　ざけんな！　戦犯の意味も知らんくせな！　朝鮮王族に比べたら、明治・大正・昭和天皇の三天皇はすっぽんと月じゃ！　その王族の末裔も追い出したんはお前らやんけ！」

正に毒舌の集中射撃……韓国艦艦魂達も日本人（世界は違うが）から始めて正面から堂々とこの様な反論をされた事が無いらしく、反論も出来ない。

山城
「それから独島！　竹島は日本の物だ！　ちゃんと歴史が証明しとる！　悔しかったらちゃんとした証拠をかき集めて、国際裁判所で堂々と勝負せい！　後ろめたい事があるんか知らんけど、こそこそ

隠れて逃げとる卑怯者が偉そうに言うな！！」

独島
「な、な、な…」

山城
「それとな！　朝鮮に従えやと？　日本がペリーや四国艦隊や馬関戦争や薩英戦争、中国の阿片戦争を見て『ヤバい！』と思って必死になってた時に、頼りにもならん清を盲信して、中華思想から抜け出せ無かったアホたれになんぞ従うかいな！　そんなに指揮下に入るのが嫌やったら、自分で弾薬庫に火入れて自爆すりええんちゃうか！！　ええ！！？」

…さすがにここまでくると韓国艦艦魂達も反論以前に入り込む隙間も無いらしく沈黙していた。

山城
「それとも…自信と覚悟が無いねんやったら、代わりに殺ったろか！？」

直ぐに腰の『神風』に手を伸ばす山城……ここに至り、独島以下韓国艦艦魂達は「殺される！？」と思ったのか大慌てで逃げる様に転移した。

山城
「ふん、肝っ玉ちっちゃいのう！」

佐野
「艦長……キャラが変わり過ぎです」

シルヴィア
「普段、温厚な人間ほど、キレた時が怖いと言うが…正にその通りだな」

山城
「俺のなんかまだいいよ…勇気がキレたらどうなるか…」

「あ、あの～？」

山城
「ん、残ってた子も居たのか…君は？」

「あ、元『崔瑩（チェヨウ）』…今は『鶴月（かくつき）』です…指揮官役です…す、凄いですね…さっきの…」

さっきの余波か…足がガクガク震えている。

山城
「あ、ごめんごめん（やべ、強すぎたな～）」

鶴月
「い、いえいえ…元は私達が原因ですし…みんな、まだ空気が掴めて無いって言うか…その…」

山城
「いいのいいの…どうせ、いつかはこうなる事は解ってたし」

鶴月

「あ、はい……あ、指揮の…」

山城
「大丈夫…一度、配備された以上は全力をもって守る…それだけさ」

鶴月
「…はい…ありがとうございます」

次号へ

270　韓国娘達（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

271　古参艦

2月6日　神戸鎮守府

あれから2週間が経過した。
その間、山城は通常業務を続け、忙しい日々を送っていた。
しかし、あれ以後、鶴月以外の韓国艦艦魂とは接触していない。
これは山城が意地を張ってると言うよりも、独島以下の艦魂達の方が意地を張っているからだ。
だから、鶴月に一回様子を聞いてからは無駄と思い接触しない様にしていた。
ただ、鶴月は指揮官（と言うより代表者）として、また、優国史観に染まらず、冷静に物事を見ようとする性格もあり、山城や佐野からある程度の歴史を学んでいた。
無論、歴史の歩みが第二次大戦より大きく異なっているから、鶴月の質問に山城や佐野が答えられる範囲で答え、そこから話を発展させる…と言う方式をとった。
ちなみに、教科書（やっぱり通史は大事）は山城・佐野が神戸海軍士官学校で使っていた歴史教科書の他、金　美齢、小林よしのり、渡部昇一、黄　文雄などの書籍（山城所有）を使った。
無論、駆け足に授業で有るため、細かいところは無理であったが、それなりにはしていた。
しかし、これは鶴月のみの事だから、韓国艦艦魂達が出来る訳では無い。
そもそも、彼女達がこちらの通史を受け入れるかが最大の問題であった。
そんな時……ある艦が神戸へ来航したのであった。

山城
「神の悪戯……と言うべきだな」

佐野
「……なんでしょうかね？」

鎮守府の中を早足で歩く山城と佐野…その後ろからはシルヴィアが付いて来ている。
２人が向かっているのは神戸鎮守府の艦船用ドック。そこには１隻の艦船が修理に入っているからだ。

シルヴィア
「ところで、なぜ『朝鮮民国』の練習巡洋艦が日本の軍用艦艇ドックに入っているんだ？」

佐野
「ヨンイル（迎日）は日本海軍が朝鮮民国用に建造した巡洋艦なんです。今は練習巡洋艦ですがね」

山城
「既に艦齢は５０年…朝鮮民国海軍では一番長く在籍している軍艦だ」

佐野
「日本だと…三笠に匹敵する程です。あとは畝傍、春日、日進…と言った具合ですね」

山城

「それ故に、整備出来るドックが少ない…今回は偶々、整備出来るドックが塞がっていたから、日本のドックに回した…と言うわけさ」

シルヴィア
「ふむ…事情は解ったが…それで、何をしに行く？」

山城
「決まっている。艦魂に会うんだ」

ヨンイル（迎日）艦内

コンコン

「はい、どうぞ。開いてますよ」

山城
「お邪魔します」

「あらあらあら、珍しいわね…背も伸びたみたい…どれどれ」

そう言いながら立ち上がると、山城の前に立ち、背を比べる。

「うん、私を越したわね…あら、ごめんなさい、紹介がまだだったわね。ヨンイル型巡洋艦のヨンイルよ」

佐野
「『天城』艦橋士官の佐野中尉です」

シルヴィア
「シリルティア海軍連絡士官のシルヴィア。階級は中佐」

ヨンイル
「あらあら……ところで、あの『元帥の孫』さんは元気？」

山城
「年末から正月まで一緒にいましたが…はい、元気ですよ」

ヨンイル
「そう…それで、私に何か頼みたい事でもあるの？」

山城
「えぇ…先ずは相談を聞くぐらいで結構です」

ヨンイル
「あらあら、よほど頭を抱える事なのね…話してみてくれる？」

山城
「はい…実は……」

ヨンイル
「なるほど…世界は違うけど、同世代の艦魂６人ね…それはあなたも頭を抱えるわね」

山城
「はい、自分の不徳と致すところでして…どうですかね？」

ヨンイル
「そうね…性格云々は置いておくとして、問題は思想面ね…致命的問題だわ」

山城
「えぇ…ですから、ヨンイルさんに彼女達をどうにか出来ないかと思いまして…」

そう言いながら、山城はヨンイルを見た。
実際、彼女は朝鮮民国海軍だから、所属は違うのでお願い（あるいは相談）しか出来ない。
また、実質上の階級は彼女が上位（ちなみに彼女は少将）であるから、断れれば素直に退くしかない。

ヨンイル
「ふふふ…それも面白いわね。良いわ、当分新人も入ってこないし、徹底的に鍛え直してあげるわ」

山城・佐野・シルヴィア
（（（笑った…何か含みのある笑いだ！！）））

ヨンイル
「先ずは彼女達の歴史常識をブッ壊すべきね…協力的な鶴月の艦魂は居るの？」

佐野

「あ、はい…今日は『授業』が少し遅れると言ったので…自分の艦に居るかと…」

ヨンイル
「そう…なら、その子の話を聞いて…資料も必要ね…徹底的にやっていいかしら?」

山城
「え、えぇ、どうぞ、お構い無く」

次号へ

271　古参艦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

272　遂に現れし謎の敵

2月23日

ヨンイル（迎日）による韓国艦艦艦の教育は……初回からスパルタであった。
先ずは彼女達の（歴史）常識をことごとくブッ壊し、反論する者は徹底的な毒舌艦砲射撃に晒され、初日から彼女達は消耗した。（山城談）
さすがに『お構い無く』と言ってしまった以上、さすがに文句は言えない。
だが……大丈夫か？…と思った。
そんな時……山城に届いた報告は「遂に来たか」と覚悟する物であった。

シリルティア王国王都ユニオン　日本大使館

杉下
「…遂に来たか…と言うべきだね」

山城
「まったくです…しかも、いきなり重爆を使うとは……」

事の始まりは昨日…朝早くから四発重爆がラバナスター～ユニオン間を偵察、その6時間後には急使をユニオンに空挺降下させていた。

杉下
「扶桑・山城と交代で入った駿河を見られていたのは痛かったな」

山城
「それ以上に…向こうが桃園宮少将達の世界からの奴等と言うのが嫌なところですが」

改装が終わった駿河は扶桑・山城と交代で駿河は異世界に入っていた。
2隻は定期点検中、他の艦艇も神戸に一度引き上げていた為、余計に駿河の存在が目立ってしまった。

山城
「しかし、賓も無い名前ですね…『世界合衆国アメリカ』とは…」

杉下
「そうだね…その上、何を勘違いしたのか、アーネリア陛下に桃園宮殿下達の引き渡しを要求するとはね」

山城
「…返答は？」

杉下
「3日後…残り2日…引き渡し以外の条件についても」

山城
「条件とは？」

杉下

「『我らの支配下に入り、我らを受け入れろ』…と」

山城
「単調で解りやすい……四発重爆が充分な脅しと考えた訳ですか」

杉下
「桃園宮殿下の引き渡しの返事ギリギリまで政府は協議するそうだ…しかし、三羽烏と石破防相は拒否するだろう」

山城
「確かに…あのお三方は絶対拒否するでしょうね。アーネリア陛下は？」

杉下
「今頃、シルヴィアさんに決意を語っている頃だと思うよ」

山城
「……なるほど、さて、そうなると、誰かが『喧嘩』を売る人間が必要ですね」

杉下
「相手がアメリカとなると、必ず彼らは二手三手を用意しているからね…しかし、それは難しそうだな」

山城
「なら、自分がやりましょうか？」

杉下
「山城中佐…しかし…」

山城
「杉下先輩は外務省所属ですが海軍予備士官…故に貴重な人材です。ですが自分であれば何かあっても大丈夫ですよ。良くてクビ、悪ければ腹を切る…自分の代わりは幾らでも居ますし」

杉下
「それは…そうだが……」

山城
「では、この話は終わりですね…おっと、時間がきましたので、また明日来ますね」

そう言うと大使執務室から出て言った。
杉下は溜め息を吐くと、一番上の引出しを開け、一枚の紙を出すとまた溜め息を吐いた。

杉下
「これはちょっと無理ですね…福本次官」

それは外務省経由で届いた海軍の『指令書』。
福本次官のサインの上に『山城には出来る限り無茶をさせるな』と書かれていた。

杉下
「彼を能力を認めている……証拠なんでしょうかね、これは？」

山城
（最果て…どうするか？）

多分、奴らは『ゲート』でこちらに来ている筈……うむ、これは難しい……。

シルヴィア
「お～ぬ～し～は～人の話を聞いておるのかー！！？」

山城
「どわっ！！」

耳元で叫ばれたので驚く山城。

シルヴィア
「まったく…まあ、お主の事だから、戦略でも考えているんだろうが」

山城
「あはは…（さて…四発重爆となると、予定より早く艦隊を進出させないとな…手遅れになる前に…）」

次号へ

272　遂に現れし謎の敵（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

273　絶対拒否

3月6日（現世界2月26日）
ユニオン　王城内　謁見の間

使者
「…つまり、我々の提言は受け入れられない…と？」

アーネリア
「我が国は独立国。何人たりとも、我が国の主権を犯す事は許されません」

毅然とした態度で拒否したアーネリアに使者は指を鳴らして合図した。
すると、いったいいつの間に用意していたのか、映写機とプロジェクターを持ち出して来た。

使者
「これを見れば陛下のお気持ちも変わるでしょう…始めろ」

山城
（何を見せるのかと思えば、趣味の悪い記録映画かい）

謁見の間の隅っこに居た山城も使者が見せた『映画』を見ていた。
多分、桃園宮少将の『大和帝国』とアメリカが戦ってアメリカが勝った映像や核兵器の実験の映像を映し出していた。

山城
（最果て…桃園宮少将は大丈夫かな……無理だな。それよりもアーネリア陛下達だな。陛下はあの映像を見ているからいいが、他の人間が耐えれるかどうか…）

実はこの謁見の間の様子は小型カメラにより、別室の桃園宮少将・高城大佐・佐野の3人に観られている。
だから、今頃桃園宮少将が「あいつを殺しに行く！」と言って、高城・佐野に止められていてもおかしくない。
また、アーネリア陛下は山城達が見たあの洞窟で発見した記録映像を見ているから、今さら驚く事は無いだろう…問題はその周りだが……。

山城
（まあ、後ろには今すぐにでも斬殺する為に襲い掛かりそうな人間が居るからね…）

山城の後ろにはシルヴィアが居る……先程からどす黒い殺気を使者に向けて放っているが…。
多分、山城より前に居れば完全に襲い掛かっていただろう。

山城
（御愁傷様…と言うべきか……はぁ…）

とにもかくにも、このままでは使者から「また次回」…と言いそうだ。
それは不味い…下手をすれば抗戦の意志を示したアーネリア陛下の思いが無駄になる。

山城
（……そろそろ出て行くか……気になる事もあるし）

アーネリア
（不味いわ……このまま進めば向こうの思い通りに…）

山城が気付いたのと同様に、アーネリアも既に気付いていた。
幾ら年齢が若くても、既に2年近くも王座に就いただけに、相手がこちらの抗戦意識を下げようとしているのは解った。
しかし、幾ら彼女でも、『核兵器』と言う物で脅す相手にどうして良いものかが解らない。
その時……

山城
「おやおや、大量殺戮破壊兵器を脅しに使うとは、穏やかではありませんね」

…山城が入って来た。

使者
「…部外者は入って…」

山城
「部外者ではありませんよ。そちらが要求した『桃園宮少将達の引き渡し』の当事者ですから」

相手の眉間がピクリと反応したのを山城は見逃さなかった。

山城
「いいですか、桃園宮少将達は我々大日本帝国が身柄を保護しております。ですから、アーネリア陛下に何を言っても無駄と言うことです」

使者
「な、なんだと？」

福本
「（やっぱり反応したか…さて）話は変わりますが、あの映像の核爆弾は多角的に撮っている事から見て、いったい何回実験を？」

使者
「既に４０回以上、水素爆弾は１０回程…威力は実証済みですよ」
自信満々の笑みを浮かべる使者。

山城
「なるほど…それほど実験を実行すれば、地球の状態が多少変化してくるでしょうね？」
そう山城が言った瞬間、使者の顔が真っ青になった。よほどバレてほしく無い秘密を握られた……と言ったところか？

杉下
「使者殿、大日本帝国政府より返答です。『そんなに欲しければ自分で来い』…だそうですよ」
見る間に真っ青だった顔が真っ赤に変わった。

使者
「…それは我々を『敵』と見なしたと言ってよろしいんですね？」

山城
「既にあなた方が『敵』と見なしてるでしょう？　それより、用事の方はお済みでは？」

……遠回しに「帰れ」と言っている。

使者
「…後悔するなよ、ジャップと劣等民族め」

そんな捨て台詞を吐くと謁見の間から出ていった。

アーネリア
「ありがとうございました」

山城
「いえいえ、何時もの事ですから」

福本（伊吹）
「上手い事、追い出したな」

山城
「やっぱり来ていたんですね、福本次官」

福本（伊）
「…気付いていたのか？」

山城
「あんな断り方を指示するのはあなただけですから」

福本（伊）
「まったく…しかし、なぜ解った？」

山城
「環境変化の事ですか？　簡単ですよ。下手に紐を弄れば、解けるどころか、余計に絡まる…予言の『滅びし大国』と言うのもポイントでしたけど」

福本（伊）
「目的は移住…自暴自棄に成らない限りは核兵器は使えない…か」

山城
「えぇ、ですが、今から厳重警戒態勢にする必要がありますね」

次号へ

273　絶対拒否（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２７４　出鼻を挫け！　前編

午後１０時頃　ユニオン近郊の海岸

３隻の潜水艦が浮上した。
３隻の艦名はアルゴノート、ナワール、ノーチラス。
３隻からは次々とゴムボートに乗った特殊部隊員が乗り込んで行く。
これぞ、アメリカお得意の特殊部隊を使った事前奇襲作戦である。

艦長
「これ程簡単な作戦は無い…何せ、敵の装備は第一次大戦レベルかそれ以下…我々の敵では無いな」

副長
「まったくです」

アルゴノートの艦橋で艦長と副長が喋っていた。

副長
「まあ、我々が容易に接近出来るぐらいですから、大した事は無いでしょう」

艦長
「うむ、だか……」

ボン！

突如、周りが明るくなった。

見ると、上空に複数の照明弾が輝いていた。

副長
「な、照明弾！？」

艦長
「バカな！　我々の接近を何時…」

艦長の言葉は途中で中断された。
何故なら、狙ったかの様に７５ｍｍ砲弾が艦橋に命中し、艦長・副長を絶命させたからだ。

隊長
「どう言うことだ！？　敵に…」

ゴガーン！！

爆発音に振り向いた特殊部隊隊長が見た物は砲弾で破壊されたアルゴノートの艦橋だった。

隊長
「くそ！　いったいどうなって…」

プキュン！

次の瞬間、今度はその隊長が絶命した。
眉間に銃弾を受けたからだ。

田中中尉
「撃て！」

ズドーン！！

三式中戦車の７５ｍｍ砲が火を吹き、アルゴノートの艦橋に命中した。

パーン！

間髪入れず、波木の９９式狙撃銃が敵隊長の頭を撃ち抜いた。
一式半自走砲の７５ｍｍ砲がナワールに命中弾を与える。
既に展開していたシリルティア王国軍砲兵隊や歩兵隊が野砲、山砲、重軽機関銃他火器が特殊部隊に向けて放たれる。
何せ、何も無い砂浜に上陸したばかりの無防備に等しい部隊。
しかも、照明弾の明かりにより味方は狙い易い……逆に敵はこちらの居場所は解らない。
そんな状況下ではいくら精鋭の特殊部隊でも敵う訳が無い。

波木
「田中中尉！　佐田曹長！　３隻目が潜って逃げます！」

田中中尉
「なに！　く、逃げられたら面倒な事になる！」

何せ、上からは『敵は１人、１機、１隻たりとも逃がすな！』とお

達しが出ていたからだ。

パタパタパタパタパタ……

波木
「これは…ヘリ？」

佐田曹長
「海軍さんのヘリか！？」

波木
「あ、はい！」

この時、現れたのは伊勢のＳＨ－６０Ｋ哨戒・対潜ヘリコプター。
潜水艦逃亡に備えて、発艦した部隊であった。
ＳＨ－６０Ｋは９７式短魚雷で離脱しようとしたノーチラスを撃沈した。
また、被弾・潜水不能になっていたアルゴノート・ナワールは三式中戦車・一式半自走砲の正確な砲撃を受けて撃沈された。
そして、上陸した特殊部隊は全滅と言う結果に終わった。

天城艦橋

佐野
「今村中将からです。『敵特殊部隊はほぼ全滅。潜水艦の乗組員は死亡・あるいは捕虜』」

山城
「うむ……予想通りだったか」

敵である『世界合衆国アメリカ』が特殊部隊を送り込む事は簡単に予測出来た。
何せ、山城達の世界なら山本・福本元帥の暗殺未遂、海自からのマキン島奇襲作戦や現代戦資料等で調べれば直ぐにわかった。
無論、海軍も暢気に過ごしていた訳では無い。
シリルティア王国付近の海底には音波探知機を設置し、それを一括管理・探知する場所をユニオンの海軍司令部に作っていた。
あとは、これが探知した物の正体を調べれば良いと言う訳だ。

佐野
「音波探知網に引っ掛かれば潜水艦は終わり…ですね」

山城
「これで海は大丈夫だろう…次は空だ」

佐野
「パターン化しては、逆に手に取った様に解りやすいですね」

山城
「だから、先人の経験は大事なんだよ。それを蔑ろにすれば手痛い事になるのさ」

次号へ

２７４　出鼻を挫け！　前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２７５　出鼻を挫け！　中編（前書き）

本来なら、前後編で終わらせる筈でしたが長く成りそうなので、三編になりました。

２７５　出鼻を挫け！　中編

午後１２時頃……

六発の重爆が翼を連ねて飛んでいた。
Ｂ３６ピースメーカー…アメリカが開発した六発重爆撃機（実はジェットエンジンを四発搭載しているが）。
Ｂ２９を超える機体には広大な航続距離を飛ぶ能力があった。

Ｂ３６機内

（なんと楽な任務だ。航空機も存在しない世界では、我々空軍は無敵ではないか！）

編隊内の特別仕様機に乗り込んだカーチス・ルメイ大将は満面の笑みを浮かべていた。
今回、Ｂ３６が搭載したのは焼夷弾と通常爆弾……数は１００機を超える。
また、この編隊の後ろには空挺部隊を搭載したＢ２９の輸送機タイプが控えていた。
航空機も無い世界の為、護衛は付けていない…あったとしても、高度一万では来る事さえ出来ない……筈だった…。

ゴワーン！！

機長
「な、どうした!?」

搭乗員
「み、右の６番機がいきなり爆発しました!!」

見ると、燃えながら真っ二つになったＢ３６が堕ちて行く。

ルメイ大将
「爆弾の信管が誤作動したか?」

この時は誰もがルメイと同じく事故かと思っていた。
しかし……

『こちら、１６番機!　右隣の機が爆発した!』

『３８番機より!　６６番機が墜落したぞ!?』

『５０番機!　隣の５９番機の主翼が爆発!!』

次々と爆発や墜落の報告がルメイの機体に集まってきた。

ルメイ大将
「なんだ!?　何がおきているんだ!?」

予想外の事態に、ルメイは戸惑った。
それの正体が明らかになったのは直ぐだった。

『こちら、４４番機！　敵機です！　は、速い！　なんて速さだ…機銃が…当たらない！！』

『これは…ジェット機だ！ジェット機が飛んでいるんだ！！！』

ルメイ大将
「な…敵に航空機は無い筈だ！　そんな…ジェット航空機が存在するわけが無い！！」

ルメイの否定が響いた。

確かに、シリルティア王国軍にジェット機どころか航空機の装備は（一部を除き）無い。
読者はお分かりだろうが、こうなればジェット機を保有しているのは日本軍しかいない。
そして、いまＢ３６ピースメーカー隊を襲撃しているのはタイフーン１機と雷風４０機。
タイフーンは空母征龍のガーラント少将機、雷風は空母富士の部隊だ。
最初に対空ミサイルによる攻撃で編隊外周を崩し、機銃攻撃に入る。

ガーラント少将
「全機に告ぐ。敵は動きの鈍い重爆撃機よ。素早く、確実に殲滅しなさい！」

『『『『『『『『『『『『了解！！』』』』』』』』』』』』

指示を出すとガーラントは操縦桿のミサイル発射ボタンに手をのせた。

ガーラント
（そう言えば、この『ミサイル』は凄いわね…Ｒ４Ｍとは段違いだわ）

彼女が乗っていたＭｅ２６２には２４発のＲ４Ｍ空対空ロケット弾が搭載していた……と言っても、誘導機能の無い命中率の悪いロケット弾を数で補っていただけなのだが…。

ピー！

ロックオン完了の音にガーラントは発射ボタンを押した。

バシュウ！

４１機から発射された対空ミサイルが白煙の尾を引きながら目標に向かう。

ルメイ大将
「撃て！　とにかく撃って奴らを近付けるな！！」

既に爆撃隊は大混乱に陥っていた。
ガーラント隊から発射された対空ミサイルの第一波は狙い違わず、

４１機を葬った。
第二波の４１発も『一発一殺』の如く、Ｂ３６を切り裂いた。
つまり、ルメイ達にとっては予想外の攻撃で爆撃隊の約3分の1が消滅したわけだ。

搭乗員
「3番機撃墜されました!!」

ルメイ大将
「いったい、どうなっている!!　どうなっているんだ!!?」

搭乗員
「ひぃぃぃ!　て、敵機接近!!」

機長
「撃て!　近付け…」

ドルルルル!!

ガンガンガンガンガンガンガンガンガン!!

操縦室に撃ち込まれた２７ｍｍ機銃弾はルメイ大将の身体にも命中した。

西部戦線で爆撃機迎撃にあたった事の有るガーラントにとって、特別仕様機を見付ける事など容易だった。
実際、この機体が墜落した瞬間、編隊全体が動揺し、反転する機体が続出していた。

無論、今さら反転したところで、ジェット機の魔の手から逃れる事など不可能だが……。

次号へ

２７５　出鼻を挫け！　中編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

276　出鼻を挫け！　後編

同時刻……

タイフーンから発射された対空ミサイルはＢ２９の胴体を貫いき、真っ二つにした。
同じ光景が付近の空域で展開されていた。
そんな中、一部のＢ２９から多数のパラシュートの華が開いた。

ハルトマン
「こちら、ハルトマン隊。悪魔が舞い降りた。繰り返す、悪魔が舞い降りた」

『悪魔が舞い降りた』…これは空挺部隊の展開を示すコードネームであった。

その頃……地上

通信兵
「上空の味方機より連絡！　敵空挺開始！！」

今井
「よし！　サーチライト照らせ！　照らすんだ！」

蓄電池や発電機などを積載し、日本製トラックに搭載した大型・中

型サーチライトが上空を照らし出す。
その光にはパラシュートを開いた空挺兵を照らし出す。

今井
「撃て！　空挺中の敵兵は無防備だ！　地面に足を付かせると面倒だぞ！　撃て！！」

ダダダダダダダダ！
ドドドドドドドドド！
ダン！ダン！ダン！ダン！

重軽機関銃、歩兵小銃、マシンガン、ショットガンなど上に撃てる銃火器を出来る限り使用して空挺部隊を迎え討った。
一方、迎え討たれる空挺部隊は堪ったものではない。
何せ、空挺中の空挺兵程無防備な物は無い…しかも、パラシュートの紐やパラシュート自身に当たればそれは致命的で有る。
だからと言って、下手に動かせばパラシュートの特性上、これも危ない。本来なら、こう言う時こそ制空権を確保するべきだった…しかし、シリルティア王国の技術差と夜間作戦と言う上層部の慢心が彼ら現場に多大な影響を与えてしまったのだった。

陸自隊員
「物凄い光景ですね」

今井
「あぁ…」

夜だからマシかも知れないが……昼間ならもっと凄かったであろう

……。

今井
「生存者を捜そう…こんな中でも生きている…」

通信兵
「大変です！　一部母機が進路を変更！　全機撃墜しましたが、２個小隊以上の部隊が降下、ユニオンに向かっている模様！」

今井
「なに！　くそ、総員乗車！　迎撃する部隊はいないのか！？」

通信兵
「ローエン大尉の中隊にユリア隊長の親衛隊、坂本少尉・近藤准尉のパンター、大西伍長が迎え討つそうです！」

今井
「そうか…ローエン大尉とユリア隊長の部隊は国王軍の中でも実戦経験豊富な部隊だ…坂本少尉のパンターもいるから簡単に崩れる事は無いと思うが…とにかく、急ぐぞ！」

今井中尉は１０式戦車に乗り込むと一部部隊を引き連れ、ユニオンへと向かった。

ローエン
「擲弾筒！　照明弾を撃て！」

ポン！

ヒュルルル……

ボウ！

照明弾により照らし出されたのは敵の姿。

ローエン
「全火器、撃て！」

ユリア
「こちらも全火器を使用しなさい！」

火器の発射炎が点いては消え、曳光弾の弾道が輝いて見える。
そんな双方撃ち合う状況下の中……

近藤
「ええい、離せ！」

大西
「だから！　パンターが突出したところで、あまり変わりませんって！　それどころか、バズーカで殺られますよ！」

近藤
「なら、お前が守ればいいだろう！」

大西
「このレミントンＭ７００カスタムは狙撃銃、Ｍｋ２３ソーコムは拳銃！　サブマシンガンも持たない歩兵が出て護衛したって防ぎきれないよ！」

近藤
「やる前から無理と…」

坂本
「准尉！　痴話喧嘩するなら手伝いなさい！」

近藤
「っ！　了解！」

漸く終わった痴話喧嘩に大西はため息を吐くと、直ぐ様レミントンを構える。
指揮を執る指揮官を見付け、慎重に狙い撃つ……これを繰り返す。
この間もパンターから７５ｍｍ７０口径砲と砲塔・車体の車載機銃が唸る。
照明弾が再び地上を照らした時……信号弾が上がった。
今井中尉率いる部隊が漸く到着したのであった。

次号へ

２７６　出鼻を挫け！　後編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

277　出鼻は挫けど…

翌日……3月7日

天城艦橋

佐野
「…と言うわけで、B36だけでも90機以上…B29も同数叩きました。空挺部隊も殆どが空挺中に…」

山城
「そうか……出鼻を挫いたとは言え、どうもな…」

佐野
「はい…」

あのB29の大きさからみて、輸送機型なら60名以上の人間が乗り組めた筈……多分、一個師団規模は運んだだろう……しかし、半数以上は迎撃された上空で……

山城
「…他に報告は?」

佐野
「いえ……本艦のレーダーと富士・征龍を動かしたのは吉と出ましたね」

山城

「あぁ…アメリカは始めから戦う気が有る時は直ぐに動く…立ち上がりは遅いが、最初からなら小国を塵にするぐらいなら一晩でやる国だからな」

佐野
「まったくです」

日本本土空襲作戦（アメリカ側ヘルファイヤー作戦）をやろうとするぐらいの国だ……いくら自棄に近い作戦でもやった国だからこそ、やりかねない。

山城
「空襲・空挺作戦、特殊部隊による襲撃作戦が失敗に終わった以上、奴等は本腰を入れるぞ」

佐野
「アメリカ艦隊ですね？　それも大部隊でしょう」

山城
「多分な……それよりも、敵側の『ゲート』は見付かったか？」

佐野
「もう少し時間は掛かるでしょう。ですが、空襲・空挺部隊の進路はレーダーで有る程度は解っていますから…」

風華
「失礼します。偵察に出ていた征海（Ｐ３Ｃ）がゲートを発見しました」

佐野

「…案外早く発見出来ましたね」

山城
「あぁ…次は潜水艦で監視だな…今の手勢で足りるかな？」

佐野
「福本次官に潜水艦の増援を頼んでみては？　さすがに次官も事の次第は解って…」

風華
「その事ですが…その福本次官本人から潜水艦を回すと先ほど通信がありましたよ？」

山城・佐野
「「早っ！！」」

風華
「一応、返事は保留しておりますけど…どうします？」

山城
「…お願いします…って言っといて」

風華
「わかりました」

そう言うと風華は艦橋から出て行った。

山城
「…本当、福本次官って有る意味怖いな」佐野
「そうですね」

山城
「さて…シリルティア海軍と協議して、迎え討つ準備をしないとな」

シルヴィア
「やっと出番か！？」

佐野
「…中佐、普通に出て来てほしいのですが…」

シルヴィア
「どうでもいいであろう。それより！　敵をどうはり倒すか考えようではないか！！」

佐野
「…まあ、それはそうですけど…」

シルヴィア
「それで、山城。何か考えはあるか？」

山城
「……それを今から考えるんじゃなかったの？」

ツッコミを入れる山城だった。

一方……その頃……

「……壊滅だと？　空爆部隊もか？　我が親友ルメイ大将も死んだだと？」

空軍士官
「は、はい…」

報告に来た空軍士官は震えながら返事をした。

空軍士官
（この人の事だ……今回はいったい何人の人間が闇に葬られるだろうか……）

「……わかった。下がれ」

空軍士官
「はい」

内心ホッとした空軍士官が部屋から出て行った。

「…ふん、失敗したか…しかし、まさか、ルメイが死ぬとは思わなかった…」

そう呟くと、立ち上がった男はニヤリと笑った。

「ならば……海軍の出番だな……フッフッフ、アーハッハッハッハッハッハッハ！！」

……悪魔の様に笑うのであった。

再び……天城

佐野
「失礼します」

山城
「ん、佐野か、なんだ？」

艦長（兼主席参謀）室で作戦を考えていた山城に佐野が入って来た。

佐野
「はい、撃沈した潜水艦から回収したカレンダーなんですが…」

そう言いながら渡されたカレンダーに山城が反応した。

山城
「１９４６年…しかも、２月……」

佐野
「艦長…いえ、先輩、自分は狐に騙されている気分です……どうゆう事ですか！？」

山城
「（桃園宮少将達が転移した年代が１９４２年だから）……ふむ、

あり得ない事は無いか」

佐野
「え…あの…」

山城
「あぁ、すまんすまん…これで少しは戦い方が検討出来そうだ」

佐野
「…はあ…戦い方を…」

山城
「心配するな。なんとかしないと、あいつに殺されるからな」

次号へ

277　出鼻は挫けど…（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

278　敵戦艦と敵空母

3月11日

敵方の『ゲート』を見張っていた伊5潜水艦（日本海軍潜水艦）が敵駆逐艦隊進出を伝えて来たのは10日午後5時頃だった。
そこから、伊5潜水艦はソナー等の探知機器を使い、逐次情報を送信してきた。
無論、何度か駆逐艦に追われた様だが、第二次大戦時より高性能化したスペックを活用し、何度も駆逐艦を巻いていた。
そして、伝えられた情報は山城達に確りと届いていた。

午前1時……天城艦長（兼主席参謀）室

山城
「さて…敵艦隊の事はある程度だが、伊5潜水艦のお陰で収集する事が出来た……問題はこれだな」

そう言うと、2枚の写真を机に置いた。

佐野
「戦艦と空母……？」

高城
「まさか…噂の『ユナイテッド・ステイツ』と『アラモ』か？」

山城
「その通り…艦名は通信を傍受して判明した…鷲井、どう思う？」
正面に居た級友は戦艦の写真を何度も見ると結論を出した。
鷲井
「自分的に見て間違い無い…こいつは４６ｃｍ…１８インチ搭載艦だ」
佐野
「な…このモンタナ型戦艦の化け物に４６ｃｍですか！？」
佐野の言う通り、３連装主砲塔４基は下手をしたらモンタナ型と見間違えてもおかしくは無い。
高城
「確かに『ユナイテッド・ステイツ』は４６ｃｍ砲搭載艦だとゆう情報が入っていたが…まさか、本当に作ったのか…」
鷲井
「まあ、不可能じゃあないな…２０年程研究する時間と金と資材と熱意が有ればな」
山城
「そうだな…次はこっちだ…空母『アラモ』、これが航空部隊の旗艦の様だな」
佐野
「この大きさだと、搭載機数は１００を越えますよ！？」

高城
「『アラモ』はエセックス型より重防御・搭載機数を多くする、と諜報部が言っていましたから…おそらくは…」

鷲井
「…おうおう、こんな小勢に大兵力投入ね、嬉しくて涙が出てくるよ」

山城
「おいおい、それは皮肉か？」

鷲井
「皮肉以外の何に聞こえるんだ？」

佐野
「あの…話が中断していますが…」

山城
「そうだな…通信量と写真から見て、敵艦隊は戦艦４隻、空母９隻を中心とする艦隊だ」

佐野
「えーと…こちらの空母は富士、征龍、飛龍、龍驤…準空母は竹島……実質的に５隻ですね」

鷲井
「ヘリ空母の日向、伊勢、天河を加えても８隻……向こうのアラモ以外は？」

高城
「この写真を見る限りは残りの空母はエセックス型だね」

佐野
「わあ～、死刑宣告みたいな物ですね」

鷲井
「いや、死刑宣告その物だな、うん」

山城
「…お前ら、いくら何でも悲観的以上の問題だぞ」

高城
「だが、敵はこれ程の戦力を見せている……悲観的にもなるさ」

山城
「何をいってるんですか、敵がここまで我々に見せている事自体が油断と慢心ですよ」

高城
「……え？」

意外と言わんばかりの顔に山城は答える。

山城
「敵が手勢について、ここまで見せているのは、『この戦力を見せれば泣いて降参してくるだろう』と思い、『例え刃向かって来たとしても、この戦力なら叩き潰せる』と思っている…だから、油断と慢心と言ったんですよ」

高城
「…じゃあ、君はこの艦隊を叩き潰す気なのかい！？」

山城
「最低、敵の主力艦艇は沈めます。まあ、戦艦が４隻だったのは意外でしたが…どうせ、解体されたか、戦没したんでしょう」

高城
「……」

高城は言葉が出なかった。
それほど年が変わらない彼はあの艦隊を（敵主力艦艇だけとは言え）叩き潰すと宣言したのである。
良くて夢見事、下手をすれば狂ったと思われてもおかしく無い。

高城
（それを実行すると言うが……可能なのか？）

そう思わざるおえなかった。

次号へ

２７８　敵戦艦と敵空母（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

279　絶対生き残れ

3月12日

敵艦隊集結に満を持した第零艦隊はシリルティア海軍及びネイラーン海軍（アルスラーン陛下より出撃提言が有り参加）とは別行動（速度等の関係）をとり、アメリカ艦隊に向かっていた。

天城艦内会議室

山城
「天城さん、全員揃ってますか？」

天城
「あぁ、艦長か。うむ、全員揃っているぞ」

山城が会議室に入ると早速天城に訊いた。
ちなみに、山城（戦艦）と愛宕達には事前通知してあるので今回のこの集会には参加していない。

山城
「さて…えーと…自己紹介は要りませんよね？」

「既に天城さんから聞いております」

「駿河姉さん、私達の紹介が未だだよ？」

「む、そうだった…駿河型戦艦の駿河です」

両腰に2振りの日本刀を差す駿河。

「富士型空母の富士です。不束な姉さんで申し訳ございません」

駿河

「富士、それは私を辱しめてるのか？」

富士

「いいえ」

しっかり者（＋少し腹黒？）の義妹、富士と少し抜けてる（＋武道一筋・双刀）の義姉、駿河…と言ったところか？

山城

「まあまあ…先ずは初めまして。そして、よろしくお願いします」

「じゃあ、次は私ね。元インディアナポリス…今は蔵王だけど……と、とにかく、インディアナポリスよ！」

両腰に二挺の拳銃を帯びたインディアナポリスこと蔵王。

「次は私ですね。ワスプこと征龍です」

一見、普通のおとなしい娘…なのだが、胸は大きい…山城は気にして無いが…Eサイズか？

「あたいはミンゴーだよ…今は黒潮だけど…」

水兵服の金髪少女がミンゴーこと黒潮だ。

山城
「自己紹介ありがとうございます…さて、本題に入りましょう」

天城
「そうだな…と言っても、丸解りだがな」

山城
「えぇ…明日、我が第零艦隊は敵艦隊と激突します。多分、今までと違い、敵が敵だけに激しい戦いになるでしょう…ですが、あなた方は預かった自分が責任を持って守ります…ですから、出来る限りの無謀な事はしないで下さい」

駿河
「難しいな…無謀とは言え、時にはやらなければならない事はあるが…特に今回はその典型的な例だぞ？」

山城
「確かに…敵は戦艦こそ同数ですが、あとの戦力は圧倒しています…ですが、既に自分の中には作戦が有りますのでご安心を」

ニコリと笑うと手短に、詳細を省いて説明した。

蔵王（インディアナポリス）
「…まあ、総力戦と言うのは解ったけど…」

富士
「高低差が激しいと言うか…何と言うか…」

征龍（ワスプ）
「…本当に大丈夫なんでしょうか？」

飛龍
「大丈夫だ。この艦長の能力は何度も作戦を立てて、成功させているからな」

日向・伊勢
「「そうだ、そうだ」」

天城
「…艦長はどう思います？」

山城
「自信はあるが、やってみないと解らない…無論、対応策は幾つか考えているよ」

駿河
「…あまり言いたくありませんが、お手並み拝見させていただきま

す」

山城
「えぇ、どうぞ」

シルヴィア
「山城、これでよかったのか？」

山城
「あぁ、それでいいよ」

シルヴィアが持って来たのは……一升瓶。

黒潮（ミンゴー）
「なに、それ？」

山城
「我が日本が誇る元帥が、勝利の祝い酒と言って購入した地酒ですよ」

富士
「つまり、これが飲みたかったら生き残れ…と言う事ですか？」

山城
「はい…遠回しに言うとそうなりますね」

竹島
「ふん、あんな目に比べれば容易いもんじゃない！　絶対、生き残ってあの時の愚痴を聞いてもらうわよ！」

鶴月
「もう…山城さん、お願いします」

山城
「まあ、愚痴ぐらいなら付き合いますよ」

次号へ

２７９　絶対生き残れ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２８０　再びの対米戦　１

３月１３日

天城艦橋

小澤中将
「偵察機からの報告は未だか？」

山城
「未だですね。まあ、敵を騙す為に伊５潜水艦を使え無いのが残念ですが」

小澤中将
「この作戦を立てたのは主席参謀だろう？」

山城
「だから残念だと言ったんです」

征龍から偵察の『雷雲』（雷風の偵察機仕様型。今回は電子作戦機型も搭載）６機を出撃させ、敵艦隊を捜索中である。
伊５潜水艦には戦闘開始まで待機してもらっている。

小澤中将
「早く見付からんかな？　このまま敵が艦隊を見付けて、攻撃にあうのは願い下げだ」

山城

「それは自分もです」

佐野
「小澤中将、艦長、敵偵察機です。機種はＡ１スカイレイダー」

山城
「先に見付かったか…まあ、いいか…」

小澤中将
「うむ、全艦戦闘用意」

「全艦戦闘用意。タイフーン、雷風、水風、烈風、紫電改も発艦準備」

風華
「了解」

山城
「佐野、偵察機の方は未だか？」

佐野
「えーと、未だみたい……訂正！　雷雲４番機、敵艦隊発見！　戦艦４、空母９、重巡８、軽巡８、駆逐艦３０…攻撃隊発艦中！　映像きます！」

艦橋のスクリーンに雷雲からの映像が映し出される。

山城
「ふむ…敵はレプシロ機とジェット機の混成だな…鷲井、どう思う？」

艦橋の隅で暇を持て余していた鷲井に山城が訊いた。

鷲井
「あぁ、間違い無い。ジェット機はＦ８６セイバーの艦上機仕様、レプシロ機はＦ６ＦとＡ１スカイレイダーの混成だ」

小澤中将
「何故、混成なんだ？」

鷲井
「滞空時間の違いです。初期のジェット機は燃料を大食いします。ですから、Ｆ８６で敵に殴り込み、防空網を乱し、燃費の良いレプシロのＦ６ＦがＦ８６の開けた穴の維持をする…と言う運用だと思われます」

山城
「エセックスからは３０機ほどですね…Ｆ８６とＦ６Ｆ、Ａ１スカイレイダーの混成か…ユナイテッド・ステイツは５０機ほどですか…ふむ」

小澤中将
「迎撃手順の変更の必要はないか？」

山城
「はい。目には目を、歯には歯を…ですよ」

佐野
「雷雲、一時離れます」

山城
「迎撃手順は打ち合わせの通りだ。艦戦隊は準備出来次第、順次発艦せよ」

1時間後……

佐野
「レーダー探知…敵攻撃隊です！」

山城
「最初の迎撃はどっちだ？」

佐野
「ガーラント隊です…タイフーン及び雷風隊、敵と交戦開始！」

山城
「対空ミサイル戦用意。敵攻撃隊を迎撃する。さて、敵はどんな顔をするかな？」

山城はニヤリと笑いながら事の成り行きを見ていた。

その頃……ガーラント隊

ガーラントのタイフーンと富士の雷風隊は敵先鋒隊…Ｆ８６セイバー隊と接敵した。
数は６８機…対しガーラント隊は４１機…２７機の差。

しかし、セイバーは第1世代、雷風・タイフーンは第４（，５）世代……速度もセイバーは音速を越えておらず（それでも１１１０ｋｍ／ｈ）と、マッハ2を叩き出す雷風・タイフーン。
しかも、未だセイバーに装備されていないが、雷風・タイフーンは対空ミサイルがある。

ガーラント
「全機、今回は本格的な対戦闘機戦よ。油断したら死ぬわ！　油断しないように！」

『『『『『『『『『『『了解！！』』』』』』』』』』』

フルスロットで敵編隊に接近したガーラントは直ぐにレーダーを使い敵機をロック、ミサイルを発射した。

９時３７分４０秒……戦いの幕が切って落とされた。

次号へ

２８０　再びの対米戦　１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２８１　再びの対米戦　２

ガーラント隊によるＦ８６セイバーとの戦いは一方的な展開となった。
特にミサイルを有するタイフーン・雷風の必中必殺ミサイル攻撃の手から逃れられず、また逃れる手段も無く、ただの的と化していた。
僅か１回のミサイル攻撃により戦力の半分以上を失ったセイバー隊は混乱したままガーラント隊に襲われた為、あっさりと壊滅した。
無論、スペックの差があった事も事実だが…。

天城艦橋

佐野
「…案外あっさりと終わりましたね」

山城
「大方、最初のミサイル攻撃で編隊長機が撃墜されたんだろな」

レーダースクリーンで様子を見ていた山城はそう結論を出した。
そうでなければ、一方で立ち向かい、一方で逃げ出そうとする、と言う混乱状態は出来上がらない。

風華
「艦長さん。敵攻撃隊の後続です」

佐野

「艦長、どうします？」

山城
「ガーラント隊はミサイルを余らしているのか？」

佐野
「はい」

山城
「…よし、対空ミサイル搭載艦で後続を叩き落とす」

佐野
「了解。レーダー連動開始します」

扶桑・山城・愛宕・金剛・足柄ＩＩを始めとしたミサイル装備艦がレーダーを連動し、各艦で照準をあわせていた。
この時、Ｆ６Ｆ６８機、Ａ１スカイレイダー１５４機…計２２２機、これがアメリカ艦隊の攻撃隊本隊である。
そして、照準が完了した時、一斉に対空ミサイルが発射された。

３０分後……戦艦ユナイテッド・ステイツ艦橋

司令官
「バカな！　第一次攻撃隊が壊滅だと！　どう言う事だ！？」

士官

「ほ、本官に訊かれましても…」

旗艦ユナイテッド・ステイツ艦橋では大戦果を挙げたであろう第一次攻撃隊の連絡により、勝利への余裕から一転、予想外の出来事による驚きと混乱の中にあった。

司令官

「敵は戦艦４隻、空母４隻に軽空母３隻、重巡洋艦２隻、航空巡洋艦１隻、軽巡洋艦４隻、駆逐艦５隻の貧弱な艦隊では無かったのか！？」

士官

「確かにそうです…ですが、敵はセイバーより速いジェット機を使い、小型高性能の誘導ロケット弾で先鋒隊と攻撃隊を迎撃したそうで…」

司令官

「バカな！　ジャップと劣等民族にそんな物が存在する訳ないだろう！　例え存在していたとしても、２９０機の攻撃隊が僅か３０機しか帰って来ない理由にならんぞ！」

士官

「そう言われましても……とにかく、第二次攻撃隊の様子を見るしかありません…」

士官は困惑しながら、そう答えるのが精一杯だった。

佐野

「ガーラント隊全機無事着艦しました」

山城
「よし、富士に連絡。ガーラント隊は対艦兵装に装換。各艦に通達、交代を上げるんだ。ハルトマン隊の準備は完了しているか？」

佐野
「わかりました！　ハルトマン隊は準備完了です！」

第一次攻撃隊の迎撃は容易だった。
中短８発程を装備出来るタイフーン・雷風は今回６発（中射程２、短射程４）を装備し、セイバー隊との交戦で中射程ミサイル２発（あるいは１発）を使用したガーラント隊は本隊攻撃にもミサイルを使用した。（速度差が有るためにあえて使用）
この為、２２２機いた攻撃隊はガーラント隊のミサイルにより、約３分の１に及ぶ１７０機以上が餌食になった。
後は艦隊からの対空ミサイルが攻撃隊を襲った訳だが……。

山城
「さて…次は水風と飛龍隊か…気を引き締め無いとな」

第二次攻撃隊には龍驤の水風隊と飛龍の烈風・紫電改隊が迎撃する。
竹島及び天河には水風が搭載されている。
本来なら『ヘリ用航空巡洋艦』の天河は今回のみ、水風の乙型１２機を搭載していた。
竹島は同型を６機搭載しており、２隻共、敵艦隊攻撃の準備をしていた。

佐野

「艦長、敵第二次攻撃隊接近！　龍驤の水風隊、セイバー隊を迎撃します！」

佐野
「わかった。防空指揮所に上がるから、後は頼んだぞ！」

佐野
「はい！」

次号へ

２８１　再びの対米戦　２（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２８２　再びの対米戦　３

第二次攻撃隊のＦ８６セイバー隊パイロットは優々と飛んでいた。

パイロット１
『第一次攻撃隊は仕事を終わらせたそうだぜ』

パイロット２
『おいおい、俺達の獲物は残ってるのかよ？』

パイロット１
『さあな』

パイロット３
『お！　レーダーに反応！　敵機だ！』

パイロット２
『ヒュ～～、第一次攻撃隊の食い残しだな！　撃墜してやる！』

パイロット３
『俺の分も残しとけよ！』

……無線上には陽気な会話が交わされているが、彼等は第一次攻撃隊の末路を知らない。
しかし、直ぐに『現実』を直視する事になるのだが……。

パイロット１
『おい、敵もジェット機だぞ！』

パイロット2
『ふん！　どうせ、我々の劣化コピーに決まっている！』

パイロット3
『ん、なんだ？　ロケット弾が接近してくるぞ？』

パイロット2
『は、真っ直ぐにしか進ま無いロケット弾なんぞ…』

パイロット1
『うわ！　ロケット弾が…追い掛けてくるぞ！？』

パイロット3
『は、速い！　ダメだ！　逃げ切れない！』

……次の瞬間、この3人のパイロットを始め、F86セイバーの大半が撃墜された。
やはり、追尾能力のあるミサイルの前ではセイバーは標的でしか無かった。

大澤
「岡田、全機付いて来ているか？」

岡田
『はい。大丈夫です。ヴィクトリアさんも先輩の後ろにいますよ』

大澤

「余計な事は言わなくていいんだよ！」

大澤率いる飛龍戦闘機隊２６機は敵攻撃隊の本隊へと向かっていた。

ヴィクトリア
『…あとどれくらいなのですか？』

大澤
「もうそろそろだと思うが…」

風華
『皆さんに報告いたします。水風隊は敵先鋒隊の迎撃に成功しました。現在、敵本隊を攻撃中です』

大澤
「よし、わかった。誘導頼む。全機戦闘用意」

一通りの指示を出すと、風華の誘導に従い飛行、遂に敵本隊と接敵した。
この頃には水風隊の迎撃もあり、護衛のＦ６Ｆは半数程度になっていた。

大澤
「よし…いいか、先ずはミサイルを使用。その後は自由戦闘だ。但し、周囲警戒は怠るな…突撃！」

飛龍戦闘機隊が戦場に乱入した。

２０分後……

佐野
『敵機３０機接近！　２９０機から大分減りましたがね』

山城
「水風２５機がミサイル４発で１００、飛龍戦闘機隊がミサイルで１０４、機銃で２６機、逃亡３０機…うん、計算は合うな」

佐野
『どうします？　ミサイルでおとしますか？』

山城
「いや、対空砲火で叩き落とす」

佐野
『わかりました…敵編隊さらに接近します！』

刻が過ぎる事に接近する敵編隊をジッと睨む山城。
その後ろでは、シルヴィアが伝声管の前で待機していた。

山城
「……よし、全艦対空戦闘開始！！」

シルヴィア
「撃て！！」

ドン！ドン！ドン！ドン！
ブォォォォン！

ダダダダダダダダ！
タンタンタンタンタン！

高角砲、速射砲、ＣＩＷＳ、自動稼働機銃、２５ｍｍ・４０ｍｍ機銃が一斉に火を吹く。
正確な連続射撃を加える速射砲・ＣＩＷＳ・自動稼働機銃が敵機を僅か数十秒で落とす。
高角砲・２５・４０ｍｍ機銃が弾幕射撃で敵機を絡め取る。
そんな光景が艦隊付近の空で見受けられた。
だが……

佐野
『艦長！　敵数機が弾幕を突破！　飛龍に向かいます！！』

山城
「なに！」

飛龍の方向に目を向けると、５機のスカイレイダーが飛龍に向かっていた。

飛龍艦橋

水兵
「て、敵機接近！！」

山口
「何を慌てている！　本艦が狙われるのは当たり前だ！　それより叩き落とせ！」

山口艦長は解っていたが、飛龍はこの艦隊の中では改装を受けておらず、弱そうに感じる。
無論、山城も解っていたから、鳥海以下４隻の駆逐艦を直衛に配備していた。
しかし、やはり狙われた。

ドン！ドン！ドン！ドン！
ダダダダダダダダ！

山口
「どうだ！？」

水兵
「…敵機４機撃墜！　１機突っ込んで来ます！」

山口
「取り舵一杯！　回避！」

操舵手が必死に舵輪を回す。
しかし……

水兵
「駄目です！　取り付かれました！　敵機直上！　急降下！！」

山口
（不味い！）

今の飛龍は格納庫で燃料一杯の流星が並んでいる。
更にスカイレイダーは大型爆弾を２つも抱えている。

このまま被弾すれば……

ダン！

士官
「あ、や、矢萩副長！？」

その時、矢萩が動いた。

矢萩
「まったく！　最初にこれを扱う事になるのかよ！」

そう言いながら、小脇に抱えた５１式携帯地対空ミサイルを見る。
『念のため』に載せて、艦橋の隅に置いておいたが……。

矢萩
「世の中解んねー！！」

そう叫びながら対空ミサイルを構えると、スカイレイダーに狙いを定め、引き金を引いた。
発射されたミサイルはスカイレイダーに向かい、空中でスカイレイダーと『正面衝突』し、爆散した。

天城防空指揮所

佐野
『飛龍無事です！　敵機全機撃墜！』

山城
「よかった～」

あれはマジで危なかった……うん、マジでヤバかった。

山城
「佐野！　富士に連絡！　ハルトマン隊を出せ！」

佐野
『了解！』

次号へ

２８２　再びの対米戦　３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

283　再びの対米戦　4

征龍からハルトマン機と雷雲（電子戦仕様機）、富士より雷風が発艦した。
マッハ2で飛行は出来ないが、巡航速による飛行（それでも高速）し、敵アメリカ艦隊へと向かった。
反撃開始であった。

旗艦ユナイテッド・ステイツ艦橋

司令官
「バカな…第二次攻撃隊も壊滅しただと!?」

士官
「は、はい…帰還したのは先に引き返した30機のみです…」

司令官
「く…攻撃隊は何処まで接近した!?」

士官
「帰還した30機は迎撃機の迎撃で引き返しましたが……残り30機は敵艦隊まで接近した模様です」

司令官
「…第三次攻撃隊を準備しろ！　第二次攻撃隊が敵艦隊まで接近出来たんだ！　第三次攻撃隊なら損害を与えられる！　待機部隊に第一次・第二次攻撃隊の残存機と予備機を使って編成しろ！」

士官
「は、はい！」

……言うは易しだが、実はこの時、２回の攻撃により、敵艦隊は壊滅するだろうと思われていたので、第三次攻撃の準備はされていたなかった。
この為、第三次攻撃隊を送り出す９隻の空母艦内格納庫甲板では大騒ぎになっていた。
慌てて待機部隊の機体に燃料を入れたり、予備機を組み立てたり、爆弾・魚雷を上に上げたり、帰還した第二次攻撃隊を収容したり…等々していた。
だが……そんな時間は実際無かった。

水兵
「レーダーに反応…て、敵機来襲！！　数は４０程度…速い！　超高速で接近して来ます！」

士官
「な、なに！？」

ハルトマン
「今頃ボク達に気付いても遅いよ！　みんな、打ち合わせ通りだよ！」

『『『『『『『『『『了解！！』』』』』』』』』』

エセックスを狙う8機と戦艦を狙う３２機（一隻に４機）が分離した。
この時、同行していら雷雲の電子戦仕様機が電波妨害波によるレーダー妨害と無線妨害を開始していた。
だから、攻撃隊に気付いて接近して来たＦ８６はたちまちハルトマン搭乗のタイフーンがミサイルで叩き落とした。
そして、雷風は次々に対艦ミサイルを発射した。

水兵
「敵機より謎の飛翔体接近！」

士官
「なに！　距離は！？」

水兵
「本艦隊より約９０ｋｍ！」

士官
「そんな遠距離からだと！？」

水兵
「はい…高速で接近して来ます！」

士官
「…ええい！　射程距離に入ったら…」

水兵
「あぁ！　レーダー画面が…故障しました！」

士官
「いや…くそ、妨害されたか！」

そう叫ぶと慌てて窓に近付いた。
すると、先程まで遠くにいた筈の飛翔体がグングン近付いてくる。

士官
「司令官！」

司令官
「うむ、対空戦闘始め！！」

この指令に付近に展開していた艦艇の対空砲が火を吹いた。
しかし、飛翔体……ミサイルはそれを嘲笑うかの如く接近する。
まあ、これは当たり前で、高速接近するミサイルを第二次大戦レベルの火砲が落とせる訳が無い。
だから……

水兵
「ダメです！　防ぎきれません！　く、空母に当たります！！」

エセックス型８隻が必死に舵をきるが、無論、何の意味も無く……

ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！

水兵
「め、命中しました…」

士官

「くそ！　空母に連絡し…」

ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！

司令官
「な、なんだ！？」

水兵
「本艦も被弾しました！　先程の飛翔体約３０発が命中！　右舷高角砲群壊滅！！」

士官
「本艦や他艦の見張りや直衛機は何をしていた！　レーダーが効かなくても…」

そう叫んでいた士官は漸く気付いた。
無線用スピーカーからはベートーベンの『運命』の曲が響き渡っていた事にだった。

天城防空指揮所

佐野
『雷雲より連絡。『エセックス型空母・戦艦に対艦ミサイル命中。空母、飛行甲板使用不能』以上です』

山城
「さて、これで仕事はやり易くなったな…次はガーラント隊か？」

佐野
『はい。さて、あの装甲空母に効きますかね？』

山城
「それを試すのも一興さ」

次号へ

２８３　再びの対米戦　４（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２８４　再びの対米戦　５（前書き）

今朝の読売新聞（我が家で取っている新聞）、四面の政治面に陸上自衛隊東北方面総監部（今回震災の自衛隊前線司令部）に赴任した調整役の防衛省キャリア官僚の日誌が本日より掲載されています。「黙して語らず」の自衛隊……一歩下がった人間の日誌とは言え、読むに値する物と思います。

284　再びの対米戦　5

ユナイテッド・ステイツ艦橋

司令官
「空母の被害はどうだ？」

士官
「はい。レイクシャンプレーン、シャングリラ、アンティータム、ボン・ノム・リチャード、ボクサー、ハンコック、ワスプＩＩ…８隻共に飛行甲板は使用不可能です」

司令官
「む…応急修理で飛行甲板は使えそうか？」

士官
「実は…８隻共、攻撃隊の準備をしておりまして…大規模な火災が発生しています。また、敵の大型ロケット弾の炸薬は多かった様で…応急修理ではとても対応出来ないと…」

司令官
「くそ…味な真似をしてくれたものだ！　しかし、なぜ奴らはアラモを狙わなかったんだ？」

司令官の視線の先には攻撃を受けず無事なアラモが浮かんでいた。

士官
「それは解りません…ですが、今は早くエセックス型の消火を優先しましょう」

司令官
「うむ…ところで、レーダーと無線は使えるのか？」

士官
「無線は使えますが、レーダーは未だに妨害されています。ですから、対空監視を強化…」

水兵
「直衛機より連絡！　敵の第二次攻撃隊接近！　数は４０機程です！」

司令官
「噂をすればか！　戦闘機隊に迎撃させろ！」

水兵
「了解！」

ガーラント率いる第二次攻撃隊は火災を発生しているエセックス型８隻を無視し、８機を装甲空母アラモに向かわせ、残りは大回りして戦艦の左舷側に狙いを定めた。無論、対艦ミサイルが命中しても分厚い装甲は貫け無い。
しかし、対空砲や対空機銃を破壊するには充分だ。
だから、一艦に付き８機の雷風から発射された対艦ミサイルはそれぞれの艦の左舷高角砲群（機銃・機関砲を含む）をほぼ壊滅させた。

士官
「くそ！　右舷の次は左舷の対空砲群か！」

水兵
「あ！　アラモに敵機８機接近！　ば、爆弾投下！」

士官
「落ち着け！　水平爆撃だ！　そう簡単に当たりはせん！　例え当たったとしても、アラモの装甲甲板なら……！！」

ここまで言ってから士官はハッとした。
ここまでやる連中なら、水平爆撃でも確実に当てれるのではないか？
そして……あの装甲甲板を撃ち破る事も出来るのでは無いか？……
と。

今回、アメリカと戦うにあたって問題になったのは重装甲空母（つまり、アラモ型装甲空母の様な）と戦う時には、どう攻撃するのかが問題であった。
何せ、最終的に雷撃で撃沈するにしても、飛行甲板が健在であれば戦闘機を上げられて迎撃される。
しかし、効きもしない爆撃を何発投下しても意味は無い。
そんな時に鷲井は有ることを思い出した。
昔、検討・論議された……実は今でも水面下で検討・論議されているそうだが……バンカーバスターこと、地中貫通爆弾の海軍採用だった。
普通に聞けばなんとも無いが、実は裏があった。
つまり、元々が地下のコンクリート軍事施設や硬目標を攻撃する為に使われるバンカーバスターを戦艦や重装甲空母攻撃に使え無いかと考えたからだ。
ちなみに、こんな事を思い付いたのは当時大佐であった福本次官だ

ったりする。
そして、それを聞いた山城は直ぐに福本次官に連絡し、バンカーバスターを富士に積載したのである。
そして、バンカーバスターは……

ヒューーーン……

ドガーン！ドガーン！ドガーン！ドガーン！ドガーン！ドガーン！ドガーン！

……誘導装置の助けもあって、８発全部がアラモの飛行甲板に命中した。

水兵
「ば、バカな…あ、あのアラモの装甲飛行甲板を易々と…」

司令官
「ぐっ…早く消火しろ！　このままではいい的だ！！」

世界合衆国アメリカ海軍の象徴の一つであるアラモの被弾・損傷は艦隊に少なからず動揺を与えたのであった。

天城防空指揮所

佐野
「艦長、アラモにバンカーバスター命中、飛行甲板は使用不可能と報告がきました！」

報告に上がって来た佐野は興奮していた。
まあ、解らなくも無いが。

山城
「落ち着け、まだ完全に息の根を止めた訳じゃない……シリルティア・ネイラーン艦隊に出撃通達はしたか？」

佐野
「はい、ガーラント隊発進と同時に連絡しておきました」

山城
「うん、結構だ…こちらも第三次攻撃隊の出番だな」

佐野
「えぇ、飛龍隊の士気は高いですよ」

次号へ

２８４　再びの対米戦　５（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

285　再びの対米戦　6

旗艦ユナイテッド・ステイツ艦橋

士官
「司令官、アラモから返事がきました」

司令官
「うむ、どうだった？」

士官
「はい。あの爆弾は装甲甲板を貫き内部で爆発、火災の他に機関故障を発生させております。また、格納庫甲板の航空機は絶望的です」

司令官
「く…これではどうしようも無い……特にアラモ他、空母が使え無いとなると色々とな…直衛機の燃料も心配だ」

士官
「はい…とにかくここは空母を守る為、一度後退…」

水兵
「直衛機より連絡！　敵第三次攻撃隊です！　しかも、今回は８０機以上です！」

士官
「くそ！　迎撃しろ！　叩き落とせ！！」

大澤
「選り取り見どりとはこの事だな！　全機突撃！　水風隊に続いて攻撃隊の道を切り開け！！」

岡田
『了解！』

ヴィクトリア
『わかりましたわ！』

先行していた龍驤の水風隊がＦ８６セイバー・Ｆ６Ｆと空戦をしているど真ん中に飛龍戦闘機隊は突っ込んだ。
先ずは主翼の対空ミサイル（今回は左右１発づつ）を発射し、セイバーを撃墜すると、Ｆ６Ｆに挑んだ。
そして、格闘戦になると不幸にもＦ６Ｆは脆かった。
零戦と同じ方法（つまり、急降下で逃げたり等）で対象したＦ６Ｆだったが……容易に付いてくる紫電改や性能面で有利な烈風に同じ手は通用せず、あちこちで叩き落とされた。
しかも、再び始まった無線妨害により連携が取れず、バラバラに戦う事になってしまった。
逆に妨害されない周波数を使う日本側はたちまち連携プレー叩き落とした。
また、Ｆ６Ｆの動きから、岡田はパイロットが零戦としか戦った事しか無いと悟り、無線で伝えた事から余計にＦ６Ｆは押されたのだった。
そして、その空戦の隙を突いて、攻撃隊が艦隊へと迫った。

水兵
「敵はジェット機！　今までのタイプと別です！」

士官
「バカな！　奴らは2機種も持っているのか！？」

司令官
「それはどうでもいい！　それはどこに向かっている！？」

水兵
「えーと……巡洋艦戦隊です！！」

司令官
「発灯信号でも何でもいい！　巡洋艦戦隊に報せろ！！」

水兵
「りょ、了解！！」

無論、こんな会話の間にも狙われた巡洋艦戦隊も気付いていたから必死に回避運動をしながら逃げた。
しかし、竹島・天河から発艦した水風の丙型は赤外線誘導爆弾とレーサー誘導爆弾を搭載していた。
結果的には一緒だったが、赤外線誘導爆弾はある意味厄介だった。
つまり、煙突に爆弾が命中するとゆう事態は軍艦にとっては生命線を絶たれるかどうかの問題だったからだ。
まあ、この攻撃により軽巡2隻沈没、重巡2隻大破（浸水により自沈処分）、軽巡・重巡１２隻損傷（中破）の被害を出した。

士官

「何故だ!?　何故あいつらは損傷した艦を狙わないんだ!?」

至極当然な疑問である。
無論、その答えは直ぐに出た。

水兵
「次が来ました!　今度はレシプロ機です!」

士官
「……そうか、そう言う事か!　くそ、我々の考えが丸でお見通しなのか!?」

斎藤
「さーて、ようやく出番ね…全機突撃!!」

２３機の流星隊は今回、全機雷装を選択していた。
何せ、今や爆撃よりも確実に仕留めるには雷撃が一番だからだ。
それを迎撃しようとしたＦ６Ｆやセイバーは水風や飛龍戦闘機隊に阻まれた。
そして、８機、８機、７機の３グループに別れた流星隊はアメリカ艦隊に迫った。

次号へ

２８５　再びの対米戦　６（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

286　再びの対米戦　7

戦艦は第二次大戦中にその巨体を活かし、『防空艦』化されたのは戦史で知られるところである。
山城達の世界の日本海軍では薩摩型戦艦を発端に対空兵装を充実させた。
何故、これを冒頭に出したのか？…と思う読者も居るだろう。
それはユナイテッド・ステイツ艦橋の会話から始まるからだ。

旗艦ユナイテッド・ステイツ艦橋

士官
「敵は攻撃隊の邪魔をさせない為に空母を無視して、我々や無傷だった巡洋艦戦隊を襲ったんです！」

水兵
「では、無線やレーダーを妨害したのは…」

士官
「直衛機や僚艦との連携を無くす為だ！　レーダーは接近の発見を送らす為の手段だったんだ！」

今まで、イギリス、フランス、イタリア、大和帝国の海軍と戦ってきたが、ここまで高度な手を使う奴らはいなかった。
正に対抗のしようが無いのだ。

司令官
「それは解った。問題は誰がどこでレーダー及び無線の妨害をやっているんだ?」

士官
「そ、それは……」

答えられなかった。
何故ならこれ程の妨害には艦船ぐらいしか出来ないと認識していなかったからだ。
しかし、敵水上艦船はもちろん、潜水艦が浮上し、妨害している様子は無い。
まさか、航空機1機でこれをやっているとは思っていなかった。

司令官
「……まあ、その答えが出たとしても、今の状況が変わる訳では無いからな」

そう言うと視線を沈みゆく3隻のエセックス型空母に向けた。

10数分前……飛龍の流星隊は3グループに分かれ、エセックス型空母の集団に向かった。
そこで、被害甚大な空母は駆逐艦と比較的に被害の軽い巡洋艦で固め、軽い空母は各自で最高速で回避運動をとった。
これで万全……の筈だった。
だが、流星隊は損傷甚大艦では無く、動いている空母に向かった事で計算が狂った。
これは流星隊の魚雷がホーミング魚雷で、制止目標には何の意味も

なかったからだ。
だから、狙われた空母は僚艦からの援護を受けられないと言う最悪な結果に成ってしまった。
しかも、空母単艦の対空火力には限界がある。
しかも、流星隊が想定外の距離から魚雷を投下した為に対空火器の大半が空振りに終わった。
そして、ホーミング魚雷に追われたワスプⅡ、ボクサー、シャングリラはそれぞれ8～7発の魚雷を受けてしまった。
この瞬間、3隻の命脈は絶たれた。

司令官
「とにかく、今は3隻の乗組員を救助し、空母を守りながら一時退避…」

水兵
「司令官！　哨戒の駆逐艦からです！　敵の攻撃隊です！」

士官
「くそ、敵も執拗だな！　とにかく叩き落とせ！！」

水兵
「了解！！」

しかし……今度も中々しぶとい攻撃隊だった。

徐々に接近する機影に艦橋に居た全員が愕然とした。
駆逐艦から報告のあった攻撃隊……それが余りにも古めかしい複葉機だったからだ。

士官
「嘗められたものだ！　オンボロなど叩き落とせ！！」

ドン！ドン！ドン！ドン！
タンタンタンタンタンタン！
ズダダダダダダダ！

あっという間に両用砲、４０・２０ｍｍ機関砲がソードフィッシュに向かって発射された。
誰もが直ぐに落ちると考えた……だが……

士官
「…何故だ！　何故落ちない！　何故当たらないんだ！！！」

最新の対空射撃指揮装置を搭載した筈の艦艇の対空砲火が古めかしい複葉雷撃機に当たらないのだ。
そんなアメリカ艦隊を尻目にソードフィッシュ隊は１２機と８機に分かれ、１２機はアラモ、８機はハンコックに向かった。
無論、狙われたアラモは対空砲火で接近するソードフィッシュ隊を撃ったが結果は一緒。
この時、これを見ていた誰もが悪夢だと思い、早く覚めて欲しいと思った。
しかし……現実には変わらなかった。
特にアラモはバンカーバスターの攻撃により、機関を損傷しており、また、船体も一部歪んで小規模ながら浸水が発生していた事もあり１８ノットしか出せなかった。
ハンコックは機関に損傷は無かったが、火災により速度が出せず、乗員は誰もが火災鎮火に掛かっていた為に対空砲火を形成出来なかった。

そんなジレンマを抱えた2隻にソードフィッシュ隊は抱えていた魚雷を至近距離で投下した。
しかも、絶妙なタイミングで投下した魚雷にアラモはその速度の原因もあり12発、ハンコックも8発全部が当たってしまった。

司令官
「またか…くそ！　被害は!?」

水兵
「アラモ、浸水増加！　傾斜が増しています！　機関も停止しました！」

士官
「ダメです、ハンコックの火災が延焼…鎮火絶望的です…更に浸水も発生しております…」

司令官
「なんて……事だ……」

次号へ

２８６　再びの対米戦　７（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２８７　ソードフィッシュ隊と空母シュンフウ（前書き）

今回はソードフィッシュ関連話なので題名が違います。

シリルティア王国海軍（改造）空母シュンフウ（隼風）

基準排水量　１万２０００トン
最大排水量　１万５８００トン
全長　１７５ｍ
全幅　１９ｍ
速度　３０，５ノット
航続距離　１４ノットで１万海里
機関　重油機関

武装
８８ｍｍ６０口径単装高角砲×４
４０ｍｍ単装機銃×４
２５ｍｍ単装機銃×１０

搭載機　２０機（暫定値）

追記

『高速巡洋艦』と言う野心作であったが、それ以外は全て『巡洋艦と呼べない』ものであった試作艦シュンフウを改装した空母。
どうせのダメ元改装したシュンフウであったが……。

287　ソードフィッシュ隊と空母シュンフウ

天城防空指揮所

佐野
「艦長！　少佐！　全機帰って来ましたよ！」

山城
「ふう…無事に戻って来たか」

そう呟くと２０機のソードフィッシュ隊を見た。
多少、被弾している機体もあるが、無事に帰って来た様だ。

シルヴィア
「しかし、まさか我が海軍の複葉機まで駆り出す事になるとは思わなかったがな」

山城
「こんごうのお陰だよ。あのＤＶＤは目から鱗だったな～」

佐野
「『ビスマルク号を撃沈せよ！』ですね。あんなところからソードフィッシュを使おうなんて考えませよ」

あの『予言』以降、対抗可能戦力が日本海軍（つまり第零艦隊）にしか無いと思われ、シリルティア王国海軍に出番が無いと言う状態下にあった。
そんな時、こんごうが暇潰しに見せてくれた『ビスマルク号を撃沈せよ！』でソードフィッシュがビスマルクに雷撃した瞬間、複葉雷

撃機があんな簡単に、１機も欠ける事無く雷撃出来る（いくら映画とは言え）訳が無いと思った。
しかし、こんごうの話や、こんごうの艦載の戦史史料を調査する内に可能だと知ったのである。
ちなみに、『ソードフィッシュが最新対空指揮装置で落とせない』の原因は簡単で、最新故に落とせない…と言う話だ。
つまり、高速化する航空機に対応する為に上限を上げたら、逆に低速が迎撃出来ない……つまり、スピードの問題だった。
ソードフィッシュの最高速度が２００ｋｍ／ｈ…巡航速度は１６０ｋｍ／ｈ…これは航空機だと遅い部類…艦船だと超高速の部類だ。
だから、ソードフィッシュは対航空機射撃と対艦船射撃との（スピードの）『空白地帯』にあった為に対空砲火が効かない（布張りである事もあるが）のであった。

戦艦イナバ（因幡）艦橋

士官
「我が軍の航空隊が帰って来ました！」

広瀬
「うむ…全機帰ってこれて何よりだ」

第零艦隊と合流したシリルティア・ネイラーン王国艦隊は攻撃を成功させ帰還したソードフィッシュ隊を待っていた。
そして、彼らが帰る『巣』を見る。

広瀬

「いや、しかし、あの艦がこんな形で役に立つとは思わなかった」

士官
「まったくです。あの艦を皆、「スピードだけの低能艦」って言ってましたからね」

２人の話す視線の先にソードフィッシュ隊の母艦…シリルティア王国海軍初の空母（改造空母）『シュンフウ（隼風）』があった。
『シュンフウ』は『高速巡洋艦』を目指し開発され、１万２０００トンの戦艦並み（マツシマ型を基準）の排水量と１９ｍに絞った船体幅、細長い船体（全長１７５ｍ）をもった艦艇で、一部では「艦艇の高速化への足掛かり」と期待されていた。
しかしだ……日本帝国との接触前のシリルティア王国海軍艦艇は石炭機関であり、最高２６，６ノットを出したが、機関にスペースを取られ、武装も雷装無し、１２，７ｃｍ単装砲６門、８ｃｍ単装砲４門と貧弱、装甲も１２，７ｃｍ耐用と言う『スピードだけの低能艦』と言われた艦艇だった。
本来なら、シュンフウはその特化性故に必要無く、解体まで検討された……全てを覆したのは日本帝国との接触と飛龍の転移、航空隊の設立だった。
詳細は避けるが、空母を見て、日本帝国海軍と接触し、航空隊を設立すると、シュンフウの空母改造案が持ち上がった訳である。
あとはお決まりのパターンで、日本海軍の技術提供と指導を受け、シリルティア王国内の造船所で改装し、１月に漸く完成したのであった。

広瀬
「さて、我々も準備しようか」

士官

「はい」

天城艦橋

佐野
「艦長、征龍から催促伝です」

山城
「うーん、やっぱりルーデルさんはご不満か…」

佐野
「どうします？」

山城
「……わかった。ダメ出し最後の攻撃だ。護衛にはハルトマン少佐を充てる」

佐野
「了解」

シルヴィア
「もうそろそろではないか？　潜水艦隊の出番は？」

山城
「あぁ…さて、全艦隊、敵艦隊に進路を向けろ」

次号へ

287　ソードフィッシュ隊と空母シュンフウ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２８８　再びの対米戦　８（前書き）

『ルーデル大佐の活躍』…なんて副題付けもよかったか？
……とにかく、ルーデルのターンです！

288　再びの対米戦　8

征龍飛行甲板

ルーデル
「ほら、出るわよ！　早くしなさい！」

飛行甲板のＡ１０のコックピットから整備兵や甲板員を急かすルーデル。
何せ、何十回と催促と駄々をごね続けた結果である。
今回出番が無いかと何度も通信室を往復し、その都度『お待ち下さい！』と言われ続け……一度だけ佐野が出て、顔を真っ赤にしたのは別話……ても我慢（？）と努力（？）の賜物であった。

ハルトマン
『ルーデル、護衛は任せてね～』

ルーデル
「えぇ、お願いね」

整備兵
「ルーデル大佐、発進用意出来ました！」

ルーデル
「オッケー！　発進！」

バシュ！！

蒸気カタパルトによってＡ１０は発進した。
それに続き、ハルトマンのタイフーンも発進した。

その頃……アメリカ艦隊

旗艦ユナイテッド・ステイツ

司令官
「残り４隻の状況はどうだ？」

士官
「火災は鎮火しました。しかし、機関にダメージがあったり、浸水を掻き出したりするのに時間が掛かっています」

司令官
「そうか…一刻も早く離脱したいが、損傷艦を見捨てる訳にはいかんしな」

……こんな会話が交わされていた時……

水兵
「司令官！　敵の攻撃です！」

司令官
「く…数は！？」

水兵
「はい…えっと……２機です！！」

士官
「2機だと!?　本当か?　本当に2機か!?」
水兵
「…はい!　間違い無く2機のみです!!」

言っている水兵本人も半信半疑な声で答える。
今までなら、「命知らず」と言って笑っていられたが、今日1日の戦闘でそうもいかなくなっていた。

士官
「く…敵はどっちに向かっている!?」

水兵
「わかりません!!」

……まあ、わからないのは当たり前かも知れない……何故なら……

ルーデル
「さ～て、どれを狙おうかしら～♪」

コックピットから選り取りのアメリカ艦隊を見ながら呟くルーデル大佐。
とにかく数はあるので獲物には困らないが……。

ルーデル
「駆逐艦なんて撃沈しても面白くないし…やっぱり巡洋艦ね!」

フルスロットで目を付けた軽巡洋艦に向かって突っ込んだ。
だが、近くにいた駆逐艦が気付いて主砲の両用砲と対空機銃をルーデル機に向けた。
本来なら無視するのだが、軽巡洋艦との進路上にいるため、どうしても邪魔だった。

ルーデル
「もう…邪魔しないでよ！！」

そう叫びながら機首の３０ｍｍガトリング砲の引き金を一瞬引いた。
対戦車用でもあるガトリング砲の弾丸は船体中央部の４０ｍｍ機銃座を破壊し、近くにあった４０ｍｍ銃弾に引火、爆発・炎上した。
それを横目にルーデルは軽巡洋艦に近付いた。
駆逐艦を撃った事により、水平飛行になったＡ１０。
しかし、彼女は９９式艦爆に並ぶ急降下爆撃機の『爆撃機乗り』…
どんな状態下でも爆弾をぶち当てるのが仕事である。（でないと、あんなチートなギネス級記録は生まれない）
だから、彼女は一発叩き込んだ……少し変わった方法で。

ルーデル
「はい、じゃあ、一発目！」

二発抱えていた内の一発を軽巡洋艦の前で投下した…５００ｋｇ爆弾は何度か水面を跳ねて軽巡洋艦の船体に命中した。

ルーデル
「スキップボバミングなんて、私に掛かれば百発百中なんだからね！」

そう呟きながら別の軽巡洋艦を急降下爆撃で撃沈するべく機体を上

昇させた。

司令官
「な…なんだ、あの攻撃は!?」

士官
「本官も解りません…未知の爆弾法です!」

爆弾が沈まずに水面を跳ねて当たる……ある意味雷撃に近い攻撃だが、初めて見た人間には原理はわからないだろう…まあ、簡単な原理なのだが…。

司令官
「く…とにかくあれを黙らせ…」

ゴゴーン!ゴゴーン!ゴゴーン!ゴゴーン!

士官
「な、なんだ! どうした!?」

水兵
「せ、潜水艦です! 潜水艦の魚雷攻撃です!!」

司令官
「く、しまった! また一杯食わされたか!」

士官
「早く見付け出して撃沈しろ! 付近にいる筈だ!」

水兵
「了解!!」

次号へ

２８８　再びの対米戦　８（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

289　再びの対米戦　9

伊２９潜水艦内

木梨大佐
「伊５潜水艦の雷撃は成功した様だな」

潜望鏡には被雷したエセックス型空母と慌てて自分達と反対の方向に向かい駆逐艦達の姿が見えていた。

士官
「航空機による陽動と潜水艦の群狼戦術…成功ですね」

木梨大佐
「僅か３隻の潜水艦では『群狼』とも言えんだろう。それに、それは生きて帰ってから言う事だ…お、あの襲撃機が今度は急降下爆撃を成功させた様だな」

見ると、巡洋艦の１隻が黒煙に包まれていた。

木梨大佐
「さて、我々も仕事に掛かろう。一番から六番の発射管用意。目標はエセックス型空母。無誘導で行う」

士官
「了解」

空母の付近から駆逐艦が消え、無防備な横っ腹が見えている。

士官
「数値入力完了。魚雷発射管準備よし」

木梨大佐
「てぇー！」」

ボシュウ！

６本の潜水艦用酸素魚雷魚雷が伊２９より発射された。

木梨大佐
「よし、逃げるぞ。急速潜航！　ベント開け！　このまま離脱するぞ！」

士官
「よーそろ！　ベント開け！　このまま離脱！」

伊２９は静かに潜って姿を消していった。

旗艦ユナイテッド・ステイツ艦橋

ズズン！ズズン！ズズン！ズズン！ズズン！ズズン！

エセックス型空母ボン・ノム・リチャードの右舷に６つの水柱が上がった。既にベニントンが左舷に被雷しており、そちらに駆逐艦が群がっている内にボン・ノム・リチャードが襲撃された。

士官
「くそ、反対方向にもいたのか！」

水兵
「ボン・ノム・リチャードより連絡です！　浸水が酷く回復不可能…との事です！」

司令官
「各艦は警戒を厳重にせよ！　これで…」

ズズーン！ズズーン！

また新たな爆発音が響いた。

士官
「どの艦がやられた！？」

水兵
「レイクシャンプレーンに命中！　気化したガソリンに引火…鎮火不能！！」

士官
「アンティータムは無事か！？」

ズズーン！

またもや爆発音……それは最も聞きたく無い報告だった。

水兵

「レイクシャンプレーンを外れた魚雷がアンティータムに命中！機関室浸水！　身動き出来ません！！」

司令官
「…なんて事だ……大敗北では無いか……」

数十分後……

天城艦橋

佐野
「艦長、ルーデル機・ハルトマン機共に無事に帰還しました」

山城
「そうか…戦果は軽巡2隻の撃沈か？」

佐野
「いえ、駆逐艦1隻がガトリング砲の攻撃を受けて火災発生後、鎮火失敗により沈没してそうです。また、ロケット弾で駆逐艦2隻が損傷しま模様です」

山城
「ふむ…伊5潜水艦、伊29、黒潮でエセックス型1隻づつが沈没…最後のエセックス型は浮いているが……まあ、1隻、しかも飛行甲板が使えないとなると脅威では無いな」

シルヴィア
「となると、あとは戦艦4隻だけだな」

山城
「あぁ…小澤長官。艦隊は空母と護衛を分離し、これより増速、敵艦隊に向かいます。よろしいでしょうか？」

小澤中将
「うむ、頼んだよ」

山城
「はい。全艦事前通知通りに艦隊を分離。艦隊戦参加の艦艇は我に続け」

第零艦隊とシリルティア・ネイラーン王国艦隊から空母（富士、飛龍、征龍、龍驤、シュンフウ）と護衛隊（日向、伊勢、両王国艦隊駆逐艦）を分離し、第零艦隊はイナバ、バッキンガムを引き連れアメリカ艦隊へと向かった。

次号へ

289　再びの対米戦　9（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２９０　再びの対米戦　１０

午後６時半頃

天城艦橋

佐野
「小澤長官、艦長、征龍の雷雲からです。敵艦隊は重巡１隻、駆逐艦１０隻程が敵艦隊と分離しているそうです」

小澤中将
「ふむ…敵空母の乗員を先に離脱させた様だな」

山城
「そうでしょう。武士の情けでは有りませんが、見逃しても脅威は無いでしょう」

小澤中将
「となると、問題は敵艦隊の方だな」

山城
「えぇ、駆逐艦が多いのが厄介ですね…佐野、雷雲は未だいるか？」

佐野
「はい。敵艦隊上空で待機しております」

山城
「駆逐艦を減らす為に対艦ミサイルを使います。よろしいでしょう

か？」

小澤中将
「それについては任せよう。ミサイル戦は素人だからな」

山城
「ミサイルは魚雷と似た様な物ですよ…わかりました。佐野、雷雲のデータを各艦にリンクし、対艦ミサイルの攻撃をするように通達」

佐野
「了解」

数分後、扶桑、山城、愛宕、金剛、足柄ＩＩ、蔵王、銀河、天河、鶴月、白神、大間、珠洲、日御、佐多の計１４隻から一発づつ、１４発の桜花対艦ミサイルがアメリカ艦隊へと発射された。

旗艦ユナイテッド・ステイツ艦橋

水兵
「司令官！　右舷より高速で飛翔体接近！！」

司令官
「なに…数は！？」

水兵
「…１４です！　進路変わらず、本艦隊に接近！」

士官
「あの大型ロケット弾かもしれません…どうしましょう?」

司令官
「全艦回避!　各艦で回避行動を取らせよ!!」

しかしだ……昼間の航空攻撃でお分かりの通り、回避しようが、対空火器を精一杯撃って弾幕を張っても、意味は無い。
そこに有るのは……現実的な技術力の差であった。
だから……

ガガーン!ガガーン!ガガーン!ガガーン!ガガーン!ガガーン!ガガーン!

士官
「被害を報告しろ!!」

水兵
「駆逐艦１４隻に飛翔体命中!　１４隻の内、７隻が轟沈!　残り７隻も大破…いえ、沈没寸前です!!」

士官
「くそ!　今度は駆逐艦を狙ったか!」

丸で嘲笑うかの如く、今までの攻撃に、アメリカ艦隊から戦勝ムードは消えていた。

天城艦橋

佐野
「全弾、敵駆逐艦に命中した様です。敵艦隊は駆逐艦６隻を残し、本艦隊に向かって来ます」

山城
「ふむ…シルヴィア、君はどう見る？」

シルヴィア
「簡単だ。敵は我々に戦艦が４隻しかいないのを知っている。敵の戦艦も同数。艦隊戦で勝負を決めるつもりだ。お主の思惑通りだな」

山城
「さすがシルヴィア。解ってるね」

シルヴィア
「はぁ…そんな事はどうでもよい…それよりも、この戦いが大丈夫かどうかだ」

山城
「…と言うと？」

シルヴィア
「敵旗艦に喧嘩を売ろうとしている事だ。敵旗艦は４６ｃｍ砲搭載艦…対しこちらは４１ｃｍ砲戦艦…どう見ても無謀な喧嘩だ。だから……勝機が有るのか聞きたい」

真剣な目で訊くシルヴィアに山城は答えた。

山城
「…わからん」

シルヴィア
「……なに！？」

山城
「当たり前だ。いくら防御を各所で改良しても、天城は４１ｃｍ砲耐用防御…下手すれば装甲貫通で轟沈だな」

シルヴィア
「…恐ろしい事をサラリと言うな……まるで勝機無し…と聞こえるぞ」

山城
「とにかくやってみないと解らない。イザと言う時の事は高城参謀長や山南少将達に言ってある」

シルヴィア
「…用意のいい奴だ」

山城
「佐野、お前はどう思う？」

佐野
「いきなり話を回さないで下さいよ……まあ、福本次官が認めた艦長ですから、地獄までは付いて行きますよ」

山城
「そこまではしなくていいんだが…まあ、成る様に成れだ」

鷲井
「成る様にはいいが、戦死は願い下げだ」

山城
「なんだ、鷲井。来てたのか？」

鷲井
「せっかくの艦隊戦が見れる機会を見逃すかっての！　どうせ主要区画の装甲も貫通されるかも知れない訳だし」

山城
「まったく、現金な奴…と言うべきか…まあ、やれるところまではやるさ」

今の山城にはそれしか無かった。

そして……日付が変わった3月14日　午前1時42分……

佐野
「敵艦隊、夜戦距離に入りました！」

小澤中将
「では、主席参謀…はじめようか」

山城
「はい…全艦事前打ち合わせ通り！　夜戦開始！」

艦隊戦の幕が上がった。

次号へ

２９０　再びの対米戦　１０（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

291　再びの対米戦　11

旗艦ユナイテッド・ステイツ艦橋

水兵
「敵艦隊接近！　快速艦艇接近します！」

司令官
「巡洋艦の数では我らが勝る！　敵巡洋艦を撃退せよ！」

士官
「了解！」

この指示にアメリカ艦隊の重巡洋艦５隻、軽巡洋艦４隻が駆逐艦１０隻を引き連れ討って出た。
対し第零艦隊は金剛・足柄ＩＩ・鶴月を駆逐艦・フリゲートの援護に回し、愛宕・鳥海・蔵王・銀河・天河を先行させ、後方よりイナバ・バッキンガムが援護する事にしていた。

天城艦橋

山城
「さて、我々も動きましょうか？」

小澤中将

「そうだな。快速艦艇の邪魔をしたくないしな」

山城
「了解しました。佐野、進路変更」

佐野
「了解」

天城を先頭に駿河、扶桑、山城の４隻は進路変更、敵戦艦４隻が援護出来ない様にするべく、別進路をとった。

金剛艦橋

オペレーター
「敵駆逐艦、射程距離に接近！」

士官
「あしがら、鶴月、準備完了！」

篠田大佐
「味方駆逐艦雷撃まで援護しろ！　撃て！」

ドンドンドンドンドンドンドンドン！！

３隻の１２，７ｃｍ速射砲が火を吹いた。
ミサイル迎撃にも使用する速射砲だけに速射力は折り紙付きである。
この間に白神、大間、日御、珠洲、佐多を率いる形で磯波、浦波、綾波、敷波の４隻が先行する。

そして、今度はフリゲートの5隻の７６ｍｍ速射砲（一艦に2基2門）が砲火が瞬いた。
何せ現代艦である8隻の主砲はレーダー照準である為に面白い様に次々と当たる。
しかも、第二次大戦時の駆逐艦よりも速射力・射程・威力共にグレードアップしているだけに堪らない。
駆逐艦は一方的に殴られる事になった。
その間に浦波・磯波・綾波・敷波の４隻が日本海軍自慢の魚雷発射管を開き、次々と発射した。

その頃、巡洋艦鳥海・愛宕・蔵王・銀河・天河の5隻はアメリカ軍巡洋艦9隻と対峙していた。
艦種はボルティモア型重巡洋艦5隻、クリーブランド型軽巡洋艦４隻…隻数においても不利であった。
だが、鳥海以下巡洋艦は先制攻撃に出た。
まず、鳥海・愛宕・蔵王の２０，３ｃｍ主砲の射程距離に入った瞬間、3隻は一斉射撃を開始した。
鳥海１０門、愛宕６門、蔵王６門の２０，３ｃｍ主砲は６０年の技術進歩により、最大・有効射程、命中精度、速射性が大幅に向上していた。
だからこそ、未だ有効射程距離では無いところに２２本の水柱が立ち上がった事にアメリカ艦隊は驚いた。
だからこそ、アメリカ巡洋艦の全てが慌て主砲を乱射したが、全て手前で落ちていた。
そして……鳥海の左舷四連装魚雷発射管が着弾と同時に酸素魚雷を発射した。
この時、浦波、磯波、綾波、敷波から三連装魚雷発射管が3基中２基、鳥海も四連装魚雷発射管は４基中２基が取り外していた。

これは山城が考えた処置だった……ホーミング魚雷を使っているだけに命中精度がいい、また、大量発射は費用が嵩む……特に被弾時の危険性を抑える為だった。
無論、批判はあった……代わりにこれから旋回発射管を採用するシリルティア海軍に発射管と人員を預けていた。
この為、鳥海４発、４隻からは１２発しか発射されていない。
しかし、それを補う存在がいた。
鳥海の魚雷発射直後、後方からイナバ・バッキンガムの主砲が砲撃を開始したからだ。

天城艦橋

小澤中将
「向こうはどうかね？」

山城
「今のところは互角で戦っております…多分、大丈夫と」

佐野
「長官！　艦長！　敵戦艦接近！　同航戦を挑む模様！！」

小澤中将
「我々の戦いも始まる訳だな」

山城
「はい…主砲準備いいか？」

宮里
『こちらテッポウ。全主砲準備完了。何時でもいける』

山城
「了解。風華さん、僚艦の準備はよろしいですか？」

風華
「…はい、皆さんからは良い返事がきております」

佐野
「艦長！　敵戦艦４隻発砲！！」

シルヴィア
「先手をとられたか」

鷲井
「しかも斉射か…よほどレーダー照準に自信があるみたいだな。うちの海軍の『夜戦開始距離』まで余裕があるけどな」

山城
「アメリカお得意の投射数とレーダー射撃で勝負する気か…風華さん！　広域レーダー妨害開始してください！　各艦にも通達お願いします！」

風華
「わかりました！」

佐野
「着弾します！！」

ヒュュュウーー……

ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！

天城の手前で水柱が上がった。

艦橋より大きい水柱に山城はビビるどころか、何故か敵がい心が燃え上がった。

山城

（やってやろうじゃないか…４６ｃｍ主砲を自慢気に振り回したらどうなるかな！）

次号へ

２９１　再びの対米戦　１１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

292　再びの対米戦　12

駿河艦橋

ヒュュュウーー……

ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！

桃園宮
「…ええい！　敵は４斉射目！　まだ、レーダー妨害は効かないの！？」

高城
「まあまあ、落ち着いて落ち着いて」

艦橋で焦る桃園宮を落ち着かせる高城。

桃園宮
「本艦のレーダーに影響は出ているのに、向こうは相変わらずでは無いか！　このままではなぶり殺しだ！」

高城
「仕方ないよ。こっちは妨害元から近いんだから…レーダー妨害だって即効性じゃないんだし」

今のところはそう言っておくしか無い。
そう思いながら、今は我慢するしかなかった。

扶桑艦橋

ヒュュュウーー……

ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！

艦長
「敵さんは派手に撃っていますな」

山南
「あぁ…まあ、若い連中にはいい冷や水かも知れんがな」

一方、扶桑の艦橋では熟練の艦長と少将がさも当然とばかりに話していた。
但し、若い乗員は立ち上る水柱に必死に耐えているのみだ。

山南
「天城は今も４６ｃｍ砲の洗礼を受けているのに、少しも怯んでおらん…やはり、若くても実戦経験が有るだけにしっかりしているな」

艦橋からは先頭に位置する天城が撃たれている事は直ぐに確認出来る。
しかも、自分達より高い水柱…大口径砲で撃たれている。
しかし、その艦の動きには動揺や恐れ、腰が退けている…と言った事はベテランである山南少将は感じ取れなかった。
何せ、旗艦を預かるのは自分が目を掛けて仕込んだ教え子……腕も

能力もお墨付きだ。

山南
「…もうそろそろだな」

腕時計を見た山南少将が呟いた。

旗艦ユナイテッド・ステイツ艦橋

司令官
「これで何射目だ？」

士官
「これで６射目です」

ユナイテッド・ステイツの艦橋では少しの焦りと疑問が漂っていた。
既にユナイテッド・ステイツは３６発の４６ｃｍ砲弾を発射したが、
今のところ一発も敵戦艦を捉えていなかった。
しかも、敵戦艦はこれだけ発射していても撃ち返してこようともしない。
これが焦りと疑問の原因だった。

司令官
「まだ当たらないのか…敵は別段回避行動をとっているわけではないぞ」

士官
「まあ、夜戦ですから。多少命中率は落ちるでしょう。ですが、ど

う転んでも…」

水兵
「司令官！　た、大変です！！」

司令官
「どうした？　いったい何が…」

水兵
「敵のレーダー妨害です！　しかも、かなりの強力な妨害でレーダー画面が乱れに乱れて使用不能です！！」

司令官
「なに！？」

士官
「……くそ、本当です！　レーダー使用不能…レーダー照準及び管制射撃不能！」

司令官
「く…急いで目視照準射撃で砲撃しろ！　急げ！！」

しかし……これが致命的な事態を生んでしまった。

天城艦橋

佐野
（……あれ？）

佐野は敵旗艦を見ながら疑問符を浮かべた。
今の佐野の役目は敵発砲炎を見て着弾を報せる事である。
だからこそ、わかった……敵の第６射目が終わって１５秒経過しても、敵戦艦が撃たない事に……。

佐野
「（おかしい…敵はきっちり１５秒で次を撃っていた筈…まさか！）艦長！！」

叫びながら佐野は山城を見た。
山城は目を瞑りながら近くの机で指を使いリズムをとっていた。
実は山城もリズムをとって、敵戦艦発砲の感覚を掴んでいた。
しかし、そのリズムは崩れた……それを確認した山城はキッと目を細くしながらも目を開けた。

山城
「佐野！　距離！！」

佐野
「あ、はい…えーと、約２万メートル！！」

山城
「風華さんは各艦に砲撃態勢の確認！　シルヴィアは宮里に確認！」

風華・シルヴィア
「「了解！！」」

密かに熱気を帯びた艦橋に山城の指示が飛んだ。
そして……直ぐに返ってきた返事。

風華
「皆さんからは準備完了のご返事がきました！」

シルヴィア
「宮里も良いと言ってきたぞ！」

山城
「…そうか」

そう言うとゆっくりと右手を上げ…素早く、前に突き出すかの様に降り下ろした。

山城
「全主砲門開け！　各員の思いを必中必殺の主砲弾に込め、敵を打ち砕け！！」

佐野
「撃てぇぇぇ！！！」

駿河艦橋

『全主砲門開け！　各員の思いを必中必殺の主砲弾に込め、敵を打ち砕け！！』

高城
（山城艦長……）

天城から送られてきた音声に高城は気付いていた。
この言葉が自分達に向けられている事に……。

桃園宮
「なにをしている！　天城に遅れをとるな！　艦隊最強の火力で敵を叩き潰せ！　今の我々はあの時の我々では無いのだぞ！！」

そして……こちらもちゃんと解っていた様だ。

ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！

天城の４１ｃｍ砲の砲声が響いた。
反撃開始の合図であった。

次号へ

２９２　再びの対米戦　１２（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２９３　再びの対米戦　１３

旗艦ユナイテッド・ステイツ艦橋

司令官
「なにをしている！　何故射撃が止まっているんだ！？」

士官
「目視照準で手間取っています！　もう少しお待ち下さい！」

レーダー照準・管制射撃に頼っていたアメリカ戦艦はレーダーのデータから機械的に主砲弾を装填し、撃っていただけに、今や古臭い目視照準には慣れていなかった。
これが『機械に使われている』と言うのだろう。

水兵
「あ！　敵戦艦発砲！！」

士官
「大丈夫だ！　向こうもレーダーは使えん！　当たる訳が…」

ヒュュュュンーー……

ザザーン！ザザーン！ザザーン！ザザーン！ザザーン！

士官
「な、なに！！？　初弾で夾叉だと！！？」

当たりはしなかった……但し、ユナイテッド・ステイツの周りに着した……つまり、敵は正確に測量を行い、砲撃をしているのだ……。

天城艦橋

佐野
「初弾夾叉！！」

鷲井
「よし！」

シルヴィア
「さすがだ！」

小澤中将
「初弾で夾叉とは幸先がいい」

何せ天城以下戦艦群は敵が撃ってくる間も敵艦の計測を続行していた。
また、７０年の技術進歩は計測機器も発達させ、風力計や波センサー、温度計等の主砲射撃に影響のある物を逐次データ化し、艦のコンピューターで計測、これに敵艦との距離（これも目視情報や測量機材等で測る）をコンピューターに打ち込めば、適性な主砲旋回角・仰角を導き出す。
また、戦闘でこれら全ての機器が使用出来なくなっても、砲撃を続行出来る様に軍艦の乗員を育成している。
そして、最後に各艦の砲術長が保有する主砲数値表で微調整を加える。

これは同じ４１ｃｍ砲でも特注で製造される戦艦の主砲は各個に『癖』が有り、この癖もまた砲撃命中率に関係するのだ。
だから、戦艦の砲術長は私的の主砲数値表を書き残し、異動の際には後任に渡す。
もちろん、天城は宮里が訓練や演習で出た数値を必死に数値表にしていた。
日本海軍は戦艦を残存させるにあたって、６０年間の時間を無駄にせず、技術開発や人間…ソフトとハードを育て続けていたのだ。

ガガーン！

山城
「！　どの艦か被弾したか！？」

佐野
「……いえ！　違います！　敵４番艦に命中弾を確認！　山城が初弾を命中させました！！」

残念ながら敵４番艦に命中した形跡は（夜間と言う事もあって）確認しにくい。
しかし、山城は佐野の言葉信じた。

山城
「山城に打電、『初弾命中見事成り！』」

風華
「わかりました」

山城

「さて、山城さんには負けていられないぞ！」

少し前……戦艦山城第二主砲塔上部

山城（艦魂）
「ふっ、やはり戦艦は戦艦と撃ち合わねば意味は無い！」

敵４番艦を見ながら１人呟く。
既に天城の艦橋から砲撃開始の指示は出ている。

山城（艦魂）
「我が名は山城！　我が刀の錆にしてくれるわ！」
そう叫びながら刀を抜き放つと同時に山城の主砲が吠えた。
初回から斉射、９発の４１ｃｍ砲弾は夜の闇を飛び、敵艦付近に落ちた。
しかし、１発のみ……敵第二主砲塔に命中した。

山城（艦魂）
「うむ、我ながら良い腕だ！」

山城はそう呟いた。

この敵４番艦はアイオワ型戦艦５番艦イリノイだった。
山城の命中弾は第二主砲塔二番砲根元に着弾、砲身を根元から叩き折っただけでなく、着弾の衝撃・爆発で電路を途絶させ、第二主砲

塔は斉射不能になった。

そこから日本戦艦群は発砲しながら距離を保ち続けた。
そして、午前３時１４分（アメリカ艦隊発砲が午前２時３２分。距離二万八千メートル。　日本戦艦群反撃・山城の初弾命中が午前３時１０・１１分。）、今度は２番艦駿河が主砲弾を２発命中させた。命中弾を受けたのは並走する敵２番艦、モンタナ型戦艦１番艦モンタナ。
モンタナは駿河の第三主砲塔から発射した４６ｃｍ砲弾が船体中央部と後部艦橋に命中した。
船体中央部に命中した砲弾の被害は軽かった。（何せ、両用砲や対空機銃は昼間のミサイル攻撃で壊滅していたから）
しかし、後部艦橋に命中した砲弾はモンタナの副長を戦死させただけで無く、予備の測距儀や方位盤をも破壊した。
これが後々に響く事に成るのだった。

この頃、駆逐艦同士の戦いは決着が付いた。
イージス艦金剛・足柄ＩＩ、駆逐艦鶴月、フリゲートのレーダー射撃と速射力にはめった打ちにあった。
結局、被弾多数で何の活躍もする事無く、アメリカ駆逐艦１０隻は撤退した。
また、金剛以下駆逐艦・フリゲートも後方に下がった。

次号へ

２９３　再びの対米戦　１３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２９４　再びの対米戦　１４

天城艦橋

未だに沈黙するアメリカ戦艦群を尻目に、日本戦艦群は砲撃を繰り返していた。
一応、自動装填により４６ｃｍ砲でも１分間に３発は発射出来る。
しかし、今回は歩調合わせもあり、４隻共に１分間に２回のペースに合わせていた。
そして、午前３時１６分……海戦史上初と言っていい珍事がおきた。

ガガーン！ガガーン！

佐野
「命中！　本艦の主砲弾命中！！」

興奮した佐野の声が艦橋に響いた。
しかし、爆発の煙が消えるとケロリとしているユナイテッド・ステイツの姿が現れた。

シルヴィア
「くそ！　やはり装甲は分厚いな！」

悔しそうにシルヴィアが呟く。

風華
「艦長さん、僚艦３隻より命中の報告がありました」

鷲井
「おいおい…４隻の砲撃が同時命中ね…海戦史上初の珍事じゃないのか？」

山城
「あぁ…近代海戦史上では…多分な」

山城は短めに答えた。

天城の４１ｃｍ砲弾はユナイテッド・ステイツの船体後部と第一主砲塔に命中した。
しかし、さすがに４６ｃｍ耐用防御のユナイテッド・ステイツには何の被害も与えなかった。
だが、それ以外のアメリカ戦艦は違った。
まず、駿河の放った４６ｃｍ砲弾はモンタナの第四主砲塔の前面装甲を貫通し、第四主砲塔を破壊した。
扶桑の砲弾は並走する敵３番艦モンタナ型戦艦２番艦オハイオに命中した。
オハイオの船体前部の右舷艦首に命中し、大穴を開けた。
しかし、こんなのは４番艦イリノイに比べれば軽いものだった。
山城の放った４１ｃｍ砲弾の内３発が命中、２発が艦中央構造物を破壊し、１発が艦橋を打ち砕いたからだ。
この為、イリノイは艦長が戦死、艦橋構造物は途中で折れ曲がり、測距儀での砲撃は不可能と成り、後部艦橋の測距儀の照準で撃つしかなかった。

旗艦ユナイテッド・ステイツ艦橋

水兵
「イリノイは艦橋に命中！　艦長戦死との報告！！」

司令官
「ええい、くそ！　敵３・４番艦の主砲は同じ１６インチだが、こちらより強力だな！」

敵２番艦の１８インチ砲ならいざ知らず、同じ１６インチでここまで被害が出るとは思っていなかった。

士官
「司令官！　ようやく目視照準射撃準備完了しました！」

司令官
「よし、撃て！　早く敵旗艦を片付けろ！」

士官
「了解！　ファイヤー！！」

ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！

天城艦橋

佐野
「敵艦射撃再開！！」

鷲井
「目視照準は余程苦手らしいな。余りにも時間が掛かりすぎだ」

山城
「まあ、レーダーでバカスカ撃つのが得意だったみたいだからな」

佐野
「敵弾、着弾します！」

ヒュュュュウーー……

ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！
ユナイテッド・ステイツの主砲弾は天城の遥か手前で水柱を上げた。
残りのアメリカ戦艦の射撃も似たり寄ったりであり、レーダー妨害前の様な射撃では無い。

鷲井
「随分下手になったな」

山城
「レーダー頼りが丸出しだな。もし日本海軍なら山南少将か土方少将に４・５発殴られるよ」

鷲井
「あぁ、確かに…くわばらくわばら」

そう言いながら首を竦める鷲井。
実際、日本海軍でこんな射撃結果を（新造艦の初射撃なら知らないが）出したら、間違い無く殴られる。

山城
「まあ、下手な鉄砲数撃ちゃあ当たる…まぐれ当たりが出る前にケリを付けたいな」

ズズーン！ズズーン！ズズーン！ズズーン！ズズーン！

天城の主砲が唸った。

その頃……戦艦イナバ艦橋

士官
「敵巡洋艦隊に魚雷命中！」

広瀬大佐
「上手くいったな」

イナバの艦橋で指揮を執る広瀬大佐。
視線の先には日本海軍の巡洋艦隊が戦っていた。
数は敵より少ないが、先手を取った事もあり、日本側が主導権を握っていた。
しかも、上手い具合に敵巡洋艦隊をイナバ・バッキンガムの所まで誘導していた。
その為、知らず知らずの内に敵巡洋艦隊は砲撃戦をやってはいけない自分達の所へと接近していた。
そして、今回の魚雷命中だった。

広瀬大佐

「撃て！　我が艦の主砲で薙ぎ払え！」

士官
「目標敵一番艦、撃て！」

ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！

５基１０門の３０，５ｃｍ主砲が火を吹いた。
後続のバッキンガムの４基１０門（三連装砲２基・連装砲２基）も続いて火を吹いた。

士官
「着弾します！」

ガガーン！ガガーン！

ズゴゴゴゴゴン！！！

狙った敵一番艦に２発が命中、真っ二つになって轟沈した。

士官
「敵一番艦轟沈！　敵巡洋艦隊、足並み乱れています！」

広瀬大佐
「よし、態勢を立て直す前に叩き潰せ！」

敵巡洋艦との戦いはもう少し時間が掛かるだろう。

次号へ

２９４　再びの対米戦　１４（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２９５　再びの対米戦　１５（前書き）

実は今朝、気付いた事が有りました。

福本
「なに？」

うん…この作品が『第七艦隊』より感想・お気に入り登録件数が多いんだよね。
数に出すと……

『第七艦隊』　『異世界』

感想
約３６０件　　約４９０件

お気に入り登録
約１１０件　　約１５０件

（一桁については四捨五入です）

福本
「…本当だな」

話数は大体『第七艦隊』約2分の1ぐらい…それでこの評価は嬉しいです。

福本

「ところで評価ポイントは？」

さすがに『第七艦隊』の方が高い。

但し、３０ポイントの差しかなかった。

そして、日頃ご愛読の読者の皆さま、ありがとうございます。

２９５　再びの対米戦　１５

天城艦橋

ヒュュュュウーー……

ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！

鷲井
「くそ、あれから2発も当てたのに何の影響も無しか！」

佐野
「仕方ありませんよ。向こうは４６ｃｍ耐用なんですから」

鷲井
「わかってるよ！　しかし、ちょっとは効けっての！」

佐野
「それは言えてますね…弾着、いまー！」

ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！

こちらの４１ｃｍ砲弾はユナイテッド・ステイツの周辺で水柱を上げた。

山城
（こちらは命中しても効かない…向こうは命中すらしない…か。決定打に欠けるな…ん？）

チカッ！

ドガガガガガガガガン！！！

ユナイテッド・ステイツに視点を向けていた山城の視界左隅が光ったと思った瞬間、大爆発音が響いた。

シルヴィア
「おい、佐野！　何が起きた！？」

佐野
「待って下さい！　えーと……マジかよ！？」

山城
「どうした、報告は正確に行え！」

風華
「艦長さん。山城より打電がありました。『敵４番艦、轟沈せり』以上です」

山城
「…本当か、佐野！？」

佐野
「はい！　間違いありません！」

3時２８分……山城より放たれた４１ｃｍ砲弾２発がイリノイに命中、１発は水偵カタパルトとクレーンを破壊したが、もう１発は破損した第二主砲塔真下の弾薬庫に船体装甲を貫通し、命中した。
今回の場合、垂直防御で４０，６ｃｍ主砲なら１８～２３ｋｍ…１万８０００～２万３０００ｍ以遠であれば貫通されないアイオワ型戦艦の船体装甲。
２万ｍで撃ち合うなら一応大丈夫であった……が、６０年の技術差はそんな物をボール紙の様にぶち抜いた。
そして、４１ｃｍ砲弾は弾薬庫でその破壊力を解放、第二主砲塔付近から船体を真っ二つにし、イリノイは轟沈した。

戦艦山城　第二主砲塔

敵４番艦イリノイの轟沈を見届けた山城は、一度刀を鞘になおし、直立不動の敬礼をした。

山城
「赦せとは言わん…だが、安らかに眠れ」

…自他共に認める侍士官の山城にとって、死者に敬意を証するのは忘れない。
それが福本元帥も認めた彼女の礼儀作法であった。

ユナイテッド・ステイツ艦橋

水兵
「イリノイ…轟沈！！」

司令官
「く…まさかこちらが先に殺られるとは…オハイオに打電、後部の主砲で敵４番艦を牽制しろ！」

士官
「了解！」

司令官
「早く敵旗艦を撃沈しろ！　駿河に手間取るなら未だマシも、格下相手に何を手こずっている！」

水兵
「は、はい！」

駿河艦橋

士官
「敵４番艦轟沈！！」

桃園宮
「く…何をしている！　本艦は４６ｃｍ砲だぞ！　僚艦に遅れをとるな！」

高城
「遅れはとっては無いと思うけどね」

桃園宮
「…痛いところを突く奴だな」

高城
「それに、トップが焦ったら余計に遅れをとるよ」

桃園宮
「……むう…」

ようやく…と言っていいかは置いといて…静かにした桃園宮少将を横目で見ながら、高城大佐は頭脳を騒動していた。

高城
（敵４番艦が撃沈したから４対３。扶桑と山城はオハイオ、本艦はモンタナ、天城はユナイテッド・ステイツ…の構造だな。このバランスを保てれば負ける筈は無いが…）

ズシャーン！ズシャーン！ズシャーン！

グラグラグラグラ！

高城
「っ！　どうした！？」

着弾の異様な船体の横揺れに高城は近くの女性士官に訊いた。

女性士官
「至近弾です！　浸水が有るかもしれません…現在、調査中です！」

ある意味ヤバい報告に高城の背中に嫌な汗が流れる。

桃園宮
「…おい、高城！　見ろ！」

切羽詰まった様な声に高城が振り向くと、更に焦る事態が起きていた。

桃園宮
「天城が夾叉されたか…くそ！！」

天城艦橋

佐野
「敵弾夾叉！！」

山城
「至近弾だな…被害を調べろ！」

佐野
「了解！」

シルヴィア
「このままでは当たるぞ、正人！」

山城
「…鷲井、どう思う？」

鷲井
「…このままだと確実に当たる事は間違い無い…どうする？」

山城
「（…敵はこの事で勢い付くな……そうなると面倒だ…よし！）佐野、被害はどうだ？」

佐野
「若干の浸水は有りましたが大丈夫です！　戦闘・航行に異常無し！」

宮里
『こちらテッポウ。　割り込んで済まないが、異常無し…だが、このままだとヤバいぞ！』

山城
「わかっている！　佐野、機関全速用意！」

佐野
「まさか…逃げるんですか！？」

シルヴィア
「アホか！　そんな訳無かろう！」

スパーン！

いったいどこに隠してあったのか、ハリセンで頭を叩く。

山城
「あっはっはっは、まあ、シルヴィアの言ったその通りだ…とにか

く、機関全速用意！（後は賭けだな！）」

次号へ

２９５　再びの対米戦　１５（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

296　再びの対米戦　16

旗艦ユナイテッド・ステイツ艦橋

士官
「夾叉しました！」

司令官
「よし、次は当てろ！　あの旗艦を早急に叩き潰し、我が軍の優位を奪い返せ！」

……果たして優位だったかはともかく、天城に危機が迫っていた。

駿河艦橋

桃園宮
「このままでは天城が危ない！　目標へ…」

高城
「照準そのまま。現在、本艦の敵は2番艦だ！　今は敵2番艦を潰す事を優先せよ！」

桃園宮
「高城！！」

ガッ！

いきなり桃園宮は高城の襟を掴み、くって掛かった。

桃園宮
「貴様！　旗艦である天城を見捨てるつもりか！？」

高城
「見捨てるつもりは無い。だが、俺達の役目は敵２番艦を潰す事だ」

桃園宮
「その発言で見捨てる様な物ではないか！！」

高城
「違う！　じゃあ訊くが、敵２番艦を放置してユナイテッド・ステイツに砲撃して何の得が有るんだ！？」

桃園宮
「天城が助かる！　２対１ならあのユナイテッド・ステイツに勝てる！」

高城
「じゃあ、その間の敵２番艦はどう対象するんだよ！？　こっちは５隻も戦艦がいる訳じゃないんだぞ！？　放置していたら、敵に横っ腹を突かれる！　それに、今からユナイテッド・ステイツに照準を変えたら、１からやり直しだ！　敵２番艦の砲塔を潰した意味がなくなるよ！」

桃園宮
「では、天城が撃沈されたらどうする！？　それこそ、敵艦の砲塔１つ潰した優位など消し飛んでしまう！」

……双方正論を語るだけに一進一退の膠着状態の言い合いが続く。
無論、この間も駿河は砲撃を休める事無く、モンタナに向けて撃っている。

桃園宮
「では訊く！　お前はあの時、『撤退せよ』と言われて悔しくは無かったのか！？」

高城
「っ！　そ、それは…」

高城にとっても、桃園宮を守る為に味方が盾になったあの苦い思い出は忘れてはいない。
そして、桃園宮自身がそれに関して最も責任と無力感を感じている事も知っている。
だが、それをこの場で出されるとは思っていなかった。

桃園宮
「だから、私は…」

女性士官
「天城より打電！　『全艦現状維持。これは厳命なり！』以上です」

桃園宮
「なっ…馬鹿な！　やせ我慢も程ほどに…」

女性士官
「続いて少将宛ての打電！　『気持ちは解るが邪魔をするな！　また叩くぞ！』以上」

高城
（やれやれ…お見通しか…）
あの強烈コンビの顔を思い浮かべる高城だった。

天城艦橋

佐野
「あんなの送ってよかったんですか？」

山城
「仕方ないだろう…まさか、『邪魔すんな！』ってシルヴィアが続いて打電するとは思わなかったをだからさ」

天城の艦橋では佐野の言葉に苦笑する山城が居た。
現状維持のみの通達であったが、桃園宮少将が勝手に動かない様に「厳命なり」と入れたが、シルヴィアが「生ぬるい」と言って、続けて打電させたのだ。

風華
「艦長さん、巡洋艦隊から連絡です。『敵巡洋艦隊は撃退せり』」

イナバ・バッキンガムの攻撃により、アメリカ巡洋艦隊は酸素魚雷と２０，３ｃｍ砲、３０，５ｃｍ砲から撃たれる事になった為、重巡・軽巡各１隻を残し撃沈された。
そして、２隻の巡洋艦は大慌てで退避したのであった。

山城
「ありがとう…さて、取り舵一杯！　機関全速３７ノット！！」

佐野
「は…え、一杯！？」

鷲井
「まさか…マジか！？」

山城
「マジだ！　このまま撃ち合うよりはマシだ！」

シルヴィア
「あっはっはっは！　やはりお主だ！　うむ、１つやろうではないか！」

鷲井
「…だー！　勝手にやってくれ！」

佐野
「了解！　機関全速！　取り舵一杯！！」

扶桑艦橋

山南
「ほう…山城は勝負に出た様だな」

参謀

「勝負…ですか？」

山南
「あぁ、その為の『現状維持』の打電だ…何があっても持ち場を離れるな、受け持った敵を攻撃せよ…と言ったところだろう」

参謀
「では、４１ｃｍ砲で４６ｃｍ砲のユナイテッド・ステイツを撃沈する術（すべ）があると？」

山南
「術はあるだろう…だから勝負…いや、賭と言うべきだな…撃沈するか、されるかの賭にな」

参謀
「な、なんと…」

若い参謀の顔がみるみる青くなった…事の次第が解ったらしい。

山南
（まあ、そんな柔に教育した覚えは無い……あいつならきっと…）

ガガーン！ガガーン！

士官
「本艦主砲命中！　敵艦、若干速度が低下した模様！」

見ると１発は煙突にしたらしく、若干ながら速度が落ちている。

ズズーン！ズズーン！ズズーン！

士官
「山城発砲……あ！」

ガガーン！ガガーン！ガガーン！

山城から撃たれた４１ｃｍ砲弾の内３発がオハイオの船体後部に命中した。

士官
「敵艦の速度、更に低下！　機関を損傷した模様です！」

参謀
「やりましたね！」

山南
「……いや、操舵系統も被害があった様だ。真っ直ぐにしか進んでおらん」

確かに、オハイオは速度が低下しても、只真っ直ぐと進むだけだ。
この時、オハイオは扶桑の攻撃で排煙効率が悪化、若干速度が落ちたが、次の山城の砲弾が機関をショックで故障させ、更に操舵機能を損傷させていた。

山南
「敵の足は砕いた…一気に叩け！」

参謀
「了解！」

旗艦ユナイテッド・ステイツ艦橋

士官
「オハイオ、集中打撃を受けています！」

司令官
「く…敵旗艦を早く…」

水兵
「し、司令官！　て、敵旗艦が接近します！　凄い速度…３３ノットを越えています！」

司令官
「な、な、なんだと！？　馬鹿な！　有り得る筈が無い！！」

天城艦橋

佐野
「機関３７ノット！」

シルヴィア
「行け！　突っ走れ！　敵旗艦の喉元に食らい付け！！」

山城
「速度維持、合図で舵一杯！　近接砲戦用意！」

鷲井
「マジだったのかよ！！」

次号へ

２９６　再びの対米戦　１６（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

297　再びの対米戦　最終話

駿河艦橋

女性士官
「あ、天城、ユナイテッド・ステイツに向けて突っ込んで行きます！」

桃園宮
「な、なに！？」

慌てて天城を見ると確かに天城はユナイテッド・ステイツに向かって突っ込んで行く。

桃園宮
「な、なんだあの速度は！？」

高城
「ふーん、駆逐艦並みの速度だね。あれは面倒だろうな」

桃園宮
「って、山城大佐は気が狂ったのか！？　接近すれば敵主砲の餌食だぞ！？」

高城
「大丈夫だよ。天城はユナイテッド・ステイツに対して垂直に向かっている。あの速度だと、向こうは……厄介だろうな」

桃園宮

「勝手に納得するなー！！　説明しろー！！」

冷静に言う高城に桃園宮は訳が解らんとばかりに叫ぶ。

ガガーン！ガガーン！

女性士官
「敵艦に命中！　敵測距儀を破壊した模様！」

桃園宮
「むう…よし、本艦は敵艦を叩き潰す！　敵は砲塔照準しか出来ない！　一気に勝負を決めよ！」

旗艦ユナイテッド・ステイツ艦橋

司令官
「急げ！　敵旗艦を撃沈せよ！　近寄らせるな！」

士官
「ダメです！　速度が異常に早く、照準がつけられません！！」

司令官
「な…くそ！！」

本来、主砲は快速艦艇を狙う物では無く（例外などはある）、快速艦艇を狙うならば副砲（アメリカなら両用砲）を使用する。
しかし、天城がその想定を覆してしまった訳だが……。

司令官
「引き剥がせ無いのか！？」

士官
「無理です！　向こうの方が速くて剥がせません！」

天城艦橋

山城
「宮里、照準は付けれるか！？」

宮里
『どうせ至近距離まで近付くんだろう？　なら、大丈夫だ！』

山城
「弾種は？」

宮里
『新型の６６（ろくろく）だ』

山城
「６６式徹甲弾か？　あれの試製弾を撃ち込んだ艦に優先装備とは皮肉だな」

ズズーン！ズズーン！ズズーン！ズズーン！

佐野
「艦長！　敵旗艦発砲！」

鷲井
「大丈夫だ！　只のやけっぱちの砲撃だ！　早々簡単に当たりはしない！」

シルヴィア
「お前がやけになってないか？」

鷲井
「うるせい！　やけにもなるわ！」
ズジャーン！ズジャーン！ズジャーン！ズジャーン！

佐野
「こ、後方に着弾！」

山城
「敵は高速に慣れてはいない…このまま突っ込め！」

ユナイテッド・ステイツ艦橋

水兵
「司令官！　オハイオが戦闘不能！　同じくモンタナも戦闘不能になりました！！」

司令官
「ば、バカな！　こ、こんな筈では！！」

機関と操舵系統にダメージを受けたオハイオは真っ直ぐに進む標的と成っていた。

モンタナは駿河の４６ｃｍ砲に主要装甲を貫通され、遂には戦闘不能となってしまった。
完全なるアメリカ艦隊の敗北である。

司令官
「バカな…バカなバカなバカな！！　我が世界合衆国アメリカが敗れるなんて…」

士官
「て、敵旗艦接近！　し、超至近距離です！！」

天城艦橋

佐野
「距離８０００！！！」

シルヴィア
「超至近距離だな！」

鷲井
「何でもいい！　とにかく殺ってくれ！」

山城
「面舵一杯！　宮里、一発勝負だ！」

宮里
『了解、全主砲用意！　目標、ユナイテッド・ステイツの土手っ腹だ！！』

佐野
「艦長！　回頭します！」

山城
「よし、砲戦用意！！」

回頭が終わったと同時に天城の４１ｃｍ連装砲５基１０門が素早く旋回した。
やはり、福本次官が砲塔の旋回モーターを弄らせたのは無駄ではなかった様だ。

宮里
『これでも食らえ！　新型の６６徹甲だ、ユナイテッド・ステイツ！！』

山城
「撃て！！」

ズズーン！ズズーン！ズズーン！ズズーン！

仰角も取る必要も無い至近距離で放たれた６６式徹甲弾……故に……

ユナイテッド・ステイツ艦橋

士官
「て、敵旗艦発砲…うわあぁぁぁぁぁぁ！！！」

司令官
「バカな…我々はいったい何と戦っているんだ!!!」

それが最後の言葉となった。
１０発の６６式徹甲弾はユナイテッド・ステイツの装甲を撃ち抜き、２発が第二・第三主砲塔弾薬庫に命中、他８発も船体・艦上構造物・砲塔などに命中した。そして……

ドガガガガガガガガガガガガガガン!!!

……ユナイテッド・ステイツは威力を発揮させた天城と自身の砲弾で轟沈した。

天城艦橋

鷲井
「……終わったのか？」

佐野
「敵艦轟沈しましたから……終わったかと」

シルヴィア
「……賭けに勝った訳だな」

山城
「……終わったのか……本当に…？」

風華
「艦長さん。敵二番艦・三番艦、戦闘不能になったそうです」

山城
「……そうか……わ…」

チカッ！

バリバリバリパリバリバリバリ！！！！

鷲井
「ぬお！」

シルヴィア
「な、なんだ！？」

佐野
「雷…ですが、雷雲なんて…観測も予報もありませんでしたよ！？」

山城
「……」

数時間後……6時55分

天城艦橋

山城

「…で偵察しても無いんだな？　『ゲート』もアメリカ艦艇も？」

佐野
「はい。偵察の雷雲はレーダーやセンサーや目視で探しましたが、何も見付かりませんでした…あのエセックス型空母以外は」

敵戦艦との戦いを終えた第零艦隊は偵察機で隈無く探して見た。
しかし、漂流していたエセックス型空母を除いて何も無かった。
取り敢えず山城は駿河と蔵王を連れてエセックス型空母を回収、残りは山南少将に指揮を預け、空母・護衛部隊に合流させていた。

小澤中将
「…いったいどうなっているんだ？　扶桑・山城・駿河他、同じ様な報告がきているが？」

実は傾きながら沈んだオハイオ、小爆発を繰り返しながら沈んだモンタナなどの乗組員は1人も救助されてなかった。
と言うもの、救助しようにも肝心の人間が居いない…と言う訳の解らない事になっていた。

鷲井
「やっぱり、あの雷だと思いますね。何せ、あの後からは敵艦の反応もゲートもありませんし」

シルヴィア
「…じゃあ、あの雷で全員、元の世界に戻った…って事か？」

鷲井
「でないと、説明がつかない」

小澤中将
「やれやれ…やはり、不思議な事はおきるのだな」

佐野
「ところで小澤長官、艦長。エセックス型空母はどうします？」

山城
「捨てる神あれば拾う神有り…回収して帰りましょう。身の振りは帰って考えても遅くはありませんし」

小澤中将
「…そうだな、そうするか」

一度エセックス型空母を見てから小澤中将が言った。

山城
「わかりました。風華さんお願いします」

風華
「わかりました」

風華が回収命令を伝えた時……。

佐野
「…あ、長官、艦長。レーダーに反応。水上レーダーです」

山城
「水上レーダー？　数は？」

佐野
「1つです。まだ大分距離が有りますがこちらに接近中」

山城
「…わかった。小澤中将、本艦が調査に行きます」

小澤中将
「うむ、認めよう」

次号へ

２９７　再びの対米戦　最終話（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

298　絶望の船（前書き）

福本
「最近、文量増えたな。作者」

…うん、そうだね。

マリーダ
「…どうしたの？」

いや…誠にもって読者の方々には残念と言うか、言いにくいと言うか……。

福本・マリーダ
「「はっきり言え！！」」
は、はい！　実はこの作品は次号かその次ぐらいに終わるんです！！

福本
「……それって予定？」

はい。
以前言ったかもしれませんが、この物語は『新第七艦隊』の布石でもありました。
だから、もうそろそろ終わる予定だったのです。
まあ、いつもの戦闘書きパターンだったので、続きを期待していた方々も居られたかと思いますが……。

マリーダ
「確かに今回は終わりとは思えないけど…なんで？」

それは簡単で、第七艦隊は当初からアメリカ・ソ連を主敵にしており、両者に勝てば自然と終わる事が予測出来ましたから。
逆にこの作品は敵が出てくる設定でしたから、終わりが見え無いと言う事になりますね。

福本
「もう少し早く公表出来なかったのか？」

それについては自分の不徳とするところです。
今更ながら、自分でも反省しています。

マリーダ
「で、最後はどうなるの？」

それは…お楽しみに……。

298　絶望の船

1時間後……天城艦橋

佐野
「な、何ですか…あれは?」

シルヴィア
「知らんわ」

山城達の視線の先には一隻の船がいた。
但し、船体全体が白く塗られた明らかに『怪しい』客船の様な船である。

鷲井
「明らかに怪しいよな」

佐野
「どうします?　通信で問い質しますか?」

山城
「うーん…そうだな…」

さすがの山城も手詰まりだった。
相手の正体が解らないとなると、船が客船仕様なだけに対応が難しい。

鷲井

「けどさ、なんか怪しい割にはおかしな船だな」

山城
「おかしい？」

鷲井
「あぁ、技術士官として言わせてもらえば、あの船は格好は客船だが、内部は軍艦構造だ。しかも、１万トンクラス船にしては速度が遅いと思う。まあ、軍艦構造にした為かもしれないけど」

確かに、鷲井の言っている通り（内部構造は解らないが）速度は一般民間船舶に比べて遅い。

鷲井
「それにさ、機関が動いているが、なんで煙突から煙が出てないんだ？…と思……おい、山城？」

この時、山城の脳内ではとんでも無い計算結果が出ていた。
それは山城の顔が真っ青になる計算が……。

蔵王（インディアナポリス）
「山城艦長！！」

山城
「え、あ、インディアナポリスさん？　どうしてここに…」

蔵王ことインディアナポリスはエセックス型空母を回航する為に後方にいる。
だから、ここに来る理由が無い。

「早くあの船から逃げて下さい！　私は置いてもいいから早く！」

見ると、インディアナポリスは1人の少女を背負っていた。

鷲井
「おい、頼むから…」

シルヴィア
「ま、正人！　見ろ！」

シルヴィアの声に振り向くとあの白い船から空中映像が出ていた。

『私は世界合衆国アメリカ大統領のフランクリン・ルーズベルトだ。我が艦隊を叩き潰した事は誉めてやろう…それに免じて最後の警告だ。今から1時間30分以内に降伏しろ。さも無いと…あの映像の様に水素爆弾を落とす事になるぞ？』

佐野
「な…！」

小澤中将
「フランクリン・ルーズベルトだと…バカな…」

蔵王（インディアナポリス）
「ち、間に合わなかった！」

鷲井
「だから、事情を説明しろって！」

「私はエセックス型空母のアンティータムです…あなた方が回航しようとする空母の艦魂です…あの船…ホワイトハウスは恐ろしい力を秘めた船なんです！」

この言葉は不幸にも山城の計算結果を裏付ける物となった。

山城
「くそ…まさかそうくるか！」

シルヴィア
「おい、糞っ垂れ！　誰がお前に降伏するか、トチ狂い！」

シルヴィアは近くのマイクから船外拡声器で言い返す。

『ほほう…ならば教えてやろう。この船の煙突は偽物だ。これは大型ミサイルの発射管だと聞けば話は別だろう？』

シルヴィア
「な、なんだと！？」

これを聞いた天城の艦橋は一瞬にして真っ青になった。
『あの映像』と『大型ミサイル』で答えは出ている。

宮里
『山城！　こうなれば主砲で…』

山城
「止めろ！　忘れたのか？　下手に核弾頭に当たったらどうする！？　それに敵船の機関は原子力かも知れないんだぞ！？」

佐野
「ですが艦長！　このままではどちらにしても解決しませんよ！？」

『さあ、どうした？　あと1時間25分程しか無いぞ？』

まるで挑発と言わんばかりにカウントダウンを始めた。

山城
「…小澤中将、天城より離艦して下さい！」

小澤中将
「…どうしてだ？」

山城
「今回は今朝の賭け以上の賭けです！　中将はご避難を！」

小澤中将
「…まさか…首席参謀！？」

山城
「すみません、お叱りは後で受けます！　インディアナポリスさん、小澤中将を駿河へ！　その後は全艦退避！」

蔵王（インディアナポリス）
「わかった！」

小澤中将
「まったく……必ず生還しろ。これは命令だ」

山城
「はい！」

山城の返事に応えるかの様に敬礼した小澤中将は次の瞬間、蔵王と共に転移した。

山城
「佐野、宮里、総員陸戦用意！」

宮里
『おいおい、乗り込む気かよ…まあ、方法無いしな！』

佐野
「わかりました！」

シルヴィア
「よし、あいつを捕まえて前言全てを撤回させてやる！」

鷲井
「自分も参加かよ！」

山城
「当たり前だ。準備出来次第、敵船に斬り込む！　時間が無い、素早く船を制圧するんだ！」

ホワイトハウス船内

「ワッハッハッハ、どうだジャップ！　手も足も出んだろう！」

大統領専用船ホワイトハウス船内の大統領室で勝ち誇り笑うルーズベルト。

ルーズベルト
「さて、奴らをどうするかな…核実験の実験台もいいが…ふむ、殺し合いをさせるのも一興だな。まあ、私の思い通りに成らない奴らは死か奴隷となるのみだ」

……普通の人間が聞けば、「こいつは人間か？」と訊きそうな事を平気に言う。

ルーズベルト
「これだけ健在で未開な世界なら、土地などいくらでもあるだろう。原住民や抵抗する奴らは皆殺しだ。ワッハッハッハッハ！」

ピーピーピー！

呼び出し音に「邪魔をしよって」と言いたそうな顔で受話器を取った。

ルーズベルト
「どうした？」

警備兵
『は、はい！　実は「ドシーン！！！」うわーー！！』

ルーズベルト

「な…ぬわ！！」

いきなり室内が揺れた。
無論、地震が起きた訳では無い。
ルーズベルト
「いったい、どうした？　おい、答えんか！？」
返答は無かった。
但し、向こうからは銃声が聞こえていた。

天城甲板
山城
「よし…乗り込め！！」

「「「「「「「「「「「「「「「おおう！！」」」」」」」」」」」」」」」

先陣をきって抜刀し飛び乗る山城。
宮里
「援護射撃始め！！」
タン！タン！タン！タン！タン！タン！タン！タン！
ダダダダダダダダダ！！

６４式小銃・機関銃が援護射撃を始める。
その間に陸戦隊がホワイトハウスの甲板に乗り移る。

山城
「佐野、宮里隊の乗り移りを援護せよ。鷲井、お前はブリッジを制圧」

佐野
「了解！」

鷲井
「あ～、前線指揮は分野違いだってえの！」

佐野は指揮下の部隊を素早く動かし、援護態勢を整える。
また、鷲井はブツブツ言いながらも、ブリッジへと向かう。

山城
「時間が無い！　押しまくれ！」

あちこちで銃声が鳴り響き、ホワイトハウスの船上は戦場と化す。
しかし、何故か船の警備兵は練度が低く、連携を欠き、粘りが無かった。
実際、Ｍ１ガーラトを乱射するが、次弾を立ったまま装填し、装填途中に殺られる場合が多かった。
また、警備兵はバラバラに応戦し、または右往左往するばかりで指揮系統は無きに等しい。
だからこそ、山城達が突入すると瞬く間に崩れた。

鷲井
『こちら、鷲井。ブリッジ確保…しかし、誰もいない！』

山城
「はあ？　どうゆう事？」

ヘッドセットから聞こえてきた言葉に山城が訊いた。

鷲井
『どうやら、自動操縦みたいだな。今は天城がぶつかったから機関が自動停止している。どうやらこの船、少数運航みたいだな』

山城
「そうか…他には？」

鷲井
『船内図もある。あと、煙突のミサイル発射管のボタンも有るぞ。まあ、もう1つ有るぞ。多分、あのルーズベルトの所に…どうする？』

山城
「…先に機関を調べてくれ。宮里、船内検索。佐野は付いて来い」

宮里
「わかった」

佐野
「了解」

山城
「……ところでシルヴィアは何処だ?」

シルヴィア
「ルーズベルト！　何処だ!?」

船内の部屋を1つ1つ開けて調べるシルヴィア…単独で。
そして、ある部屋のドアを開けた瞬間……。

バチチチチ！

シルヴィア
「っ！（しまっ…た…）」

次号へ

２９８　絶望の船（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２９９　破滅者と破滅へのタイムリミット（前書き）

やはり、次号が最終号になりました。
作品上は３００話…だけど本当は３０１話……きっちりに終わらせたかった……。

２９９　破滅者と破滅へのタイムリミット

ホワイトハウス船内

風華
『直ぐそこが目的の部屋です』

山城
「ありがとう！」

ヘッドセットをきるとそのままドアを蹴破った。

山城
「シルヴィア！！」

ルーズベルト
「動くな！　動くとこの女が死ぬぞ！」

Ｍ１９１２ガバメントを構え、シルヴィアを盾するルーズベルト。

シルヴィア
「済まぬ…入った途端にバチチチチ！…とな」

佐野
「スタンガンを使われたんですか！？」

ルーズベルト
「黙れ！！　そんな事より、そこを退け！　世界合衆国大統領ルー

ズベルトのお通りだ！」

佐野
「なに！？」

佐野が６４式小銃を構える。
しかし、ルーズベルトは巧みにシルヴィアを前に曝す。

ルーズベルト
「これが見えんのか？　ジャップ！」

佐野
「っぅ！」

ルーズベルト
「さあ、退け！　言っておくが私を殺しても無駄だ。死ねば３０分後には船ごとドカンだ。おまえらどころか、この世界が滅びるぞ？　はったりではないぞ！」

山城
「そうはいかない、偽物ルーズベルト」

ルーズベルト
「なに？　偽物だと？」

山城
「あぁ、そうだ。フランクリン・ルーズベルトは病気で下半身…特に足が麻痺して車椅子生活だった。だがお前は元から二本足で歩いている…違うか？」

ルーズベルト
「…フッハッハッハッハ！　よく解ったな、ジャップ！　そうだ、私はルーズベルトでは無い。神によって選ばれた男だ！」

山城
「……はあ？」

ルーズベルト（偽物）
「少し昔…いや、未来の話をしよう。俺は２０１０年アメリカ生まれの一青年だった。その世界はイギリス、ドイツ、大和帝国、フランス、ロシア帝国が『戦勝国』だった。しかし、アメリカは第二次大戦に負けた敗戦国。力はあっても使わない愚かな国だった。調べてみれば、過去にフランクリン・ルーズベルトとゆう名の大統領が世界を手に入れる為に戦争を始めた。」

何かの優越感に浸るルーズベルト…しかし、顔が険しくなった。

ルーズベルト（偽）
「だがだ！　裏切り者と戦勝国がそれを潰した！　それを知った俺は激怒した！　アメリカこそが世界を支配する国だ！　奴らはそれを潰した！　アメリカが世界を握れば世界平和が実現できた筈なのにだ！」

見る間に彼の怒りはヒートアップしていく。

ルーズベルト（偽）
「そして…ある時、俺は事故で死んだ。なんと目を覚ませばフランクリン・ルーズベルトに成っていたんだ！」

山城

「…なるほど、その知識を使い、叔父のセオドア・ルーズベルトなどに流し、歴史を動かした訳だな」

ルーズベルト（偽）
「そうだ…そして、裏切り者達を処分し、敵を倒した！　大和帝国は原爆実験、ロシア帝国は面倒だから水素爆弾を使い皆殺しだ！　どうせ思い通りにならないからな…イギリス・フランスも同じくな！」

佐野
「な…思い通りならないからって…原爆や水素爆弾を落としたのか!?」

ルーズベルト（偽）
「当たり前だ！　国はアメリカだけあれば良いのだ！」

山城
「…その結果が世界をおかしくしたな。しかも極度に」

ルーズベルト（偽）
「自然は困った物だ…お陰でアメリカ本土と近海以外は放射能などに汚染された！　まったく思い通りならん！」

山城
「そんな時にゲートが開き…この世界を手に入れようとした訳か…で、その『裏切り者』と言うのは海軍の提督達や将軍達か？」

ルーズベルト（偽）
「そうだ！　ニミッツ、スプルーアンス…ハルゼーは私の秘密を知ったから抹殺した」

シルヴィア
「鬼畜！　お前は魔王だ！」

ルーズベルト
「何を言うか！　私は神に選ばれたのだ！　邪魔者は殺す！！」

山城
「……ルーズベルト…いや、神に選ばれた男よ。人間は神に成れないし、元々神は実在しない…お前は只の史上最低の独裁者で虐殺者だ！！　あるいは狂った我が儘人間だ！！」

ルーズベルト（偽）
「ワッハッハッハ！　では、どうする？　殺すか？　この女がみえんのか！？」

またもや、シルヴィアを前に突き出す。

山城
「……シルヴィア、信じるか？」

シルヴィア
「そうだな…最後の賭けで信じるか…」

ルーズベルト（偽）
「おい！　黙れ！」

シルヴィア
「うるさい、それとジャップと言って侮辱したが、そうも言えんぞ」

ルーズベルト（偽）
「なに……！！」

この時、シルヴィアは自由に動く右足で思いっきり『弁慶の泣き所』である、脛に後ろ蹴りをした。
この間に山城は抜刀、拘束から逃れたシルヴィアと間髪入れずにルーズベルトに一撃を叩き込んだ。

ズバッ！！

ルーズベルト
「グワァァァァ！！！」

山城
「佐野！　部屋を探せ！　図面か何かがある筈だ！」

佐野
「はい！」

山城
「大丈夫か、シルヴィア！？」

シルヴィア
「まったく…賭けには勝った様だな」

急いで覗き込む山城にシルヴィアは苦笑を浮かべる。

ルーズベルト（偽）
「グッ…ヨグモ…」

パン！

虫の息で取り落とし、取ろうとするガバメントが銃弾に弾かれた。

鷲井
「死に損ないはとっとと死ねっての」

佐野
「有りました！　これです！」

佐野が山城に差し出す。

ルーズベルト（偽）
「クックック…おまえらジャップにそれが…」

鷲井
「解らない？　アホ、２００７年にも成れば原子炉や周辺機器の１つや２つは解るよ」

ルーズベルト（偽）
「ナニ！？」

山城
「残念だったな。世界は違うが、アメリカに勝った世界は他にも存在するんだよ」

ルーズベルト
「バ…カ…ナ…（ガク）」

シルヴィア

「ヤバイぞ、あと３０分しか無い！」

山城
「機関室だ！　機関室に直行！」

佐野
「はい！」

ホワイトハウス船内機関室

山城
「残り時間は！？」

佐野
「残り１５分！」

シルヴィア
「起爆装置はどれだ！？」

鷲井
「待て。えーと……これだ！」

確かに鷲井の指先にはカウントダウンするデジタル時計がある。

山城
「カバーを外す！　手伝え！」

佐野

「はい！」

急いでカバーを外し、配線類を確認する。

鷲井
「…よし、これだ。慎重に、手早く切るぞ」

山城
「…なにで？」

佐野
「…銃剣でやりますか？」

シルヴィア
「…危なくないか？」

4人
「「「「……」」」」

宮里
「何を黙ってんだよ！」

山城
「お、宮里に風華さん！　ちょうど良かった！　鋏持ってないか！？」

風華
「糸切り鋏ならありますけど…」

山城

「この際なんでもいい！　借ります！」

受け取ると山城は素早く鷲井に渡し、鷲井は図面を見ながら配線を切ってゆく。

佐野
「間に合いますように！」

宮里
「バカ！　縁起の悪い事を言うな！！」

シルヴィア
「静かにせんか！」

こう言う時程、時間の経過は早い。

風華
「あと何分ですか！？」

山城
「あと5分！」

鷲井
「だー！　急がな！」

そうやって配線を切っていく内に鷲井の手が止まる。

宮里
「おい、どうした！？」

鷲井
「くそ…この最後の部分だけ重ね書きで消してある！」

佐野
「本当ですか！？」

風華
「では、後の配線は…」

鷲井
「…お決まりパターンの赤か青かだ」

6人
「「「「「「……」」」」」」

……沈黙。

鷲井
「山城！　お前が切れ！」

山城
「なんだよそれ！？」

鷲井
「自分の悪運も今回は全然自信が無いからだ！！」

無理矢理位置を変えられた。

山城
「ぐう…赤か青か…」

シルヴィア
「時間は！？」

佐野
「あ、あと1分！」

宮里
「何でもいい！　切ってくれ～！」

鷲井
「バカ！　間違って切ったら俺達どころか、天城やこの世界が吹っ飛ぶかも知れないんだぞ！？」

佐野
「でも、早くしないと結局一緒ですよ！」

風華
「……早くして下さい！」

……半分混乱状態である。

シルヴィア
「あ～あ、白があったら私が直ぐに切ったのだが…」

山城
「…なんで？」

シルヴィア
「いや、実はエルフのルイーズ様に正人との事がバレた時に、『エ

ルフの言い伝えだと、人生最大の危機には白がラッキーカラーになる』と言っていたのだ」

鷲井
「…何の関係も無い話だな」

佐野
「あの…残り２０秒をきりましたよ！？」

宮里
「早く切れ！　気が狂う！」

デジタル時計の時は少なく成っていく。

１５、１４、１３、１２、１１、１０、９、８、７、６……

山城
「ええい！！　南無三！！！！！」

プチン！

次号へ

２９９　破滅者と破滅へのタイムリミット（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

３００　最終話　２人の歩みは未だ止まらず（前書き）

今回が最終話です。
今後の事は後書きの方で。知りたい読者はどうぞ！

３００　最終話　２人の歩みは未だ止まらず

××××年×月×日
場所××××××

山城は歩いていた。
どこかは解らない…しかし、普段通りに歩いていた。

山城
「……いったいどこだ？」

目を開ければこれだ……なんだよこれは？
すると、何処からともなく声が響く。
「お前は満足か？」と。

山城
「満足だ」

素っ気なく答えた。
「本当に？」と聞かれた。

山城
「あぁ、満足だ。本当に満足だ」

嘘は言っていない。
何故なら……

（……と）

（……さと）

（や……ろ……と）

山城
「ほらね」

声の主は苦笑を浮かべた。
山城には見えないから解らない……ただ、空気で解った。
そして……「邪魔して済まなかった」と声の主は言った。

２００８年３月１３日（現世界３月３日）

シルヴィア
「正人！　ま！　さ！　と！！」

山城
「うわっ！！！」

耳元で叫ばれ飛び起きる山城。
ここはラバナスター近郊にあるラバナスターの街を見通せる丘の上だ。

シルヴィア
「まったく…6時に起き、先に行くと言って着いてみれば居眠りか…父親の示しがつかないぞ…な、フェイナ」

そう言って腕の中で気持ち良く眠る女の赤ん坊…フェイナに言う。
あ、解ると思いますが、2人の子供です。（念のため）

山城
「それを子供に言うのはどうかと…その前に、よく馬に乗せて来て泣かなかったな？」

シルヴィア
「当たり前だ。私と正人の子供だからな！」

山城
「……そうだね」

そう呟くと山城は空を見上げた。

さて、あの後どうなったかを簡潔に書こう。
シルヴィアの話を聞いた山城は一か八かで赤と青の配線を無視し、何の関係も無い黒の配線を掻き分け、奥にあった白の配線を見付けると躊躇わず切った。
すると…カウントダウンは『1』で止まった。
そこ先は永遠に動く事は無かった。
解除に成功した山城達は取り敢えず大統領専用船『ホワイトハウス』を曳航、帰還した。（後に神戸へ回航・厳重な検査後、煙突のミサイル共々調査が行われた）

無論、小澤中将・山南少将からキツい御叱りを受けたが……。
ただ、桃園宮少将・高城大佐にはルーズベルトの正体と死亡を言うと複雑な顔をしていた。
また、空挺隊の生き残りがいつの間にか消えていた事が判明した。
それだけで無く、前回捕えられ捕虜に成っていたロシア人・韓国人も一緒に消えた。
だが、これはあの『雷』で消えたと言う結論になったので、それほど騒がれる事は無かった。
しかし、一番大騒動になったのが、1週間後に海自や鳥海他駆逐艦4隻、大和帝国艦艇乗組員（2人を除く）の家族が転移した事だった。
何せ小澤中将の奥さんやお子さんまで転移したのだから、その総数が膨大で、直ぐに山城と杉下大使は『緊急援助物資』の提供を打電した程だ。
安部首相は直ぐに食料、仮設住宅、衣服の緊急援助を決め、各省庁が右往左往する事態となった。
まあ、幸いにもシリルティア王国やボニファス伯爵の協力、日本政府の大規模広域自然災害用の備蓄があったり、補正予算を出したり、関係企業に量産・増産命令を素早く出したお陰で対応可能だったが、中期・長期面での維持は不可能では無いが難しく、ここは『日常生活』に戻ってもらう必要があるものの、シリルティア王国単独や日本政府との二国間のみでは無理と判断、安部首相はシリルティア王国に了解を取ると世界に対し異世界の状況を公表、援助を養成した。
これに対し、満州帝国、朝鮮共和国、トルコ、台湾、インド、ダエヴィサ大陸3国、東エルサレム共和国などのアジア諸国が（事情を知っている事もあり）欧米に先んじて援助を申し出た。
各国共に「新たな同胞（友人）を手助けするのは当たり前である。しかも、我々は日本に対し恩義がある」と言い、技術援助や資材・物資の提供を始めた。
また、日本の企業は戦前の満州移民の様に「新たな地で事業を拡大

しよう！」と新地開拓に乗り出し始めた。
後にラバナスター一帯を日本企業が進出拠点にした理由はラバナスターに転移した日本人（大和帝国人）が定住し、日本人や現地人雇用がしやすかった事が上げられる。
また、日本陸海空軍基地があり、首都ユニオンに比較的に近く、後に鉄道の第一路線が曳かれた事もあった。
これにより、シリルティア王国の国内経済もアップし、ネイラーン王国アルスラーン国王との結婚が近づくとネイラーンにも日本企業などが進出する事になった。
そんなこんなの渦中に山城・シルヴィアも巻き込まれ、お互いに忙しく働き…と言いつつ、時間が出来れば夕食と『睡眠』を一緒に取っていた…まくり、８ヶ月後にようやく事態が終息、安定化すると、今度はシルヴィアが懐妊している事が解り大騒ぎ。
横井は「ＤＮＡ検査は間違い無く、あんたとシルヴィアの子よ。女の子、おめでとう」と、微妙に余計か事言ったりして、余計な騒ぎになったが、取り敢えず『おめでとう』と言う事となった。
しかも、福本次官は来るし、首相・防相・三羽烏名の出産祝いは来るし、親は来るし、結婚式はやったし……そんなドタバタな一年を過ごした。

シルヴィア
「しかし、おかしなものだな。明日は帝都東京で、明明後日には王都ユニオンで揃って勲章授与とはな」

山城
「あぁ…しかも、シルヴィアのところは新設で最高位の第一等二重星勲章だったけ？」

シルヴィア
「私は貰う気は無いのだがな…まあ、仕方あるまい」

山城
「それを言ったら僕もだよ。金鵄勲章なんて要らないのに、いつの間にか授与が決まってるんだもん…しかも君と一緒に」

シルヴィア
「絶対にあの次官の仕業だな…授与に関しては」

山城
「あぁ…そうだな」

しかし……まあ、愛しき妻と一緒だから、ここは我慢しよう。
それに2人共、大佐への昇進も決定している。
配置もそのまま、天城艦長（兼主席参謀）と天城付きの連絡将校。

佐野
「艦長、シルヴィアさ～～ん、どこですか～～？」

ふと見ると下から大声で佐野が呼んでいた。
しかも、今や彼女の『破壊女王』ルーデル大佐を連れて。

シルヴィア
「あの関係は私も今ひとつ解らんな」

山城
「別に良いんじゃあ無いの。実際、お似合いなんだし…おーい、佐野！　ここだ！！」

ルーデル
「ヒロ、あそこ」

佐野
「あ、艦長！　シルヴィアさん！　福本次官が通信に2人を出せ出せと言ってるんですよ！」

山城
「わかった！　さて、シルヴィア。天城に行こうか」

シルヴィア
「あぁ、そうだな」

そう言うと双方馬に乗る。

シルヴィア
「あ、そうだ。先に訊いておこう」

山城
「…何を？」

シルヴィア
「次は男か？　女か？」

山城
「……もう、次の子の計画が有るんですね」

シルヴィア
「何を言う、正人は情熱的な上に優しく激しいでは無いか」

山城
「…は～あ、そう言う話は人のいないところでしてね。頼むから」

そう言うと苦笑しながら2人揃って（かつフェイナを抱きながら）馬を走らせた。

未来はどうなるか解らない。
しかし、夢と希望が有る限り人間は生きれるものだ。
無論、山城・シルヴィアは未だ若いから、この先も2人で駆けていくだろう。

ＥＮＤ

３００　最終話　２人の歩みは未だ止まらず（後書き）

新米士官
「と言う事で、『異世界』これにて終わりです！」

シルヴィア
「まさにドタバタだったな」

山城
「いや…その前に最後のは大丈夫なのか？」

新米士官
「大丈夫でしょう…多分」

佐野
「いや、そこははっきり言いましょうよ」

鷲井
「それより…自分達はどうなるの？」

シルヴィア
「それはマリーダ元帥の言った通りだ。『異世界』は永遠に不滅だ！！！」

全員
「「「「「「また巨人軍ネタかよ！！」」」」」」

山城
「で、本当のところはどうなんだ、作者？」

新米士官
「そりゃ、『新第七艦隊』に出て貰うよ。何せ、同じ年代だからね。しかも、ただの脇役で終わらすつもりは無いから」
佐野
「…なんか、含みが有りますね」
ルーデル
「私も活躍し足りない」
山城
「普通に会話にはいったな。『破壊女王』は…で当分はどうするつもりだ？」
新米士官
「まあ、明日から早速『新第七艦隊』か『外伝』の方を更新しようかと。あ、山城・シルヴィアの結婚式や勲章授与式とかも『新第七艦隊』か『外伝』の方に後々書きます」
鷲井
「なんか、直ぐに出てきそうだな」
山城
「だな…まあ、取り敢えず、その時まで…」
全員
「「「「「「「「「「「「「「「「「「読者の皆さん！　また会うまでバイバ〜〜イ！！」」」」」」」」」」」」」」」」」」

シルヴィア
「多分、近い内に再会は確実だがな！！」

山城
「いや、綺麗に締めようよ」

では、読者の皆さん、当分は『新第七艦隊』と『外伝』を御贔屓にお願いします。
また、新キャラ募集中なので提案がありましたらどうぞ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8713h/

士官候補生異世界奮闘記

2011年6月4日12時40分発行